



大正十二年三月十五日印刷
大正十二年三月十八日發行

花袋全集第二卷
（非賣品）



著作者　東京市小石川區東青柳町二十九番地　田山錄彌

發行者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　川俣馨一

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　松浦政吉

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　株式會社博文館印刷所

發行所　東京市小石川區東青柳町二十九番地　花袋全集刊行會
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

『随分遠かつたわねえ。』

と小雪も言つた。

障子の外は疊を敷いた廊下で、窓にはまつた明るい硝子戸からは、雨の湖水が繪のやうに展げられて見えた。廊下には黒塗の丸い卓に椅子も二脚置いてあつた。何處の室にも客は居なかつた。茶を飮んだり菓子を食つたりした後で、三人は其の部屋々々を見て廻つた。放浪時代に此地に來て描いたといふ廣業の文人畫風の蘭の繪が床の間に懸つて居たり、日光輪王寺門跡から此の旅籠屋の主人によこした手紙が其まゝ長い額になつて居たりした。名高い漢詩人の七律を書いたのもあつた。三人はこの靜かな部屋部屋をわが物のやうにして歩いた。客が卓に凭りかゝつて、ぢつと湖水を見て居ると、其向うの椅子に來て小雪も腰をかけた。

湖水は暮れかゝつて來た。

——花袋全集　第二卷　終——

りだといふ『中禪寺ちやえらい眼に逢つたもんさなア。……こんなことが起らうとは、誰だつて知りやしねえからな。』こんなことを言つた人足もあつた。

熊笹と滿天星の網のやうに繋つた林の間から、やがて夕暮近い湖水の滑かな碧が見え出した。白ペンキで塗つたレーキサイドホテルの大きな建物は向う岸の小高い處にあつた。前の廣場には西洋の婦人が一人二人靜かに逍遙して居た。川の橋近くには綠葉の蔭にボートが二三隻繋がれてあつた。ホテルの白い廣告札は其處にも此處にもあつた。山國に見る家屋の構、それに避暑に來る西洋人の別莊の戶締にされたのが幾軒か續いた。かうした山の中に珍らしい寫眞屋、繪葉書屋、パン屋、Fine Artsなどと大きく書いた家もあつた。山で圍まれた湖水の汀には漣が寄せて居た。岸には新しい鉋屑の四邊に散らばつた半造りかけたボートもあつた。

旅籠屋では、角帶を緊めた番頭が出て迎へた。時節外れの今はひまで、室といふ室は大抵明いて居た。小雪は一日の長い旅に勞れ果てたといふやうに、大儀さうに、入口の階段をのぼつた。やがて二階の湖水の見える室へと通される。婢が十能に火を運んで來た時には、皆な寒さうに火鉢の周圍に集つた。小雪は容易にコートを脫がうとはしなかつた。

『くたびれたねえ。』

と客は言つた。

『えへゝ、』と男は質朴な笑ひ方をしく、『何うも困りやすんで、一月に三人位あることが御座りますから。』

『見たことがあるかねえ。』

『私ははア、見たことは御座りませんが、噂は見たことがあるさうで……あれ、飛込んだと思ふと、半分位まで、人間の形が黒く見えて居るさうで――』

『まア、ねえ。』

と小雪は其場合を想像した、

『どうも困りもんで――』

男はかう言つて向うへ行つた。

少し下りた處に瀧壺まで見下ろせる位置があつた。其處からは瀧の餘沫の中を飛びめぐる岩燕の群も見えた。樹の枝に縋つて小雪は瀧壺を覗いた。

瀧見茶屋を出て少し行くと、瀧の上流が見えた。普通の谷川のやうに平らな瀨をつくつて靜かに流れて居る。林を切り開いた處には、まだ新しい小屋があつた。東京で見る巡査の交番に似て居た。人は居なかつた。

それは投身者を嚴重に取締る爲めだといふことを人足は話した。やうやく五六日前に出來上つたばか

『大きな瀑ねえ。』

『日本でも餘り類のない瀑だ。』

『よく思ひ切つて飛び込んだものねえ。』

『此處に來て、瀧を見ると苦勞のあるものは、死ぬ氣で來たのでなくつても、飛び込む氣になるんだつて……』女中は聞嚙つたことを傍から言つた。

『私も飛込まうかしら……』と言つて笑つて、『厭だわ、何んな苦勞があつたつてこんな處から飛込む氣にはなれないわねえ。』

『本當よ……』

かう女中が言つた。

小雪は少し考へ込むやうにして、『どうして藤村操はこんな處から飛び込む氣になつたんでせうねえ。戀人があつたんですつてねえ。』かう言ひかけたが、柄にもないことを言つたのに氣が附いて自分で笑つた。燃えるやうな熱心な青年の心は小雪のやうな境遇の女には分らう筈はなかつた。

客はいろ〳〵其後の話をして聞かせた。飛び込むものが多くなつて、中禪寺の村はそれが爲めに村税の負擔が増したといふことも話した。其處に茶屋の主人らしい四十男が茶を運んで來た。客は、『この頃も身投げがあるかね。』

ぐやうに、もう程もない道を急いだ。一握の錢と一杯の酒とにかれ等は漸く近づいて來た。

水の音が微かに聞え出した。路傍には新しく建てたらしい板葺板圍ひの家があつた。其處には草鞋が下げてあつて、駄菓子が硝子張の箱に入れられてある。鬚の深い熊のやうな山男が、圍爐裏の炯を前にして坐つて居た。

『これよりけごんの瀧』といふ道しるべの石が路の畔に立つてゐた。その岐れ道を籃輿はズン〳〵進んで行つた。瀑見茶屋の低い屋根が見えて、其處から立つ淡い紫の烟が見えて、續いて緣臺の上の赤い毛布が見えた。水の音にはドウと物の落ちるやうな氣勢が交つた。大きな谷は前に開けた。

谷の緣に臨んだ時、

『これが、けごんの瀧。』

と小雪は言つた。

暫くしてから、『そして一體何處から飛び込むんですの?』

『そら其處さ、……落口の處に柵が結つてあるだらう。彼處からさ。』

『彼處から……彼處からぢやねえ。』

と見惚れて居る。

やがて緣臺の處に戾つて來て、

後の人足が戯談らしく言つた。

『おい、よして呉れ、馬ぢやねえぞ。』

『何だ、馬ちやねえ、……馬より好いと思つてやがる。』

『本當だ、』と次の籃輿の人足が受けて、『來世はなア、せめてなア、馬ぐらゐにや生れて來ていものだ。』

『本當だよナア、勘公、馬は人間と違つて了簡といふ奴が無いから樂だナア、何んなもんでも平氣で載つけて行くアなア。』

『さうともよ……』

やがて登り切つた。

四邊はしんとして居た。霧のやうな雲が林を籠めて、樺の白い幹がところどころに立つた。其上をサツと降つて通る雨の音はさびしかつた。

氣候が驚くほど違つた。誰も皆新しい山の空氣の身に迫るのを覺えた。五月ではあるが、何だか三月位の氣候としか思はれなかつた。草でも樹でも、麓にあるものとは皆な種類を異にした。寂とした廣い平らな林の中の路を、人足共のさつさと歩いて行く足音が高く聞えた。

人足は足を留めなかつた。肩をかへても、今迄のやうに休まうとはしなかつた。夕暮近く鳥が塒に急

だが、二里の處を一里足らずで眞直に突切る舊道の捷きをかれ等は常に選んだ。見る〳〵人足の息づかひは荒くなり、シャツ一枚の脊中からは汗が流れた。路は勾配が胸を衝くばかり急なのに加へて、雨にこねられた泥濘は夥しく滑り勝であつた。木の根や石を力に辛くも登つて行くかれらの息杖はブル〳〵と震へた。時には乘つて居る者の脚が胸より高くなることがあつたり、宙にブラ〳〵と危く放擲されやうとしたりした。路に出て居る熊笹や小枝がをり〳〵小雪の手や顏に觸れた。

籃輿が烈しく搖れる時や、深い谷を脇に釜の縁のやうな細い路を通る時や、泥濘の路に人足が滑つて籃輿が危く覆りかけた時などには、吊手拭につかまつて居る小雪の手にも汗がおのづと滲んで、意氣地なく胸が震へた。人足は荷物か何ぞのやうにして全力を出して擔いでのぼつた。

尻はしよりをして下つて來た東京者らしい二人づれと擦違つた時、

『藝者だ、藝者だ。』

『旨くやつてやがるな。』

かう言ふのが誰にも聞えた。

人足は今や全力を擧げて居た。をり〳〵息杖を立てゝ休むその頭からは湯氣がポッポと立つた。此處が舊道でも一番嶮しい不動坂であつた。其處へかますや樽を積んだ馬が下りて來る。

『ハイ、どう〳〵!』

谷がやがてまた前に開けた。レーキサイドホテルの白ペンキの廣告札が立つてゐる傍には、瀟洒な瀑見茶屋があつた。此處の上さんは四十位の年恰好で、毎日朝早く馬返から登つて來るといふ。客も小雪も女中も皆な籃輿から下りて、ほつと吐息をついて、前に展げられた二條の瀑と相對した。

『さつきは恐いやうだつたわ。餘沫が顔に懸るんですもの。……あの水が落ち懸つて來たら何うしようかと思つた。』

こんなことを小雪は言つた。

瀑の名を聞いては、『般若とは面白い名ねえ、』などと言つた。

客が酒を飲まうとすると、『およしなさいよ、……ちき苦しくなる癖に、』と艶やかに笑つて見せた。何處となくはしやいで居るのが客にも解つた。

中の茶屋までは一のぼり。其處は、今まで通つて來た谷を一一明かに顧みて指點するといふやうな地位にあつた。谷川が深い山の中から出て、寄り合つて嘵り合つて世の中に出て行くさまがそれとなく思はれる。高い山と高い山とが重り合つて、今朝から通つて來た廣い野や綠葉の林は何處に行つたかと思はれた。心細いしかし樂しい心地を小雪は經驗した。何うした聯想か、多くの客の顏が眼の前を通つてそして消えた。

人足の困難する山路は此處から一層酷くなつた。新道を迂回すればさして難儀をしなくつても好いの

西洋婦人は馬を並べて、樂しさうに話しながら、一行を追越して行つた。十七八の少女は色の白い無邪氣な綺麗な顔をして、此方を見て笑つて通り過ぎた。此處らは日光でも最も渓の邃いところであつた。瀬の音は四邊に響いて凄じく聞えた。川の瀬の變る度に常に崩壞する道路を修繕する爲めの人足が其處にも此處にも居る。石を一生懸命に碎いて居るものもあれば、碎いた石を畚に入れて擔つて行くものもあつた。大きな石を動かす爲めに五六人一群になつて仕事をして居る傍は避けて通つた。ふと凄じい音がしたので、驚いて其方を見ると、崖の上の大石が二つに割れて落ちて、其處から白い烟が颺つた。ダイナマイトで、道普請の石を割つて居るのであつた。

瀬の凄じく咆哮するさまを段々と下に見るやうになつた。幾筋にも岐れた瀬に架けられた柴の組橋を渡る時には、白い泡立つた水がすぐ下に鳴つた。ある橋では其の餘沫が小雪のコートから顔にまで懸つた。流石の西洋婦人も馬から下りて、長い洋服の裾をはしよつて、縫ふやうにして歩いて行くのが繪でも見るやうに其前に見える。

躑躅の紅い花が其處にも此處にも咲いて居た。

谷は折れ曲つて、二つになつた。其間を中禪寺へ登る路はついて居る。谷に離れた角の茶屋には、汚い爺さんが一人ぽつねんとさびしさうにして居た。半壞れた女人堂の傍を通る時、人足は昔は女は此處から上へ登ることが出來なかつたといふことを小雪に話して聞かせた。

鑑輿の支度が出來た。相棒で擔いで來た赤いふつくりした友禪メリンスの蒲團の中に、緣側から頭を低くして、身を沈めるやうにして乘つた。ともすれば大きい丸髷のつかへさうになるのを、小雪は頻りに氣にして居たが、先に乘つて此方を見て居る客と顏を見合せて笑つた。人足は桐の柾の駒下駄と繻珍の細い鼻緒のすがつた疊つきと他の一足とを一緒にして、それを女中の乘つた鑑輿の上に結びつけた。

並んで出懸けた。

好い鹽梅に雨は降らなかつた。車とは違つて、四邊が能く見える。林を通る時には綠の影がチラ〳〵と衣の上に動いた。それに鑑輿が心地よく搖れた。

客が指す方を小雪が見ると、高い高い今にも落ちて來さうに思はれる崖の上に躑躅が一固まりになつて赤く咲いて居た。

凄じい谷川の水が鳴つて吼えて頭の上に落ち懸つて來さうに思はれた。廣い河原があつたり、大きな石がころがつて居たりした。數年前に水の出た時の話を客は人足から聞いた。

『あの時は豪い騷ぎだつたよなア、馬返が今流されるか、今流されるかと思つた位だつたからなア。』

馬返に住んで居る人足はかう言つて話して聞かせた。

修學旅行の生徒は、まだ續々と下りて來た。大きな躑躅を肩にして歩いて來るものもあつた。鼠色の加はつた白い雲が前の山から簇々と出る。谷は次第に狹くなつた。

『この山はまだ奥が行けるんですか。』
『行けるとも……これから藤村操の華嚴瀧があるんだ。』
『さうなの、これから奥にその瀧があるの？　こんな淋しい處を藤村操は行つたんですねえ！』
『さうさ、』と言つたが、女中に、『お慶さん、今度は眠らずに行かなくつてはいかんよ。こゝからいろいろ日光の瀧の名所があるんだから。』
『もう大丈夫、もうこんなに目が覺めて了つたから。』
女中はわざと眼を大きく瞬つて見せた。
『大丈夫もないよ、本當に……見物に來たんぢやなくつて、眠りに來たやうなものだよ、』と小雪は笑つた。
谷川の瀬の音が林を撼かして聞えた。
馬に乘つた若い西洋婦人が下から二人遣つて來たが、水色の涼しさうな洋服の裾を飜へして、ひらりと馬から飛降りた。馬はやがて前の林の中に繫がれた。暫くすると、また後から金髪を房々させた十七八の少女が同じく馬で遣つて來て、これも巧に活潑に飛び降りた。そして緣側に休んで居る前の二人の婦人の處に來て、何か面白さうに語り始めた。
『西洋の女は活潑で好いわねえ、』と小雪は言つた。

の向うに、小高い二階屋の離れがあつて、其前の綺麗な泉水には、目も覺めるやうな紅い八汐の躑躅の大きな枝がさし込んであつた。

其の六疊二間つゞきの綺麗な離れに一行は休んだ。

其處からは裁縫をして居た色の白い肥つた娘が、茶器と菓子盆を持つて長い緣側を此方に遣つて來るのが手に取るやうに見えた。間を隔てゝ大きな圍爐裏が切つてあつて、其處の周圍に一行を乘せて來た車夫がごた〳〵と集つて居た。

此處の名物のきなこ餅は徒らに盆に盛られたまゝで、誰も手をつけなかつた。

『車に搖られて好い心地をしてウト〳〵して來た。』

女中は欠伸をしながら言つた。

『よく眠る人だね本當に……』

愛想が盡きるといふ調子で笑を含んで小雪は言つた。

『これから籃輿だ！』

かう客が言ふと、

『何處まで行くんですの、一體……』

『もう一里半だ、ちきだよ。』

其の頃から、何處かの學校の修學旅行の青年の群が、或は二三人、或は七八人、或は十人以上をりをり山から下りて來るのに逢つた。皆な詰襟の黑い制服を着て、ゲートルをつけて居た。熱心に話しながら脇目も觸らずに步いて行くものもあれば、ステツキを切る爲めに道草を食ひながらぐづ〳〵步いて行くものもあつた。軍歌を一齊に歌つて行く群もあつた。其中には敎員らしい鬚の生えた人もをり〳〵交つて居た。

『何だ、あれは、細君ぢやないナ。』

こんなことを態々聲高く言つて行くものもあつた。

群に離れて、唯一人さびしく步いて來るものもあつた。

馬返の五六軒のさびしい家屋は遠くから小さく見えた。山の中に來たといふ感じは誰の胸にもあつた。こんな處を入つて行つて何處に何う行くのだらうと小雪は心細く思つた。何となく後ろが振返られるやうな氣もする。賑かな電車の響、やけに彈く三味線の音、さうしたものからは全く離れて了つた。かうした世の中があらうとは今まで想像にだに上らなかつた。

藁葺の家の前には靑々とした畠があつた。子供を負つた齒を染めた若い上さんが其處から出て來た。其家の入口の壁にはぬれた簑が掛けてあつた。

大きな昔風の旅籠屋の前に車夫は梶棒を下した。其緣側には草鞋が幾足となく吊してある。長い緣側

が取れたり鼻が缺けたりした苔の蒸した地藏尊が無數に並んで居るのが見える。小雪は卓の傍にある粗末な椅子に腰を掛けて、帶の間から繻珍の小さい煙草入と赤銅に細かい彫のしてある煙管を出した。其處に上さんは馬の小便のやうな茶と金米糖を入れた器と、片手に十能におきを入れたのを運んで來て、そのおきを無造作に火鉢にあけた。灰がぱつと立つた。

晴れた日なら、下まで降りて見るのだが、そんな心地には誰もなれなかつた。小雪は丸竹の欄干に凭つて唯谷を覗いた。

やがて出懸けた。

清瀧の足尾への岐れまで來るには、かなりあつた。山は絕えず眼に入つた。雨はまだ降つて居たが、それでも段々小降になつて來て、空も少しは明るくなつた。清い水の流を前に、釜を洗つて居る女もあれば、山から伐り出して來た木で下駄の臺を削つて居る男もあつた。冬の積雪を凌ぐ爲に、家屋の庇は皆長く出て居て、瓦で葺いた屋根などは見たくも見られなくなつた。足尾に岐れる路には、トロコが續いて、銅を載せた車が幾臺も幾臺も遣つて來た。山の向うには、富者と貧者との懸隔を歷々と眼の前に見ることの出來る足尾があるのである。

わかれ道を少し行つた時、先に行つた客の車は幌を擧げた。雨はあら方止んで居た。小雪も幌を擧げさせた。

づた。馬返に行つて人足が足らぬといけぬから、一人餘計にあと押を增して吳れといふ意味を、其の一人が客の傍に來て言つた。客は輕く點頭いて見せた。橋を渡つて、日光名物を賣る店の前で三人は車に乘つた。店の前に坐つて居る藝者でもしたことのありさうな細君は小雪の蝙蝠傘を疊んで車に乘るところをしげ〳〵と見てゐた。

車は暫し谷川の岸を駛つた。

幌の中から見る四邊のさまは、活動寫眞を見るよりも飽氣なかつた。それに景色が小さく線で劃られてあつた。屋根が見えたり、草鞋を吊した家が見えたり、通りすがりの皺くちや婆さんが見えたり、谷川の泡立つ瀨が見えたりした。雨さへ降らなければ、此處等は步く筈であつた。そのめづらしい處々を呑氣に樂しく步く時のさまを三人は前から想像して居た。瓢簞でも下げて行きませうかと小雪は言つた。

『三里！　三里位何でもありやしませんよ。私、步くわ、ねえお慶さん、步くともねえ、』とも言つた。

今日、幌に包まれて行くのがいかにも佗しかつた。

含滿が淵では車を下りた。雨に遊覽者の立寄るものもなく、緣臺からは毛布が皆な取去られてあつた。客の來たのを見て、髮を蓬にした上さんは、慌てゝ赤毛布を一枚抱へて來て、谷に臨んだ緣臺の上に敷いた。丸い粗末な卓の上には躑躅の根つこで拵へた火鉢が置いてあつたが、其處には徒らに灰が白くなつて居た。欄干の下には恐ろしいやうな谷が瀨を爲し渦を卷いて凄しく流れて落ちる。其向うには、首

いて出懸けた。屋號をくろ〴〵と書いた大黑傘を宿の男が小雪にわたさうとすると、

『私は好いわ、』と言つて、小さい勝色がかつた蝙蝠傘をさつと開いてさした。縞の夏コートに雨が降り懸つた。

女中は大黑傘をさして、厚ぼつたい色の褪めた冬コートを着て、股をひろげたやうにして後から遣つて來た。

眼の前には、綺麗な谷川の瀨が開けた。其處には寫眞で見馴れた朱塗の橋がゆつたりと懸つて居る。白い處と碧い處とを巧に織り込ませた瀨は、淙々と音を立てゝ流れて居る。向う側の石段の間からは、清い水が瀧のやうになつて白く碎けて漲り落ちた。

客は先に行つて、假橋の欄干のところに立つて、それに眺め入つた。斜にした蝙蝠傘には雨が降り濺いだ。其處に小雪も來て立つた。

『綺麗ねえ。』

といつもの調子で言つた。

『あ、これが日光の神橋ね。』

と後から遣つて來た女中は始めてそれと氣が附いたらしく言つた。

三人は暫し固まつて眺めて居た。三臺の車はぞろ〳〵と後から跟いて來た。車夫は孰れも屈强な男であ

たんですよ。』

『さうねえ、そんな話をして居たこともあつたわね、』と小雪も笑つて、『何でも此家のお上さんになるつて言ふ話もあつたんだつてねえ。』

『それが可笑しいんだつて……』と女中は愈よ得意になつて、『別莊に居て、晝間は知らん顏をして居るから誰も皆なお客だと思つてるんですつて……。此處の旦那もね、晝の中は、店で雇人と一緒に働いて居て、夜になると、こつそり遣つて來るんだつて……』

『そいつは面白いな、』と客は笑つた。

女中は、『けども今の方が結句氣樂よ、こんな處のお上さんになつたつて、女將の氣象ぢやとてもぢつとして遣つて居られはしませんからねえ。』

『さうねえ。』

と小雪も言つた。染々した調子であつた。

兎に角、中禪寺までは行くことにした。馬返までは車、其處からは籃輿といふことに話を決めた。東照宮の見物は歸途にすることにした。

旅籠屋の入口に車が三臺待つて居るのを、『鳥渡、神橋を見て行くから、』と言つて、客は先に立つて歩

小さい德利には藍模樣で山水に瀧が落ちて居た。小雪も一二杯飮んだ。飯が濟むと、土地訛の、メリンスの赤い帶をしめた女が膳を下げに來る。女中は欄干の處に立つて降頻る雨を見て居たが、不圖思ひ附いて、

『此家の別莊つて言ふのは何方なの？』

『それ、向うに見えるぢやないか、それその向うの山の處にある。』

と客は指さした。

『あゝ、あれがさうなの、あの二階が！』

高い處に古い二階屋が一棟見えた。上下にある幾箇ともない室が指さゝれる。障子が半ば開いて、庇髮の女學生らしい姿のチラ〳〵見える室などもあつた。

女中は室內に戾つて來て、

『女將はあの別莊に長く來て居たことがあるんだつて。』

『此間、そんなことを言つてたね。藝者をして居る時分だらう。』

『えゝ、』と笑つて居る。

『お客に連れられて來て居たんだらう。』

『それが面白いんですよ、』と女中は得意さうに笑つて、『此處の旦那がね、其頃東京で女將を貰つて居

上にもなるさうだが、多くは西洋人相手だと聞いた。

町は段々綺麗になつた。大きな家屋が其處にも此處にも見える。繪葉書を賣る店や、水彩畫を並べた硝子戸や、西洋人相手の美術品商や、林檎玉菜オレンジなどを並べた西洋物貨店などのさまぐの色彩がチラくした。

大きな旅籠屋では番頭が聲を揃へて迎へた。

二階の八疊に通された。欄干からは雨にぬれた日光の町の通りが見えた。電信柱には燕が飛び違つた。

三人は此處で中食をした。鮭のてり燒や、ソボロや、玉子燒などは客にも小雪にも口に適はなかつた。

『西に行くと食物が總て旨いが、此方に來ては駄目だねえ。西洋人相手だから、西洋料理はかなり旨いのが食へるが、カツレツやオムレツでは酒は飮めない。』

こんなことを客は言つた。

『貴郎も西洋料理は嫌ひねえ。』

と小雪は笑ひながら言つた。

女中は傍から、

『雪ちやんも嫌ひ?』

『えゝく私、大嫌ひ。』と小雪は力を入れて言つた。

も逸早く感じられた。

小雪の一行は停車場の雜遝の中に暫らくの間見えてゐた。色の白い、大丸髷の姿が四邊にくつきりとした。車が三臺一行を丸く取卷いて梶棒を下した。雨が降頻つても、山近い道路は、泥濘むやうなことはなかつた。

幌の中から顏だけ出した小雪には、何も彼も目新しく見られた。あのやうに名高い日光の町がこんなにこけら葺の軒の低い家が多い處かと先づ驚かれた。例の四角の羊羮が絶えず眼に附く。狐の皮や鹿の皮を下げた家がところ〴〵にある。小さい旅籠屋が門並につゞく。自然にのぼり具合になつて居ると見えて車夫は梶棒を胸の處に上げて曳いて行くので、體はおのづと前踣になる。前の山の樹の上には鼠色の雲が懸つたり晴れたりした。

水道らしいものが路の畔にあつた。赤い襷を懸けた色白の肥つた娘が、傘を片手に栓を捻ると、綺麗な水は小さい瀧をなして手桶の中に落ちた。柳川、大蒲燒、料理屋らしい家の構がところ〴〵に見え出した。丸い御神燈の懸つて居る家もあつた。小雪はあるお客から聞いた日光の藝妓の話を思ひ出した。其處に照子といふ流行子が居た。それがある夜日光のお宮の技師をして居る旦那と口說をして、ランプを引くりかへして町を半分以上も燒いたといふ話を聞いたことがあつた。さう思つて見ると、成程兩側の家屋は皆新しい建築であつた。此處では夏場には宇都宮や東京から出稼ぎが入つて來て、藝者が百人以

『こんなに雨が大降になると知つたら、寄らずに置いてゆくぢやつたにな……』

此の近國の人でないことは、言葉の訛でも知れた。世の中のつとめを果して、娘は人に遣り息子には嫁を取つて、少しの心配もなく、かうして旅をして見物して歩く人は幸福である。客はいろ〳〵なことを考へずには居られなかつた。

先程から頻りに珍らしさうに此方を見てゐた老人夫婦は、今度は却つて此方から見られるやうになつた。

五分は經つた。

車掌は笛を鳴らした。

小雪は喪心した人のやうに猶ほぢつと見詰めてゐたが、汽車が動き出して、その光景が見えなくなると、急に思ひ返したやうに客の顏を見た。莞爾と笑つて見せた。

日光の停車場は混雜した。幌をした車が幾臺となく出口の處に集つて、汚い股引の車夫が客の顏を覗き込んで乘車を勸めた。話が決つて逸早く曳き出して行く車も一二臺はあつた。暗い古い杉並木を背景にして、此地に著名な旅籠屋の支店の繪看板と字看板、其家々の入口には、番頭が聲を嗄して、『小西屋は手前でございます。』『神山は此方でございます。』と呼んでゐる。遊覽者のつどひ來る土地といふにほひが誰に

は三角のトンカチ棒のついた小旗が幾本となくさしてあつた。一間しかない部屋の中が明かに見透される。疊の汚れたさまなどもそれと見える。其處に肥つた上さんが生れて一年位經つた子をあやして遊ばせて居ると、これも矢張肥つた上さんが、發育の好い、巾着頭の、足などのはち切れさうに肥えた同じ年恰好の子をたゞ負ぶして、さも苦勞のなさゝうに笑つて話をして居る。――小雪はそれをぢつと見て居る。

ぢつと見て居る……

客もぢつと小雪の眞面目な熱心な顏を見詰めた。

小雪の心持がはつきりと解るやうに客にも思はれた。

小雪は今年二十四である。淺草でお酌で出て、それから日本橋に二年、新橋に一年、今の處に一年半、それに、ある客に引かされて一年、上州のある田舍町に半年ほど居た。體も平生餘り丈夫な方ではなかつた。それに借金もかなりに多かつた。

ふと宇都宮から一緒に乘つて來た老人夫婦の話が耳に入つて、客は心を其方に奪はれた。

『何うしますか、今日お宮にお詣りして、すぐ歸りやすか。』

かうお婆さんが言ふと、お爺さんは、

『折角來たんぢやから、一晩ゆつくり泊つて行かう。』

鷹揚な、しかしやさしい調子で言つた。

暗い大きい杉並木を指して、
『これが日光に名高い杉並木だよ。これが二筋になつて、一方は宇都宮から一方は鹿沼から七里の間續いて居るのだからね、大したもんだ、』と客は言つた。
其杉並木の中にある小さな停車場では、上りの汽車が煙を立てゝ下り列車の來るのを待つて居た。其處には薪が山のやうに積まれてあつた。一ところ並木の絶えた處には、板葺の軒の低い家が二三軒さびしさうに立つて居た。鬚の茫々と生えた山の男が、其家の裏で大きな木根に鉞を當てゝ居た。
今市では、五分間停車した。
車窓の前は下り客のプラットホームになつて居た。勿論板を打附けて圍つたばかりのプラットホームであつた。前には神橋や中禪寺湖や華厳瀧を色彩澤山で描いたホテルの廣告札が無數に立つて居る、建物の蔭になつた處は雨の細い脚が濃くはつきりと見えて、田圃を越して、緩い山の連續が灰色の空を劃つて居る。ふと小雪の眼が深くあるものに注がれて居るのに客は氣が附いた。
其處には、低い道路に添つて、こけら葺の棟割長屋が三四軒續いて居た。一軒は雨戸が堅く閉められてあつた。一軒は入口に仕事場があつて、中年の男が汚い筒袖を着てせつせと下駄の齒入をして居る。一軒は駄菓子屋で、平に並べた硝子箱の中に豆菓子やねぢり棒やかりん糖が入つて居て、其上の竹筒に

ら段々狹い山に入つて行くやうな氣がする。麻の野原はいつか楢や榛の林に變つて、下には笹や萱が茂つた。雨にぬれた若葉は鮮かな新しい目も覺めるやうな色をして、時には明るいトンネルをつくつたり、時には濃淡の幕を張つて見せたりした。汽車の線路の緣には、綺麗な小川が流れ、それに仕かけられた野碓は、水の滿ちて來るのを待つて、をり／＼白い小さな瀧を見せた。

林を通つて野に下りて行く屈曲した道も見えた。

人々の心は次第に都會に離れて行つた。この漲るやうな豐富な色彩は、都會にのみ馴れた小雪の眼を驚かした。三味線の音のする世界とは全く別の世界であつた。

綠葉が絶えずチラ／＼した。

その綠葉の下を縫つて、紅い色がをり／＼低く交つて見えた。餘りに低く、餘りに小さいので、客も初めはそれをしどめの花だと思つた。しかしそれは誤りであることが段々知れた。後には丈の高い色の濃い同じ花が目まぐるしい位に多くなつて來た。言ふまでもなくそれは躑躅であつた。

『綺麗ねえ。』

と小雪は感に堪へたといふやうな調子で言つた。

小雪の眼にはさま／＼な色彩が消えたり映つたりした。綠葉の下を汽車の通る時には、その濃淡の影が細い雨を透して、小雪の白い顏や衣の上に動いた。

つて居るところに横向きに腰をかけた。そして肱掛に凭り懸つて、此方を見ながら、客の持つた茶碗に麥酒をついで遣つた。客のさす茶碗を受けて、二三杯小雪も飮んだ。女中は頭を振つた。

客の顏はやがて赤くなつた。汽車が砥上の原あたりを通る頃には、麥酒の罎もうあらまし空になつて居た。品の好いお婆さんは客と小雪が麥酒を飮み合つて居るのを、めづらしいものを見たといふ顏色をして先刻からぢつと見て居た。土地のさまの段々變つて來たのが小雪にも知れた。麥や稻はもうなくなつて、廣い野の一面には、生れてまだ見たことのない青々とした低い草のやうな木のやうなものが繁つて居る。

『それは麻の木だよ。』と客は言つた。

『あれが麻？　蚊帳にする？』

眠つて居たかと思つた女中が傍から不思議さうに言つた。

雨は矢張降つて居たが、しかし近い處の山々は見えた。白い雲が大きな綿のやうに簇々と山から昇るのを見ては、退屈であつた今までのあくびも忘れぬ譯には行かなかつた。『お慶さん、御覽よ、雲が丸で繪のやう。』などと小雪は言つた。

小雪も醉つて、顏がほんのりと色づいて居た。

汽車は煤煙を颺げて、凄しい息づかひをして登るやうになつた。鹿沼の停車場を過ぎると、廣い野か

身に取つては餘り詰がなさ過ぎた。

汽車の通る道の景色にも段々飽きて來た。行つても行つても同じ野山であつた。それに雨が降らなければ、外を見ても氣がまぎれるし、元氣も出るといふものだが、かうびしよ〳〵本降りになつて、行着いた先からも、幌をかけた車に乘つて、ある道程の間、山道を行かなければならぬと思ふと、昨夜からあれほど樂しみにしたものはないやうな氣がした。

小金井驛を通る時、客は女共に僧道鏡の話をして聞かせた。道鏡の流された寺は此處から十五町しかなかつた。其處に墓が今日まで殘つて居るといふことを話した時、小雪は、『まアこんな處で歿くなつたんですか、』と言つた。けれどそれよりも雀の宮といふ停車場の名の方が却つて女の心を惹いた。この次驛が宇都宮だと言つて聞かせると、すぐ釣天井の話が出た。

宇都宮で日光行に乘換へた。

乘客が皆變つた。今度は白い鬚を生やした七十近い品の好い爺さんと、切下げのこれも矢張品の好いお婆さんが一緒に同じ車室に入つて來た。お婆さんは信玄袋を上の網に載せて、お爺さんの手提を其傍に置いた。その他に縣廳の役人らしい洋服姿の男が三人ほど居た。

汽車の發車しない中から、客は麥酒を飲み始めた。今度は女中と客とが並んで、小雪は客の前にな

のをこの中に押込んで來たのよ。何んな菓子だか知らないけれど、』と言ひ懸けて明けて見て、まア厭だと打捨るやうに言つた。中には大福と金鍔とがごろ〳〵ころがつて居た。それでも捨てもせずにやがて食ひ始めた。小雪はサイダを飲んでから、夏蜜柑の厚い皮を細い指で骨折つて剝いて、帶の間から楊枝入を出して、楊枝を二本取つて、一本を蜜柑の身にさして、客の方に出して勸めた。

續いてビールの罎を取上げると、客は頭を振つて見せた。

『召上らないの?』

『まア、今少し經つてから。今は飮みたくない。』

小山から小雪と女中とは位置を變へた。今度は女中が窓の近くに居た。女中は其窓からサイダの空罎と夏蜜柑の皮とを捨てた。蜜柑の皮は丁度汽車が通りかゝつた小さい川の流に落ちて沈んだ。

三人は段々退屈して來た。客は平生から餘り戲談を言はなかつた。座敷でも藝者の彈く三味線を默つて聞いて居るばかりで、唄一つ唄つた例がなかつた。小雪も藝者としては餘り俠な方ではなかつた。二人相對して默つて坐つて居ることなども幾度かあつた。其處へ女將や女中が入つて來ては、『いやに氣が詰るわねえ、』とか、『いやにしんねこねえ、』とかいつも言つた。女中は女將が此旦那に京都へ連れて行つて貰つた時の話を兼々聞いて知つてゐる。『本當にサッパリして氣が置けない人だよ。だから私達はね、先生を放つて置いて藝者と一緒に勝手に騷ぐんだからね。』女將は常にかう言つて居た。けれど女の

小山では、人が乘つたり降りたりした。本を讀んで居た男の代りに、地方の豪家らしい田舍紳士と若い綺麗な丸髷の細君とが乘つた。プラットホームを思ひ〳〵の身なりをした人がぞろ〳〵と通る。驛夫の手荷物を載せた車を運ぶ音と、人のせはしく通る足音と、物を賣る停車場商人の呼聲とが一緒になつて、廣い天井に反響した。女中の急いで廁に行く間を、小雪はサイダと夏蜜柑とを買ひ、客は敷島とビールとを買つた。飮む器がないとて、其處等にうろ〳〵してゐる大きな藥罐を持つた男を呼留めて、入りもせぬ茶を二箇買つた。銅貨でよこした五十錢銀貨の釣錢を客は一方ならず持餘して居た。五分停車の時間がやがて盡きる。車掌が客車の扉をガタン〳〵と閉める。その頃になつても女中は戻つて來なかつた。小雪は顏を車窓の外に出して廁の方を見て居たが、やがて手招きをした。慌て〻驅け込んだ女中はセイセイ呼吸を切らしてゐた。

小雪のそれ者らしい姿と、客の無骨な樣子とは、此處で乘つた若い丸髷の細君の注意を惹いたらしかつた。見ぬ振をしてじろ〳〵と見て居た。小雪の眼も幾度となく其細君に注がれた。その小雪をまた客は見て居た。

しかしそれも長い間ではなかつた。お互に見て了へば――途中で邂逅した犬と犬とが其毛色を見るやうに見て了へば、それでお互に氣がすんで、小雪はサイダを飮み始めるし、細君は夫に話し懸けるし、客は卷煙草にマッチを摩り出した。女中は自分の信玄袋から紙に包んだ菓子を出して、『これは昨夕貰つた

かう言つた客の聲は重かつた。
小雪は默つて居た。
『よく泥棒なんぞ來ないもんねえ。』かう言つたが、女中はすぐ調子を更へて、
『いやなこつた。こんな處に住んで一生を暮らすのなんざアいやなこつた。』
『お慶さんは、いづれ其中、貯金を出して、いい人と炭團屋でも始めるんだらう。』
かう言つて客が笑ふと、
『炭團屋は結構ねえ。』と女中は濟してゐる。
小雪は傍から、『ところが、貴郞、此人の貯金は大したものよ。』
『さうか、それぢや男にだまされないやうにするのが專一だねえ。』
『ところが何うしてそんな甘いんぢやないんですから、此人は――』
『雪ちやんおよしよ、馬鹿な。』
女中は打消した。
しかし三人は三人とも銘々の身の上を思はぬ譯に行かなかつた。廣い野中にまた一軒さびしい藁家があつた。

利根川は雨に烟つて居た。鐵橋を通る音に氣が附いたといふやうに、後ろにゐる紳士は寢ながら首を擡げて、赤い顏を窓の處に出して見たが、すぐまた元のやうに寢ころんで了つた。そして今度はむかう向きになつた。半孕んだ濡れた白帆がさびしさうに遠い處を一つ通るのが見えた。

停車場では、車掌が雨を外套に凌いで、小さくなつて、着いた驛の名を觸れて通つた。驛長が丸いもの丶受渡しを機關長にして歸つて行く向うに、大きなボン〳〵時計が懸つて、硝子窓の中の卓や書類や電信課の役員などがそれと見える。出口からは、下りた客がぞろ〳〵と續いて出て行く。尻ばしよりをした上さんもあれば髮を箒のやうにした百姓男もあつた。子守が柵の處に立つて、ポカンと退屈さうに此方を見て居た。

野が野に續いた。小松原の中の路を傘をさして行く女もあつた。

麥畑の綠の中に、一軒ぽつねんと立つて居る小さな藁葺屋根があつた。軒が低く、障子は黑くなつて居た。それに四邊には家らしいものも見えなかつた。降頻る雨は一層それを淋しく見せた。

『こんな處に住んで居る人も世の中にはあるんですかねえ！』

かう言つて、女中はそれに見入つた。

小雪も客も其方を見た。さびしいといふ心地は客にも小雪にもあつた。

『あゝいふ處にあゝして暮して居る人間もあるんだ！』

『いやなこつた！』
と女中は小雪に舌を出して見せた。二人は心安い間柄であつた。
汽車は駛つて居た。五月の末はもう稍暑かつた。衣更をしてから彼是二十日以上にもなる。勝色の鶉縮緬の一重羽織が痩削なすらりとした藝者の姿に似合ふ頃には、野は濃い薄い若葉に彩られて、樫のやうな樹にも嫩々しい葉が簇生した。右も左も麥の綠が波を打つて際限なく續いて居る。厚ぼつたい葉の常磐樹の垣の傍を通るかと思ふと、今度は子供を負つてやぶれ番傘をさした田舍の嬶が、色の褪めた旗を出してゐる踏切の小さい番小屋の傍を、汽車は凄じい音を立てゝ通つた。周圍には綺麗に刈込んだ樫の垣、門の中には廣い庭に鷄が繪のやうに遊んで居て、母屋の裏に白壁が三つまで見える豪農の家もあれば、田の靑々とした向うに、藻だの藺だの葦だのの生じた小さい河があつて、それにザン／＼と雨が降頻つた。
風も少し出て來た。それにつれて、雨が室內に降り込むやうになつた。窓際に腰をかけた小雪は、細い白い腕を惜し氣もなく見せて、顏を少し蹙めて、硝子窓を上げた。雨はその硝子窓にザン／＼と降りかかる。時の間に點滴が流れて落ちるやうになつた。
『生憎なお天氣ねえ。』と小雪は染々言つた。

寢かして戴きさへすれや——本當に一晩だつて緩くり寢た時なんかありやしないんだもの——今夜は宵の中から眠らせて貰ふんだ。』

『たんとお寢なさいな……眠が流れるほど寢ても好いわ。』

かう言つて小雪は笑つた。

續いて昨晩の話が出た。二時から二人で寢ようとしたが、何うしても寢られなかつたことやら、宵の中に鮨屋に折詰を賴んで置いた處が忘れて持つて來なかつたことやら、昨夕の客が酒に醉つて寢かしても寢かしても起きて來るので藝者も女將も困つて居たことやら、丸髷に結つてある處に行つて居たら、お客から『小雪お目出度いな。』と言はれたことなどを話して聞かした。女中も小雪と同じやうに矢張丸髷に結つて居た。

『お慶さんもお目出度いぢやないか、よく似合ふよ。』

かう客は輕い調子で言つた。

女中は大きな髷を自分で撫でて見て、

『昨夜も散々冷かされちやつた。高公がこん畜生丸髷に結やがつたなツと言つて醉つぱらつて、ぐんぐん押附けるんだもの、困つて了つた。』

『本當によく似合ふよ、これからいつでも髷にお結ひよ。お茶屋の女中らしくつて好いわねえ。』

して立つた。

客が扉を開けて車内に入つたのと、女中が眼を覺したのとは同時であつた『まア、先生―』と驚いたやうに眼を睜つた。此男の行く家では、女將も女中も皆な先生々々と言つて居る。先生と言はれるほどの馬鹿でなし――』などと小雪は三味線の撥を下に置いて、古臭いことを言つて笑つたことなどもあつた。それは横に長く二つに仕切られてある二等室であつた。後ろにはこれから長い旅を白い毛布に寢て行かうとする中年の紳士もあつた。夏蜜柑の剝き懸けたのや、ウヰスキーの小瓶や、あけび細工で出來た籠や、辨當の折や、空土瓶などがそこら一面に散らばつて居る。紳士は成程讀めたといふやうな顏をしてぢつと此方を見た。

近くの窓の處では、そんなことには眼も吳れずに、熱心に厚い本に讀耽つて居る三十前後の男が居た。車室の混雜して居ないのに、先づ少なからず安心したといふ風で、客は二人の女に相對して腰を懸けた。女の細い白い指と、純金の指環と、勝色に白く草花の出た派手な襟とが眼に留つた。

『此人は眠つてばかり居て仕方がないのよ。久喜だと言つても知らずに居るんだもの……折角連れて來て貰つて、何も見ないで、眠つてばかり居る氣がしれないわねえ。』

小雪がかう言ふと、女中はくしや〳〵した眼を摩りながら氣安げに、

『私は眠らして貰ひさへすれや好いんだよ。遠出にお客様に連れて行つて戴く時には、いつも存分に

町より山へ

上野から久喜に來るまで、女中はあらかた居眠をして居た。昨夜は近頃にない忙しい晩で、客が三組まで立込んで、トロ〳〵する間もなかつた。旅の支度を其間にした。小雪も十二時過から來て泊つた。汽車に乘る時には、もう生憎な雨が細く降り出した。

王子、赤羽、大宮――

『くき。』

と白い板に黑く書いた字がチラと眼に入つたので、小雪は、

『ほら、もう此處が久喜だよ。』

と女中に注意した。

女中が眼を覺すのを待たなかつた。停つた汽車の窓に降り懸る朝の細かい雨を衝いて、茶色の中折帽、縞の袷のインバネス、金縁の眼鏡、肥つたにこ〳〵した顏が、車內の丸髷に結つた色白の小雪の顏と相對

と和尚さんは師匠に話した。尼、幼ない尼、道子の短かい一生には相應はしい戒名である。

寺では世話になつた人達に膳を出すといふので、その支度に忙しかつた。近所の人達が大勢手傳ひに來て大根を切つたり、饂飩を打たりして居た。勝手元には大きな鍋から湯氣が白く立つた。

十二疊の座敷には、導師を中心にして、寺の重立つた世話人だの、町長だの、學校の教員などが並んで居た。東京から來た師匠もその一隅に默つて坐つて居た。豆腐汁に蒟蒻の刺身にがんもどきの煮附、さうしたものを載せた膳は、やがて人達の前に運ばれた。一しきり可哀相な幼い子のことが繰返されたが、それが濟むと、今度は地面の話だの、町の人々の噂だの、作物の話などが出た。老いた導師は、盃を唇に當てながら、梅干をつける時の話を隣の鬚の生えた男にして居た。

た。

小さな棺を前にして、幼きものを葬る儀式はやがて始まつた。本堂には近所の人々や道子の一緒に遊んだ子の母親や寺の懇意にしてゐる人達などが大勢集つて居た。棺の前に蠟燭の灯を配つて、やがて導師の長い長い讀經が續いた。

外では子守や子供達が、賽錢箱の處から顏を出して此方を見てゐた。

引導がすんで、これから燒香が始まらうとする頃、寺の上さんは賽錢箱の前に行つて、錢を撒いた。

子供等の騷ぐ聲が一しきり喧しく聞えた。

歷代の寺僧の墓地の一隅にやがて人達はその小さい棺を運んで行つた。大きな杉の森の中に篠や雜草や小さな灌木などの茂つて居るやうな處で、暗い淋しい道には、古い落葉がじく〳〵した地面の上に散らばつて居た。草叢の中には、沼の跡でもあつたかと思はれるやうな黑い汚い水が溜つて光つて居た。

丸い輪塔形の墓が其處にも此處にもあつた。穴を掘つた處は左の隅で、水が三尺位のところまで溜つて居た。『何うも水があるんでかなはない。』人足はこんなことを言つて、棺を納めた後の土を丸くならした。

香爐、位牌、線香の烟――位牌には𠈤鶴禪尼とし一あつた。寺の籍にあるからさうした戒名をつけた

その一間はさびしい、しかし明るい光に照されてゐた。田舍の夏の夜は早くも更けて、あたりはしんとした。時々思ひ出したやうに蛙のなく聲がした。涼しい夜風が絶えず入つて來て、多い蚊も左程苦にはならなかつた。

菓子が出たり茶が出たりした。十二時近くなつて、和尚さんの親友であつた人の後家さんだといふ、三十五六の意氣な田舍では見られないやうな女が遣つて來た。肥つた上品な上さんも居た。小さな鉦が前に置かれた。

それを叩く調子につれて人達はかういふ時に此處らに流行る御詠歌を唄ひ始めた。

身は此處に、

心は信濃の善光寺、

導き給へや彌陀如來――

聞いて居ると身も心もそれに引入れられて了ひさうな柔かな悲しい調子が鉦の音につれて繰返し繰返し唄はれた。後家さんの聲には滑らかな艶な巧みな節があつた。

蠟燭の灯が絶えずチラ〳〵と夜風に動いた。

鉦の音と柔かな唄の聲とは夜もすがらその一間に聞えて居た。

近所の寺から導師が緋の僧衣を着て遣つて來た。和尚さんは紫の僧衣を纏つて親族席の處に坐つて居

れた。

『不仕合せな生涯だつた。』

師匠は座敷に戻りながら、感激したやうにして言つた。和尚さんは昨日からの病狀を繰返すやうにして師匠に話した。その聲にはやさしい悲しい調子が籠つて居た。道子の父母の處にも昨日電報で知らせて、今朝又打つてやつたなど丶言つた。若い人達の何の考もない無邪氣な戀の歡樂が、かうした悲劇を形づくつて行くといふ話なども二人の口に上つた。

『本當にさうだとも……自分の本當の子なら、悲哀があつてもこんな悲哀などはありはしない。あした境遇に出來た子だからと思つて、それで同情して育て丶やつたんだが………。』和尚さんは又眼をこすつた。

師匠は默つて居た。美佐子と男と自分との關係、それが無邪氣な何も知らない幼きもの丶上に及ぼして行つたことを考へて黯然としてゐた。

それは幼い不仕合せな道子の短い生涯を染々と思はせるやうな夜であつた。小さな棺と線香の烟と赤い花とを前にして、町の上さんや、後家さんや、お婆さんなどが集つて來た。和尚さんと上さんとは、不意に襲はれた恐しい病氣の話を繰返し繰返し人々に話して聞かせた。

話を和尚さんにして聞かせたりなどした『何うも脳膜炎と言ふ奴は小兒には難病ですな。それは治るのもありますけれど、多くは跡が痴呆になります、すつかり治るものは滅多にありませんな……知らせる處があるなら今のうちお知らせになる方が好う御座んすよ。』などゝ言つた。

苦痛と絶叫と烈しい熱とが續いた。其夜は誰も眠られなかつた。闇を額緣にした蚊帳の中には、疲れた上さんの顏と、心配さうな和尚さんの顏と、氷袋を顏に當てた道子の大きな頭とが終夜ランプに照らされて見えた。大きな三毛猫が其處に丸くなつて居た。

夜が微白（ほの）く明ける頃には、道子はもう屍になつて居た。やさしい和尚さんの眼からは涙が流れた『緣がなかつたな道！』こんなことを言つては泣いた『不仕合せな兒だからと思つて、何うか丈夫に育てゝ仕合せにしてやりたいと思つたのに、駄目だッた。』などゝ言つた。上さんも眼を赤くしてゐた。女の兒は簞笥の角のところに立つて泣いて居た。

電報を受取つて師匠が其處に行つたのは、其日の午頃であつた。師匠は挨拶をするのも待遠しいやうにして、すぐ道子の屍の置いてあるところに行つた。其處には小さな枕に香爐だの杉箸を逆に立てた茶碗だのが置いてあつた。線香の烟が薄く颺つて、夾竹桃の赤い花が手向けられてあつた。師匠は蔽つてある白い帕巾（ハンケチ）を取つて、眼を閉ぢて半ば笑つたやうにして死んで居る道子を見た。師匠の眼から涙が流

果てゝ居た。蚊が音を立てゝ寄つて來る中で上さんは薄暗いランプを前にして、道子を抱いて心配さうな顏をして坐つて居た。脈を取つたり眼を見たりした醫師はやがて首を傾げた。困つたやうな表情が顏に上つて來た。

『何うも腦らしいですな。』

『手重いでせうか。』

和尙さんは心配した。

腦膜炎、何うもさうらしく思はれた。誰か他にもう一人立會つて貰ひ度い。かう醫師は言ひ出した。

やがてその醫師も來た。矢張診斷は同じであつた。

氷を貰つて來て頭を冷したり何かした。俄に湧くやうに起つて來た災害に對して人々は唯狼狽した。

『母アちやん』『父さん』といふ小さな聲が四邊に際立つて高く聞えた。裏の方の八疊の蚊帳の中には道子を抱いて心配さうに坐つて居る和尙さんの顏が蒼白く見えた。

スヤ〳〵と眠るかと思ふと、道子は時々大きな眼を明いて周圍を見廻した『母アちやん』『父さん』と呼ぶ聲が繼續した。『父さんか、ほら、此處に居るがな。』和尙さんはかう言つて『道、苦しいか、父さんが見えるか。』

一人の醫師は何彼と深切に世話して遲くまで居て呉れた。長火鉢のある室で、其病氣について種々な

庫裡の廣い勝手元を、芋の子を箸にさして食ひながら歩いてなど居た。

剖葦（よしきり）が裏の蘆荻の中で頻りに啼いて居た。其日は其月に入つてからの暑い日で、キラ〳〵する日影の下で、笠を冠つた男が五六人、熱心に畑の桑の枝を芟つて居た。道子は午前は元氣よく其處へ行つて遊んで居た。別に變つたこともなかつた。處が日の暮れる時分、和尚さんは、道子が勝手に近い一間に疲れたやうにして寢て居るのを發見した。『何うかしたか？』觸つて見た頭は火のやうに熱かつた。眼が釣上つてゐた。

『おい道が大變だ！』

かう和尚さんは思はず叫んだ。

上さんが飛んで來た。女の兒が驚いて玄關の方から遣つて來る。水を顏にかけたり、聲を立て丶呼んで見たりした。前の長屋に居る傭男は、急いで醫師の許へと飛んで行つた。道子は、和尚さんに抱かれて、氣が附いて、眼を細く明いて、莞爾笑つた。しかし安心して傭男の醫師を呼んで來るのを待つて居られるやうな容態ではなかつた。和尚さんは道子を上さんに渡して、今度は自分がそ丶くさと出て行つた。

何處の醫師もぐづ〳〵して居て、漸く和尚さんが懇意の醫師を連れて來た時には、もう全く日が暮れ

師匠は道子を見る度にいろ〳〵なことを頭に浮べた。あの若かつた美佐子の子と言ふことが不思議にも思へた。何時となくあの女の青春の夢の過ぎて行つたことなども考へられた。道子の大きくなつた後——かれと美佐子と道子との間にいかにロマンチックな物語が編まれるであらうかなどゝも想像した。道子が物心がついてからの自分に對しての考も想像された。

他人に貰はれた子としては、道子は寧ろ仕合の方である。しかし矢張不仕合の運命のもとに生れた子であつた。

夏は跣足で土いぢりなどをしてゐることもあつた。上さんが畑で仕事をしてゐると、道子は其周圍で遊んで居た。鐘樓の傍に獨りでぽつねんとして遊んで居ることもあつた。葬式が來ると、大勢の汚い子供に交つて、撒かれた錢を拾つてなど居た。

落葉はやがて寺の庭を埋めた。

冬がまた來た。

三度目の誕生が來た頃、めづらしく道子の父親から手紙が來た。田舍から大阪に出て新しい新聞事業に從事するといふことが知らせてあつた。新たに子が二人の間に生れたといふ消息も知れた。

もう道子は枕を負つたり葬式の眞似をしたりするやうになつてゐた。口も大抵のことは利けるやうになつた。夜も一人で寢た。

『それはさうだらう。』

『肉體の關係といふものがないから、つまりさういふことになるんだねえ。』

和尙さんは平生に似合はないやうなことを言つた。二人は貰子といふことに就いて話した。『何うも矢張本當の親が育てるべきものだ。つくづく僕は貰子といふもの丶不自由だといふことを悟つた。』かう和尙さんは繰返した。

道子は可愛い氣のない子になつてゐた。濃かつた髮の毛も薄く、顏も蒼かつた。お腹と頭とばかり大きかつた。

ちよこちよこ遣つて來て、其處に坐つてゐた。饂飩などを小さい椀に分けてやると、それを手で食つた。悪戯などもよくした。言ふことをきかないと、『養子ッ子に遣つちまうぞ。』かう言ふと、和尙さんの顏をぢろぢろ見ながら悪戯する手を留めた。

和尙さんが道子を抱いて、わざと、

『道は養子ッ子に行くんだな。』

と言ふと、すぐ頭を振つて見せた。

『さうか、行かないのか、父さんは養子ッ子に行くとばかり思つて居た。』

道子には養子にやられるといふことが何より辛いらしかつた。

『本當にわかりの好い兒だよ、』と上さんは言つた。

不愍といふ情が一層加はると見えて、和尚さんは『道や、道や、』と可愛がつて育てた。女の兒が根性の惡いことなどをすることがあると、『お前は道の姉さんぢやないか。そんなことをするもんぢやない、』と言つては叱つた。時にはその事で和尚さんと上さんとの間に物言ひが始まることさへあつた。『道は母さんに似たと見えて、しつかりしてるよ、中々敵ひやしない。』こんなことを上さんは言つた。

夜は一度づゝ眼を覺ました。それからは和尚さんの床の中に入らなければ承知しなかつた。

夏が來たり秋が來たりした。銀杏の葉はやがて黃くなつて落ちた。裏の林が海のやうに鳴る冬も還つて來た。田舍へ行つた若い父母からは何の頼りもなかつた。

『何うしても本當の子とは違ふね。』

ある時、和尚さんはかうしたことを東京から來た師匠に言つた。道子の二誕生の頃であつた。

『自分はそんな氣は少しもない。本當の子として育てゝ居る積だが、何うも違ふねえ。本當の子なら物など欲しがつても、折檻してまでも遣らないやうにするんだけれど、何うもさういふ氣にまではなれない。寧ろその反對に物惜しみをするやうに人に思はれるやうな氣がして、つい多く遣つて了ふやうになるよ。』

せたことも一度や二度ではなかつた。『あゝあゝあの子が居るんで、田舍へも行く氣にならなくなつた。』かう細君に言ふことなどもあつた。道子を見れば——見違へるやうな汚い田舍子になつて、それも知らずに莞爾して居る無邪氣な道子を見れば、染々可哀相になつて、何うしてそんな考を起したかとは思ふが、それと共に、憎い無責任な二人が、歴々といつも眼の前を掠めて通つた。『無責任な奴だ！　子供をかういふ境遇に放り出して行つて。』かういふかれは、續いて無責任な行爲を二人に行はせるに至つた動機を考へて黯然とした。

『離れて居ると、見るのも厭だといふ氣がするが、莞爾してゐる無邪氣な顏を見ると憎むことは出來ないね、』

かう師匠はある時和尙さんに言つた。

道子は段々大きくなつた。母親に別れる時、辛うじてつかまり立ちが出來る位であつたが、此頃ではもうちよこちよこと二歩三歩足を運ぶことが出來るやうになつた。今歲九つになる寺の女の兒はよく負つて外へ行つた。上さんにももう懷いてゐた。寺の兒と近所の子供と庫裡の玄關の處に遊んでゐる中に交つてちやんと坐つてゐる小さい姿は、いつも四邊にくつきりと際立つて見えた。

『かア』『とア』などゝいふ言葉も覺えて來た。不思議にも本當の子のやうに我儘をいつたり泣いたり喚めいたりしなかつた。物を貰ふと『あんし』と言つてお辭儀をした。

和尙さんは『困つたもんだね、』など丶言つた。けれど籍はもう和尙さんの方に入つて居た。何うすることも出來なかつた。『まさか先から返せとも言へまいが、返せと言つたつて、さういふ風にして行つたんではおいそれと返しても遣られないね……若い者はそれだから困るねえ。そんな眞似をしないでもそれならそれで、圓滿に解決することがいくらでも出來るのに。』かう和尙さんは笑ひながら言つた。勿論、やさしい和尙さんは、それが爲めに、一度自分の子にした道子を可愛がらなくなるなど丶言ふことはなかつた。けれどいくらか氣分が違はない譯には行かなかつた。

寺の上さんは『一緒になつたら返して了ふ方が好いがね。』とも言つた。

道子は其頃はもうかなり寺の親達に懷いて居た。泣いて泣いて終夜寢られなかつたのは二晩位で、その新しい境遇にもやがて道子は馴れて行つた。やさしい人は解ると見えて、和尙さんにはいつも喜んで抱かれたり負はれたりした。

道子はやがて若い母親の手元にゐる時とは丸で見違へるやうな子になつた。もう前のやうな綺麗な可愛い子ではなかつた。鼻洟を出したまゝ汚い顏をしたまゝ、汚れた手足をしたまゝで居ることが多かつた。都會の子の育て方と田舍の子の育て方では其處に夥しい違ひがあつた。

師匠に取つては、道子を見るのが不愉快でもあり辛くもあつた。その爲めに田舍の寺へ行くのを見合

他人には解らないやうな深い複雜した心理が三人の間に働いてゐたのであつた。

若い母親と道子との緣はこれで切れたも同じやうになつて了つた。『先生に賴んで道子を引取つて、』と云ふことは、男と美佐子と一緒になる話の大きな條件になつて居たが、さういふことは言ひ出すことも出來なくなつて了つた。師匠の方でもそんな風にして行つた女にさういふ好意は持てなかつた。男が女の家へ行つてぢかに女を奪つて行つたといふ形が師匠には不愉快であつた。敵　かうした考を互ひに抱いた。

それから三月ほど二人は東京に居て職を求めた。しかし何處にも口はなかつた。やがて二人は相携へて田舍の新聞社へ行つたといふことを師匠は耳にした。男は始めて完全にその女を獲ることが出來たのである。

五

で、何も知らない道子は愈々賴りない位置に置かれた。師匠は美佐子の出踪以來、道子に對して一種憎惡の念を抱くやうになつた。美佐子の子としてではなく、其男の子として憎かつた。さういふ重荷を平氣で置いて行つて、再び戀の歡樂に身に任せた二人の憎いのにつれて、矢張道子も憎かつた。自己の不滿に對する焦燥の念もいくらかそれを手傳つた。

四

これから淋しい藝術の生活に入らうとする間際になつて、不思議にも美佐子の心は別れた男の方に向つて行つた。悔い改めた男は、美佐子が東京の郊外の家に歸ると間もなく、その所在をさがして遣つて來た。子から離れ、藝術に入る淋しさに堪へかねた女には、やさしい甘い男の言葉に昔の戀の復活を認めない譯には行かなかつた。一度男を知つた女の一人住ひの淋しさも堪へ難かつた。男は其時別れた間のさびしい苦悶を記した日記を女に見せなどした。道子の誕生日の條に圈點が施してあつて、その一日の淋しく悲しかつたことが細かに哀れに書いてあつた。それが深く美佐子を動かした。

男と美佐子と師匠と、この三つの心は再び活きて動いた。師匠の不贊成は美佐子と男との戀の復活に火をつけたやうな結果になつて行つた。『そんなことをするなら、一切構はん。もう路傍の人だ。』師匠は激した。

『自分の生んだ子が重荷だからツて、それを他人に育てさせて、また元の男と一緒にならうなんてよく言へたものだ。』こんなことも言つた。

美佐子は男の心に引かれて、ある日、銀杏返の女の留守の間に、戸締りをして、そして出て行つた。

『そんなことはない、そんなことはない筈ですが。』かう銀杏返の女は不思議にした。けれどそこには

の干物だの、十錢も貰ふと食ひ切れないほどある田舍鮓などをよく食つた。朝など和尚さんが行つて見ると、朝日の當る本堂の板敷の一隅に、七輪が置いてあつて、其處に懸けた土鍋からは、白い湯氣がぱつとあがつて、味噌汁の臭ひが四邊に充ち渡つてゐた。室の中では、若い母親が道子に粥を哺つて食はせてゐた。

もう、物を食ひ習ふやうにと、鹽煎餅なども貰つて來て置いた。

寺の上さんは道子を負つたり何かした。乳を離れさせるやうに、やうにと若い母親は骨を折つた。乳を飲まうとすると、目を險しくして叱つて見せた。と、道子は母親の機嫌を取るやうにしては乳に縋つて來た。若い母親は心の中で泣いた。

でも別れる二三日前には、寺の女の兒と一緒になつて、日當の好い庫裡の玄關で、元氣よく遊んで居るやうになつた。それは曇つた侘しい今にも雨が降つて來ようとするやうな日の午前であつた。『それぢや何うぞお世話を――』言ひかけて若い母親は急いで見附けられないやうにして寺から出て來た。道子が上さんに負はれて畠の方へ行つた間に、母親は銀杏返の女と一緒に汽車に乘つて別れて來た。

母親の眼は長い間赤かつた。

人は不思議にした。噂の種にもした。

その三階の一間には晴れた春のやうな日影がさしたり、烈しい吹雪が凄じく吹きかけたりした。二人は寒くなると日に何遍となく梯子を下りて、漲る湯壺の中に肌を浸した。全く世を忘れたやうにして二人は暮した。

其處で道子は最初の誕生日を祝つた。其日は婢に賴んで態々赤い御飯を炊いて貰つた。白酒を買つて來て飲んだりした。銀杏返の女は醉つて道子に髯を生やして見たりして笑ひ興じた。それは雪の降頻る日であつた。若い母親は、道子を抱いて、熱いキッスをして、『お前のお父さんは今日は何うしてるだらうねえ。何處かでお前さんの誕生日を祝つてゐて下さるだらうねえ。』などゝ言つた。

二人は一月以上も其處に居た。

歸りに寄つた田舍の寺では、和尙さんも上さんも喜んで迎へた。一人ぼつちの寺の女の兒も、嬉しさうにして道子を見た。

野には芹、よもぎ、なづ菜などがもう萠え出して居た。山から比べると、別な世界に來たやうに暖かであつた。梅なども咲いて居た。二人は寺の本堂の一間を借りて、其處で自炊をした。寺の人達に道子の眠むまで、かう言つて二人は一日一日と暮して行つた。鹽か辛くつて口の曲るやうな鮭だの、サンマ

に私の故鄕の方へ行つて見ませんか、東京に居て何か考へて居るより山の溫泉にでも行つて見る方が餘程好いと思ふわ。そして二月ほどゐて、歸りにみいちやんを田舍のお寺に置いて來て、それから新しい本當の藝術に入らうぢやありませんか。」かう其女は美佐子に勸めた。

師匠もそれに賛成した。

三

美佐子は道子を貧つて出かけた。寒い〳〵雪の中の田舍町、凍豆腐と蒟蒻の御馳走、かん〳〵と雪の凍つた町の道、家々の軒には氷柱が長く下つて、子供達は竹の輪の下駄を穿いて軒下で氷滑を遣つて居た。それでも二人が其の町に居る間は、晴れた好い日が續いて、四面の山々は雪が眩いほど碧い空にかがやいて居た。銀杏返の女の家には、朴訥な父母と肥つたやさしい姉さんとが居た。故鄕の火燵の周圍の暖かい團欒は、親を離れた美佐子の心を動かさない譯に行かなつた。彼女は三百里を隔てた遠い山の中の父母の夢を每晩のやうに見た。

二三日してから、二人は山の溫泉へ行つた。其處には溪流が濃い鏽鐵色に寒さうに流れて居た。大きい鐵の橋なども架つてゐた。縣廳のある町から人々の遊びに來るやうな處で、山の中には見られないやうな一種の賑かさを持つて居た。其處では三味線の音も聞えれば、女の騷ぐ聲もした。二人は大きい旅館の三階の一間で日を送つた。今日からは藝術の眞生活に入るのだなど〻言つて、揃つて前髪を切つて支那の女のやうな髮の形にしたりなどした。可愛い子を一人つれた此處等には餘り見馴れない二人を人

佐子は人々にその話をして聞かせた。

母親のあたゝかいふところから離されるのが幼い兒にも、わかるらしかつた。それからは片時も母親の傍を離れまいとした。母親の姿が見えないとすぐ泣出した。若い銀杏返の女が手を出しても、決して以前のやうに氣安く抱かれやうとはしなかつた。いつも母親の方へ逃げて行つた。誰の脊にも負はれなかつた。周圍の人達は、若い同士の夢のやうな戀の中から、かうした悲しい母子の別の生れて來るのをさまぐ\の心を以て見た。

正月に師匠の家に音づれて來た多い客の中に、田舍にゐる師匠の細君の兄さんがあつた。それは小作りなやさしい物の言ひ方をする人であつた。道子の母親は前から其人を知つて居た。田舍の大きな寺の住職をして居た。女の兒が一人きりでは淋しいから、吳れるなら貰つて育てゝも好いと言ひ出した。和尙さんが行つて見た時には、道子は日の當る室の中を彼方此方と這つて元氣よく遊んで居た。和尙さんが手を出すと、不思議にも素直に抱かれて行つた。『まア、此子は何うしたんでせう、解るんだわねえ。』若い母親は目を睜るやうにして言つた。何處か悲しいやうな調子も籠つてゐた。

銀杏返の女の故鄕は雪の深い寒い山國であつた。何かにつけて美佐子がくよくよしてゐるので、『一緒

なかつた。師匠は又師匠で二人の間の鎹であつた子が再び二人を一緒にする楔緒となりはしないかといふ事を窃かに恐れた。

若い母親に取つては、子に別れる悲哀もあるが、また一方では、自由な身輕な何處へでも勝手に出て行かれるやうな處女時代の生活に返れることを望んでも居た。

やがて里子に遣られる運命になつて行く道子を、人々は可哀相に思つた。『何ァに近い所に遣つて置けばいつでも逢はれますからね……心配はありませんよ。』などゝ師匠の細君は慰めた。若い母親も後には自分から進んで里子の口を捜すやうになつた。好い貰手があるなら遣つても好いなどゝ言つた。

田舍へ行く汽車の中で、近く子を亡くした母親と一緒に乘合せて、あの人ならばと不意に遣る氣になつて、その住んで居る東京の場末の町をさがして、それが石油を鬻ぐ家であつたので、もしや火事でも出すやうなことがありはしまいかと思つて、急にやることを止したり、見も知らない髯の生えた請負師のやうな男に手輕く遣る約束をして、歸つてから師匠に叱られて泣いたりした。一度はもと身を躱して居た海岸の家の上さんが世話をしてやつても好いといふので、わざ〳〵其處まで行つて置いて來たが、何うしても泣いて〳〵なつかないので、その翌日上さんはわざ〳〵伴れてかへしに來た。若い母親は銀杏返の女と一緒にそれを郊外の停車場まで迎へに行つた。

『私を見ると、ちやんと覺えてゐて、にこ〳〵笑つてるんですよ。』と道子に乳房を含ませながら、美

との出來ないやうな親しい間柄になつた。『一緒に勉强しませうね、ね、』など丶感激したやうに若い母親は言つた。もう一度、師匠の監督の下に昔の藝術の生活に入らうとして彼女は居た。

師匠は飛んで行つた小鳥が歸つて來たやうな喜悅を以て彼女を迎へた。新しい生活、其處に彼女を導いて行かうとした。眞の藝術の生活に入るには、一度さうした現實から出て來たもの丶方が好いなど丶も思つた。

銀杏返に結つた女と美佐子とは師匠の家が狹いので、別に一軒家を借りることにした。年の暮の二三日前に、其人達は其處へ引越して行つた。落葉の音がしたり松の音が聞えたりするやうな家であつた。道子は若い人達の間に元氣の好い日を送つて居た。もうそろ〳〵いざり這ひが出來る頃であつた。『みいちやん、みいちやん』と銀杏返しに結つた女は道子を可愛がつた。野から停車場に出る長い路を、二人はいつも都の方へと出て行つた。若い母親の脊には道子が常に負はれて居た。

茶湯臺の上に犬張子が置いてあつた。それを長い間、道子は取らうとしてゐた。えん、えん、と聲を擧げていつも這つて行つた。ある日思ひもかけず茶湯臺につかまつて立たうとして居るのを見た銀杏返しの女は『まア、みいちやんが――御覽なさいよ、もうぢき立つわねえ。』かう若い母親に言つた。

若い母親は男に別れて、また子に別れなければならないやうな運命と相對して居た。一人で世に立たうとする彼女には、道子は如何ともすることの出來ない重荷であつた。それに子があつては勉强も出來

この母親の出京が道子の母親と父親との間を一層惡くしたのは止むを得ないことであつた。それに、暫くしてから、父親の勤めてゐる新聞社に幹部の動搖があつて、退社しなければならないやうな羽目になつたといふことも、この家庭をして終結に近づかしめる一原因であつたに相違なかつた。酒、質屋、生活難、惡友、無責任、——かうした言葉が、若い母親から師匠に遣つた手紙の中に澤山書いてあつた。

押詰つた年の暮のある晩、道子は母に負はれて家を出た。其時戸外には風が寒く吹いて居た。磨いたやうな月が林の上に明るく出てゐた。ねんねこに負はれた道子の影は黑く地上に映つて居た。

それから道子は今までとは違つた人達に抱かれたりあやされたりした。それは明るい電燈の點いた室で、其處には頰髯の濃い四十恰好の人だの、束髪にした三十位の細君だの、若い銀杏返しに結つた女などが居た。子供の多い家だつた。その子供達は道子のえんこをして驚いたやうな大きな眼を睜つてゐるのを珍らしさうにして見た。

『ヤア、笑つてるア。』などゝ言つた。道子はえん、えん、えんなどゝ言つて、躍上つて高笑をした。

道子の父親は家庭を破壞しやうとは思はなかつた。師匠と美佐子と美佐子の田舍の父！　との關係から、何うしても破壞しなければならないやうな具合になつて行つた。かれは妻子を捨てゝ、儚い一場の夢であつた戀を捨てゝ、自由な生活へと向つて行つた。

若い銀杏返しに結つた女は、よく道子を抱いたりして奥れた。若い母親と其女とは、間もなく離れるこ

した女の機嫌を取るやうな氣分ばかりでは居られなかつた。衝突は常に起つた。

其頃では、机の上の原稿紙は積まれたまゝになつて居た。

若い母親も蒼い顔をして居た。イラ／＼して暮すやうな日が續いた。神經の昂奮は釣り上つた眼にも見えてゐた。癇の高い若い女の聲は子の泣聲に交つて聞えた。

『美佐子さんは感情家だから困るんですよ。好いとなれば無闇に好くなるし、惡いとなれば無闇に惡くなるから困るんですよ。今日など聞いて居ると丸で氣が變になつたかと思ふ位でしたよ。いくら私が止めても、喰つてかゝつて行くんですからねえ。あれぢや親雄さんだつてたまらない。』師匠の細君は、夏の頃、其處に訪ねて行つて、歸つて來てからかう夫に話した。

『女だつて、あゝいふ生活狀態では立つ瀬がないんだらう。』其時は師匠は美佐子に同情したやうな口の利き方をした。

さういふ生活の中でも、道子は日増に可愛ゆくなつて行つた。壞れた犬張子の置いてあるのをぢつと見詰めたり何かしてゐた。可哀相で仕方がない――あの子を見ると。』かう師匠の細君は言つた。

月日は經つて行つた。

田舍の母親が上京した。美佐子は道子の父親に隱れてこつそり逢ひに行つたりした。田舍の豪家で何不足なく育つた娘は、亂れた髮をして、指環もない指をして、肥つた血色の好い母親と相對して泣いた。

もします。貴郎が無責任で投つて置くなら、私は先生に相談して何うにでもしますから、本當に確乎とした考へを聞かせて下さい。』かう手詰の談判らしい物の言ひ方もした。

道子の父親の方には、女の言葉に對する有利な有力なものは少しもなかつた。自分の家らしい家もなかつた。親らしい親もなかつた。さうかと言つて名譽もなければ、財產もない。男の犧牲に女がなつて居るとは誰も皆な言つた。それに、『先生、先生』と言はれるのが辛かつた。師匠は師弟以上に美佐子を愛して居た。美佐子が道子の父親と戀に落ちなかつたならば、師匠は世間の道德などは顧みずに妻子のあるのをも問はずに美佐子と烈しく戀したかも知れないやうな關係になつてゐた。今度の事件などでも美佐子の成行が知りたいばかりに、師匠は美佐子の父母との仲に立つて、美佐子を養女の籍にまで入れて、圓滿な解決を見ようとしたのであつた。從つて道子の父親の師匠に對する感情は、單なる感謝でもなければ、單なる競爭でもなかつた。それは複雜した如何ともすることの出來ないやうなものであつた。かれと師匠とは打解けて話し合つても、心から打解けることの出來ないやうな處があつた。それを若い母親は何ぞと謂ふと持出して、『先生に聞いて御覽なさい』とか、『先生に行つて話して來る』とか、いつも口癖のやうにして言つた。時には、『藝術家つて、そんな無責任な、妻子を飢ゑさせて、自分ばかり醉つて步くやうなそんな不眞面目な眞似をして好いんですか。先生に行つて聞いて御覽なさい』などと言つた。で、道子の父親はさうした間に起る空氣に悶えながら、益々鬱を酒に遣るやうになつた。愛

つた男の情、それは實際虚僞であつたらうか。

一年間！　其間には隨分種々のことがあつた。懷姙と知れて、それを彼に打明けようか打明けまいかとしての苦悶、この羞かしい醜い形を世間に見せまいとして、一度は自分一人でひそかに死に赴かうと思ひ惑つた苦悶、その頃、男は打つて變つた女のさまに絶望して、蒼い顏をして、女の衣の踞にすがつて泣いてその心を復活させやうと悶えて居た。彼女は少くともそのことに就いて半月は惑つて居たことを思ひ出した。男にそれと打明けて話さうと決心したのは、忘れもしない、綠の影のチラチラした、ある公園のベンチの上で、其の時決心を捉したのは、男のなさけといふよりも、寧ろ腹の中の子に對する一種意識しない愛情であつたといふことが今で解つた。その時から二人の狀態は變つて行つたのであつた。

三

道子がえんこをするやうになる頃には、道子の父親はよく家を明けた。赤い顏をして醉つて歸ることもあつた。母親の癇高い聲が夜遲く近所の人達を驚かした。

こんな生活なら――この無意味な光明のない生活なら、師匠の許に居た頃の以前の藝術的生活の方が好い。『そんなら私は先生の許に行きますから。』こんなことを若い母親は常に言つた。『この子は何うにて

しないのを誇りとして居る青年もあつた。妻子を犬猫のやうに捨てゝ顧みない人などもあつた。

『何うももう少し大きくならなければ、玩弄具にもならない。』ある髯の生えた青年はかう言つて抱いて見た道子を母親に歸した。

道子はかうした父母と周圍との中で、よく聲を立てゝ泣いた。何方かと言へば、弱々しい方で、聲もさう大して高い方ではないが、時にはそれが引切れさうにして泣いた。

『泣くのは幼兒の運動の爲めださうだ。泣くだけ泣かせて置くと終には默つて了ふから不思議だ。』かう若い父親は言つた。

母親も時には自分の體が堪らないといふやうに道子を其處に投つて置いた。雜誌や新聞に書いてある育兒法や哺乳法などは何の役にも立たなかつた。片時も乳房から離れまいとする羈絆が殊に母親には辛かつた。

母親は自分の遣つて來た過去ををり〳〵振返つて見るやうな心持になつて居た。一年間！　その甘い蜜のやうな夜の歡樂とかうした今の灰色の佗しい苦痛との間には、僅かに一年に足らない月日が經つたばかりであるが、其短かい間に、何うしてかういふ氣分になつたか、何うしてかういふ生活の狀態になつて行つたか。甘い〳〵、女の肉體も溶けて行つて了ひさうな男の言葉、熱い〳〵、女の心も全くそれに引かれて了ひさうな男の胸、それを女は繰返して考へない譯には行かなかつた。氷のやうに溶けて行

室からも見えた。

襁褓だの、よだれ懸けだの、小さい襦袢だのが縁側に山のやうに積まれてあつた。それを洗ふのも若い母親には一方ならぬ勞力であつた。手の荒れるのを氣にして、勝手元の棚のリスリンを彼女は幾度となくつけた。

毎日一度づゝ道子は午睡をした。其間に裁縫もすれば手紙も書いた。時には努力といふやうなことを考へて、久しく向つたことのない十行二十字詰の原稿紙を出して、小品を書き出して見たりした。道子が目を覺して泣き出す時は、かの女も泣きたかつた。「もう眼を覺したのかねえ。」かう言つて彼女は道子を抱いた。

若い友達は矢張そこにも遣つて來た。ロシアの若い人達の話をするやうな夥伴で、一面滿し難い生存慾から起る不平不滿を持つて居るやうな群であつた。學校から始めて社會に出た人達には、物が總て新らしく鮮かに見えた。かれ等はよく激した。何うせ社會の醜惡に觸れなければならないものなら、其の底の滓までも嘗めやうとした。かれ等は酒を飮んで烈しい議論をした。

道子はさういふ若い人達の手によく抱かれた。「子供つて言ふものは無邪氣なやうなもので、實は何でもないんだ。笑つたり何かするのは動物本來の一種の保護色だね。」など、言ふ人もあれば、「子供なんて一塊肉のやうな氣味のわるいものだ。」と言つて顏を背けてしまふやうな人もあつた。子供どころか、戀を

若い母親は滅多に道子を負つて外に出るやうなことはなかつた。綺麗な着物を着せて、ハイカラな頭巾を冠せて、兩手で抱いて通りを歩いた。

『よく重くありませんね。』

人達はそれを見て言つた。

二人は伴れ立つて師匠の家に出かけて行くことなどもあつた。其家は郊外にあつた。高い處の電車の停留場から其處まで七八町はあつた。其時でも矢張道子は抱いて伴れて來た。擦れ違ふ人々は、若い綺麗な母親に並んで、年齢のいくらも違はない若い父親が、可愛い女の兒を抱いて歩いて行くのを振返つて見て行つた。

ある日、電車の中で逢つた菫色の袴を穿いた二十一二の娘は、『まア好いお子さんね……何と仰しやるの？　道子さん。好い名ね。』かう言つて頬を指で觸つて見たりした。若い母親は顏を赤くしてゐた。

二

道子は段々笑ふやうになつた。母親の顏を見覺えて高笑ひをした。其頃は家はその山手から電車に近い處に引越して居た。坂の下のやうなところで、近所には銀行に通ふ若いハイカラな人だの、大店に通ふ番頭さんなどが住んでゐた。坂の中ほどにあるあふちの樹の繁つた影が、道子の母親に抱かれてゐる

が無理だとは思はない。貧しい生活も氣の毒だ。自分の爲めに犧牲になつた女の一生も思はないではない。努力して出來ることなら、何んな努力でもして、一躍して立派な社會上の位置をも占めたい。自分の周圍の人々――女の父母、女の師匠の高慢な顏、さういふ人々を見返してやりたい。イヤ、いつかは必ず見返してやる。けれども、一日忙しい辛い埃だらけの新聞社の二階で、月二三十圓の月給で遲鈍して、歸つて來て、また女の愚痴を聞かされては、男の身にしても立つ瀨がなかつた。つい激した聲も出た。道子の生れたのを境にして、若い父親と若い母親とは、樂しい戀の歡樂の夢から次第に人間の辛い現實へと向つて行つた。

近所では時々二人の物爭ひの聲を聞いて吃驚した。

『あんな夫婦でも喧嘩することがあるのかねえ。』

かう言つて笑つた。

ある時、二人のロマンチックな物語を知つてゐる人が通ると、若い母親の聲で、

『私の子ですから、私の勝手にします。生かさうと殺さうと私の勝手です。』

といふのが聞えた。道子のけたゝましく泣く聲もした。續いて癇高い尖つた泣聲が四邊に際立つて聞えた。

過ぎ去つた歡樂は再び來なかつた。心と心とがぴつたり觸れて、互ひに顏を見合せて手を握つた時のやうな心持はもう來なかつた。夜は若い父親との間に道子が寢てゐた。

『こんな境遇に誰が私をしたんです？』

兎角さうした愚痴が若い母親の口から出た。

田舍の親達からは勘當され、一生の事業と思つた藝術からは離れ、學問上の努力からも見離され、かうした貧しい苦しい辛い生活を送るやうになつたのは誰の爲めか？　良家のお孃さんといふ位置をも失ひ、これまで遣つたこともない水仕事なども覺えなければならないやうになつたのは誰の爲めか？

それを彼女は決して愚痴つぽく言ふのではなかつた。また決してそれを男にばかり責める譯でもなかつた。けれど、少しは察して貰はなければ彼女の立つ瀨もなかつた。常にさういふ腹が若い母親にあるので、何ぞと謂つては、男の腑甲斐ないのが問題の種となつた。

『貴方に眞面目に努力して頂かなければ、私は何うするんです？』

こんなことも言つた。

『貴郎は私の分も一緒に働いて下さい。さうでなければ、私はかうしてゐられないんです。それが解らない貴郎でもありますまい。』

平生感情の強いヒステリックな女だけに、何ぞと云つてはすぐ激した。若い父親の身にしては、それ

は母さん似ね。眼などそつくりね。』かう言つてぱつちり明いた眼のところに指などを遣つて見た。

近所のものに限らず、此處に遣つて來る人達は、若い者同士の生活のいかに單純で無造作であるかを見ないものはなかつた。簞笥もなければ長火鉢もない。竈もなければ鐵瓶もない。土鍋で飯を焚いて、土瓶で湯を沸かしてゐる。飯のない時には、角のパン屋で食パンを買つて來て、小さな茶湯臺の上に新聞紙を敷いて、それでボソ〳〵やつて、朝飯や午飯などをすまして了ふかと思ふと、かういふ生活には見ることも出來ないやうな綺麗な派手な着物を着て、金の指環などをはめて、若い母親は出かけて行つた。

『新式の手鍋黨だね。』

誰かゞこんなことを言つて笑つた。

何うかすると、道子は泣いたまゝ其處に投り出されてゐることなどもあつた。『たんとお泣き。』かう言つて若い母親はわざと知らぬ顏をしてゐた。『もう知らない！　何うでも勝手におし！　お前の爲めには母さんが何んなに苦勞したか知れやしない。たんとお泣き！』道子は手と足とを高く揚げてひい〳〵泣いた。

かと思ふと、堪らなくなつたやうに、放つて置いた道子を抱き上げて、抱緊めて、『誰れが――お前の母さんがかえ？　馬鹿な母さん、こんな可哀相な眼に逢はせるやうな母さん、本當に馬鹿な母さんだねえ。』若い母親の眼からは、熱い熱い涙が滴れてゐた。

に入つた人に言つた。師匠は田舍の父母の中に入つてまでも、さうした不自然な生活からかの女を救ひ上げやうとして居た。彼女は都會の通りに注連飾の松や竹が立つて、青竹の籠に鴨や雁が並べられてあるやうな忙しい時に、其處から山の手に來て、男と一緒に新しい生活を始めることゝなつた。

其處で道子は生れた。

道子といふ名は、父親の親雄といふ名と母親の美佐子といふ名との頭字の假名を取つてつけたのであつた。戀の記念、熱い心と熱い心との間に出來た親達の記念、其時來て居た若い友達は、『道子、道子、それは好い、好い名だ――。』などゝ言つた。

『かういふ記念物がすぐ出來るから厄介だ。』

ある友達はこんなことを言つた。

『貴樣はぢき夢中になるから、かういふことになるんだ。其處へ行くと、僕など上手だからな、そんなけちな罠になど入らんサ。』などゝいふ友達もあつた。

幼い兒は若い母親にはいかにも重荷のやうに見えた。泣く時には何うして好いか解らない。何か着物に針でも殘つてゐるのではないかなどゝ心配した。『この子は親に似たと見えて、感情家だわねえ。』かうも言つた。産褥から母が離れる頃には道子はもうかなり大きくなつてゐた。何か物が見えるといふやうに、眼をぱつちり明いて、瞬きもしないで一ところを見てゐる。師匠の細君は度々訪ねて來て、『この兒

彼女は人目に立つ腹を抱へて、莞爾といつも笑つて男を迎へた。

遠い遠い海の音が絶えず聞えた。

それは堪へ難い哀愁を常に彼女の胸に齎らして來た。ドウ、ドウ、ドウ――夜が更けると、殊にそれが分明と聞えた。彼女はもう寒くなり始めた夜を蒲團の上に坐つて、その遠い、單調な、しかし悠遠な音に耳を傾けながら、腹の子の氣味わるく動くのをぢつと見て居た。

涙が留度もなくその蒼いヒステリックな顏を傳つて落ちた。

天氣の加減で海の音は低く聞えたり高く聞えたりした。

『今日は波の音が高いわね。』かう彼女は家の上さんに言ふ日もあつた。

『あの音を聞くと、私悲しくなるわ。』

かう男に言つたこともある。

『いつそ、海に行つて死なうかしら。腹の兒は可哀相だけど……どうせこんなにして生れる位なら生れない方が幸福よ。』彼女は蒼い顏をして、その遠い波の音に引寄せられるやうに言つた。

その遠い遠い海の音から別れて、彼女は東京に來ることが出來るやうになつた。此方から捨てた師匠は、まだ彼女を捨てゝは居なかつた。『もう、汽車に乗つては險呑かねえ。成るべく東京で生ませる方が好いがね。田舍ではもしものことがあつた時困る。醫師もなし、十分な手當も出來ない。』かう師匠は中

と相對したやうな氣がした。不安、苦勞、羞恥　其處にはもう今までのやうな戀の歡樂はなかつた。

それはさびしい一間であつた。其處で彼女は始めて自分の通つて來た生活を振返つた。何一つ不足のない田舍の財產家の娘としての生活、無邪氣な樂しい何の苦勞もない學校での生活、それから東京に出て來てからの生活、それが忽ちにして嵐のやうな烈しい辛い波立つた巴渦の中に捲込まれて、自分で自分が自由にならないやうな境を通つて來た。繪葉書に書いた百合の花が見えたり、父母のやさしい顏が見えたり、師と賴んだ人の嚴かな顏がこんがらかつたさま〴〵な幻影の中を通つて行つたりした。道子を懷姙してからの彼女は、男の言ふまゝになるより他に爲方がなかつた。彼女は止むを得ず男に伴れられて身を匿した。父母から、世話になつた師匠から、今までの生活から、むしろ彼女の周圍の總てから…………。

其一間からは貝殼の日に輝く家根だの、網を繕つて居る漁師の顏だの、汚い黑い溝などが見えた。松原の中には月見草が咲いて居て、其處の道を傳つて行くと、蘆の疎らに生えた濁つた川に土橋などが架つて居た。男は三里ほど隔つた田舍の停車場で下りて、其處から車で遣つて來た。彼女が其處に身を隱してから四度位は來た。來るといふ報知のあつた時には、彼女は屹度半里位は迎へに出て來た。車にかけた赤い毛布が松原の中の路の遠くから見えた。

幼きもの

一

道子は山の手の細い通りの小さな家で生れた。それは三間位しかないといふやうな家で、奥の暗い三疊の産褥には、若い母親が亂れた庇髮を枕に當てゝ、靜かに心地よげに寢て居た。

父親もまだ若かつた。袴など穿いて、辛うじてさがし當てた新聞社へと出かけて行つた。夜遲く歸つて來ることもあつた。『美佐さん、美佐さん、』かう常にやさしい聲を懸けるのが近所にも聞えた。

道子は髮の濃い大きな子であつた。張つた吸ひつけない乳房をもどかしがつて、よく聲を立てゝは泣いた。『何うしたのよ、ほら、此處がお乳ぢやないか。』若い母親はいつもじれつたさうにして言つた。

海岸のさびしい一間――其處で生れなければならない運命を道子は持つて居た。道子が腹にある間、母親は遠い海の音を聞いたり、夕日に輝く波の閃きを見たり、松の生えた磯田道をさびしさうに歩いたりした。母親は人に見られるのを憚かるやうな體であつた。道子が腹に出來てから、母親は始めて世間

…』

『いや——』

手拭で手を拭いて、

『それでも丈夫で結構だね。』

『お蔭様で……』から微かに言つて、『貴方もお變りはないんでせう。』

『ウム。』

二人はこれきり何も言はなかつた。

小常は玄關まで送つて來た。其處に榮龍も他の客を送つて出て來た。

『左樣なら、御機嫌よう。』

後からかけられる聲を聞流しながら、蹌踉としてかれは戸外に出た。夜は暗かつた。

ポツと音がして、マグネシウムが明るく燃えた。

もう歸らうと思つてかれは一座を見渡した。小常は其處に居なかつた。將軍も軍醫總監ももう先程歸つて了つた。一人去り、二人去り、席は既に全く白けた。殘つて居るものは、處々に環をつくつて、藝妓を擁して、頻りに三味線を彈かせたり、博多節を歌つたりして居た。かれも夥しく醉つて居た。蹌踉として、中庭に添つた廊下を通つて、玄關に出た。女中の出して呉れたインバネスを被つて、山高の帽子を冠つて、下駄迄出して揃へて貰つたが、ふと小用が足したくなつたので、そのまゝ急いで、明るい廊下を厠へと向つて行つた。

ふと氣がつくと、其處に小常が居る。懷鏡を出して、廊下の電燈の明るいところに立つて、頻りに顏のつくりを直して居た。かうなつては流石に挨拶しない譯には行かなかつた。かれの急いで此方に來るのを見ると、慌てゝ鏡を帶の間に藏つて、笑みを眼元に湛へて迎へた。

『久し振だつたね。』

男はかう聲をかけてそのまゝ摩違つて厠に入つた。

小用を足して出て來た時には、小常は手水鉢の處に來て立つて居た。『今日は大變に失禮をしました……

『おい、小常、此處へ入れ！』

かう言つて、體を半ば浮かせて、小常の手を取つた。小常はちらりとかれの方を見たが、其儘、かれと中佐との間の空いた席に引込まれるやうにして入つて來て、かれの方に横顔と後ろを見せて坐つた。

『おい、こら、何うした、小常？』

中佐は醉つた體を女の膝に凭らせて、白い女の手を握つた。女はわざと深い間柄であるやうな樣子を見せて、其處にあつた敷島を一本取つて、前の火鉢で火をつけたが、それを細い指に挾んで、スパ〳〵音をさせて吸つた。

かれは女の心と自己の心とのピツタリ相觸れて居るのを感ぜずには居られなかつた。淺ましいやうな腹立たしいやうな淋しいやうな女を憐むやうな感じが簇々と胸を衝いて湧き上つて來た。一人離れて坐つて居るに堪へられなくなつた。

『ざまを見ろ、苦しんで居やあがる。』

かう心の中に叫んで立上つたかれは、男性の勝利といふやうなものを強く感じた。一種の微笑が思はず口の邊に漂つた。

『それでは撮りますから。』

寫眞師はかう注意した。

方で語り合ふ聲が一種の高低のある雜音をなして耳に入つて來た。三味線を持つて群の中に入つて行く老妓も見えた。

幹事が高い聲で觸れ廻つた。見ると、向うの屛風の前には寫眞師が機械を組んで居て、今一人の男はマグネシウムを點火する準備をして居た。

『諸君、これから寫眞を撮ります。』

人々は皆な立上つた。

軍服姿の幹事が將軍をつれて來て、それを中央の位置に就かせると、フロックコオトの今一人の幹事は、先程寄せ書きをした絹地を持つて來て其處に据ゑた。人々はやがて其の附近に寄り集つて來た。坐るものもあれば、立つて居るものもある。寫眞班で從軍して、毎年今夜の寫眞を寄附する例になつて居る寫眞師は、フロック姿の小づくりの體をちよこ〳〵させて、寫眞機械の處に行つて、ピントを見たり此方に來て人々の位置を直したりした。藝者達もところ〴〵にそのあでやかな姿を見せた。

かれはまだ立たずに居た。醉つて、何となく胸が苦しかつた。一つ席を隔てた處には今まで居た人とは違つた見知らない中佐が、かなり醉つて割込んで來て居た。其の隣も矢張中佐の軍服を着けて居た。

何處から來たか、今まで姿を見せなかつた小常が其處に立つて居る。

と、中佐はいきなり、

暫くしてから、

『本當に暫くお目にかゝりませんでしたわ。何時お目にかゝつたきりでせう。』

『さうさな。』かれは考へて、『あの時きりだよ。』

『さうでしたねえ。』

隣の大佐の前に腰を据ゑた大佐は、此時不意にかれの方に身を向けて、『倉田君、何うだ。君は此土地をよく知つてるつて言ふぢやないか。』

『いや――』

かう言つて、かれは笑つて、『それよりも此處は貴郎方の縄張ちやありませんか。』

『縄張。』大きく笑つて、『別品が居るだらう、君。今日はこれで中々好いのが來てるんだよ。此處でも指に折られる奴が來て居るんだ。』

『二三日前から幹事が此處に申込んで置いたさうですから、それで彼方此方から狩り催して來たのでせう。』其處に來てゐた大尉がかう言つて此方を見た。

『本當に狩り催して來たと見える。今日は中々別品が揃うてをる。』

かれの左隣の中佐もかう言つて大きく笑つた。

人々は席を離れて、彼方に行つたり此方に行つたりした。酒氣と烟草の烟とが一間に充ちて、彼方此

『怖い？　あはゝ。』

と大佐は笑つた。

『さつき、貴様のやつたのは何だ。』

『踊？　一緒に踊つた人？』

『人は知つてる。一緒に踊つたのは實子ぢやないか。踊よ。』

『松の緑。』

榮龍はかう言つて笑みを口の邊に湛へた。

此時、大佐の前に同僚の大佐がやつて來て、ドカリと腰を据ゑたので、大佐は盃をそれにさした。榮龍がしようとするのを向うに居た老妓が引取つて酌をした。

榮龍は前にある盃を取つて、今一度唇を當てたが、其儘酒を盃洗の中にあけて、『何うも……難有う。』かう言つて、盃をかれに返した。

『暫く逢はなかつたね。』

『本當ねえ……』かう言つたが、『姐さん、呼んで來ませう。』

『好いよ、好いよ、呼んで來ない方が好いよ、可哀相だから。』

榮龍は再び默つた。

『何うだ、君、一つ飲め。』

『難有う。』

かう言つて、盃を取つて、男の酒を波々とつぐのを待つて、

『あら、まア、大變よ、』と言つて、一口脣を當てゝ飲んで、それを自分の前に置くと、すぐハンケチを出して、少し滴れた酒を拭いた。

『大きくなつたね。君、何時一本になつたんだ。』

『今年の夏。』

『一本になつた方が好いだらう？』

『何うですか。』と笑つて居る。

『一本になると、調子が丸で違つて來る。變るもんだねえ。……何處かかう姐さん振つたところが出て來るから可笑しい。』

『さう……』かう言つて笑つて、『私はまた子供だつて思はれるかと思つて、そればつかり苦勞よ。』

『榮龍、おい何うした。』

隣の大佐が紅い顏をして聲をかけた。

榮龍は笑つて、『木村さん、また飲んで追つかけては厭よ。私は、木村さん、醉拂ふと、怖くつて。』

居るので、二人の關係をもよく知つて居た。

笑ひを見せて、冷たくなつた盃を　ゝと、妓も矢張意味ある笑ひを目の邊に湛へながら、德利を取つて酌をした。

默つて互に顏を見合せてゐた。

其眼は絕えず物を語つた。

何事をか訊ねるといふ風が、歷々とその眼に見えた。

ふと、首を傾けて見せた。

『小常姐さん來てゝよ。』その態度はかう言つた。

かれは笑つて點頭いて見せた。

再び首を傾けて何か訊かうとするやうな樣子を妓はして見せた。

呼んで來ようかといふのであつた。

かれは首を振つて見せた。

でも承知しないので、『好いよ、好いよ、』と男は輕く言つた。

妓は顏を曇らせた。

默つて男が出す盃に、妓は默つて酌をした。男はそれを呷るやうに飮んで、それを前の盃洗で洗つて、

戻ると、喝采の聲が湧くがごとくに起つた。

若い藝者の踊も濟んで、幹事が框に張つた絹地と硯箱とを持出して、人々の筆蹟を求めて歩く頃には、もう人々の顏には大分醉が廻つて居た。將軍の前には、誰も彼も盃を持つて行つた。將軍は一々それを受けて返した。軍醫總監の前にはサイダアの罎と番茶を入れた德利とが並んで居た。

フロックコオトを着た有名な畫家は、幹事から押附けられた絹地に、大きく勢よく日本刀を描いた。見て居る中に、鍔が出來、鐺が出來、下緒が出來た。『これは好い、これは面白い、』などと彼方此方から聲がかゝつた。將軍から軍醫總監、師團長、旅團長、俳句を書くものもあれば、歌を書くものもある。唯簡單に署名だけして置くものもある。『僕の惡筆などを振つたつて仕方がない。』こんなことを言つて、わざと大きな書判を書いた佐官もあつた。

段々廻つて來て、やがてかれの順番になつた。かれはその一隅に金州南山で詠んだ歌を小さく書いて、そして筆を下に置くと、隣の中佐は、『やア、僕の番か。』かう言つて大きな絹地を受取つた。

ふと見ると、其處に一本になつたばかりの若い綺麗な妓が坐つてゐた。

其妓をかれはよく知つて居た。

其頃はまだ半玉であつた。綺麗な着物をつけて、ませた姿をして、よく踊を踊つた。其女と同じ家に

たといふ風であつたが、刷紙を持つて居ながら、今更そこから引かへして行くことも出來ないので、知らぬ顔で、一人々々配つて來て、たうとうかれの前にやつて來て、同じやうにして刷紙を出した。かれは隣の中佐から話しかけられた話の返答をしてゐたが、わざと顔を少し横にして、女から其横顔を見られるやうにして、平氣な態度をして、その軍歌の刷紙を受取つた。其時、女の手の顫へるのを男は感じた。

女は矢張横顔を男に見せて居た。

幹事が再び立つた。

『諸君、これから前例によりまして、戰地に於ける昨夜と今日との軍の狀況報告を朗讀いたします。三十八年の今日は、軍は沙河を隔てゝ敵と相對して居りまして、當司令部は十里河に宿營して居りました。十二月四日夜狀況、敵の一小部隊は林盛堡の東南約二百メートルの處に顯はれ、わが第六師團の一部を攻擊せり。わが軍は直ちにこれに應じ、三十分にして全くこれを擊退せり。鐵道線路附近には敵に異狀なし。前面にも異狀なし。……十二月五日、卽ち今日の狀況、午前十時、新民屯にある敵の騎兵は漸時前進し來り、遼河を渉りてわが左翼方面に出でんとする狀況あり。わが秋山支隊は其一部隊を前進せしめて、これに對する運動を開始せり。前面には異狀なし。』

簡單な狀況報告は、却つて人々をして深く當時を思起させたやうに見えた。將軍を始め、其の隣に居る軍醫總監も其の報告を絕えず笑ひを含みながら面白さうにして聞いて居た。幹事が報告を終つて席に

門と共に國旗を敵壘の上に樹てた時の光景は、再び眼の前に現はれるやうに思はれた。

琵琶が濟むと、人々は拍手喝采した。

『思ひ出しますな。』

『あの時のやうに、はつきりと全局の見えた戰爭は其後何處にもなかつたですな。』

『本當にあの戰爭は、棧敷から芝居でも見て居るやうだつた。』

こんな言葉が彼方此方に聞えた。

かれの右隣に坐つて居る大佐は、其時の參謀で、軍の公報を起草した人であるが、かれに向つて、『それでも感心に事實だけは間違つて居ませんな。』から言つて笑ひかけた。と、向うに居る矢張同じ佐官が、『公報を書くので騷ぎだつたナ、あの時は。』かう言つて此方を見て、『歌では、夕日が金州灣に沈みかけて居ると言つて居るが、もうあの時は夕日などありやせん。もう暗くなつて月が出て居た。大房身の敵の火藥庫の爆發した時はもうすつかり夜だつたからな。』

かう言つて笑つた。

此時藝者や半玉が幹事から吩咐けられて、畫家の寄贈した繪葉書やら、軍歌を刷つた紙やらを人々の前に配り始めた。ふと氣がつくと、其の女は軍歌の紙を一枚々々此方側に配つて、かれの居る三人目の處までやつて來て居た。かれは知らぬ顏をして、何うするかと思つて見て居た。女は流石に少し躊躇し

幹事が來て、前の長押に、『金州南山――橘治子』と書いた長い紙を貼つて行つた。

やがて琵琶が始つた。

琵琶を彈く女は、女學生上りと言つたやうな風で、くすんだ栗梅の羽織を着て、海老茶の袴を穿いてゐた。初めに女中が碁盤を持つて來て、それを室の中央に置くと、女はやがて靜かに入つて來て、琵琶を抱へたまゝ、碁盤の上に置いた歌を書いた本の頁をくりかへした。藝妓達はかうした席にかうして藝を賣りに來る女を憐むやうな眼色をして、彼方此方から眼を注いだ。『金州南山とは面白いな、』などと言合ふ聲も處々に聞えた。敵の堅壘を一日に攻略した將軍は、別に當年を偲ぶといふ風でもなく、眼を疊に落してぢつとしてゐた。

さう大して上手でない琵琶の歌も、人々をして、當時を思ひ起させるには十分であつた。前夜の暴風雨、曉の深い霧、四面に轟き渡る敵味方の砲彈、此處に居る人達は其時狹い谷から丘陵の上へと登つて行つて、一時間後には、朝霧と共に晴れ渡る砲煙の中に蜃氣樓のやうに浮み上る南山の敵壘を見た人達であつた。肖金山に司令部を移した頃には、金州城内に處々に火が起つて、敵の退却を追擊する味方の步兵隊の前進するのが蟻のやうに小さく見えた。イタリアンブリウとも言ふやうな濃い晴れた海の色の中には、わが海軍の援護軍艦が一隻、二隻、三隻まで居て、それが玩具の軍艦のやうに、をり／＼白い砲烟を波の上に漲らせるのがパノラマのやうに見えた。午後からの味方の苦戰、それをも押通して、落

歡樂の夢は今でもをり〳〵繰返された。二階の廊下に籐の安樂椅子が置いてあつて、すぐ其前に梧桐がガサ〳〵と動いてゐた。山王の森には大きな月が昇つて、その涼しい明るい光が軒燈の多い片側町に流るゝやうにさしてゐた。狭い通りをぞろ〳〵と人が通る。夜目にもそれと知られる白粉をつけた女が艶かしい姿をして通つて行く。すぐ下の氷水の店には瓦斯が晝のやうに光つて、亭主がせつせと氷をかいてゐる。筋向うの高い二階屋の黒い影が屋根の上に落ちて、灯の明るい簾の中から三味線の音が洩れて來る。其時男は湯上りの浴衣姿で、籐椅子に長く身を横へてゐた。其處には暗い四疊半の副室があつて、そこから人のゐない六疊の電燈が明るく見えた。女は旅歸りの大丸髷に結つて、白い顔を闇の中に見せてゐた。

女は土地では踊の巧いので聞えてゐた。脊の高い、やはらかな姿をしなやかに、扇をくるりと飜すのを見ると、誰も心を奪はれないものはなかつた。『春雨』などを踊つても自分で工夫した振がついてゐた。男は北州が好きで、よくそれを踊らせた。

『私、私は本當に好いと思つてよ――』

其聲――一種懐しい調子のある其聲がふとすぐ前に聞えた。見ると、名高い將軍の前に藝者が三人ほど集つて、頻りに何か饒舌つてゐる。その女は帶の松葉を此方に見せて其中に交つてゐた。

半玉と藝者とがをり／＼前を行違つて行つた、ゆつたりした打解けた氣分が何處となく一間に行渡つて、低い話聲が雜然として耳に入つて來た。

　かれは隣の中佐が頻りに膳の上にある物を箸で挾むのを見ながら、一盃は一盃と盃の數を重ねた。庇髮に結つた肥つた年増の藝妓が來たり、一本になり立ての勝色納戸の着物を着た島田の美しい女が來たり、綺麗な甘つたれるやうな口の利き方をする半玉が來たりした。あの女が自分の此處にかうして坐つてゐるのを知つてゐることはもう確かであつた。藝妓が關係のある客と宴會の席上で顏を合せる時の態度は、かれは今までにも度々見て知つてゐる。しかしその輕い心、皮肉な心で相對することが出來ないやうなのが、彼等の間柄であつた。『一生離れまい。』かう言合つたこともあれば、『何うせ一緒にはなれないやうになつてゐる。お前だつて、若い身で何時までかうしてゐることもあるまい。其時は己が力になつてやる。男女と謂ふものは、一緒にゐる中は好いが、何方か一方別れゝば、屹度他人になつて了ふものださうだ。途中で逢つても挨拶も出來なくなるものださうだ。しかし、己達にはそんなことはすまい。何うかそんなことはすまい。』かう言つたこともある。

　と、かれの眼の前には、別れて行くやうになつた一伍一什が歷々と浮んで通つた。別れるやうな理由もなかつた。しかしいつの間にか別れなければならなくなつてゐた。

會の始まる前に、餘興として講談と女義太夫とがあつた。元祿の義士の講談をしたなにがしといふ講釋師は、海城から此の司令部に從屬して、遼陽の戰ひの濟んだ後に歸つて來た男で、戰地でも、何ぞと言つては、よくその講談を聞いたものだが、其のがつしりした體格と太く錆びた聲とは、人々をして其の當時を想起させるに十分であつた。裃をつけた若い綺麗な女義太夫は、『壺坂寺』を長く語つた。

少佐の軍服を着けた幹事がやがて立上つて、『此會は每年年末に開會することになつて居りましたが、今年は、諸君に澤山轉任なさるゝ方が御座いまして、もうちき地方にお出かけになる方の御都合も御座いましたので、繰上げて今日開會することに致しました。……此次の幹事には誰少佐を推薦致して置きましたからよろしく御斡旋のほどを願ひます。……』かう言つて、少し間を置いて、『それから御報告致して置きますが、今日の會に諸君から寄附が御座いました。女義太夫は誰君から、繪はがきは誰君から。それから後で寫眞班で從軍された諸君が、今日の宴會の盛況を撮影して諸君にその寫眞を一葉づつ進呈さるゝといふことで御座います。』若々しい透つた聲が廣い一間に鮮かに聞かれた。

『何うか、皆さん、不行屆で御座いますが――それに何にも御座いませんが、何うか充分に召上られんことを希望いたします。』

跡に拍手が高く一座に滿ち渡つて聞えた。

客は皆な隣の人々を相手にして、いろ〳〵と當時の話をしながら盃を重ねた。酒を替へに立つて行く

『己の來てるのをもう知つてるか……それともまだ知らないか。』

かれはかう思つて見た。

膳の配附も濟んで、人々はやがて盃を手に取り始めた。半玉の綺麗なのと、一本になり立ての若い美しいのと、もう姐さん株になつた二十四五のと、口の達者な老妓とが具合よく並んで酒を勸めた。客の中には軍服の胡座をかき始めたものも一人や二人はあつた。ゆつたりした空氣が何處となく四邊に充ち渡つた。

かれの眼は其女の姿を多くの藝妓の中に求めた。女は其側の一番隅の處に坐つて、白い横顏を見せてゐた。

それは戰地の艱難と戰捷とを記念にするやうな會であつた。席に列つた人々は、軍人と言はず、軍屬と言はず、畫家と言はず、新聞記者と言はず、皆な飯盒の飯を食つたり、露營の憂目を見たり、砲彈の炸裂する下を往來したりした人達であつた。人々は一年一度の此の會を樂みにして、其時の艱難やら愉快やらを互に面白さうに話し合つた。中には遠い處からわざ〳〵出かけて來るものもあつた。

軍人達の胸には、大抵金鵄勳章がかゞやいてゐた。其時分、大尉であつた人はもう中佐になつてゐた。軍の參謀長であつた人は、其肩に星が二つ輝いて、全國でも有力な師團の師團長に昇進してゐた。參謀次長は旅團長になつてゐた。

記念會

十八疊二間をぶつ通した廣間に客はずらりと並んで見られた。藝妓は明るい電燈の光の中に派手な姿をくつきりと見せて、長い裾を引きながら、一人々々靜かに膳を運んで行つた。

かれの席はなにがし大佐となにがし中佐との間にあつた。相對しては二間の床の間を後にして、名高いなにがし將軍と軍醫總監とが笑ひながら頻りに何か話してゐた。ふと新たに膳を運んで入つて來た一人の藝妓を見た時、かれは思はず眼を疊の上に落した。かうした處で長く豫期した運命に邂逅さうとはかれは思ひもかけなかつた。

かれは烈しい胸の鼓動を感じた。

向う側に、矢張少佐の軍服をつけて、隣の軍人と熱心に話しあつてゐる四十男があつた。女は其處に行つて、髮の多い銀杏返しの髷と、脊の高いすらりとした姿と、松葉の細かく出た金茶色の繻珍の帶とを此方に見せて、運んで來た膳を其處に据ゑて、靜かに立つて、元來た方へと引返して行つた。

かう言つたが、かれは別にそれを氣に留めようともしなかつた。

其處からはまた御料地になつてゐた。一番外れの坂の上の家は、大きな門構への新らしい二階屋であつた。硝子戸が立派に取廻してあつて、形の面白い庭の松が、垣の上に二本横になつて倒れて居た。朝日がはなやかに硝子戸に照つた。

其門の前に、鞄を肩にかけた小學校の生徒が二三人、何かガヤ〳〵言つて集つて騷いで居た。見ると、成程其處に、昨夜の風雨に斷たれた電燈線が、蛇でものたくつたやうにだらりと長く地上に垂れて居た。

『危いぞ、危いぞ！』

こんなことを言ひながら、整次は其處を通らうとした。

しかし路はその斷たれた電燈線にさまたげられて、自由に通行が出來なくなつて居た。暫く躊躇して立つて見て居たかれは、生徒の中に蝙蝠傘を持つて居るものがあるのを認めて、『おい、それを貸せ。』かう言つてそれを取つて、何の危險をも感じないかのやうに――邪魔物を除いて通つて行くのに何の遠慮もないといふやうに、いきなりそれを傍に拂ひ退けようとした。それは唯瞬間であつた。アツといふ聲と共に、かれは電氣に觸れて仰向けに倒れた……。

ゐた。坂の下の低地は、まだところ〴〵空地になつて居て、其處からは左へ續く平地から向うの丘に連る竹藪やら、新建の家屋やらが晴れた碧の空にレリーフでも見るやうに見えてゐた。高い處を轅る電車の音がはつきり耳に立つて聞えて來た。

晴れた廣い地平線を見た整次の胸には、愉快な、生々とした、生効のあるやうな心が脈々として波を打つて居た。若くつて壯健なかれに取つては、今の艱難な生活などは何うでもないやうにすら思はれた。かれの體には元氣が充ちてゐた。

法被に半股引を着けた整次の姿は、朝の晴れた空氣の中に鮮かな輪廓を見せて、長い坂を勇ましく向うへと走つて行つた。坂を下りてまた上ると、同じやうな屋敷町がつゞいて、やがて御料地の藪に突當つた。それについて、猶曲つて行くと、栗と欅の疎らな林があつて、片側には芝草の土手だの、大きな門だの、建仁寺垣だのが並んで續いた。一方の藪地には、萑だの萓だの薄だのの中に露草が交つて咲いて居た。

かねて見知つてゐる近所の牛舍の配達が向うから遣つて來た。

『お早う。』

『お早う。』

かう挨拶を取交したが、配達の男は振返つて、『其處に電燈線が切れて居るから注意して行き給へ。』

『難有う。』

達した邸では、裏門が半倒れて、いつもは見えない井戸だの、外流しだの、硝子の嵌つた勝手口だのが見えた。其處に使はれて居た婢は、年は十八で、色は黒いが、小づくりな、鳥渡愛嬌のある可愛い娘であつた。その婢は子供を伴れて、よく牛モウ／＼を見せに遣つて來た。紅いメリンスの帶や、島田に結つた後姿や中形の派手な單衣などがいつも整次の眼に附いて居た。

倒れかけた門を避けて通らうとして、ふと其處に其の婢が襷がけになつて水を汲んで居るのを整次は見た。

『お早う！』

かうかれは聲を懸けて通つた。

一夜暴れた風雨の跡は其處にも此處にも見えた。豪雨に洗はれた道路には、石が出て居て、それが車の轍にきしつて鳴つた。ある家の小屋は、誰れか力のある人でもそつと持つて來てそつと其處に置いて行つたといふやうに、道路の眞中に幅をして吹飛されて居た。

荒物屋の前では、若い上さんが眠むさうな眼をして、前の戶を明けて居た。路の角では、近所の工場に出勤する勞働者の群が、ガヤ／＼と何事か語り合ひながら通つて行つた。

此方の屋敷町から向うの屋敷町へ行く間には、緩い長い坂が電信柱に縁取られて、ずつと遠くつゞいて

『ぢや、餘程大きな嵐だつたんだね？』

整次は體を延して、鍋から二杯目の味噌汁を盛りながら『まア、こんな嵐は珍らしい。……損害が隨分多かつたでせう。』

『一體、いつ頃からひどくなつたんだえ？』

『十二時半ごろからです。一時、二時頃が一番ひどかつたやうでした。私が起きてからも、家が持つて行かれやしないかと思ふやうな時が二三度ありました。』

『でも晴れてよかつたね。』

『え、本當に……氣分が淸々した。』

飯を食つて了ふと、整次は、

『ぢや、お上さん、行つて來ます。』

から元氣よく言つて、運搬車の處へ行つた。ガラ〳〵と威勢よく駛つて行く車の音が後ろに聞えた。

もう朝日が前の櫟の森の中に紅く昇つて居た。空は熨したやうに碧く晴れて、嵐の名殘の淡い雲が吹切られて綿の樣に早く〳〵飛んで行つた。樹の梢には風がまだ音を立てゝ居た。

垣は其處此處に倒れて居た。檜の樹の並んで倒れて居る處などもあつた。この春時分、よく牛乳を配

て勢よくいつもの處から運搬車を引出した。

『好い天氣になりましたぜ！』

勝手元の傍を通る時、かれは上さんに向つてさも心持好ささうに聲をかけた。五升入、八升入、一斗入などの罐を六個ほどかれは運搬車の中に積み入れた。草鞋の新しいのを一足出して來て、帳場の上り端に腰をかけてそれを素足の上に穿いて、穿き加減を試めす爲めに、二三度土の上を力強く踏んで見た。

『これで大丈夫。』かう口の中で言つて、今度は車の方へ行つた。

其時、奥から上さんの聲がした。『繁さん、御飯が出來たよ。』

で、勝手元へ行つて見ると、七輪にかけた鍋からは湯氣が白くあがつて味噌汁の香ばしい匂が朝の食慾を誘ふやうに匂つて來た。かれはいつものやうに、膳と椀と箸とを出して來て、其處に腰をかけながら、傍に置いてある大きな飯櫃から飯を盛つて食つた。

『隨分ひどい嵐だつたね。』

『本當に……一時は家が飛ぶかと思ひました。』

『別に何處も何うもならなかつたかね、家では？』

『其處の家根だけで、外には何うもなつてゐないやうです。前の栗の樹は倒れて了つたですよ。』

『さうかね、あの栗の樹が……』かう言つて上さんは驚いたやうに眼を睜つて、

郊外の小さな牛舍では、婢も置いてなかつた。若い肥つた達者な上さんの起きた時には、それでももう餘程風雨が晴れ氣味になつて居た。夏の曉はそろ〳〵明け始めて、戸の隙間からは、黎明の光が明るく見えて居た。モウ〳〵と牛の鳴く聲が聞えた。

勝手元に入つて行つた上さんの口から『まア大變！』と言ふ聲が聞えたので、整次は急いで走つて行つて見た。板葺の屋根が半分めくられて、自然に明いた引窓からは、板片や木の葉や木の枝が其處等一面に足の踏所のないほどに散らばつて居た。竈も鍋釜も板の間も全く雨に濡れて居た。

『これぢや御飯も焚けやしない！』

上さんはこんなことを言つて、呆れたやうに棒立に其處に立つて居たが、それでも飯を焚かずには置かれないので、整次があたりを片附けるのを待つて、引窓を閉めて、竈の下に火を焚き附け始めた。しかしぬれた竈は容易に火が燃えつかなかつた。煙が渦のやうに勝手に充ちた。

整次は罐の入れ替への方を濟まして、今度は表の戸を明けた。もう夜はすつかり明けはなれて居た。前の邸の建仁寺垣が見事に將棊倒しになつて居たり、空地の大きな栗の樹が根こぎになつて倒れて居たりするのを見た。かれは今更に風雨の烈しかつたのに眼を睜つた。しかし幸ひにも空はいつの間にか拭つたやうに晴れてゐた。びしよぬれに濡れて車を曳いて行かなければならないと思つてウンザリした先程の考へも、これですつかり打消されて了つた。かれは何とも言ひやうのない生々した愉快な心持になつ

貰ふ幾らかの給金は、ちやんと郵便局に持つて行つて、それが好い加減の高になると、きまつて故鄕の一人の母親の許に爲替にして送つて遣つた。

『整次さんのやうにしても詰らないねえ。』『若い上さんはいつもかう言つて笑つた。

風雨は今が絕頂かと思はれるほどに烈しく凄じく荒れ廻つて居た。向うの家の周圍の欅の樹は、潮のやうに鳴つて、物のへし折れる音や、垣の倒れるやうな響が其中に交つて聞えた。ドシヤブリに降つて居る雨の音もそれと解らないほど強く強く風が吹いた。今一吹き烈しく吹いたなら、屋根も、家も、樹も、すつかり吹飛ばされて了ふかとさへ思はれた。

整次は大きなバケツから小さな罐に牛乳を移しながら、をり〳〵手を留めては、屋上を吹き荒るゝ風雨の音に耳を傾けた。しかし別段それが氣になつて居るのでもなかつた。心は寧ろ故鄕の母の許に飛んで行つて居た。あと一月ばかりすると、かれは國に歸ることになつて居る。國では、貯めた金で、小商賣をすることに決めてあつた。昨日もかれは不用な着物を小包で國へ送りかへした。

子供の時分泳いで遊んだ川や、涼しい樹の蔭や、母の笑顏などが風雨の凄じい音に縺れ合つて、かれの眼の前を通り過ぎた。しかし丈夫さうな腕と體とは、絕えず無心に動いて居た。乳を搾る男の許から運んで來た大きなバケツも、段々空になつて行つた。

ある死

整次が起きた時には、風雨が凄しく闇に荒れて居た。

『ひどいしけだね。』

かう聲をかけながら、かれは流し元の方へ歩いて行つた。乳を搾る男はもう一時間も前に起きて、ボンヤリした洋燈の光の下で、大きなバケツを牝牛の乳房に當てゝ居た。乳房からは乳が流れるやうに落ちた。

整次は今一度聲をかけようと思つたが、平生無口な男なのを知つて居るので、其儘默つて自分の仕事に取懸つた。しぼつた牛乳を大きなバケツから更らに幾つかの小さな罐に分けて、それを運搬車に載せて、毎朝得意先に配達して行くのがかれの役目であつた。

整次は此處に來て、もう一年ほど同じやうな勞働を續けて居た。かうした青年にはめづらしいほど堅い男で、女郎買に行くではなし、買食ひをするではなし、近所の婢達にからかつて見るではなし、毎月

を叩く奴があるんですつて。時計を見ると、十二時頃なんですつて。今時分、郵便の來る筈がない。あやしいと思つたから、宅にはピストルがあるから、入るんなら入つて見ろ！ つて言つてやつた相ですよ。するとすぐ行つて了ひましたつて……』

『ピストルで女が盜賊を追つてやつた話はよくあるさ。』

『宅に取つて置くと好う御座んすねえ。』

妻はいぢくり廻して居た。

夫はやがて手に取つて、彈丸をこめた處をぐる〳〵廻して見て、なんの氣もなく引金を起して居たかれは遼陽を出發する時、途中萬一の災厄を慮つて、彈丸を三箇入れて來たことを全く忘れて居た――それをパチンと落した。と驚くまい事か、妻の方に向けた筒先から、煙と共に火が出て、凄じい音がした。瞬間、只瞬間であつた。妻が顏を反ける暇もなく、夫がはつと思ふ間もなかつた。二人の心には此時言ふべからざる恐怖と戰慄とが烈しく襲つて通つた。幸ひ彈丸は妻の頭の上五六寸の處を過ぎて、唐紙を打通して向うに行つて了つたが、二人は眞靑になつて顏を見合した。

暗い恐ろしい或物が二人の暗い心を更に一層明かに二人の間に展げて見せたやうな氣がした。これで妻を殺したなら……と夫は思つて戰慄した。妻はかうして自分を殺す氣が夫にあつたのではないかと思つて戰慄した。

『これは彈丸が入つて居るのですか？』
『いや――』
『これを打つたことはありますか？』
『たうとう打つたことはなかつた。』
『ぢや持つて歩いたばかりですねえ。』
『さうさ、重い思ひをして持つて歩いたばかりさ。けども戦地ではいつどんな眼に逢ふか知れないから、こればかりは身から離されなかつたさ。遼陽の宿舍で、一發も打つて見ないではつまらんからつて、皆が揃つて打つて居たつけ。』
『無駄なことをしたものねえ。』
と妻は笑つた。
『でも、これでも持つてると持つてないでは、心丈夫さが違ふからねえ。』
『それはさうでせうとも……』と言つて、妻はある事を思出して、
『これはねえ。貴方、宅に置く方が好い。盗賊の用心になつて好う御座んすから。姉さんの家にも一箇これと同じやうなのがありましたよ。義兄さんが死んでから袋町に一人で住んで居る時分よく盗賊の用心にするんだつて、彈丸をこめて、高い棚の上に置きましたよ。いつかなんぞ夜中に郵便々々つて戸

『解らなくつても、何でも好いから見せて頂戴！』

『勝手に見ろ。』

と夫も妻のわからずやに呆れたといふ風に、其處にある種子の手紙を皆な押して遣つた。

妻は熱心に展げて讀んで居る。

少時經つた。

やがて、夫が、

『何うだ、何か面白いことがあつたかね？』と皆な讀んで了つたのを見て、わざと笑ふと、

『餘りですよ、種子さんも……』

『何が餘りだ？』

『だつて、先生に向つて、水臭いのなんのつて……私、吃驚した。』

と前のことを繰返して居る。

夫はそら見たことかといふやうな勝誇つた態度で、軍用カバンの中から、いろ〳〵のものを出して其處に並べた。遼陽で拾つて來た砲彈の破片、露西亞語の小說雜誌、記念の爲めにわざ〳〵持つて來た道明寺糒、それからクロパトキン將軍の宿舍の庭で拾つた女のリボンなども出した。

最後に拳銃を取出したのを、細君は手に取つて見て、

と、顔を眞赤にして、妻はそれを取返さうとする。
『大變なこと！　何が大變なことが書いてあるものか。』
『まア、好いからお見せなさい！』
と言つた妻の顔は眞面目に眼は据つた。
夫が頓着なく手紙を藏はうとするので、
『ちや、疑はれても仕方がありませんねえ。』
『疑ふも疑はれるもありやせんぢやないか。馬鹿々々しい。見るなら見ろ！』
と投げて遣る。
妻は眼を睜つて、
『まア、こんなことがありますよ、――先生も餘り水臭いの何のつて、呆れるねえ、種子さんにも……』
それは別に呆れるやうな手紙ではなかつた。種子の一身上の將來について、少し意見を言つて遣つた其返事である。で其譯を細々と夫は話したっけれど全く腑に落ちるやうに話すのには容易でなかつた。
『だつて餘りですねえ。弟子の身で先生に向つて、水臭いのなんのつて……』
『どうせ、お前には解らんよ。』

其周圍を種々の空想やら幻像やらが旋風のやうに早く〳〵通つた。妻を毒殺した夫、夫を毒殺した妻、盲目なる自然の力に餘儀なくされた罪惡を頭腦に浮べて見てゾッとした。

妻が兒を寢つけて其處に來た。

『種子さんからの手紙がまアこんなに……』

と突然整頓した手紙を取つた。

『まア、そんなもの見たつて仕方がない！』

夫が奪はうとすると、『好いぢやありませんか、見せたつて……』と、妻は急いでそれを後にかくして笑つた。

夫はがらんとなつたやうな頭で、妻が手紙を展げるのを見て居た。

妻は封筒から手紙を出しては展げて見て居る。人の心の明かに見えるのは、手紙に若くはないといふ風で、平生の無頓着にも似もやらず、ある秘密を其處から發見しようとするかのやうに、一つ〳〵、熱心に忠實に讀んで居た。

別に意味があつたのではないが、丁度一通の手紙を半ば讀まうとしてゐる時、

『まア、そんなもの何時まで見て居たつて仕方があるもんか！』と言つて、夫は手を延して引奪つた。

『あれ、鳥渡、お見せなさいよ。大變なことが書いてあつた！』

は讀んだ。
遼陽の戰後、戰死した士官の隱袋に女の手紙が血に染つて入つて居た。身につまされて悲しい氣がした。かれの汚れた隱袋にも矢張女の手紙が入つて居た。

手紙の中には妻からのも無論交つて居た。

それを整頓しながら、かれはふと、

『難かしい問題だ！』

と思つた。

『そんなことがこの己に出來るか、』と續いて考へて、『けれど何が恐ろしいと言つて、自然から來る災害ほど恐ろしいものはない。自然の力に向つては、人間は何んなことをするか解らない。自分では飽までそれと戰ふつもりで居ても、いつの間にか負けて了ふ。……妻の心配するのも無理はない。』

『自分は妻に向つて、己にそんな眞似が出來るかと言つた。確かに眞面目で言つた。けれどこれを自分は誓ふことが出來るか。』

かれは時々暗い心を起した。妻の死を考へることもあつた。今、妻が……妻が死んで吳れたら……

……妻が死んで、この身體が自由になつたら……

な字で、すら〳〵と書いてある。紫インキで走り書きにした端書も二三枚交つて居た。かれは其手紙を別にして揃へて見た。一つ〳〵何れにも記憶のないものはない。廣島の汚ない旅館の生活から、上陸當時の荒涼たる砂埃、楊の樹のかげのさびしい支那民家、村夫子らしい支那人の顏、砲兵陣地の凄じい土烟、朝の忙しい行軍まで、其手紙についての種々の記憶と共に新しく眼の前を通つた。ことに野戰郵便の初めて開けた日のことがはつきりと頭腦に殘つて居る。丁度其時は夕暮であつた。管理部から懇意な軍曹が來て、「寫眞班にも手紙が澤山來て居るから取つて來給へ、」と敎へて呉れた。かれは班員の一人と野を越えて行つた。野には夕日がさし渡つて、その餘照を受けた楊が司令部のある村にこんもりと茂つて、民家の灰色の土壁の前に、歩哨が銃を肩にして立つて居るのが小さく明かに見える。受取つた手紙の中には果して種子のが一通入つて居た。歸りには近道をして、淺い砂川をザブ〳〵渉つて來た。川には赤い雲が映つた。

今一つかういふ記憶がある。大石橋の戰が濟んでからである。軍は暑い日を毎日々々前進した。郵便を受取る暇がない。處がある日前方の都合で、司令部は一日ある所に滯在することになつた。管理部の行李が後から追付いて一緒になつた。かれは一番先に其處に行つて郵便をさがした。野の末の褐色の路に、管理部の行李が幾つとなく並んで、カーキー色の服を着た軍曹や上等兵や傭人が傍の楊の蔭の涼しい處を選んで寢ころんで居る。郵便は寫眞班の行李の中に入れられてあつた。種子の手紙を歩きながらかれ

しなく品をして坐つて居ますのねえ。だから、刑事につられたり、鎌田さんには、あれは好い家庭に育つた娘ぢやないなんて言はれるのですよ。』

『それや、お前なぞの時代の娘とは違ふからねえ。』

と言つたが、『まア好いよ、そんなこと何うでも……』と夫は立つて座敷に行つた。

座敷の一隅に、軍用カバンと行李とが置いてあつた。軍用カバンには、白い漆で第二軍從軍寫眞班と書いてあるのが際立つて見えた。かれは四五日前に、戰地から歸つて來たのである。寫眞班附の從軍記者として、第二軍の上陸當時からつい半月以前の遼陽陷落まで、雨に濡れ、風に曝され、砂塵に塗れ、炎熱に苦しめられ、ある時は砲彈の破裂する高粱畑の掩濠に半日を送つたこともあれば、蠅の多い病院の一室に熱を病んで寢て居たこともあつた。停車場に迎へに行つた時、人々は頰はこけ髭は生え體は瘦せたかれの姿に一方ならず驚かされた。『何うしませう、奥さん、先生があんなにお瘦せなすつて？』と種子は細君に言つた位であつた。

今日は社を休んで、少し四邊を整理しようと思つて、主は軍用カバンと行李とを明けた。中には手帳、書籍、水筒、道明寺糒、雜誌、手紙などが一杯にごた〳〵と入れられてある。拳銃が一個、彈丸を入れた革の箱と一緒に其隅にあつた。

主は書籍と雜誌とを整頓して、次に手簡を揃へた。種子から來たのが一番多かつた。細い器用な達者

『それや何でもないけれど……』

『お前そんな馬鹿なことを言つて人に聞かれたら何うする。種子に聞かれても恥かしいぢやないか。』

妻は今年產れた兒に、胸をひろげて、乳を呑ませながら、

『だから私は何とも思つて居やしませんよ。貴方と種子さんとは別なんだから……普通の人間の心持ちや解らないんだから。』かう言つて笑つた。

妻の心と、自分の心と、種子の心と、かうも違つて居るのだと夫は思つて默つて了つた。鐵瓶がグラグラ煮え立つて、湯氣が上つた。午前の十時、秋の晴れた朝日が次の座敷に流るゝやうに射し込んで居る。勝手元からは下女の跡仕舞をする音がをり〳〵聞えて來る。

夫は猫板の上の藥罐を取つて、鐵瓶に水をさした。兒は赤い頰を母親の柔かい乳房に當てゝ半は眠りながら、スパ〳〵吸つてはやめ、吸つてはやめしてゐる。

『でも此間も、皆なが言つてましたよ。停車場へ迎へに行つた時も、種子さんの樣子つて無かつたつて……一體あの人、誰れにでも變な眼附をしたり、樣子をしたりしますのねえ。何か言ふと、あらまア奧さん……なんて言つて、袖で……』と袖を羞かしさうに口に當てる眞似をして、』かう遣るんですもの、二十一にもなつて、あんな眞似はしないといいんだけれども……』とまた笑つて、『今度見て御覽なさいよ、屹度しますから……。それに、眞直ぐにちやんと坐つたことはつひぞなくつてねえ、いつも屹度橫にだら

拳銃

『お前も馬鹿なことを言ふねえ、己にそんな眞似が出來ると思ふのか。』

『いゝえ、さうぢやないんですけれども……』と妻は夫が眞面目になつたにも拘らず猶笑つて、『それやそんなことはないのは知つてますけれど……魔がさすといふことがありますからねえ。』

『魔がさす？』

『だつて、此方でいくら大丈夫でも……向うで熱心なら何うなるか解りやしませんからねえ。』

馬鹿なと言つたやうな調子で、夫は笑つて妻の肥つた丸い顏を見た。

『向うで熱心かねえ？』

『それや熱心ですとも、先生、先生つて、貴郎が戰地に居る間、どれほど口癖に言つて居たか解りやしませんよ。貴郎も手紙をよくよこしたぢやありませんか。』

『それやよこしたさ。先生が弟子に手紙をよこしたつて、何でも無いぢやないか。』

書生は一度奧に入つて行つたが、暫くして出て來て、『何うも解りませんさうです。……二月ほど前に夜遲く來た女などないさうです。名前でもわかりますと、見當がつきませうけれど……何うも解りかねます。』かう言つて、怪しい男でもあるやうに、じろ〳〵とかれの顏を見た。かれは要領を得ずに歸つて來た。

女は果して眞實を言つたか何うか、それもやがては疑問の一つになつた。　時は段々經つて行つた。雨の降る日にも、風の吹く日にも、かれは其草場に添つた路を通つて、停留場の方へと歩いて行つた。かれはもう以前のやうな快活な氣分を失つて了つた。かれには世の中が一種の謎のやうに思はれ出して來た。解すべからざる神秘――意味のない神秘が、突如としてかれを襲つて、平和と平凡とに安んじて居たかれの生活を粉微塵に碎いて行つて了つた。

秋はやがて來た。さびしい雨が郊外の大きな欅の林から涙のやうにパラ〳〵とこぼれて落ちた。霧が一面に野をこめて、朝日が灰色に曇つて見えた。蟲の音も絶え〴〵に、やがては野分が凄じい勢で、野の草を薙ぎ倒した。

細君や子供を伴れて賑かな町に出懸けて行くやうなことはもう稀になつて了つた。かれは默つて物を考へるやうな人になつた。

草場には草が枯れたり萌えたりした。雪が一面に白く埋み盡して居る朝もあつた。春はげんげが綺麗に咲いた。

二百十五番地の中田といふ家を訪ねて、それとなく其女の消息を探らうと思ひ立つたのは、それから二月ほど經つてからのことであつた。これまでにもかれはそれを思はぬではなかつた。時々はそれとなく家を探つて見ようとも思つた。しかし、いつもそれを實行する氣分にはなれなかつた。

夕飯を濟してから、細君には内所で散歩をすると言つて、獨りで出かけた。夏はもう暑くなつて居た。浴衣を着た人がぞろ〳〵と街頭を通つた。

かれは其番地を彼方此方と捜した。其處は丁度丘の蔭になつて居るやうなところで、要垣やら、芝草の土手やら、冠木門やらが長く續いた。中田……成程其處にその名の記された軒燈の出て居る家があつた。かなり大きい門構への邸で、栽込の高野槇や、椎や、八つ手や、寒山竹などが外からも見えた。二階には硝子戸がはまつて、籐椅子が置いてあるのが眼に入つた。

玄關から入つて、それを訊くやうな心持には容易になれなかつた。かれは其前を行つたり來たりした。最後に、思ひ切つて、かれは門のくゞりを明けた。

鈴の音がけたゝましく鳴つた。

書生が出て來た。かれは顏を赧くして、二月ほど前に夜遲く此處をたづねて來た女のことを訊いた。

「あまりに雲をつかんだやうな話で御座いますけれど――」かう言つたかれは幾度かどもつた。

つた。其の箇處もはつきりとはわからなかつた。靴の跡もゴム草履の跡もなかつた。

何時も見知り越しの此處等に住んで居る人達は、洋服を着たり、羽織袴をつけたりして、彼方此方の巷路から其姿を現はして、停留場の方へと出て行つた。角の門構への家からは、相變らず綺麗な女學生が紫のメリンスの風呂敷包をかゝへて學校へ出かけた。

通りでは、靴屋の亭主はいつものやうにせつせと靴を拵へて居た。交番の前には巡査が立つて居た。

これが此のまゝで終らうとは、かれには何うしても思はれなかつた。かれは再び逢ふ時を豫期した。

何處かで屹度逢ふに相違ない。愛嬌に富んだ黑い眼、房々した髮、それをかれは常に明らかに眼の前に描き出した。役所の忙しい仕事の中でも、時々それを描いて見た。……ゆくりなく途中で逢ふ、オヤと言つて聲をかける、それから戀人か夫婦のやうにして一緒に歩く、別れてからの話をする、何處かに行く……氣が附くと、いつもこんなことを際限なく想像して居た。

代々木にその知つてゐる人の住んで居るといふことが、殊に有力な豫期をかれに與へた。東京の何處かに住んで居る女は、屹度また此處に遣つて來るに相違ない。林の角、路の角、町の角、垣の角、何處かで再びその笑顏を見るに相違ない。かれはかう思つて毎日その路を通つて役所に出かけた。

金曜日の夜は、殊にさうであつた。電車に乘る時には、屹度、其女がその一隅に腰をかけて、自分の乘つて來るのを待つて居るやうに思はれた。しかし其希望はいつも徒らに過ぎて行つた。

れはゾツとした。われとわが身を振返つて見た。

其女と細君との關係を併せて考へて見たりなどした。今までには、かれと細君との間には秘密といふものはなかつた。細君一人を守つて他に女などを知らなかつた身には、何だか昨夜のことが非常な罪惡であるやうにも考へられた。かういふ風に、男が細君以外の女に關係を持つといふことは、かれには少くとも一問題として考へなければならない事實であつた。

別れた路の角から、停留場に至るまでの間は、鮮かにかれの前に現はれて見えた。かれは朝飯をも沈默の間に濟ました。やがて出勤の時間が來た。

かれは刷毛で洋服を拂つた。ズボンに附着した泥は容易に除れなかつた。

朝は美しく晴れて居た。植木屋の松が蒼い空に見事に聳えて居た。やがて女に別れた路の角に來て、かれは鳥渡立留つてあたりを見廻した。

「まだ其處に居るに相違ない。」

かれはこんなことを思つた。

草場には露が朝日にキラ〳〵と光つて居た。夜の秘密が此處に潜まうとは何うしても思はれぬやうな明るい日影があたりを照した。川は依然としてさゝやかな音を立てゝ流れた。

昨夜女の轉んだ跡を捜すやうにして、かれは下を見ながら、坂を登つて行つた。何も落ちては居なか

かれは生返事をして、『まあ、疊まないで、其處等にかけて置く方が好い』

『さうしませう。大變に泥がついてゐる。ほらズボンにも上着にも』細君はかう言つて、それを衣紋竹にかけた。

其夜はかれは容易に眠られなかつた。二時を聞くまで床の上に輾轉反側してゐた。

朝、目が覺めると、昨夜のは、あれは夢ではないかと思つた。しかし夢ではなかつた。洋服が其處に懸つて居た。

かれは起きて、上着やズボンを調べて見た。泥は其處此處について居た。かれは思ひ出して、不思議た笑みを顏に湛へた。

自分の體が何うかなつて居やしないかとも思はれた。何處の誰だか知れない女……自分の肉は腐れて行きはしないかと言ふやうないやな氣分にもなつた。一方ではまたそれが非常にめづらしくなつかしかつた。自己の今まで夢にも知らなかつた世界が其前に開けたやうな氣もした。二百十五番地の中田、今朝はまだ乾度其處に居るに違ひない、行つて尋ねて見ようかとも思つた。別れ際の女の冷淡な態度も、かれには不思議に思はれてならなかつた。

いつもの樣子と違つて居るので、細君は三度まで『貴郎何うかなすつて?』と訊ねた。其度每に、か

女はそは〳〵して居た。男から何か訊かれるのを恐れるやうにも見えた。其處から十間ほど行くと、路は二つに岐れて居た。

『では、私は此方へ參りますから。』

一刻も早く別れるのを女は望んで居た。男は新しい驚きを重ねたやうに、かう怱卒に別れて行く女を見送つて居た。

『では、左樣なら。』

『左樣なら。』

女は足早にスタ〳〵と向うの方へ歩いて行つた。かれは喪心した人のやうに、ぢつと其處に立盡して居た。女の足音も遠くなつて、遂には聞えなくなつて了つた。ふと氣がつくと、かれも家の方へ無意識に歩いて居た。

惡夢に襲はれたやうな氣分で、かれは家の門の戸を明けて入つた。細君は眠むさうな顏をして、ランプを手にして迎へに出て、かれの脫いで上つた靴を下駄箱の中にしまつた。

長火鉢の前に不思議な顏をして、默つて彼は坐つて居た。細君はいつものやうに、其處で夫の脫いだ洋服を疊みに掛つた。不意に、『何うしたの？　貴方、大變泥がついてるのね。何處かで轉んだんですか。』

『うむ。』

『何うかしましたか？』

かれは覗くやうにして、もう一度かう言つて見た。

『いゝえ、別に……』

女の聲は微かでそゝるやうな聲であつた。かれも流石に胸を躍らした。兎に角起してやらうと思つて、女の肩の處に手をやると、女は右の手で、しつかと絡みつくやうに男の體に寄りかゝつた。暖い柔かな血が二人の體を動搖させた。

起き上りざまに、女は男の手を堅く握つた。其時女の艶に笑つた顏が闇にもそれとあざやかに見えた。

……火と水とが俄かに一緒に襲つて來たやうな氣がした。二つの黑い影が縺れ合つて、だら〳〵坂を下へと並んで下りて行つた。水の音が微かに靜かにやさしい夜の音樂を奏でて居た。橋を渡ると、其處に毛氈を敷いたやうな草場があつた。

『送つて行つて上げようか。』

『いゝえ、大丈夫ですよ。』

『でもかう遲くつては、訊く人がないと困るでせうから。』

『いゝえ、本當に大丈夫よ。』

『山谷はどちらへお出でです？』

かれは暫くしてからかう尋ねた。

『二百十五番地ださうで御座いますが……中田と申すんですが。』

『二百十五番地――中田。』かれは考へて、『私の居ます處が百二十番地ですが、……どの邊になりますかな……何でも御料地の方でせう。』

『本當に遲くなつて、困つて了ふんで御座いますよ。』

今通つて居る處は、靴屋だの豆腐屋だののある町の通りであつた。大抵はもう戶を閉めて居る中に、一軒電燈がぱつと闇に照つて居る家があつた。それは菓子屋で、丸い硝子の罎やビスケットの大きな罐などが並んで居た。

靴屋の角から曲ると、路はさびしく暗くなつた。女はいよく男に寄添ふやうにして步いた。微かな夜風が通る度に、白粉の匂ひや香水の匂ひが男の鼻を撲つた。女は矢張スウくと呼吸を高くして居た。坂を下りようとする處で、女は何物にか躓いたやうにアッと言つて轉んだ。一步先に行つた男は、『危い！』と思はず言つて引返したが、俯伏になつたまゝ女は容易に起きようともしないので、

『何うかしましたか？』

かう言つて、顏を傍に寄せて見せた。女は呼吸をはずませて居た。

女も後からつゞいて下りた。切符を受取る男は、電燈の明るいテーブルの上に突伏して、グウノヽ鼾を立てゝ居た。

夜は暗かつた。空には星の光もなかつた。闇はあらゆる人間の秘密を深く包みかくして居るやうであつた。停留場から下りる階段には電燈の餘光が微かに照つて、せんだんの細かい葉の夜風にそよぐのがそれと見えた。下の雑貨店の雨戸はすつかり閉つて、よろづ荒物と書いた軒燈が淋しさうに闇に點つて居た。

女は後を追ふやうにして跟いて來た。艶かしい聲は再びかれの耳に入つた。

『代々木に山谷といふ處が御座いませうか。』

『え、……私も山谷に行きますから。』

『まあ、左樣で御座いますか。』最初の時の會話と同じやうな調子で女は喜ばしさうに言つた。すぐ言葉を續いで『御迷惑で御座いますけれど、御一緒に願へますまいか。』

『よう御座んすとも、……どうせ歸るんですから。』

かれは歩調を緩くした。女は引添ふやうにして、小刻みに早く歩いた。靴の音とゴム草履の音とが絡み合つて、靜かな夜の空氣に響いた。

女の胸の鼓動の高いのが男にも知れた。かれは成たけ靜かに歩いた。角の交番の前を通る時には、巡査は怪しむやうにして二人の方を見た。

車掌は終日の勞働に勞れ切つたといふやうに、車内に入つて來て、今まで勞働者の居た一隅に腰をかけたが、襲つて來る睡魔に抵抗することが出來ないやうに、コツクリコツクリやり始めた。

女は猶頻りにかれの方を見て居たが、俄かに、

『代々木はまだで御座いませうか。』

かうかれに向つて訊ねた。やさしい艶のある聲であつた。

『私も代々木で下りますから。』

『あら、ま、さうで御座いますか。』よろこばしさうに、『私はこちらの方は初めてで御座いますものですから。……』かう言つて莞爾と笑つて見せた。

女は絶えず笑を顔に湛へて居た。女の眼には、意氣なネクタイと綺麗な房々した髪とやさしさうな單純な色の白い顔とが映つた。女の顔にも疲れ切つて眠むさうな表情がそれとなく見えて居た。肉附の好い、膝のあたりの肥えた、好い艶の顔をした女であつた。

停留場をいくつ乘越しても、客は遂に一人も乘らなかつた。かれはかう夜遲く一人で電車に乘つて居る女のことなどは餘り深く考へなかつた。先程言葉を交した後は默つて只相對して居た。かれは自分の顔の上にをりをり注がれて來る女の眼の意味を解し得るやうな男でもなかつた。

電車は千駄ケ谷を通り越して、やがて代々木に着いた。

かうして一年ほど經つた。

ある夜のことであつた。かれは十一時過ぎに編輯所の門を出た。其夜も教授連はくだらぬ話に笑ひ興じて居た。鄕里の先輩は、『君の方は電車が間に合はないといけないから失敬したまへ、』と言つて呉れたが、さうかと言つて先に歸る譯にも行かなかつた。かれは門を出る時、時計を出して入口の電燈に照して見た。もう時間はいくらもなかつた。夏の初めの蒸暑い漆のやうな闇の中を衝いてかれは走つた。電車はまだ來なかつた。かれは暗い停留場に立つて待つて居た。疲勞に伴つて起つて來る欲望がいつものやうに萠して來た。かれは家に寢て待つて居る細君を想像した。

轟と音して電車は遣つて來た。赤い電燈は佗しさうにあたりを照して、疲れ切つた車掌の顏をぼんやりと見せた。かれを載せると、電車はすぐ出た。

電車には客が二人乘つて居た。一人は法被を着た勞働者らしい男であつた。一人は二十三四位の、髮を庇髮に結つた、色の白い、何方かと言へば綺麗な女であつた。銘仙の派手な着物を着て居た。かれは女の前に腰をかけて居た。氣が附くと、かれの眼と女の眼とは、時々宙に會つて居た。女は見ないやうにして、飽かずに男の顏を見た。

電車は全速力を出して走つて居た。勞働者は隅の方に寄りかゝつて目をつぶつてゐたが、とある停留場に着くと、慌てゝ下りて行つて了つた。其處からは、誰も乘るものはなかつた。

飲ませられなかつた。止むなく牛乳やミルク罐を買つて哺育した。四十圓取りの安官吏に取つては、これ等の費用は小さい打撃ではなかつた。かれは何うかしてその費用を得なければならなかつた。かれは鄕里の先輩が大學の教授をして居るのに賴んで、寫字の口をさがした。かれは幸ひにも國語に就いての素養があつた。更に幸ひにも、その大學の教授は、神田あたりの大きな書肆の依賴を受けて、片手間に國語の大辭典の編纂をして居た。かれは毎週金曜日の夜だけそこに詰めることにして、毎月十圓の手當を貰ふ身となつた。

金曜日には、『今日はお父さんは遲いのねえ。』かう言つて子供達は早くから寢た。かれは大學の教授連や助手や書肆の編輯員などの居る洋館の二階で、明るい電燈に照されながら、夜遲くまで一隅に小さくなつて仕事をして居た。十時半が退出時間になつて居るが、仕かけた用事があつたり、教授連が雜談に身を入れて容易に歸らうと言ひ出さなかつたりして、時には十一時を過ぐることなどもあつた。郊外に歸る電車は、最終が十一時半で、其處から停留場まで十分を要する身には、時計が十一時の處を指すと、もう間に合はないかと氣が氣でなかつた。かれは走つて行つて、辛うじてその赤の電車に間に合つた事も一度や二度ではなかつた。

春先や夏は眠くもなつた。それを眠るまいと思つて辛抱するのは大抵な辛さではなかつた。一日役所の仕事に疲勞した體は、夜まで縛られて、歸ると、つかれ切つて綿のやうになつて居た。

かれの朝に夕に通つて行く電車までの路には、西洋草花の見事に咲いてゐる大きな邸の花園があつたり、春は美しく咲揃ふ櫻の並木があつたり、毛氈を敷いたやうな綺麗な芝草の庭があつたりした。新たに開けた郊外には、新建の家が多く、中には大工がせつせと家を建てゝ居る處などもあつた。此方の丘から向うの丘へ行く處には、植木屋が角に一軒あつて、其向うは空地になつて居た。細い川には板橋が架つて居た。

その少し先は町の通りになつて居た。靴屋だの、菓子屋だの、豆腐屋だの、下駄屋だのが續いた。其處等の上さん達は、いつもかれの通つて行くのを見送つた。高いところにある電車の停留所でも、かれの姿はいつも女達の目を惹いた。

かれ等の生活は、平和に穩かに靜かに經つて行つた。事といふ事は一つもなかつた。夫婦の間柄も至極圓滿で、子供達も可愛く溫和しかつた。世の中にいろ／＼な事件や活劇のあるのは不思議に思はれる位であつた。新聞を透して見る種々の悲慘な事件や、恐ろしい罪惡や、思ひもかけない秘密や、さうしたものはかれ等には全く沒交涉であつた。平凡を平凡とも思はずにかれ等は暮した。

細君は三番目の子を妊娠して、やがて男の兒を產んだ。それは脾弱な發達の十分でない瘦せた兒であつた。細君はまた細君で、產前に煩つた脚氣が治らないで、長い間、醫師にかゝつた。乳は生れた兒に

れから來月の十日頃までは、主人の財布にも細君の財布にも一二圓の剩つた金が入つて居て、時にはそれを出し合つて、子供を伴れて、賑かな町の方へ出かけて行つた。

かれの扮裝はそれでも綺麗にしてあつた。月賦で買つた洋服、それをかれは自分で丁寧に刷毛で拂つた。靴も自分で上り端の處にある下駄箱から出して、クリームをつけて、絹布で拭つた。それに、かれは頭や顏に常に心を用ゐてゐた。道樂と謂つては他にないが、こればかりは他から見て可笑しいと思はれるほどで、髮はきまつた理髮舖で刈り、上等な香水を身分不相應な高い錢を出して買ひ、西洋剃刀を傍に置いて、毎日のやうに顏を剃つた。

ネクタイとカラー、それにもかれは浮身をやつした。流行の色や好みや、さういふものが西洋小間物屋の店頭に並べてあると、かれはいつも財布を倒にしてそれを買つた。『本當に、それが貴郎の道樂ねえ。まだあのネクタイなど綺麗ぢやありませんか。』細君は其まゝに捨てゝあるネクタイを見て、いつもこんなことを言つた。しかし綺麗な顏や、キチンとした扮裝を見るのは氣持が惡くもないと見えて、細君も別に深く咎め立てをしようともしなかつた。それに自分の夫に對する近所での評判もうれしかつた。『好い方ね、好い旦那さまねえ。』『近所の細君達はかう言つていつも話し合つた。』『奧さんとは、うつりがわるいわねえ。旦那さまが可哀相ねえ。』『あれで月給さへ餘計に取ると、それこそ大したものですけれどねえ……仕方がないものねえ。』こんな話がいつも近所の細君や娘達の口に上つた。

げんげ

郊外に住んで居るかれは、辨當を抱へて、電車に乘つて、いつも濠の中にある大きな役所に勤めに行つた。大抵は洋服で、新しい帽子を冠つて、手にはステツキをついて居た。六疊、八疊、四疊半、二疊の借家住ひで、出かける時には、子供を生んでもうすつかり色の褪めた細君と二人の子供とがいつも上り端まで送つて出て來て、「行つて入らつしやいまし」と丁寧に後から聲を懸けた。

毎日五時になると、かれはきまつて役所から歸つて來た。常に父親の靴の音に聞き馴れてゐる七歳になる總領の女の兒は、五六間先から、そらお父さんのお歸りと飛んで出て來るのが例になつて居た。其頃には、細君は襷がけになつて、勝手で、夕飯の支度に忙しがつて居た。牛肉を煮る匂ひなどがいつも餓ゑ勞れたかれの食慾を刺戟した。

雇から段々立身して、今では四十圓ほどの月給取になつて居た。家賃が六圓、米代が九圓、主人の飲む牛乳が二圓足らず、薪炭、醬油、其他の雜費を合せて七八圓、毎月二十三日頃に月給がさがつて、そ

梅の咲く頃には、多喜子ももう餘程大きくなつてゐた。鶯の啼聲の眞似をしたり、物賣の聲に耳を欹て〻居たりした。智慧も段々ついて來た。此頃では日當りの暖かい縁側で、長い間獨遊びをして居ることもをり〱はある。朝の飯の時など、大勢の子供に母親が手が廻り兼ねて居ると、多喜子は飯椀と匙とを自分で持つて、ぼろ〱こぼしながら獨りで食つた。

さうでもなかつた。

母親にも暫しは幼兒の心が讀みかねた。

其處に婢が來た。

『奥さん、それは、赤ちやんをその枕にねかせて、そして自分を抱いて呉れろと言ふんですよ。』

『まア……』

母親も呆れざるを得なかつた。

『本當に、多喜ちやんの賢いこと、……さうですね、かうするんですねえ、』と母親の手から赤兒を抱取つて、婢が其枕に寢かせてやると、多喜子は喜んで母親の膝の上に行つた。

『まア、ねえ、誰も敎へないでもねえ……何だか恐いやうな氣がするねえ。』

母親は深い淺間しい人の心を見たやうな氣がした。

それから多喜子はいつも其枕を母親の前に持つて來た。

十一

冬も過ぎて春が來た。

子供の發達には障るものがなかつた。馴れるといふことには常に著しい發育が伴つて居た。

めるやうに言つて聞かせても何うしてもそれは解らなかつた。母親の體に寄りかゝつて、無理やりに膝の上に乘つて、冷たい手をその胸の中に入れた。

『しやうがない兒ねえ、本當に。』

母親はかう言つて、赤兒を傍の小さい蒲團の中に寢かした。

多喜子は喜んで、躍り上つて、飛びつくやうにして母親に抱かれて來た。

ある日、多喜子は赤兒のいつもする紅色木綿の小さい枕を母親の傍に持つて來て、何かわからぬことを頻りに言つて居た。

『おんぶするのかえ？』

母親はかう言つて、抱いて居た赤兒を鳥渡下に置いて、其處にあつた結付紐を取つて、小さい枕を其の脊に負はせてやらうとした。

多喜子はイヤ〳〵をして脊を外した。

『何うしたのさ、此の子は？　おんぶしようと言ふのぢやないのかえ。』

母親は再び赤兒を抱き上げた。

多喜子は頻りにむつかりながら、その小さい枕を母親につきつけることを止めなかつた。

『何うしたのさ、本當に。それぢや、多喜ちやんがこの枕をして、ねんねをしようと言ふのかえ？』

十

けれど幼兒の心は常に變つた。

滿足して居る時には、おとなしく遊んで居るが、寒くなるとか飢じくなるとかすると、すぐ母親を思ひ出した。

母親を思ひ出すと、其膝に抱かれて居る赤兒を續いて思ひ出した。

母親が乳房をふくませて、赤兒を眠らせようとして居ると、多喜子は其傍に遣つて來て、ぴしやりと頭を打つて行つた。

またある時は、パッチリと開いた赤兒の眼に、あぶなく指を入れようとすることなどもあつた。

段々寒くなるにつれて、朝晩は可哀相であつた。朝は早く目を覺した。暖かい床の中でもまだ一人では寢て居なかつた。多喜子は着物を着せて貰つて、母親の赤兒を抱いて寢て居る枕元に來ては常に坐つた。

『かアちやん、ねんね。』

かう言つては泣いた。

大きい子供達を學校へ出して遣つて、中の間の火燵に母親が赤兒を抱いてあたつて居ると、其時も屹度、多喜子は其處に遣つて來て、自分も一緒に抱かれようとした。赤ちやんが居るからと、噛んでふく

當てようとはしないが、それでも乳首をいぢくり廻したり、新に張り切つた暖かい乳房に顏を押附けたりした。

母親は、

『これは、赤ちやんのお乳ね。』

わざとこんなことを言つて、はだけた胸の襟を合せて藏つて見せる。生れた兒を抱いて、乳を飲ませて居る處に、多喜子がちよろ〳〵と這つて來て、めづらしさうにぢつと見て居ることなども時にはある。何うかすると、機嫌が惡く、癇癪を起して、母親の後を追つて困ることもあるが、大抵は平氣で、莞爾して居た。

『ねんね――赤ちやん。』

などと言つて指して居る。

『よくしたものさね、赤ん坊が出來れば出來たて、何うかかうか廻つて行くものだねえ!……これで、本當に多喜ちやんが、この夏頃のやうに難かしかつたら、それこそ本當に里子にでもやらなければ仕方がないんだけれどね。』

手傳ひに來た姉はこんなことを言つた。

夜中に眼覺めた時と、朝起る時とは常にむづかつて泣いた。

枕元にはミルクの罐が置かれたり、甘藷のふかしたのが用意されてあつたりした。泣き出すと、吸口を宛がつてやつた。それでも猶泣き止まぬ時には、甘藷を持たせて何彼と賺した。

それによく粗相をした。家の人々が寢る時には、屹度一度づつ起して小便を遣つてやるのが例になつて居るが、此頃では咽喉を乾かせてよく湯や水を飲むので、何うかすると、夜中にぐすり遣つて居ることなども度々あつた。それも、其時は屹度身體を動かしたり、聲を立てたりするので、少し注意さへすればすぐわかるのであるが、眠い盛りの婢などにさうした餘裕を求めることは出來なかつた。

物干竿にかけられた濡れた蒲團や毛布に朝日がいつも當つて居た。

子供の多い家では、お宮まゐりまでを暢氣に産室に送るなどといふことは出來なかつた。二七夜を過ぎた頃から、産婦はもう茶の間に出て來て働いた。新たに生れた兒は、古い肩掛で昆布卷のやうに卷かれて、母親の腕に抱かれたり姉の脊に負はれたりした。目をパッチリとあけて、指を遣つても目ばたきもせずに居る。

『本當に毛の濃いお子ですことねえ、』などとお祝に來た人々が皆言つた。

母親が長火鉢の前に出て居ることなどがあると、多喜子は屹度、『かアちゃん、かアちゃん』とめづらしい人を見付けたやうに遣つて來て、膝の上に乗つて、いきなり懐の中に手を入れた。流石にもう口を

清と勉とは、額を合せて、熱心に西洋きしやごを彈いて居た。

繁子は急に、

『多喜ちやん、ねゝさんの處へ行つて見ませうねえ。』

かう言つて多喜子を負つて長い緣側を通つて產室に來た。產室には丁度姉も居なかつた。

母親の傍に寢かしてある赤兒の處に繁子は多喜子を下した。

『ほーら、御覽なさい、好いねゝさんでせう？』

多喜子は生れた兒と始めて相對した。しかし別に何の感覺をも起さなかつた。繁子は、

『そら、好い兒でせう、そらお目目を明いて？』

かう言つて見せた。

向うむきに寢て居た母親は、子供等の氣勢を聞いて此方を向いた。其顏を見ると、多喜子はいきなり其方へ行つた。『かアちやん、かアちやん。』

其處に姉が入つて來た。

九

其前から、夜は婢が多喜子を抱いて寢ることにして居た。大分馴れては居たが、それでも夜寢る時と、

婢はやがて呼ばれた。産室の障子を半ば開けて婢が入つて來た。

母親は笑つて見せた。

『ほら、かアちやん、居たでせう。』

かう婢は多喜子の顔を寢て居る母親の方へ向けて見せた。

『かアちやん。』

と多喜子は身をもがいた。

姉は母親の枕元にあつた朝鮮飴を一つ取つてやつた。

『かアちやん、ねんねして居たでせう。かアちやん。キーキ。』

かう言つて婢は緣側の方へ出て行つた。多喜子は別にむづかりもしなかつた。

夕餉の時には、下におりて、おとなしく婢に匙でお粥をやしなつて貰つて居た。それに、機嫌も好かつた。

姉は產婦の用を足しに其處へ來て、

『多喜ちやん、本當におとなしいね。……これぢや苦勞にしたほどのことはなかつたね。』

かう言つて通つて行つた。

夕方は整子や勉などと一緒になつて遊んで居た。今日買つて貰つたピイ〳〵などを鳴らして居た。

つくりしたやうな顏をして、棒立に立つて、大きな枕をして寢て居る母親と微かな啼聲を立てゝ湯を使はせられて居る赤兒とを比べて見て居た。鏊子は逸早く近所へ吹聽して步いた。

婢が多喜子を負つて夕日の當つた緣側の處に立つて居ると、產室から出て來た淸は、莞爾と笑つて其處に來て立止つた。

『淸さん、いゝねゝさんが出來たでせう?』

婢が笑つてかう訊くと、

『何でい、あんなあかんぼなんか。』

かう言つて、婢の袖の處をすり拔けて活潑に向うへ行つた。

やがて母親は耳敏くも多喜子の聲を聞きつけた。

『もう、歸つて來たかえ? 多喜子は?』

『え、歸つて來たやうだよ。』

傍に居た姉がかう言つた。

『おとなしくして居ると見えるねえ。』

『え、大丈夫ともねえ。』

『鳥渡、此處へつれて來て……』

『うむ、うむ。』

かう多喜子は頭を動かして見せた。

『よく解るねえ、多喜ちやんは。……多喜ちやんはもう姉さんなんだから、あん〳〵、いや〳〵よ。』

『あん〳〵――いや〳〵。』

多喜子は機嫌よく口眞似して見せた。

『さう〳〵……お利口ねえ、おとなしくしますねえ、これからは。』

路行く人は、唯おんぶをした可愛い兒と頻りに無邪氣な會話をして行く庇髪に結つた色の白い娘を振返つて見た。

安産――女の兒といふ報知がやがてあつた。婢は午後四時過の日影を受けて、今朝來た路を家へと歸つて來た。

下へおろすと、母親を思ひ出すといけないと言ふので、矢張ねんねこで負つて居た。産室は奥の六疊にある。茶の間から通つて行く長い緣側の硝子戸には、冬の夕日が一面にさして、庭の山茶花の紅白の絞りが美しく見えた。子供等は大騒ぎをして一人々々産室の中を覗きに行つた。整子はまだ產れぬ中から、障子を明けて伯母さんに叱られたり、『子供は彼方へ行つて入らつしやい、今に好いねゝさんを見せて上げますから、』と産婆に言はれたりした。盥でお湯を使はせて居る時には、丁度勉が入つて來て、び

――傍に居ちや、お產婦さんも氣をもみなんすからなア。』

婢はかう言つて長火鉢の前に坐つた。

產婦の姉に當る未亡人は、支度をしてそこ〳〵に出て行つた。

多喜子は未亡人の一人娘と婢とを相手にして終日長く遊んだ。牛乳も一合はぢき飮んで了つて、近所の牛乳屋から又一合買つて飮ませた。腸を病んでから、食物には嚴しく注意を拂つて居たが、消化の好いカステラや朝鮮飴などは常に食はせた。多喜子もいつの間にか段々食物にも馴れて來た。夏の頃のやうなヒステリックなところは此頃ではなくなつて、今でも母親の後は追つても、以前のやうに烈しく泣くことはもうなかつた。子供の發達――いかやうな迫害の中に居ても、自然に發達して行く子供の力といふやうなことを人々に思はせた。

次第に智慧もついて來た。

その一日は暢氣に遊んだ。其家の娘に負はれて、近所の牛モウ〳〵を見に行つたり、娘の友達の家のお池の金魚を見せて貰つて、躍り上つて喜んだりした。娘は歸りに、角の玩具屋でピー〳〵や人形を買つて呉れた。

『もう、多喜ちやんは姉さんになつたでせうねえ……姉さんになつたらおとなしくするのよ。あんあん泣いたりなんかしてはいけないのよ。好いかえ、解つたかえ。』

多喜子はもうひきつけるやうなことはなかつた。しかし長い間腸を病んで居た。熱は除れたと思ふと出たり、出たと思ふと除れたりした。絶えず元氣の無い顏をして、大きな腹を抱へた母親の後を常に追つた。茶湯臺の傍にゑんこをしては、母親が大急ぎで拵へて與れるミルク罎の牛乳を待ち兼ねて泣いた。

八

夏も過ぎた。

秋も來てやがて暮れた。

落葉のある寒い朝、多喜子は婢に負はれて遠い處へ行つた。途中のある牛舍で、婢はミルクの罎を出して、牛乳を一合買つた。其の牛舍の家の傍には、長く取廻した柵があつて、牛が五六頭モー〳〵と啼いて居た。霜解の垣根道に、薄黄い日が當つた。

ある家の格子戸を開けて入つて、婢は出て來た丸髷の莞爾した女に言つた『奥さん、急いで行つて下さいまし、産氣が附いたやうですから。』

『さうかえ、ぢや今すぐ行くよ、彼方には誰れか行つてるのかえ。』

『私が來る前、産婆さんが見えて居ましたつけ。それに、お袋さんが昨夜から來て居ました。』

『ぢや、お前は今日は一日多喜ちやんのお守だね。』

『奥さん――大變、多喜ちやんがひきつけて――。』

けたゝましい聲で言つた。

四邊の靜けさは忽ちにして破られた。母親は唯その白く釣上げた多喜子の眼を見たばかりであつた。』

抱いたまゝ婢が慌てゝ近所の醫師に走つて行くその後を趁つて、母親も姪も續いて走つた。

桑の繁つた影が黑く道に落ちて居た。ガサ〳〵と玉蜀黍が夜風に戰いだ。小さな門の前に赤い軒燈が出て居て、衛生醫院――田野としてあつた。郊外の開けて屋敷町になるにつれて、此頃引越して來た醫師の家は畠の中にあつた。

中年の八字髯の醫師は、玄關の三疊に洋燈を持つて來させて、慌てゝ懸け込んで來た小さい患者を診察した。

多喜子は其時はもう氣が附いて、眼を大きく明いて居た。

『流動物ばかり上げるやうにしなければいけません、腸をこはして居るんですから、……ひきつけたのは、腸の熱でひきつけたんですから、腸を治すやうにしなければ駄目です。』

醫師はかう言つて聞かせた。

『誕生位で跡がお出來になると、何うしても腸を壞しますからな。』

こんなことをも言つた。

見て居る間、婢は餘りおとなしい多喜子を氣にして、ゆすり上げるやうにして幾度か顏を覗いた。

姪に、

『多喜ちやん、何うかしやしませんか、……餘りおとなしいから。』

姪は覗いて見て、

『何うもしやしないよ。顏を押附けてよく寢てるよ。』

何うも餘りおとなしい。それに體もかなり熱いし、夜風に當つては毒だからと、婢は姪がまだ見て居ようと言ふのを強ひて勸めて、夜の十時頃に月の明るい郊外の屋敷町を家へと歸つて來た。

家ではもう座敷に床が敷いてあつて、蚊帳の夜風に動くのが青く洋燈にうつつて見えて居た。母親はまだ起きて居る繁子と緣側に涼んで月を見て居た。

庭の樹の影はくつきりと黑く地上に見えて居た。

父親は居なかつた。

婢は多喜子を寢かさうと思つて、そのまゝに座敷に入つた。さて、兒を脊からそつと下して、蚊帳の中に入らうとすると、突然、多喜子は身を戰はして、アツと言つた。同時に抱いて居た婢の腕には、小さい體の固く突張つたやうな一種の力を覺えた。

慌てゝ明るいところへ來ると、多喜子は白く眼を釣り上げて居た。

『多喜ちやんの體は熱いことねえ、奥さん。』

婢は度々母親に言つた。

母親も夜抱いて寢て、

『本當に熱いねえ。餘程熱があるねえ。粒甲丹でも飮ませて見ようか。』

かう言つて、寢卷のまゝで立つて、簞笥の底を搜し廻して、古い藥袋の中から金色や銀色をした小さい粒を五つほどスヤ／＼寢て居る多喜子の口の中へ入れて遣つた。

醫師にかけようと思はぬでもなかつたが、晝の中――殊に午前は何うかすると、めづらしく機嫌の好い時があつて、獨りで何か言つて玩具をいぢつて遊んで居ることがあるので、その中には治るだらうなどと思つて捨てゝ置いた。

それでも母親は時々頭に觸つて見た。熱は矢張あつた。

月の明るい晩であつた。近所に、村の若者達のする茶番があつた。其處は村の世話役か何かの廣い庭で、稻荷さんがその一隅に祀られてあつた。新開地に住む官吏の奥さんや軍人の奥さん達は夕方からぞろ／＼出かけて行つた。郊外の林を拔けて通る風は涼しく人々の袂を吹いた。酸漿提灯が二つ三つ樹の枝に釣るされて赤く見えて居る。婢は多喜子を負つて、丁度其時來合せて居たハイカラな姪と一緒に、涼みがてら見に出かけた。

たつて、……子供は一體泣くもんだから構はんけれど、餘りいろ〳〵ちのを遣つて身體を壞しちや大變だから、注意しなけれやいかんよ。』

父親はこんなことを言つた。

痼癪は矢張强かつた。此頃ではもう覺束ないながらも立つて歩くことが出來るやうになつたが、しかし以前のやうに眼に見えた發達はしなかつた。『ねんね――ねんね』の次に、『うま〳〵――うま〳〵』を覺えて、次に、『かアー』から『かアちやん』と何うやらかうやら母の名を呼ぶやうになつた。母親の厠へ行つた後までも追ひ懸けて、『かアちやん、かアちやん』と呼んで泣いた。痩せたのが著しく目に立つて、曾て肥えて居た股のあたりも大分肉が落ちて居た。

ある日、體が燒けるやうに熱かつた『奥さん多喜ちやんが大變熱がありますねえ、』と婢が言つた。スヤ〳〵と寢て居たかと思ふと、不意に眼を覺して、けたゝましく泣き出した『風邪を引いたと見えるねえ。……でなくつてさへ喧しくつて困るのにねえ、』と母親は暢氣なことを言つた。

下に寢て居ない時は、大抵は婢の脊に負はれて居た。

母親の顏を見て、恨めしさうにべそをかいて居る時などもあつた。

今まで何んな物にでも手を出して、勉や淸の持つて居るものをさへ欲しがつたのに、熱が出てからふつつりと物を食はなくなつて、あんこを持たせてやつても、それを喜んで取らうとはしなかつた。

にあるボール箱の中から西洋きしやごを出して何か獨語を言ひながら彈き始めた。母親は子供等の順々に成長くなつて、段々世話の燒け方が違つて來ることなどを考へた。午になると、勉は學校から歸つて來て、肩にかけた雜嚢をドサリと緣側に音させて置いて、汚れた足でドカ〳〵と座敷へ入つて、

『母さん、何か。』

行儀が惡いといくら叱られてもたしなめられても、決してこの『母さん、何か』をやめなかつた。

七

腹の兒が目に立つやうになる頃には、多喜子は常に險しい青い顏をして居た。みづ〳〵した頰の艷などはもう見たくも見られなかつた。乳が出ぬので、ついいろ〳〵なものを食はせるやうになる。鹽煎餅、あんころ、果物、くづ湯――とりわけ甘いものを好んで食つた。むづかる時には、わるいと知りながら、つい傍にあるものを持たせて機嫌を取つた。段々暑い夏は近づいて來た。

其頃多喜子は腸を惡くして居た。汚いものをしくじつては、よくヒイ〳〵泣いて居た。母親も婢も、此頃ではもうほと〳〵持餘して困り切つて了つた。いつそ里子にでも出さうかなどと母親は心から思つて、眞面目に父親に相談したことなどもあつた。

『物を食はせさへすれや好いと思つて、無闇に食はせるから、腸をこはすんだ。泣く方はいくら泣い

母親は時々こんなことを獨りでつぶやくやうになつた。癇癪持になる、氣むづかしやになる。何ぞと言つてはヒー／＼泣く。今まで種々な藝を覺えて、可愛らしく發達して來た子とは丸で別な子のやうになつて了つた。今までの子供にもそれはいろ／＼な變遷はあつた。可愛くなつたり、氣難しくなつたり、厭になつたりした。智慧のつく毎に、常に子供の心持の推移をいろ／＼に其前に展げて見せた。しかし今度のやうな烈しいことはなかつた。

多喜子が晝寢をして居る時など、ぢつと靜かに裁縫の前に坐つて居ると、腹の中の兒が頻りに動いた。しかもをり／＼は針を留めて、ぢつと腹の處を見詰めて見るほどその動くのが分明と解つた。神經質になつた母親にはメリンスの帶の模樣が動くやうにすら思はれた。すると、まだ生れぬ兒のことが頻りに想像されて來る。腹の中に居て、乳を呑んで居る兒――まだ見ぬ兒！　針を運んでは止め、止めては又運んだ。晴れた日の山の手は靜かで、日の光が流るゝやうに庭先にさし込んで來た。物音と言つては、雀の百囀があたりの靜けさを破る位のもので、いつも通る物賣の聲も聞えない。次の間に寢て居る多喜子の小さい鼾さへ微かにそれと聞取られた。

母親の心は絶えず動く腹の中の兒に引かれて居た。

其處に、小さい足音がして、遊びに行つた淸が『母さん』と言つて障子を明けて入つて來た。おとなしく長火鉢の前に坐つて、母親のせつせと針を運ばせて居るのをぢつと見て居たが、やがて茶箪笥の上

當らなかつた。婢は多喜子を負つて、近所の場末の小間物屋へ行つてそれを買つて、歸りに牛乳屋から牛乳を一合取つて來た。

多喜子は始めは何うしてもそれを飲まなかつた。母親も婢もいろ〳〵勸めて見たが、矢張いけない。それを何うやらかうやら飲むやうにするのは容易でなかつた。母親は成たけ乳を飲ませないやうにした。すると多喜子は火の付いたやうに泣き出す。兎に角牛乳の罎の吸口に吸付かせるまでには、尠なからぬ骨折が要つた。後には、多喜子は罎を片手に玩弄にして、母親の顏を見ながら、拙さうにして飲んだ。

『何うでせう、あんな顏をして。』

婢はかう言つて笑つた。『矢張拙いんでせうねえ。本當のお乳に比べてはねえ、多喜ちやん。……奥さん、お腹が空いたんですよ、御覧なさいよ、そら、もう、あんなに飲んで了つて……』

『これから、成たけ牛乳とおまんまで馴らすやうにしなければいけないからねえ。旦那様もさう仰しやるし、身體にも悪いんだつて言ふからねえ。』

母親はかう言つた。

六

『もう本當に多喜子には厭になつて了つた。』

くして居るが、それを離れると、ちきむづかり出した。

ある親戚のお婆さんが言つた。

『本當にお可哀相ねえ。後が出來ると、乳が何うしても細くなりますからねえ。少し牛乳でも上げて見たら何うですかねえ。おまんまもう柔かくして上げれば、上げても好う御座んすから、精出して上げて見るやうになさいましよ。後が早く出來ると、本當にお可哀相で。』

父親はまた母親に言つた。

『お前、此頃、もう乳が出なくなつたんぢやないか。それで多喜子はあんなに難かしくなつたんだらう。此頃、何だか少し瘦せたやうだ。』

『まだ、出ないことはないんですがねえ。』

かう言つて、母親は胸をあけて、乳房をしぼつて見せた。元のやうに多くは出ないが、しかし少しは出た。

『成たけ離して乳を飮ませないやうにしなくつてはいかんよ。醫師に言はせると、後に子供が出來てからは、乳を飮ませてはいけないんだつて言ふよ。』

『さうですつてねえ。ちつと牛乳でも飮まして見ませう。』

勉の時に使つて、不用になつて、藏つて置いたミルクの罐を出した。罎と吸口とが何處へ行つたか見

空にはキラ〳〵光つた。

四

乳は段々細くなつて來た。乳房も次第に黑くなつて、今までのやうに張り切つたみづ〳〵しい暖かい皮膚の色はもう見られなくなつた。腹の中の兒の大きくなるにつれて、母親の姿も形も段々衰へて來た。母親の顏は靑い時があつたり、赤い時があつたり、厭に煤氣立つて艶が失せたやうに見える時があつたりした。非常にはしやいで面白さうに見える時があるかと思ふと、今度はすつかりふさぎ切つて、默つて一日口も利かずに居ることなどもあつた。多喜子のまつはつて來るのを殊にうるさがつて居るやうに見える時もある。

多喜子は以前よりも一層母親の後を追つた。母親の姿が鳥渡でも見えないと、すぐ聲を擧げて泣いた。

五

『本當に多喜ちやんの氣難かしくなつたこと、何うしたつて言ふんでせうねえ、奥さん。』

婢も持扱つて時々こんなことを言つた。泣き出すと、何時までも泣き止まない。おとなしく遊んで居ることなどはもう尠くなつた。段々細くなつて來た乳でも、兎に角それに縋りついて居る中はおとなし

夕方は忙しかつた。其處には茶湯臺が置かれて、煮た物からはもう薄暗くなり懸けた室に湯氣が白く立つて居た。今まで緣側の近くで西洋きしやごを彈いて居た子供等は、やがて母親に呼ばれて、茶湯臺の周圍に集つた。

整子が夕飯を終つて、いろ〳〵に賺して抱起した頃には、多喜子ももう泣き勞れて居た。『ねえ、好い兒だねえ、姉ちやんに負ぶしておんもに行きませうねえ。』かう言つて整子は小さい妹を後ろに負つた。多喜子はまだ歔欷げて居たが、それでも今度は素直に負はれて行つた。

『好い兒だねえ、多喜ちやんは。……誰が泣かしたえ。母ちやんが。母ちやん、めんめして上げませうねえ。』

こんなことをませた口吻で言つて、整子が緣側を下りて、下駄を穿いて行く氣勢が多喜子の歔欷に交つて聞えた。

戶外はもう薄暗かつた。近所の牛舍で牛の鳴く聲がをり〳〵聞えた。垣について裏に廻ると、葉が落ちて幹ばかりになつた栗の林が烟るやうに立つて居るのが見えた。向うの家屋の引窓から夕炊の烟が騰つて、もう燈火のついた家もちらほらした。多喜子はまだ歔欷げて居た。

『もう、ねえ、好い兒だから泣くんぢやないの。』かう言つて、後ろに負つた子を見かへるやうにして、『ホラ、上を御覽、お星樣が。餘り泣くと、怖いよ。』

今までにこんなためしはなかつた。何んなにむづかつても、母親が膝に抱き上げて、胸をひろげて、白い大きな乳房を見せると、泣顔をそれに押附けて、すぐ泣き止んで了ふのが例であつた。『ヤアい、母さんのお乳にだまされた、ヤアい、』などとハイカラな十八になる此家の姪に囃されるのが例であつた。それが何うしたのか、其日は母親が抱上げてだましても後ろに反り返つて聲を擧げて泣いた。乳房を宛がつて遣つても、それを押附けるやうにして顔を背けて了つた。

疊の上に仰向けになつて、肥つた兩足をじたばたさせて、いかにも悲しさうにして泣いた。

『何うしたんだらう、まあ、此子は。』

母親も終には呆れて了つた。

其處へ婢が來てなだめ賺した。ふだんよく懐いて居て、いつもは自ら進んで其脊に負はれて行くほどであるが、今日はそれも甲斐がなかつた。抱き起さうとすると、矢張後ろに反りかへつて了つた。

『さあ、多喜ちやん、私とおんもに行きませうかねえ。』

田舎出の肥つた大きな婢は、幾度となくそれを抱起した。その度に多喜子は火のつくやうに烈しく泣いた。

『構はんでお置きよ、何うかしたんだから……さういふ時には却つてその儘にして置く方が好いよ。』

母親の頬には血が上つて居た。

父親はかう言つた。

『けれど、初めは男の兒の方が樂ですねえ。勉でも清でも、生れてから百日位は滅多に泣いたことなぞはない位でしたからねえ。……それから比べると、整子……あれには本當に困りましたねえ。今でこそ、あんなに丈夫になつて、言ふことをきかなくなりましたけれど。』

『それは男の兒の方が何處かサッパリしたところがある。』

『さうねえ、女の兒は一體ぐじぐじして、氣分に面倒なところがありますねえ。』

『その代り、男の兒は大きくなつてからが育て難いさうだ。十六七になつてからが……』

『さうですかねえ。』

『それから……整子の骨の折れたのは、氣分が難かしかつたばかりではないねえ。初めてで、まだ馴れなかつたといふやうな處もあるねえ。』

『それはさうですねえ。』

整子は十一歲、勉は八歲、清は六歲になつて居た。

三

ある日の夕方、多喜子は泣いて泣いて何うしても泣き止まない。

それに、障子を破ることゝ、抽斗を明けることとが大好きであつた。障子の棧につかまり立ちをして、おとなしくぢつとして居る時には、屹度小さい穴を見附けて、それに小さい指を入れて、段々それを大きくすることに骨を折つて居た。バリ／＼と紙の破れる音を聞くのが子供には何よりもめづらしく感じられるやうに見えた。抽斗は火鉢の抽斗、茶箪笥の抽斗、裁縫箱の抽斗、凡そ引手のついて居るもので、自分の手に合ふものは何れも是れもあけて見た。そして中から茶呑茶碗を出す、茶托を出す、煎餅の入つた袋を出す、古暦を出す、唐辛子を出す、鳥の羽箒を出す、母親が來て見ると、總ての物を出してすつた後に、肥つた足を無理やりに二本入れて、そして莞爾と笑つて居た。

時には裁縫箱の抽斗を三つとも殘らず開けて、紅だの、紫だの、茶色だの、紺だの、淺黃だのゝ小片を其處等一面に散らばして居ることもあつた。

『何て、まあ、いたづらな子だらう。』

と母親はいつも呆れた。

『整子の時には弱くつて困つたけれど、今度の子はまあ丈夫なこと、いたづらなこと……これぢや今にどんなにお轉婆になるか解りやしませんよ。』

などと父親に言ふことなどもあつた。

『女の兒と謂ふものは、初めは育て惡いものだがな……矢張、多喜子は一體が丈夫なんだねえ。』

二

多喜子は漸くつかまり立ちが出來る位であつた。莞爾といつも笑つて見せた。あ――とか、む――とかまだ言語でない言語を常に立てた。何方かと言へば、丈夫ないたづらな兒で、一時も手足を動かさずに居ることはなかつた。

それにつひぞ人見知をしなかつた。よく誰の手にも抱かれて行つた。

『チヨンキナ、チヨンキナ、チヨン／＼キナ、キナ、キナ、チヨンガナノハデ、チヨチヨンガチヨン――』

母親が膝の上に抱いて、かう歌つて、搖ぶつて見せると、多喜子は嬉しさうに躍り上つて、小さな手を合せて、チヨウチチヨウチチヨウチの眞似をして高笑ひをした。

カイグリカイグリも出來れば、トウ／＼ノメも出來た。バ、バ、ア、ア、タ、タなどと意味もなく語つた。イヤ／＼と母親が言つて見せると、機械人形のやうに頭を矢鱈に振つた。

玩具などをもうぢつとして見ては居なかつた。でん／＼太鼓などを持つて遊んで居るかと思ふと、何時の間にかそれをメチヤ／＼に壞して居た。跂ふことに熟練した兒は、鳥渡も眼が離されなかつた。今、其處に居たかと思ふと、もう何處かに其の姿が見えなくなつてゐた。時には高い緣側の處へ行つて、危ないなどといふことは少しも知らずに、平氣で下を覗いて居ることなどもあつた。

幼　兒

一

多喜子は此のごろ肥つた兩足を立てゝ、胯ぐらかゞみといふことをした。」

そして廻らぬ舌で、

『ねんね、ねんね。』

母親は蒼い顔をして居た。『もう、後が出來たと見える。餘り早いと、多喜ちやんが可哀相ですがねえ、』などと言ふものもあつた。姉に當る人は『お前、またお目出度いね、……好いさね、出來るものなら今の中にたんと拵へて置くが好いよ。あとで樂が出來るから、』と言つて笑つた。

多喜子を見ては、

『何うも不思議さね、後が出來ると、何處でも屹度ねんね、ねんねつて、あゝいふ眞似をするからねえ。不思議さね。……矢張後が出來たのが、こんな小さな兒にも解るんだねえ！』

幼兒外六編

しく泣いて居たといふことを上さんから聞いた。

『何處の娘だか。』

などと其時上さんが言つた。

處がそれから二年ほどして、其墓參をした娘が羽生の小學校の女教員をして居るといふ話を聞いた。

『あの娘は林さんが彌勒で教へた生徒だとサ、』と上さんは何處かで聞いて來て和尚さんに話した。

秋の末になると、いつも赤城おろしが吹渡つて、寺の裏の森は潮のやうに鳴つた。その森の傍を足利まで連絡した東武鐵道の汽車が朝に夕に凄じい響きを立てゝ通つた。

荻生さんも覗いて見た。

やがて棺が穴に下される。土塊のバタ〳〵と棺に當る音がする。時の間に墓は築かれて、小僧の僧衣姿が黑く其前に立つたと思ふと、例の調子外れの讀經が始まつた。暗い闇の中の提灯は、木槿垣を脊にして立つた荻生さんの蒼白い顏と父親の禿頭と其他の群の圓く並んで居るのを微かに照した。

六十四

一年ほどして、其處に自然石の石碑が建てられた。表には林淸三君之墓、下に辱知有志と刻んであつた。荻生さんと郁治とが奔走して建てたので、その醵金者の中には美穗子も雪子もしげ子もあつた。一人息子を失つた母親は一時は殆ど生効もないやうにまで思つたが、しかしさう悔んで嘆いてばかりも居られなかつた。かれ等は老いても猶獨り働いて食はなければならなかつた。母親は息子の死んだ六疊でせつせと裁縫の針を動かした。父親の禿頭は矢張その街道にをり〳〵見られた。

墓には絕えず花が手向られた。花好の母親は其節每の花を携へて來ては常に其前に供へた。荻生さんも羽生の局に勤めて居る間はよく墓參をした。ある秋の日、和尙さんは、庇髮に結つて、矢絣の紬に海老茶の袴を穿いた女學生風の娘が、野菊や山菊など一束にしたのを持つて、寺の庫裡に手桶を借りに來て、手づから前の水草の茂つた井戸で水を汲んで、林さんの墓の所在を聞いて、其前で人目も忘れて久

荻生さんは菓子の竹皮包を懐に入れてよく書寢に此處に來た頃のことを思ひ出して、かう心の中で言つた。

式が濟んで、階段から父親が下りると、其處に寺の上さんが立つて居て、

『この度はまア……飛んでもないことで……それにお悔みにもまだ上りも致しませんで……生憎留守なものですから。』

と、きれぐ\の挨拶をした。

夜はもう薄ら寒かつた。單衣一枚では何となくヒヤく\する。棺がやがて人足にかつがれて墓地へと運ばれて行く。

選ばれたのは、畠と寺とを劃つた榛の木の近い處であつた。ひよろ長い並木の影が夜の闇の中に微かにそれと指さゝれる。垣の外に徒らに伸びた桑の廣葉がガサく\と夜風に靡く。

穴は型のごとく掘つてあつた。赤土と水が出て、四邊は踏立てられぬほど路がわるかつた。組合の男は逸早く草履を踏込んで、買立の白足袋を散々にしたと言つて居る。穴掘男は頭髪まで赤土だらけにしながら、『どうも水が多くつて、かい出してもかい出しても出て來るので、困つたちやねえだ!』などと言つた。

父親は提灯を振翳して、穴をのぞいて見た。穴の底の赤く濁つた水が提灯にチラく\映つた。

の高窓から洩れたランプの光線がキラ〳〵光つた。樹の黑い影と家屋の黑い影とが重り合つた。

棺が小路を出る頃には、町ではもう起きて居る家はなかつた。組合のものが三人、大家のあるじ、それに父親と荻生さんとがあとについた。提灯が一つ造花も生花もない列をさびしげに照して、警察署の角から、例の溝に沿つた道を寺へと進んだ。

溝の錆びた水が動いて行く提灯の光に微かに見えた。蔽ひ冠さつた樹の葉裏が明るく照されたり消えたりした。路傍の草にも、畠にも、藪にも蟲の音は絶えず聞える。一行は步むにつれてバタ〳〵と足音を立てる。誰も口をきくものはなかつた。

寺の本堂は明放されて、如來樣の前に供へられた裸蠟燭の夜風にチラ〳〵するのが遠くから見えた。やがて棺は舁き上げられて、讀經が始まつた。

丈の低い小僧はそれでも僧衣を着て、拂子を持つた。一行の携へて來た提灯は灯をつけられたまゝ、人々の並んだ後ろの障子の棧に引つかけられてある。廣い本堂は蠟燭の立てられてあるに拘はらず何となく薄暗かつた。父親の禿頭と荻生さんの白地の單物が微かに其中に透されて見える。

讀經の聲には重々しい處がなかつた。脈にさえ走つたやうな調子であつた。鉦がけたゝましい音を立てゝ鳴る。

『此處でかうして林君のおとむらひをしようとは夢にも思ひがけなかつた。』

が並んでつけてあつて、國旗が闇にもそれと見える。二三日前から今日占領の祭をするといふ廣告を彼方此方に張出したので、近在からも提灯行列の群が幾組となく遣つて來た。荻生さんは危篤の報を得て、其の國旗と提灯と雜沓の中を、人を突退けるやうにして飛んで來た。一時間ほど前には、清三は其の行列の萬歲の聲を聞いて、『今日は遼陽占領の祭だね、』と言つて、その賑かな聲に耳を傾けて居た……。

今、また其行列が通る。萬歲を唱へる聲が賑かに聞える。やがて暇を告げた醫師は、丁度其處に酸漿提灯を篠竹の先につけた一群の行列が、子供や若者に取卷かれてわい〳〵通つて行くのに逢つた。

『萬歲！　日本帝國萬歲！』

六十三

晝間では葬式の費用がかゝると言ふので、其翌日、夜の十一時にこつそり成願寺に葬ることにした。荻生さんは父親を扶けて何彼と奔走した。町役場にも行けば、桶屋に行つて棺を誂へても遣つた。和尙さんは戰地から原杏花が歸るのを迎へに東京へ行つて生憎不在なので、清三が本堂に寄宿して居る頃、よく數學を敎へて遣つた小僧さんがお經を讀むことになつた。近所の法類から然るべき導師を賴むほどのお布施が出せなかつたのである。

夜は星が聰しげにかゞやいて居た。垣には蟲の聲が雨のやうに聞える。椿の葉には露が置いて、大家

六十二

枕元に坐つた醫師の姿がくつきりと見えた。

父親は其れに向つて默然として居た。母親は顔を掩つて、絶えず歔欷げた。

室の中央に吊つたランプは、心が出過ぎてホヤが半ば黑くなつて居た。室には陰深の氣が充ち渡つて、あたりがしんとした。鬚を長く、頰骨が立つて、眼を半開いた清三の死顔は、薄暗いランプの光の中におぼろげに見えた。

醫師の注射はもう効がなかつた。

母親の歔欷げる聲が頻りに聞える。

其處に、戸口にけたゝましい足音がして、白地の絣を着た荻生さんの姿があわたゞしく入つて來たが、づか〳〵と醫師と父親との間に割込んで坐つて、

『林君！……林君！　もう、たうとう駄目でしたか！』

かう言つた荻生さんの頰を涙はホロ〳〵と傳はつた。

母親はまた歔欷げた。

遼陽占領の祭で、町では先程から提灯行列が幾度となく賑かに通つた。何處の家の軒にも鎭守の提灯

とさも〱うれしさうに言つた。

それからいろ〱な話を母親にしてきかせた。二千何人といふ死傷者の話をもしてきかせた。戰爭の話をする時は、病氣などは忘れたやうであつた。蒼白い瘦せた顏にもほのかに血が上つた。醫師が來て、新聞などは讀まない方が好いと言つた。病人自身にしても、細かい活字を辿るのは隨分難儀であつた。手に取つても五分と持つて居られない。疲れて、ぢき傍に置いて了つた。時には半分讀み懸けた頁を、鬚の生えた瘦せた顏の上に落して、暫くぢつとして居ることなどもある。

日本が初めて歐洲の强國を相手にした曠古の戰爭、世界の歷史にも數へられるやうな大きな戰爭――その華々しい國民の一員と生れて來て、其名譽ある戰爭に加はることも出來ず、その萬分の一を國に報ゆることも出來ず、其喜悅の情を人並に萬歲の聲に顯はすことすらも出來ずに、かうした不運な病の床に橫つて、國民の歡呼の聲を餘所に聞いて居ると思つた時、淸三の眼には涙が溢れた。

屍となつて野に橫はる苦痛、その身になつたら、名譽でも何でもないだらう。父母が戀しいだらう。祖國が戀しいだらう。故鄕が戀しいだらう。しかしそれ等の人達も私よりは幸福だ――かうして希望もなしに病の床に橫つて居るよりは……。かう思つて、淸三は遙かに滿洲のさびしい平野に橫つた同胞を思つた。

と、今度は鬱積した歡呼の聲が遼陽占領の喜ばしい報に連れて、凄じい勢で日本全國に漲り渡つた。

遼陽占領！　遼陽占領！　其聲は何んな暗い汚い巷路にも、何んな深い山奥のあばら家にも、何んなあら海の中の一孤島にも聞えた。號外賣の鈴の音は一時間と言はずに全國に新しい詳しい報を齎らして行く。何處の家でも其話が繰返される。其の烈しかつた戰のさまがいろ〳〵に色彩を傅けて語り合はされる。太子河の軍橋を燒いて退却した敵將クロパトキンは、第一軍の追擊に逢つて全く包圍されて了つたといふ處報さへ一時は信用された。

全都國旗を以て埋まるといふ記事があつた。人民の萬歲の聲が宮城の奥まで聞えたといふことが書いてあつた。夜は提灯行列が日比谷公園から上野公園まで續いて、櫻田門附近馬場先門附近は殆ど人で埋らるゝ位であつたといふ。京橋日本橋の大通りには、數萬燭の電燈が晝のやうに輝き渡つた。花電車が通る度に萬歲の聲が終夜聞えたといふ。

清三はもう充分に起上ることが出來なかつた。容體は日一日に惡くなつた。昨日は便所から這ふやうにして辛うじて床に入つた。でも、其枕元には國民新聞と東京朝日新聞とが置かれてあつた。痩せこけた骨立つた手が時々それを取上げて見る。

遼陽の占領が始めて知れた時、かれは限りない喜悅を顔に湛へて、

『母さん！　遼陽が取れた！』

容易に取れないなんて、悲觀說が多いぢやないですか。常陸丸に色々必要な材料が積んであつた相です
な。』

こんなことを言つた。

二三日して、今度は關さんが來た。女郎花と薄とを持つて來て吳れた。彌勒の野から採つたのである
と言つた。母親は金盥に水を入れて、取敢へず、それを病人の枕元に置いた。淸三はうれしさうな顏を
してそれを見た。

關さんはやがて風呂敷包みから、紙に包んだ二つの見舞の金を出した。一つには金七圓、生徒一同よ
りとしてあつた。一つは金五圓、下に教員連の名前がずらりと並べて書いてあつた。

六十一

遼陽の戰爭はやがて始まつた。國民の心は總て滿洲の野に向つて注がれた。深い沈默の中に却つて無限
の期待と無限の不安とが認められる。神經質になつた人々の心は鳥渡した號外賣の鈴の音にもすぐ驚か
されるほど昻ぶつてゐた。さうして居る間にも一日は一日と經つ。鞍山站から一押と思つた首山堡が容
易に取れない。第一軍も思つたやうに出ることが出來ない。雨になるか風になるか解らぬ中に、また一
日二日と過ぎた。――その不安の情が九月一日の首山堡占領の二號活字で忽ちにして解かれたと思ふ

暫くして、

『原さんから便りがありますか？』

『え、もう歸つて來ます。先生も海城で病氣にかゝつて、病院に一と月も居たさうで……來月の初めには歸つて來る筈です。』

『それぢや遼陽を見ずに。……』

『え。』

衰弱した割合には長く話した。寺にゐる時分の話なども出た。』

其翌日は彌勒の校長さんが見舞にやつて來た。」

『こんなになつて了ひました。』

と細い手を出して見せた。

『學校の方はいゝやうにして置きますから、心配せずにお出でなさい、缺席屆さへ出して置くと二た月は俸給が下りるんですから。』

校長さんはかう言つた。

戰爭の話が出ると、

『遲くも、休暇中には旅順が取れると思つたですけれどなア。餘程難かしいと見えますな。此頃ぢや

といふ噂ですな。』

『第九に第十二に、第一に、……それぢやこれで四個師團……』

『どうもあそこを早く取つて了はないでは仕方がないんでせう。』

『中々頑强だ！』

と言つて、病人は咳嗽をした。

やがて、

『遼陽の方は？』

『あつちの方が早いかも知れないつて言ふことですよ。第一軍はもう楡樹林子を占領して遼陽から十里の處に行つてますし、第二軍は海城を占領して、それからもつと先に出てゐるやうですし……』

『本當に丈夫なら、戰爭にでも行くんだがなア！』

と清三は慨嘆して、『國家の爲めに勇ましい血を流してゐる人もあるし、千載の一遇、國家存亡の時に邂逅して、廟堂の上に立つて天下と共に憂ひてゐる政治家もあるのに……かうして碌々として、病氣で寢てるのは實に情けない。……和尙さん、人間もさまぐ＼ですな。』

『本當ですな……』

和尙さんも笑つて見せた。

『醫師を招んでは俥代が大變だから……五圓では上らないから、私が俥に乘せて伴れて行つて上げる、』と言つたことを悔いた。

其の二里の街道には、矢張旅商人が通つたり、機廻りの車が通つたり、自轉車が走つたりして居た。尻を捲つて赤い腰巻を出して歩いて行く田舍娘もあつた。もう秋風が野に立つて、背景をつくつた森や藁葺屋根や遠い秩父の山々が鮮かにはつきり見える。豐熟した稻は涼しい風に靡き渡つた。幌をかけた俥は徐かに街道を輾つて行つた。七色の風船玉を賣つて歩く老爺の周圍には、村の子供が集つて居た。

六十

寺の和尙さんが鷄卵の折を持つて見舞に來た。和尙さんも暫く逢はぬ間に、かうも衰弱したかと吃驚した。わざと戰爭の話などをする。

『旅順が何うも取れないですな。』

『何うしてかう長引くんでせう。』

『ステツセルも一生懸命だと見えますな。また兵力が足りなくつて第八師團も今度旅順に向つて發つ

五十九

行田の町の中程に、西洋造りのペンキ塗の際立つて目につく家があつた。陶器の表札には醫學士原田龍太郎と鮮かに見えて、門にかけた原田醫院といふ看板はもう古くなつて居た。

午前十時頃の晴れた日影は硝子を透した診察室の白いカアテンを明るく照した。

診察が終つて、其處から父親と荻生さんとに扶けられて出て來たのは、二三日來益〻衰弱した清三であつた。荻生さんが萬一を期して、ヤイ〳〵言つて伴れて來た深切は徒勞に歸した。醫師は父親と友とに絶望的宣告を與へたやうなものであつた。

荻生さんが懇意なので、別室で訊くと、

『今少し早く何うかすることが出來さうなものだつた……』

醫師はかう言つた。

『矢張、肺でせうか。』

『肺ですな……もう兩方共悪くなつてゐる？』

荻生さんは何うすることも出來なかつた。眼眩がして其處に立つて居られぬ病人を、殆ど抱へるやうにして俥に乘せた。『俥に乘せて伴れて來るのはちとひどかつたね、』と言つた醫師の言葉を思出して、

枕を高く、痩せこけて阜斯のやうになつた手を蒲團の外に投出すやうにして寢て居るのが垣の間から見える。井戸端などで母親に容體を聞くと、『何うも少しでも好い方に向つてくれると好いのですけれど……』と言つて、さも〳〵心配に堪へぬやうな顏をした。

肺病だらうといふことは誰も皆前から想像して居た。『何うも咳嗽の出るのが變だと思つてました、』と隣の足袋屋の細君が言つた。『何うも肺病だつてな、あの若いのに氣の毒だなア。話好きな面白い人だのに……』と大家の主人も老妻に言つた。『一人息子をあれまで育てゝこれからか〻らうといふ矢先にそんな惡い病氣に取つかれては……』と老妻は染々と同情した。彼方此方から見舞を持つて行くものなども段々多くなる。大家の主人がある日一日釣つて來た鮒を擂鉢に入れて持つて行つてやるとめづらしがつて、病人はわざ〳〵起きて來て見た。それから梨を持つて來るものもあれば、林檎を持つて來るものもある。中には五十錢銀貨を一つ包んで來るものもあつた。

轉任の難かしいこと、假令轉任が出來ても、この體では毎日の出勤は覺束ないといふことが次第に病人にも解つて來た。かれは郁治に宛てゝ、病氣で休んでゐれば何ヶ月間俸給が下るかといふことを父の郡視學に聞いて貰ふやうに手紙を書いた。やがて其返事が來て、埼玉縣令十號の十三條に六十日の病氣缺席は全俸（願書診斷書附）その以後二ヶ月半俸としてある事を報じて來た。

『病氣さへしなけれやなア！』
と清三は突然言つた。
やがて言葉をついて、『こんな病氣にかゝりさへしなけれや、今年はちつとは母さんにも樂をさせられたのになア！』
母親はオド〳〵して、
『そんなことを思はない方が好いよ。それより養生して……』
『ナアに、こんな病氣に負けて居りやせんから、母さん。心配しない方が好いよ。今死んでは、生れて來た甲斐がありやしない。』
『本當ともねえ、お前。』
『世の中と謂ふものは思ひのまゝにならないもんだ！』
言葉は强かつたが、一種の哀愁は佛壇の灯のみ明るい一室に充ち渡つた。
隣近所では病人が日增に惡くなるのを知つた。醫師が毎日鞄を下げて遣つて來る。荻生さんが心配さうな顏をしてちよい〳〵裏から入つて來る。一週間前までは、蒼白い痩せ果てた顏をして頭髮を蓬々させて、其處等をぶら〳〵して居る病人の姿を人々はよく見懸けたが、此頃では、もうどつと床に就いて、

『病氣でないと、政一（弟の名）の處にもお參りに行つて貰ふんだけれど……今年は花も上げて呉れる人もないつてさびしがつて居るだらう。』

『本當にさ……』

『父さんが都合が好ければ行つて貰ひたいと思つて居たんだけれど……』

『本當に、遠くなつて淋しがつて居るだらう。』

淸三は亡くなつた弟を染々思つた。

『明日あたり私がお參りに行かうかとも思つてるけれど……』

『ナアに、治つてから行くから好いさ。』

暫く默つた。

母子の胸には今月の拂のことが支へて居る。藥代、牛乳――それだけでもかなり多い。今月は父親のかせぎがねつから駄目だつた上に、母親も病氣で每月ほど裁縫をしなかつた。先程、醫師から勘定書を書生が持つて來たのを母親は申譯なささうにことわつて居た。

『なアに、父さんが歸つて來れば、何うにかなるから、心配せずにお出でよ。』

と母は其時言つた。

父親が歸つて來ても駄目なことを淸三は知つて居る。

つた。何處の家でも苧殼で杉の葉を編んで、佛壇を飾つて、代々の位牌を掃除して、萩の餅やら團子やら新里芋やら玉蜀黍やら梨やらを供へた。

女の兒は新しい衣を着て、嬉々として彼方此方に遊んで居た。

十三日の夜には迎へ火が家々で焚かれる。通りは警察が喧しいので、昔のやうに大仕掛な焚火をするものもないが、少し裏町に入ると、薪を高く積んで火を燃して居る家などもあつた。周圍に集つた子供等は面白がつてそれを飛んだり跨いだりする。淸三の家では、其日父親が古河へ行つてまだ歸つて來なかつたので、母親は一人でさびしさうに入口にうづくまつて、苧がらを集めて形ばかりの迎へ火をした。大家の入口にも今少し前焚いた火の殘りが赤く闇に見える。

軒には昨年の盆に淸三が手づから書いた菊の繪の燈籠が下げてある。淸三は便所へ通ふのに不便なので、四五日前から、床を下の六疊に移した。

風にゆらぐ盆燈籠をかれはぢつと見て居た。大家の軒の風鈴の鳴る音が微かに聞える。佛壇には灯がついてゐて、蓮の葉の上に供へた團子だの、茄子や白瓜でつくつた牛馬だの、眞鍮の花立に挿したみそ萩などが額緣に入れた繪のやうに見える。明るい佛壇の中は何だか別の世界でもあるかのやうに淸三には思はれた。

母親が其處へ入つて來て、

うだが、唯の胃腸とも違ふやうなところがあると言つてました。何にしても足に腫氣が來たのはよくないですな……。醫師の見立が違つてゐるのかも知れませんから、行田の原田に伴れて行つて見せたら何うです？　先生は學士ですし、評判が好い方ですから。』

そして、さういふ積りがあるなら、自分が一日局を休んで連れて行つて遣つても好いと言つた。

『何うも、御深切に……お禮の申上げようもない。』

母親の聲は涙に曇つた。

彌勒へ俸給を取りに行つた翌日あたりから、脚部大腿部にかけて夥しく腫氣が出た。足も今までの足とは思へぬほどに甲がふくれた。それに、陰嚢も其影響を受けて、起居にも段々不自由を感じて來る。醫師は罨法劑と睾丸帶とを與へた。

蘇鐵の實を煎じて飮ませたり、御祈禱を枕元であげて貰つたり、不動岡の不動樣の御符を戴かせたり、荷も効驗があると人の敎へて呉れるものは、何んなことでもして見たが、効がなかつた。秋風が立つにつれて、容體の惡いのが日に立つた。

やがて盂蘭盆が來た。町の大通りには草市が立つて、苧殼や蘭席やみそ萩や草花が並べられて、在鄕から出て來た娘達がぞろ／＼通つた。寺の和尙さんは紫の衣を着て、小僧をつれて忙しさうに町を歩いて行つた。茄子や白瓜や胡瓜でこしらへた牛や馬、其の尻尾には畠から取つて來た玉蜀黍の赤い毛を使

清三は嘆息をした。
小川屋にはもう娘は居なかつた。此春、加須の荒物屋に嫁いで行つた。おばあさんが茶を運んで來た。すぐ目につけて、
『林さんなア、何うかしたかね。』
『どうも病氣が治らなくつて困る。』
『それア困るだね。』
染々と同情したやうな言葉で言つた。夕飯は粥にして貰つて、久し振でさいの煮附を取つて食つた。庭には鷄頭が夕日に赤かつた。かれは柱に凭りかゝりながら、野を過ぎて行く色ある夕の雲を見た。

五十八

轉任に就いては、郁治も來て運動して呉れた。町の高等も尋常も聞いて見たが、缺員がなかつた。郡視の校長からは、『不本意ではあるが、病氣なれば仕方がない。好いやうに取計らうから安心し給へ、』と言つて來た。けれど他から見ては、もう教員が出來るやうな體ではなかつた。
ある日、荻生さんが、母親に、
『どうも今度の病氣は用心しないといけないつて醫師が言ひましたよ。何うも肺といふ徴候はないや

なつて居る。影を長く校庭に曳いた清三の痩せ果てた姿は、徐かに廊下をたどつて行つた。

教室に入つて見た。ボオルドには、授業の最後の時間に數學を教へた數字が其儘になつて居る。12＋15＝27と書いてある。チヨオクも其時置いたまゝになつてゐる。此處で生徒を相手に笑つたり怒つたり不愉快に思つたりしたことを清三は思ひ出した。東京へ行く友達を羨み、人しれぬ失戀の苦みに悶えた自分が、丸で他人でもあるかのやうにはつきりと見える。色の白い、肉づきの好い、赤い長襦袢を着た女も思ひ出された。

オルガンが講堂の一隅に塵埃に白くなつて置かれてあつた。何か久し振で鳴らして見ようと思つたが、只思つただけで、手を下す氣にはなれなかつた。

やがて小使が歸つて來た。かれも鳥渡見ぬ間に、清三のいたく衰弱したのに吃驚した。

じろ／＼と無氣味さうに見て、

『何うも、病氣が好くねえかね？』

『何うもいかんから、近い處に轉任したいと思つて居るよ……。今度の學期にはもう來られないかも知れない。長い間、お馴染になつたが、何うも仕方がない……』

『それまでには治るだべいかな。』

『どうも難かしい――』

續けて、「餘り無理をしてはいけません。第一、少しよくなつても、一里半も學校へ通つてはいけません。一年位は海岸へでも行つて居ると好いですがな。」

それから葡萄酒を飲用することを勸めた。

五十七

醫師の言葉を書いて、是非九月の學期までに近い所に轉任したいが、君に一任してよきや、自から運動すべきやと郁治の許へ書いてやると、折かへして返事が來て、視學に直接に手紙をやれ、羽生の校長にも聞いて見ろ、自分も其中出かけて運動をしてやると書いてあつた。

段々秋風が立始めた。大家で飼つて置いたくさひばりが夕暮になるといつも好い聲を立てゝ鳴いた。床柱の薔薇の一輪挿、それよりも簀戸を透して見える朝顏の花が友禪染のやうに美しかつた。

ある日、午後四時頃の暑い日影を受けて、例の街道を彌勒へ行く俥があつた。それには清三が乘つて居た。月の俸給を受取る爲めにわざ〳〵出懸けて來たのであつた。學校はがらんとして、小使も居なかつた。關さんも、昨日浦和へ行つたとて不在であつた。

宿直室には半は夕日が射し透つた。テニスを遣るものも無いと見えて、網もラッケットも緣側の隅に徒らに束ねられてある。事務室の硯箱の蓋には塵埃が白く、椅子は卓の上に載せて片附けられたまゝに。

ともあつた。けれど東が塞がつて居るので、朝日には常に緣遠く淸三は暮した。朝の眺めとしては、早起をした時、北窓の雲に朝日が燃えるやうにてり榮えるのを見る位なものであつた。

彌勒野は此頃は草花がいつも盛りであつた。淸三は關さんに手紙を書いた『此頃は座敷の運動のみにて、野に遠ざかり居り候へば、草花の盛りも見ず、遺憾に候。彌勒野、才塚野、君の採集にはさぞめづらしき花を加へ給ひしならん。秋海棠今歲は花少く、朝顏もかはり種なく、さびしく暮し居り候。』

每日二三回づつの下痢、胃は常に烈しき渴きを覺えた。動かずにぢつとして居れば、健康の人といくらも變らぬほどに氣分が快いが、勞働すれば、すぐ疲れて力がなくなる。醫師は一週間目に大便の試驗をしたが、十二指腸蟲は一疋も居ず、ペン蟲の卵が一つあつたばかりであつた。けれど、これは寄生蟲でないから害はない、普通健康體にもよくゐる蟲だと醫師はのんきなことを言つた。母親の病氣はまだすつかり治らなかつた。もう彼是十一二日目になる。按摩を賴んでもませて見たり、御祈禱を近所の人が遣つて來て上げて吳れたりした。次手に淸三もこの御祈禱を上げて貰つた。

淸三は此頃から夜が眠られなくて困つた。いよ〳〵不眠症の容易ならざる病狀が迫つて來たことを醫師は漸く氣が附き始めた。旅順の海戰——彼我の勝敗の決した記憶すべき十日の海戰の詳報の頻りに出る頃であつた。アドミラル、トオゴウの勇しい名が世界の新聞雜誌に記載せらるゝ頃であつた。

醫師はある日遣つて來て、あわてゝ言つた『どうも永久的衰弱ですからなア。』かう言つてすぐ言葉を

弱したのを郁治は見た。小畑に聞いたが、これほどとは思はなかつた。朝の膳には味噌汁に鷄卵が落してあつた。清三は牛乳一合にパンを少し食つた。二人は二階にまた坐つて見たが、もうこれと言つて話もなかつた。

郁治が歸る時に、

『それぢや學校の話、一つ運動して見て呉れ給へ。』

清三は繰返して賴んだ。

母親の病氣は捗々しくなかつた。三度々々食物も滿足に咽喉を通らなかつた。父親が商賣に出た後では、清三がお粥を拵へたり好きなものを通りに出て買つて來て遣つたりする。また父親と縁側に東京仕入の瓜を二つ三つ桶に浮かせて、皮を厚く剝いて二人して旨さうに食つて居ることもある。さういふ時には清三は皿に瓜の裂いたのを二片三片入れて、食ふ食はぬに拘らず、先づ母親の寢てゐる枕元に置いた。母子の情合は病んでから一層厚くなつたやうに思はれた。何うかすると、清三の顏をぢつと見て、母親が涙をこぼして居ることもあつた。清三はまた清三で、滅多に床に就いたことのない母親の長い病氣を氣にして、醫師に懸ることをうるさく勸めると、『お前の藥代さへ大變なのに、私まで懸つては、それこそ仕方がない。私のはもう治るよ、明日は起るよ、』と母親は言つた。

二階の一間は新聞が飛ぶほど風が吹通すこともあれば、裏の樹の上に夕月が美しくかゝつて見えるこ

餘り咳が出るので、脊中を叩いてやりながら、」

『何うもいかんね。』

『うむ、治らなくつて困る。』

汗が寢卷を透した。

『石川は何うした？』

と、暫くしてから、清三が訊いた。

『つい此間、東京から歸つて來た、』と郁治は言つて、『餘り道樂をするものだから、うちでも困つて、今度足留めに、愈々嫁さんが來るさうだ。』

『何處から？』

『何でも川越の財產家で跡見女學校に居た女ださうだ。容色望みといふ條件でさがしたんだから、乾度別嬪さんに違ひないよ。』

『先生も變つたね。』

『本當に變つた。雜誌をやつてる時分とは丸で違ふ。』

それから同窓の友達の話がいろ〳〵出た。窓からは涼しい風が入る……。

翌朝、郁治が眼を覺した頃には、清三は下階で父親を手傳つて勝手元をして居た。今更ながら友の衰

『約束をきめて置くなんて、君、つまらぬことだよ。』

『何うして？』

『だつて、お互に弱點が見えたり何かして、中途で厭になることがないとも限らないからね。』

『そんなことはいかんよ、君。』

『だつて仕方がないさ、さういふ氣にならんとも限らんから。』

『そんな不眞面目なことを言つてはいかんよ。君だちのやうに前から氣心も知れば、お互の理想も知つて居るのだから、苦情の起りつこはありやしないよ。僕なども同じ仲間だから、君等の幸福なのを心から祈るよ。美穗子さんにも久しく逢はないけれど、僕がさう言つたつて言つて吳れ給へ。』

いつもの輕い言葉とは聞かれぬほど眞面目なので、

『うむ、さう言ふよ。』

と郁治も言つた。

蚊帳の外のランプに照された淸三の顏は蒼白かつた。咳が絕えず出た。熱が少し出て來たと言つて、枕元に持つて來て置いた水で頓服劑を飮んだ。二人の胸には、中學校時代、「行田文學」時代のことが思出されたが、しかも二人とも何事をも語らなかつた。郁治の胸には華やかな將來が浮んだ。「不幸な友！」といふ同情の心も起つた。

夕飯には昨夜猫に取られた泥鰌の殘りを淸三が自分で割いて御馳走した。母親が寢て居るので、父親が水を汲んだり米を炊いたり漬物を出したりした。

郁治は見兼ねて餘程歸らうとしたが、彼方此方を步いて疲れて居るので、一夜泊めて貰つて行くことにした。

『郁さんが折角お出下すつたのに、生憎私がこんな風で、何も御馳走も出來なくつて、本當に申譯が無い。』

しげ〳〵と母親は郁治の顏を見て、

『郁さんのやうに、うちのも丈夫だと好いのだけれど……何うも弱くつて仕方がないんですよ。……それに郁さんなぞは、學校を卒業さへすれば、どんなにも立派になれるんだから、母さんももう安心なものだけれど……』

染々とした調子で言つた。

美穗子の話が出たのは、二人蚊帳の中に入つて寢てからであつた。學校を出るまではお互に結婚はしないが、親と親との間の口約束はもうすんだといふことを郁治は話した。

『それはお目出度い。』

と淸三が眞面目に言ふと、

新聞には其頃大石橋の戰鬪詳報が載つてゐた。遼陽！　遼陽！　といふ文字が到る處に見えた。

ある日、母親は急性の胃に侵されて、裁縫を休んで寢て居た。物を食ふとすぐもどした。そして吐逆も烈しく出た。土用の明けた日で、秋風の立つたのが何處となく木の葉のそよぎに見える。座敷へ射し入る日光から考へて、太陽も少しは南に廻つたやうだなどと淸三は思つた。其處へ郁治がひよつくり高等師範の制帽を冠つた姿を見せた。此間中から歸省して居て、いづれ近い中に新居を訪問したいなどといふ端書を寄越したが、今日は加須まで用事があつて遣つて來たから、ふと來る氣になつて訪ねたといふ。

郁治は淸三の瘦せ衰へた姿に少なからず驚かされた。それに顏色の惡いのが殊に目立つた。

親しかつた二人は、夕日の光線の射込んだ二階の一間に相對して坐つた。相變らず親しげな調子であるが、言葉は容易に深く觸れようとはしなかつた。時々話の途絕えて默つて居ることなどもあつた。

『小畑は此間日光へ植物採集に出かけて行つたよ。』

こんなことを言つて、郁治は途絕え勝ちな話をつゞけた。

淸三は、『君、歸つたら、フアザアに一つ賴んで見て吳れ給へな。どうもかう體が弱くつては、一里半の通勤は隨分辛いから、この町か、近在かに何處か轉任の口はないだらうかつて……彌勒ももう隨分古參だから、居心地は惡くはないけれど、いかにしても遠いからね、君。』

かう言つて轉任運動を賴んだ。

暑中休暇中には、何うしても快復させたいといふ考で、清三は醫師を變へて見る氣になつた。此度の醫師は深切で評判な人であつた。診察の結果では、何うもよく解らぬが、十二指腸かも知れないから、一週間ばかり經つて大便の試驗をして見ようと言つた。肺病ではないかと訊くと、さういふ兆候は今のところでは見えませんと言つた。今のところといふ言葉を清三は氣にした。

五十六

滋養物を取らなければならぬので、錢も無いのに、いろ〱なものを買つて食つた。鯉、鮒、鰻、牛肉、鷄肉——ある時はごいさぎを賣りに來たのを十五錢に負けさせて買つた。嘴は淺緑色、羽は暗褐色に淡褐色の斑點、長い足は美しい淺緑色をして居た。それを粗く潰して、骨をトン〱と音させて叩いた。それにすらかれは疲勞を覺えた。

泥鰌も百匁位づつ買つて、猫にかゝられぬやうに桶に重石をしてゴチヤ〱入れて置いた。十尾位宛を自分で割いて、鷄卵を引いて煮て食つた。寺の後ろにはこの十月から開通する東武鐵道の停車場が出來て、大工が頻りに鉋や手斧の音を立てゝ居るが、清三は氣分の好い夕方などには、てく〱出かけて行つて、ぽつねんとして立つてそれを見て居ることがある。時には向うの野まで行つて花をさがして來ることもある。えのころ、おひしば、ひよどりさう、おとぎりさう、こまつなぎ、なでしこなどがあつた。

五十五

五月六日には體量十二貫五百目、此頃郵便局でかゝつて見ると、單衣のまゝで十貫六百目。荻生さんは十三貫三百目。

ある日、田原ひで子が學校に來て手紙を小使に賴んで置いて行つた。手紙の中には、手づから折つた黃い野菊の花が封じ込んであつた。『野の菊は妾の愛する花、師の君よ、師の君よ、此花をうつくしと思ひたまはずや。』と書いてあつた。

暑中休暇前一二日の出勤は、かれに取つてことに辛かつた。其の初めの日は歸途に驟雨に逢ひ、後の一日は朝から雨が橫さまに降つた。かれは授業時間の間々を宿直室に休息せねばならぬほど困憊してゐた。それに今月の月給だけでは、藥代、牛乳代などが拂へぬので、校長に無理に賴んで三圓だけ都合して貰つた。

旅順陷落の賭に負けたからとて、校長は鷄卵を十五箇呉れたが、それは實は病氣見舞のつもりであつたらしい。教員達は、『もう何の彼のと言つても旅順はぢきに相違ないから、其時には休暇中でも、是非學校に集つて、萬歲を唱へることにしよう、』などと言つて居た。淸三は八月の月給を月の二十一日に貰ひたいといふことを豫め校長に賴んで、馬車に乘つて辛うじて歸つて來た。

つて來た。草鞋をはいた若者は、何の會釋もなく、そのまゝづか〳〵と疊の上にあがつて、

『やあ！』

と大きな獅子の口をあけて、其儘勝手元へ出て行つた。

母親は紙に包んだおひねりを獅子の口に入れた。一人息子の爲めに、惡魔を拂ひ給へ！　と心に念じながら……。

五十四

母親は二階の床の間に、燃ゆるやうな撫子と薄紫のあざみと眞白なおかとらのをと黄いこがねをぐるまとを交ぜて生けた。時には窓の處にぢつと立つて、夕暮の雲の色を見て居ることもあつた。其のやせた後姿を淸三は悲しいやうなさびしいやうな心地でぢつと見守つた。

父親は二階の格子を取外して呉れた。光線は流るゝやうに一室に漲り渡つた。窓の下には足長蜂が集を釀してブン〳〵飛んで居た。大家の庭樹のかげには、一本の若竹が伸びて、それに朝風夕風が爽やかに通つた。

母親は心配さうにかれの顏を見た。

學校はやがて始まつた。暑中休暇まではまだ半月ほどある。それに七時の授業始めなので、朝が忙しかつた。母親は四時には遲くも起きて竈の下を焚附けた。清三は藥瓶と辨當とをかゝへて、例の道をてくてくと歩いて通つた。一里半の通ひ馴れた路――それにもかれは著しい疲勞を覺えるほどその體は弱くなつて居た。それに、此頃では滋養品を成たけ多く取る必要があるので、毎日牛乳を二合、鷄卵を五箇、その他肉類をも食つた。移轉の借金をまだ返さぬのに、毎日かうして少なからざる金がかゝるので、かれの財布は常に空であつた。馬車に乘りたくも、そんな餘裕はなかつた。

五十三

八阪神社の祭禮は賑かであつた。當年は不景氣でもあり、國家多事の際でもあるので、山車も屋臺も出來なかつたが、それでも近在から人が出て、紅い半襟や淺黃の袖口やメリヤスの帶などがぞろぞろと町を通つた。さういふ人達は、氷店に寄つたり、瓜店の前で庖丁で皮を剝いて貰つて立食ひをしたり、よせ切の集つた吳服屋の前に長い間立つてあれのこれのといぢくり廻したりした。大きな朱塗の獅子は町の若者にかつがれて、家から家へと惡魔をはらつて騷がしくねり歩いた。

清三が火鉢の傍に居ると、傍の小路に、わいしよわいしよといふ騷がしい懸聲がして、突然獅子が入

三人は氷店に休んで行くこともある。母親は歸りに、八百屋に寄つて、茄子や白瓜などを買ふ。局の前で、清三は母親を先に歸して、荻生さんの室で十時過まで話して行くことなどもあつた。

五十一

七月十五日の日記にはかれはかう書いた。

『杜國亡びてクルウゲル今又歿す。瑞西の山中にて肺に斃れたるかれの遺體は、故郷のかれが妻の側に葬らるべし。英雄の末路、言は陳腐なれど、事實は常に新たなり。英雄クルウゲル！　元トランスヴアウル共和國大統領ポウル・クルウゲル歿す。歷史は常にかくの如し。』

五十二

醫師は矢張胃腸だと言つた。けれど藥はねつから効がなかつた。咳が絶えず出た。體がだるくつて仕方がなかつた。ことに、熱が時々出るのに一番困つた。朝は病氣が直つたと思ふほどいつも氣持が好いが、午後からは屹度熱が出る。止むなく發汗劑を服むと、汗がびつしよりと出て、其心持の惡いこと一通りでない。顏には血の氣がなくなつて、肌が厭に黄ばんで見える。かれは幾度も蒼白い手を返して見た。

『お前本當にどうかしたのぢやないかね。確かりした醫師にかゝつて見る方が好いんぢやないかね。』

かくす位に深く生茂つてゐる。鮒や鯉やたなごなどの澤山居るのと居ないのとがある。その居る處を大家さんはよく知つて居た。

二人で話して居る縁側の上に、中老の品の好い細君は、岐阜提灯を吊してくれた。

時には母親と荻生さんと三人つれ立つて町を歩くこともあつた。今年は『から梅雨』で雨が少なかつた。六月の中頃に既に寒暖計が八十九度まで上つたことがあつた。七月に入つてから、俄かに暑さが烈しく、田舍町の夜には、縁臺を店先に出して、白地の浴衣をくつきりと闇に見せて、團扇をパタ〳〵させて居る群が其處にも此處にも見えた。母親は買物をする町の店に熟して居ないので、さうした夜の散歩には、荻生さんが此處が乾物屋、此處が荒物屋、呉服屋では此家が一番堅いなどと教へて呉れた。下駄屋の店には、中年の上さんが下駄の鼻緒の並んだ中に白い顏を見せて坐つて居た。鍛冶屋にはランプが薄暗くついて奥では話聲がきこえて居た。水のやうな月が白い雲に隱れたり顯はれたりして、其度毎に縺れた三つの影が街道に映つたり消えたりする。

用水の橋の上は涼しかつた。納涼に出た人がぞろ〳〵通る。冬や春は川底に味噌漉のこはれやバケツの捨てたのや、陶器の缺らなどが汚く殺風景に見えて居るのだが、此頃は水が一杯に漲り流れて、それに月の光や、橋の傍に店を出して居る氷屋の提灯の灯影がチラ〳〵と映る。流れる水の影が淡く暗く見える。向うの料理屋からは三絃の音が聞えた。

夜は大家の中庭の緣側に行つて話した。戰爭の話がいつも出る。二三日前荻生さんから借りた戰爭畫報を二三冊又貸して遣つたが、それに就いてのいろ／＼の質問が出る。「何うももう旅順が取れさうなものですがなア。」と、さももどかしさうに主人は言つて、「それに、陸軍の方も餘程行つたんでせう。第一軍は九連城を取つてから、ねつから進まんぢやありませんか。第二軍は蓋平からもう餘程行つたんですか。」

淸三は新聞や雜誌で得た知識で、第一軍第二軍が近い中に連絡して遼陽のクロパトキン將軍の本營に迫る話をして聞かした。旅順の方面については、海陸共に犇々と押寄せて、敵はもう袋の鼠になつて了つたから、此方の方は遼陽よりも早く片附く筈である。「來月の十五日位までには屹度取れるつて、校長なども言ふんです。私は今少し遲くなるかも知れないと思ひますけれど、何しろもう直きですな。」などと淸三は言つて聞かせた。

「なんしろ、日本は小さいけれども、擧國一致ですから敵ひませんやな。何んな百姓でも、無智な人間でも、戰爭つて言へば一生懸命ですからな……天子樣も國民の後援があつて、嘸ぞお心丈夫でいらつしやるでせう。」と感嘆したやうな調子で言つて、「日本は昔からお武士で出來た國ですからなア！」

大家はまた釣の話をして聞かせることもあつた。淸三が胃腸に惱んで居るとかいふのを聞いて、「何うです、一つ一緒に出かけて見ませんか。さういふ病氣には、氣が落付いてごく好いですがな。」こんなことを言つて誘つた。其場所は此處から一里位行つた處で、田の處々に堀切がある。其處には蘆荻が人を

二人で暮らして居るといふ暢氣な身分、釣と植木が大好きで、朝早く大きな麥稈帽子を冠つて、びくを下げて、釣竿を持つて、霧の深い間から木槿の赤く白く見える垣の間の道をてく〳〵と出かけて行く。そして日の暮れる頃には、びくの中に金色をした鮒や鯉をゴチヤ〳〵入れて歸つて來る。店子はをり〳〵播鉢に見事な鮒を入れて貰ふことなどもある。釣に行かぬ時は、大抵腰を曲げて盆栽や草花などを丹念にいぢくつて居る。さうかと言つて別に大したものがあるのでもない。楓に、欅に、檜に、蘇鐵位なものだが、それを内に入れたり出したりして、樂しみさうに眺めて居る。花壇にはいろ〳〵西洋種も蒔いて、天竺牡丹や遊蝶草などが咲いて居る。コスモスも大分大きくなつた。また時には、跣足になつて垣の隅の畠を一生懸命に耕して居ることなどもあつた。

農繁休暇は尙暫し續いた。一週間で授業を始めて見たが、麥刈養蠶田植などがまだすつかり終らぬので、出席生徒の數は三分の一にも滿たなかつた。で、今一週間休暇をつゞけることにする。淸三は午後は二階の風通しの好い處でよく晝寢をした。餘り長く寢込んで西日に照されて、汗をぐつしよりかいてゐることなどもあつた。町も郊外も暫しの間はめづらしく、雨の降らぬ日には、大抵畫架を擔いで、寫生に出かけた。警察の傍の道に沿つた汚い溝には白い小さな花がポチ〳〵咲いて、錆びた水に夢見るやうな赤いねむの花が微かに映つた。寺の門、町外れから見たる日光群山、桑畑の鷄、路傍の吹井、うどんひもかはと書いた大和障子などの寫生が段々出來た。

た菖蒲の花に千鳥草を交ぜて相馬燒の花瓶に挿した。』かうして見ると、學校の宿直室よりは、いくら好いか知れんね、』と荻生さんは四邊を見廻して言つた。親しい友達が同じ町に移轉して來たので、何となくうれしさうに莞爾して居る。寺の本堂に寄宿して居る頃は、淸三は荻生さんを唯情に篤い人、深切な友人と思つただけで、自分の志や學問を語る相手としては常に物足らなく思つてゐた。何うしてあゝ野心が無いだらう、何うしてあゝ普通の平凡な世の中に安心して居られるだらうと思つて居た。時には自分とは人間の種類が違ふのだとさへ思つたことがある。それが今では丸で變つた。かれは日記に、『荻生君はわが情の友なり、利害、道義以て此間を犯し破るべからず、』と書いた。また、『曾て此友を平凡に見しは、わが眼の發達せざりし爲めのみ。荻生君に比すれば、われは甚だ世間を知らず、人情を解せず、小畑加藤を此友に比す、今にして初めて平凡の偉大なるを知る、』と書いた。

前の足袋屋から天ぷら、大家から川魚の鹽燒を引越の祝ひとして重箱に入れて貰つた。いづれも『あいそ』といふ鱗の粗い腹の側の紅い色をした魚で、今が利根川で獲れる節だといふ。米屋、炭屋、薪屋なども通ひを持つて來た。父親は隣近所の組合を一軒々々廻つて歩いた。淸三は午後から二階の六疊に腹這ひになつて、東京や、行田や、熊谷の友人達に轉居の端書を書いた。寺にも出かけて行つたが、丁度葬式で、和尚さんは忙しがつて居たので、轉居したことを知らせて置いて歸つて來た。

大家の主人は面白い話好きの人であつた。店は息子に讓つて、自分は家作を五軒ほど持つて、老妻と

『少し手傳つたら、呼吸が切れて仕方がない。』

『お前は無理をしてはいけないよ。父さんがするから、餘り働かずにお置きよ。』

此頃、殊に弱くなつた淸三が、母親には此上ない心配の種であつた。

やがて何うやら彼うやら四邊が片附く。『かうして見ると、中々仕心地が好い、』と父親は長火鉢の前で茶を飮みながら言つた。車力は庭の緣側に並んで、振舞はれた蕎麥をヅル〳〵啜つた。

淸三と荻生さんは二階に上つて話した。南と西北とが明いて居るので風通しが好い。それに裏の大家の庭には、栗だの、柿だの、木犀だの、百日紅だのが繁つて居る。靑空に浮いた白い雲が日の光を帶びて綠と共に光る。二人は足を投げ出して、暢氣に話をして居ると、其處へ母親が茶を淹れて持つて來て呉れる。大福餠を二人して食つた。

夜は淸三は二階に寢た。久し振で家庭の團欒の樂しさを味つたやうな氣がする。雨戶を一枚明けたところから、綠を透したすゞしい夜風が入つて、蚊帳の靑い影が微かに動いた。かれは眞中に廣く蒲團を敷いて、闇の空にチラ〳〵する星の影を見ながら寢た。母親が階段を上つて來て、明放した雨戶をそつとしめて行つたのはもう知らなかつた。

翌日は彌勒に出懸けて、人夫を賴んで、書籍寢具などを運んで來た。二階の六疊を書齋にきめて、机は北向に、本箱は壁につけて並べて置いて、三尺の床は古い幅物を懸けた。荻生さんが持つて來て呉れ

がして了つて……常陸丸では此近邊で死んだ人がいくらもあるですぜ。佐間では三人まであるですぜ。』などと話し合つた。

ある豪農の塀の前では、平生引越車などに見馴れないので犬が吠えた。榛の並木に沿つた小川では、子供が泥だらけになつて、網で雜魚をすくつて居る。繭賣の車がぞろ〳〵通つた。

新しい家では、今朝早く來た父親と、局を休んで手傳に來て呉れた荻生さんとが、バタ〳〵疊を叩いたり、雜巾がけをしたり、破れた障子を繕つたりして居た。大家さんは火鉢と茶道具とを運んで來て、にこ〳〵笑ひながら『何か要るものがありましたなら遠慮なく仰しやい。』と言つて、禿頭に頰冠をして尻をまくつた父親の姿を立つて見て居た。それも十二時頃には大抵片附いて、蕎麥屋からは蕎麥を持つて來る。荻生さんは買つて來た大福餅を竹の皮包から出して頰張る。其處に小路にガタ〳〵と車の入る音がして、淸三と母親の顏が見えた。

車力は繩を解いて、荷物を庭口から緣側へと運び入れる。父親と荻生さんが先に立つて簞笥や行李や戶棚や夜具を室內に運ぶ。長火鉢、簞笥の置場所を、あれのこれのと考へる。母親は襷がけになつて、勝手道具を片附けて居たが、其處に淸三が外から來て、呼吸を切らして水を飮んだ。

母親は手を留めて、ぢつと見て、

『何うしたの？』

て歸つて來て、ひらりと飛び下りた。澤田さんは眞黑になつて働きながら、『此方の方に來た時には是非寄つて下さい。』と言つた。淸三は最後に弟の墓を訪うた。祖父の墓は足利にある。祖母の墓は熊谷にある。かうして、ところ〴〵に墓を殘して行く一家族の漂泊的生活をかれは考へて黯然とした。一人他鄕に殘される弟はさびしからうなどとも思つた。あぢさゐの花は墓を明るくした。

道具とてもない一家の移轉の準備は簡單であつた。簞笥と戶棚とを薦で絡げ、夜具を大きなさいみの風呂敷で包んだ。陶器は總て壞れぬやうに、簞笥の衣類の中や蒲團の中などに入れた。最後に椿や南天の草花などを掘つて、根を薦包にして庭の一隅に置いた。

降るかと思つた空は午前の中に晴れた。荷物を滿載した三臺の引越車はガラ〳〵と町の大通りを轅つて行く。ところ〴〵で母親と淸三とが知人に邂逅して挨拶して居るさまが浮き出すやうに見える。車の一番上に積まれた紙屑籠につめたランプのホヤがキラ〳〵光る。

長野の手前で、額が落ち懸りさうになつたのを淸三は直した。母親はにこ〳〵と嬉しさうな顏色で、いろ〳〵な話をしながら步いて行く。熊谷から行田へ移轉した時の話も出る。『かうして、大した迷惑を人にもかけずに、書間引越して行かれるのは、皆なお前のお蔭だよ。』などと言つた。長野を外れようとする處で、向うから號外賣が景氣よく鈴を鳴らして走つて來た。淸三は呼留めて一枚買つた。竹敷を出た上村艦隊が暴雨の爲めに敵を逸して歸着したといふことが書いてある。車力は、『殘念ですなア、敵をに

前に小さな庭があつて、其處に丈の低い柿の木が繁つて居た。家賃が二圓五十錢、敷金が三月分あるのだが、荻生さんのお友達ならそれはなくつても好いといふ。父親も得意廻りの次手に寄つて見て、

『まア、あれなら好い！』と賛成した。

一週間の農繁休暇を利用して、愈々移轉することになつた。平生親しくした友達は多くは離散して、其時町に居るものは、活版屋をしてゐる澤田君位のものであつた。清三は其往來した友の家々を暇乞をして歩いた。北川の家には母親が一人居た。入口ですまさうとするのを、『まア／＼本當にお久し振でしたね』と、無理に奥の座敷へと請された。美穂子に就ては、『あれも今年は卒業するのですけれど、意氣地がなくつて、學校が勤まりますか何うですか』などと言つた。移轉のことを聞いては、『まア／＼お名殘惜しい、……けれどまア、貴君の身體がお定りになつて、お引越なさるんですから、結構ですねえ。お母さんも嘸ぞお喜びでせう。薫が居れば、お手傳位致すんですけれど、あれも此の七月には戰地へ參るさうですから……』それからそれと、戰爭の話やら町の話やらが續いた。母親の眼には、蒼白い顔をした眼の濁つた體の痩せた清三の姿が映つた。忍沼の錆びた水にはみぞかくしの花がところ／＼に白く見えた。加藤の家には母親も繁子も留守で、めづらしく父親が居た。上つて教育上の話などを、一時間ばかりもした。羽生から今すこし近い處に好い口があつたら、轉任させて貰ひたいといふことを頼んだ。石川の店では、小僧が忙がしさうに客に應對して居た。其處へ番頭が向うから自轉車をきしらし

うと思つて、根から掘つて紙に包み、汚れた手をみそはぎの茂る小川で洗つた。ふと一昨日浦和のひで子から來た手紙を思ひ出して、考はそれに移る。羽生に移轉してからの新家庭に、その明かな笑顔を得たならば、いかに幸福であらうと思つた。かれは此頃ひで子を自分の家庭にひきつけて考へることが多くなつた。

羽生町の入口では、東武鐵道の線路人夫が頻りに開通工事に忙しがつて居たが、其傍の藁葺家には、色の褪めた國旗がヒラ〳〵と日に光つた。

五十

羽生に移轉する前日の日記に、かれはかう書いた。

『廿六年故山を出でて、熊谷の櫻に近く住むこと數年、三十三年に此處忍沼のほとりに移りてより、又數年を出でずして蝸牛のそれの如く、又も重からぬ殼を負ひて、利根河畔羽生に移らんとす。奇しきは運命のそれよ、面白きは人生のそれよ、回顧一番、笑つて昔古びたる城下の緣を出でて去らんのみ。歴史の章は斯の如く、又かくの如くして改められん。』

羽生の大通りの鳥渡裏に入つた處に、その貸家があつた。捜して呉れたのは荻生さんで、持主は二三年前まで、通りで商賣をして居た五十ばかりの氣の好さゝうな人であつた。下が六疊に四疊半、二階が六疊、

ると、清三は堪らなく悲しくなつた。軍司令部と一緒に原杏花が出發する時、小學校の生徒が兩側に整列して、萬歳を唱へた。其時かれは、『爾、幼なき第二の國民よ、國家の將來はかゝつて汝等の双肩にあるのである。健在なれ、汝等幼なき第二の國民よ』と心中に絶叫したと書いてある。其時ほど熱い涙が胸に迫つたことはなかつたと書いてある。清三も今さうした思に胸が一杯になつた。幼ない第二の國民に柩を送られる一戰死者の靈――

砲煙の漲つた野に最後の苦痛を味つて冷たく横つた一兵卒の姿と、かうした梅雨晴の鮮かな故郷の日光の下に悲しく營まれる葬式のさまとが一緒になつて、清三の眼の前を通つた。

『何うせ人は一度は死ぬんだ！』

かう思つたかれの頬には涙がこぼれた。

かれはいつか寺を出て、例の街道を歩いて居た。光線はキラ〳〵した。青葉と青空の雲の影とが野の上にあつた。

二三日前から頻りに報ぜられる壹岐沖の常陸丸遭難と得利寺に於ける陸軍の戰捷とが繰返しくりかへし思出される。初瀬吉野宮古の沈沒などをも考へて、『果して、最後の勝利を占めることが出來るだらうか』といふ不安の念も起つた。

野にたうごき草があるのを見て、それを採つた。傍にある名を知らぬ赤い草花は學校の花壇に植ゑよ

四十九

梅雨の中に一日カツと晴れた日があつた。薄い灰色の中から鮮かな青い空が見えて、光線が漲るやうに青葉に照つた。行田からの歸途、長野の常行寺の前まで來ると、何か事があると見えて、山門の前には人が多く集つて、がや〳〵と話して居る。小學校の生徒の列も見えた。

青葉の中から白い旗が靡いた。

戰死者の葬式があるのだといふことがやがて解つた。淸三は山門の中に入つて見た。白い旗には近衞步兵第二聯隊一等卒白井倉之助君之靈と書いてあつた。五月十日の戰に、鎹河の右岸で戰死したのだといふ。フロックコオトを着た知事代理や、制服を着けた警部長や、羽織袴の村長などが皆會葬した。村の世話役が彼方此方に忙しさうに其處等を步いて居る。

遺骨を藏めた棺は白い布で卷かれて本堂に据ゑられてあつた。丁度主僧のお經が濟んで、知事代理が祭文を讀むところであつた。其の太い錆びた聲が一しきり廣い本堂に響き渡つた。やがてそれに續いて小學校の校長の祭文がすむと、今度は戰死者の親友であつたといふ教員が、奉書に書いた祭文を高く捧げて、震へるやうな聲で讀み始めた。其聲は時々絕えて又續いた。嗚咽する聲が彼方此方から起つた。

柩が墓に運ばれる時、廣場に集つた生徒は兩側に列を正して、整然としてこれを見送つた。それを見

氣がする。急行軍の砲車、軍司令官の戰場に赴く朝の行進、砲聲を前景にした茶褐色の禿げた丘、其の急忙の中を、水筒を肩からかけ、ピストルを腰に卷いて、手帳と鉛筆とを手にして飛んで歩いてゐる一文學者の姿をかれは羨しく思つた。

ある日和尙さんに、

『原さんからもお便りがありますか。』

と訊くと、

『え、此間金州から繪葉書が來ました。』

と和尙さんは机の上から軍事郵便と赤い判の押してある一枚の繪ハガキを取つて示した。それには同じく從軍した知名な畫家が死屍の傍に菖蒲が紫に咲いて居る處を描いて居た。

『好い記念ですな。』

『え、かういふ花が澤山戰場に咲いてゐると見えますな。』

『戰記にも書いてありましたよ。』

と淸三は言つた。

九は戰地に赴く望みあり、幸ひに祝せよ。』と得意さうに書いてあつた。それに限らず、かれは野から畠から町から鋤犂を捨て算盤を捨て筆を捨て、國事に赴く人々を見て、心を動かさゞるを得なかつた。海の外には同胞が汗を流し血を流して國の爲めに戰つて居る。其處には新しい意味と新しい努力がある。平生政見を異にした政治家も志を一にして公に奉じ、金を守るに專らなる資本家も喜んで軍事公債に應じ、擧國一致、千載一遇の壯擧は着々として實行されてゐる。新聞紙上には日每に壯烈なる最後を遂げた士官や、勇敢なる偉勳を奏した兵士の記事を以て滿され、それにつゞいて各地方の團體の熱心なる忠君愛國の狀態が見るやうに記されてある。『自分も體が丈夫ならば――三年前の檢査に丙種などといふ憐むべき資格でなかつたならば、滿洲の野に、わが同胞と共に、銃を取り劍を揮つて、僅かながらも國家の爲めに盡すことが出來たであらうに。』などと思ふことも一度や二度ではなかつた。かれはまた第二軍の寫眞班の一員として從軍した原杏花の從軍記の此頃『日露戰爭實記』に出始めたのを喜んで讀んだ。戀愛を書き、少女を描き、空想を生命とした作者が、或は砲烟の漲る野に、或は死屍の横はれる塹濠に、或は機關砲の凄じく鳴る丘の上に、其のさま〲の感情と狀景を叙した筆は、少くともかれの想像を其處につれて行くのに十分であつた。三年前に、イタリヤンストロウの意氣な帽子を被つて、羽生の寺の山門から入つて來た其人――醉つて詩を吟じて、果ては本堂の木魚や鐘を敲いた其人が、第二軍の司令部に從屬して、其の混亂した戰爭の巴渦の中に入つて居るかと思ふと、一層其記事が分明と眼に映るやうな

志多見原にはいちやくさう、たかとうだいなどの花があつた。やがて麥の根元は黃ばみ、菖蒲の蕾は出で、樫の花は散り、にはやなぎの花は咲いた。蠶は既に三眠を過ぎた。

續いてしらん、ぎし〳〵、たちあふひ、かはほね、のいばら、つきみさう、てつせん、かなめ、せきちくなどが咲き、裏の畑の桐の花は高く薫つた。かや、あし、まこも、すげなどの葉も茂つて、剖葦は頻りに鳴く。

金州の戰、大連灣の占領――第三軍の編制、旅順の背面攻擊。

『敵も旅順は頑强にやるつもりらしいですな。何うも海軍だけでは駄目のやうですな、』などと校長が言つた。旅順の陷落についての日が同僚の間に豫想される。或は六月の中頃といひ、或は七月の初めといひ、或は八月には何んなにおくれても取れるだらうと言つた。やがて鷄一羽と鷄卵十五の賭をしようと言ふことになる。そして陷落の公報が達した日には、休日であらうが何であらうが、職員一統學校に集つて大々的祝宴を開かうと決議した。

六月に入ると、麥は黃熟して刈取られ、胡瓜の莖短かきに花を有ち、水草のある處には螢が闇を縫つて飛んだ。ほそゐ、ゆきのした、のびる、どくだみ、かもじぐさ、なはしろいちご、つゆぐさなどが咲いた。雨は降つては晴れ、晴れてはまた降つた。ある日、美穗子の兄からめづらしくはがきが屆いた。かれは士官學校を志願したが、不合格で、今では一年志願兵になつて、麻布の留守師團に居た。『十中八

母を護るの子たらんと致し居候』と書いたこともある。

『羽生が好いよ……餘り田舍でも仕方がないし、羽生なら知つてる人も二三人はあるからねえ。』

母がかう言ふと、

『さうだ、引越すなら、羽生が好い。得意先にも丁度都合が好い。』

父も同意する。

其處には和尚さんも居れば、荻生さんもゐる。學校にも一里半位しかないから、通ふのにもさう難儀ではない。清三もかう思つた。

荻生さんにも賴んだ。ある日曜日を父親と一緒に羽生に出懸けて行つて見たこともあつた。其日は第二軍が遼東半島に上陸した公報の來た日で、一週間ほど前の九連城戰捷と共に人々の心は全くそれに奪はれて了つた。街道にも町にも國旗が軒毎に絶えず續いた。

『萬歳、萬歳!』

突然町の横町から雀躍して飛んで出て來るものがあつた。何處の家でも其話ばかりで持切つて、借家などを敎へて吳れるものもなかつた。

ねき、しゆろひるがほ、なまこのしりぬぐひなどが咲き、梨、桃、梅の實は小指の頭位の大きさになる。處々に茶摘をする女の赤い襷と白い手拭とが見え、裸で茶を製してゐる茶師の唄が通りに聞えた。

を野から採つて來て花壇に移した、やがて山吹が散ると、芍藥、牡丹、つゝじなどが咲き始めた。

この春をかれは全く花に熱中して暮した。新緑を透した日の光が洪水のやうに一室に漲り渡つた。かれは其處で田原秀子に遣る手紙を書き、めづらしい種々の花を封じ込めて遣つた。ひで子からも少くとも一週に一度は必ず返事が來た。歌が書いてあつたり新體詩が書いてあつたりした。わが愛するなつかしの教へ子と此方から書いて遣ると、彼方からは、戀しきなつかしき先生まゐると書いてよこした。

四十八

此頃、移轉問題が親子の間に繰返された。

學校に自炊して居ては不自由でもあり不經濟でもある。家の都合から言つても別に行田に住んで居なければならぬといふ理由もない。父の商賣の得意先も此頃では熊谷妻沼方面よりむしろ加須、大越、古河に多くなつた。離れて居て、土曜日に來るのを待つのも辛い『それにお前も、もう年頃だから、相應なのがあつたら一人嫁を貰つて、私にも安心させてお吳れよ。』

母はかう言つて笑つた。

淸三は以前のやうに反對しようともしなかつた。昨年から比べると、心も餘程折れて來た。絕えず動搖した『東京へ』も大分薄らいだ。ある時小畑へやる手紙に、『當年のしら瀧は知らず識らずの間に終に

の陰影にはいつも失敗した、それから緋縅蝶、紋白蝶なども採集した。小畑が送つて呉れた丘博士譯の進化論講話が机の上に置かれて、その中頃に菫の花が枝折の代りに挿まれてあつた。菓子は好物のうぐひす餅、菜は獨活にみつばにくわゐ。漬物は京菜の新漬。生徒は草餅や牡丹餅をよく持つて來て呉れた。

利根川の土手にはさまぐ\の花があつた。ある日清三は關さんと大越から發戸までの間を歩いた。清三は一々花の名を手帳につけた。――みつまた、たびらこ、ぢごくのかまのふた、ほとけのざ、すゞめのゑんどう、からすのゑんどう、のみのふすま、すみれ、たちつぼすみれ、さんしきすみれ、げんげ、たんぽゝ、いぬがらし、こけりんだう、はこべ、あかじくはこべ、かきどうし、さぎごけ、ふき、なづな、ながばぐさ、しやくなげ、つばき、こゞめざくら、もゝ、ひぼけ、ひらぎく、へびいちご、おにだひらこ、はゝこ、きつねのぼたん、そらまめ。

四十七

新たにつくつた學校の花壇にもいろ\/の草花が集められた。農家の垣には梨の花と八重櫻、畠には豌豆と蠶豆、麥笛を鳴らす音が時々聞えて、燕が街道を斜に突切るやうに飛びちがつた。蟻、蜂、油蟲、夜は名の知れぬ蟲が頻りにズイ\/と鳴き、蛙の聲は湧くやうにした。

あけび、ぐみ、さきごけ、きんぽうげ、じふにひとへ、たけにぐさ、きしむしろ、なんてんはぎなど

四十六

戰爭は段々歩を進めて來た。定州の騎兵の衝突、軍事公債應募者の好況、わが艦隊の浦鹽攻擊、旅順口外の激戰、臨時議會の開院、第二回閉塞運動、廣瀨中佐の壯烈なる戰死、第一軍の出發につれて第二軍の編制、國民は今は眞面目に戰爭の意味と結果とを自覺し始めた。野は段々暖くなつて、菜の花が咲き、菫が咲き、蒲公英が咲き、桃の花が咲き、櫻の花が咲いた。號外の來る度に田舍町の軒には日章旗が立てられ、停車場には萬歲が唱へられ、畠の中の藁家の附近からも、手製の小さい國旗を振つて子供の戰爭ごつこして居るのが見えた。學校では學年末の日課採點に忙はしく、續いて簡易な試驗が始まり、それが濟むと、卒業證書授與式が行はれた。郡長は卓の前に立つて、卒業生の爲めに祝辭を述べたが、その中には軍國多事のことが縷々として說かれた。

『皆さんは記念とすべきこの明治卅七年に卒業せられたのであります。日本の歷史の中で一番眞面目な時、一番大事な時、かういふ時に卒業せられたといふことは忘れてはなりません。皆さんは第二の國民として充分なる覺悟をしなければなりません。』平凡なる郡長の言葉にも、時世の言はせる一種の強味と憧憬とが顯はれて、聽く人の心を動かした。

寫生帳には瓶の梅花、水仙、學校の門、大越の櫻などがあつた。沈丁花の花はやゝ巧に出來たが、葉

副食物のやうだね、』と清三は笑つた。

清三の居ない處で、小畑は荻生さんに、

『林君、何うかしてますね、體が何うも本當ぢやないやうですね？』

『僕も實は心配してるんですがね。』

『何か悪い病氣ぢやないだらうか。』

『さア――』

『今の中勸めて根本から療治させる方が好いですぜ。手後れになつては仕方がないから。』

『本當ですよ。』

『持病の胃が悪いんだなんて言つてるけれど――本當にさうか知らん。』

『町の醫師は腸が悪いんだつて言ふんですけれど。』

『しつかりした醫師に見せた方が好いと思ふね。』

『本當ですよ。』

翌日の朝、銀行の二階で三人はわかれた。小畑は清三に言つた。

『本當に體を大事にし給へ。』

土曜日は半日授業があつた。荻生さんは朝早く雨を衝いて歸つた。小畑は校長や清三の授業ぶりを參觀したり、教員室で關さんの集めた標本を見たり、時間毎に教員につれられてぞろ〳〵と教場から出て來る生徒の群を見たりして居た。女教員は黃い聲を立て丶生徒を叱つた。竹藪の中には椿が紅く咲いて、其緣にある盛りをすぎた梅の花は雨にぬれて泣くやうに見えた。清三は袴を穿いて、瘦せ果てた體と蒼白い顏とを教室の卓の前に浮き出すやうに見せて、高等二年生に地理を教へてゐた。午後からは、二人は又宿直室で話した。三時には馬車が喇叭を鳴らして羽生から來たが、馭者は今朝荻生さんに賴んでやつた豚肉の新聞包を小使部屋に投り込むやうにして置いて行つた。包の中には葱と手紙とが添へてあつた。手紙には明日午後から羽生に來い。待つてゐる！　と書いてあつた。

雨は終日止まなかつた。硬い田舍の豚肉も二人を淡く醉はせるには充分であつた。二人は高等師範のことやら、舊友のことやら、戰爭のことやらを飽かず語つた。

『今年は駄目だが、來年は一つ是非檢定を受けて見たいんだが。』

と清三は言つた。

日曜日には馬車に乘つて羽生に出かけた。旅順が陷落したといふ評判が盛んであつた。まだそんなに早く取れる筈がないといふ人々もあつた。街道を鈴を鳴らして走つて行く號外賣もあつた。荻生さんは、銀行の二階を借りて二人を迎へた。御馳走にはいり鳥と鷄肉の汁と豚鍋と鹿子餅。『今日は何だか飯の方が

『あの頃が思ひ出されるねえ。』

と小畑は寢ながら言つた。

荻生さんが一番先に鼾を立てた。『もう、寢ちやつた。早いなア、』と小畑が言つた。その小畑もやがて疲れて熟睡して了つた。清三は眼が覺めて何うしても眠られない。戸外にはサツと降つて通る雨の音が聞える。いろ〳〵な感があとからあとから胸を衝いて來た。胸が一杯になる。かうしたやさしい友もある世の中に長く生きたいといふ思ひが漲り渡つたが、それと共に、涙が其の蒼白い頰をほろ〳〵と傳つて流れた。中田の女のことも續いて思出された。長い土手を夕日を帶びてたどつて行く自分の姿が丸で他の人であるかのやうに鮮かに見えた。涙は寢卷の袖で拭いても拭いても出た。

翌朝、小畑は言つた。

『昨夜、君はあれからまた起きたね。』

『どうも眠られなくつて仕方がないから、起きて新聞を讀んだ。』

『何かごそ〳〵音がするから、目を明いて見ると、君はランプの傍で起きて居る。君の顏が白くはつきりと際立つて居たのが今でも見える。』かう言つて、清三の顏を見て、『夜寢られないかえ？』

『何うも寢られんで困る。』

『矢張神經衰弱だねえ。』

から言つて、女が學校に遣つて來たことなどを小畑に話して聞かせた。小畑は少なからず驚かされた。

夜は小川屋から一組の蒲團を運んで來た。まだ寒いので、荻生さんは小使部屋に行つてはよく火を火鉢に入れて持つて來た。菓子も盡き、湯茶も盡き、話も盡きてやうやく寢ようとしたのは十一時過ぎであつた。便所に出て行つた小畑は歸つて來て、『雨が降つてるねえ、』と聲低く言つた。

『雨！』

と明日朝早く歸る筈の荻生さんは困つたやうな聲を立てた。

『明日は土曜、明後日は日曜だ。行田には今週は歸らん積りだから、雨は降つたつて構ひやしない。君も、明日一日遊んで行くサ、滅多に三人かうして一緒になることはありやしない、』と清三はかう荻生さんに言つたが、戸外に漸く音を立て始めた點滴を聞いて、『愉快だなア！　かうしてわれ〳〵の會合の背景が雨になつたのは實に愉快だ。今夜はしめやかに昔を語れつて、天が雨を降らして呉れたやうなものだ！』

興が大に起つて來たといふ風である。小畑の胸にもかれの胸にも中學校時代のことが簇々と思ひ出された。清三は歸りが遲くなるといつもかうして一枚の蒲團の中に入つて、熊谷の小畑の書齋に泊るのが常であつた。顏と顏とを合せて、眠くなつて何方か一方、「うん〳〵」と受身になるまで話をするのが例であつた。

かう言つて、小畑は清三の血色の惡い顏を見た。

『體が少し惡いもんだから。』

『何うしたんだ?』

『持病の腸胃さ、大したことはないんだけれど……』

『大事にしないといかんよ。』

小畑は再び友の顏を見た。

三人は快活に話した。清三が出して見せる寫生を一枚毎に手に取つて批評した。荻生さんの輕い駄洒落もをり〳〵は交つた。そこに關さんが遣つて來た。昆蟲採集の話や植物採集の話が出る。三峰で採集したものなどを出して見せる。小畑は學校にあるめづらしい標本や昨年の秋の採集に出かけた時のことなどを話して聞かせる。賑かな聲がいつもしんとした宿直室に滿ち渡つた。

夕飯は小川屋に行つて食つた。雨氣を帶びた夕日がぱつと障子を明るく照して、酒を飲まぬ荻生さんの顏も赤い。小畑は美穗子や雪子のことは成たけ口に上さぬやうにした。かれは談笑の間にも著しく清三の活氣が無くなつたのを見た。

荻生さんは清三の居ない時に、

『あれでも去年は中々盛んだつたんですからな。』

ので、花が桃か何ぞのやうに見えた。嫁菜、蓬、なづななどの緣をも寫した。

月の末に、小畑から手紙が屆いた。少しく病を獲て、この春休みを故鄕に送るべく決心した。久し振りで一度逢ひ度い。此方から出かけて行くから、日取を知らせてよこせとのことであつた。旅順に於ける第一回の閉塞の記事が新聞紙上に載せられてある日であつた。淸三は喜んで返事を出した。金曜日には行くといふ返事が折かへして來る。淸三は荻生さんにも來遊を促した。其前夜は月が明るかつた。かれはそれに對して、久し振で、友のことを思つた。

四十五

小畑は昔に比べて著しく肥えて居た。薄い髭などを生して頭を綺麗に分けた。高等師範の制服がよく似合つて見える。以前の快活な調子で、『かういふ生活も面白いなア、』などと言つた。

荻生さんは淸三と小畑と敎員達とが、ボウルを取つて校庭に立つたのを緣側から下りる低い階段の上に腰懸けて見て居た。小畑の球はよく飛んだ。引かへて、淸三の球には力がなかつた。二三度勝負があつた。淸三の額には汗が流れた。心臟の皷動も高かつた。

苦しさうに呼吸をつくのを見て、

『君は何うかしたのか。』

さうした大國を敵として果して勝利を得らるゝか何うかと心配する老人もあつた。子供等は旗を擔へて戰爭の眞似をした。けれど概して田舍は平和で、夜はいつもの如く竹藪の外に藥屋の灯の光が漏れた。丁度舊暦の正月なので、街道の家々からは、酒に醉つて笑ふ聲や歌ふ聲もした。

此頃かれは朝は六時半に起床し、夜は九時に寢た。正月の餅と饂飩とに胃腸をこはすのを恐れたが、しかし大したこともなくてすぎた。節約に節約を加へた經濟法は段々成功して、負債も尠くなり、校長の斡旋で始めた賴母講にも毎月五十錢をかけることも出來るやうになつた。午後の二時頃にはいつも新聞が來た。戰爭が始まつてから、互に異つた新聞を一つづつ取つて交換して見ようといふ約束が出來た。國民に萬朝報に東京日々に時事、それに前の理髮舖から報知を持つて來た。

この多くの新聞を讀むこと、日記をつけること、運動をすること、節儉をすること、風を引かぬやうにつとむること、煙草を止めること、土曜日の歸宅を待つこと、それ位が此頃の仕事で、他にこれと言つて變つたこともなかつた。しかし煙草と菓子とを止めるは容易ではなかつた。氣分が好かつたり胃が好かつたりすると、机の周圍に餅菓子のからの竹皮や、日の出の袋などが轉がつた。

寫生には大分熱中した。天氣の好い日には、畫板と繪具とを携へてよく野に出かけた。榾木、榛の林、堀切の枯蘆、それに雪の野を描いたのもあつた。ある日學校の附近の紅梅を描いて見たが、色彩が描い

東武線が出來ぬ頃なので、信越線の吹上驛、鴻巢驛、桶川驛、奥羽線の栗橋驛、蓮田驛、久喜驛などがその集る重なる停車場であつた。

交通の衝に當つた町々では、逸早く國旗を建てゝ此兵士達を見送つた。停車場の構内には町長だの兵事係だの學校生徒だの親類友達だのが集つて、汽車の出る度每に萬歲を歡呼して其行を壯んにした。清三は行田から彌勒に歸る途中、さうした壯丁に幾人も邂逅した。

旅順仁川の海戰があつてから、靜かな田舍でも其話が到る處で繰返された。町から町へ、村から村へ配達する新聞屋の鈴の音は忙しげに聞えた。新聞紙上には二號活字が麗々しく揭げられて、いろ〳〵な計畫やら風說やらが記されてある。十二日は朝から曇つた寒い日であつたが、豫想のごとく、敵の浦鹽艦隊が津輕海峽に襲來して、商船奈古浦丸を轟沈したといふ報が來た。其の津輕海峽の艫作崎といふのは何處に當るか、それをたしかめる爲め、校長は敎授用の大きな大日本地圖を敎員室に懸けた。老訓導も關さんも女敎師も皆な其處に集つた。

『はゝア、こんな處ですかな。』と老訓導は言つた。

清三は浦鹽から一直線に遣つて來た敵の艦隊と轟沈されたわが商船とを想像して、久しく其掛圖の前に立つて居た。

湯屋でも、理髮舖でも、戰爭の話の出ぬ處はなかつた。憎いロシアだ、懲らしてやれといふ爺もあれば、

ひで子を送つて清三は其處に出て來た。

薔薇の新芽が出て居るのが目についた。清三はそれをひで子に示して、

『もう芽が出ましたね、早いもんだ、もうぢき春ですな。』

『本當に早いこと！』

とひで子は其一葉を摘み取つた。

やがて校外の路を急いで歸つて行く海老茶袴の姿が見えた。

四十四

日露開戰、八日の旅順と九日の仁川とは、急電のやうに人々の耳を驚かした。紀元節の日には校門に日章旗が立てられ、講堂からはオルガンが聞えた。

東京の騷ぎは日毎の新聞紙上に見えるやうに思はれた。一月以前から政治界の雲行の速かなのは、田舍で見て居ても氣がもめた。召集令は既に下つた。村役場の兵事係が夜に日を繼いで、其命令を各戶に傳達すると、二十四時間に其の管下に集らなければならない壯丁達は、父母妻子に別れを告げる暇もなく、或は夕暮の田舍道に、或は停車場までの乘合馬車に、或は楢林の間の野の路に、一包の荷物をかゝへて急いで國事に赴く姿が續々として見られた。南埼玉の一郡から徵集されたものが三百餘名、其頃はまだ

から。』

ひで子は笑つた。

先生と生徒とは日曜日の午後の明るい室に相對して暫し語つた。寄宿舍の話などが出た。今年卒業する筈の行田の美穗子の話も出た。依然として昔の親しみは殘つて居るが、女には娘になつた隔てが何處となく出て居るし、男には生徒としてよりも娘といふ感じがいつもの隔てのない會話をさまたげた。机の上には半分ほど飲んだ水藥の瓶が夕日に明るく見えてゐた。清三は今朝友から送つて來た『音樂の友』といふ雜誌をひろげてひで子に見せた。口繪には紀元二百年頃の樂聖セント、セリシアの像が出て居た。オルガンの妙音から出た花と天使の幻影とを樂聖はぢつと見て居る。清三はこの人はロオマの貴族に生れて、熱心なるエホバの信者で、オルガンの創造者であるといふことを話して聞かせた。美容花の如くであつたといふことをも語つた。

オルガンの音はやがて聞え出した。小使が行つて見ると、若い先生が指を動かして頻りに音を立てゝゐる傍に、海老茶の袴を着けたひで子は笑顏を含んで立つた。

校庭は靜かであつた。午後の日影に雀がチヤ〳〵と鳴き頻つた。テニスコートの線が明かに殘つてゐて、宿直室の長い緣側の隅にラツケツトやボールや網が置いてあるのが見える。庭の一隅には教授用の草木が植ゑられてあつた。

新體詩をオルガンに合せてよく歌つた。師範學校の寄宿舍からも、常に自然の、運命の、熱情のと手紙を寄越した。教へ子の一人よりなつかしき先生へと書いて來たこともあつた、時には、詩を下さいなどと言つて來ることもあつた。

『田原さん！』

『何うしたんです？』

清三は立上つた。

續いて訊ねた。

『今日用事があつて、家に參りましたから鳥渡お伺ひしましたの。』

言葉やら樣子やらからかうも變るものかと思ふほど大人びてハイカラになつたのを清三は見た。

『先生、御病氣だつて聞きましたから。』

『誰に？』

『關先生に――』

『關さんに何處で逢つたんです？』

『村の角で一寸――』

『何アに大したことはないんですよ、』と笑つて、『例の胃腸です――餘り甘いものを食ひ過ぎるものだ

いた。野の角に春を後に日向ぼつこをして、ブン〳〵絲繰車を繰つて居る猫脊の婆さんもあつた。名代の角の饂飩屋には二三人客が腰をかけて、傍の大釜からは湯氣が白く立つてゐた。野には、日當のいゝ所には草が既に萌えて、なづ菜など青々としてゐる。關さんはところ〴〵で、足を止めて、そろ〳〵芽を出し始めた草を採つた。そしてそれを淸三に見せた。風呂敷にも包まずに持つて居る淸三の水藥の瓶には、野の暖かい日影がさし透つた。

四十三

『先生。』

とやさしい聲がした。

障子を明けると、庇髮に結つて、烏渡見ぬ間に非常に大人びた女生徒の田原ひでが莞爾と笑つて立つて居た。昨年の卒業生で、出來の好いので評判であつたが、卒業するとすぐ、浦和の師範學校に行つた。高等一年生の時から淸三が手がけて敎へたので、殊にかれをなつかしがつてゐる。高等四年の頃に、新體詩などを作つたり和文を書いたりして淸三に見せた。家は烏渡した農家で、散歩の折に淸三が寄つて見たこともあつた。餘り可愛がるので、『林先生は田原さんばかり贔負にしてゐる、』などと生徒から言はれたこともあつた。丸顏の色の白い田舍にはめづらしいハイカラな子で、音樂が好きで、淸三の敎へた

れて、榛のひよろ長い空しい幹が青い空に捺すやうに見られた。かれは午前七時には必ず起きて、燃ゆるやうな朝日の影の霜けぶりの上に昇るのを見ながら、いつも深呼吸を四五十度遣るのを例にして居た。『何うして、かう氣分がすぐれないんだらう、何うかしなくつては仕方がない、』などと時には自から勵ました。しかし矢張腸胃の具合が好くなかつた。寢汗も出た。

四十二

ある暖かい日曜に、關さんと伴れ立つて、羽生の原といふ醫師の許へ見て貰ひに出懸けた。町の横町に、黑い冠木門があつて、庭の松が濃い綠を見せた。白い敷布をかけた寢臺が診察室にあつた。それに隣つた藥局には、午前十時頃の暖かい冬の日影の透つた硝子の向うに、種々の藥劑を盛つた小さい瓶が棚の上に並べてあるのが見えた。醫師は三十七八の髪を長くした丁寧な腰の低い人で、聽診器を耳に當てゝ、先づ胸から腹のあたりを見た。次に、肌をぬがせて脊中のあたりを見て、コツ〳〵と輕く叩いた。

『矢張、腸胃が悪いんでせうな。』

かう言つて型のごとき藥を醫師は呉れた。

春のやうな日であつた。連日の好晴に、霜解の路も大方乾いて、街道にはところ〴〵白い埃も見えた。霞に包まれて、頂きの雪がおぼろげに見える兩毛の山々を後ろにして、二人は話しながら緩かに歩

月の中頃に、母親から來た小荷物には、毛糸のシャツが入つて居た。手紙には、『寒さ烈しく御座候間餘り寒き時は湯をやすみ、風ひかぬやう御用心下されたく候、朝夕よきこと惡しきことにつけお前一人便りに御座候間御身大切に御守り被下度候』と書いてあつた。此頃は母を思ふの情が一層切になつて、土曜日に歸る途でも、稚兒を脊に負つた親子三人連の零落した姿などを見ては涙をこぼした。母親も此頃清三の際立つてやさしくなつたのを喜んだが、しかし又心配にならぬでもなかつた。俄かに氣の弱くなつたのは病氣の爲めではないかと思つた。清三が行くと、賃仕事を午後から休んで、白玉のしる粉などをこしらへて歡待した。寢汗が出るといふことを聞いて、『お前、本當にお醫者にかゝつて見て貰はなくつて好いのかね、』と顏に心配の色を見せて言つた。

時には荻生さんを羽生から誘つて來て、宿直室に一夜泊らせることなどもあつた。荻生さんは此頃話しのある養子の口のことを語つて、『其家は君、相應に財産があるんですつて、今に、立派な旦那になつたら、たんと御馳走しますよ。君位一人置いて上げても好い、』などと戯談を言つて快活に笑つた。荻生さんは床に入ると、すぐ鼾を立てゝ安らかに熟睡した。かうして安らかに世を送り得る人を清三は羨しく思つた。

關さんはすひかつらやじやのひげや大黄などを枯草の中に見出して敎へて與れた。寒い冬の中にも際立つて暖かい春のやうな日があつた。野は平らかに、靜かに、廣く、さびしく、しかも心地よく刈取ら

と書いた。また『Mの都合あれば歸宅したけれど思ひ止る。節約の結果三錢の刻煙草四日を保つ。』と書いた。しかしかれは夜眠られなくつて困つた。眠つたと思ふとすぐ夢におそはれる。大抵は恐ろしい人に追ひ懸けられるとか刀で斬られるとかする夢で、眼が覺めると、ぐつしより寢汗をかいて居る。心持の悪いことは譬へやうがなかつた。

中學校校友會の會報が年二季に來た。同窓の友の消息がおぼろ氣ながらこれに出つて知られる。アメリカへ行つたものもあれば、北海道へ行つたものもある。今季の會報には寄宿舎生徒松本なにがしが自から棄てゝ自殺した顚末が書いてあつた。深夜、ピストルの音がして人々が驚いて走せ寄つたことが詳しく記してあつた。かれは今まで思つたことのない「死」に就いて考へた。夜は其夢を見た。寄宿舎の窓に灯が明るく點いて、人がガヤ〱して居る。ピストルが續けさまに鳴つた。自殺した男が窓から飛んで出た。

朝毎の霜は白かつた。夜半の霙で竹の葉が眞白になつて居ることもあつた。ラッケットを捌いて校庭に立つて居るかれの痩削な姿を人々は常に見た。解けやらぬ小川の氷の上にはあをじが飛び、空しい枝の桑畠にはつぐみが鳴き、榛の根の枯草からは水鷄が羽音高く驚き立つた。楢や栗の葉は全く落ち盡して、草の枯れた利根川の土手は唯一帶に代赭色に塗られて見えた。田には大根の葉がひたと捨てられてあつた。

發す。

七日――病後療養と腫物の爲め歸校をのばす。△紅葉秋濤著「寒牡丹」讀みかけてやめる。罪惡が發端なり△中學世界買つて來てよむ。△加藤歸京す。

八日――健康を得たし、健康を得たし。健康を得たし。

九日――「寒牡丹」讀みて夜に入つて讀了す。罪惡に伴ふ悲劇中の苦悶、女主人公ルイザの熱誠なる執着、四百頁の大團圓はラブの成功に終る。△煙草は感冒の影響にて、頓に其量を減じ、あらば吸ひなくば吸はぬといふになりたり。長くこの方法が惰性となればよけれど如何にや。△明日は又利根河畔の人となるべし。△日露の危機、外交より戰期に遷らんとすと新聞紙頻りに言ふ。吾人の最も好まぬ戰爭は遂に避くべからざるか。

さびしい寒い宿直室の生活はやがてまた始まつた。昨年の十一月から節約に節約を加へて、借金の返却を心懸けたので、財嚢は常に〱冷かであつた。胃が惡く氣分がすぐれぬので、勉めて運動をしようと思つて、生徒を相手に校庭でテニスを遣つた。かれの蒼白い髮の生えたすらりと瘦せた姿はいつも夕暮の空氣の中に鮮かに見えた。かれは土曜日の日記の中に、『半日の課業を正直にすませ、滿足に事務を取り、温き晩餐の後、其日の新聞よみ終りて、さて一日の反省に何等悶ゆることなく、安息すべき明日の日曜を思へば、テニスの運動の影響とて、右手の筋肉の筆執るに震へるの外絶えて平和ならざるなし。』

ゐて床の間に飾つた。朝日の影が薄く障子にさした。親子は三人樂しさうに並んで雜煮を祝つた。

清三の日記は次のごとく書かれた。

明治三十七年。

一月一日――新しき生命と革新とを與ふべく、新しく苦心と成功と喜びと悲しみとを下すべく新年は來れり。若き新年は向上の好機なり。願はくば清く樂しき生活を營ましめよ。△『新年を床の青磁の花瓶に母が好みの蔓梅もどき』△小畑に手紙出す、これより勉强して二年三年の後、檢定試驗を受んとす。科目は植物に志す由言ひやる。△風邪心地やうやくすぐれたれば、明日あたりは野外寫生せんとて、畫板など繕ふ。

二日――『たゝずの門』の邊に寫生すべき所ありたれど、風吹きて終日寒ければ止む。△きく子が數へし玄米一合の粒數七二五六。

三日――昨夜入浴せし爲め感冒再び元にもどる△休暇中に野外寫生の望み絕ゆ。

四日――萬朝報の米調べ發表、玄米一升七三二五〇粒△今年は儉約せんと思ふ。財嚢の常に虛なるは心を溫めしむる現象にあらず。所詮生活に必要なるだけの金は必要なり。

五日――年賀の禮今年は缺く。

六日――牧野雪子（雪子は昨年の暮前橋の判事と結婚せり）より美しき繪葉書の年賀狀來る△腫物再

大晦日には丁度昨日歸つたといふ加藤の家を訪づるゝことが出來た。郁治は清三の瘦せた顏と蒼白い皮膚とを見た。話し振も何處となく消極的になつたのを感じた。何ぞと言ふとすぐ衝突して議論をしたり、大晦日の夜を感激して曉の三時まで町中や公園を話し歩いたりした三年前に比べると、かうも變るものかと思はれた。二人は此頃東京の新聞で流行る寶搜しや玄米一升の米粒調べの話などをした。萬朝報の寶を小石川の久世山に豫科の學生が掘に行つてさがし當てたことを面白く話した。續いて、日露談判の交渉がむづかしいといふことが話題に上つた。『何うも東京では近來餘程殺氣立つてゐる。新聞の調子を見ても解るが、何處かかういつもと違つて眞面目なところがある。いよ〳〵戰端が開けるかも知れない、』と郁治は言つた。清三も此頃では新聞紙上で、この國家の大問題を熱心に見て居た。『そんな大きな戰爭を始めて何うするんだらう、』といつも思つて居た。二人は其問題に就いていろ〳〵話した。陸軍では勝算があるが、海軍では噸數がロシアの方が勝つて居て、それに戰鬪艦が多いなどと郁治は話した。

　元日の朝、床の間の花瓶にかれはめづらしく花を生けた。早咲の椿は僅かに赤く花を見せたばかりで、厚い濃い綠の葉は、黄い寒菊の小さいのと趣に富んだ對照をなした。別に蔓うめもどきの赤い實の鈴生になつたのを挿して居ると、母親は『私、この梅もどきつていふ花大好きさ。この花を見るとお正月が來たやうな氣がする。』かう言つて通つた。父親は今朝猫の額のやうな畠の角で、霜解の土をザク〳〵踏みながら、白い手を泥だらけにして、頻に何かしてゐたが、やがて漸く芽を出し始めた福壽草を鉢に植

が圖を描いてゐることもある　かれは彌勒野の初冬の林や野を繪はがきにして、小畑や加藤へ送つた。

三たびこのさびしい田舍に寒い西風の吹荒れる年の暮が來た。前の竹藪には薄い夕日がさして、あをじやつぐみの鳴聲が垣に近く聞える。二十二日頃から、日課點の調べが忙しかつた。舊の正月に羽生で擧行せられる成績品展覽會に出品する準備もそれ相應に整頓して置かなければならなかつた。圖畫、臨本模寫、考案畫、寫生畫、模樣畫、それに綴り方に作文、昆蟲標本、植物標本などもあつた。それを生徒の多くの作品の中から選ぶのは一通の勞力ではなかつた。何うか來年は好成績を博したいものだと校長は言つた。

それに何うしてか、此頃はよく風邪を引いた。散步したとては、咳嗽が出たり、湯に入つたとては熱が出たりした。烟草を飲むと、何うも頭の具合が惡い。今までに覺えたことのない輕い一種の眩惑を感じる。『君、何うかしたんぢやありませんか、醫師に見て貰ふ方が好いですぜ、』と關さんは二十四日の授業を終つて別れようとする時に言つた。

荻生さんを羽生に訪問した時には、さう大して苦しくもなかつたけれど、成願寺に行つて久し振で和尚さんに逢つて話さうと思つた希望は、警察署の前まで來て中止すべく餘儀なくされた。熱も少くとも三十八度五分位はある。それに咳嗽が出る。丁度其處に行田に戻り車がうろ〳〵して居たので、廉く賃錢をねぎつて乘つた。寒い路を日の暮れ〴〵に漸く家に着いた。

年の暮を一室に籠つて寢て送つた。母親は心配して、いろ〳〵慰めて吳れた。幸ひにして熱は除れた。

『野心を捨てゝ平和に兩親の老後を養ひ得ればこれ余の成功にあらずや。母はわれと共に住まんことを豫想しつゝあり。』

又ある時は次のやうなことを書いた。

『親しかりし昔の友、われより捨て去りしは愚かなりき。情薄かりき。われをして再びその暖かき昔の友情を復活せしめよ。所詮、境遇は境遇なり。運命は運命なり。かれ等を羨みて捨て去りしわれの小なりしことよ。喜ぶべきかな友情の復活！　一昨日小畑より打解けたる手紙あり。今日また加藤より情に滿たされたる便あり。小畑は自分の讀み古したる植物の書籍近きに送らんといふ。嬉し。』

校長も同僚も淸三の態度の俄かに變つたのを見た。淸三は一昨年あたり熱心に集めた動植物の標本の整理に取懸つた。野から採つて來て紙に張つたまゝそのまゝにしてあつたのを一つ一つ誰れにも解るやうに分類して見た。今年の夏休みに三日ほど秩父の三峯に關さんと遊びに行つた時採集して來たものゝ中にはめづらしいものがあつた。關さんは文部省の中學教員檢定試驗を受ける準備として、頻りに動植物を硏究してゐた。其旅でも實際に就いて關さんは頻りに淸三に其趣味を鼓吹した。

小畑からやがて其教科書類が到着した。此の秋まで音樂に熱心であつた心は段々その方面に移つて行つた。解らぬところは關さんに訊いた。

村の百姓達は再び若い學校の先生の散步姿を野道に見るやうになつた。寫生してゐる其周圍に子供達

はかれに取つては暗黑な時代でもあり、また複雜した世相にふれた時代でもあつた。事件や心持を充分に書けぬやうな日記なら廢す方が好いと言つたが、それと反對に、日記に書けぬやうなことはせぬといふ處に、日記を書くといふことのまことの意味があるのではないかとかれは考へた。

かれは再び日記を書くべく罫紙を五六十枚ほど手づから綴ぢて、其第一頁に、前の三ケ條を麗々しく掲げた。

明治三十六年十一月十五日。

かれはかう書き出した。

四十一

『過去は死したる過去として葬らしめよ。』

『われをして吾が日々のライフの友たる少年と少女とを愛せしめよ。』

『生活の資本は健康と金錢とを要す。』

『われをして淸き生活を營ましめよ。』

かういふ短かい句が日記の中に絶えず書かれた。

又ある日はかういふことを書いた。

『弱かりしかな、不眞面目なりしかな、幼稚なりしかな、空想兒なりしかな。今日よりぞわれ勇者たらん。今日よりぞわれ、わが以前の生活に歸らん。』

『第一、體を重んぜざるべからず。』

『第二、責任を重んぜざるべからず。』

『第三、われに母あり。』

かれは『われに母あり』と書いて、筆を持つたまゝ顏を擧げた。胸が迫つて來て、蒼白い頰に涙がほろ〳〵と流れた。

かれは中田に通ひ始める頃から、日記をつけることを廢した。滅多なことを書いて置いて、萬一他人に見らるゝ虞がないでもないと思つたからである。かれは柳行李を明けて、其頃の日記を出して見た。九月二十四日――秋季皇靈祭。其文字に朱で圏點が打つてあつた。其次の土曜日の條に、大高島から向う岸の土手に渡る記事が書いてあつた。日記は絶々ながらも、其年の十月の末頃までつゞいて居た。利根川の暮秋のさまや落葉や木枯のことも書いてある。十月の二十三日の條に、『此日、雨寒し――』と書いてあつて、あとは白紙になつて居る。其時、『日記なんてつまらんものだ。矢張他人に見せるといふ色氣があるんだ。自分の遣つたことや心持が充分に書けぬ位なら斷然止して了ふ方が好い。』かう思つて筆を斷つたのを覺えて居る。其間の一年と二三ケ月の月日のことを満二は考へずには居られなかつた。其間

金の價値の貴い田舍では、何よりも先にこれから信用が崩れて行つた

四十

處が何うした動機か、淸三は急に眞面目になつた。勿論、校長から懇々と說かれたこともあつた。和尙さんからもそれとなく忠告された。けれどその爲めばかりではなかつた。

頭が急に新しくなつたやうな氣がした。自己の不眞面目であつたのが今更のやうに感じられて來た。落ちて行く深い谷から一刻も早く浮び上がらなければならぬと思つた。

失望と空虛とさびしい生活とから起つた身體の不攝生、此頃では何をする元氣もなく、散歩にも出ず、雜誌も讀まず、同僚との話もせず、每日の授業もお勤めだから仕方がなしに遣るといふ風に、蒼白い不健康な顏ばかりして居た。何處となく體が氣だるく、時々熱があるのではないかと思はれることなどもあつた。持病の胃は益々募つて、口の中は常に乾いた。――不眞面目な生活がこの不健康な肉體を通じて痛切なる悔恨を作つて來た。弱かつたがしかし淸かつた一二年前の生活が眼前に浮んで通つた。

『絕望と悲哀と寂寞とに堪へ得られるやうなまことなる生活を送れ。』

『絕望と悲哀と寂寞とに堪へ得らるゝ如き勇者たれ。』

『運命に從ふものを勇者といふ。』

『餘程失望したんですね。』

『え……それは熱心でしたから、試驗前の二月ばかりと言ふものは、そのことばかり言つてましたから。』

『つまり今度のことなどもそれから來てるんですな、』と、和尚さんは考へて、『本當に氣の毒ですな。隨分さびしい生活ですものなァ。それに眞面目な性分だけ、一層辛いでせうから。』

『私見たいに暢氣だと好いんですけれど……』

『本當に、君とは違ひますね。』

と和尚さんは笑つた。

三十九

清三の借金は中々多かつた。この二月ばかり、自炊をする元氣も無く、三度々々小川屋から辨當を運ばせたので、其勘定は七八圓までに上つた。酒屋に三圓、菓子屋に三圓、荒物屋に五圓、前からそのまゝにしてある米屋に三圓、其他同僚から一圓二圓と借りたのも尠くなかつた。荻生さんにも四圓ほど借りたまゝになつて居た。

中田に通ふ頃に和尚さんに融通して貰つた二圓も返さなかつた。

と荻生さんは鳥渡途切れて『此間も言つてましたよ。僕はかういふ運命なら仕方がない。一生獨身で子供を相手にして暮しても遺憾がないつて言つてましたよ。』

『獨身も好いが――そんなことをしては仕方がない。』

『本當ですとも。』

と荻生さんは友達思ひの心配さうに、『校長が可愛がつて吳れてるから好いですけれど、郡視學の耳にでも入ると大變ですからな。それに狹い田舍ですから、すぐぱつとして了ひますから……今度來たら、それとなく言つて戴き度いものですが……』

『それは言ひませう。』

と和尙さんは言つた。

『それに、淸三君は體が弱いですからな……』

と荻生さんはやがて言葉をついだ。

『矢張胃病ですか。』

『え、相變らず甘いものばかり食つて居るんですから。甘いものと、音樂と、繪の寫生とこの三つが僕のさびしい生活の慰藉だなどと前から言つて居ましたが、此頃ぢや――この夏の試驗を失敗してからは、集めた譜は押入の奧に入れて了つて、唱歌の時間きりオルガンも鳴らさなくなりましたから。』

『そして、其中に誰か相手が出來てるんですか。』

『よく解りませんけれど、出來てるんださうです。』

『何うせ、機織か何かなんでせう？』

『え。』

『困るですな。さういふ女に關係をつけては。』

と和尙さんも嘆じた。

少時してから、

『早く上さんを持たせたら、何うでせう。』

『此間も行田に行きましたから、次手に寄つたんですが、お袋さんもさう言つてゐました。』

『加藤君のシスタアは貰へないのですか。』

『先生が厭だつて言ふんです……』

『だつて、前にラブしてゐたんぢやないですか。』

『何うですか。淸三君、よく話さんですけれど、加藤君と何か仲たがひか何かがしたらしいですな。』

『そんなことはないでせう。』

『いや、あるらしいんです。』

懷から財布を出して勘定をした。やがて雜沓の中を停車場へ急いで行くかれの姿が見られた。

三十八

荻生さんが和尙さんを訪ねて次のやうな話をした。

『何うも困りますんですがな。』

と荻生さんが例の人の好い調子で、さも心配だといふ顏をすると、

『それは困りますな。』

と和尙さんも言つた。

『何うも思ふやうに行かんもんですから、ついさういふことになるんでせうけれど……』

『校長からお聞きですか。』

『いゝえ、校長からぢかに聞いたといふ譯でもないですけれど……借金も出來たやうですし、それに淸三君が宿直室に居ると、女がぞろ〳〵遣つて來るんだつて言ひますからねえ。』

『一體、あそこは風儀が惡い處ですからなア。』

『隨分面白いんですつて……淸三君一人で居ると、學校の裏の垣根の處から、聲をかけたり、わざと土塊を投り込んだりするんですつて。さうして誰も居ないと、庭から廻つて入つて來るんださうです。』

れば事業もある。功名もあれば富貴もある。飢餓もあれば絶望もある。新聞紙上に毎日のやうに顯はれて來る三面事故のことなども胸に上つた。

竹の臺から下りると、前に廣小路の雜沓が展げられた。馬車鐵道が後から後から幾臺となく續いて行く。撒水夫がその中を平氣で水を撒いて行く。人力車が懸聲で馳つて行く。

暫くして、清三の姿は、其通りの小さい蕎麥屋に見られた。

『入らつしやい。』

と若い婢の黄い聲がした。

『ざる一つ！』

といふ聲がつゞいてした。

清三は夕日の射し込んで來る座敷の一隅で、誂への來る間を、大きな男が大釜の蓋を取つたり閉てたりするのを見てゐた。釜の蓋を取ると湯氣が白くぱつと颺つた。長い竹の箸でかき廻して、ザブ〳〵と水で洗つて、それをざるに手で盛つた。『お待遠さま、』と婢はそれを膳に載せて運んで來た。足の裏が黑かつた。

清三はざるを二杯、天ぷらを一杯食つて、ビイルを一本飮んだ。醉が廻つて來ると、少し元氣がついた。

『歸らう、小畑や加藤を訪問したつて仕方がない。』

の白い埃を見詰めたのをかれは覺えて居る。『せめて動物園でも見て行かう』と思つてかれは身を起した。

丹頂の鶴、絶えず鼻を巻く大きな象、遠い國から來たカンガルウ、駱駝だの驢馬だの鹿だの羊だのが別段珍らしくもなく歩いて行くかれの眼に映つた。ライオンの前ではそれでも久しく立止つて見て居た。養魚室の暗い隧道の中では、水の中に明かな光線がさし透つて、金魚や鯛などが泳いで居るのが鮮かに見えた。水珠が其處からも此處からも擧つた。

鷗や鴛鴦や其他さまざまの水鳥のゐる前のロハ臺にかれはまた腰を下した。あたりをさまざまな人がいろいろなことを言つてぞろぞろ通る。子供は鳥の賑かに飛んだり鳴いたりするのを面白がつて、柵につかまつて見とれて居る。暫くしてかれはまた歩き出した。鷹だの狐だの狸だのゝ居る處を通つて、猿が齒をむいたり赤い尻を振り立てたりしてゐる處を拔けて、北極熊や北海道の大きな熊の居る處を通つた。孔雀の見事な羽もさして興味を惹かなかつた。かれは入つた時と同じやうにして出て行つた。

東照宮の前では、女學生が派手な蝙蝠傘をさして歩いて居た。パノラマには、古ぼけた日清戰爭の畫か何かゞかゝつてゐて、札番が退屈さうに欠びをして居た。

竹の臺に來て、かれはまた三たびロハ臺に腰をかけた、

眼下に橫つて居る大都會、甍が甍に續いて、烟突からは黑い凄しい烟が颺つてゐるのが見える。彼方此方から起る物音が一つになつて、何だかそれが大都會の凄しい叫びのやうに思はれる。此處に罪惡もあ

公園のロハ臺は樹の影で涼しかつた。風がをり〱心地よく吹いて通つた、かれは心を靜める爲めに其處に横になつた。向うには緣臺に赤い毛布を敷いたのがいくつとなく並んで、赤い襷で綾取つた若い女のメリンスの帶が見える。中年增の姿もくつきりと見える。赤い地に氷といふ字を白く拔いた旗がチラチラする。

動物園の前には一輛の馬車が待つて居た。白いハッピを着た御者はブラ〱してゐた。出札所には田舍者らしい二人連が大きな財布から錢を出して札を買つて居た。

東京に出たのは初めてである。試驗をすましたら、動物園も見よう、博物館にも入らう、一通り市中の見物もしよう、お茶の水の寄宿に小畑や郁治をも訪ねよう。かういろ〱心の中に計畫して遣つて來た。田舍の空氣によごれた今までの生活を遁れて、新しい都會の生活をこれから開くのだと思ふと、中學を出た頃の若々しい氣分にもなれた。昨日吹上の停車場を發つ時には、久し振で、さま〲の希望の念が胸に漲つたのである。かれはロハ臺に横はりながら、其希望と今の失望との間に挾まつた一場の光景をまた思ひ浮べた。

ロハ臺から起上る氣分になるまでには、少くとも一時間は經つた。馬車はもう居なかつた。なにがし子爵夫人とも言ひさうな立派な貴婦人が、可愛らしい洋服姿の子供を三四人伴れて、其處から出て來て、嬉々として馬車に乘ると、御者は鞭を一當あてゝ、跡に白い埃を立てゝ、ガラ〱と轆つて行つた。そ

堪らなくさびしい氣がした。

三十七

其年の九月、午後の殘暑の日影を受けて、上野公園の音樂學校の校門から、入學試驗を受けた人々の群がぞろ〳〵と出て來た。羽織袴もあれば洋服もある。庇髪に菫色の袴を穿いた女學生もある。校内からはピアノの音が緩かに聞えた。

其群の中に詰襟の脊廣を着て、古い麥稈帽子を冠つて、一人てく〳〵に塀際に寄つて歩いて行く男があつた。靴は埃に塗れて白く、毛繻子の蝙蝠傘は褪めて羊羹色になつて居た。それは田舍からわざ〳〵試驗を受けに來た清三であつた。

入つただけでも心が戰へるやうな天井の高い室、鬚の生えた肥つた立派な體格をした試驗委員、大きなピアノには、中年の袴を穿いた女が後向になつて頻りに妙な音を立てゝ居た。清三は田舍の小學校の小さなオルガンで學んだ研究が、何の役にも立たなかつたことをやがて知つた。一生懸命で集めた歌曲の譜も全く徒勞に屬したのである。かれは初歩の試驗に先づ失敗した。顏を眞赤にした自分の小さなあはれな姿が徒らに試驗官の笑を買つたのがまだ眼の前にちらついて見えるやうであつた。『駄目！ 駄目！』と獨りで言つてかれは頭を振つた。

して言つて見た。『何でもない、當り前のことだ。』と言つても見た。けれど平靜であるだけそれだけかれは深い打擊を受けて居た。

土手に上る時、

『憎い奴だ。復讐をしてやらなければならん、復讐！　復讐！』

と叫んだ。しかし心はそんなに激しては居らなかつた。

麥倉の茶店では、茶をのみながら、

『もう此處で休むこともこれ限りだ。』

大高島の渡しを渡つて、いつものやうに間道を行かうとしたが、これも思返して、

『何ァに、もう解つたつてかまふもんか。』

で、大越に出て、わざと老訓導の家を訪うた。

老訓導は淸三の常に似ず際立つてはしやいで居るのを不思議に思つた。淸三は出してくれたビイルをグン〳〵と呷つて飮んだ。

『何か一つ大きなことでも爲たいもんですなァ――何でも好いから、世の中をびつくりさせるやうなことを。』

こんなことを言つた。そしてこれと同じことを昨年羽生の寺で和尙さんに言つたことを思ひ出した。

清三は金槌か何かでガンと頭を打たれたやうな氣がした。『貴方さんにもな、是非ゆく前に一度お目にかゝり度いつて言つて居ましたけれど……貴方は丁度お見えにならんし、急なものだで、手紙を上げてる間もなし、おいらんも殘念がつて居ましたけれど、仕方がなしに、貴方が來たらよく言つて呉れつてな……それにこれを渡して呉れつて置いて行きましたから、』と風呂敷包を渡した。中には一通の手紙と半紙に包んだ四角なものが入つて居た。手紙には金釘のやうな字で、覺束なく別れの紋切形の言葉が書いてあつた。殘念々々々々々々々といふ字が幾つとなく眼に入つた。しかし身請されて行つた處は書いてなかつた。

半紙に包んだのは寫眞であつた。

をばさんは手に取つて、

『おいらんも罪なことをする人だよ。』

と笑つた。

身請されて行つた先は話さなかつた。相方は兼ねて知つて居る靜枝の妹女郎が來た。顏の丸い肥つた女だつた。清三は默つて酒を飮んだ。默つて其の妹女郎と寢た。妹女郎は行つた人の話をいろ〳〵として聞かした。清三は默つて聞いた。

翌日は早く歸途に就いた。存外心は平靜であつた。『何うせかうなる運命だつたんだ、』と自から口に出

はまだかれの爲めになつかしい町、戀しい町、忘れ難い町であつたが、今はそれさへ他鄕の人となつて了つた。神燈の影艶かしい細い小路をいくら步いても、にこ〳〵といつも元氣の好い顏を見せて、幼い頃の同窓のよしみを忘れない『われ等の小瀧』を見ることは出來なくなつたのである。淸三は三ケ日を濟ますと、母親の止めるのをふり放つて、今までに曾て無いさびしい心を抱いて、西風の吹荒れる三里の街道を彌勒へと歸つて來た。

それでも懷には中田へ行く爲めの金が三圓殘してあつた。

三十六

三月のある寒い日であつた。

渡良瀨川の渡場から中田に來る間の夕暮の風はヒウ〳〵と肌を刺すやうに寒く吹いた。灰色の雲は空を蔽つて、をり〳〵通る帆の影も暗かつた。

灯の點く頃、中田に來て、いつもの通り階段を上つたが、馴染でない新造が來て、眞面目な顏をして、二階の別の室に通した。いつも――客が居る時でも、行くとすぐ顏を見せた女が遣つて來ない。不思議にしてゐると、やがて馴染の新造が上つて來て、

『おいらんもな、お目出度いことで――この十五日に身ぬけが出來ましたでな。』

一月には郁治も美穗子も歸つて居た。郁治にも二三度逢つて話をした。美穗子に就いての話はもうしなかつた。郁治は寧ろ消極的に戀愛の無意味を語つた。『何故、あんなに熱心になつたか自分でも解らない。丁度さかりがついたものゝやうなものだつたんだね。』と言つて笑つた。其癖郁治と美穗子とはよく相携へて散歩した。男は高師の制帽を冠り、女は新式の庇髮に結つて、派手な幅の廣いリボンをかけた。小畑の手紙に由ると、二人はもう戀愛以上の交際を續けて居るらしかつた。清三は厭な氣がした。

丁度其頃熊谷の小瀧の話が新聞に出て居た。『小瀧の落籍』といふ見出しで、伊勢崎の豪商に根曳される話がひやかし半分に書いてある。小瀧には深谷の金持の息子で、今年大學に入學した情人があつた。其男に小瀧は並々ならぬ情を見せたが、其家には許婚のこれも東京の跡見女學校に入つて居る娘があつて、到底望みを達することが出來ぬので、泣きの涙で、今度いよ／＼落籍されることになつたと書いてある。其豪商は年は四十五六で、女房も子もある。『何うせ一二年辛い年貢を納めると、又舞戻つて二度のお勤め、今晩は――と例のあでやかな聲が聞かれるだらうから、今からお馴染の方々はその時を待つて居るさうだ。』などと冷かしてあつた。本當の事情は知らぬが、清三はさうした社會に生立つた女の身の上を思はぬ譯には行かなかつた。思ひのまゝにならぬ世の中に、更に思ひのまゝにならぬ境遇に身を置いて、うき草のやうに浮き沈みして行く其人々の身の上がしみ／＼と思ひやられる。小瀧のある間は――其の美しい姿と艶なる聲とのある間は、友人が離散して去つても、幼い頃の追憶が薄くなつても、熊谷の町

『それは出來ないことはないだらうけれど、父さんはあゝいふ風だし、私ばかり苦勞しなくつちやならないから。』

清三は默つて了つた。

またある時は次のやうな會話をした。

『お前、加藤の雪さんを貰ふ氣はない？』

『雪さん？　何故？』

『呉れても好いやうな母さんの口振だつたからさ。』

『何うして？』

『それとはつきり言つた譯ぢやないけれど、逢つて望めば呉れるやうな樣子だつたから。』

『いやなこつた。あんな白々しい、おしやらくは！』

『だつて、郁治さんとはお前は兄弟のやうだし、呉れさへすれや望んでも欲しい位な娘ぢやないかね。』

『いやなこつた。』

『此頃は何うかしたのかえ？　加藤にも滅多に行かんぢやないか。』

『利益交換なぞいやなこつた！』

かう言つて、清三はぷいと立つて了つた。母親には其意味が解らなかつた。

て、學校の近くに引越して、儉約して暮すやうにすれば、人並には遣つて行けないことはないよ。』
『でもまだ早いから。』
『でも、かうして離れて居ては、お前が何んなことをして居るか解らないし、』と笑つて見せて、『それにお前だつて不自由な思ひをして、いつまで學校に居たつて仕方がないぢやないか。』
『お母さん、そんなこと言ふけれど、僕はまだこれで望みもあるんです。今少し勉强して、中學の教員の免狀位は取りたいと思つてゐるんだから……今から女房などを持つたつて仕方がありやしない。』
『そんな大きな望みを出したつて仕方がないぢやないかねえ。』
『だつて、僕一人田舍に埋もれて了ふのは厭ですもの。一二年はまァ仕方がないからかうしてゐるけれど、いつか何うかして東京に出て勉强したいと思つてゐるんです。音樂の方を此頃少し遣つてるから、來年あたり試驗を受けて見ようと思つて居るんです。今から女房など持つちやわざわざ田舍に埋れて了ふやうなもんだ。』
『だつて、入れた處で學費は何うするのさねえ？』
『音樂學校は官費があるから。』
『そして家は何うするのだえ？』
『其時は父さんと母さんで暮して貰ふのさ。三年位何うにでもして貰はなくつちや。』

し、肉など何日にも煮て食つたためしがねえ、』などと此頃は餘り菜の殘りの御馳走に預らないので、ぶつ〳〵と不平さうに獨言を言つた。同僚の關さんや羽生の荻生さんなどが訪ねて來ても、以前のやうにビイルも出さなかつた。

樣子の變なのを一番先きに氣附いたのは、矢張行田の母親であつた。わざ〳〵三里の路を遣つて來ても、そは〳〵といつも落附いて居ないばかりではない。友達が東京から歸つて來てゐても訪問しようでもなく、昔のやうに相談をしかけてもフム〳〵と聞いて居るだけで相手にもなつてくれない。それに、何の彼のと言つて、毎月のものを置いて行かない。あれほど好きであつた雜誌も碌々買はず、常得意の町の本屋にもカケを拵へない。母親は息子の此頃何うかして居るのをそれとなく感じて、時々心を讀まうとするやうな眼色をして、チッと淸三の顏を見詰めることがある。

ある時こんなことを言つた。

『此間ね、好い嫁があるから、世話しようつて言ふ人があるんだがね……お前ももう身も定つたことだし、何うだ、貰ふ氣はないかえ？』

淸三は母の顏をぢつと見て、

『だつて、自分が食べることさへ大抵ぢやないんだから。』

『それはさうだらうけれど、お前位の月給で、女房子を養つて居る人はいくらもあるよ。一緒になつ

立てゝ川を下つて行くのが手に取るやうに見えた。甲板の上には汚れた白い服を着たボウイが二三人仕事をして居るのが小さく見えた。清三は立止つてぢつとそれを見詰めた。白い煙が細くズッと立つたと思ふと、汽笛の尖つた響が灰色に曇つた水の上にけたゝましく響き渡つた。利根川は溶々として流れて下る。逝く者斯の如しといふ感が清三の胸を襲つて來た。

三十五

清三の中田通ひは誰れにも知られずに冬が來て其年も暮れた。其間にも危險に思つたことは二三度はある。一度は村の見知越しの若者の横顏を張見世の前でちらと見た。一度は大高島の渡船の中で村の學務委員と一緒になつた。今一度は大越の土手を歩いてゐるとひよつくり同僚の關さんに邂逅した。其時はこれはてつきり看破されたと胸をドキつかせたが、清三のいつもの散歩癖を知つてゐる關さんは、別に疑ふやうな口吻をも洩さなかつた。

けれど菓子屋、酒屋、小川屋、米屋などに借金が段々溜つた。『林さん、どうしたんだらう。此頃は拂がたまつて困るなア、』と小川屋の主婦は娘に言つた。菓子屋の婆は、『今月は少しや入れて貰はねえぢや――よく言つて與んなれ、』と學校の小使に頼んだ。小使は小使で、『何うしたんだんべい。林さん元は金持つて居た方だが、此頃ぢやねつからお茶も買ひやしねえ。いつも漬物で茶をかけて飯をすまして了ふ

愛いおとなしい人よ。何だか弟のやうな氣がして仕方がない』と女は惚けた。

其他にもまだあるらしかつたが、よく解らなかつた。鬚の生えた中年の男も來るやうであつた。清三は女の胸に誰が一番深い影を印して居るかを探つて見たが、何うも解らなかつた。自分の影が一番深いやうにも思はれることもあれば、要するに旨く丸められて居るのだと思ふこともある。ある時、女は染染と泣いてその憐れむべき境遇を語つた。黑目勝な眼からは、涙がほろ〳〵とこぼれた。清三は其時自己の境遇と女に對する自己の關係とを眞面目に考へた。自分は小學校教員である。さういふことが鳥渡でも知れゝば勤めて居ることの出來ぬ身の上である。それに家は辛うじて生活して行く貧しい生活である。この女と一緒になることが出來ないのは初めから解り切つたことである。この女がある人に身請されるなり、年季が滿ちて故郷に歸ることの出來るなりするのを寧ろ女の爲めに祝して居る。清三はゆくりなき緣で、かうした關係となつて行く二人の狀態を不思議にも意味深くも感じた。清三はまた一歩を進めて、今の生活のたつきをも捨てゝ、貧しい父母――殊に自分を唯一の力と頼む母をも捨てゝ、この女と一緒になる場合を想像して見た。功名の爲めに、青雲の志を得んが爲めに、母を捨てることの出來なかつたやうに、矢張かれには何うしてもさうした氣にはなれなかつた。歸途は、時々時雨が來たり日影が射したりするといふ日の午後であつた。いつもわたる渡良瀬川の渡しを渡つて土手の上に來ると、丁度眼の前を、白いペンキ塗の汚れた通運丸が、煙筒からは煤烟を漲らし、推進器からは水を切る白い波を

は幾様にも働くことが出來るやうに出來て居る。自分に對すると同じやうな媚と笑ひと情とをすぐ隣の室で他の男に與へて居るのだ。忘れても行かん。今まで使つた金が惜しい。』などと、憤慨して歸つて來ることもあつたが、しかしそれは複雜した心の狀態を簡單に一時の理窟で解釋したもので、女の心にはもつと眞面目な面白い處があることが段々解つた。怒つたり泣いたり笑つたりして居る間に、二人の間柄には、いろ〳〵な色彩やら追憶が加はつた。

女の許にせつせと通つて來る中に、淸三の知つて居る客が尠くとも三人はあつた。一人は栗橋の船宿の息子で、家には相應に財產があるらしく、角帶に眼鏡をかけて鳥打帽などを冠つてよく來た。色の白い丈のすらりとした好男子であつた。一人は古河の裁判所の書記で、年はもう三十四五、家には女房も子供もあるのだが、根が道樂で酒好きで三日と隔かずに遣つて來る。女は其の執拗いのに困り拔いて、『お客で來るのだから仕方がないけれど、あゝいふ人に勤めなければならないと思ふと、つく〴〵厭になつて了ふよ。貴郞、早くかういふ處から出して下さいな。』などと言つて甘えた。さういふ時には、『栗橋のにさう言つて出して貰つて遣らうか。』などと柄にも無い口を淸三はきいた。と、女はきまつて、男の膝をぴしやりと平手で打つて、これほど思つて苦勞して居るのにといふ紋切形の表情をして見せた。それから今一人塚崎の金持の百姓の息子が通つて來た。田舍の女郞屋のことゝて、室のつくりも完全して居ないので、落合ふとその樣子がよく解る。其息子は丸顏の坊ちやん坊ちやんした可愛い顏をして居た。『可

三十四

渡良瀬川の渡しをかれは尠くとも月に二回は渡つた。秋は次第に更けて、楢の林の葉はバラバラと散つた。蟲の鳴いた蘆原も枯れて、白い薄の穗が銀のやうに日影に光る。洲の顯はれた河原には白い鷺が下りて、納戸色になつた水には寒い風が吹渡つた。

麥倉の婆の茶店にももう緣臺は出て居らなかつた。柄の黃ばんだ葉は小屋の屋根を埋めるばかりに散積つた。農家の庭に忙しかつた唐箕の音の絕える頃には、土手を渡る風はもう寒かつた。

其長い路を步く度數は、女に對する愛情の複雜して來る度數であつた。追憶が段々と多くなつて來た。歸りを雨に降られて本鄕の村落のとつつきの百姓家に其の晴間を待つたこともある。夜遲く栗橋に出て大越の土手を終夜步いて歸つて來たこともある。女の心の解し難いのに懊惱したことも一度や二度ではなかつた。遊廓に上るものゝ初めて感ずる嫉妬、女が廻しを取る時の不愉快にもやがて邂逅した。待つても待つても、女は遣つて來ない。自己の愛する女を他人が自由にして居る。全身を自己に捧げて居ると女は稱しながら、それが果してさうであるか否かの解らない疑惑——男が女に對する總ての疑惑を段段意識して來た。女はまた女で、其の男の疑惑につれて、時々容易に示さない深い情を見せて、男の心を巧に奪つた。「もうこれつきり行かん。あれ等は男の機嫌を取るのを商賣にして居るんだ。あれ等の心

いだらうか。月給が下りると、すぐ返すけれど。』

荻生さんは鳥渡困つたが、

『いくら要るんです？』

『三圓ばかり。』

『僕は丁度此處に三圓しか持つて居ないんですが、少し要ることもあるんだが……』

『それぢや二圓でも好い。』

荻生さんは止むを得ず一圓五十錢だけ貸した。

翌朝、それと同じ調子で、清三は老訓導に一圓五十錢貸して呉れと言つた。老訓導は『僕もこの通り』と、笑つて銅貨ばかりの財布を振つて見せた。關さんも矢張持つて居なかつた。幾度か躊躇したが、思切つて最後に校長に話した。校長は貸して呉れた。昨日の朝、行田から送つて來た新聞の中に交つて、見馴れぬ男の筆跡で、中田の消印の捺してある一通の封書の入つて居たのを誰も知らなかつた。

午後から行田の家に行くとて出かけたかれは、今泉に入る前の路から右に折れて、森から田圃の中を歩いて行つた。暫くして利根川の土手に上る松原の中に其の古い中折の帽子が見えた。大高島に渡る渡船の中にかれは居た。

て掃除すると、一層空氣が新しく濃かになつたやうな氣がした。刈稻を積んだ車が晴れた野の道に音を立てゝ通つた。

東京に行つた友達からは、それでも月に五六度音信があつた。學窓から故山の秋を慕つた歌なども來た。夕暮には、赤い夕燒の雲を望んで、彌勒の野に靜に幼な兒を作侶として居るさびしき友の心を思ふと書いてあつた。彌勒野から都を望む心は一層切であつた。學窓から見た夕燒の雲と町に連なる明かな夜の灯が一層戀しいとかれは返事をして遣つた。

羽生の野や、行田への街道や、熊谷の町の新蕎麥に昨年の秋を送つたかれは、今年は彌勒野から利根川の河岸の路に秋のしづかさを味つた。羽生の寺の本堂の裏から見た秩父連山や、淺間嶽の噴烟や、赤城榛名の翠色には全く遠かつて、利根川の土手の上から見える日光を盟主とした兩毛の連山に夕日の當るさまを見て暮した。

ある日、荻生さんが來た。明日が土曜日であつた。

『君、少し金を持つて居ないだらうか。』

荻生さんは三圓ばかり持つて居た。

『氣の毒だけども、家の方に少し要ることがあつて、明日行くのに是非持つて行かなけれやならないんだが……月給はまだ當分下りないし、困つてるんだが、何うだらう、少し都合して貰ふ譯には行かな

のであるが、それが一度行き二度行く中に段々と募つて來た。淸三は月末の來るのを待ち兼ねた。

菓子を滿足に食へぬのが中でも一番辛かつた。机の抽斗の中には、餅菓子とかビスケットとか羊羹とかいつも屹度入れられてあつたが、此頃では唯其名殘の赤い靑い粉ばかりが殘つて居た。止むなくかれは南京豆を一錢二錢と買つて食つたり、近所の同僚の處を訪問して菓子の御馳走になつたりした。後には菓子屋の婆を說きつけて月末拂ひにして借りて來た。

音樂は矢張熱心に遣つて居た。譜を集めたものが大分溜つた。授業中唱歌の課目がかれに取つて一番面白い樂しい時間で、新しい歌に譜を合せたものを生徒に歌はせて、自分はさも一廉の音樂家であるかのやうにオルガンの前に立つて拍子を取つた。一人で室に居る時も口癖に唱歌の譜が出た。此間、女の室で酒に醉つて、『響りんりん』を歌つたことが思出された。女は默つてしみ〲と聞いて居た。やがて、『琵琶歌ですか、それは、』と言つた。信濃の詩人が若々しい悲哀を歌つた詩は、靑年の群の集つた席で歌はれたり、さびしい一人の散步の野に歌はれたり、無邪氣な子供等の前でオルガンに合せて歌はれたり、さうした女の居る狹い一室で歌はれたりした。淸三は其時女にその詩の意味を解いて聞かせて、再び聲を低くして誦した。二人の間にそれがある微かなしかし力ある愛情を起す動機となつたことを淸三は思ひ起した。

彌勒野に再び秋が來た。前の竹藪を通して淋しい日影が射した。教員室の硝子窓を小使が終日かゝつ

三十三

次の土曜日にも出懸けた。其日も荻生さんは尋ねて來たが矢張不在だつた。行田の母親からも用事があるから來いと度々言つて來るけれど、顔を見せぬので、父親は加須まで來た次手にわざ〳〵寄つて見た。別段變つたところもなかつた。此頃は日課點の調べで忙しいと言つた。先月は少し書籍を買つたものだから送るものを送られなかつたといふ申譯をして、机の上にある書籍を出して父親に見せた。父親はさる出入先から賣却を頼まれたといふ文晁筆の山水を長押に懸けて、『何うも少し怪しい處があるぢやが……まアまア此位なら兎に角納まる品物だから、』などと暢氣に眺めてゐた。母親の手紙では、家計が非常に困つて居るやうな樣子であつたが、父親にはそんな風も見えなかつた。歸りに、五十錢貸せと言つたが、淸三の財布には六十錢しか無かつた。月末まで湯錢位なくては困ると言ふので、二十錢だけ殘して、あとをすつかり持たせて遣つた。父親は包みを脊負つて、半ば禿げた頭を夕日に照されながら、學校の門を出て行つた。

金の無い幾日間の生活は辛かつたが、しかし心はさびしくなかつた。朝に晩に夜にかれは其女の赤い襠襠姿と眉の間の遠い色白の顔とを思ひ出した。其度毎にやさしい言葉やら表情やらが流るゝやうに漲り渡つた。其女は初會から淸三の人並すぐれた男振とやさしいおとなしい樣子とに普通ならぬ情を見せた

の勘定をした。六圓あつた金が二圓五十錢になつて居る。かれは鳥渡考へるやうな風をしたが、其の中から二十錢銀貨を一つ出して、ラムネ二本の代七錢と梨子二箇の代三錢との釣錢を婆さんから貰つて、白銅を一つ茶代に置いた。

大高島の渡を渡る頃には、もう日が餘程低かつた。かれは大越の本道には出ずに、田の中の細い道を彼方に辿り此方に辿りして、成たけ人目にかゝらぬやうにして彌勒の學校に歸つて來た。

かれの顏を見ると、小使が、

『荻生さんなァ來さしやつたが、逢つたんべいか。』

『いや――』

『行田に行つたんなら、是非羽生に寄る筈だがつて言つて、不思議がつて居さつしやつたが、歸りにも逢はなかつたかな。』

『逢はない――』

『待つて居さつしやつたが、羽生で待つてるかも知んねえつて三時頃歸つて行かしつた……』

『さうか――羽生には寄らなかつたもんだから。』

かう言つてかれは羽織をぬいだ。

麥倉河岸には涼しさうな茶店があつた。大きな桁の樹が蔭をつくつて、冷めたさうな水にラムネがつけてあつた。かれはラムネに梨子を二箇ほど手づから皮をむいて食つて、さて花莫蓙の敷いてある樹の蔭の縁臺を借りて仰向けに寢た。昨夜殆ど眠らなかつた疲勞が出て、頭腦がぐら〳〵した。涼しい心地の好い風が川から來て、青い空が葉の間からチラ〳〵見える。それを見ながらかれはいつか寢入つた。

かれが寢て居る間、渡場にはいろ〳〵なことがあつた。鷄のひよつこを猫が狙つて飛びつかうとする處を茶店の婆さんは狼狽てゝ逐ふと、猫は桑畑の中に入つてニヤア〳〵啼いた。渡舟は着く度にいろいろな人を下しては又いろ〳〵な人を載せて行つた。自轉車を走らせて來た町の旦那衆もあれば、反物を滿載して車を曳いて來た人足もある。上流の赤岩に煉瓦を積んで行く船が二艘も三艘も棹を弓のやうに張つて流に逦つて行くと、其傍を帆を張つた舟がギイと楫の音をさせて、いくつも通つた。一時間ほど經つて婆さんが裏に塵埃を捨てに行つた時には、縁臺の上の客は足をだらりと地に下げて、顏を仰向けに口を少し開いて、心地よさうに寢て居たが、釣魚に行つた村の若者がびくを下げて歸る時には、足を二本とも縁臺の上に曲げて、肱を枕にして高い鼾をかいて居た。其横顏を夕日が暑さうに照らした。額には汗がにじみ、はだけた胸からは、財布が見えた。

かれが眼をさました頃は、もう五時を過ぎて居た。水の色もやゝ夕暮近い影を帶びてゐた。清三は銀側の時計を出して見て、思ひの外長く寢込んだのに吃驚したが、落ちかけてゐた財布をふとあけて見て錢

ない。行田へ行つたといふものが方角違ひの方面を歩いてゐては人に怪まれる。で、かれは昨夜聞いて置いた鳥喰の方の路を選んで歩き出した。初會にも似合はず、女はしんみりとした調子で、その父母の古河の少し手前の在に居ることを打明けて語つた。その在郷に行くのも矢張鳥喰を通つて行くのださうだ。鳥喰の河岸には上州の本郷に渡る渡良瀬川のわたし場があつて、それから大高島まで二里、栗橋に出て行くよりも却つて近いかも知れなかつた。清三の麥稈帽子は毎年出水に浸かる木蔭の無い低地の間の桑の半ば赤くなつた桑畑に見え隱れして動いて行つた。行く先には田があつたり畠があつたりした。河原の草藪の中には矢張キリ〴〵スが鳴いた。

河岸の渡場では赤い雲が靜かに川に映つて居た。向う岸の土手では糸經を着て紺の脚絆を白い埃にまみらせた旅商人らしい男が大きな荷物を脊負つて、さも〳〵疲れたやうな風をして歩いて行つた。其處からは利根渡良瀬の二つの大きな河が合流するさまが手に取るやうに見える。栗橋の鐵橋の向うに中田の遊廓の屋根もそれと見える。かれは暫し立止つて、別れて來た女のことを思つた。

本郷の村落を通つて、路は又土手の上にのぼつた。昨日向う岸から見て下つた川を今日は此の岸から遡つて行くのである。昨日の心地と今日の心地とを清三は比べて考へずには居られなかつた。躍り勝ちな冴えた心と落附いた勞れた心！　纔かに一日、川は同じ色に同じ姿に流れて居るが、其間には今まで經驗しない深い溝が築かれたやうに思はれる。もう自分は墮落したといふやうな悔もあつた。

初心な人といふことがすぐ知られた。かれは唯酒を飲んだ。

厠は階段を下りた處にあつた。矢張石菖の鉢が置いてあつたり、釣葱がかけてあつたりした。硝子の箱の中に五分心の洋燈が明るく點いて、鼻緒の赤い草履が濡れて居るのではないが、何となく濕つて居た。便所には大きな立派な青い模樣の出た瀨戸燒の便器が据ゑてある。アルボウスの臭に交つて臭い臭氣が鼻と目とを撲つた。

女の室は六疊で、裏二階の奧にある。古い簞笥が置いてあつた。長火鉢の落しはブリキで、近在で出來た廉い鐵瓶が懸つて居る。傍に一册女學世界が置いてあるのを淸三が手に取つて見ると、去年の六月發行したものであつた。『こんなものを讀むのかえ、感心だねえ、』と言ふと、女はにつと笑つて見せた。その笑顏を美しいと淸三は思つた。室の裏は物干になつてゐて、其處には月が稍〻傾き加減となつて射して居た。隣では太鼓と三絃の音が賑かに聞えた。

三十二

翌日は午過ぎまで居た。出る時、女が送つて出て、『是非近い中にね、屹度ですよ、』と私語くやうに言つた。昨夜、床の中で聞いた不幸な女の話が流るゝやうに胸に漲つた。

渡をわたつて栗橋へ出て歸るのは何だか不安なやうな氣がした。土手で知つてる人に逢はんものでも

に歩いて通つた。その癖、氣に入つた女のゐる張見世の前は注意した。

河岸の渡し場の處に來て、かれは暫く立つて居た。月が美しく埠頭に碎けて、今着いた船からぞろ〳〵と人が上つた。いつそ渡を渡つて歸らうかとも思つて見た。けれど此のまゝ歸るのは――目的を果さずに歸るのは腑甲斐ないやうに思はれる。折角あの長い暑い二里の土手を歩いて來て、無意味に歸つて行くのも馬鹿々々しい。それに唯歸るのも惜しいやうな氣がする。渡し船の行つて歸つて來る間、かれは其處に立つたり蹲んだりして居た。

思ひ切つて立上つた。其家には店に妓夫が二人出て居た。大きな洋燈が眩しくかれの姿を照した。張見世の女郎の眼が皆な此方に注がれた。內から迎へる聲も何も彼もかれには夢中であつた。やがてがらんとした室に通されて、『お名ざし』を聞かれる。右から二番目と辛うじてかれは云つた。

右から二番目の女は靜枝と呼ばれた。何方かと言へば小づくりで、色の白い、髮の房々した、此家でも賣れる女であつた。眉と眉との遠いのが、何處となく美穗子を偲ばせるやうな處がある。

清三にはかうした社會の總べてが皆な新しくめづらしく見えた。引付けといふこともおもしろいし、女がずつと入つて來て客のすぐ隣に坐るといふことも不思議だし、臺の物とか言つて大きな皿に少しばかり餡を入れて持つて來るのも異樣に感じられた。かれは自分の初心なことを女に見破られまいとして、心にもない洒落を言つたり、かうした處には通人だといふ風を見せたりしたが、二階廻しの中年の女には、

水を越して響いて來る絃歌の音が淸三の胸をそゞろに波立たせた。

乘合の人の顏は皆月に白く見えた。船頭はくはへ煙管の火をぽつつり紅く見せながら、小腰に櫓を押した。

十分後には、淸三の姿は張見世にごて／＼と白粉をつけて、赤いものづくめの着物で飾り立てた女の格子の前に立つて居た。此方の軒から彼方の軒に歩いて行つた。細い格子の中に入つて、危く羽織の袖を破られようとした。かうして夜毎に客を迎へる不仕合せな女に引比べて、かうして心の餓、肉の渴きを醫しに來た自分の淺ましさを思つて肩を聳かした。廓の通をぞろ／＼とひやかしの人々が通る。馴染客を見懸けて『ちよいと貴郎！』などといふ聲がする。格子に寄り合つて何か喃々と話してゐるものもある。威勢よく入つてトン／＼階段を上つて行くものもある。二階から三絃や鼓の音が賑かに聞えた。

五六軒しかない貸座敷はやがて盡きた。一番最後の少し奧に引込んだ、石菖の鉢の格子の傍に置いてある家には、いかにも土百姓の娘らしい丸く肥つた女が白粉をごて／＼と不器用にぬりつけて二三人並んで居た。其家から五六軒藁葺の庇の低い人家が續いて、やがて暗い畠になる。淸三は其處まで行つて引返した。見て通つたいろ／＼な女が眼に浮んで、上るならあの女だと思ふ。けれど一方では何うしても上られるやうな氣がしない。初心なかれには幾度決心しても、幾度自分の臆病なのを罵つて見ても何うも思切つて上れない。で、今度は通の中央を自分はひやかしに來た客ではないといふやうにわざと大跨

透綾の羽織に白地の絣を着て、安い麦稈の帽子を冠つた清三の姿は、キリ〴〵スが鳴いたり鈴蟲が好い聲を立てたり阜斯が飛び立つたりする土手の草路を急いで歩いて行つた。人通りのない夕暮近い空氣に、廣い溶々とした大河を前景にして、その痩削な姿は浮き出すやうに見える。土手と川との間のいつも水をかぶる平地には小豆や豆やもろこしが豊かに繁つた。ふとある一種の響が川にとゞろきわたつて聞えたと思ふと、前の長い〳〵栗橋の鐵橋を汽車が白い烟を立てゝ通つて行くのが見えた。

土手を下りて旗井といふ村落に入つた頃には、もうとつぷりと日が暮れて、灯が點いて居た。ある百姓家では、垣の處に行水盥を持出して、『今日は久し振でまた夏になつたやうな氣がした、』などと言ひながら若い上さんが肥えた白い乳を夕闇の中に見せてボチャ〳〵やつてゐた。鐵道の踏切を通る時、番人が白い旗を出してゐたが、それを通つて了ふと、上り汽車がゴーと音を立てゝ過ぎて行つた。かれは二三度路で中田への渡場の所在を訊ねた。夜が來てからかれは大膽になつた。もう後悔の念などはなくなつて了つた。ふと路傍に汚い飲食店があるのを發見して、ビイルを一本傾けて、饂飩の盛を二杯食つた。此處では上さんがわざ〳〵通りに出て渡船場へ行く路を教へて呉れた。

十日ばかりの月が向う岸の森の上に出て、渡船場の船縁にキラ〳〵と美しく砕けて居た。肌に冷かな風がをり〳〵吹いて通つて、柔かな櫓の音がギー〳〵聞える。岸に並べた二階家の屋根がくつきりと黑く月の光の中に出て居る。

の男は眩しさうに夕日に手を翳して居た。船の通る少し下流に一ところ淺瀨があつてキラ〳〵と美しく閃き渡つた。

路は長かつた。川の上に簇る雲の姿の變る度に、水脈の緩かに曲る度に、川の感じが常に變つた。夕日は次第に低く、水の色は段々納戸色になり、空氣は身に沁み渡るやうに濃い深い影を帶びて來た。清三は自己の影の長く草の上に曳くのを見ながら時々自から顧みたり、自から罵つたりした。立止つて墮落した心の狀態を叱しても見た。行田の家のこと、東京の友のことをも考へた。さうかと思ふと、懷から汗によごれた財布を出して、半月分の月給が入つて居るのを確めてにつこりした。二圓あれば澤山だといふことは兼ねてから小耳に挾んで聞いて居る。青陽樓と言ふのが中田では一番大きな家だ、其處には綺麗な女が居るといふことも知つて居た。足を止めさせる力も大きかつたが、それよりも足を進めさせる方が一層强かつた。心と心とが戰ひ、情と意とが爭ひ、理想と欲望とが絡み合ふ間にも、體はある大きな力に引摺られるやうに先へ〳〵と進んだ。

渡良瀨川の利根川に合するあたりは、ひろ〳〵としてまことに阪東太郎の名に背かぬほど大河の趣を爲して居た。夕日はもう全く沈んで、對岸の土手に微かに其の餘光が殘つてるばかり、先程の雲の名殘と見えるちぎれ雲は緣を赤く染めて其上に覺束なく浮いて居た。白帆が懶さうに深い碧の上を滑つて行く。

古い汚い庇の低い彌勒ともいくらも違はぬやうな町並の前には、羽生通ひの乘合馬車が夕日を帶びて今着いたばかりの客を下ろして居た。ラムネを並べた汚い休茶屋の隣には馬具や鋤などを賣る古い大きな家があつた。野に出ると赤蜻蛉が群をなして飛んで居た。

利根川の土手の方は其處からもうすぐである。二三町位しか離れて居ない。清三は不圖あることを思ひ附いて、細い道を右に折れて、土手の方へ向つた。明日は日曜である。行田にも行く用事が無いでもないが、行かなくつてならないほどのこともない。老訓導にも校長にも今日と明日は留守になるといふことを言つて置いた。懷には昨日下りたばかりの半月の月給が入つて居る。好い機會だ！　と思つた心は、ある新しい希望に向つてそゞろに震へた。

土手へのぼると、利根川は美しく夕日にはえて居た。其心がある希望の爲めに動いてゐる爲めであらう。何だか其の波の閃めきも色の調子も空氣の濃い影も總て自分の踊り勝な心としつくり相合つて居るやうに感じられた。半孕んだ帆が夕日を受けて緩かに緩かに下つて行くと、溶々として大河の趣を成した川の上には初秋でなければ見られぬやうな白い大きな雲が浮んで、川向うの人家の白壁の土藏や森や土手が濃い空氣の中に浮くやうに見える。土手の草むらの中にはキリ〳〵スが鳴いて居た。

土手にはところ〴〵松原があつたり渡船小屋があつたり楢林があつたり藁葺の百姓家が見えたりした。渡し船には此處等によく見る機廻りの車が二臺、自轉車が一個、蝙蝠傘が二個、商人らしい四十位

『學校の先生！』

『林さん！』

『いゝ男！』

『林先生！』

嵐のやうに聲を浴せかけられたと思つたのも瞬間であつた。兩手を取られたり後から押されたり組んだ白い手の中へ抱へ込まれたりして、爭はうとする間に二三間たじ〳〵と作れて行かれた。

『何をするんだ。馬鹿！』

と言つたが駄目だッた。

月は互に爭ふこの一群を明かに照した。女のキャッ〳〵と騷ぐ聲が四邊にひゞいて聞えた。

『ヤア、學校の先生があまつちよに酷められて居る！』と言つて笑つて通つて行くものもあつた。樽拍子の音が唄につれて、益々景氣附いて來た。

三十一

秋季皇靈祭の翌日は日曜で、休暇が二日續いた。大祭の日は朝から天氣が好かつた。淸三は其日大越の老訓導の家に遊びに行つて、ビイルの御馳走になつた。歸途に就いたのはもう四時を過ぎて居た。

三十

盆踊は賑かであつた。空は晴れて水のやうな月夜が幾夜か續いた。樽拍子が唄につれて手に取るやうに聞える。其賑かな氣勢をさびしい宿直室で一人ぢつとして聞いては居られなかつた。淸三は誘はれてすぐ出懸けた。

盆踊のある處は村の眞中の廣場であつた。人が遠近からぞろ〳〵と集つて來る。樽拍子の音が揃ふと白い手拭を被つた男と女とが手をつないで輪をつくつて調子よく踊り始める。上手な音頭取につれて、誰れも彼れも熱心に踊つた。

九時過ぎからは、人が益々多く集つた。踊り勞れると、後からも後からも新しい踊手が加はつて來る。輪は段々大きくなる。樽拍手は益々冴えて來る。もう餘程高くなつた月は向うのひろ〴〵した田から一面に廣場を照して、樹の影の黑く地に印した間に、踊手の踊つて行くさまがちら〳〵と動いて行く。

村にはぞろ〳〵と人が通つた。萬葉集のかゞひの庭のことがそれとなく淸三の胸を通つた。男は皆な一人づつ相手を伴れて歩いて居る。猥褻なことを平氣で話して居る。世の羈絆を忘れて、この一夜を自由に遊ぶといふ心持が四邊に充ち渡つた。垣の中からは燈光がさして笑聲がした。

向うから女づれが三四人來たと思ふと、突然淸三は袖を捉へられた。

に寢てるより學校の風通しの好い宿直室の方が好いと思つて、彌勒へと歸つて來た。途中で、久し振で成願寺に寄つて見ると、和尚さんは晝寢をして居た。

風通しい好い十疊で話した。和尚さんはビイルなどを出してチヤホヤした。不圖、其處に庇髪に結つて、紫色の銘仙の矢絣を着て、白足袋を穿いた十六位の美しい色の白い娘が出て來た。

歸りに荻生さんに逢つて聞くと、

『あれは、君、和尚さんの姪だよ。夏休みに東京から來てるんだよ。何うも、田舍の土臭い中に育つた娘とは違ふねえ。何處かハイカラの處があるねえ。』

かう言つて笑つた。荻生さんは依然として元の荻生さんで、町の菓子屋から餅菓子を買つて來て御馳走した。郵便事務の暑い忙しい中で、暑中休暇もなしに、不平も言はずに、生活して居る。友達のズンズン出て行くのを羨まうともしない。淸三の心持では、荻生さんのやうなあきらめの好い運命に從順な人には及び難いと思ふが、しかし何となく慊らないやうな氣がする。樂みもなく道樂もなくよくあゝして生きて居られると思ふ。其日、『何うです。あまりつまらない、一つ料理屋へでも行つて、女でも相手にして酒でも飮まうぢやありませんか、』と言ふと、『酒を飮んだつて詰らない、』と言つて贊成しなかつた。淸三は暑い木蔭のないほこり道を不滿足な心持を抱いて學校に歸つて來た。

にして、足を縁臺の外に伸ばすと、赤い蹴出しと白い腿のあたりとが見えた。

清三はさうした傍を見ぬやうにして通つた。

夜はことに驚かされた。路の畔に若い男女が幾組となく立話をして居る。闇には、白地の浴衣が其處にも此處にも見える。笑ふ聲が彼方此方にした。

今年の夏休みがやがて來た。小畑と郁治とは高等師範の入學試驗に合格して、この九月からは東京に行くことにきまつた。櫻井は淺草の工業學校に入學した。其合格の報が來たのは五月頃であつたが、かれは心の煩悶を成たけ表面に出さぬやうにして、落附いた平凡な普通な祝狀を三人に出して置いた。六月に、行田に行つた時に、烏渡郁治に逢つたが、もう以前のやうな親しみはなかつた。逢へば、流石に君僕で隱すところなく話すが、別れて居れば思ひ出すことが尠く、從つて、訪問も滅多にしなかつた。

美穂子にも一度逢つた。頬のあたりが肥えて、眼にはやさしい表情があつた。けれど清三の心はもうそれが爲めに動かされるほど其影が濃く寫つて居らなかつた。唯、見知越の女のやうに挨拶して通つた。やがて八月の中頃になつて郁治は東京に行つた。石川も此頃は病氣で鎌倉に行つてゐる。熊谷の友達で殘つて居るものは、學校に居る頃もさう懇意にしてゐなかつた人々ばかりだ。清三もつまらぬから、何處か旅でもして見ようかと思つた。けれど母親の苦しい家計を見兼ねて五圓渡して了つたので、財布にはもういくらも殘つて居ない。近所の山にも行かれさうにもない。で、月の二十日には、どうせ狹い暑い家

ふ話を思ひ出した。何でも其處では、先生が獨身で下宿などをしてると、夏の夜など五人も六人も押かけて行つて、無理やりに伴れ出して了ふといふ。仕方がないから、夜は鍵をかけて置く、かう其處につとめて居た人が話した。かれは心に微笑みながら歩いた。

だるまやも其處に二軒はあつた。晝間はいやに蒼い顏をした女がだらしの無い風をして店に出て居るが、夜になると、それが皆なおつくりをして、見違へたやうな綺麗な女になつて、客を對手にキャッキャッと騷いでゐる。段々夏が來て、其店の前の棚の下には緣臺が置かれて、夕顏の花が薄暮の中にはつきりと際立つて見える。

『貴郞、何うしたんですよ、此頃は。』

『だつて仕方がない、忙しいからなア。』

『ちやんと種は上つてるよ、そんなこと言つたつて。』

『種があるなら上げるさ。』

『憎らしい、本當に浮氣者！』

ピシャリと女が男の肩を打つた。

『痛い！　馬鹿奴。』

と男が打ちかへさうとする。女は打たれまいとする。男の手と女の腕とが互に絡み合ふ。女は體を斜

じ調子で、ステッキを振りながら歩いて行つた。坂には兩側から繁つた楢の若葉が美しく夕日に光つてチラ〳〵した。通りすがる時、女共は路を除けて、笑ひたいのを強ひて押へたといふやうな顏をして、男を見て居る。調戯ふ氣だなといふことが始めて解つたが、しかし別段惡い氣もしなかつた。侮辱されたとも氣まりが惡いとも思はなかつた。寧ろ此方からも相手になつて調戯つてやらうかと思ふ位に心の調子が輕かつた。通り過ぎて一二間行つたと思ふと、女共はげら〳〵笑つた。清三が振返ると、一番年かさの女がお出で〳〵をして笑つて居る。此方でも笑つて見せると、づう〳〵しく二歩三歩近寄つて來て、

『學校の先生さん！』

一人が言ふと、

『林さん！』

『いゝ男の林さん！』

と續いて言つた。名まで知つて居るのを清三は驚いた。

『いゝ男の林さん』も、かれには著るしく意外であつた。曲り角で振返つて見ると、女共は坂の上の路にかたまつて、此方を見て居た。

川向うの上州の赤岩附近では、女の風儀の惡いのは非常で、學校の教員は獨身ではつとまらないとい

叱つて居る。

發戸の右に下村君、堤、名村などといふ小字があつた。藁葺屋根が晨の星のやうに散ばつてゐるが、此處では利根川が少し北に偏つて流れて居るので、土手に行くまではかなりある。土手には矢張發戸河岸のやうにところ〴〵に赤松が生えて居た。しの竹も茂つて居た。朝露のしとゞに置いた草原の中に薊やら撫子やらが咲いた。

　土手の上を暢氣さうに散歩して居るかれの姿をあたりの人々は常に見た。松原の中に入つて、草を藉いて、喪心した人のやうに、前に白帆の徐かに動いて行くのを見てゐることもある。『學校の先生さん、いやに蒼い顏して居るだァ。女さァ欲しくなつたんだんべい。』と土手下の元氣な婆が言つた。機織女の中にも、清三の男振の好いのに大騷ぎをして、その通るのを待受けて出て見るものもある。下村君の村落に入らうとする處に、大和障子を半分明けてせつせと終日機を織つてゐる女がある。丸顏の、眼のぱつちりした、眉の切れの好い十八九の娘であつた。清三はわざ〳〵廻り道していつも其處を通つた。見かへる清三の顏を娘も見かへした。

　ある時かういふことがあつた。土手の松原から發戸の方に下りようとすると、向うから機織女が三人ほど遣つて來た。清三は何の氣もなしに近寄つて行くと、女共はげた〳〵笑つて居る。一人の女が他の一人を突つくと、一人はまた他の一人を突ついた。清三は不思議なことをして居ると思つたばかりで、同

肺病が出ますぜ。少し遊ぶ方が好い。學校の先生だつて、同じ人間だ。さう道德倫理で束縛されては生命がつゞかん。』かう言つて笑つた。校長が師範學校から出た當座、まだ今の細君が出來ない時分、川越でひどい酌婦にかゝつて、それがばれさうになつて轉校した話や、つい此間まで居た師範出の教員が小川屋の娘に氣があつて、毎晩張りに行つた話などをして聞かせたのも矢張この老訓導であつた。宿直室に來てから、清三はいろ〳〵な實際を見せられたり聞かせられたりした。中學校の學窓や親の家や友達のサアクルや世離れた寺の本堂などで知ることの出來ないことを段々知つた。

發戸の方に散歩をしだしたのは田植唄が野に聞える頃からであつた。花が散つてやがて若葉が新しい色彩を村に漲らした。路の角で機を織つて居る女の前に立つて村の若者が何か饒舌つて居ると、女は知らん顏でせつせと梭を運んで居る。機屋の前には機廻りの車が一二臺置いてあつて、物干に並べて懸けた紺糸が初夏の美しい日に照されて居る。藍の匂ひが何處からともなくプンとして來る。竹藪の陰からやさしい唄が微かに聞える。

加須街道方面とは全く違つた感じをかれに與へた。彼方はしんとして居る。人氣に乏しい。娘なども餘り通らない。概して活氣に乏しいが、此方は何の家にも此の家にも糸を繰る音と機を織る音とが間斷なしに聞える。村から離れて、田圃の中に、飲食店が一軒あつて夕方など通ると、若い者が二三人屹度酒を飲んで居る。亭主はだらしない風で、それを相手に無駄話をして居る。嚊は汚ない鼻たらしの子供を

かり發達して、遊廓がない。足利の福居は遠いし、佐野のあら町は不便だし、此處等から若者が出かけるには、茨城縣の古河か中田かに行くより外仕方がない。中田には大越まで乘合馬車の便がある。大越から土手の上を二里ほど行つて、利根の渡をわたれば中田はすぐである。『店があれでも五六軒はありますかなァ。昔、奥州街道が榮えた時分には、あれでも中々賑かなものでしたが、今では駄目ですよ。私等、若い時にはそれはよく出かけたものですァ。利根川の渡をいつも夕方に渡つて行くんだが、夕燒の雲が水に映つて、それは面白かつたのですよ。』と老訓導は笑つて語つた。

時には、

『今の若い者は何うも堅過ぎる。學問をするから、何うしてもそんなことは馬鹿々々しくつてする氣になれんのかしれんが、海老茶とか庇髪とかに關係をつけると、後ではのつぴきならんことが起つて、身の破滅になることもある。それに、一人で本ばかり讀んで居るのは、若い者には善し惡しですよ。神經衰弱になつたり、華嚴に飛込んだりするのは其爲めだと言ふぢやありませんか。青瓢箪のやうな顏をして居る青年ばかり拵へちや、學問が出來て思想が高尙になつたつて、何の役にも立たん。ちと若い者は浩然の氣を養ふ位の元氣がなくちやいけませんなァ。』

などといふ。

淸三が書籍ばかり見て、蒼い顏をして、一人さびしさうにして宿直室に居ると、『あんまり勉強すると

に、さうした噂が滿更虛僞でないといふ證據も時には眼にも映つた。

かれは一日、また利根川の畔に生徒をつれて行つたが、其夜、次のやうな新體詩を作つて日記に書いた。

　松原遠く日は暮れて
　　利根のながれのゆるやかに
　ながめ淋しき村里の
　　此處に一年かりの庵。

　はかなき戀も世も捨てゝ
　　願ひもなくて唯一人
　さびしく歌ふわがうたを
　　あはれと聞かんすべもがな。

かれは時々かうしたセンチメンタルな心になつたが、しかしこれはその心の狀態の總てではなかつた。村の若い者が夜遲くなつてから、栗橋の川向うの四里もある中田まで、女郎買ひに行く話などをも面白がつて聞いた。大越から通ふ老訓導は、酒でものむと、洒脫な口振りで、其處から近い其遊廓の話をして聞かせることがある。群馬埼玉の二縣は曾て廢娼論の盛んであつた土地なので、其管內にはだるまば

はなりたい。立派な生活は送りたい。しかし平凡に生活して居る人もいくらもある。一家の幸福――弱い母の幸福を犧牲にしてまでも、功名に赴かなくつてはならぬこともない。寧ろ自分は平凡なる生活に甘んずる。かう考へながらかれは歩いた。

寒い日に體を泥の中に突刺して凍え死んだ爺の堀切にも行つて見たことがある。其處には葦と萱とが新芽を出して、蛙が音を立てゝ水に飛び込んだ。森の中には荒れ果てた社があつたり、林の角からは富士がよく見えたり、田に蓮華草が敷いたやうに見事に咲いて居たりした。それにかうして住んで見ると、聞くともなしに村のいろ／＼な話が耳に入る。家事を苦にして用水に身を投げた女の話、旅人にだまされて林の中に引張込まれて強姦された村の子守の話、三人組の強盜が拔刀で上村の豪農の家に入つて、主人と細君とを縛り上げて金を奪つて行つた話、繭の仲買の男が酌婦と情死した話など、聞けば聞くほど平和だと思つた村にも辛い悲しいライフがあるのを發見した。地主と小作との關係、富者と貧者の甚しい懸隔、淸い理想的の生活をして自然の穩かな懷に抱かれて居ると思つた田舍も矢張爭鬪の巷利慾の世であるといふことが段々解つて來た。

それに、田舍は存外猥褻で淫靡で不潔であるといふことも解つて來た。人々の噂話にもそんなことが多い。やれ、何處の娘は何うしたとか、何處の上さんは何處の誰と不義をして居るとか、誰は何處にこつそり妾を圍つて置くとか、女のことで夫婦喧嘩が絶えないとか、さういふことが絶えず耳を打つ。それ

の家は此處だね、』と言つて通り拔けようとすると、『おつかさん、先生が通るよ！』と言つた。母親は小川で後向になつてせつせと何か物を洗つて居た。加須に通ふ街道には畠があつたり森があつたり榛の並木があつたりした。ある時楢の林の中に色の濃い菫が咲いて居たのを發見して、それを根ごしにして取つて來て鉢に植ゑて机の上に置いた。村を外れると、街道は平坦な田圃の中に通じて、白い塵埃が微な風に颺るのが見えた。機廻りの車やつかれた旅客などがをり〳〵通つた。

ある夜、學校の前の半鐘が烈しく鳴つた。竹藪の向うに出て見ると、空がぼんやりと赤くなつて居る。やがてその火事は手古林であつたことが解つた。翌々日の散歩に、ふと氣が附くと、清三は其の燒けた家屋の前に立つて居るのを發見した。此間燒けたのは此家だなとかれは思つた。それは村道に接した一軒家で、藁で圍つた小屋掛がもう其隅に出來て居た。燒跡には灰や燒殘りの柱などが散らばつて居て、井戸側の半分燒けた流元では、襷をした女が頻りに膳椀を洗つて居る。小屋掛の中からは村の人が出たり入つたりして居る。かれは平和な田舍に忽然とした起つた事件を考へながら歩いた。一夜の不意の出來事の爲めに、一家の運命に大きな頓挫を來すべきことなどをも思ひ遣らぬ譯には行かなかつた。金錢の貴い田舍では、新に一軒の家屋を建てる爲めにもある個人の一生を烈しい勞働に費さねばならぬのである。かれは唯々功名に熱し學問に熱して居た熊谷や行田の友人達をかうしたハアドライフを送る人々に比べて考へて見た。續いて日毎に新聞紙上に顯はれる豪い人々のライフをも描いて見た。豪い人にはそれ

『先生が何か書いてるァ。』
『やァ畫を描いてるんだ。』
『あの雲を描いてるんだぜ。』
などと近所の生徒がぞろ〳〵と其周圍に集つて來る。
『旨いなァ、先生は。』
『それは當り前よ、先生ぢやねえか。』
『あゝあれがあの雲だ。』
『その下のがあの家だ。』
默つて筆を運ばせて居ると、勝手なことを言つて饒舌つて居る。何うしてあんなに旨く書けるのかと疑ふかのやうにぢつと先生の顏を覗き込む子などもあつた。翌日學校に行くと、其生徒達はめづらしいことを見て知つてるといふ風にそれを他の生徒に吹聽した。『先生、昨日書いてた繪を見せて下さい！』などと言つた。
清三は段々近所のことに詳しくなつた。林の奥に思ひもかけぬ一軒家があることも知つた。豪農の家の樫の垣の向うに楊の生えた小川があつて、其處に高等二年生で一番出來る女生徒の家があることをも知つた。其家には草の繁つた井戸があつて桔槔がかゝつて居た。丁度其時其娘は其處に出て居た。『お前

つてはいけませんな……けれど、林さんのやうな色男は餘程注意しないといけませんぜ、袖位ちぎられて了ひますからな。』と訓導の杉田が笑ひながら言つた。しかし清三は行つて見ようとも思はなかつた。唯その面白さうな音が夜ふけまで聞えるのを耳にしたばかりであつた。

其他にも、發戸のことに就いて、清三の聞いたことはいくらもあつた。一二年前までは、此處に男振の好い教員などが宿直をしてゐると、發戸の女は群を成して、づか〳〵と庭から入つて來て、圖々しく話をして行くことなどもあつたといふ。それから生徒を見ても、發戸の風儀の惡いのは解つた。同じ行儀の惡いのでも其處から來る生徒は他とは違つて居た。野卑な歌を口ぐせに教場で歌つて水を滿した茶碗を持つて立たせられる子などもあつた。

春になつて、野に菫が咲く頃になると、清三は散歩を始めた。古ぼけた茶色の帽子を被つた脊のすらりとして痩削な姿は其處にも此處にも見えた。百姓は學校の若い先生が野川の橋の上に立つて、ぼんやりと夕燒の雲を見て居るのを見たこともあるし、朝早く役場の向うの道を歩いて居るのに出逢ふこともあつた。役場の小使と立話をして居ることもあれば、畠に居る人々と挨拶して居ることもある。時には、學校の女生徒を二三人連れて、林の中で花を摘ませて花束を作らせたり何かしてゐることなどもある。

彌勒野の林の角で、夕暮の空を寫生してゐると、

『やア、先生だ、先生だ！』

けれど家の中に入ると、樣子が大分違ふ。藍瓶が幾つとなく入口の向うにあつて、其處に染工職人がせつせと糸を染めて居る。白い糸が山のやうに積んであると、其傍で雇人が頻りにそれを選分けてゐる。反物を入れる大きな戸棚も見える。

前の廣庭には高い物干竿が幾列びにも順序よく並んで居て、朝から紺糸がずらりと其處に干しつらねられる。糸を繰る座繰の音が驟雨のやうに彼方此方からにぎやかに聞える。

機屋の周圍には、賃機を織る音が盛にした。

あたりの村落のしんとして居るのに引きかへて、此處には活氣が充ちて居た。金持も多かつた。他鄕から入つて來た若い男女も隨分あつた。

發戸は風儀の惡い村と近所から言はれてゐる。埼玉新報の三面種にも屹度此村のことが每月一つや二つは出る。機屋の亭主が女工を片端から姦して牢屋に入れられた話もあれば、利根川に臨んだ崖から、越後の女と上州の男とが情死をしたこともある、街道に接して、だるま屋も二三軒はあつた。

八月が來ると、盛んな盆踊が每晩其處で開かれた。學校に宿直して居ると、其の踊る音が手に取るやうに講堂の硝子にひゞいて分明と聞える。十一時を過ぎても容易に止みさうな氣勢もない。昨年九月、清三が宿直に當つた時は、丁度月の冴えた夜で、垣には虫の聲が雨のやうに聞えて居た。『發戸の盆踊はそれは盛んですが、林さん、まだ行つて見たことがないんですか。それぢや是非一度は出かけて見なく

いてあるので、返事を書く氣にもならなかつた。それに引きかへて、彌勒の人々には大分懇意になつた。此頃では、何處の家へ行つても、先生々々と立てられぬところはない。それに同僚の中でも、師範校出の氣障な意地の惡い教員が加須へ行つて了つたので、氣の置ける人がなくなつて、學校の空氣がしつくり自分に合つて來た。

物日の休みにも、日曜日にも、大抵宿直室でくらした。利根川を越えて一里ばかり、高取といふ處に天滿宮があつて、二月初旬の大祭には、近在から境内に立錐の地も無いほど人々が參詣した。清三も昔一度行つて見たことがある。見世物、露店——鰐口の音が絶えず聞えた。ことに手習が上手になるやうにと親がよく子供を連れて行くので、其の日は毎年學校が休みになる。午後清三が宿直室で手紙を書いて居ると、參詣に行つた生徒が二組三組寄つて行つた。

二十九

發戸には機屋が澤山あつた。市毎に百反以上町に持つて出る家が尠くとも七八軒はある。勿論機屋と謂つても軒をつらねて部落を爲して居る譯ではない。烏渡見ると、普通の農家とあまり違つて居ない。蠶豆、莢豌豆の畑が周圍を取卷いて居て、夏は茄子や胡瓜が其處等一面に出來る。玉蜀黍もガサ／＼と風に靡く。

二月の末には梅が咲き初めた。障子を明けると、竹籔の中に花が見えた。風につれて好い匂がする。

一日、かれは机に向つて、

鄙はさびしき此里に

さきて出でにし白梅や

一枝いだきて唯一人

低くしらぶる春の歌

と歌つて、それを手帳に書いた。淋しい思が脈々として胸に上つた。ふと傍に古い中學世界に梅の繪に鄙少女を描いた繪葉書のあるのを發見した。かれはそれを手に取つてその歌を書いて『都を知らぬ鄙少女』と署して、さてそれを浦和の美穗子の許に送らうと思つた。けれど監督の厳重な寄宿舍のことを思つて止した。ふと美穗子の姉にいく子と言ふのがあつて、音樂が好きで、其身も二三度手紙を遣取りしたことがあるのを思ひ出して、譜をつけてそこに遣ることにした。

かれは夕暮など校庭を歩きながら、この自作の歌を低い聲で歌つた。『低くしらぶる春の歌』と歌ふと、つく〴〵自分のさびしいはかない境遇が眼の前に浮び出すやうな氣がして涙が流れた。

此頃、友達から手紙の來るのも少くなつた。熊谷の小畑にも、此間行つた時、處世上の意見が合はないので、議論をしたが、それから大分疎々しく暮らした。郁治から來る手紙には美穗子のことが屹度書

た。小使は其傍でせつせと草鞋を造つて居る。一疋で金串が全く占められるやうな大きなのも二つ三つはあつた。薄くこげる位に焼いて、それを薬にさした。

『隨分あるものだね、』と數へて見て『十九串ある。』

『廉かつたゞ、校長さん負けさせる名人だ。これ位の鮒で六つて云ふ値があるものかな。』

小使は傍から言つた。

試みに煮て見ようと言ふので、五串ばかり小鍋に入れて、昆爐にかけた。寢る時味つて見たが骨はまだ固かつた。

自炊生活は清三に取つて、結局氣樂でもあり經濟でもあつた、多くは豆腐と油揚と乾鮭とで日を送つた。鮒の甘露煮は二度目に煮た時から成功した。砂糖を餘り使ひ過ぎたので、分けて遣つた小使は、『林さんの甘露煮は菓子を食ふやうだア、』と言つた。生徒は時々萩の餅などを持つて來て呉れる。もろこしと糯米の粉で製したといふ餡餅などをも持つて來て呉れる。何うかして勉強したい。田舍に居て勉強するのも東京に出て勉強するのも心持一つで同じことだ。學費を親から出して貰ふ友達にも負けぬやうに學問したいと思つて、心理學や倫理學などを精々と讀んだが、餘儀なき依賴で、高等の生徒に英語を教へて遣つたのが始りで、段々ナショナルの一や二を持つて教はりに來るものが多くなつて、後には、かう閑を潰されてはならないと思ひながら、夜は大抵宿直室に生徒が集るやうになつた。

沼が一面にあつた。上州から來る鮒や雜魚の旨いのは、此處等でも評判だ。

『幾がけだね？』

『七なら高くはあんめえと思ふんだが。』

『七は高い！』

『目方をよくして置くだで七で買つて吳んなせい。』

『五位なら好いが。』

『五なんてそんな値はねえだ。ぢや今半分引くべい。』

淸三は校長さんの物を買ふのに上手なのを笑つて見て居た。六がけで話が決つて、小使が其處に桶と播鉢とを運んで來た。ピンとするほどはかりをまけた鮒はヒク〳〵と腮を動かして居る。爺はやがて錢を受取つて輕くなつたびくを擔いで歸つて行く。

『廉い、廉い。これを煮て置けや、君、十ロもありますよ。』

かう言つて校長さんは、鮒の中でも大きいのを一尾つかんで『どうも、上州の鮒は好い。コケが丸でこつちで取れたのとは違ふんですからな。』と言つて淸三に示した。半分に分けて、小桶に入れて、小使が校長さんの家に持つて行つた。

其日は鮒の料理に暮れた。俎板の上でコケを取つて、金串にそれをさして、圍爐裏に火を起して燒い

二十八

授業も濟み、同僚も大方歸つて、校長と二人で宿直室で話して居ると、其處に雜魚賣が遣つて來た。

『旦那、鮒を廉く買はんけい。』

障子を明けると、莞爾した爺が、びくを其處に置いて立つて居た。

『鮒は要らんなァ。』

『廉く負けて置くで、買つてくんなせい。』

校長さんは淸三を顧みて『君は要りませんか、廉けれや、少し買つて、甘露煮にして置くと好いがね、』

と言つた。で、二人は緣側に出て見た。

二つのびくには、五寸位から三寸位の鮒が金色の腹を光らせてゴチヤ〳〵して居る。

『少し小さいな。』

と校長さんは言つた。

『小せい處か、甘露煮にするにはこの位がごくだァな。それに、板倉で取れたんだで、骨は柔けい。』

種類としては質の好い鮒なのを校長はすぐ見て取つた。利根川を渡つて一里、其處に板倉沼といふのがある。沼の畔に雷電を祭つた神社がある。其處等あたりは利根川の河床よりも低い卑濕地で、小さい

『そら、あの西の勘三さんの田ン中の堀切でごねて居たんだつてよ。泥深い中に體が半分突つさゝつたまゝ、首ィから低れてつめたくなつたんだつてよ。』

『あつけねえこんだなァ。』

『今日ははァ、御賽日だつてに。これもはァ、さういふ緣を持つて生れて來たんだんべい。』

『わしらもはァ、此春ァ、日振りなんぞはすべいよ。』

湯氣の籠つた狹い錢湯の中で、村の人々はかうした噂をした。喜平といふのは、村はづれの小屋に住んで居る五十ばかりの爺で、雜魚や鮒を捕へては、それを賣つて、其日々々の口をぬらして居た。每日のやうに汚い風をして、古い繕つた網を擔いで、川やら堀切やらに出かけて行つた。途中で學校の先生や村役場の人などに邂逅すと、いつも丁寧に辭儀をした。それが今日堀切の中で凍えて死んで居たといふ。清三は湯につかりながら、村の人々のさま〴〵に噂し合ふのを聞いて居た。かうして生れて生きて死んで行く人をかうして噂し合つて居る村の人々のことを考へずには居られなかつた。古網を張つたまゝ、泥の中に凍えた體を立てゝ死んで居た爺のさまをも想像した。茫とした湯氣の中に水槽に落ちる水の音が聞えた。

好いし、君にも間代が出なくつて經濟になる。第一、二里の道を通ふといふ勞力が省ける。』羽生の和尙さんも此間行つた時、『一體何うなさるんです、から明けて居らしつては間代を頂戴するのもお氣の毒だし、……それに、冬は通ふのに隨分大變ですからなア、』と言つた。淸三は寺に寄宿する頃の心地と今の心地と著しく違つて來たことを考へずには居られなかつた。其頃から比べると、希望も目的も感情も全く違つて來た。『行田文學』も廢刊した。文學に集つた友の群も離散した。かれ自身にしても、文學書類を讀むよりも、繪畫の寫生をしたり、音樂の譜の本を集めてオルガンを鳴して見たりすることが多くなつた。それに、行田にもさう度々は行きたくなくなつた。かれは月の中頃に蒲團と本箱とを羽生の寺から運んで來た。

二十七

『喜平さんな、とんでもねえこんだつたつてなア。』

『ほんにさア、今朝行く時、己ア邂逅しただアよ。網ィ持つて行くから、この寒いのに日振りに行くけえ、御苦勞なこつちやなアつて挨拶したゞアよ。わからねえもんだよなア。』

『どうしてまアそんなことになつたんだんべい？』

『ほんにさ、彼處は堀切で、何でもねえ處だがなア。』

『一體何處だな。』

鬼は外』と叫ぶ爺の聲が洩れて聞えた。『あ、今日は節分かしらん』と思つて、淸三は新聞の正月の綸附錄日記を出して見た。それほどかれは世事に疎く暮した。

毎日四時過になると、前の錢湯の板木の音が、靜かに寒い茅葺屋根の多い田舍の街道に響いた。

羽生の和尙さんと酒を飮んで、

『何うです、一つ社會を風靡するやうなことを遣らうぢやありませんか。何でも好いですから。』

こんなことを言ふかと思ふと、『自分はどんな事業をするにしても、社會の改良でも思想界の救濟でも、それは何をするにしても、人間として生きて居る上は生きられるだけの物質は得なければならない。そしてそれは成るべく自分が社會に盡した仕事の報酬として受け度いと自分は思ふ。それには自分は小學校の教員から段々進んで中學程度の教員にならうか。それとも自分はこの高き美しき小學教員の生涯を以て滿足しようか。』などと考へることもある。一方には多くの友達のやうに花々しく世の中に出て行き度いとは思ふが、又一方では小學教員を尊い神聖なものにして少年少女の無邪氣な伴侶として一生を送る方が理想的な生活だとも思つた。友に離れ、戀に離れ、社會に離れて、わざとこの孤獨な生活に生きようといふやうな反抗的な考も起つた。

あの日校長が云うた。『何うです。さうして毎日宿直室に泊つて居る位なら、寺から荷物を持つて來て、此處で自炊なり何なりして居るやうにしたら……。さうすれば、私の方でもわざ〳〵宿直を置かないで

夜、一箇の老鼠、係締にかゝる。哀れなる者よ。汝も運命のしもとを免がれ得ぬ不運見か。ひそかに救け得させべくば救けも得さすべきを、我も汝をかくすべき緣持つ人間なればぞ、哀れなるものよ、寧ろ汝は夜毎の餌に迷ふよりは、かくて此儘この係締に終れ。哀れなるものよ。』と書いてあつた。日曜日を羽生の寺にも行田の家にも行かず、『今日は日曜日、又しても一日をかくて此處に過さんと一人朝は遲くまでいねたり。』と書いて宿直室に過した。

郁治も櫻井も小畑も高等師範の入學試驗を受ける爲めに浦和へ行つたといふ報があつた。孝明天皇祭の日を久し振で行田に歸つて見ると、話相手になるやうな友達はもう一人も居なかつた。雪子は例のしら〳〵しい態度でかれを迎へた。かれはむしろ快活な無邪氣なしげ子をなつかしく思ふやうになつた。歸る時、母親は昨日から丹精して煮てあつた鮒のかんろ煮を折に入れて持たせてよこした。

此頃は全く世を離れて一人暮した。新聞も滅多には手にしたことはない。第五師團の分捕問題、青森第三聯隊の雪中行軍凍死問題、鑛毒事件、二號活字は一面と二面とに毎日見える。平生ならば、新聞を忠實に注意して見るかれのことゝて、いろ〳〵と話の種にしたり日記につけて置いたりするのであるが、此頃はそんなことは何うでもよかつた。人が話して聞かせても、『さうですか』と言つて相手にもならなかつた。愛讀して居た淚香の『巖窟王』も中途で止して了つた。學校の庭の後には竹藪が五十坪ほどあつて、夕日がいつも其葉を透して宿直室に射し込んで來るが、ある夜、其の向うの百姓家から『福は内

置いてあつた。教授が終つて校長や同僚が歸つてから、清三は自分で出懸けて菓子を買つて來て二人で食つた、かれは茶を飲みながら二三枚寫生した拙い水彩畫を出して友に示した。學校の門と、垣に夕日の射し殘つたところと、暮靄の中に富士の薄く出て居るところと、それに生徒の顏の寫生が一枚あつた。荻生さんは手に取つて、ヂッと見入つて、『君なか〳〵器用ですねえ、』と感心した。清三は此頃集めた譜のついた新しい歌曲をオルガンに合せて彈いて見せた。

冬は愈〻寒くなつた。晝の雨は夜の霙となつて、あくれば校庭は一面の雪、早く來た生徒は雪達磨を拵へたり雪合戰をしたりして騷いで居る。美くしく晴れた軒には雀が喧しく百囀をして居る。雪の來た後の道路は泥濘が連日乾かず、高い足駄も何うかすると埋つて取られて了ふことなどもある。乘合馬車は屋根の覆まではねを上げて通つた。

机の前の障子にさし殘る冬の日影は少くとも清三の心を沈靜させた。なるやうにしかならんといふ狀態から、やがて、『自己の盡すだけを盡して潔く運命に從はう』といふ心の狀態になつた。嘆息と涙との後に、靜かなさびしいしかし甘い安靜が來た。霙の降る夜半に、『夜を寒みあられたばしる音しきりさゆる寢覺を（母いかならん）』と歌つて家の母の情を思つたり、『さむきさびしき夜半の床も、さはれ心靜かなれば、さすがに苦しからじ。』と日記に書いて自から獨り慰めたりした。又ある時は、『思ふことなくて暮さばや、我が世の昨日は幸なきにもあらず、幸ありしにもあらず。』と書いた。またある日の日記には、『昨

たのをかれも氣が附かずには居られなかつた。時には昨年の日記帳を繙いて讀んで見ることなどもあるが、其處には諧謔もあれば洒落もある。笑の影が到る處に認められる。今と比べて世の中の實際を知らぬだけそれだけ暢氣であつた。

消極的に總てから――戀から、世から、友情から、家庭から全く離れて了はうと思ふほど其心は傷いてゐた。寺の本堂の一間は渠には餘りに寂しかつた。それに二里足らずの路を朝に夕に通ふのも面倒臭い。渠は放浪する人々のやうに、宿直室に寢たり、村の酒屋に行つて泊つたり、時には寺に歸つて寢たりした。自炊が懶いので、辨當を其處此處で取つて食つた、駄菓子などで午餐を濟して置くことなどもある。本堂の一間に荻生さんが行つて見ると、主は大抵留守で、机の上には塵が積つたまゝ、古い新聲と明星とが四邊に散らばつたまゝになつてゐる。和尚さんは、『林君、何うしたんですか、餘り久しく歸つて來ませんが……學校に何か忙しいことでもあるんですかねえ、』と言つた。荻生さんが心配して、忙しい郵便事務の閑を見て、わざ〳〵彌勒まで出懸けて行くと、清三は別に變つたやうなところもなく、いつも無性にしてゐる髮も綺麗に刈込んで、にこ〳〵して出て來た。『何うもこの寒いのに、朝早く起きて通ふのが辛いものだからねえ、君、此處で小使と一緒に寢て居れば、子供がぞろ〳〵遣つて來る時分までゆつくりと寢て居られるものだから、』などと言つた。八疊の一間で、長押の釘には古袴だの三尺帶だのが懸けてある。机には生徒の作文の朱で直し懸けたのと、かれが此頃始めた水彩畫の寫生し懸けたのとが

りたるものを、さらでも尙とやせんかくやすらんのまどひ、はては神に縋らん力もなくて人とも多くは言はじな、語らじなと思へば、いと懶くて、日頃親しき友に文書かんも厭や、行川へ行かんも厭ふにはあらねど又ものうく、かくて繪もかけず詩も出でず、この十日は一人過ぎぬ。

□土曜日に萩生君來り一夜を語る。情深く心小さき友！

□加藤は戀に醉ひ、小畑は自から好んで俗に入る。此間かれの手紙に曰く『好んで詩人となる勿れ、好んで俗物となる勿れ』と。あゝさても好んでしかも詩人となり得ず、さらばとて俗物となり得ずはては惑ひのとやとかくと、熱き情のふと消え行くらんやう覺えて、失意より沈默へ、沈默より冷靜に、かくて苦笑に止まらん願ひ、とはにと言はじ、かくてしばしよと思へば悲しくもあらじ。さはれ木枯吹荒む夜半、幸多き友の多くを思ひては、又もこの里のさすがにさびしきかな、まゝよ萬事かゝらんのみ、奮勵一番飛び出でんかの思ひなきにあらねど、又靜かにわが身の運命を思へば……、あゝしばしはかくてありなん。

亂るゝ心を靜むるは幼き者と繪と詩と音樂と。

近き數日、默々として多く語らず、一人思ひ思ふ。……………………

……………………………………………………

かういふ風にかれの日記は續いた。昨年の春頃に比べて、心の調子、筆の調子が著しく消極的になつ

枝は折れよと根は折れぬ（正直正太夫）

□此頃の凩に、さては南の森陰に、弟の弱きむくろはいかにあるらん。心のみにて今日も訪はず。かくて明日は東に行く身なり。

七日。

羽生の寺に歸る。

心にはかくと思ひ定めたれど、さすがに冬枯の野は淋しきかな。

□○子よ、御身は今はたいかにおはすや。笑止やわれは猶御身を戀へり。さはれ、あゝさはれとてもかゝる世ならば我は唯一人戀うて一人泣くべきに、何とて御身を煩はすべきぞ。

主の僧ととろゝ食うて親しく語る。夜、寒し。

九日。

今朝、此冬、此年の初雪を見る。

夜、荻生君來り、わが爲めに炭と菓子とを齎らす。冷かなる人の世に友の心の溫かさよ。願はくばわれをして友に誠ならしめよ。(夜十時半記)

■十日より二十日まで。

此間十日餘り一日、思ひは亂れて寺へも歸らず。かくて老いんの願ひにはあらねど、さすが人並賢く悟

四日。

夕方、澤田來る。加藤われ等を勸めて北川にかるた取に行く。かれや何等の友情も知らぬもの、友を賣りてわが利を得んとするものか。又例の『君の望むことにてわが力にて出來得べき限りに於て言へ』を言ふ。われ曰く『なし』と。此言果して、かれの心よりの言葉か。

五日。

偶〻學友會の大會に招かれて行く。卽ち立ちて、『集會に於て時間の約を守るべきこと』につきて述ぶ。かくの如き會合に於て演壇に立ちしは初めてなれば心少しくためらひなきにあらざりしが、思ひしより冷靜を以て了りたり。餘興として小燕林の講談あり。

六日。

加藤と雪子と鈴木君の妹の君とかるた取る。

□夜、戶の外は西風寒く吹く。あゝわれは此力弱き腕を自己を、高きに進ますすら容易ならざるに、猶も一人の母と一人の父との爲に走らざるべからざるか。さもあらばあれ、冷酷なる運命の道に荒む嵐をして其まゝに荒れしめよ。われに思ふ所あり、何ぞ妄りに汝の渦中に落ち入らんや。

　松は男の立姿

意地にやまけまい、ふけふけ嵐

そ世にかしこかるべし。…………

□今日始めて熊谷の小畑に手紙出す。

二日。

昨夜鈴木にて一夜幼き昔を語りあかす。

□あゝわれをして少年少女を愛せしめよ。又もかくての世に神は幸を幼きものにのみ下し給へり。ああわれをして幼きものを愛せしめよ。

□Ah！　それや何なるぞ、とても淺間しき戀に爭はんとにあらじと思へば、時に謂ふが如き冷靜も亂れんも知れじを、あゝなどて好ましからぬ思ひの添ふぞ、はかなきことなるかな。あゝ終に終にかくてかゝるなり。

□夕方西に紅の細き雲靡き、上るほど、うす紫より終に淡墨に、下に秩父の山黑々とうつくしけれど、そは光あり力あるそれにはあらで、冬の雲は寒く寂しき、例へんに戀にやぶれ、世に捨てられて終に冷えたるある者の心の如きか。

三日。

晝より風出でて梢鳴ること頻也。冬の野は寒きかな。荒む嵐のすさまじきかな。人の世を寒しと見て野に立てば、さてはいづれに行かん。夕の迷ひに又も神に『救へ！』と呼ばんの願なきにあらず。

あゝ終に〳〵三十四年は過ぎ去りぬ。わが一生に於て多く忘るべからざる年なりしかな。言はじ、言はじ、唯思ひ至りし一つはこれよ、曰く、かゝる世なり、一人言はで、一人思はむ。あゝ。

かれは日記帳を閉ぢて脇へ遣つて、新着の明星を讀み出した。

二十六

一月一日。（三十五年）

これは三年の前、小畑と優なる歌記さんと企てゝ綴りたるが、其の白きまゝにて今日まで捨てられたるを取り出でて、今年の日記書きて行く。

□去年、それもまだ昨日、終に世のかくてかゝるよと思ひ定めては、またも胸の亂れて口やかましく情とくすべも知らず。草深き里に一人住み、一人自から高うせんに如かず。かくては意氣なしと友の笑はんも知らねど、とてもかゝらねばならぬわが世の運命、それに逆はん勇なきにはさら〳〵あらねど、二十餘年めぐみ深き母の歎に、まゝよ二年三年はかくてありともくやしからじと思へばこそよ。さてかく行かんとする今年の日記よ、言はじ、唯世にかしこかれよ、只平和なれよ、終に唯無言なれよ。

□戀は遂に苦しきもの、我今又これを捨つるもくやしからじ、加藤のそれ、かれの心事、懐に劍をかくすを知らぬにあらねど、爭はんは流石にうしろめたく、さらばとてかれも亦かゝる人とは思ひ捨てんこ

けて、火鉢には火を活々と起して置いた。やがて年越の膳は出來る。

父親は禿げた頭を下げて、頻りに神棚を拜んで居たが、やがて膳に向つて、『でも、まあ、かうして親子三人年越のお膳に向ふのは目出度い。』と言つて、箸を取つた。豆腐汁に鮭、ゴマメは生で二匹づつお膳につけた。一室は明るかつた。

母親は今夜中に仕立てゝ了はねばならぬ裁縫物があるので、遲くまでせつせと針を動かして居た。清三は其傍で年賀狀を十五枚ほど書いたが、最後に毎日つける日記帳を出して、ペンで書き出した。

三十一日。

今年もまた暮れ行く。

思ひに思ひ亂れてこの三十四年も暮れ行かんとす。

思ふまじとすれど思はるゝは、此の年の暮なり。

かくて最後の決心はなりぬ。

無言、沈默、實行。

われは運命に順ふの人ならざるべからず。とても、とても、かくてかゝる世なれば、われはた多くは言はじ。

明星、新聲來る。

つた。橙、注連、昆布、鰕などが行き通ふ人々の眼に鮮かに見える。どの店でも弓張提灯をつけて、肴屋には鮭、ごまめ、數の子、唐物屋には毛糸、シャツ、ヅボン下などが山のやうに並べられてある。夜は人がぞろ〳〵と通りをひやかして通つた。

大晦日の朝、清三はさびしい心を抱いて、西風に吹かれながら、例の長い街道をてく〳〵と行田に歸つた。今更に感ぜられるのは、境遇につれて變り行く人々の感情であつた。昨年の今頃、かうしたことがあらうとは夢にも思つて居らなかつた。親しい友達の間柄がかういふ風に離れ離れにならうとは知らなかつた。人は境遇の動物であるといふ言葉をかれはこの頃ある本で讀んだことがある。其時は、そんなことがあるものかと餘所事に思つてすてた。けれどそれは事實であつた。

家に歸つて見ると、借金取は彼方此方から來て居た。母親が一々頭を下げて、それに應對して居るさまは見るに忍びない。父親は勘定が取れぬので、日の暮れる頃、しよぼ〳〵としほれた姿で歸つて來る。『あゝ〳〵、仕方がねえ？』と長大息をついて、豫算の半分ほども無い財布を母に渡した。清三は見兼ねて、金をまた二圓出した。

夜になつてから、母親は巾着の殘りの錢をぢやら〳〵音をさせながら、形ばかりの年越をする爲めに町へ買物に行つた。のし餅を三枚、ゴマメを一袋、鮭を五切、それに明日の煮染にする里芋を五合ほど風呂敷に包んで、重い重いと言つてやがて歸つて來た。其間に父親は燈明を神棚と臺所と便所とにつ

友達を訪問しても、もう以前のやうに面白くなかつた。郁治は絶えず遣つて來るが、此方からは滅多に出かけて行かない。逢ふと必ず美穗子の話が出る。それを聞くのが淸三には此上なく辛かつた。北川にも行つて見ようと時々思ふが、何だか女々しいやうな氣がして止した。散步も此頃は野が寒く、それに四邊に見るものがなかつた。かれは退屈すると一軒置いて隣の家に出懸けて行つて、日當りの好い緣側に七つ八つ位の娘の兒を相手に、キシャゴ彈きなどをして遊んだ。

髮の長い眉の美しい子が其中にあつた。警察へ轉任して來た警部とかの娘で、まだ小學校へも上らぬのに、いろはも數學もよく覺えて居た。百人一首も飛び〳〵に諳誦して、戀歌などを無意味な可愛い聲で歌つて聞かせた。淸三は一から十六までの數を加減して試みて見たが、大抵は間違なくすら〳〵と答へた。かれはセンチメンタルな心の調子で此の娘の子のやがて生ひ立たん行末を想像して見ぬ譯には行かなかつた。『幸あれよ。やさしき戀を得よ。』かう思つたかれの胸には限りなき哀愁が漲り渡つた。

熊谷に出懸けた日は三十日で、西風が強く吹いた。小島も櫻井も東京から歸つて居た。小畑は殊に熱心にかれを迎へた。けれどかれの心は昔のやうに快活にはなれなかつた。舊友は皆な淸三の蒼い顏と沈んだ調子と消極的な言葉とをあやしみ見た。淸三はまた一層快活になつた友達に對して何だか肩身が狹いやうな氣がした。

熊谷の町は賑かであつた。此處では注連飾が町家の軒每に立てられて、通りの角には年の暮の市が立

『何うも困るなア。』

清三は長大息を吐いた。

『今少し商賣が旨く行くと好いんだが、何うも不景氣でなア。何をやつたつて旨いことはありやしない。』

父親はかう言つた。

『本當にお前には氣の毒だけれど毎月今少し手傳つて貰はなくつては――』母親は息子の顏を見た。

『それは私は儉約をしてゐるんですよ、これで……』と清三は言つて、『煙草も碌々吸はない位にしてゐるんですけれど……』

『お前には本當に氣の毒だけれど……』

『父さんにも今少しかせいで貰はなくつちや――』

清三は父に向つて言つた。

父は默つて居た。

財政の內容を持出して、母親がくど〳〵と猶語つた。清三は母親に同情せざるを得なかつた。かれは熱心に借金の不得策なのを說いて、貧しければ貧しいやうに生活しなければならぬことを言つた。最後にかれは藏つて置いた金を三圓出して渡した。

しかし一段落を告げたといふやうな氣がないでもなかつた。戀を失つたのはつらいが、戀に自由を奪はれなかつたのは嬉しいやうな氣がする。今までの友達に對しての心持も少しく離れて、却つて自己を明かに眼の前に見るやうに思つた。

かれは懷に金を七圓持つて居た。其中の幾分を父母の補助に出すつもりであつたが、旅行をする氣が無いでもないので、わざとそれを藏つて置いた。年の暮ももう近寄つた來た。西風が毎日のやうに關東平野の小さな町に吹き暴れた。乾物屋の店には數の子が山のやうに積まれ、肴屋には鮭が板臺の上にいくつとなく並べられた。舊暦で正月をするのが此の近在の慣習なので、町はいつもに變らずしんとして、赤い腰卷をした田舍娘も見えなかつた。郡役所と警察署と小學校とそれに重立つた富豪などの注連飾が唯口に立つた。

六疊には炬燵がしてあつた。淸三は多く其處に日を暮した。雜誌を讀んだり、小說を讀んだり、時には心理學を繙いて見ることなどもあつた。傍では母親が賃仕事のあひ間を見て淸三の綿衣を縫つて居た。午後には何うかすると町へ行つて餅菓子を買つて來て茶を煎れて吳れることなどもある。一夜、風が吹荒れて、雨に交つて霙が降つた。父と母と淸三とは炬燵を取卷いて戶外に荒るゝ凄じい冬の音を聞いて居たが、かうした時に起りかけた一家の財政の話が愚痴つぽい母親の口から出て、借金の多いことが幾度となく繰返された。

こんなことをも言つた。

郁治はまた石川の此頃溺れて居る加須の藝者の話をした。

『先生此頃は非常に熱心だよ。君も知つてるだらうが、自轉車を買つてね、遠乘をするんだとか何とか言つて、毎日のやうに出懸けて行くよ。東京から來た小蝶とかいふ女で、寫眞を大事にして持つて居たよ。金持の息子なんて言ふものゝ心は丸でわれ〳〵とは違ふねえ君、勉強なんぞしないでも立派に一人前になつて行かれるんだからねえ。』

出來るだけの力を盡すと言つた言葉、其の言葉の蔭に雪子が居ることを清三は明かに知つて居た。けれどそれが清三には餘り嬉しくは思はれなかつた。つんと澄した雪子の姿が眼の前を通つてそして消えた。かれは今更に美穗子の姿の一層強い影を其心に印してゐるのを豫想外に思つた。かういふ道行になるのはかれも兼ねてよく知つて居たことである。ある時はさうなるのを友の爲めに祈つたこともある。けれど想像して居た時と事實となつた時との感は甚しく違つた。

清三の心はさびしかつた。自己の境遇が實際生活の上からも、戀愛の上からも、學問修業といふ上からも、益々消極的に傾いて來て、例へば柱と柱との間に小さく押附けられて了つたやうな氣がした。初めは何うしても醉はなかつた酒が、後になると其の反動で烈しく發して來て、歸る頃には、歌を唄つたり詩を吟じたりして郁治を驚かした。

二十五

郁治と美穂子との『新しき發展』に就いて、清三はいろ〳〵と詳しく聞いた。雪子から美穂子に遣る手紙の中に郁治が長い手紙を入れて遣つたのは一月ほど前であつた。やがて郁治に宛てて長い返事が來た。その返事をかれは其夜とある料理屋で酒を飲みながら清三に示した。其手紙には甘い戀の言葉が處々にあつた。郁治の手紙を寄宿室の暗い洋燈の光の下で繰返し繰返し讀んだことなどが書いてある。お互にまだ修業中であるから、仰しやる通り、社會に成功するまで、堅い交際を續けたいと言ふことも書いてある。これで見ると、郁治もそんなことを言つて遣つたものと見える。清三は其長い手紙を細かく讀むほどの餘裕はなかつた。かれは飛び〳〵にそれを見たが、處々の甘い蜜のやうな言葉はかれの淋しい孤獨の眼の前にさながらさま〴〵の色彩で出來た花環のやうにちらついて見えた。酒に醉つて得意になつて、友のさびしい心をも知らずに、平氣におのろけを言ふ郁治の態度が、憎くもあり腹立しくもあり氣の毒にもなつた。清三は唯フンフンと言つて聞いた。

『その代り僕は僕の出來る限りに於て、君の爲めに盡力するさ！』

こんなことを郁治は幾度も言つた。

『小畑もそんなことを言つて居たよ。僕だつて、君の心地位は知つてるさ。』

『解らん。』

『小畑が君、君のシスタアに何か言つたことがあるかえ？　僕のことで。』

『あゝ、妹が饒舌つたんだな、彼奴、馬鹿な奴だな！』

『まア、そんなことは好いから、僕のいふことを返事し給へ。』

『何を。』

『小畑が君のシスタアに何か言つたつて言ふことだよ。』

『知らんよ。』

『知らんことはないよ、僕が君とArtの關係に就いて、中に入つてるとか何うしたとか言つたことがあるさうだね。』

『うむ、さういへばある、』と郁治は思ひ出したといふ風で、『君が北川によく行くのは何うかしたんぢやないかなんて言つたことがある。』

『君のシスタアに就いても何か先生言ひやしなかつたか。』

『戯談は言つたかも知らんが、詳しくはよく知らん。』

二人は默つて歩いた。

『うむ。』
二人は暫し默つて歩いた。
『一體何うしたんだ？』
暫くして清三が訊いた。
『何が？』
『しらばつくれてるねえ、君は？　僕はちやんと聞いて知つてるよ。』
『何を？』
『大に發展したつて言ふぢやないか。』
『誰が話した？』
『ちやんと知つてるさ！』
『誰も知つてるものは無い筈だがな、』と言つて考へて、『本當に誰が話した？』
『ちやんと材料が上つてるさ。』
『誰だらうな？』
『中てゝ見給へ。』
少し考へて、

『いゝえ。』

『ぢや、貴郎、二人の中に入つて何うかしたつて言ふやうなことはなくつて。』

『知りません。』

『さう。』

雪子は又默つて了つた。

少時してから、

『私、小畑さんから變なことを言はれたから、……』

『變なことつて？　何んなことです。』

『何でもありませんけれどもね。』

話が謎のやうで一向要領を得なかつた。

午後、兎に角北川に行つて見ようと思つて沼の縁を通つて居ると、向うから郁治が遣つて來た。

『やあ！』

『何處に行つた？』

『北川へ鳥渡。』

『僕も今行かうと思つて居た。』と清三はわざと快活に、『Art 先生歸つてゐるつて言ふぢやないか。』

『えゝ』

雪子は笑つて見せた。

『知りません。』

『さう……』

と又笑つて口をつぐんで了つた。

昨日冬期休暇になつたので、清三は新しい年を迎へるべく羽生から行田の家に來た。美穗子が三四日前に、浦和から歸つて來て居るといふことをも聞いた。今朝加藤の家を訪問したが、郁治は出て居なかつた。すぐ歸りかけたのを母親と雪子が、『もう歸るでせうから、』と逹つて留めた。

清三は、詳しく聞き度かつたが、しかし其勇氣はなかつた。胸が唯躍つた。

雪子が笑つて居るので、

『一體何うしたんです？』

『何うしたつて言ふこともないんですけど……』

矢張笑つて居た。やがて、

『變なことおうかゞひするやうですけど……貴郎は兄と北川さんとのことで、何か思つてゐらしやることはなくつて？』

日が寒く平野に照つて居た。途中で日が全く暮れて、さびしい田圃道を一人てく〳〵歩いて來ると、ふと擦違つた人が、

『赤城山なア、山火事だんべい。』

と言つて通つた。

振返ると、暗い闇を通して、其處あたりと覺しき處に果して火光が鮮かに照つて見えた。山火事！赤城の山火事！　關東平野に寒い〳〵冬が來たといふ徵であつた。

今年の冬籠のさびしさを思ひながら清三は步いた。

二十四

『林さん、……貴郞は家の兄と美穗子さんのこと知つてて？』

雪子は笑ひながらから訊いた。

『少しは知つて居ます。』

清三は稍〻顏を赧くして、雪子の顏を見た。

『此頃のことも御存じ？』

『此頃つて……この冬休みになつてからですか。』

分であつた。和尚さんの行つた時は、丁度四月の休暇の頃で、祇園嵐山の櫻は盛りであつた。『行逢ふ舞子の顔やおぼろ月』といふ紅葉山人の句を引いて、新京極から三條の橋の上の夜の賑ひを面白く語つた。其時は和尚さんもうかれ心になつて雪駄を買つて、チヤラ〳〵音をさせて明るい賑かな春の町を歩いたといふ。奈良では大佛、若草山、世界にめづらしいブロンズの佛像、二千年昔の寺院どいふのを限なく見た。淸三の孤獨なさびしい心はこれを聞いて、まだ見ぬ處、まだ見ぬ山水、まだ見ぬ風俗に憧れざるを得なかつた。『一生の中一度は行つて見たい。』かう思つてかれは自己の覺束ない前途を見た。

年の暮は次第に近寄つて來た。行田の母からは、今年の暮は彼方此方の借錢が多いから、何うか今から心懸けて、金を無闇に使つて吳れぬやうにと言つて寄越した。蒲團が薄いので、蝦のやうに屈めて寢る足は終夜暖まらない。宅に言つて遣つた處で駄目なのは知れてゐるし、出來合を買ふ餘裕もないので、何うかして今年の冬はこれで間に合はせる積で、足の方に着物や羽織や袴を被けたが、日每に募る夜寒を凌ぐことが出來なかつた。止むなくかれは米ずしから四布蒲團を一枚借りることにした。其日の日記にかれは『今夜より漸く暖かに寢ることを得』と書いた。

行田から羽生に通ふ路は、吹さらしの平野のならひ、顔も向けられないほど西風が烈しく吹荒んだ。日曜日の日の暮れ〳〵に行田から歸つて來ると、秩父の連山の上に富士が淡墨色に分明と出て居て、夕

ある。黄く紅く色附いた楢や榛や栗の林も連日の西風に其葉ががら〳〵と散つて、里の子供が野の中で、それを集めて焚火などをしてゐるのをよく見かける。大越街道を羽生の町へ入らうとするあたりからは、日光の山々を盟主にした野州の連山が殊に分明と手に取るやうに見えるが、かれはいつも其處に來ると足を止めて立盡した。かれの故鄕なる足利町は、其波濤のやうに起伏した皺の多い山の麓にあつた。一日、かれは其故鄕の山に既に雪の白く來たのを見た。

和尚さんも長い夜を退屈がつて、よく本堂に遣つて來て話した。夜など茶を煎れましたからと小僧を迎へによこすこともある。庫裡の奧の六疊、其間には、長火鉢に鐵瓶が煮え立つて、明るい竹筒臺の五分心の洋燈の下に、上さんが裁縫をひろげて居ると、和尚さんは小さい机を其傍に持つて來て、新刊の雜誌などを見て居る。さびしい寺とは思へぬほどその一間は明るかつた。茶請は鹽煎餅か法事で貰つたアンビ餅で、文壇のことや其頃の作者氣質や雜誌記者の話などがいつもきまつて出たが、ある夜、ふと話が旅行のことに移つて行つた。和尚さんは曾て行つて居た伊勢の話を得意になつて話し出した。主僧は早稻田を出てから半歲ばかりして、伊勢の一身田の專修寺の中學林に英語國語の教師として雇はれて二年ほど居た。伊勢の大廟から二見の浦、宇治橋の下で橋の上から參詣人の投げる錢を網で受ける話や、あひの山で昔女がへらで錢を受留めた話などをして聞かせた。朝熊山の眺望、ことに全溪皆梅で白いといふ月の瀨の話などが清三のあくがれ易い心を惹いた。それから京都奈良の話も其心を惹寄せるに充

それでも郁治とは往來したが、もう以前のやうではなかつた。

一夜、清三は石川に手紙を書いた。初めは眞面目に書いて見たが、餘り餘裕が無いのを自分で感じて、わざと律語に書き直して見た。

意氣を血を、叫ぶ聲先づ消えて、

さてはまた、野に霜結んで枯るゝごと、

卿等の聲はまた立たず。

何んぞや一婦の痴に醉ひて、

俗の香蕃に狂ふ、

あゝ止みなんか、また前日の意氣なきや。

終に止みなんか、卿等の痴態！

さて最後に咄！　といふ字を一字書いて、封筒に入れて見たが、これでは友に警告するのに何だか甚だ不眞面目になるやうな氣がする。いろ〳〵考へた末、『こんなことはつまらぬ、言つて遣つたつて仕方がない、』と思つて破つて捨てた。

初冬の暖い日は次第に少くなつて、野には寒い〳〵西風が吹立つた。日向の學校の硝子に此間まで蠅がぶん〳〵飛んで居たが、それももう見えなくなつた。田の刈つた跡の氷が午後まで殘つて居ることも

行田の友達も少なからず變つたのを淸三は此頃發見した。石川は雜誌をやめてから、文學に段々遠ざかつて、訪問しても病氣で會はれないこともある。噂では近頃は料理屋に行つて、女を相手に酒を飮むといふ。此前の土曜日に、淸三は郁治と石川と澤田とに誘はれて、此頃興行してる東京の役者の出る芝居に行つたが、友の調子も著しくさばけて、春あたりは敢て言はなかつた戲談などをも人の前で平氣で言ふやうになつた。郁治の調子も何となく碎けて見えた。淸三ははしやぐ友達の群の中で、さびしい心で默つて舞臺を見守つた。

二幕目が終ると、

『僕は歸るよ。』かう言つてかれは立上つた。

『歸る？』

皆は驚いて淸三の顏を見た。戲談かと思つたが、其顏には笑の影は認められなかつた。

『何うかしたのか。』

郁治はかう訊ねた。

『うむ、少し氣分が惡いから。』

友達はそこ〳〵に歸つて行く淸三の後姿を怪訝さうに見送つた。後で石川の笑ふ聲がした。淸三は不愉快な氣がした。戸外に出るとほつとした。

寺の庫裡の入口の廣場にも小作米が段々持ち込まれる。豐年でも何とか理窟をつけてはかりを負けて貰ふ算段に腐心するのが小作人の習ひであつた。それにいつも夕暮の忙しい時分を選んで馬に積んだり車に載せたりして運んで來た。和尙さんは入口に出て挨拶して、先づさしで、俵から米を拔いて、それを明るい戶外に出して調べて見る。何うもこんな米では仕方がないとか、彼處はこんな悪い米が出來る筈がないがとかいろいろな苦情を持出すと、小作人は小作人で、それ相應な申譯をして、何うやら彼うやら押附けて歸つて行く。豆を作つたものは豆を持つて來る。蕎麥をつくつたものは蕎麥粉を納めに來る。『來年は一つ立派につくつて見ますから、何うか今年はこれで勘辨して頂き度い。』誰も皆なそんなことを言つた。

『何うも小作人などと言ふものは仕方がないものですな、』と和尙さんは淸三に言つた。

收穫がすむと、町も村も何となく賑かに豐かになつた。料理屋に三味線の音が夜更まで聞え、市日には吳服屋唐物屋の店に赤い蹴出の娘を連れた百姓なども見えた。學校の宿直室に先生の泊つて居るのを知つて、あんころ餅を重箱に一杯持つて來て吳れるのもあれば、鷄を一羽料理して持つて來て吳れるものもある。寺では夷講に新蕎麥を上さんが手づから打つて、酒を一本つけて吳れた。

木枯の吹き荒れた夜の朝は、楢や栗の葉が本堂の前の其處此處に吹溜められて居る。銀杏の葉はすつかり落ち盡して鐘樓の影が何となくさびしく見える。十一月の末には手水鉢に薄氷が張つた。

遣つた。』一杯位、女だつて飲めなくては不自由ですな、』と大島さんは元氣に笑つた。西日が暖かに緣側にさして、狹い庭には大輪の菊が白く黃く咲いて居た。畑も田ももう大抵收穫がすんで、向うの疎らな森の蔭からは枯草を燃やす烟がところ〳〵に颺つた。傍の街道を喇叭の音がして、例の大越がよひの乘合馬車が通つた。

其夜は學校にとまつた。翌日は午後から雨になつた。黃く色附き初めた野の楢林から雨滴がほた〳〵落ちる。寺に歸つて見ると、障子がすつかり貼りかへられて、室が明るくなつて居る。荻生さんが天長節の午後から來て、半日かゝつてせつせと貼つて行つたといふ。その友情に感激して、其後逢つた時に禮を言ふと、『餘り黑くなつて居たから……』と荻生さんは別に何とも思つてゐない。『君は僕の留守に掃除はして吳れる。御馳走は買つて置いて吳れる。障子は貼りかへて吳れる。丸で僕の細君見たやうだね、』と淸三は笑つた。和尙さんも、『荻生君は本當にこまめで深切でやさしい。女だと、それはいゝ細君になるんだつたが惜しいことをしました。』かう言つて矢張笑つた。

晴れた日には、農家の廣場に唐箕が忙はしく廻つた。野からは刈稻を滿載した車が幾臺となく遣つて來る。寒くならない中に晩稻の收穫を濟まして了ひ度い。蕎麥も取つて了ひたい。麥も蒔いて了ひたい。百姓はかう思つて皆な一生懸命に働いた。十月の末から十一月の初めに懸けては、もう關東平野に特色の木枯がそろ〳〵立ち始めた。朝毎の霜は藁葺の屋根を白くした。

た。勅語の箱を卓の上に飾つて、菊の花の白いのと黄いのとを瓶にさして其傍に置いた。女生徒の中にはメリンスの新しい晴衣を着て、海老茶色の袴を穿いたのもちらほら見えた。紋附を着た男の生徒もあつた。オルガンの音につれて『君が代』と『今日のよき日』を唄ふ聲が講堂の破れた硝子を洩れて聞えた。それが濟むと、先生達が出口に立つて紙に包んだ菓子を生徒に一人々々わけてやる。生徒は莞爾して、お辭儀をしてそれを受取つた。丁寧に懐に藏ふものもあれば、紙をあけて見るものもある。中には門の處でもうむしや〳〵食つて居る行儀のわるい子もあつた。後で教員連は村長や學務委員と一緒に廣い講堂にテイブルを集めて、役場から持つて來た白の晒布を其の上に敷いて、人數だけの椅子を其周圍に寄せた。餠菓子と煎餠とが菊の花瓶の間に並べられる。小使は大きな藥罐に茶を入れて持つて來て、銘々に配つた茶碗についで廻つた。

大君の目出度い誕生日は、茶話會では收まらなかつた。小川屋に行つて、ビイルでも飮まうといふ話は誰からともなく出た。やがて教員達はぞろ〳〵と田圃の中の料理屋に出かける。一番後から校長が行つた。小川屋の娘は綺麗に髪を結つて、見違へるやうに美しい顏をして、有合はせの玉子燒か何かでお膳を運んだ。一人前五十錢の會費に、有志からの寄附が五六圓あつた。それでビイルは景氣好く拔かれる。村長と校長とは愉快さうに今年の豐作などを話してゐると、若い連中は若い連中で檢定試驗や講習會の話などをした。大島さんがコップにビイルをつがうとすると、女教員は手で蓋をしてコップを傍に

て、世に出でし最初の秋をかくさびしく暮すを思へば、われ等は不平など言ひ居られぬ筈に候。

手紙の五。（はがき）

運命一たび君を屈せしむ。何ぞ君の永久に屈することあらん。君の必ず奮つて立つの時あるを信じて疑はず。

意氣の子の一人さびしの夜の秋木犀の香りしめり勝なる。

これ等の手紙を揃へて机の上に置いた。そして清三は考へた。自分の書いて遣つた返事と、其返事の友の心に惹起したことゝを細かに引きくらべて考へて見た。更に自己のまことの心と其手紙の上に顯れた狀態とのいかに離れて居るかを思つた。美穗子のことから延いて雪子しげ子のことを頭腦に浮べた。表面に顯はれたことだけで世の中は簡單に解釋されて行く。打明けて心の底を語らなければ――いや心の底を詳しく語つても、他人は其眞相を容易に解さない。親しい友達でもさうである。かれは痛切に孤獨を感じた。誰も知つて吳れるものゝない心の寂しさをひしと覺えた。風が裏の林をドッと鳴らした。

二十三

天長節には學校で式があつた。學務委員やら村長やら土地の有志者やら生徒の父兄やらがぞろ〳〵來

いか、君の故郷ぢやないか。いつか聞いた君のファストラヴの追憶ではないか。

手紙の三。

君の胸には何かゞあるやうだ。少くとも此間の返事で僕はさう解釋した。解釋したのが悪いと言はれてもこれも仕方がなしと存候。

加藤此頃別號をつくつたりと申居候。未央生の號を書きて未だ君の邊を驚かさず候ふや。未央と申せば、既に御存じならん。未央は美穗に通ずるは言ふまでもなきことに候。

『予にして加藤の二妹のいづれを取らんやといへば、寧ろしげ子を。温順にして情に富めるしげ子を。』をさなき教へ子を戀人にする小學教師のことなど思ひ出して微笑み申候。又、君の相變らぬ小さき矜持をも思ひ出し候。

手紙の四。

久し振りで快談一日、昨年の冬頃のことを思出し候。

あの日は遲くなりしことゝ存候。君の心の半をばわれ解したりと言ひてもよかるべしと存候。戀――それのみがライフにあらず。眞に然り、眞に然り、君の苦衷察するに餘りあり。君の如き志を抱い

加藤の浮れ加減はお話にもならず。手紙が浦和から來たとて、その一節を寫して見て呉れろといふ始末、存外熱くなりて居れることゝ存候。

秋寒し、近況如何。

手紙の二。

御返事難有う。そんなことをして居られるか何うか考へて見よとの御反問の手嚴しさ。君の心はよく解つた。けれど『あんなおしやらくは嫌ひだ』は少し酷すぎたりと思ふ。あの脊の高い後姿の好い處が氣に入る人もあるよ。またあの脊の高いお嫌ひな人が君でなくつてはならなかつたら何うする。『嫌ひだ』と言うたからとて、さうか本當に嫌ひだつたのかと新事實を發見したほどに思ふやうな僕にては無之候。かう申せば又誤解呼はりするかも知らねど、簡單に誤解呼はりをする以上の事實があるのを僕は確かな人から聞いたの故駄目に候。

此次の日曜には、行田から今一息俥を飛ばして遣つて來給へ。此間、白瀧の君に逢つたら、『林さん、お變りなくつて！』と聞いて居た。又例の蕎麥屋でビールでも飲んで語らうぢやないか。小島から此間便りがあつた。此頃に杉山がまた東京の早稻田に出て行くさうだ。

歌を難有う。思はんやさはいへそゞろむさし野に七里を北へ下野の山、七里を北と言へば足利ではな

荻生さんはいつも遣つて來た。一緒に町に出て、しるこを食ふことなどもあつた。『それは僕だつて、暢氣にばかりして居る譯ではありませんさ。けれどいくら考へたつて仕方がないですもの、成るやうにしきやならないんですもの。』荻生さんは淸三の常に沈み勝ちなのを見て、こんなことを言つた。荻生さんは淸三の常に悲しさうな顏をしてゐるのを心配した。

後の月は明るかつた、裏の林に野分の渡るのを聞きながら、庫裡の八疊の緣側に、和尙さんと酒を飮んだ。夜はもう寒かつた。轡蟲の聲も枯々に、寒さうにコホロギが鳴いて居た。

秋は日に〳〵寒くなつた。行田からは袷と足袋とを屆けて來る。

二十二

小畑から來た手紙の一。

今日、ある人（强ひて名を除く）から聞けば、君と加藤の妹との間には多少の意義があるとのことに候ふが、それは本當か如何、お知らせ被下度候。

先日、加藤に逢ひし時、それとなく聞きしに、そんなことは知らぬと申候。けれどこれは兄が知らぬからとて、事實無根とは斷言出來難しなど笑ひ申候。君にも似合はぬ仕事かな。ある事はありてよし。無きことは無くてよし、一臂の力を貸さぬでもないのに、何とか返事あり度候。

間の子供と一緒に、風の吹いた朝を待ちつけて、銀杏の實を拾つたことを思ひ出した。それがまだ昨日のやうに思はれる。其處に現に子供の群の中に自分も一緒になつて銀杏を拾つてゐるやうな氣がする。月日が何時の間にか經つて、かうして昔のことを考へる身となつたことが不思議にさへ思はれた。此頃は學校でオルガンに新曲を合せて見ることに興味を持つて、琴の六段や長唄の賤機などを遣つて見ることがある。鐵幹の『殘照』は變ロ調の4—4でよく調子に合つた。遲くまでかゝつて熱心に唱歌の樂譜を淨寫した。

月の初めに、俸給の一部を割いて、枕時計を買つたので、此頃は朝はきまつて七時には眼が覺める。それに、時を刻むセコンドの音が絶えず聞えて、何だかそれが伴侶のやうに思はれる。一人で歸つて來ても、時計が待つて居る。夜更に目が覺めてもチクタク遣つて居る。物を思ふ心のリズムにも調子を合はせて呉れるやうな氣がする。かれは小畑にやる端書に枕時計の繪をかいて『この時計をわが友ともわが妻とも思ひなしつゝ、此秋を寺籠りするさびしの友を思へ』と言つて遣つた。學校からの歸途には、路傍に尾花に夕日が力弱く射して、蓼の花の白い小川に色ある雲が映つた。かれは獨歩の『むさし野』の印象も更に新しく胸に感ぜざるを得なかつた。寺の前の不動堂の高い緣側には子守の老婆がいつも三四人集つて、手拍子を取つて子守歌を歌つて居る。其頃裏の林は夕日にかゞやいて、其最後の餘照は山門の裏の白壁の塀に明らかに照つた。

を聞くと、いかなる犧牲にも堪へなければならぬといつも思ふ。時には、父親に內所で、財布の底をはたいて小遣を置いて來ることなどもある。それを父親は母親から引出して遣つた。

二三日前に歸つた時にも、彼方此方に一圓二圓と細かい不義理が出來て困つて居るといふ話を母親から聞いた。

『行田文學』は四號で廢刊するといふ話があつた。石川は折角始めたことゆゑ、一二年は續けたいが、何うも費用が嵩んで、印刷所に借金が出來るやうでも困るからといふ。郁治は何うせそんな片々たるものを出したつて、要するに道樂に過ぎんのだから止めて了ふ方が結局宜い仕方だと贊成する。淸三は折角四號まで出したのだから、今少し熱心に會員を募つたり寄附をして貰つたりしたならば、續刊の計畫が立つだらうと言つて見たが駄目だつた。日曜日には荻生君が熊谷から來るのを待受けて、一緖に羽生へ歸つて來た。荻生さんは心配のなささうな顏をして面白い話をしながら步いた。途中で、テバナをかんで見せた。それがいかにも巧みなので、淸三は體を崩して笑つた。淸三には荻生さんの無邪氣で暢氣なのが羨しかつた。

朝霧の深い朝もあつた。野は秋漸く逝かんとしてまた暑きこと一二日、柿赤く、蜜柑靑しと、日記に書いた日もあつた。秋雨は次第に冷かに、漆のあかく色附いたのが裏の林に見えて、前の銀杏の實は葉と共に頻りに落ちた。掃いても掃いても黃い銀杏の葉は散つて積る。淸三は幼い頃故鄕の寺で、遊び仲

二十一

秋は日に日に深くなつた。寺の境にひよろ長い榛の林があつて、其の向うの野の黄く熟した稻には、夕日が一しきり明るく射した。鴻の巣に通ふ縣道には、薄暮に近く、空車の通る音がガラ／＼といつも高く聞える。其頃機動演習に遣つて來た歩兵の群や砲車の列や騎馬の列がぞろ／＼と通つた。林の角に歩兵が散兵線を布いて居ると思ふと、バリ／＼と小銃の音が凄じく聞える。寺でも庫裡と本堂に兵士が七八人も來て泊つた。裏の林には馬が、二三十頭も繋がれて、それに飲ませる水を入れた四斗桶が幾個となく本堂の前の庭に並べられる。サアベルの音、靴の音、馬の嘶く聲、俄かに四邊は騷々しくなつた。夜は町の豪家の門に何中隊本部と書いた寒冷紗の布が白く闇に見えて、士官や曹長が劍を鳴らして出たり入つたりした。

それが一日二日で通過して了ふと、町はしんとして元の靜謐にかへつた。清三は二三日前の土曜日に例のごとく行田に行つたが、歸つて來て、日記に、「母はつとめて言はねど、父君のさては何とか働き給はゞ、わが一家は平和ならましを、此思ひ、いつも歸行の時に思ひ浮ばざることなし。」と書いた。怠け勝ちに日を送つて、母親にのみ苦勞を懸ける父親がかれには齒痒くつて仕方がなかつた。かれは病身でそして思ひ遣りの深い母親に同情した。顳顬に卽効紙を貼つて、夜更まで賃仕事にいそしむ母親の繰言

りますか、』と問うた。

『もう、ぢきです、向うに見える森がさうです。』

旅人はかれと並んで歩きながら、猶ほいろ〳〵なことを訊いた。これから川越を通つて八王子の方へ行くのだといふ。何でも遠い處から商賣をしながら遣つて來たものらしい。其の言葉には東北地方の訛があつた。

『此の近所に森といふ在郷がありますか。』

『知りませんな。』

『では高木といふ處は。』

『聞いたやうですけど……』

矢張よくは知らなかつた。旅人は今夜は羽生の町の梅澤といふ旅店にとまるといふ。清三は町に入る處で、旅店へ行く路を敎へて遣つて、田圃の横路を右に別れた。見てゐると、旅人はさながら疲れた鳥が塒を求めるやうに、てく〳〵と歩いて町へ入つて行つた。何故ともなく他鄕といふ感が烈しく胸を衝いて起つた。かれも旅人、われも旅人、われも同じく他鄕の人！　かう思ふと、涙がホロ〳〵と頰を傳つて落ちた。

彌勒の先生達はよく生徒を運動に此處へつれて來た。生徒が砂地の上で相撲を取つたり、叢の中で阜斯を追つたり、汀へ行つて淺瀬でぼちや／＼したりして居る間を、先生達は涼しい松原の蔭で、氣の置けない話をしたり、新刊の雜誌を讀んだり、仰向に草原の中に寢ころんだりした。平凡なる利根川の長い土手、其中で此處十町許りの間は、松原があつて景色が眼覺める許り美しかつた。ひよろ松もあれば小松もある。松の下は海邊にでも見るやうな綺麗な砂で、處々小高い丘と丘との間には、青い草を下草にした繪のやうな松の影があつた。夏は其處に色の濃い撫子が咲いた。白い帆がそのすぐ前を通つて行つた。

淸三は此處へ來ると、いつも生徒を相手にして遊んだ。鬼事の群に交つて、女の生徒につかまへられて、前掛で眼かくしをさせられることもある。又生徒を集めて一緒になつて唱歌をうたふことなどもあつた。かうして居る間はかれには不平も不安もなかつた。自己の不運を嘆くといふ心も起らなかつた。無邪氣な子供と同じ心になつて遊ぶのが常である。しかし今日は何うしてかさうした快活な心になれなかつた。無邪氣に遊び廻る子供を見ても心が沈んだ。かうして幼い生徒にはかなき慰藉を求めて居る自分が情けない。かれは松の蔭に腰をかけて、溶々として流れ去る大河に眺め入つた。

一日、學校の歸りを一人さびしく歩いた。空は晴れて、夕暮の空氣の影濃かに、野には薄の白い穗が風に靡いた。ふと、路の角に來ると、大きい包を脊負つて、古びた紺の脚半に、埃で白くなつた草鞋をはいて、さも勞れ果てたといふ風の旅人が、ひよつくり向うの路から出て來て、「羽生の村へはまだ餘程あ

二十

男生徒女生徒打混ぜて三十名ばかり、田の間の細い路をぞろ〳〵通る。學校を出る時は『龜よ龜さんよ』を一聲に唄つて來たが、それにも倦きて、今では各自に勝手な眞似をして歩いた。何かべちやく〳〵饒舌つてゐる女生徒もあれば、後を振返つて赤目をして見せて居る男生徒もある。赤いマンマといふ花を摘んで列に後れるものもあれば、蜻蛉を追かけて畑の中に入つて行くものもある。尋常二年級と三年級、九歳から十歳までのいたづら盛り、總じて無邪氣な甘えるやうな擧動を、清三は自己の物思ひの慰藉として常に可愛がつたので『先生――林先生』と生徒は顏を見てよく其後を追つた。

學校から村を拔けて、發戸に出る。青縞を織る機の音が其處にも此處にも聞える。色の白い若い先生をわざ〳〵窓から首を出して見る機織女もある。清三は袴を着けて麥稈帽子を被つて先に立つと、關さんは例の詰襟の汚れた白い夏服を着て生徒に交つて歩いた。女教師も其後からハンケチで汗を拭き〳〵跟いて來た。秋は半ば過ぎてもまだ暑かつた。發戸の村はづれの八幡宮に來ると、生徒はばら〳〵と驅け出して其裏の土手に馳せ上つた。先に登つたものは、手を擧げて高く叫んだ。ぞろ〳〵と跟いて登つて行つて手を擧げて居るさまが、秋の晴れた日の空氣を透して疎らな松の間から見えた。其の松原からは利根川の廣い流が縮を展げたやうに美しく見渡された。

早く歸る、秋雨漸く晴れて、夕方の雲風に動くこと早く夕日金色の色弱し。木犀の衰へたる香微かに匂ふ。夜、新聞を見、行田への荷物包む。星かくれて、銀杏の實落つること繁し。栗の林に野分たちて、庫裡の奥庭に一葉ちるもさびしく、風の音にコホロギの聲寒し。

十日。

朝、行田に蚊帳を送り、夕方着物を受取る。小畑より久し振りにて同情の手紙を得たり。曰く『この秋の君の心！　思へばありしことゞも思ひ偲ばる。「去年の冬、今年の春！」といふ君が言葉にも千萬無量の感湧き出でて、心は遠く成願寺のあたり」云々。夜、星清く澄んで南に低く飛ぶもの二つ。小畑に返事を書く。曰く『愚痴はもうやめた。言ふまい語るまい、一人にて泣き、一人にてもだえん。』

清三は此頃の日記の去年の冬、今年の春に比べて、いかに其調子が變つたかを考へざるを得なかつた。去年の冬はまだ世の中はかうしたものだとは知らなかつた。美しい派手やかな希望も前途に輝いて居た。歌留多を取つても、ボールを投げても面白かつた。親しい友達の胸に利己のさびしい影を認めるほど眼も心も覺めて居らなかつた。卒業の喜悦、初めて世に出づる希望――その花やかな影は忽ち消えた。秋は來た、さびしい秋は來た。裏の林に熟み割れた栗のいがが見えて、晴れた夜は野分がそこからさびしく立つた。長い廊下の縁は足の裏に冷やかに、本堂の傍の高い梧桐からは雨滴が泣くやうに落ちた。

二日。晴。
馴れし木犀の香漸く衰へ、裏の栗林に百舌鳥なきしきる。今日より九時始業、米すしより夜油を買ふ。
三日。
モロコシ畑の夕日に群れて飛ぶあきつ赤し、熊谷の小畑に手紙出す。夕波の繪かきそへて。
四日。晴。
久しく晴れたる空は夜に入りて雨となりぬ。裏の林に、秋雨の木の葉うつ音しづか。故鄕の夢見る。
五日。土曜日。
雨を衝きて行田に歸る。
六日。
一日を樂しき家庭に暮す。小畑と小島に手紙出す。夜、細雨靜か也。
七日。
朝早く行く。稲、黃く色づき、野の朝の雨斜なり。夜は學校にとまる。
八日。
雨はげしく井戸端の柳の糸亂る。今宵も學校にとまる。
九日。

彼岸の中日には、其原稿がもう大抵出來懸つて居た。其日は本堂の如來樣にはめづらしく蠟燭が點されて、和尙さんが朝の內一時間ほど、紫の衣に錦襴の袈裟をかけて讀經をした。庭の金木犀は風につれてなつかしい匂を古びた室に送る。參詣者は朝から遣つて來て、駒下駄の音がカラコロと長い鋪石道に聞えた。墓に詣づる人々は、先づ本堂に上つて如來樣を拜み、庫裡に廻つて、其處に出してある火鉢で線香に火を點け、草の茂つた井戶から水を汲んで、手桶を下げて墓へ行つた。寺では二三日前から日傭取を入れて掃除をして置いたので、墓地は綺麗になつて居て、いつものやうに樒の枯葉や犬の糞などが散らかつて居なかつた。參詣するもの丶中には、町の豪家の美しい少女も居れば、島田に結つた白粉の半剝げた田舍娘もあつた。淸三は上さんから貰つた萩の餠に腹をふくらし、涼しい風に吹かれながら午睡をした。夢現の中にも鐘の音、駒下駄の音、人の語り合ふ聲などが絕えず聞えた。

結願の日から雨がしと〳〵と降つた。さびしい今年の秋が來た。

かれの此頃の日記には、こんなことが書いてある。

十月一日。

去月二十八日より不着の新聞今日一度に來る。夜、善綱氏(小僧)に算術敎ふ。エノツクアアデン二十頁の處まで進む。此頃日脚西に入り易く。四時過ぎ學校を出で、五時半に羽生に着けば日全く暮る。夜、九時、湯に行く。秋の夜の御堂に友の淚冷かなり。

笑つて、『これはえらい處を見られましたな、』と言つた。清三にはこの滑稽な事實が、單に滑稽な事實ではなくつて、それを透して主僧の生活の狀態と夫妻の間柄とが一層明かに見えたやうな氣がした。かうして無意味に――若い時の希望も何も彼も捨てゝ了つて、唯目前の運命に服從して、さて年を過して、歷代の住職の墓の中に！　清三は自分の運命に引きくらべて見た。

時には一葉舟の詩人を學んで、『雲』の研究をして見ようなどと思ひ立つこともあつた。信濃の高原に見るやうな複雜した雲の變化を見ることは出來なかつたが、ひろい關東平野を縁取つた山々から起る雲の色彩にはすぐれたものが多かつた。裏に出ると、淺間の烟が正面に見えて、その左に妙義が鳥渡頭を出して居て、それから荒船の連山、北甘樂の連山、秩父の連山が波濤のやうに連り亘つた。兩神山の古城址のやうな形をした肩の處に夕日は落ちて、いつもそこからいろ／＼な雲が湧きあがつた。右には赤城から日光連山が環をなして續いた。秩父の雲の明色の多いのに引かへて、日光の雲は暗色が多かつた。かれは青田を越えて、向うの榛の並木のあたりまで行つた。野良の仕事を終つて歸る百姓は、いつも白地の單衣を着て頭の髮を長くした成願寺の教員さんが手帳を持ちながらぶら／＼歩いて行くのに邂逅して挨拶をした。時には田の畔に佇ずんで何か頻りに手帳に書き附けて居るのを見ることもあつた。清三の手帳には日附と時刻と其時々に起つたさま／＼の雲の狀態と色彩と、時につれて變化して行く暮雲のさまとが段々詳しく記された。『平原の雲の研究』といふ文をかれは書き始めた。

派なもので、寄附金をした有志の姓名は、金文字で高い墓石に刻りつけられてあつた。それから日清の役に此近在の村から出征して、旅順で戰死した一等卒の墓もあつた。

この墓地とは全く離れて、裏の林の奥に、丸い墓石が數多く並んで居る。これは歴代の寺の住職の墓である。杉の古樹の蔭に笹やら楢やらが茂つて、土は常にじめ〳〵として居た。晴れた日には夕方の光線が斜に林にさし透つて、向うに廣い野の空がそれと覗かれた。雨の日には、梢から雨滴がボタ〳〵落ちて、蘚苔の生えた坊主の頭顱のやうな墓石は泣くやうに見られた。此處の和尚さんもやがては此の中に入るのだなどと清三は考へた。肥つた脊の高い上さんと田舍の寺に埋めて置くのは惜しいやうな學問のある和尚さんとが、かうした淋しい平凡な生活を送つて居るのも、考へると不思議なやうな氣がする。ふと、二三日前のことを思出して、かれは微笑した。かれは日記に輕い調子で、

『夕方知らずして、主の坊がWifeと共に湯の小さきに親しみて(?)入れるを見て、突然のことに氣の毒にも亦面喰はされつ』と書いたのを思出した。湯殿は庫裡の入口から入られるやうになつて居た。和尚さんは二月ばかり前に、葬儀に用ゐる棒や板などの澤山本堂にあつたのを利用して大工を雇つて來て、其處に恰好の湯殿を作つて、丸い風呂を据ゑて湯を立てた。烟が勝手から庫裡まで靡いた。其日は火を貰はうと思つて、茶の間へ行つて見ると、其處には誰も居ないで、笑聲が湯殿の方から聞えた。何氣なしに行つて覗いて見ると、夫妻は小さい据風呂に目白の押合ひのやうにして入つて居る。主僧は平氣で

を惹くに充分であつた。友の成功を祝した手紙を書く時、かれは机に打伏して自己の不運に泣かざるを得なかつた。

本堂の机の上には亂れ髪、落梅集、むさし野、和尚さんが早稻田に通ふ頃讀んだといふエノックアーデンの薄い本が載せられてあつた。かれは『響りんりん』といふ故郷を去るの歌を常に好んで吟誦した。其調子には言ふに言はれぬ悲哀がこもつた。庫裡の玄關の前に、春は芍藥の咲く小さい花壇があつたが、其處に其頃秋海棠が繪のやうに微かに紅を見せて居る。中庭の萩は今を盛に咲亂れた。

夜毎の月は次第に明かになつた。墓地と畠とを縁取つた榛の並木が黑く空に見えて、大きな芋の葉にはキラ〳〵と露が光つた。

夕飯の後に、淸三は墓地を歩いて見ることなどもあつた。新墓の垣に紅白の木槿が咲いて、あかい小さい蜻蛉が澤山集つて飛んで居る。卒塔婆の新しいのに、和尚さんが例の禿筆を揮つたのが彼方此方に立つてゐる。土饅頭の上に茶碗が水を滿して置いてあつて、線香のともつた後の白い灰が歷々と殘つて見えた。花立にはみそ萩や女郎花などが供へられてある。古い墓も無緣の墓もかなり多かつた。一隅には行倒れや乞食の死んだのを埋葬した處もあつた。淸三は時にはものずきに碑の文などを讀んで見ることがある。仙臺で生れて、維新の時には國事に奔走して、明治になつてから此處に來て、病院を建てゝ、土地の者に慈父のやうに思はれたといふ人の石碑もあつた。製糸工場の最初の經營者の墓は、花崗石の立

寺に居ても面白くない。行田に歸つても、狹い家は暑く不愉快である。それに、美穗子が歸つて居るだけそれだけ、其處に居るのが苦痛であつた。かれは一人で赤城から妙義に遊んだ。旅から歸つて來たのは八月の末であつた。其時美穗子は、既に浦和の寄宿舍に歸つて居た。行田から羽生、羽生から彌勒といふ平凡な生活はまた始まつた。

十九

學校には新しいオルガンが一臺購つてあつた。初めての日は丁度日曜日で、校長も大島さんも來なかつた。其夜は宿直室にさびしく寢た。盂蘭盆を過ぎた後の夜は美しく晴れて、天の川が明かに空に橫つて居る。垣にはスィッチョが鳴いて、村の子供等のそれをさがす提灯が其處にも此處にも見える。日中は暑いが、夜は露が草の葉に置いて、人の話聲が何處からともなく聞えた。

初めの十日間は授業は八時から十時、次の十日間は十二時まで、それから間もなく午後二時の退校となる。もう其頃は秋の氣はあたりに充ちて、雨の降る日など單衣一枚では冷かに感じられた。物思ふかれの身に月日は早く經つた。

高等學校の入學試驗を受けに行つた小島は第四に合格して、月の初めに金澤へ行つたといふ噂を聞いたが、得意の文句を並べた繪葉書はやがて其處から屆いた。其地にある兼六公園の寫眞はかれの好奇心

卅日の學課は一時間で終つた。生徒を集めた卓の前で、

『皆さんは暑中休暇を有益に使はなければなりません。餘りに遊び過すと、折角これまで教はつたことを皆な忘れて了ひますから、毎日一度づつは、本を出しておさらひをなさい。それから父さん母さんに世話を焼かしてはいけません。桃や梨や西瓜などを澤山に食べてはいけません。暑い處を遊んで來て、さういふものを澤山に食べますと、腹をこはすばかりではありません。恐ろしい病氣にかゝつて、夏休みがすんで、學校に來たくつても來られないやうになります。よく遊び、よく學び、よく勉めよ、本にもさう書いてありませう。九月の始めに、此處で先生と一緒になる時には、誰が一番先生の言ふことをよく守つたか、それを先生は今から見て居ります。』かう言つて、清三は生徒に別れの禮をさせた。お下げに結つた女生徒と鼻を垂らした男生徒とがぞろ〳〵と下駄箱の方へ先を爭つて出て行つた。何れの教室にも同じやうな言葉が繰返される。女教員は菫色の袴を分明と廊下に見せて、一二、一二を遣りながら、其處まで來て解散した。校庭には九連草の赤いのが日に照されて咲いて居た。紫陽花の花もあつた。

十八

暑中休暇は徒に過ぎた。自己の才能に對する新しい試みも見事に失敗した。思は燃えても筆はこれに伴はなかつた。五日の後にはかれは斷念して筆を捨てた。

は東京の文壇に顔を出して居る頃集めた本を何彼と持つて來て貸して呉れた。國民小説といふ赤い表紙の四六版の本の中には、『地震』と『うき世の波』と『惡因縁』といふ三篇がある。それが面白いから讀めと和尚さんは言つた。『むさし野』といふ本も其中にあつた。かれは『むさし野』に讀み耽つた。

七月は次第に終に近づいた。暑さは日に〳〵加はつた。久しく逢はなかつた發戸の小學校の女教員に例の庚申塚の角でまた二三度邂逅した。白地の單衣に白のリボン、涼しさうな裝をして、微笑を傾けて通つて行つた。其微笑の意味が清三には何うしても解らなかつた。學校では暑中休暇を誰も皆な待ち渡つて居る。暑い夏を葡萄棚の下に寢て暮さうといふ人もある。浦和にある講習會へ出かけて、檢定の資格を得ようとして居るものもある。旅に出ようとしてゐるものもある。東京へ用足しに行かうと企てゝ居るものもある。月の初めから正午限になつて居たが、前期の日課點を調べるので、教員共は一時間二時間を教室に殘つた。それに用のないものも、午から歸ると途中が暑いので、日蔭の出來る頃まで、オルガンを鳴らしたり、雜談に耽つたり、宿直室へ行つて晝寢をしたりした。清三は日課點の調べに厭きて、風呂敷包の中から『むさし野』を出して清新な趣味に渇した人のやうに熱心に讀んだ『忘れ得ぬ人々』に書いた作者の感慨、武藏野の郊外をザッと降つて通る林の時雨、水車の月に光る橋の畔に下宿した若い教員、それ等はすべて自分の感じによく似て居た。かれはをり〳〵本を伏せて、頭腦を流れて來る感興に耽らざるを得なかつた。

たといふ念と、譬へ難いさびしい心細い感とを抱いて、かれは其の長い夕暮の街道を辿つた。

寺に歸つた時は日が暮れてからもう一時間位經つた。和尚さんは庫裡の六疊の長火鉢のある處で酒を飲んで居たが、常に似ず元氣で『まア一盃お遣んなさい。』と盃をさして、冷やつこを別に皿を分けて取つて與れた。今まで聞かなかつた主僧の幼ない頃の話が出る。九歳の時、此寺の小僧に寄越されて、それから七八年の辛抱、其艱難は一通りでなかつた。玄關の傍の二疊にゐて、この成願寺の住職になることを此上もない希望のやうに思つて居た。今でも成願寺住職實圓と書いた落書がよく見ると殘つて居る。主僧は醉つて『衆寮の壁』といふつい此頃作つた新體詩を歌つて聞かせた。

『何うです、君も何か一つ書いて見ませんか。』

かう言つて和尚さんは勸めた。

清三の胸はかうした言葉にも動かされるほど今宵は感激して居た。何か一つ書いて見よう。かれはヱルテルを書いて其の實際の苦痛を忘れたゲヱテのことなどを思ひ出した。自分には才能といふ才能もない。學問といふ學問もない。友達のやうに順序正しく修業をする境遇にも居ない。人並にして居ては、とても駄目である。かれは感情を披瀝する詩人としてより他に光明を認め得るものはないと思つた。

『一つ運だめしを遣らう。此の暑中休暇に全力を擧げて見よう。自分の才能を試みて見よう。』

かれは和尚さんから、種々の詩集や小説を借りることにした。翌日學校から歸つて來ると、和尚さん

其室には西日が射した。松の影が庭から緣側に移つた。垣の外を荷車の通る音がする。

此春と同じやうに、二人の友達は家への歸途を默つて歩いた。言ひたいことは郁治の胸にも淸三の胸にも山ほどある。しかし二人ともそれに觸れようとしなかつた。城址の錆びた沼に赤い夕日が射して、ヤンマが蘆の梢に一疋、二疋、三疋までとまつてゐる。子供が長いもち竿を持つて田の中に腰まで浸つて、おつるみの蜻蛉をさして居た。

石橋近くに來た時、

『今年は夏休みを何うする……何處かへ行くかね？』

郁治は突然かう訊ねた。

『まだ、考へて居ないけれど、ことに寄ると、日光か妙義に行かうと思ふんだ。君は？』

『僕はそんな餘裕はない。この夏は英語を今少し勉強しなくつちやならんから。』

美穗子が此夏休暇を此處に過すといふことが何の理由もなしに淸三の胸に浮んで、妬ましいやうな辛い心地がした。

今夜は父母の家に寢て、翌朝早く歸らうと思つた。現に郁治にもさう言つた。けれど路の角で郁治と別れると、急に此處に居るのがたまらなく厭になつて、足元から鳥の立つやうに母親を驚かして歸途に就いた。明朝郁治が遣つて來て驚くであらうといふ一種復仇の快感と、束縛せられてゐる力から免れ得

美穂子は細い綱をスル／＼と手繰つた。ビイルの罎がやがて手に來る。結へた綱を解いて、それを勝手へ持つて來て、土瓶に移して、コップ三つと、砂糖を入れた硝子器とを盆にのせて、兄の話してゐる座敷へ持つて行く。

『何にも、御馳走はございませんけど、……これは一日井戸につけて置いたんですから、お砂糖でも入れて召上つて……』

麥湯は氷のやうに冷えて居た。郁治も清三も二三杯お代りをして飮んだ。美穂子は兄の傍に坐つて、遠慮なしにいろ／＼な話をした。

『寄宿生活は隨分大變でせう。』

清三はかう訊くと、

『えゝ／＼、隨分賑かですよ。他の女學校などと違つて、監督が難かしいのですけど、それでも矢張……』

『女學校の寄宿舍なんて、それは大變なものさ。話で聞いても隨分愛想が盡きるよ、』と北川は笑つて、

『矢張、男の寄宿とさう大して違ひは無いんだね。』

『まさか兄さん。』

と美穂子は笑つた。

清三は麥稈帽子をいくつか出させて見せて貰つた。十六といふのが丁度かれの頭に合つた。一圓九十錢といふのを六十錢に負けさせて買つた。町の通りに新しい麥稈帽子が際立つて日に輝いた。

十七

美穗子は暑中休暇で歸つて來た。

其家へ行く路には夏草が深く茂つて居た。星川の水は碧く漲つて流れて居る。蘆の綠葉に日影が射した。

家の入口には、肌襦袢や腰卷や浴衣が物干竿に干しつらねてある。郁治は清三と作れ立つて行つた。

美穗子は白絣を着て居た。帶は白茶と鶯茶の腹合せをして居た。顏は少し肥えて、頰のあたりがふつくりと肉附いた。髮は例の庇髮に結つて、白いリボンがよく似合つた。

ビールの空罎に入れられた麥湯が古い井字形の井戸に細い綱で吊して冷されてあつた。井戸側には大きな葉の草がゴチヤ〳〵生えて居る。流しには菖蒲、萱などが一面にしげつて、釣瓶の水をこぼすたびにしぶきがそれにかゝる。二三日前までは老母が夕每に其處に出て、米かし桶の白い水を流すのが常であつたが、娘が歸つて來てからは、其の色白の顏がいつも分明と薄暮の空氣に見えるやうになつた。其頃には奧で父親の謠がいつも聞えた。

午後の日影に剖葦が頻りに鳴いた。

十六

暑いある日の午後、白絣に袴といふ淸三の學校歸りの姿が羽生の庇の長い町に見えた。今日月給が全部下りて、懷の財布は重かつた。今少し前、郵便局に寄つて、荻生君に借りた五十錢を返し、途中で買つて來たくず餠を出して、二人で茶を飮みく樂しさうに食つた。『何うも、これも長々難有う、』と言つて、二月ほど前から借りて居た鳥打帽を取つて返した。

『まだ好いよ、君。』

『でも、今日夏帽子を買ふから。』

『買ふまでかぶつて居給へ、可笑しいよ。』

『なアに、すぐ其處で買ふから。』

『足元を見られて高く賣附けられるよ。』

『なアに大丈夫だ。』

で、日のカンく照り附ける町の通りを淸三は帽子も被らずに歩いた。通りに硝子戸を明放した西洋雜貨店があつて、毛絲や麥稈帽子が並べてある。

ないと思ふ。此間も郁治と論じた。『豪い人は豪くなるが好い。世の中には百姓もあれば、郵便脚夫もある。巡査もあれば下駄の齒入屋もある。豪くならんから生きて居られないといふことはない。人生はわれ〳〵の考へて居るやうなせつぱつまつたものではない。もつと樂に平和に渡つて行かれる者だらうと思ふなら、世の中を見給へ。世の中を……』かう言つて淸三は友の功名心を駁した。けれど其言葉の蔭には丸でこれと正反對の心がかくれて居た。それだけかれは激してゐた。かれは泣きたかつた。

それを今思ひ出した。『自分も世の中の多くの人のやうに、暢氣なことを言つて暮して行くやうになるのか。』と思つて、校長の平凡な赤い顏を見た。

つい麥酒を五六杯呷つた。

靑い田の中を蝙蝠傘をさした人が通る。それは町の裏通りで、其處には路に添つて里川が流れ、川楊がこんもりと茂つて居る。森には蟬の鳴聲が喧しく聞えた。

一時間經つと、三人は皆な倒れて了つた。校長は肱枕をして足を縮めて鼾をかいて居るし、大島さんは仰向けに胸を露はに足を伸してゐるし、淸三は赤い顏をして頭を疊につけてゐた。獨り關さんは退屈さうに、次の廣間へ行つてビラなどを見た。

三時過ぎに、淸三が寺に歸つて來ると、荻生君は風通しの好い本堂の板敷に心地よさゝうに晝寢をして居る。

と言つて、大島さんは波々とついだ自分の麥酒を一呼吸に飲む。

『弱卒は困りますな。』

かう言つて校長は自分のに波々と注いだ。泡が山を爲して溢れ懸るので、狼狽て口をつけて吸つた。娘が其處にブッカキを丼に入れて持つて來た。皆が一つづつ手でつまんで麥酒の中に入れる。酒を飲まぬ關さんも大きいのを一つ取つて、口の中に頬張る。やがて校長の顏も大島さんの顏も見事に赤くなる。

『講習會なんて駄目なものですな。』

校長の氣焔がそろ〳〵出始めた。

大島さんがこれに相槌を打つた。各小學校の評判や年功加俸の話などが出る。郡視學の融通の利かない失策談が一座を笑はせた。けれど清三に取つては、此等の物語は耳にも心にも遠かつた。年齢が違ふからとは言へ、かうした境遇にかうして安んじて居る人々の氣が知れなかつた。かれは將來の希望にのみ生きて居る快活な友達と、これ等の人達との間に横はつて居る大きな溝を考へて見た。

『まご〳〵してゐれば、自分もかうなつて了ふんだ！』

この考へは既に幾度となくかれの頭を惱ました。これを考へると、いつも胸が痛くなる。居ても立つても居られないやうな氣がする。小さい家庭の係累などの爲めにこの若い燃ゆる心を犧牲にするには忍び

は汚いが、靑田が見通しになつてゐるので、四人は其處に陣取つた。

一風呂入つて、汗を流して來る頃には、午飯の支度がもう出來て居た。赤い襷をかけた家の娘が茶湯臺を運んで來た。肴はナマリブシの固い煮附と胡瓜もみと鷄卵にさゝげ汁とであつた。しかし人々に取つては、これで結構な御馳走であつた。校長は洋服の上衣もチツキもネクタイもすつかり取つて、汚れ目の見える肌襦袢一つになつて、さも心地の好ささうな樣子で趺坐をかいて居たが、

『皆な平らに、趺坐をかき給へ。關君、何うです、服で窮屈にして居ては仕方がない。』かう言つて笑つて、『私が一つビールを奢りませう。たまには愉快に話すのも好うござんすから。』

やがてビールが命ぜられる。

『姐さん、氷をブツカキにして持つて來て下さいな。』

娘はかしこまつて下りて行く。校長が關さんのコツプにつがうとすると、かれは手でコツプの蓋をした。

『一杯飲み給へ、一杯位飲んだつて何うもなりやしないから。』

『いゝえ。もう本當に澤山です。酒を飲むと、後が苦しくつて……』

とコツプを脇にやる。

『關君は本當に駄目ですよ。』

大島さんも言つた。

上町の鶴の湯にさういふ催があるのを清三も聞いて知つて居た。夏の間、二階を開放して、一日湯に入つたり晝寢でもしたりして遊んで行かれるやうにしてある。氷も菓子も麥酒も饂飩も賣る。鳥渡した晝飯位は食はせる支度も出來てゐる。浪花節も晝一度夜一度あるといふ。此の二三日梅雨が上つて暑くなつたので非常に客があると聞いた。主僧は昨日出かけて半日遊んで來て、『何うせ、田舍のことだから、碌なことは出來はしないけれど、鳥渡遊びに行くには好い。貞公、うまい金儲を考へたもんだ、』と前の地主に話して居た。

『何うです、林さんに一つ案内して貰はうぢやありませんか。丁度晝時分で、腹も空いてゐる……。』校長はかう言つて同僚を誘つた。皆な贊成した。

上町の鶴の湯は賑かであつた。赤いメリンスの帶を緊めた田舍娘が出たり入つたりした。彼方此方から贈つたビラが一杯に下げてあつて、貞さんへといふ大きな字が其處にも此處にも見えた。氷見世には客が七八人も居て、此家の上さんが襷をかけて、汗をだら〳〵流して、せつせと氷をかいて居る。

先生達は二階に通つた。幸ひにして客はまだ多くなかつた。近在の婆さんづれが一組、溫泉にでも來たつもりで、ゆもじ一つになつて、別の室にごろ〳〵して居た。八疊の廣間には、中央に浪花節を語る高座が出來て居て、其處にも紙や布のビラがヒラ〳〵靡いた。室は風通しが好かつた。奥の四疊半は疊

な老教員だが、銀のやうな白い髯を撫でながら、切口上で、義務とでも思つてゐるやうな質問をした。肥つた教授は顏に微笑を湛へて、一々丁寧に其質問に答へる。十一時近く、それが濟むと、今度は郁治の父親や水谷といふ難かしいので評判な郡視學が、教授法に就いての意見やら、教員の心得に就いての演説やらをした。梅雨は二三日前から上つて、暑い日影はキラ〳〵と校庭に照りつけた。扇の音がバタ〳〵と其處にも此處にも聞える。女教員の白地に菫色の袴が眼に立つて、額には汗が見えた。成願寺の森の中の蕭蕔はもう人の肩を沒するほどに高くなつて、剖葦が時を得顏に喧しく鳴く。

講習會の終つたのはもう十二時に近かつた。詰襟の服を着けた、白縞の袴に透綾の羽織を着たさま〴〵の教員連が、校庭から門の方へぞろ〳〵出て行く。校庭には有志の寄附した標本用の樹木や草花が其名と寄附者の名とを記した札をつけられて疎らに植ゑられてある。柘榴の花が火の燃るやうに赤く咲いて居るのが誰の眼にも着いた。樹には黄楊、椎、檜、花には石竹、朝顏、遊蝶花、萩、女郎花などがあつた。寺の林には蟬が鳴いた。

『湯屋で、一日遊ぶやうな處が出來たつて言ふぢやありませんか、林さん、行つて見ましたか。』

校門を出る時、校長はかう言つた。

『さうですねえ、廣告が彼方此方に張つてありましたねえ、何か浪花節があるつて言ふぢやありませんか。』

はあらじ――態と和文調に書いて、末に『この子もと罪のきづなのわなは知らず迷うて來しを捕はれの鳩』といふ歌を書きなどした。浦和の學校にゐる美穗子の寫眞が机の抽出の奧に藏つてあつた。雪子と今一人きよ子といふ學校友達と三人して撮した手札形で、美穗子は腰かけて花を持つて居た。それを雪子のアルバムから貰はうとした時、雪子は、『それはいけませんよ。變な風に寫つて居るんですもの、』と言つて容易にそれを與れると言はなかつた。雪子は被布を着て、物に驚いたやうな顚狂な顔をして居た。それに引かへて、美穗子は明るい眼と眉とを分明と見せて、愛嬌のある微笑を口元に湛へて居た。清三は讀書に勞れた時など、折々それを出して見る。雪子と美穗子とを比べて見ることもある。此頃では雪子のことを考へることも多くなつた。其時は屹度、『何故あゝしら〳〵しい、取澄した風をして居るんだらう。今少し打解けて見せても好ささうなものだ、』と思ふ。郁治の手紙は小さい文箱に藏つて置いた。

前の土曜日には、久し振で行田に歸つた、小畑が熊谷から遣つて來るといふ便があつたが、運わるく日曜が烈しい吹降なので、郁治と二人樋から雨滴が瀧のやうに落ちる暗い窓の下で暮した。

次の土曜日には、羽生の小學校に朝から講習會があつた。校長と大島と關と清三と四人して出懸けることになる。大きな講堂には、近在の小學校の校長やら訓導やらが大勢集つて、浦和の師範から來た肥つた赤いネクタイの教授が、兒童心理學の初歩の講演をしたり、尋常一年生の實地教授をして見せたりした。教員達は數列に並んで鳴りを靜めて謹聽して居る。志多見といふ所の校長は縣の教育界でも有名

に煎餅蒲團にくるまつて宿直室に寢ることなどもあつた。

其時は屹度二人して手拭を下げて前の錢湯に行く。小川屋から例の娘が辨當を拵へて持つて來る。食事がすむと、親子は友達のやうに睦まじく話した。家の困る話なども出た。ありもせぬ財布から五十錢借りられて行くことなどもある。

七月に入つても雨は續いて降つた。晴間には日が赫と照つて、鼠色の雲の絶間から碧の空が見える。畑には里芋の葉が大きくなり、玉蜀黍の廣葉がガサ〳〵と風に靡いた。熊谷の小島は一高の入學試驗を受けに東京に出懸けたが、時々繪葉書で狀況を報じた。英語が難かしかつたことなどをも知らせて來た。郵便脚夫は毎日雨にぬれて山門から本堂に遣つて來る。若い心にはどのやうなことでも面白い種になるので、彼方此方から端書や手紙が三四通は必ず屆いた。喝！——と一字書いた端書があるかと思ふと、蕎麥屋で酒を飮んだ席上で書いた熊谷の友達の連名の手紙などもある。石川からは、相變らずの明星攻擊、文壇照魔鏡といふ澁谷の詩人夫妻の私行を訐いた册子をわざと送り屆けて寄越した。中にも郁治から來たのが一番多かつた。戀の惱みは片時もかれをして心を靜かならしめることが出來なかつた。郁治は或時は希望に輝き、或時は絶望に悶え、或時は自己の心の影を追つて、かうも思ひあゝも思つた。淸三の心もそれにつれて動搖せざるを得なかつた。自己の失戀の苦痛を包む爲めには、友の戀に對する同情の文句がおのづから誇大的にならざるを得なかつた。——獨り悶ゆるの悲哀は美しきかな、君が思ひに泣かぬこと

清三は一人でよくオルガンを彈いた。型の小さい廉いオルガンで、音もさう大して好くはなかつたが、自から物好きに歌などを作つて、覺束ない音樂の智識で、譜を合せて見たり何かする。藤村詩集にある『海邊の曲』といふ譜のついた歌はよく調子に乘つた。それから若菜集の中の好きな句を選んで譜をつけて彈いても見た。梅雨の降り頻る夕暮の田舍道、小さなしんとした學校の窓から、さうしたさまぐの歌が絶えず聞えたが、しかし耳を傾けて行く旅客もなかつた。

清三の敎へる室の窓からは、羽生から大越に通ふ街道が見えた。雨に濡れた汚い布を四面に垂れた乘合馬車がをりく喇叭を鳴らしてガラくと通る。田舍娘が赤い蹴出を出して、メリンスの帶の後姿を見せて番傘をさして通つて行く。晴れた日には、番臺を頭の上に載せて太皷を叩いて行くあめ屋、夫婦づれで編笠を被つて脚絆をつけて歩いて行くホウカイ節、七色の護謨風船を飛ばして賣つて歩く爺、時には美しく着飾つた近所の豪家の娘なども通つた。縣廳の役人が俥を五六臺並べて通つて行つた時には先生も生徒も皆な授業を餘所にして、其威勢の好いのに見惚れて居た。

清三の父親は、何うかすると、商賣の都合で、此近所まで來ることがある。縞の單衣に古びた透綾の夏羽織を着て、半ば禿げだ頭には帽子も被らず、小使部屋からこつそり入つて來て、「清三は居ましたか」と訊いた。初めは流石にかうした父親を同僚に見られるのを恥かしく思つたが、後には馴れて、それほど厭とも思はなくなつた。近所に用事が殘つて居ると言ふので、清三は寺に歸るのを止めて、親子一緒

一月ほど前から、町の出外れの四辻でよく出逢つた女で、矢張小學校に勤める女教員らしかつた。庇髪に菫色の袴を穿いて海老茶のメリンスの風呂敷包をかゝへて居た。其四辻には庚申塚が立つて居た。此間郁治と一緒に彌勒に行く時にも例の如く其女に逢つた。『何うしてあゝいふ素振をするのか僕には分らんねえ、』と清三が笑ひながら言ふと、『しつかりしなくつちやいかんよ。君、』と郁治は聲を擧げて笑つた。其時、何處に勤めるのだらうといふ評判をしたが、馬車に一緒に乘合せて、發戸にある井泉村の小學校に勤める人だといふことが解つた。色の白い鼻の隆い十九位の女であつた。

雨の盛んに降る時には、學校の宿直室に泊ることもあつた。學校に出てから、もう三月にもなるので、大分教師馴れがして、郡視學に參觀されても赤い顏をするやうな初心なところも除れ、年長の生徒に馬鹿にされるやうなこともなくなつた。行田や熊谷の小學校には、校長と教員との間に隨分烈しい暗鬪があるとかねて聞いて居たが、彌勒のやうな田舍の學校には、さうした難かしいこともなかつた。師範出の杉田といふのが厭に威張るのが癪に觸るが、自分は彼奴等のやうに校長になるのを唯一の目的に一生小學校に勤めてゐる人間とは種類が違ふのだと思ふと、別にヤキモキする必要もなかつた。校長も何方かといへば、氣が小さく神經過敏に過ぎるのが厭だが、しかし概して溫良な君子でゐる氣といふやうな處は少しもなかつた。關さんは例の通りの好人物、大島さんは話し好きの合ひ口——清三に取つてこの小學校は餘り居心の惡い方ではなかつた。

つたり、二里半を歩いて行くのが大儀であつたり、それよりも少しでも勉強しようと思つたりして、常に寺の本堂の一間に土曜日曜を過した。しかしこれと謂つて、勉強らしい勉強をもしなかつた。土曜日には小畑が熊谷から來て泊つて行つた。郁治が三日位續けて泊つて行くこともあつた。それに、荻生君は毎日のやうに遣つて來た。學校から歸つて見ると、彼方此方を明放して、顔の上に團扇を載せて、好い心持をして晝寢をしてゐることもある。かれは郵便局の閑な時をねらつて同僚に跡を賴んで、何ぞと云つては、よく寺に遊びに來た。

若い二人はよく菓子を買つて來て、茶を煎れて飲んだ。くず餅、あんころ、すあまなどが好物で、月給の下りた時には、清三は屹度郵便局に寄つて、荻生君を誘つて、角の菓子屋で餅菓子を買つて來る。三度に一度は、『和尚さん、菓子はいかゞ、』と庫裡に主僧を呼びに來る。清三の財布に金のない時には荻生君が出す。荻生君にもない時には、『和尚さん甚だ濟みませんが、二三日の中におかへししますから、五十錢ほど貸して下さい。』などと言つて清三が借りる。不在に主僧が其室に行つて見ると、竹の皮に食ひ餘しの餅菓子が二つ三つ殘つて、それに一杯に蟻がたかつて居ることなどもあつた。

梅雨の間は二里の泥濘の路が辛かつた。風のある日には吹晒らしの平野のならひ、糸のやうな雨が下から上に降つて、新調の夏羽織も袴もしどろにぬれた。後には大抵時間を計つて行つて、十錢に負けて貰つて乘合馬車に乘つた。ある日、其女も同じ馬車に乘つて發戸河岸の角まで行つた。其女と謂ふのは、

ゐるものは親友の郁治を始めとして、三四人はあるし、小島は高等學校の入學試驗を受けるので此頃は忙しく暮して居ると言つて來るし、北川は士官學校に入る準備の爲めに九月には東京に出ると言つてゐるし、誰とて遊んで居るものはなかつた。淸三はこれに勵まされて、いろ〳〵な書を讀んだ。主僧に賴んで、英語を敎へて貰つたり、其書庫の中から論理學や哲學史などを借りたりした。机の周圍には、文藝倶樂部や明星や太陽があるかと思ふと、學校敎授法や通俗心理學や新地理學や、代數幾何の書などが置かれてある。主僧が早稻田に通ふ頃讀んだといふシエークスピヤのロメオやテニソンのエノックアアデンなども其中に交つて居た。

若いあこがれ心は果てしがなかつた。瞬間每によく變つた。明星をよむと澁谷の詩人の境遇を思ひ、文藝倶樂部をよむと、長い小說を卷頭に載せる大家を思ひ、友人の手紙を見ると、然るべき官立學校に入學の計畫がして見たくなる。時には、主僧にプラトンの『アイデア』を質問してプラトニッククラヴなどといふことを考へて見ることもあつた。『行田文學』にやる新體詩も、その狹い暑苦しい蚊帳の中で、外のランプの光が蒼い影を透してチラ〳〵する机の上で書いた。

學校の校長は、檢定試驗を受けることを常に勸めた。『資格さへあれば、月給もまだ上げることが出來る。何うです、林さん、譯がないから、遣つて置きなさい！』と言つた。

此頃では二週間位行田に歸らずにゐることがある。母が待つて居るだらうとは思ふが、懷が冷かであ

『想像して居たのとは丸で違ふね。』

若い人々には、兼々其名を聞いて想像して居た文學者や雜誌記者がかうした子供らしい眞似をしようとは思ひも懸けなかつた。しかしかうしたことをする心持や生活は、かれ等には充分には解らぬながらも羨しかつた。

東京の客は一夜泊つて、翌日の正午、降り頻る雨を衝いて乘合馬車で久喜に向つて立つた。袴を濡して清三が學校から歸つて來て、火種を貰はうと庫裡に入つて見ると、主僧はさびしさうにぽつねんとひとり机に坐つて書を見て居た。

剖葦は頻りに鳴いた。梅雨の中にも、時々晴れた日があつて、鮮かな碧の空が鼠色の雲の中から見えることもある。美しい光線が漲るやうに裏の林に射し渡ると、綠葉が蘇つたやうに新しい色彩をあたりに見せる。芭蕉の廣葉は風に顫へて、山門の壁の處には蜥蜴が日に光つてちよろ〳〵して居る。前の棟割長屋では、垣から垣へ物干竿をつらねて、汚い襤褸をならべて干した。栗の花は多く地に落ちて、泥に塗れて、汚く人に踏まれて居る。蚊はもう夕暮には軒に音を立てるほど集つて來て、夜は蚊遣火の烟が家々から靡いた。清三は一圓五十錢で、一人寢の綿蚊帳を買つて來て、机を其中に入れて、ランプを臺の上に載せて外に出して、その中で毎夜遲くまで書を讀んだ。自分の周圍には——日毎に寄せられる友達の手紙には、一つとして將來の學問の準備に就いて言つて來ないものはない。高等師範に志して

を讀む眞似をした。

『和尙――お經を讀まなくつちやいかんぢやないか。』

こんなことを言つて尙頻りに木魚を叩いた。

主僧と原とは如來樣の前に立つたり、古い位牌の前に佇ずんだりして、いろ／＼な話をした。歷代の寺僧の大きな位牌の中央に、難かしい顏をした本寺中興の僧の木像が据ゑてあつた。それは恐ろしくむき出すやうな眼をしてゐた。和尙さんは其僧のことに就いて語つた。本堂を再建したことや、その本堂が先代の時に燒けて了つたことや、此人の弟子に越前の永平寺へ行つた人があつたことなどを話した。メリンスの敷物の上に鐘が載せられてあつて、其傍に、頭の禿げた賓頭顱尊者があつた。原は鐘をカンカンと鳴らして見た。

雜誌記者から讀經を强ひられるので、和尙さんは隙を見て庫裡の方へ遁げて行つて了つた。醉つた二人は木魚と鐘とを自暴に叩いて笑つた。ドタ／＼とけたゝましい音をさせて、やがて二人は廊下から庫裡へ行つて了つた。後で、六疊に居る若い友達は笑つた。

『文學者なんて言ふものは存外暢氣な無邪氣なものだねえ。』

淸三はかう言ふと、

いと言ふので、桑の茂つた麥の半ば刈られた裏通りの田圃を行つた。荻生君は熊谷に行つて居なかつた。二人は引かへして野を歩いた。小川には青い藻が浮いて、小さな雜魚がスイ〳〵泳いで居た。

寺に歸ると、座敷ではまだ酒を飲んで居た、騷ぐ聲が嵐のやうに聞える。丈の高い方が和尚さんの手を引張つて、何處へか連れて行かうとする。洋服の原が跡から押す。和尚さんはいつか僧衣を着せられて居る『まア、好いよ、好いよ、君等がそんなに望むなら、お經位讀むさ、その代り君等が木魚を叩かなくつてはいかんぜ！』

和尚さんも少なからず醉つて居た。

『よし、よし、木魚は己が叩く。』

と雜誌記者は言つた。

三人は凭りつ凭られつして、足元危く、長い廊下を本堂へと遣つて來る。庫裡からは上さんと小僧とが顏を出して笑つて其の醉態を見て居る。三人は廊下から本堂に入らうとしたが、階段の處で躓いて、將棊倒しにころ〳〵と折重つて倒れた。笑ふ聲が盛んにした。

雜誌記者は槌を取つて木魚を叩いた。ボク〳〵ボク〳〵、中々其調子が好い。和尚さんも原といふ文學者もそれを見て、『これは旨い、叩いたことがあると見えるな。』と笑つた。雜誌記者は木魚を叩きながら、『それはさうとも、これで寺の小僧を三年したんだから。』かう言つて、トラヤアヤア〳〵〳〵とお經

郁治はかう言つて笑つた。

勝手へ行つて見ると、上さんと小僧とは御馳走の支度に忙しさうにして居た。和尙さんも時々出て來ていろ〳〵指揮をする。米ずしの若い衆は岡持に鯉のあらひを持つて來る。通りの酒屋は貧乏徳利を下げて來る。小僧は竈の下と据風呂の釜とに火を燃し付ける。活氣はめづらしくがらんとした臺所に充ち渡つた。

酒はやがて始まつた。段々話し聲が高くなつて來た、和尙さんもいつもに似ぬ元氣な聲を出して愉快さうに笑つた。

正午近くになると大分醉つたらしく、笑ふ聲が絕えず聞えた。緣側から厠へ行く客の顏は火のやうに赤かつた。やがて和尙さんの拙い詩吟が出たかと思ふと、今度は琵琶歌かとも思はれるやうな一種の朗らかな吟聲が聞えた。

若い友達は作立つて町に出懸けた。懷に金はないが、月末勘定の米ずしに行けば、酒の一二本はいつも飮むことは出來た。其の場末の飮食店の奧の六疊には、衣服やら小兒の襁褓やらが一杯に散らかされてあつたが、それをかみさんが急いで片附けて呉れた。古簞笥や行李などのある傍で狹い猫の額のやうな庭に對して、なまりぶしの堅い煮付でかれ等は酒を飮んだり飯を食つたりした。

歸りに、荻生君を郵便局に訪ねて見るといふことになつたが、こんなに赤い顏で、町の大通りは步けな

帶の仲買の四十男が秤ではかつて、それから莚へと、その白い美しい繭をあけた。相場は日毎に變つた。銅貨や銀貨をぢやら〳〵と音させて、景氣よく金を拂つて遣つた。料理店では三味線の音が晝から聞えた。

ある日曜日であつた。郁治が土曜日の晩から來て泊つてゐた。『行田文學』の初號が出來て持つて來たので、昨夜から文學の話が盛んに出た。處が、丁度十時過、山門の鋪石通にガラ〳〵と俥の音がした。つひぞ今まで俥の入つて來たことなどは無いので、不思議に思つて、清三が本堂の障子を明けて見ると、白い羅紗の脊廣にイタリヤンストロウの夏帽子を被つた肥つた男と白がかつた夏外套を被つた脊の高い男とが庫裡の入口に俥をつけて、今しも下りようとする處であつた。やがて小僧が取次ぐと、和尚さんの姿が其處に出て來た。久濶の友に訪はれた喜悦が、聲やら言葉やら態度やらに顯はれて見えた。

やがて其客は東京から來た知名の文學者で、一人は原杏花、一人は相原健二といふ有名な『太陽』の記者だといふことが解つた。いづれも主僧が東京に居た頃の友達である。

清三の室は中庭の庭樹を隔てゝ、庫裡の座敷に對して居たので、客と主僧との談話して居るさまが明かに見えた。綠の葉の間に白い羅紗の夏服がちら〳〵したり、をり〳〵聲高く快活に笑ふ聲がしたりする。其洋服や笑聲は若い青年に取つては此上もない美望の種であつた。

『原つて言ふ人はあんな肥つた人かねえ。あれであんなやさしいことを書くとは思はなかつた。』

其夜は遲くまで、清三はいろ〳〵なことを考へた。『名譽』『得意の境遇』それをかれは眼の前に仰いで居る。若い心は唯それにのみあこがれて居る。けれど今宵は何だかその希望と野心の上に一つの新しい解決を得たやうに思はれる。かれは綴の切れた藤村の『若菜集』を出して讀み耽つた。

本堂には如來樣が寂然として居た。

十五

裏の林の中に葦の生えた濕地があつて、元池であつた水の名殘が黑く銹びて光つて居る。六月の末には、剖葦が何處からともなく其處へ來て鳴いた。

寺では慰みに蠶を飼つた。庫裡の八疊の一と間は棚や莚で一杯になつて、溫度を計る爲めの寒暖計が柱に懸けられてあつた。上さんが白い手拭を被つて、朝に夕に裏の畑に桑を摘みに行く。雨の降る日には、其晴間を待つて和尙さんも一緒になつて桑摘の手傳ひをして遣る。ぬれた綠の葉は勝手の廣い板の間に山のやうに積まれる。それを小僧が一枚々々拭いて居ると、和尙さんは傍で桑切庖丁で丹念に細く刻む。

蠶の上がりかける頃になると、町は俄に活氣を帶びて來る。平生は火の消えた樣に靜かな裏通りにも、繭買入所などといふヒラ〳〵した紙が張られて、近在から賣りに來る人々が多く集つた。頰鬚の生えた角

くまけて乘せて貰つて行くことなどもあつた。

五六日して土僧は東京から歸つて來た。葬儀の模樣は新聞で見て知つてゐたが、詳しく聞いて、更に鮮かに其さまを前に見るやうな氣がした。文壇の大家小家は悉く雨を衝いて其葬式に跟いて行つたといふ。雨がザァ〳〵降つて、新綠の中に造花生花のさま〴〵の色彩がさながら繪のやうに對照を爲したといふ。殊に、寺の本堂が狹かつたので、中に入れなかつた人々は、蛇の目傘や絹張の蝙蝠傘を雨滴のビショ〳〵落ちる庇にさしかけて立つて居た。讀經は長かつた。それがすむと形のごとき燒香があつて、やがて棺は裏の墓地へと運ばれる。墓地への路には新しい莚が敷きつめられて、其處を白無垢や羽織袴が雨にぬれて往つたり來たりする。小說の某大家は柱に凭つて、悲しさうな顏をして居る。生前最も親しかつた某畫家は羽織を雨に滅茶々々にして、彼方此方と周旋して步いて居る。『君、實際、感に打たれましたよ。苦勞を仕拔いて、漸く得意の境遇になつて、これから多少志も遂げようといふ時に當つて何が來たかと思ふと、死！』かう若い和尙さんは話した。

『名譽を遂つて、都會の塵に塗れたつて、仕方がありませんな……何んなに得意になつたつて、死が一度來れば、人々から一滴の淚をそゝがれるばかりぢやありませんか。死んでからいくら淚をそゝがれたつて仕方がない！』

主僧の眉は昂つて居た。

燈に對して久しく默した。

翌日主僧は早く出懸けた。

清三は大島孤月の病死と葬儀とに就いての記事をそれから毎日々々新聞紙上で見た。かれは其度毎にいろ／＼な思ひに撲たれた。其人の作には感心しては居らぬが、出版者としての勢力が文壇に及ぼす關係などを想像して見たり、自分の崇拜してゐる明星一派の不遇などをそれに比べて考へて見たりした。時には『兎に角不仕合せと言つても死んでかうして新聞に書かれゝば光榮である、』などと考へて、音も香もなく生れて活きて死んで行く普通の多數の人々の上をも思ひ遣つた。其の間に雨が降つたり風が吹いたりした。雨の降る日には本堂の四面の新綠が殊に鮮かに見えて、庫裡の高い屋根にかけたトタンの樋からビショ／＼雨滴の落ちるのを見た。風の吹く日には、裏の林がざは／＼鳴つて、何だか海近くにでも住んで居るやうに思はれた。辨當は朝に晩に、馬車繼立所の傍の米ずしといふ小さな飲食店から赤いメリンスの帶を締めた十三四の娘が運んで來た。行田の家からもやがて夜具や机や本箱などをとゞけてよこした。

かれは寺から町の大通りへ眞直ぐに出て、うどんひもかわと障子に書いた汚い飲食店の角を裏通りに入つて、細い煙筒に白い薄い煙のあがる碓氷社分工場の養蠶所や、怪しげな軒燈の出て居る料理屋の前などを通つて、それから用水の橋の袂へといつも出る。時には大越に通ふ馬車が折よく其處に居て、廉

を利用したり、朋黨を作つて人を陷れたり、一歩でも人の先に出よう出ようとのみ齷齪して居る。實に淺ましく感じたですよ。世の中は好いが好いぢやない、惡いが惡いぢやない、幸福が幸福ぢやない。何んな人でも矢張人間は人間で、それ相應の安慰と幸福とはある。それに價値もある。何も名譽を遂つて一生を齷齪暮すにも當らない。それよりも、人間としての理想のライフを送る方が何れほど人間として豪いか知れない、何んなに零落して死んでもその方が意味がありますからなア。』

『本當にさうですとも。』

清三は主僧の言葉に引込まれるやうな氣がした。

『不仕合せな人だつた！』

と主僧は思はず感激して獨言のやうに言つた。得意なる地位を知つてるだけそれだけ、その背景が悲しかつた。平生戲談ばかり言ふ男で、輕い皮肉を常に人に浴せ懸けた。まだ三十四五であつたが、世の中の辛酸を嘗めつくして、其圭角がなくなつて、心持は四十近い人のやうであつた。養子としての淋しい心の煩悶をも思ひ遣つた。『何の彼のと言つて、誰も皆な死んで了ふんですな……それを考へると、本當に詰らない。』主僧は深く動かされたやうな調子で言つた。

こんなことで其夜は一室の空氣が何となく低い悲哀で包まれた。やがて主僧は庫裡へ引上げたが、清三と荻生君との話も理に落ちて了つて、いつものやうに快活に語ることが出來なかつた。二人は暗い洋

まだ東京に居る頃は、殊にこの人の世話になつて、原稿を買つて貰つたり其家に置いて貰つたりした。

『もう今日は行かれませんな。』

『さう、馬車はありませんしな、俥ぢや大變ですし……それに汽車に乘つても、彼方へ着いてから困るでせう。』

主僧は考へて、

『明日にしませうかな。』

『明日で好いなら――明日朝の馬車で久喜まで行つて、奥羽線の一番に乘る方が好いですな。』

『行田から吹上の方が便利ぢやないでせうか。』

『いや、久喜の方が便利です。』

と荻生君は言つた。

主僧はそれと心を定めたらしく、やがて、『人間といふものはいつ死ぬか解りませんな、』と慨嘆して、

『鳥渡病氣で病院にはひつてるといふことは聞きましたけれど、死ぬほどとは夢にも思はなかつたですよ。先生など幸福ではあるし、得意でもあるし、これから益々自分の懐抱を實行して行かれる身なんですから。』かう言つて、自分の田舍寺に隱れた心の動機を考へて、主僧は黯然とした。

『世の中は蝸牛角上の爭鬪――私は東京に居る頃には、つく〴〵それが厭になつたですよ。人の弱點

馳走ですな、』と言ひながら、一箇、二箇、三箇まで摘んで、むしや／＼と食つた。辨當腹で、長い路を歩いて來たので、少なからず飢を覺えてゐたのである。

其日の晩餐は寺で調理して吳れた。里芋と筍の煮付、汁には、長けたウドが入れられてあつた。主僧は自分の分も此處に持つて來させて、ビイルを二本奢つて、三人して團欒して食つた。文學の話、人生問題の話、近所の話、小學校の話、主僧のお得意の禪の話も出た。庭に近く柱に凭つた主僧の顏が白く夕暮の空氣に見えた。

長い廊下に小僧が急ぎ足で此方に遣つて來るのが見えたが、やがて入つて來て、一通の電報を主僧に渡した。

急いで封を切つて讀み終つた主僧の顏色は變つた。

『大島孤月が死んだ！』

『孤月さんが――』

二人も驚愕の目を睜つた。

大島孤月と謂へば、文學好の人は大抵は知つて居た。某書肆の女婿で、創作家としてよりも書肆の支配人としての勢力の大きな人であつた。昨年の秋泰西漫遊に出かけて、一月ほど前に歸朝した。送別會と歡迎會、其記事はいつも新聞紙上を賑はした。雜誌にもいろ／＼なことが書いてあつた。此處の主僧か

なものは何でも御遣ひなさい。かう言つて、主僧は机、火鉢、座蒲團、茶器などを貸して呉れた。

本堂の右と左に六疊の間があつた。右の室は日が當つて冬は好いが、夏は暑くつて仕方がない。で、左の間を借りることにする。和尙さんは障子の合ふのを彼方此方から外して來てはめて呉れる。上さんはバケツを郞下に持出して疊を拭いて呉れる。机を眞中に据ゑて、持つて來た木箱を傍に置いて、角火鉢に茶器を揃へると、それで立派な心地の好い書齋が出來た。荻生君は丁度郵便局が閑なので、同僚に跡を賴んで遣つて來て、庭に生えた草などを拵つた。淸三が學校から退けて歸つて來た時には、もうあたりは綺麗になつて、主僧と荻生君とは茶器を中央に、さも室の明るくなつたのを樂しむといふ風に笑つて話をして居た。

『これは綺麗になりましたな、宛で別の室のやうになりましたな。』

かう言つて、淸三は莞爾した。

『荻生さんが草を取つて呉れたんですよ。』

主僧が笑ひながら言ふと、

『荻生君が？　それは氣の毒でしたねえ。』

『いや、草を取つて、庭を綺麗にするといふことは趣味があるものですよ、』と荻生君は言つた。

其處に餠菓子が竹の皮に入つたまゝ出してあつた。これも荻生君のお土産である。淸三は、『これは御

小畑が訊いた。
『浦和に居るよ。』
『それは知つてるさ。何うしたつて言ふのはさういふ意味ぢやないんだ。』
『うむ、さうか――』と清三は點頭いて『まだ、もとの通りさ。』
『加藤も臆病者だからなア。』
と小畑も笑つた。
一本の酒で、三人の顔は赤くなつた。勘定は蟇口から銀貨と銅貨をぢやらつかせながら小畑がした。可愛い娘の子が釣錢と蕎麥湯と楊子とを持つて來た。
其日の午後四時過には、清三は行田と羽生の間の田舍道を彌勒へと歩いて居た。野は日に輝いて、向うの村の若葉は美しく鮮かに光つた。けれど心は寂しく暗かつた。かれは希望に充されて通つた熊谷街道と、さびしい心を抱いて歸つて行く彌勒街道とを比べて見た。若い元氣の好い友達が羨しかつた。

十四

六月一日、今日成願寺に移る。かう日記にかれは書いた。荻生君が主僧といろ〳〵打合をして呉れたので、話は容易に纏つた。無人で食事の世話まではして上げることは出來ないが、家にあるもので入用

傍から櫻井が笑ひながら言つた。

清三も笑つた。

『Yは何うしたねえ。』

清三は續いて聞いた。

『相變らず御熱心さ。』

『もうエンゲイジが出來たのか。』

『當人同士は出來てるんだらうけれど、家では兩方共難かしいといふ話だ。』

『面白いことになつたものだねえ、』と清三は考へて、『Yは一體Vのラヴァだつたんだらう。それがさういふ風になるとは實際運命といふものは解らんねえ。』

『Vは何うしたえ、』と櫻井が小畑に訊く。

『先生、足利へ行つた。』

『會社にでも出たのか。』

『何でも機業會社とか何とかいふ處に出るやうになつたんださうだ。』

三人はお替りの天ぷら蕎麥を命じた。

『Art の君は何うした？』

つた。二階造の大きな建物で、木馬と金棒と鞦韆とがあつた。運動場には小倉の詰襟の洋服を着た寄宿舍にゐる生徒が處々にちらほら歩いて居るばかり、どの教室もしんとして居た。湯呑所には例の難かしい顏をした、かれ等が『般若』といふ綽名を奉つた小使が居た。舍監のネイ將軍も居た。宿直番に當つた數學の教師も居た。二階の階段、長い廊下、教室の黑板、硝子窓から梢だけ見える梧桐、一つとして追懷の伴はないものはなかつた。かれ等は其時分のことを語りながら彼方此方と歩いた。

宿直室で一時間ほど話した。同級生のことを聞かれるまゝ其知れる限りを三人は話した。東京に出たものが十人、國に殘つて居るものが十五人、小學校教師になつたものが八人、他の五人は不明であつた。三人は講堂に行つてオルガンを鳴らしたり、運動場に出てボウルを投げて見たりした。

別れる前に、三人は町の蕎麥屋に入つた。いつもよく行く青柳庵といふ家である。奧の一間は瀟洒した小庭に向つて、楓の若葉は人の顏を青く見せた。ざるに生玉子、銚子を一本つけさせて、三人はさも樂しさうに飲食した。

『此間、小瀧に逢つたぜ!』小畑は淸三の顏を見て、『先生、此頃中々流行るんださうだ。土地の者では一番賣れるんだらうよ。湯屋の路地を通ると、今、座敷に出る處か何かで、にこ〳〵して遣つて來たつけ。』

『林さんは! つて聞かなかつたか?』

『仙骨は先生に熱中してゐるが、實に可笑しくつて話にならん』

『先生、此頃、鬚など生して、ステッキなどついて歩いてゐるナ』

『杉はすつかり色男になつたねえ、君』

傍で聞いては鳥渡解らぬやうな話の仕方で、それでぐん／＼話は解つて行く。

熊谷の町が行田、羽生に比べて賑かでもあり、商業も盛んであると同じやうに、此處には同窓の友で小學校の教師などになるものは稀であつた。角帶を緊めて、老舗の若旦那になつて了ふものゝ他は、多くは他の高等學校の入學試驗の準備に忙しかつた。活氣は若い人々の上に充ちて居た。これに引くらべて、淸三は自分の意氣地のないのを常に感じた。熊谷から行田、行田から羽生、羽生から彌勒と段々活氣がなくなつて行くやうな氣がして、歸りはいつもさびしい思に包まれながらその長い街道を歩いた。

それに人の種類も顏色も語り合ふ話も皆違つた。同じ金儲の話にしても、彌勒あたりでは田舍者の吝嗇臭いことを言つて居る。小學校の校長さんと言へば、餘程立身したやうに思つて居る。また校長自からも鼻を高くしてその地位に滿足して居る。淸三は熊谷で逢ふ友達と行田で語る人々と彌勒で顏を合せる同僚とを比べて見ぬ譯には行かなかつた。かれは今の境遇を考へて、理想が現實に觸れて次第に崩れて行く一種のさびしさと佗しさとを痛切に感じた。

ある日曜日の午前に、かれは小畑と櫻井と伴れ立つて、中學校に行つて見た。中學校は町の外れにあ

の息子達に同窓の友がいくらもあつた。そしてそれが大抵は小學校からの馴染なので、行田の友達の群よりも一層したしい處がある。小畑の家は停車場の敷地に隣つて居て、其處からは有名な熊谷堤の花が見える。櫻井の家は蓮正寺の近所で、お詣の鰐口の音が終日聞える。淸三は熊谷に行くと、屹度この二人を訪問した。どちらの家の人々とも懇意になつて、我儘も言へば氣の置けない言葉も遣ふ。食事時分には默つてゐても膳を出して呉れるし、夜遲くなれば友達と一緒に一つ蒲團にくるまつて寢た。

『何うした、いやに悄氣てるぢやないか。』

『何うかしたか。』

『まだ老い込むには早いぜ！』

『少しは何か調べたか。』

『何だか顏色が惡いぜ！』

熊谷に來ると、かうした活氣ある言葉を彼方此方から浴せかけられる。生々した友達の顏色には中學時代の面影がまだ殘つてゐて、硝子窓の下や運動場や湯呑場などで話し合つた符牒や言葉が絕えず出る。又次のやうな話もした。

『Lは何うした。』

『まだ居る？　さうかまだ居るか。』

くと、其跡で母親と清三とは、近所に知れぬやうに二人限りで荷造をした。長い行田街道には冬の月が照つた。二臺の車の影と親子四人の影とが淋しく黒く地上に印した。これが一家の零落した縮圖かと思ふと、清三は堪らなく悲しかつた。其夜行田の新居に辿り着いたのは、もう彼是十二時に近かつた。燈光も無い暗い大和障子の前に立つた時には、涙がホロ〳〵とかれの頰に傳つて流れた。

けれど如何やうにしても暮して行かるゝ世の中である。それからもう四年は經過した。其狹い行田の家も、住馴れてはさしていぶせくも思はなかつた。かれはをり〳〵行田の今の家と熊谷の家と足利の家とを思つて見ることがある。

熊谷の家は今もある。老いた夫婦者が住つて居る。よく行つた松の湯は新しく普請をして見違へるやうに立派になつた。通りの荒物屋には矢張愛嬌者のかみさんが坐つて客に接して居る。種物屋の娘は庇髪などに結つてツンと澄まして歩いて行く。藥種屋の隱居は相變らず禿頭を振り立てゝ倅や小僧を叱つて居る。郵便局の爲替受口には、黑繻子とメリンスの腹合せの帶をしめた女が爲替の下渡を待かねてたゝきを下駄でコツ〳〵言はせてゐる。其傍にお馴染の白犬が頭を地につけて眼を閉ぢて眠つてゐる。郵便集配人がヅックの行囊をかついで入つて來る。

小畑は郡役所に勤めて居る官吏の息子、小島は町で有名な大きな吳服店の息子、櫻井は行田の藩士で明治の初年に此地に地所を買つて移つて來た金持の息子、其他造酒屋、米屋、紙屋、裁判所の判事など

樣は同級生の中で、誰が一番好きだ、」といふ問題がゆくりなく出た。小學校時分の同級生が大分其周圍に集つて居た。と小たきは少しも躊躇の色を示さずに、『それァ誰だつてさうですわねえ、……無論林さん！』と言つた。小たきも醉つて居た。喝采の聲が嵐のやうに起つた。それからは、小畑や櫻井や小島などに逢ふと、小瀧の話がよく出る。終には、『小瀧君何うした。健在かね。』などと書いた端書を送つて寄越した『小瀧』といふ渾名をつけられて了つたのである。淸三もまた面白半分に小瀧を『しら瀧』に改めて、其れを別號にして、日記の上表紙に書いたり手紙に署したりした『歌妓しら瀧の歌』といふ五七調四行五節の新體詩を作つて、わざと小畑の處に書いて遣つたりした。

　時には淸三も眞面目に藝者といふものを考へて見ることもある。其時には屹度自分と小瀧とを引つけて考へて見る。ロマンチックな一幕などを描いて見ることもあつた。時にはまた節操も肉體も自から護ることの出來ない藝者の薄命な生活を想像して同情の涙を流すことなどもあつた。淸三には藝者などのことはまだ解らなかつた。

　かれはまた熊谷から行田に移轉した時のことを明かに記憶して居る。父親が餘所から歸つて來て、突然今夜引越をするといふ。明日になすつたら好いではありませんかと母親が言つたが、しかし晝間公然と移轉して行かれぬ譯があつた。熊谷に於ける八年の生活は、尠なからざる借金をかれの家に殘したばかりであつた。父親は財布の錢――わづかに荷車二三臺を賴む錢をちやら〳〵と音させながら出て行

に人に頼まれる日傭取などが住んで居た。山形あたりに生れて其處此處と流れ渡つて來ても故鄕の言葉が失せないといふ元氣なお婆さんもあつた。八歳から十七歳まで――小學校から中學の二年まで、かれは六疊、八疊、三疊のその小さい家に住んで居た。小學校は町の裏通りにあつた。明神の華表から右に入つて、溝板を踏鳴らす細い巷路を通つて駄菓子屋の角を左に、それから少し行くと、向うに大きな二階造の建物と鞦韆や木馬のある運動場が見えた。生徒の騷ぐ音がガヤ／＼と聞えた。

校長の肥つた顏、校長次席の難かしい顏、體操の先生の莞爾した顏などが今もあり／＼と眼に見える。卒業式に晴衣を着飾つて來る女生徒の群の中にもかれの好きな少女が三四人あつた。紫の矢絣の衣服に海老茶の袴を穿いて來る子が中でも一番眼に殘つて居る。其子は町外れの家から來た。農學校の校長の娘だといふことを聞いたことがある。淸三が中學の一年に居る時一家は長野の方に移轉して行つて了つたので、其明かな眸を町の何處にも見出すことが出來なくなつたが、それでも今も時々思ひ出すことがある。一人は藝者屋の娘で、今は小瀧と言つて、一昨年一本になつて、町でも流行妓の中に數へられてゐる。通りで盛裝した座敷姿に邂逅すことなどがあると、『失禮よ。林さん、』などと鮮かに笑つて挨拶して通つて行く。中學卒業の祝の宴會にも遣つて來て、好い聲で歌をうたつたり、三絃を引いたりした。小畑が傍に坐つて、『小瀧は僕等の藝者だ。ナァ小瀧、』などと言つて、醉つた顏を其前に押附けるやうにすると、『厭よ、小畑さん、貴郎は昔から私を酷めるのねえ、覺えて居てよ、』と打つ眞似をした。其時、『貴

路を歩いて來て、此處で汗になつた詰襟の小倉の夏服を脫いで、瓜を食つた時の旨かつたことを淸三は覺えて居る。其店の婆さんに娘が一人あつて東京の赤坂に奉公に出てゐることも知つて居る。

關東平野を環のやうに繞つた山々の眺め——其眺めの美しいのも、忘れられぬ印象の一つであつた。秋の末、木の葉が何處からともなく街道を轉つて通る頃から、春の霞の薄く被衣のやうにかゝる二三月の頃までの山々の美しさは特別であつた。雪に光る日光の連山、羊の毛のやうに白く靡く淺間ヶ嶽の烟、赤城は近く、榛名は遠く、足利附近の連山の複雜した襞には夕日が絵のやうに美しく光線を漲らした。行田から熊谷に通ふ中學生の群はこの間を笑つたり戲れたり走つたりして歸つて來た。

熊谷の町はやがて其瓦屋根や煙筒や白壁造の家などを廣い野の末に顯はして來る。熊谷は行田とは比較にならぬほど賑かな町であつた。家並も整つて居るし、富豪も多いし、人口は一萬以上もあり、中學校、農學校、裁判所、稅務管理局なども置かれた。汽車が停車場に着く每に、行田地方と妻沼地方に行く乘合馬車が各自に客を待受けて、町の廣い大通りに喇叭の音をけたゝましく漲らせてガラ〱と通つて行つた。夜は商家に電氣が點いて、小間物屋、洋物店、吳服屋の店も晴々しく、料理屋からは陽氣な三味線の音が賑かに聞えた。

町は淸三に取つて第二の故鄕である。八歲の時に足利を出て、通りの郵便局の前の小路の奧に一家は其の落魄の身を落附けた。其小路は渠に取つていろ〱な追憶がある。其處には郵便局の小使や走り使

に互に手紙の往復をして、戲談を言つたり議論をしたりした。月に一二度は淸三は屹度出懸けた。

行田町から熊谷町まで二里半、其路は綺麗な豐富な水で滿された用水の緣に沿つて駛つた。一田圃毎に村があり、一村毎に田圃が開けるといふ風で、夏の日には家の前の廣場で麥を打つて居る百姓家や、南瓜の見事に熟して居る畑や、豪農の白壁の土藏などが續いた。秋の晴れた日には、田圃から村に稻を滿載した車が輾つて、黃ろく熟した田には、頰被りをした田舍娘が、鎌の手を止めて街道を通つて行く旅人の群を眺めた。其街道にはいろ〳〵なものが通る。熊谷行田間の乘合馬車、靑縞屋の機廻りの荷車、其頃流行つた豪家の旦那の自轉車、それに俥にはさま〴〵の人が乘つて通つた。よぼ〳〵の老いた車夫が町へ買物に行つた田舍の婆さんを二人乘に乘せて重さうに挽いて行くのもあれば、黑鴨仕立の立派な俥に町の醫者らしい髯の紳士が威勢よく乘つて駛らせて行くのもある。田植時分には、雨が蕭々と降つてこねかへした。田の泥濘の中に低頭いた饅頭笠がいくつとなく並んで見える。好い聲でうたふ田植唄も聞える。植ゑ終つた田の緣は美しかつた。田の畔、街道の兩側の草の上には、をり〳〵植ゑ殘つた苗の束などが捨てゝあつた。五月雨晴には白い繭が村の人家の軒下や屋根の上などに干してあるのを常に見懸けた。

用水の傍に一軒涼しさうな休茶屋があつた。榆の大きな木が宛で冠さるやうに繁つて、店には土地で出來る甜瓜が手桶の水の中に浸けられてある。平たい半切に心太も入れられてあつた。暑い木蔭のない

灯が其處にも此處にも見える。

公園から町に入つた。もう其頃は二人は默つて居なかつた。郁治は低い聲で、得意の詩吟を始めた。心の感激の餘波がそれにも殘つて聞かれる。別れる道の角に來ても、かれ等は何だか此まゝ別れるのが物足らなかつた。『僕の家に寄つて茶でも飲んで行かんか。』淸三がかう誘ふと、郁治は跟いて來た。

淸三の母親は裁物板に向つてまだせつ〳〵と賃仕事をして居た。茶を煎れて貰つてまた一時間位話した。語つても語つても盡きないのは若い人々の思ひであつた。十二時が鳴つて、郁治が思ひ切つて歸つて行くのを淸三はまた湯屋の角まで送る。町の大通りはもうしんとして居た。

翌日は母も淸三も寢過して了つた。時計は七時を過ぎて居た。淸三は慌てゝ茶漬を搔込んで出懸けた。いくら急いでも四里の長い路、彌勒に着いた頃はもう十時を餘程過ぎた。學校の硝子窓には朝日が既に長けて、校長の修身を敎ふる聲が高く明かに四邊に聞える。急いで行つて見ると、受持の級では生徒がガヤ〳〵と騷いで居た。

十三

熊谷町にもかれの同窓の友はかなりにある。小畑といふのと、櫻井といふのと、小島といふのと。――殊に小畑とはかれも郁治も人並すぐれて交情が好かつた。卒業して逢はれなくなつてからは毎日のやう

じてある譯ではない。戀された人の知らぬ前に戀した人の心を自分は其人から打明けられた。それだけかれは苦しかつた。またそれだけかれは其問題に突き詰めて居なかつた。時には『まだ決つたと言ふ譯ではない、打突つて見て、何うなることか解らない。……希望がすつかり破れて了つたといふ譯でもない……』などと思ふこともある。友の爲めに犧牲になるといふ氣は無論ある。友の戀の成らんことを望む念もある。かれの性質から言つても、家庭の事情から言つても、現在の戀の情態から言つても、烈しく熱するにはまだ大分距離もあり餘裕もあつた。

しかし其夜は二人とも不思議に胸が躍つて居た。默つて歩いて居ても、其心はいろ〳〵なことを語つて居た。野に出ようとすると、昨日の雨に路の惡るくなつてゐるところがあつた。低い駒下駄はズブズブ入つた。

『惡い路だね。』

二人は互にかう言ひ合つた。しかし心では二人とも美穗子のことを考へて居た。

郁治にしては、女に對する煩悶、それを殘す處なく此の友に語り度いと思つた。打明けて話したならいくらか此胸が靜まるだらうとも思つた。しかし何故かそれを打明けて語る氣にはならなかつた。

二人は矢張默つて歩いた。

城址の森が黑く見える。沼がところ〴〵闇の夜の星に光つた。蘆や蒲がガサ〳〵と夜風に動く。町の

學試驗の話を二人にして聞かせた。『何うも試驗に餘裕がなくつて困つた。英語の書取など一度しか讀んで呉れないんだから困るよ。それに試驗の場所が大きく廣すぎて、聲が散つてよく聞取れないんだから、ドマ〳〵して了つたよ。おまけに代數が馬鹿に難かしかつた。』

代數の二次方程式の問題を渠は手帳に書き附けて來た。それを机の抽斗やら押入の中やら文庫の中やら彼方此方とさがし廻して、漸く搜し出して二人に見せる。成程問題はむつかしかつた。數學に長じた郁治にも出來なかつた。

北川は漢學には長じて居た。父親は藩でも屈指の漢學者で、漢詩などをよく作つた。今は町の役場に出るやうになつたので止したが、三年前までは、町や屋敷の子弟に四書五經の素讀を教へたものである。午後三時頃から日沒前までの間、蜂の唸るやうな聲は常にこの家の垣から洩れた。其頃美穗子は赤いメリンスの帶を緊めて、髮をお下げに結つて、門の前で近所の友達と遊んだ。淸三は其時分から美穗子の眼の美しいのを知つて居た。

郁治と淸三が暇を告げたのは、夜の九時過であつた。若い人々は話が無いと言つても話がある。二人は其處を出てしばしの間默つて歩いた。竹藪のガサ〳〵する陰の道は暗かつた。郁治の胸にも淸三の胸にも此際浦和の學校に居る美穗子のことが浮んだ。『あの時――郁治がそれと打明けた時、何故自分もうヴして居るといふことを思切つて言はなかつたらう』と淸三は思つた。けれど友の戀はまだ美穗子に通

『え、もう……お轉婆ばかりして居るさうでな、』と母親は笑つた。

すぐ言葉を續いで、今度は郁治に、

『雪さん何うして御座るな。』

『相變らずぶら〳〵して居ます。』

『ちと、遊びにおつかはし、貞も退屈して居りますで……』

それこれする中に、北川は湯から歸つて來た。脊の高い顴骨の出た男で、手織の綿衣に絣の羽織を着て居た。話の最中にけたゝましく聲を立てゝ笑ふ癖がある。石川や清三などとは違つて、文學に對しては餘り興味を持つて居ない。學校に居た頃は、有名な運動家で、ベースボウルなどに懸けては級の中でかれに匹敵するものはなかつた。軍人志願で、卒業するとすぐ熱心に勉強して、この四月の士官學校の試驗に應じて見たが、數學と英語とで失敗した。けれども餘り失望もして居らなかつた。九月の學期には、東京に出て、然るべき學校に入つて、充分な準備をすると言つて居る。

三人は胸襟を開いて語り合つた。けれど此處で語る話と清三と郁治と話す話とは、大に異つて居た。同じ親しさでも單に學友としての親しさであつた。打解けて語ると言つても、心の底を互に披瀝するやうなことはなかつた。

此處では、學校の話と將來の希望と受驗の準備の話などが多く出た。北川は東京で受けた士官學校入

一座の眼を鮮かにした。歸りはいつも十一時を過ぎて居た。さびしい士族屋敷の竹藪の陰の道を若い男と女とは笑ひさゞめいて歸つた。

北川は湯に行つて不在であつた。『まア、よく入らしやいましたな……今、もうぢき歸つて參りますから……』母親はかう言つて、莞爾して二人を迎へた。郁治は其笑顔に美穗子の笑顔を思ひ出した。聲もよく似てゐる。

二人は庭に面した北川の書齋に通された。父親は何處に行つたか姿は見えなかつた。

母親は暫し二人の相手をした。

『林さんは彌勒の方にお出になりましたつてな、まア結構でしたな……母さん、さぞおよろこびでしたらうな。』

こんなことを言つた。

浦和に居る美穗子の噂も出た。

『女がそんなことをしたつて仕方がないつて父親は言ひますけどもな……當人が中々言ふことを聞きませんでな……何うせ女のすることだから、碌なことは出來んのは知れてるですけど……』

『でもお變りはないんでせう。』

清三はかう訊くと、

れでも白壁の土藏と棟の高い家屋とは解つた。門から中を見るとゝ立派な玄關があつて、小屋の傍に鷄が餌をひろつて居る。

二人は其垣に添つて歩いた。

垣が盡きると、水の充ちた幅の狹い川が氣持よく流れてゐる。岸には楊が其葉を水面に浸して漣をつくつて居る。細い板橋が川の折曲つた處に架つて居る。

美穗子の家は其處から近かつた。

『行つて見ようか、北川は今日は居るだらう。』

清三はかう言つて友を誘つた。

其家は大きな田舍道を隔てゝ廣い野に向つて居た。古びた門があつた。矢張庇の低い藁葺の家で、土臺がいくらか曲つて居る。庭には松だの、檜だの、椿だのが茂つて居た。今年の一月から三月にかけて、若い人々はよく此家に歌留多牌を取りに來たものである。美穗子の姉の伊與子、妹の貞子、それに國府といふ人の妹に友子と言つて美しい人が居た。それ等の少女連と、郁治や清三や石川や澤田や美穗子の兄の北川などの若い人々が八疊の一間に一杯になつて、竹倚臺の五分心の洋燈の光の下に頭を並べて、夢中になつて歌留多牌を取ると、傍には半白の、品の好い桑名訛のある美穗子の母親が、眼鏡をかけて、高く徹つた聲で若い人々の爲めに倦きずに歌留多牌を讀んで呉れた。茶の時には蜜柑と五目飯の赤璽とが

に細くなつた沼に畫のやうに明かに照り渡つた。新に芽を出した蘆荻や茅や蒲や、それに錆びた水が一杯に滿ちて、或處は暗く或處は明るかつた。沼に架つた板橋を渡ると、細い田圃路がうね〳〵と野に通じて、車を曳いて來る百姓の顔は夕日に赤く彩られて見えた。

麥畑と桑畑、其間を縫ふやうにして二人は歩いた。話は話と續いて容易に盡きようともしなかつた。路はいつか士族屋敷のあたりに出た。

家はところ〳〵にあつた。今日まで踏留つて居る士族は少なかつた。昔は家から家へと續いたものであるが、今は晨の星のやうに畠と畠の間に一軒二軒と殘つて居る。昔風の黒いシタミや白い壁や大きい栗の木や柿の木や井字形の井戸側や疎らな生垣からは古い緣側に低い庇、文人畫を張つた襖なども明かに見透された。夏の日など其處を通ると、垣に目の覺めるやうな紅い薔薇が咲いて居ることもあれば、新しい青簾が緣側にかけてあつて、風鈴が涼しげに鳴つて居ることもある。秋の霧の深い朝には、桔槹のギイと鳴る音がして、蕩子の黄ろいのが垣から口を開いて居る。琴の音などもをり〳〵聞えた。

この士族屋敷には矢張もとの士族が世に後れて住んで居た。役場に出て居るものもあれば、小學校の先生をしてゐるものもある。財産があつて無爲に月日を送つてゐるものもあれば、小規模に養蠶などをやつて暮して居るものもある。金貸などをしてゐるものもあつた。

士族屋敷の中での金持の家が一軒路の畔にあつた。珊瑚樹の垣は茂つて、分明と中は見えないが、そ

その醫師の診斷書を信じなかつた。淸三は時々其幼ない弟のことを思ひ起すことがある。死んだ時の悲哀――それよりも、今生きて居て吳れたなら、話相手になつて、何んなにかうれしからうと思ふ。

其度每にかれは花を携へて墓參をした。

日曜日の朝、かれは樒と山吹とを持つて出懸けた。庫裡で、手桶を借りて、水を汲んで、手づから下げて裏へ廻つた。墓石はまだ建てゝなく、風雨に曝されて黑くなつた墓標が土饅頭の上にさびしく立つて居る。父母も久しくお參りをせぬと見えて、花立は割れて居た。水を入れても甲斐がなかつた。

淸三の姿は久しく其前に立つて居た。もう五月の新綠があたりを鮮かにして、老鶯の聲が竹藪の中に聞えた。

午後からは、印刷所に行つたり石川を訪問したりした。今日、彌勒に歸らぬと、明日は少くも朝の四時に家を出なければ授業時間に間に合はぬと知つては居るが、何うも歸るのが厭で――親しい友人と物語る樂みを捨てゝ、碌々話す人もない處へ歸つて行くのが厭で、われ知らず時間を過して了つた。

夕飯を食つてから、湯に出かけたが、歸りに再び郁治を訪ねて、明かな夕暮の野を散步した。

城址は鳥渡見てはそれと思へぬ位昔の形を失つて居た。牛乳屋の小さい牧場には牛が五六頭モウ〳〵と聲を立てゝ啼いて居て、それに接した靑縞機業會社の細長い建物からは、機を織る音に交つて女工の唄ふ聲がはつきり聞える。夕日は昔大手の門のあつたといふあたりから年々田に埋立てられて、里川のやう

は他からは想像が出來ない位で御座います。此の春、御一緒に樂しく遊んだことなどをなり〳〵考へることが御座いますよ。御無沙汰のお詫までに……美穗子

清三は其端書を疊の上に置いて、

『今度は貴孃も浦和にいらつしやるんでせう？』

『私など駄目。』

と雪子は笑つた。其笑顏を清三は歸路の闇の中に思ひ出した。相對して居たのは僅かの間であつた。其横顏を洋燈が照した。常に似ず美しいと思つた。ツンと澄したやうな處があるのをいつも不愉快に思つて居たが、今宵はそれが却つて品があるかのやうに見えた。美穗子の顏が續いて眼前を通る。雪子の顏と美穗子の顏が重つて一つになる……田の畔に蛙の聲がして、町の病院の二階の灯が窓から洩れた。

*　　*　　*　　*

町の裏に小さな寺があつた。門を入ると、庫裡の藁葺屋根と風雨に曝された黑い窓障子が見えた。本堂の如來樣は黑く光つて、木魚が赤いメリンスの敷物の上に載せてある。其裏にある墓地には、竹藪が隣の地面を仕切つて、墓石にはなめくじの這つた痕があり〳〵と殘つて居た。其多い墓石の中に清三の弟の墓があつた。弟は一昨年の春十五歳で死んだ。其病は長かつた。次第に痩せ衰へて顏は日に〳〵蒼白くなつた。醫師は診斷書に肺結核と書いたが、父母はそんな病氣が家の血統にある譯がないと言つて、

を洗濯して遣り度い、それに袷を一枚拵へ度いなどと言つた。父親の商賣の不景氣なことも續いて語つた。清三の幼稚い頃の富裕な家庭の話も出た。

夜は菓子を買つて郁治の家へ行つた。雪子が莞爾と笑つて迎へた。書齋での話は容易に盡きようともしなかつた。同じことを繰返して語つても、それが同じことゝは思へぬほど二人は親しかつた。相對して互に顏を見合せて居るといふことが二人に取つて此上もない愉快である。『行田文學』の話も出れば山形古城の話も出る。其處に郁治の父親が折よく昨日歸つて來て居たとて出て來て『林さん、何うです。學校の方は旨く行きますか、』などと言つた。

『あそこの學校は軋轢がなくつて好いでせう。校長は二十七年の卒業生だが、割合にあれで話が解つて居る男でしてな……村の受けも好いです。』

郡視學はこんなことを語つて聞かせた。

雪子が茶をさしに來た時、袂から繪端書を出して『浦和の美穗子さんから今、私の處にこんな手紙が來てよ、』と二人に示した。美穗子はかのArtの君である。雪子はまだ兄の心の祕密を知らなかつた。繪端書は女學世界について居た『初夏』といふ題で、新綠の陰にハイカラの女が細い流行の小傘を携へて立つて居た。文句は別に變つたこともなかつた。

――雪子さんお變り御座いませんか。此處に參つてからもう二月になりました。寄宿の生活――それ

で働いて初めて取つたのだと思ふと、何となく異つた意味がある。母親が勝手に立たうとするのを呼留めて、懐から財布を出して、かれは其處に紙幣と銀貨とを三圓八十錢並べた。母親はさも〳〵喜ばしさに堪へぬやうに息子の顔を見て居たが、『お前がかうして働いて取つて呉れるやうになつたかと思ふと本當に嬉しい。』と心から言つた。息子は殘りの半分は今四五日經つと下る筈であるといふ事を語つて、『何うも田舍はそれだから困るよ。何でも三度四度位に下りることもあるんだつて。けち〳〵してるから。』

母親は其金をさも尊さうに押戴く眞似をして、立つて神棚に供へた。神棚には躑躅と山吹とが小さい花瓶に生けて上げられてあつた。清三は後向になつて母親の小さい丸髷に白髪の此頃多くなつたのを見て、其のやさしい心のいかに生活の嵐に吹荒まれて居るかを考へて同情した。こればかりの金にすらかうして喜ぶのが親の心である。かれは中學からすぐ東京に出て行く友達の噂を聞く度に燃した羨望の情と、かうした貧しい生活をしてゐる親の慈愛に對する子の境遇とを考へずには居られなかつた。

其の土曜日は愉快に過ぎた。母親は自分で出懸けて清三の好きな田舍饅頭を買つて來て茶を煎れて呉れた。母親の小皺の多い莞爾した顔と息子の青白い弱々しい笑顔とは、久しく長火鉢に相對して坐つた。

清三は來週から先方の都合さへよければ羽生の成願寺に下宿したいといふ話を持出して、若い學問のある方丈さんのことや、やさしい荻生君のことなどを話して聞かした。母親はそれまでには夜具や着物

『もう其巡査は居ないのかねえ。』
『此間岩瀬へ轉任になつて行つたつて聞きました。』
『一つ、君は懇意だから、賴んで見て臭れませんか。自炊でも何でもして、食事の方は世話をかけずに、室さへ貸して貰へば好いが……』
『それは好い考ですねえ、』と荻生君も贊成した。『此處からなら彌勒にも一里に近いし……土曜日に行田へ歸るにも餘り遠くないし……』
『それにいろ／＼敎へても貰へるしねえ、君。彌勒あたりの下らん處に下宿するよりいくら好いか知れない。』
『本當ですねえ、私も話相手が出來て好い。』
荻生さんが來週の月曜日までに聞いて置いて遣るといふことに決つて、二人の友達は分署の角で別れた。

十二

昨日の午後、月給が半月分渡つた。淸三の財布は銀貨や銅貨でガチャ／＼して居た。古いとぢの切れたよごれた財布！　今までこの財布にこんなに多く金の入つたことはなかつた。それに、兎に角自分

『あれで中々好い人ですよ。』

『僕はこんな田舍にあんな人が居ようとは思はなかつた。田舍寺には惜しいつて言ふ話は聞いて居たが、本當に左樣だねえ……』

『話相手が無くつて困るつて言つてゐましたねえ。』

『それは左樣だらうねえ君、田舍には百姓や町人しか居やしないから。』

二人は山門を過ぎて、榛の木の並んだ道を街道に出た。街道の片側には汚い溝があつて、歩くと蛙が幾疋となく叢から水の中へ飛込んだ。水には黑い青い苔やら藻やらが浮いて居た。

大和障子を半明けて、色の白い娘が横顏を見せて、靑縞をチヤンカラチヤンカラ織つて居た。その前を通る時、

『あのお寺の本堂に室がないだらうか？』

かう淸三は訊いた。

『ありますよ。六疊が。』

と友は振返つた。

『何うだらうねえ、君。あそこで置いて呉れないかしらん。』

『置いて呉れるでせう……此間まで巡査が借りて自炊をして居ましたよ。』

れはまだ空想であつた。自己の周圍を見廻しても、そんなことを口にするものは一人もなかつた。養蠶の話でなければ金儲の話、月給の多い寡いといふ話、世間の人は多くパンの話で生きて居る。理想などといふことを言ひ出すと、まだ世間を知らぬ乳臭兒のやうに一言の下に言ひ消される。

主僧の言葉の中に『成功不成功は人格の上に何の價値もない。人は多くさうした標準で價値をつけるが、私はさういふ標準より理想や趣味の標準で價値をつけるのが本當だと思ふ。乞食にも立派な人格があるかも知れぬ』といふ意味があつた。清三には自己の寂しい生活に對して非常に有力な慰藉者を得たやうに思はれた。

主客の間には陶器の手爐が二箇置かれて、菓子器には金米糖が入れられてあつた。主僧とは正反對に體格のがつしりした色の黒い細君が注いで行つた茶は冷たくなつたまゝ黄ろく濁つて居た。

一時間の後には、二人の友達は本堂から山門に通ずる長い敷石道を歩いて居た。鐘樓の傍に扉を閉め切つた不動堂があつて、その高い縁では、額髪を手拭で卷いた子守が二三人遊んで居る。大きい銀杏の樹が五六本、其幹と幹との間にこれから織らうとする青縞のはたをかけて二十五六の櫛卷の細君が頻りにそれを綜て居た。

『面白い人だねえ。』

清三は友を顧みて言つた。

詩の話から小說の話、戲曲の話、それが容易に盡きようとはしなかつた、明星派の詩歌の話も出た。主僧も矢張晶子の歌を賞揚して居た。『さうですとも、言葉などを餘り喧しく言ふ必要はないです。新しい思想を盛るには矢張新しい文字の排列も必要ですとも……』かう言つて林の說に同意した。

ふと理想といふことが話題にのぼつたが、これが出ると主僧の顏は俄かに生々した色を着けて來た。主僧の早稻田に通つて勉強した時代は紅葉露伴の時代であつた。所謂『文學界』の感情派の人々とも往來した。ハイネの詩を愛讀する大學生とも親しかつた。麻布の曹洞宗の大學林から早稻田の自由な文學社會へ入つたかれには、冬枯の山から綠葉の野に出たやうな氣がした。今ではそれがかうした生活に逆戾りした位であるから、餘程鎭靜はしてゐるが、それでも何うかすると昔の熱情が迸つた。

『人間は理想が無くつては駄目です。宗教の方でもこの理想を非常に重く見て居る。同化する、惑溺するといふことは理想がないからです。美しい戀を望む心、これも矢張理想ですからな……普通の人間のやうに愛情に盲從したくないといふところに力がある。それは佛も如是一心と言つて靈肉の一致は說いて居ますが、何うせ自然の力には從はなければならないのは解つて居ますが——そこに理想があつて物にあこがれる處があるのが人間として意味がある。』

持前の猫脊を愈々猫脊にして、蒼い顏に稍々紅を潮した熱心な主僧の態度と言葉とに淸三は其儘引入られるやうな氣がした。其言葉はヒシ〳〵と胸にこたへた。曾て書籍で讀み詩で讀んだ思想と憧憬、そ

遣りませう。』

主僧はかう言つて輕く挨拶した。

『何うぞ何分――』

清三は賴んだ。

『荻生君もお仲間ですか。』

『いゝえ、私には……文學など解りやしませんから、』と荻生さんは何處か町家の息子と謂つたやうな風で笑つて頭を搔いた。中學に居る頃から、石川や加藤や淸三などとは違つて、文學だの宗教だのといふことには餘り携はらなかつた。隨つて空想的な處はなかつた。中學を出るとすぐ前から手傳つて居た郵便局に勤めて、不平も不滿足もなく世の中へ出て行つた。

主僧の室は十疊の一間で、天井は高かつた。前には伽羅や松や躑躅や木犀などの點綴された庭が展げられてあつて、それに接して、本堂に通ずる廊下が長く續いた。瓦屋根と本堂と離れの六疊の障子の黑くなつたのが見えた。書箱には洋書が一杯入れられてあつた。

主僧はめづらしく調子づいて話した。今の文壇の不眞面目と黨閥の弊とを說いて、『とても東京に居ても勉强などは出來ない。田園生活などと言ふ聲の聞えるのも尤なことです、』などと言つた。風采は揚らぬが、言葉に一種の熱があつて、若い人達の胸をそゝつた。

十一

『何うぞ一つ名譽賛成員になつて戴きたいと存じます……それに、何か原稿を、どんな短かいものでも結構ですから。』

清三はかう言つて、前に坐つて居る成願寺の方丈さんの顏を見た。兼ねて聞いて居たよりも風采の揚らぬ人だとかれは思つた。新體詩、小說、其名は東京の文壇にもかなり聞えて居る。清三は曾て其の詩集を愛讀したこともある。雜誌に載つた小說を讀んだこともある。一昨年此處の住職になるに就いても止むを得ぬ先住からの緣故があつたからで、羽生町で屈指な名刹とは言ひながら、かうした田舍寺には惜しいといふことも噂にも聞いて居た。それが、かうした脊の低い小づくりな弱々しさうな人だとは夢にも思ひがけなかつた。

かれは土曜日の家への歸途に、羽生の郵便局に荻生秀之助を訪ねたが、秀之助が丁度成願寺の山形古城を知つて居ると言ふので、それで伴立つて、訪問した。

『それは面白いですな……それは面白いですな。』

かう繰返して主僧は言つた。『行田文學』に就いて話が三人の間に語られた。

『無論、御盡力しませうとも……何か、まア、初めには詩でも上げませう。東京の原にもさう言つて

湯屋が通りにあつた。細い煙筒から烟が青く黑く颺つて居るのを見たことがある。格子戸が男湯と女湯とにわかれて、入ると其處に番臺があつた。湯氣の白く一杯に籠つた中に、箱洋燈がボンヤリと暗くついて居て、筧から落ちる上り水の音が高く聞えた。湯殿は掃除が行屆かぬので、氣味惡くヌラ〳〵とすべる。清三は湯につかりながら、自分の新しい生活を思ひ浮べた。

十

ある朝、授業を始める前に、清三は卓の前に立つて、眞面目な調子で生徒に言つた。

『今日は皆さんにお目出度いことを一つお知らせ致します。皇太子妃殿下節子姫には去る二十九日、新たに親王殿下を易々と御分娩遊ばされました。これは皆さんも新聞紙上でお父樣やお母樣から既にお聞きなされたことゝ存じます。皇室の御榮えあらせらるゝことは、我々國民に取つてまことに喜悦に堪へませんことで、千秋萬歲、皆さんの毎日お歌ひになる君が代の唱歌にもさゞれ石の巖となりて苔のむすまでと申して御座います通りであります。然るに、一昨日其親王殿下の御命名式が御座いまして、迪宮殿下裕仁親王と名告らせらるゝといふことが御發表になりました。』

かう言つて、かれは後向きになつて、チョオクを取つて、黑板に迪宮裕仁親王といふ六字を大きく書いて見せた。

をやめても困るつて言ふ人ではありませんから。』

『家には財産があるんですか。』

『財産といふこともありますまいが、息子が荒物屋の店をして居りますから。』

『さうですか。』

こんな普通な會話もこの若い二人を近づける動機とはなつた。二人はベルの鳴るまで其處に立つて話した。

午後には理科と習字とを教へた。

夜は宿直室に泊つた。宿直室は六疊で、其隣に小使室があつた。小使室には大きな圍爐裏に火が活々と起つて、自在鍵に吊した鐵瓶は常に煮えくりかへつて居た。其向うは流元で、手桶の傍に茶碗や箸が置いてあつた。棚には桶と擂鉢が伏せてあつた。

其夜は大島訓導の宿直で、いろ〳〵打解けた話をした。かれは栃木縣のもので、久しく宇都宮に教鞭を取つて居たが、一昨年埼玉縣に來るやうになつて、烏渡浦和に居て、それから此處に赴任したといふ。家は大越在で、十五になる娘と九歳になる男の兒がある。初めて逢つた時と打解けて話し合つた時と感じは丸で違つてゐた。大島先生は一合の晩酌に眞赤になつて、教育上の經驗やら若い者の爲めになるやうな話やらを得意になつてして聞かせた。

お手玉を弄んだりして居る。運動場を緣取つて、白楊の綠葉が疎らに並んで居るが、其間から廣い青い野が見えた。

清三は廊下の柱に凭り懸つて、無心に戲れ遊ぶ生徒等に見惚れて居た。其處に遣つて來たのは關といふ教員であつた。

やさしい眼色と、莞爾した圓滿な顏には、初めて逢つた時から、人の好ささうなといふ感を清三の胸に起させた。此人には隔てを措かずに話が出來るといふ氣もした。

『何うでした、一時間おすみになりましたか。』

『え……』

『何うも初めてといふものは、具合の悪いものでしてな……私等もつい三月程前に此處に來たのですが、始めは弱りましたよ。』

『何うも馴れないものですから。』

この同情を清三も嬉しく思つた。

『私の前に勤めて居た方は何ういふ方でした。』

『あの方はもう年を取つたから罷めさせられるといふ噂が前からあつたんです。今泉の人で、隨分古くから教員は遣つて居るんだ相ですが……矢張若いものがずん〳〵出て來るものだから……それに教員

などと生徒は言つた。

『今までは先生に幾度讀んで貰ひました。一度ですか、二度ですか？』

『二度。』

『二度です。』

といふ聲が其處にも此處にも起つた。

『それぢやこれで好いですな、』と清三は生徒の存外無邪氣な調子に元氣づいて、『でも、初めのが早過ぎましたから、今一度讀んで上げませう。よく聞いてお出なさい。』

今度のは一層はつきりして居た。早くも遲くもなかつた。

讀める人に手を上げさせて、前の列に居る色の白い可愛い子に讀ませて見たり何かした。讀めるのもあれば讀めぬのもあつた。清三は文章の中から難かしい文字を拾つて、それを黑板に書いて、順々に覺えさせて行くやうにした。殊に難かしい字には圈點をつけて其傍に片假名でルビを振つて見せた。卓の前に始めて立つた時の苦痛はいつか拭ふが如く消えて、自分ながら遣りさへすれば遣れるものだといふ快感が胸に溢れた。やがて時間が來てベルが鳴つた。

晝飯は小川屋から運んで來て吳れた。正午の休みに生徒等は皆運動場に出て遊んだ。鞦韆に乘るものもあれは、鬼事をするものもある。女生徒は男生徒とはおのづから別に組をつくつて、綾を取つたり、

場に立つた苦痛が餘程薄らいで居た。何うせ教へずには濟まされぬ身である。何うせ自分のベストを盡すより外に仕方がないのである。人が何と言はうが、何う思はうが、そんなことに頓着して居られる場合でない。かう思つたかれの心は輕くなつた。

『それでは始めますから。』

新しい教師は第六課を讀み始めた。

生徒は早いしかし滑かな流るゝやうな聲を聞いた。前の老朽教師の低い蜂の唸るやうな活氣の無い聲に比べては、大變な違ひである。しかし其聲は兎角早過ぎて生徒の耳に留まらぬ處が多かつた。生徒は本よりも先生の顔ばかり見て居た。

『何うです、これで解りますか。』

『今少しゆつくり讀んで下さい。』

いろ〳〵な聲が彼方此方から起つた。二度目には、つとめてゆつくりした調子で讀んだ。

『何うです、此位なら解りますか。』

にこ〳〵と笑顔を見せて、馴々しげにかれは言つた。

『先生、後のはよく解りました。』

『今少し早くつても好う御座います。』

の兒童がずらりと前に並んで、何か頻りにがや〳〵言つて居たが、先生が入つて來ると、いづれも眼を其方に向けて默つて了つた。

新しい教師は卓の前に來て椅子に腰を掛けたが、その顏は赤かつた。讀本を一册持つて來たが、卓の上に顏を低れたまゝ、少時の間は、其教科書の頁を飜して見て居た。

後の方で私語く聲がをり〳〵した。

教室の硝子戸は埃に塗れて灰色に汚なくよごれて居るが、其處に丁度日影が黃ろく射して、戸外では雀が百囀をしてゐる。通りを荷車の轣る音がガタ〳〵聞えた。

隣の教室からは、女教員の細く尖つた聲が聞え出した。

少時して思切つたといふやうに、新しい教師は顏を擧げた。髮の延びた、額の廣い眉の濃い其顏には一種の努力が見えた。

『第何課からですか。』

かう言つた聲は廣い教室にひろがつて聞えた。

『第何課からですか、』と繰返して言つて、『何處まで教はりましたか。』

かう言つた時には、もう赤かつた顏の色が褪めて居た。

答が彼方此方から雜然として起つた。淸三は生徒の示した讀本の頁をひろげた。もう此時は初めて教

『さうですな……一つ考へて見ませう。何處かあるかも知れません。』

二時間濟んだ處で、清三は同僚になるべき人々に紹介された。關といふ准教員は、莞爾と氣が措けぬやうなところがあつた。大島といふ校長次席は四十五六位の年恰好で、頭はもう大分白く、鳥渡見ると窮屈さうな人であるが、笑ふと、顏にやさしい表情が出て、初等教育にはさも／＼熟達してゐるやうに見えた。『はア、此方が林さん、私は大島と申します。何分宜しく、』と云つた言葉の調子にも世馴れた處があつた。次に狩野といふ顏に疣のある訓導と杉田といふ肥つた師範校出とが紹介された。師範校出は何だかそつ氣ないやうな挨拶をした。女教員は下を向いてにこ／＼してゐた。

次の時間の授業の始まる前に、校長は生徒を第一教室に集めた。かれは卓の處に立つて、新しい教員を生徒に紹介した。

『今度、林先生と仰しやる新しい先生がお出になりまして、皆さんの授業をなさることになりました。新しい先生は行田のお方で、中學の方を勉強して居らしやつて、よくお出來になる先生で御座いますから、皆さんもよく言ふことを聞いて勉強をするやうにしなければなりません。』

校長の脇に立つて、少し低頭加減に、顏を赤くしてゐる新しい先生は、何となく困つたやうな恥しさうな樣子に生徒には見えた。生徒は默つて校長の紹介の言葉を聞いた。

次の時間には、其の新しい先生の姿は、第三教室の卓の前に顯はれた。其處には高等一年生の十二三

思へぬので、記憶に留めて置くことにした。

翌日、朝九時に學校へ行つて見た。けれど其平田といふのがまだ居たので、一先づ役場に引返した。一時間ばかりして又出かけた。

今度はもう其教員は居なかつた。授業は既に始まつて居た。生徒を教へる教員の聲が各教場から分明と聞えて來る。女教員の冴えた聲も聞えた。清三の胸は何となく躍つた。教員室に入ると、校長は卓に向つて、何か書類の調物をして居たが、

『さア、入り給へ、』と言つて、清三の入つて來るのを待つて、傍にある椅子をすゝめた。『お氣の毒でした。漸くすつかり決りました。中々面倒でしてな……昨夜の相談でもいろ〳〵の話が出ましてな。』かう言つて笑つて、『何うも村が小さくつて、それで喧しい學務委員が居るから困りますよ。』

校長は言葉をついで、

『それで家の方は何うするつもりです。毎日行田から通ふといふ譯にも行くまい。まア、當分は學校に泊つて居ても好いけれど……考がありますか。』

『何處か寄宿する好い處が御座いますまいか、』とこれをきつかけに清三が問うた。

『何うも此處は田舍だから、恰好な處がなくつて……』

『此處でなくつても、少しは遠くつても好いんですけれど……』

『此次の土曜日には歸る。』

『其までに少しは何うかならんか。』

『何うだか解らんけれど、月末だから少しは呉れるだらうと思ふがね。』

『少しでも手傳つて貰ふと助かるがな。』

清三は返事をしなかつた。

やがて別れる處に來た。新鄕へはこれから一田圃越せば行ける。

『それぢや氣をつけてな。』

『あゝ。』

其處には庚申塚が立つて居た。禿頭の父親が猫脊になつて歩いて行くのと、茶色の帽子に白縞の袴を着けた清三の姿とは、長い間野の道に見えて居た。

九

其夜は役場にとまつた。校長を訪ねたが不在であつた。かれは日記帳に、『あゝわれ終に堪へんや、ああわれ遂に田舍の一教師に埋れんとするか。明日！　明日は萬事定まるべし。村會の夜の集合！　噫！　一語以て後日に寄す。』と書いた。猶詳しく其心持を書かうと思つたが、到底充分に書き現はし得ようとも

と言つて聲高く其中年の男は笑つた。一人は町の豪家の書畫道樂の主人で、それが向うから來ると、父親は丁寧に挨拶をして立留つた。『此間のは、何うも惡いやうだねえ、何うもあやしい、』と向うから言ふと、『いや、そんなことは御座いません、出所がしつかりして居りますから、折紙つきですから、』と父親は頻りに辯解した。淸三は五六間先から振返つて見ると、父親が頻りに腰を低くして、頭を下げて居る。其禿げた額を、薄い日影がテラ〳〵照した。

加須に行く街道と館林に行く街道とが町のはづれで二つに岐れる。それから向うは濶々した野になつて居る。野の處々にはこんもりとした森があつて、其間に白堊の土藏などが見えて居る。まだ犁を入れぬ田には、げんげが赤い毛氈を敷いたやうに綺麗に咲いた。商家の若旦那らしい男が平坦な街道に滑かに自轉車を輾らして來た。

路は野から村に入つたり村から野に出たりした。樫の高い生垣で家を圍んだ豪家もあれば、靑苔が汚く生えた溝を前にして荒壁の崩れかけた家もあつた。鷄の聲が處々にのどかに聞える。街道のおろし菓子屋が荷を下して居ると、髮を茫々させた村の駄菓子屋のかみさんが、帶も締めずに出て來て、豆菓子や鐵砲玉をあれの是れのと言つて入用だけ置かせて居る。

新鄕への岐れ路が近くなつた頃、親子はかういふ話をした。

『今度はいつ來るな、お前。』

八

翌日、午後一時頃、白縞の袴を着けて、借りて來た足駄を下げた清三と、半禿げた、新紬の古ぼけた縞の羽織を着た父親とは、行田の町はづれを伴れ立つて歩いて行つた。雨あがりの空は稍曇つて、時々思ひ出したやうに薄い日影が射した。町と村との境を劃つた川には、葦や蘭や白楊がもう青々と芽を出して居たが、家鴨が五六羽ギヤア〳〵鳴いて、番傘と蛇目傘とが其岸に並べて干されてあつた。町に買物に來た近所の百姓は腰を懸けて頻りに饂飩を食つて居た。

並んで歩く親子の後姿は、低い庇や地燒の瓦で葺いた家根や、襁褓を干しつらねた軒や、石屋の工作場や、鍛冶屋や、娘の青縞を織つて居る家や、子供の集つて居る駄菓子屋などの兩側に連つた間を靜かに動いて行つた。と、向うから頭に番臺を載せて、上に小旗を無數にヒラ〳〵さしたあめ屋が太鼓を面白く叩きながら遣つて來る。

父親は近在の新郷といふ處の豪家に二三日前書畫の幅を五六品預けて置いて來た。今日行つていくらかにして來なければならないと思つて、午後から彌勒に行く清三と一所に出懸けて來たのである。

此處まで來る間に、父親は町の懇意な人に二人逢つた。一人は氣の措けない夥作の者で、『何處へ行くけえ？　さうけえ、新郷へ行くけえ、あそこは何うもな、吝嗇な人間ばかりで、ねつから埒が明かんな、』

の寢て居る夜着の裾の處を通つて、厠に行つた。手を洗はうとして雨戸を一枚明けると、緣側に置いた洋燈がくつきりと闇を照して、濡れた南天の葉に雨の降りかゝるのが光つて見えた。

障子を閉てる音に母親は眼を覺して、

『淸三かえ？』

『あゝ。』

『まだ寢ずに居るのかえ。』

『今、寢るところなんだ。』

『早くお寢よ……明日が眠いよ、』と言つて、寢反をして、

『もう何時だえ。』

『二時が今鳴つた。』

『二時……もう夜が明けて了ふぢやないか。お寢よ。』

『あゝ。』

で、蒲團の中に入つて、洋燈をフッと吹消した。

わが罪問はぬ色桃に見る。桃に見る、あの赤い桃に見ると歌つた心がしみ〴〵と胸に沁みた。不思議なやうでもあるし、不自然のやうにも考へられた。又この不思議な不思議な處に新しい泉が滾々として湧いて居るやうにも思はれた。色桃に見ると四の句と五の句を分けた處に言ふに見はれぬ匂ひがあるやうにも思はれた。かれは一首毎に一頁毎に本を伏せて、湧いて來る思を味ふべく餘儀なくされた。此瞬間には昨夜役場に寢た佗しさも、彌勒から羽生まで雨にそぼぬれて來た辛さも全く忘れて居た。ふと石川と今夜議論をしたことを思ひ出した。あんな粗い感情で文學などを遣る氣が知れぬと思つた。それに引かへて、自分の感情のかく鮮かに新しい思潮に觸れ得るのをわれと自から感謝した。澁谷のさびしい奥に住んで居る詩人夫妻の佗住居のことなどをも想像して見た。何だか悲しいやうにもあれば、羨しいやうにもある。かれは歌を讀むのをやめて、體裁から、組み方から、表紙の繪から、總て新しい匂ひに滿されたその雜誌に憧れ渡つた。

時計が二時を打つても、かれはまだ床の中に眼を大きく明いて居た。鼠の天井を渡る音が騷がしく聞えた。

雨は降つたり霽れたりして居た。人の心を他界に誘ふやうにザツとさびしく降つて通るかと思ふと、びしよ〳〵と雨滴の音が軒の樋を傳つて落ちた。

何時まで憧れて居たつて仕方がない。『もう寢よう』と思つて、起上つて、暗い洋燈を手にして、父母

『だつて、實際好いんだもの。』

『何が好いんだか、國語は支離滅裂、思想は新しいかも知れないが、譯の解らない文句ばかり集めて、それで歌になつてる積なんだから、明星派の人達には閉口するよ。』

いつかも遣つた明星派是非論、それを三人はまた繰返して論じた。

七

夜はもう十二時を過ぎた。雨滴の音はまだして居る。時々ザッと降つて行く氣勢も聞取られる。城址の沼のあたりで、むぐりの鳴く聲が寂しく聞えた。

一室には三つ床が敷いてあつた。小さい丸髷と禿げた頭とが床を並べて其處に寢て居た。母親はつい先程まで眼を覺して居て『明日眠いから早くおやすみよ、』と幾度となく言つた。『ランプを枕元につけて置いて、つい寢込んで了ふと危いから、』とも忠告した。その母親も寢て了つて、父親の鼾に交つて、微かな呼吸がスウ〳〵聞える。さらぬだに紙の笠が古いのに、先程心が出過ぎたのを知らずに居たので、ホヤが半分ほど黑くなつて、光線が厭に赤く暗い。淸三は借りて來た『明星』を殆どわれを忘れるほど熱心に讀耽つた。

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃に見る

四頁の『小文學』といふのを特に拔出して、

『大抵かういふ風にしようと思ふんだ。澤田（印刷所）にも相談して見たが、それが好いだらうと言ふんだ。けれど何うも中の體裁は餘り感心しないから、組み方なんかは別にしようと思ふんだがね。』

『さうねえ、中は餘り綺麗ぢやないねえ。』と二人は『小文學』を見てる。

『これは何うだらう。』

と二段、十八行二十四字詰のを石川は見せた。

『さうねえ。』

三人は數種の雜誌を飜へして見た。郁治の持つて居る雜誌も其處に參考に出した。洋燈は額を集めた三人の青年と其處に亂雜に散らかつた雜誌とをくつきり照した。

やがて其中の一つに大略定まる。

石川の持つて來た雜誌の中に、『明星』の四月號があつた。淸三はそれを手に取つて、初めは藤島武二や中澤弘光の木版畫の鮮かなのを見て居たが、やがて晶子の歌に熱心に見入つた。新しい『明星派』の傾向が淸三の渴いた胸にはさながら泉のやうに感じられた。

石川はそれを見て笑つて、

『もう見てる。逹つたもんだね、崇拜者は！』

『君の處に今寄つて來たよ。』
『さうか。』
『此方に來たつてマザアが言つたから。』かう言つて石川は坐つて、『先生が旨くつとまりますかね？』
清三は笑つて居る。
郁治は『まだ出來るか出來ないか、遣つて見ないんださ。』
と傍から言ふ。
雪子もしげ子も石川の顏を見ると、挨拶してすぐ引込んで行つて了つた。郁治と淸三と話して居る間は、話に氣が置けないので、よく長く傍に坐つて居るが、他人が交るとすまして了ふのが常である。それほど淸三と郁治とは交情が好かつた。それほど淸三と此家庭とは親しかつた。郁治と淸三との話し振も石川が來ると宛で變つた。
『愈〻來月の十五日から一號を出さうと思ふんだがね。』
『もうすつかり決つたかえ。』
『東京からも大家では麗水と天隨とが書いて吳れる筈だ。……それに地方からも大分原稿が來るから大丈夫だらうと思ふよ。』
かう言つて、地方の小雜誌やら東京の文學雜誌やらを五六種出したが、岡山地方で發行する菊版二十

『さう言へば、今日荻生君が羽生に行つたが、逢はなかつたかねえ。』

『荻生君が？』と清三は珍らしがる。

荻生君と謂ふのは、矢張其仲間で、熊谷の郵便局に出て居る同じ町の料理屋の息子さんである。今度羽生局に勤めることになつて、今俥で行くといふ處を郁治は町の角で逢つた。

『これからずつと長く勤めて居るのかしら。』

『無論さうだらう。羽生の局を遣つてるのは荻生君の親類だから。』

『それは好いな。』

『君の話相手が出來て、好いと僕も思つたよ。』

『でも、そんなに親しくはないけれど……』

『ぢき親しくなるよ、あゝいふやさしい人だもの……』

其處へしげ子が『晝間拵へたのですから、不味くなりましたけれど……』とお萩餅を運んで、茶をさして來た。其まゝ兄の傍に坐つて、無邪氣な口振で二言三言話して居たが、今度は姉の雪子が丈の高い姿を其處に顯はして、『兄さん、石川さんが』といふ。

やがて石川が入つて來た。

座に清三が居るのを見て、

や毎月七八圓づつ損する積なら大丈夫だねぇ。原稿料は出さなくつたつて書手は澤山あるし、それに二三十部は賣れるァね、』と言つた顔は、新しい計畫に對する喜悦に輝いて居た。『行田文學』といふ小雜誌を起すことに就いての相談が其の連中の間に持上つたのはこれからである。

機山が其相談の席で、

『それから、羽生の成願寺に山形古城が居るァねえ。あの人はあれで中々文壇には聞えて居る名家で、新體詩ぢや有名な人だから、先づ第一にあの人に贊成員になつて貰ふんだね。あの人から賴んで貰へば、原杏花の原稿も貰へるよ。』

『あの古城つていふ人は此處の士族だつて言ふぢやないか。』

『さうだつて……。だから、贊成員にするのは譯はないさ。』

丁度清三が彌勒に出るやうになつた時なので、彼が先づ其寺を訪問する責任を仲間から負はせられた。

其夜、『行田文學』の話が出ると、郁治が、

『寄つて見たかね？』

『生憎、雨に逢つちやつたものだから。』

『さうだつたね。』

『今度行つたら一つ寄つて見よう。』

鏡を懸けて居た、田舍の青年に多く見るやうな非常に熱心な文學好で、雜誌といふ雜誌は大抵取つて、始めはいろ〳〵な投書をして、自分の號の活字になるのを喜んで居たが、近頃ではもう投書でもあるまいといふ氣になつて、毎月の雜誌に出る小說や詩や歌の批評を縱橫に其夥伴にして聞かせるやうになつた。それに、投書家交際をすることが好きで、地方文壇の小さな雜誌の主筆と常に手紙の往復をするので、地方文壇消息には、武州行田には石川機山ありなどとよく書かれてあつた。時の文壇に名のある作家も二三人は知つて居た。

矢張骨の字の號をつけた一人で——これは文學などは餘り解る方ではなく、同じ夥伴におつき合につけて貰つた組であるが、かれの兄が行田町に一つしか無い印刷業を遣つて居て、其前を通ると、硝子戸の入口に、行田印刷所と書いたインキに汚れた大きい招牌が懸つて居て、舊式な手刷が一臺、例の大きなハネを卷返し繰返し動いて居るのが見える。廣告の引札や名刺が主で、時には郡役所警察署の簡單な報告などを賴まれて刷ることもあるが、それは極めて稀であつた。棚に並べたケイスの活字も少なかつた。文選も植字も印刷も主が皆な一人で遣つた。日曜日などには其弟が汚れた筒袖を着て、手刷臺の前に立つて、刷れた紙を飜して居るのを常に見懸けた。

金持の息子と見て、その小遣を見込んで、それでそゝのかしたといふ譯でもあるまいが、この四月の月の初めに、機山がこの印刷所に遊びに來て、長い間その主人兄弟と話して行つたが、歸る時、「それぢ

『いや、僕はさう思ふねえ、僕はこれつきり埋れて了ふやうな氣がしてならないよ。』
『僕はまた、假に一歩讓つて、人間がさういふ種類の動物であると假定しても、さういふ消極的な考には服從しては居られないねえ。』
『ぢや、何んな境遇からでも、其人の考一つで拔け出ることが出來ると謂ふんだねえ。』
『さうさ。』
『つまりさうすると、人間萬能論だね、何んなことでも出來ないことはないといふ議論だね。』
『君はぢきさう極端に言ふけれど、それは其處に取除けもあるがね。』
其時いつもの單純な理想論が出る。積極的な考と消極的な考とがごた〳〵と混合して要領を得ずに終結になつた。
かれ等の群は學校に居る頃から、文學上の議論や人生上の議論などをよくした。新派の和歌や俳句や抒情文などを作つて、互に見せ合つたこともある。一人が仙骨といふ號をつけると、皆な骨といふ字を用ゐた號をつけようぢやないかといふ動議が出て、破骨だの、洒骨だの、露骨だの、天骨だの、古骨だのといふ面白い號が出來て、暫くの間は手紙を遣るにも、話をするにも、皆なその骨の字の號を使つた。古骨と言ふのは、矢張郁治や清三と同じく三里の道を朝早く熊谷へ通つた連中の一人だが、その本當の號は機山と謂つて、町でも屈指の青縞商の息子で、平生は角帶などを締めて、常に色の白い顔に銀縁の近眼

『まア、放つて置いて呉れ、考へると苦しくなる。』

胸にひそかに戀を包める靑年の苦しさといふやうな顏を郁治はして見せた。前に自からも言つたやうに、郁治は好男子ではなかつた。男らしいきつぱりとした處はあるが、體格の大きい、肩の怒つた、眼の鋭い、頬骨の出た處など、女に好かれるやうな點はなかつた。

若い者の苦しむやうな煩悶はかれの胸にもあつた。淸三に比べては、境遇も好かつた。家庭も好かつた。高等師範に入れぬまでも東京へ行つて一二年は修業するほどの學費は出して遣る氣が父親にもある。それに體格が好いだけに、思想も健全で、淸三のやうにセンチメンタルの處はない。淸三が今度の彌勒行を、此上もない絕望のやうに――田舍に埋れて出られなくなる第一步であるかのやうに言つたのを、

『だつて、そんなことはありやしないよ、君。人間は境遇に支配されるといふことは、それはいくらかはあるには違ひないが、何んな境遇からでも出ようと思へば出て來られる。』と言つたのでも、郁治の性格の一部は解る。

其時、淸三は、

『君はさういふけれど、それは境遇の束縛の恐ろしいことを君が知らないからだよ。つまり君の家庭の幸福から出た言葉だよ。』

『そんなことはないよ。』

小說や歌や俳句に若い思を湧かして居た。體の發達するにつれて、心は燃えたり冷えたりした。町の若い娘達の眼色をも讀み得るやうにもなつた。戀の味もいつか覺えた。あるデザイアに促されて、人知れず汚い業をすることもあつた。世間は自分の前に面白い樂しい舞臺を展げて居ると思ふこともあれば、汚い醜い近づくべからざる現象を示して居ると思ふこともある。自己の滿し難い欲望と美しい花のやうな世界と如何になり行くかを知らぬ自己の將來とを考へる時は、いつも暗い佗しい堪へ難い心になつた。

熊谷に居る友人の戀の話から、Art の君の話が出る。

『僕は苦しくつて仕方がない。』

『何うかする方法がありさうなもんだねえ。』

二人はこんなことを言つた。

『作日公園で逢つたんさ。鳥渡浦和から歸つて來たんだつて、先生、徒に肥えてるつて言ふ形だつた。』

郁治はかう言つて笑つた。

『徒に肥えてるは好いねえ。』

清三も笑つた。

『君のシスタアが友達だし、先生のエルダアブラザアも居るんだし、何うにか方法がありさうなもんだねえ。』

『さう書いてあつたね。』

『何處に入るつもりだらう？』

『小島は第一を志願するらしい。』

『杉谷は？』

『先生は何うするんだか……何うせ、先生は學費になんか困らんのだから、何うでも好きに出來るだらう。』

『此の町からも東京に行くものはあるかね？』

『さう、』と郁治は考へて、『佐藤は行くやうなことを言つて居たよ。』

『何ういふ方面に？』

『工業學校に入るつもりらしい。』

同窓に關する話が盡きずに出た。清三の身にしては、將來の方針を定めて、てんでに出たい方面に出て行く友達が此上もなく羨しかつた。中學校に居る中から、卒業して後の境遇を豫め想像せぬでもなかつたが、其時はまた其時で、思はぬ運が思はぬ處から向いて來ないとも限らないと強ひて心を安んじて居た。けれどもそれは空想であつた。家庭の餓は日に〳〵其身を實際生活に近づけて行つた。

かれはまた母親から優しい溫かい血を承け繼いで居た。幼い時から小波のをぢさんのお伽噺を讀み、

いて、茶の間の洋燈も明るかつた。母親は長火鉢の前に、晴れやかな顔をして坐つて居た。雪子は勝手で跡仕舞をして居たが、丁度それが終つたので、白い前懸で手を拭き〳〵茶の間に來た。

挨拶をしてゐると、郁治は奥から出て來て、清三を其まゝ自分の書齋へつれて行つた。

書齋は四疊半であつた。桐の古い本箱が積重ねられて、綱鑑易知錄、史記、五經、唐宋八家文などと書いた白い紙がそこらに張られてあつた。三尺の半床に草雲の蘭の幅のかゝつてゐるのが洋燈の遠い光に朧ろげに見える。洋燈の載つた朴の大きな机の上には、明星、文藝倶樂部、萬葉集、一葉全集などが亂雜に散らばつて置かれてある。

一年も逢はなかつたやうにして、二人は熱心に話した。いろ〳〵な話が絶間なく二人の口から出る。

『君は何う決つた?』

少時して清三が訊ねた。

『來年の春、高等師範を受けて見ることにした。それまでは、唯居つても仕方がないから、此處の學校に教員に出て居て、そして勉強しようとおもふ……』

『熊谷の小畑からもさう言つて來たよ。矢張高師を受けて見るつて……』

『さう、君の處にも言つて來たかえ、僕の處にも言つて來たよ。』

『小島や杉谷はもう東京に行つたつてねえ。』

しげ子のあどけなく莞爾と笑つて迎へるさまや、晩酌に醉つて機嫌よく話しかける父親の樣子などがまだ訪問せぬ中からはつきりと目に見えるやうな氣がする。笑聲がいつも絶えぬ平和な友の家庭を羨しく思つたことも一度や二度ではなかつた。

郡視學と謂へば、田舍では隨分こはもてのする方で、難かしい、理窟つぽい、取附きにくい質のものが多いが、郁治の父親は、物の解りが早くつて、優しくつて、深切で、そして口を利く方に懸けてもかなり重味があると人から思はれて居た。鬚は半ば白く、髮にもチラ〳〵交つて居るが、氣はどちらかと言へば若い方で、靑年を相手に敎育上の議論などを飽かずにして聞かせることもあつた。淸三と郁治と話して居る室に來ては、二人を相手に種々なことを語つた。

門を明けると、ベルがチリ〳〵ンと鳴つた。踏石を傳つて、入口の格子戸の前に立つと、洋燈を持つて迎へに出たしげ子の笑顏が浮き出すやうに闇の中に居る淸三の眼に映つた。

『林さん?』

と、覗くやうにして見た。

『兄さん、林さん。』

と高い無邪氣な聲を立てる。

父親は今日熊谷へ行つて不在であつた。子供が居ないので、室が綺麗に片附いて居る。掃除も行き屆

なると、あれも淋しくつて仕方がないと見えましてね……それに、外に仲の好いお友達もないものですから……』

郁治の母親はやがて歸つて行く、清三も母親も再び茶湯臺に向つた。親子は矢張默つて夕飯を食つた。湯を飲む時、母親は急に、

『雪さん、大變綺麗になんなすつたな！』

と誰に向つて言ふともなく言つた。けれど誰もそれに調子を合せるものはなかつた。父親の茶漬を掻込む音がさら〳〵と聞えた。清三は澤庵をガリ〳〵食つた。日は暮れかゝる。雨はまた降り出した。

六

加藤の家は五町と隔つて居らなかつた。公園道の半から左に折れて、裏町の間を少し行くと、やがて一方麥畑一方垣になつて、夏は紅と白の木槿が咲いたり、胡瓜や南瓜が生つたりした。緑蔭の重つた夕闇に螢の飛ぶのを、雪子やしげ子と追ひ廻したこともあれば、寒い冬の月夜を歌留多に更かして、からころと足音高く歸つて來たこともあつた。細い巷路の杉垣の奥の門と瓦屋根、それはかれに取つてまことに少なからぬ追憶がある。

今日は櫻の葉を透して洋燈の光がキラ〳〵と雨に濡れて光つて居た。雪子の色の白い取澄した顔や、

り致して居りましてねえ、まァ本當に。』

『まァ、何うぞお懸け下さいまし、……おや雪さんも御一緒に、……さァ雪さん、此方へお入りなさいましよ。』

と女同士は頻りに饒舌り立てる。郁治の妹の雪子は瘦削なすらりとした田舎にはめづらしい好い娘だが、湯上りの薄く化粧した白い顏を夕暮の暗くなり懸けた空氣にくつきりと浮き出すやうに見せて、ぬれ手拭に石鹼箱を包んだのを持つて立つて居た。

『さァ、こんな處ですけど……』

『いゝえ、もうさうは致しては居りませんから。』

『それでもまァ、鳥渡おかけなさいましな。』

この會話にそれと知つた清三は、箸を捨てゝ立つて其處に出て來た。母親共の挨拶し合つてる向うに雪子の立つて居るのを鳥渡見て、すぐ眼を外らした。

郁治の母親は清三の顏を見て、

『お歸りになりましたね。郁治が待つて居りますから……』

『今夜上らうと思つて居ました。』

『それぢや、何うぞお遊びにお出下さいまし。每日行つたり來たりして居た方が急にお出にならなく

ぬ母親に對する同情と共に、正業でない職業とは言ひながら、かうした雨の降る日に、纔か五十錢か一圓の錢で、一里もある處へ出懸けて行く老いた父親を氣の毒に思つた。

やがて鐵瓶がチン〳〵音を立て始めた。

母親は古い茶簞笥から茶の入つた鑵と急須とを取つた。茶はもう粉になつて居た。火鉢の抽斗の紙袋にも鹽煎餅が二枚しか殘つて居なかつた。

清三は夕暮近くまで、母親の裁縫する傍の暗い窓の下で、熊谷にゐる同窓の友に手紙を書いたり、新聞を讀んだりして居た。友への手紙には戀のことやら詩のことやら明星派の歌のことやら我ながら若々しいと思ふやうなことを罫紙に二枚も三枚も書いた。

四時頃から雨は霽れた。路はまだグシヤ〳〵して居る。父親が不成功で歸つて來たので、家庭の空氣が何となく重々しく、親子三人默つて夕飯を食つて居ると『御免なさい』といふ聲を先きに立てゝ、建附の惡い大和障子を明けようとする人がある。

母親が立つて行つて、

『まア……さあ、何うぞ。』

『いゝえ、烏渡、湯に參りましたのですが、歸りにねえ、貴女、お宅へ上つて、今日は土曜日だから、清三さんがお歸りになつたか何うか郁治が何つて來いと申しますものですから……いつも御無沙汰ばか

『來週から出ることになつた。』

『それは好かつたねえ。』

喜悅の色が母親の顏に上つた。

それからそれへと話は續いた。校長さんは何ういふ人だの、やさしさうな人か何うかの、彌勒といふ處は何んなところかの、下宿する好い處があつたかのと、いろ〳〵なことを持出して母親は聞いた。淸三は一々それを話して聞かせた。

『お父さんは？』

少時して、淸三がかう訊いた。

『鳥渡下忍まで行つて來るつて出かけて行つたよ。何うしても少しお錢を拵へて來なくつてはつてね……。雨が降るから、明日にしたら好いだらうと言つたんだけれど……』

淸三は默つて了つた。貧しい自分の家のことが今更に頭腦に繰返される。父親の働きのないことが齒痒いやうにも思はれるが、一方にはまた、好人物で、善人で、人にだまされ易い弱い鈍い性質を持つてるながら、贋物の書畫を人にはめることを職業にして居るといふことに甚しく不快を感じた。正直なかれの心には、父親の職業は人間のすべき正業ではないやうに常に考へられてるるのである。

騙されさへしなければ、今でも相應な呉服屋の店を持つて居られたのである。かう思ふと、何も知ら

『さうかえ、峯田で借りて來たのかえ……本當に大變だつたねえ。』かう言つて、雜巾を勝手から持つて來ようとすると、

『雜巾では駄目だよ。母さん、バケツに水を汲んで下さいな。』

『そんなに汚れて居るかえ。』

と言ひながら勝手からバケツに水を半分ほど汲んで來る。

乾いた手拭をも其處に出した。

淸三は綺麗に足を洗つて、手拭で拭いて上にあがつた。母親は其間に、結城縞の綿入と、自分の紬の着物を縫ひ直した羽織とを揃へて其處に出して、脫いだ羽織と袴とを手ばしこく衣紋竹にかける。

二人はやがて長火鉢の前に坐つた。

『何うだつたえ？』

母親は鐵瓶の下の火をあらけながら、心にかゝる其樣子を訊く。

かいつまんで淸三が話すと、

『さうだつてねえ、手紙が今朝着いたよ。どうしてそんな不都合なことになつて居たんだらうねえ。』

『何あに、少し早く行き過ぎたのさ。』

『それで、話は何う定つたえ？』

ら晩までごた〳〵と人の出入するのが例であるが、今は建附の悪い障子がぴつしやりと閉つて、四邊がしんとして居た。

清三は大和障子をがらりと明けて中に入つた。

年の頃四十位の品の好い丸髷に結つた母親が、裁物板を前に、四邊に鋏、糸卷、針箱などを散らかして、せつせと賃仕事をして居たが、障子が明いて、息子の顏が其處に顯はれると、

『まア、清三かい。』

と呼んで立つて來た。

『まア、雨が降つて大變だつたねえ！』

濡れそぼちた袖やら、はねの揚つた袴などをすぐ見て取つたが、言葉を續いで、

『生憎だつたねえ、お前、昨日の具合では、こんな天氣にならうとは思はなかつたのに……ずつと步いて來たのかえ。』

『步いて來ようと思つたけれど、新鄕に廉いかへり俥があつたから乘つて來た。』

見馴れね足駄を穿いて居るのを見て、

『何處から借りて來たえ、足駄を？』

『峯田で。』

乘せて貰ふ餘地がなかつた。

清三の姿は猶暫く其裏町の古い家並の間に見えて居たが、ふと、ある小さな家の大和障子を明けて入つて行つた。中には中年の上さんが居た。

『下駄を一つ貸して頂きたいんですが……彌勒から雨に降られて閉口して了ひました。』

『お安い御用ですとも。』

上さんは足駄を出して與れた。

足駄の歯はすれて曲つて、歩き惜いこと一通でなかつた。駒下駄よりは好いが、ハネは矢張少しづつのがつた。

かれは遂に新鄕から五十錢で俥に乘つた。

五

家は行田町の大通から、昔の城址の方へ行く横町にあつた。角に柳の湯といふ湯屋があつて、其れと對して、綺麗な女中のゐる料理屋の入口が見える。棟割長屋の一軒仕切つたといふやうな軒の低い家で、風雨に曝されて黑くなつた大和障子に糸のやうな細い雨が斜に降り懸つた。隣には繭の仲買をする人が住んでゐて、其時節になると、狹い座敷から臺所、茶の間、入口まで、白い繭で一杯になつて、朝か

光に干されて、下では蒼白い顔をした女がせつせと張物をして居たが、今日は障子がぴつしやりと閉ぢられて、日當りの悪い處には青ごけの生えたのが汚なく眼に着いた。

段々道が悪くなつて來た。拾つて歩いてもピシャ〳〵しないやうな處はもうなくなつた。足の踵を離さないやうにして歩いても、摩滅した駒下駄からは絶えずハネが揚つた。風が出て雨も横しぶきになつたので袖も濡れて了つた。

羽生の町は淋しかつた。時々番傘や蛇の目傘が通るばかり、庇の長く出た廣い通りは森閑として居る。郵便局の前には爲替を受取に來た若い女が立つて居るし、呉服屋の店には番頭と小僧とが固まつて話をしてゐるし、足袋屋の店には青縞と雲齋織とが積重ねられた中で、職人がせつせと足袋を縫つて居た。新式に硝子戸の店を造つた唐物屋の前には、自轉車が一箇、半は軒の雨滴に濡れながら置かれてある。

町の四辻には半鐘臺が高く立つた。

そこから行田道は岐れて居る。煙草屋、うどん屋、醫師の大きな玄關、塀の上に聳えてゐる形の面白い松、吹井が清い水を噴いて居る豪家の前を向うに出ると、草の生えた溝があつて、白いペンキのはげた門に、羽生分署といふ札がかゝつて居る。巡査が一人、劍をちやらつかせて、雨の降頻る中を出て來た。

それからまた裏町の人家が續いて、多くはこけら葺の古い貧しい家並である。馬車屋の前に、乘合馬車が一臺あつて、もう出ると見えて、客が二三人乘込んで居た。淸三は立留つて聞いたが、生憎一杯で

額髪を手拭で卷いた子守が二人、子守歌を調子よく唄つて居た。

昨日の賣殘りのふかし甘藷が不味さうに並べてある店もあつた。雨は細く糸のやうに其低き軒を掠めた。

畑には漸く芽を出しかけた桑、眼もさめるやうに黄い菜の花、れんげや菫や草の生えて居る畔、遠くに杉や樫の森に圍まれた豪農の白壁も見える。

青縞を織る音が處々に聞える。チヤンカラチヤンカラと忙しさうな調子が絶えず響いて來る。時には四邊にそれらしい人家も見えないのに、何處で織つてるのだらうと思はせることもある。唄が若々しい調子で聞えて來ることもある。

發戸河岸の方に岐れる路の角には、此處等で評判だといふ饂飩屋があつた。朝から大釜には湯が沸つて、主らしい男が、大きなのべ板にうどん粉をなすつて、せつせと玉を伸して居た。赤い襷を懸けた若い女中が馴染らしい百姓と笑つて話して居た。

路の曲つた處に、古い石が立てゝある。維新前からある境界石で『これより羽生領』としてある。

ひろい長い榛の片側並木が田圃の間に一しきり長く續く。それに沿つて細い川が流れて、萌出した水草のかげを小魚がちよろ〳〵泳いで居る。羽生から大越に通ふ乘合馬車が泥濘を飛して通つて行つた。

來る時には、路傍のこけら葺の汚いだるま屋の二階の屋根に、襟垢のついた蒲團が春の日ののどかな

學校はまだ授業が始まらぬので、門から下駄箱の見える邊には、生徒の傘がぞろ〳〵と續いた。男生徒も女生徒も多くは包を腰の處に負つて尻を褰げて歩いて來る。雨の降る中を濡れそほちながら、傘を車の輪のやうに地上に廻して來る頑童もあれば、傘の柄を頸の處で押へて、編棒と毛糸とを動かして歩いて來る十二三の娘もあつた。この生徒等を來週からは自分が教へるのだと思つて、淸三は其前を通つた。

明方から降出した雨なので、路はまださう大して惡くなかつた。車や馬の通つた處はグショ〳〵して居るが、拾へば泥濘にならぬ處がいくらもある。道の緣の乾いた土には雨がまだ僅かに浸込んだばかりであつた。

井泉村の役場に助役を訪ねて見たが、まだ出勤して居なかつた。道に沿つた長い汚い溝には、藻や藺や葦の新芽や澤瀉がごた〳〵と生えて、淡竹の雨を帶びた藪がその上に蔽ひ冠さつた。雨滴がばら〳〵落ちた。

路の畔に軒の傾いた小さな百姓家があつて、壁には鋤や犂や古い簑などがかけてある。髮の亂れた肥つた嚊が柱に凭り懸つて、今年生れた赤兒に乳を呑ませて居ると、亭主らしい鬚面の四十男は雨に仕事の出來ぬのを退屈さうに、手を伸して大きな欠をして居た。

鎭守の八幡宮の茅葺の古い社殿は街道から見える處にあつた。華表の傍には社殿修繕の寄附金の姓名と額とが古く新しく並べて書いてある。周圍の欅の大木にはもう新芽が萌し始めた。賽錢箱の前には、

か？」

かれはかう訊ねた。

『ようござんすとも……それでは來週から勤めて戴くやうに……』

其夜は矢張役場の小使室に寢た。

四

朝起ると春雨が蕭々と降つて居た。

濡れた麥の綠と菜の花の黄とはいつもよりは際立つて美しく野を彩つた。村の道を蛇の目傘が一つ通つて行つた。

清三は八時過ぎに、番傘を借りて、雨を衝いて出た。それには三田ケ谷村役場と黑々と大きく書き附けてあつた。

小川屋の傍の川綠の繁みからは、雨滴がはら〳〵と傘の上に亂れ落ちた。錆びた黑い水には蠑螈が赤い腹を見せて居る。ふと街道の取つきの家から、小川屋のお種といふ色白娘が、白い手拭で髮を掩つたまゝ、傘もさゝずに、大きな雨滴の落ちる木蔭を急いで此方に遣つて來たが、二三歩前で、淸三と顏見合せて、烏渡會釋して笑顏を見せて通り過ぎた。

の高い、眉と眉との間の遠い客の姿を見て、弱々しい人だと思つた。次の間では話をして居る間、今年生れた子が間斷なしに泣いたが、しかし主はそれを喧しいとも言はなかつた。

襤褸が四邊に散らばつて、火鉢の鐵瓶はカラ〳〵煮え立つて居た。

中學の話が出る。師範校の話が出る。教授上の經驗談が出る。同僚になる人々の噂が出る。清三は思はず興に乘つて、理想めいたことやら、家庭の爲の犧牲と言ふことやら、其他いろ〳〵のことを打明けて語つて、一生小學校の教員をする氣はないといふやうなことまでほのめかした。清三は昨日學校で逢つた時に似ず、この校長の存外性質の好さゝうな處のあるのを發見した。

校長の語る處によると、此三田ケ谷といふ地は村長や子弟の父兄の權力の強い處で、その間を取つて行くのが中々難かしさうである。それに人氣も餘り好い方ではない、發戸、上村君、下村君などいふ利根川寄りの村落では、青縞の賃機が盛んで、若い男や女が出入するので、風俗も何うも惡い。七八歲の子供が卑猥極まる唄などを覺えて來てそれを平氣で學校で唄つて居る。「私が此處に來てから、もう三年になりますが、其時分は生徒の風儀はそれは隨分酷かつたものですよ。初めは私もこんなところにはとてもつとまらないと思つた位でしたよ。今では、それでも大分よくなつたがな。」と校長は語つた。

歸る時に、

「明日は土曜日ですから、日曜にかけて一度行田に歸つて來たいと思ひますが、お差支はないでせう

『それぢやまだ知らずに居りましたのですか。』

『内々は知つてるでせうけれど……表向はまだ發表してないんです。二三日の中にはすつかり村會で決めて了ふつもりですから、來週からは出て戴けると思ひますが……』かう言つて、少し途切れて、『私の方の學校は皆な好い方ばかりで、萬事總て圓く行つて居ますから、始めて來た方にも勸め好いです。貴方も一つ大に奮發して戴きたい。俸給もその中には段々何うかなりますから……』

煙草を一服吸つて、トンと叩いて、

『貴下はまだ正教員の免狀は持つて居ないんですね？』

『えゝ。』

『ぢや一つ、取つて置く方が、萬事都合が好いですな。中學の證明があれば、實科を少し遣れば譯はありやしないから……教授法はちつとは讀みましたか？』

『少しは讀んで見ましたけれど、何うも面白くなくつて困るんです。』

『何うも教授法も實地に當つて見なくつては面白くないものです。遣つて見ると、これで中々味が出て來るものですがな。』

學校教授法の實驗に興味を持つ人間と、詩や歌にあこがれて居る青年とがかうして長く相對して坐つた。點心には大きい鹽煎餅が五六枚盆に載せて出された。校長の細君は挨拶をしながら、顏の蒼白い、鼻

校長の家は遠くはなかつた。麥の青い畑の所々に黄い菜の花の一畦が交つた。茅葺屋根の一軒立ではあるが、つくりは總て百姓家の構で、廣い入口、六疊と八疊と續いた室の前に小さな庭があるばかりで、細君のだらしのない姿も、子供の泣顏も、茶の間の長火鉢も、疊の汚れて破れたのも、表から來る人の眼に皆映つた。校長の室には學校管理法や心理學や教育時論の赤い表紙などが見えた。

『君には本當に氣の毒でした。實はまた手管だけで、表向にしなかつたものだからねえ……』と言つて、細君の運んで來た茶を一杯ついで出して、『君も御存じかも知れないが、平田といふあの年の寄つた教員、あれがもう老朽で仕方がないから、轉校か免職かさせようと言つて居た處へ、丁度加藤さんからさういふ話があるつて岸野君が言ふもんだから、それでお賴みしようつて言ふことにしたのでした。處が少し貴方のお出が早かつたものだから……』

言ひ懸けて笑つた。

『さうでしたか、少しも知りませんものでしたから……』

『それはさうですとも、貴君の知る譯はない。岸野さんが今少し注意して吳れると好いんですけれど、あの人はあゝいふ風で、何事にも無頓着ですからな。』

『それぢや其教員が居たんですね？』

『えゝ。』

22.0……名刺
3.5……歯磨及楊子
8.5……筆二本
14.0……硯
1,15.0……帽子
1,75.0……羽織
30.0……へこ帯
14.5……下駄

4,07.5

これに前の七十錢五厘を加へて總計四圓七十八錢也と書いて、そして此金をつくるに就いて、父母の苦心したことを思ひ出した。僅か一圓の金すら容易に出來ない家庭の憐むべきをつく〴〵味氣なく思つた。

夜着の襟は汚れて居た。旅の緩かな悲哀がスウイトな涙を誘つた。彼はいつか微かに鼾を立てゝ居た。

翌日は學校の豫算表の筆記を頼まれて、役場で一日を暮した。それがすんでから、父母に手紙を書いて出した。

夕暮に校長の家から使がある。

『遊んでなんか居られねえ、これから跡仕舞しねきやなんねえ……それだらお休み、』と出て行つて了ふ。

辨當には玉子燒に漬物とが入れられてあつた。小使は出流れの溫い茶をついで吳れた。やがて爺は向うへ行つて、內職の藁を打ち始めた。夜はしんとして居る。蛙の聲に家も身も埋めらるゝやうに感じた。かれは想像にも勞れ、さりとて讀むべき雜誌も持つて來なかつたので、包の中から洋紙を橫綴にした手帳を出して、鉛筆で日記をつけ出した。

四月二十五日と前の日に續けて書いて、不圖思ひ附いて鉛筆を倒にして、ゴムでゴシ〱消した。今日は少くとも一生の中で新しい生活に入る記念の第一日である。小說ならば、編が改まるところである。で、かれは頁の裏を半分白いまゝにして置いて、次の頁から新に書き始めた。

四月廿五日、(彌勒にて)……

一頁ほど簡單に書終つて、次手に今日の費用を數へて見た。新鄕で買つた天狗煙草が十錢、途中の俥代が三十錢、淸心丹が五錢、學校で取つた辨當が四錢五厘、合計四十九錢五厘、持つて來た一圓二十錢の中から差引七十錢五厘がまだ蝦蟇口の中に殘つて居た。續いて今度此處に來るに就いての費用を計算して見た。

人に好かれるやうに艶な處があつて、豐かな肉づきが頰にも腕にも露はに見えた。

『お母、加減が惡いつて聞いたが、何うだい。もう好いかな。』

『あゝ。』

『風邪だんべい。』

『寒い思をしてはいけない〳〵つて言つても、假寢なぞして居るもんだから……風邪を引いちやつたんさ……』

『お母、好い氣だからなァ。』

『本當に困るよ。』

『でも、お種坊はかせぎものだから、お母、樂が出來らァな。』

娘は默つて笑つた。少時して、

『お客樣の辨當は、明日も持つて來るだんべいか。』

『さうよ。』

『それぢや、お休み。』

と娘は歸り懸けると、

『まァ、好いぢやねえか、遊んで行けやな。』

近い森や道や畑は名殘なく暮れても、遠い山々の頂はまだ明るかつた。淺間の煙が刷毛ではいたやうに夕燒の空に靡いて、その末がぼかしたやうに廣く擴がり渡つた。蛙の聲が其處にも此處にも聞え出した。處々の農家に灯が點つて、唄をうたつて行く聲が何處か遠くで聞える。

かれはぢつと立盡して居た。

ふと前の榛の並木のあたりに、人の來る氣勢がしたと思ふと、華やかに笑ふ聲がして、足音がばたばた聞える。小川屋に辨當と夜具を取りに行つた小使が歸つて來たのだと思つて居ると、夕闇の中から大きな夜具を被いた黑い影が浮き出すやうに動いて來て、其後に女らしい影がちよこ〱跟いて來た。

小使は室の中にドサリと夜具を置いて、さも重かつたといふやうに呼吸を吐いたが、晝間掃除して置いた三分心の洋燈に火を點した。四邊は急に明るくなつた。

『御苦勞でした。』

かう言つて淸三は戶內に入つて來た。

此時、淸三は、其處に立つて居る娘の色白の顏を見た。娘は携へて來た辨當を其處に置いて、急に明るくなつた一室を眩しさうに見渡した。

『お種坊、遊んで行くが好いや。』

小使はこんなことを言つた。娘は莞爾と笑つて見せた。評判な美しさといふ程でもないが、眉の處に

ふ老朽と若い脊廣の關といふ准教員とが廊下の柱の處に立つて、久しく何事をか語つて居た。二人は時時此方を見た。

ベルがまた鳴つた。校長も教員も皆出て行つた。生徒はぞろ〳〵と潮のやうに集つて入つて來た。女教員は教員室を出ようとして、じろりと清三を見て行つた。

唱歌の時間だと見えて、講堂に生徒が集つて、やがて緩かなオルガンの音が靜かな校内に聞え出した。

三

村役場の一夜はさびしかつた。小使の室にかれは寢ることになつた。日のくれ〴〵に、勝手口から井戸の傍に出て、平野をめぐる遠い山々のくらくなるのを眺めてゐると、身も引入れられるやうな哀愁がそれとなく心を襲つて來る。父母のことが犇々と思ひ出される。幼い頃は兄弟も多かつた。其頃父は足利の呉服屋をしてゐた。財産もかなり豐であつた。七歳の時沒落して熊谷に來た時のことをかれは朧げながらに覺えて居る。母親の泣いたのを不思議に思つたのをも覺えて居る。今は――兄も弟も死んで了つて自分一人になつた今は、家庭の關係に就いても、他の學友のやうな自由なことは言つて居られない。人の好い父親と弱々しい情愛の深い母親とを持つた此身は、生れながらにして旣に薄倖の運命を得て來たのである。かう思ふと、例のセンチメンタルな感情が烈しく胸に迫つて來て、涙がおのづと押すやうに出る。

めての世間への首途、それがかうした冷淡な幕で開かれようとはかれは思ひもかけなかつた。

一時間後、かれは學校へ行つて、校長に逢つた。授業中なので、三十分ほど教員室で待つた。教員室には掛圖や大きな算盤や書籍や植物標本やいろ／＼なものが散らばつて亂れて居た。女教員が一人隅の方で何かせつせと調物をして居たが、始め一寸挨拶した限りで、言葉も懸けてくれなかつた。やがてベルが鳴る。長い廊下を生徒はぞろ／＼と整列して來て、『別れ』を遣ると其儘、蜘蛛の子を散らしたやうに廣場に散つた。今迄の靜謐とは打つて變つて、足音、號令の音、散らばつた生徒の騷ぐ音が校内に滿ち渡つた。

校長の脊廣には白いチョウクがついて居た。顏の長い、脊の高い、何方かといへば痩せた方の體格で、師範校出の特色の一種の『氣取』が其態度に歷々と見えた。知らぬ振りをしたのか、それとも本當に知らぬのか、清三にはその時の校長の心が解らなかつた。

校長はこんなことを言つた。

『ちつとも知りません……しかし加藤さんがさう言つて、岸野さんも御存じなら、いづれ何とか命令があるでせう。少し待つて居て戴きたいものですが……』

時宜によればすぐにも使者を遣つて、よく聞糺して見てもいゝから、今夜一晩は不自由でもあらうが役場に泊つて呉れとのことであつた。教員室には、教員が出たり入つたりして居た。五十位の平田とい

根が水彩書のやうに見渡される。

應接室は井泉村役場の應接室よりも綺麗であつた。其處からは吏員の事務を執つて居る室が硝子窓を透して分明と見えた。卓の上には戸籍臺帳やら、收稅帳やら、願届を一纏めにした書類やらが秩序よく置かれて、頭を分けた瘦削の二十四五の男と、五十位の頭のはげた爺とが何かせつせと書いて居た。助役らしい鬚の生えた中年者と土地の勢力家らしい肥つた百姓とが頻りに何か笑ひながら話してゐたが、をり〳〵煙管をトン〳〵と拍く。

村長は四十五位で、痘痕面で、頭は半ば白かつた。此處あたりによく見るタイプで、言葉には時々武州訛が交る。井泉村の助役の手紙を讀んで、卷き返して、『私は視學からも助役からもさういふ話は聞かなかつたが……』と頭を傾けた時は、淸三は不思議な思ひに打たれた。何だか狐につまゝれたやうな氣がした。視學も岸野も餘り無責任に過ぎるとも思つた。

村長は暫く考へて居たが、やがて『それぢやもう內々轉任の話も定つたのかも知れない。今居る平田といふ敎員が評判が悪いので、變へるつて言ふ話は鳥渡聞いたことがあるから。』と言つて、

『一つ學校へ行つて、校長に逢つて聞いて見る方が好い。』

橫柄な口の利き方が先づわかいかれの矜持を傷けた。

何も出來もしない百姓の分際で、金があるからと言つて、生意氣な奴だと思つた。初めての敎員、初

役場は其街道に沿つた一固まりの人家の中にはなかつた。人家が盡きると、昔の城址でもあつたかと思れるやうな土手と濠とがあつて、土手には笹や草が一面に繁り、濠には汚ない銹びた水が樫や椎の大木の影を帶びて、更に暗い寒い色をして居た。其濠に沿つて曲つて一町ほど行つた處が役場だと淸三は敎へられた。かれは此處で俥代を二十錢拂つて、俥を捨てた。笹藪の傍に茅葺の家が一軒、古びた大和障子に御料理そば切うどん小川屋と書いてあるのがふと眼に留つた。家の周圍は畑で、麥の靑い上には雲雀が好い聲で低く囀つて居た。

彌勒には小川屋といふ料理屋があつて、學校の敎員が宴會をしたり飮食に行つたりするといふことを兼ねて聞いて居た。當分は其料理屋で賄もして呉れるし、夜具も貸して呉れるとも聞いた。其處にはお種といふ綺麗な評判な娘も居るといふ。淸三は四邊に人の居なかつたのを幸ひ、通り懸りの足をとゞめて、低い垣から庭をのぞいて見た。庭には松が二三本、櫻の葉になつたのが二本、障子の黑いのが殊に際立つて眼についた。

垣の隅には椿と珊瑚樹との厚い綠の葉が日を受けて居た。椿には花がまだ二つ三つ葉がくれに殘つて見える。

此邊の名物だといふ赤城おろしも、四月に入ると全く止んで、今は野も綠と黃と赤とで美しく彩られた。麥の畑を貫いた細い道は、向うに見えるひよろ長い榛の並木に通じて、其間から役場らしい藁葺屋

根が水彩畫のやうに見渡される。

應接室は井泉村役場の應接室よりも綺麗であつた。其處からは吏員の事務を執つて居る室が硝子窓を透して分明と見えた。卓の上には戸籍臺帳やら、收税帳やら、願届を一纒めにした書類やらが秩序よく置かれて、頭を分けた痩削の二十四五の男と、五十位の頭のはげた爺とが何かせつせと書いて居た。助役らしい鬚の生えた中年者と土地の勢力家らしい肥つた百姓とが頻りに何か笑ひながら話してゐたが、をり〳〵煙管をトン〳〵と拍く。

村長は四十五位で、痘痕面で、頭は半ば白かつた。此處あたりによく見るタイプで、言葉には時々武州訛が交る。井泉村の助役の手紙を讀んで、卷き返して『私は視學からも助役からもさういふ話は聞かなかつたが……』と頭を傾けた時は、淸三は不思議な思ひに打たれた。何だか狐につまゝれたやうな氣がした。視學も岸野も餘り無責任に過ぎるとも思つた。

村長は暫く考へて居たが、やがて『それぢやもう內々轉任の話も定つたのかも知れない。今居る平田といふ敎員が評判が惡いので、變へるつて言ふ話は鳥渡聞いたことがあるから、』と言つて、『一つ學校へ行つて、校長に逢つて聞いて見る方が好い。』

橫柄な口の利き方が先づわかいかれの矜持を傷けた。

何も出來もしない百姓の分際で、金があるからと言つて、生意氣な奴だと思つた。初めての敎員、初

役場は其街道に沿つた一固まりの人家の中にはなかつた。人家が盡きると、昔の城址でもあつたかと思れるやうな土手と濠とがあつて、土手には笹や草が一面に繁り、濠には汚ない錆びた水が樫や椎の大木の影を帶びて、更に暗い寒い色をして居た。其濠に沿つて曲つて一町ほど行つた處が役場だと清三は敎へられた。かれは此處で俥代を二十錢拂つて、俥を捨てた。笹藪の傍に茅葺の家が一軒、古びた大和障子に御料理そば切うどん小川屋と書いてあるのがふと眼に留つた。家の周圍は畑で、麥の靑い上には雲雀が好い聲で低く囀つて居た。

彌勒には小川屋といふ料理屋があつて、學校の敎員が宴會をしたり飮食に行つたりするといふことを兼ねて聞いて居た。當分は其料理屋で賄もして吳れるし、夜具も貸して吳れるとも聞いた。其處にはお種といふ綺麗な評判な娘も居るといふ。淸三は四邊に人の居なかつたのを幸ひ、通り懸りの足をとゞめて、低い垣から庭をのぞいて見た。庭には松が二三本、櫻の葉になつたのが二本、障子の黑いのが殊に際立つて眼についた。

垣の隅には椿と珊瑚樹との厚い綠の葉が日を受けて居た。椿には花がまだ二つ三つ葉がくれに殘つて見える。

此邊の名物だといふ赤城おろしも、四月に入ると全く止んで、今は野も綠と黃と赤とで美しく彩られた。麥の畑を貫いた細い道は、向うに見えるひよろ長い榛の並木に通じて、其間から役場らしい藁葺屋

彌勒までは其處からまだ十町ほどある。

二

三田ヶ谷村と謂つても、一ところに人家が固つて居る譯ではなかつた。其處に一軒、彼處に一軒、杉の森の陰に三四軒、野の畠の向うに一軒といふ風で、町から來て見ると、何だかこれでも村といふ共同の生活をして居るのかと疑はれた。けれど少し行くと、人家が兩側に並び出して、汚い理髮店、だるまでも居さうな料理屋、子供の集つた駄菓子屋などが眼に留つた。ふと見ると平家造の小學校が其の右にあつて、門に三田ヶ谷村彌勒尋常高等小學校と書いた古びた札が懸つてゐる。授業中で、學童の誦讀の聲に交つて、をり〳〵教師の甲走つた高い聲が聞える。埃に汚れた硝子窓には日が當つて、處々生徒の並んで居るさまや、黒板やテイブルや洋服姿などが微かに透して見える。出入の時に生徒で一杯になる下駄箱の邊も今はしんとして、廣場には白斑の犬がのそ〳〵と餌をあさつて居た。

オルガンの音が微に講堂と覺しき邊から聞えて來る。

學校の門前を俥は通り拔けた。其處に傘屋があつた。家中を油紙やしぶ皿や糸や道具などで散らかして、其中央に五十位の中爺がせつせと、傘を張つて居た。家の周圍には油を布いた傘のまだ乾かないのが幾本となく干しつらねてある。清三は俥を停めて、役場のあるところを此の中爺に訊ねた。

た。

『頼む。』

と聲を立てると、奥から小使らしい五十男が出て來た。

『助役さんは出て入らつしやいますか。』

『岸野さんかな。』

と小使は眼をしよぼ〳〵させて反問した。

『あゝ、さうです。』

小使は名刺と視學からの手紙とを受取つて引込んだが、やがて清三は應接室に導かれた。應接室と謂つても卓や椅子があるではなく、がらんとした普通の六疊で、粗末な瀬戸火鉢が中央に置かれてあつた。助役は肥つた脊の低い男で、縞の羽織を着て居た。視學からの手紙を見て、『さうですか、貴郎が林さんですか。加藤さんから此間其話がありました。紹介狀を一つ書いて上げませう。』かう言つて、汚い硯箱を取寄せて、何か頻りに考へながら、長く默つて、一通の手紙を書いて、上に三田ヶ谷村村長石野榮造樣といふ宛名を書いた。

『それぢやこれを彌勒の役場に持つて入らつしやい。』

『弱いことを言ふもんぢやないよ。』

『君のやうだと好いけれど……』

『僕が何うしたつていふんだ？』

『僕は君などと違つて、ラヴなどの出來る柄ぢやないからな。』

清三は郁治をいろ／\に慰めた。清三は友を憐みまた己を憫んだ。

色々な顏と事件とが眼に映つては消え映つては消えた。路には榛の疎らな並木やら、庚申塚やら、畠やら、百姓家やらが俥の進むまゝに送り迎へた。馬車が一臺、後から來て、砂烟を立てゝ追越して行つた。

郁治の父親は郡視學であつた。郁治の妹が二人、雪子は十七、しげ子は十五であつた。清三が毎日のやうに遊びに行くと、雪子は常に莞爾として迎へた。繁子はまだほんの子供ではあるが『少年世界』などをよく讀んで居た。

家が貧しく、到底東京に遊學などの出來ぬことが清三にも段々意識されて來たので、遊んで居ても仕方がないから、當分小學校にでも出た方が好いといふ話になつた。今度月給十一圓でいよ／\羽生在の彌勒の小學校に出ることになつたのは、全く郁治の父親の盡力の結果である。

路の傍に小さな門があつたと思ふと、井泉村役場といふ札が眼に留つた。清三は俥を下りて門に入つ

そんなことを考へて居ないね。』かう言ひかけて急にはしやいだ調子で、

『もし君がArtに行けば、……さうさな、僕は丁度小畑とMiss Nとに對する關係のやうな考で、君とArtに對するやうになると思ふね。』

『ぢや僕は其方面に進むぞ。』

郁治は一歩を進めた。

淸三は今、俥の上で其時のことを思ひ出した。心臓の鼓動の尋常でなかつたことをも思出した。そして其夜日記帳に、『かれ、幸多かれ、願はくば幸多かれ、ォヽ神よ、神よ、かの友の淸きラヴ、美しき無邪氣なるラヴに願はくば幸多からしめよ、涙多き汝の手を以て願はくば幸多からしめよ、神よ、願ふ、親しき友の爲めに願ふ、』と書いて、机の上に打伏したことを思ひ出した。

それから十日ほど經つて、二人は其女の家を出て、士族屋敷のさびしい暗い夜道を通つた。其日は女は居なかつた。女は浦和に師範學校の入學試驗を受けに行つて居た。

『何んなことでも人の力を盡せば、出來ないことはないとは思ふけれど……僕は先天的にさういふ資格がないんだからねえ。』

『そんなことはないさ。』

『でもねえ……』

『僕には君、大祕密があるんだがね。』
其調子が輕かつたので、
『僕にもあるさ！』
と清三が笑つて合せた。
調子拔けがして、二人はまた默つて歩いた。
少時して、
『君はあの「尾花」を知つてるね。』
郁治はかう訊ねた。
『知つてるさ。』
『君は先生にラヴが出來るかね。』
『いや、』と清三は笑つて、『ラヴは出來るか何うか知らんが、單に外形美として見てる事は見てるさ。』
『Aの方は？』
『そんな考はない。』
郁治は躊躇しながら、『ぢや、Art は？』
清三の胸は少しく躍つた。『さうさね、機會が來れば何うなるかわからんけれど……今の處では、まだ

母からして既にさうである。それに周圍の人々の自分に對する言葉の中にもそれが見える。常に往來して居る友人の群の空氣もそれ〴〵に變つた。

ふと思ひ出した。

十日ほど前、親友の加藤郁治と熊谷から歩いて歸つて來る途中で、文學のことやら將來のことやら戀のことやらを話した。二人は一少女に對するある友人の關係に就いて先づ語つた。

『さうして見ると、先生中々御執心なんだねえ。』

『此間まではそんな樣子が少しも無かつたから、何でも無いと思つて居たのさ、現に此間も「大いに悟つた」つて言ふから、ラヴの爲めに一身上の希望を捨てゝはつまらないと思つて、それであきらめたのかと思つたら、正反對だつたんだね。』

『さうさ。』

『不思議だねえ。』

『此間、手紙を寄越して、「余も卿等の余のラヴの爲めに力を貸せしを謝す。余は初めて戀の物うきを知れり。しかして今は此ラヴの進み進まんを願へり、Physical なしに……」なんて言つて來たよ。』

この Physical なしにといふ言葉は、清三に一種の刺戟を與へた。郁治も默つて歩いた。

郁治は突然、

田舍教師

一

四里の道は長かつた。其間に青縞の市の立つ羽生の町があつた。田甫にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重櫻が散りみだれた。赤い蹴出を出した田舍の姐さんがをり〳〵通つた。

羽生からは俥に乘つた。母親が徹夜して縫つて呉れた木綿の三紋の羽織に新調のメリンスの兵兒帶、俥夫は色の褪せた毛布を袴の上にかけて、梶棒を上げた。何となく胸が躍つた。

清三の前には、新しい生活がひろげられて居た。何んな生活でも新しい生活には意味があり希望があるやうに思はれる。五年間の中學校生活、行田から熊谷まで三里の路を朝早く小倉服着て通つたこともう過去になつた。卒業式、卒業の祝宴、初めて席に侍る藝妓なるものゝ嬌態にも接すれば、平生難かしい顏をして居る教員が銅鑼聲を張上げて調子外れの唄をうたつたのをも聞いた。一月二月と經つ中に、學校の窓から覗いた人生と實際の人生とは何處となく違つて居るやうな氣が段々して來た。第一に、父

田舍教師

少なくとも嫉妬憎惡の煩悶であつたことを想像してかれは微笑した。

丘の家に殘して行つた道具を馬橋が取りに來たのは、それから十日ほど經つてからであつた。馬橋は例の袴を穿いて、車をつれて來た。『それは貴方がたの道具だから、持つていらつしやるのは好いが、一應先生の方へ斷つて下さい。』お國さんはかう言つて、容易にそれを渡さなかつた。すると、馬橋は『そんな面倒臭いことを言つたつて仕方がない、私のものだから、私が持つて行くに文句はない。』馬橋は車夫に命じて、無理にもそれを運び出させようとしたので、お國さんはつひにそのするがまゝに任せた。お國さんは汚ないバケツの一箇殘つて居たのをもわざと其車に載せて行つて貰つた。

其晩、お國さんは清の家へ來て其話をした。

『愈々最後の幕も濟んだね。』

かう言つて清は笑つた。

しかし三人の間にはまだ一つ問題が殘つて居た。それは寺に置いてある子供の問題であつた。清は其時から其子供に對して一種の憎惡と愛憐とを感じて來た。平行線は猶續いた。

お國さんはかう繰返して言つた。

『何うせ、また、苦勞するのに定つて居るのにねえ、敏子さんも損な人ねえ。』

細君も傍から言つた。

『それは、何うせ、苦勞するに定つてゐるのさ……。しかし巴渦の中に入つて居るものには、そんなことは考へて居られないからな、さういふ風に熱して來ると、後のことも何も考へて居られなくなるからな。』少し考へて、『一體敏子の性質がさうなんだ。其處にあの女の一生の悲劇があるんだ！』

清の頭腦には新たに敏子のことが繰し返して考へられた。馬橋の遣口に就いては、かれは一時は尠なからず激しても見たが、しかしもう以前のやうな烈しい感情は起つて來なかつた。唯、敏子に對しての深い悲哀と同情とが湧いたばかりであつた。時の力といふものが默つてしかも有效に人々の上に働いて居るのを染々と清は感じた。

二三日――一週間――かれは戀の燃えたり消えたりするのをつくづく獨り考へて見る人であつた。毎日通ふ路傍の花園には、遲咲の沈丁花がまだ微かに匂つて居た。

かれはまた周圍を振返つて見た。其前に展けられた人生のパノラマ――それがある處は分明と見え、ある處はボンヤリと霞に包まれて見えた。ある人の心理とある人の心理とがある場合に相觸れて、其處に一種の空氣が出來て來るといふことも考へた。馬橋が敏子に別れてさびしく暮して居る間の煩悶は、

言つた。

それからぷつつりと口を噤んで、火鉢の緣に肘を立て、頰杖をして、傍からいろ〳〵なことを言ひかける細君の言葉も耳に入らないといふ風をしてゐたが、やがて急に立上つて、次の間に敷いてある蒲團の上に長く身を橫へた。深い〳〵長大息の其處から洩れて來るのを細君は聞いた。

三十分ほどして女共は歸つて來た。淸は其の氣勢を聞くや否、すぐ夜着を跳ねのけて立つて行つた。矢張鍵が外からかけてあつたとのことであつた。

『さうですかねえ。矢張馬橋さんの處へ行つたんですかねえ。』人の心の不思議に眼を瞬るやうにしてお國さんは言つた、

戸外には雨がザン〳〵降つて居た。

五十八

敏子は其日の午前に鍵を大屋に預けて、お國さんが歸つたら渡して呉れと言つて、風呂敷包を抱へて出て行つたといふ。

馬橋の下宿に行つて居るといふことも二三日して知れた。

『さうですかねえ、矢張行つたんですかねえ、私などにはさういふ心持がまだ何うしても解りません。』

お國さんは雑巾で汚れた足を拭いて、やがて洋燈の明るい室へ上つて來た。其顏は蒼白かつた。

『一體何う言ふんです？』

改めて淸から訊かれて、お國さんは一伍一什を繰返して話した。馬橋の處に行くやうな素振は今迄にも更になかつた。『まさか馬橋さんの處に行つたんぢやないでせうと私は思ふんですが……私には何うもさう思はれない。』お國さんはかう言つた。

人々はまた死といふことを考へた。敏子の平生の神經性から推すと、そんなことはないとも斷言されなかつた。

暫くしてから、淸は、

『馬橋の處に行つたに相違ない。……それに相違ないと思ふけれど、念の爲め今一度、行つて見て呉れませんか。そして家に鍵がすつかり懸つて居るか何うだか見て來て呉れませんか。家に何うかして居るんなら、鍵がかゝつてることはないだらうから。』かう言つて、室の一隅に坐つてゐる婢に向つて、『お前、お國さんと一緒に行つてやれ。』

雨を衝いて二人の出て行つた間を淸はぢつとして居られなかつた。立つて見たり坐つて見たりした。敏子の靑白い神經性の顏が見えるかと思ふと、眼の下つた馬橋の笑顏が見えた。死ぬことなどはない。それはない。『馬橋の處へ行つたに相違ない。』かう繰返して思つたが、急に、『馬鹿な奴だ！』と口に出して

思はずかう反問した淸の聲は高かつた。細君も眼を睜つた。

『私、今朝姉の處に行つて、今歸つたんですが……戸が閉つて、家内が眞暗なんですの。私のあとで敏子さん出かけて行つたにしても、もう十一時ですからね、歸つて居ない譯がないんですが……それに鍵は敏子さんが持つて居るんですし。』

人々は默つて四邊を見まはした。

『小石川へでも行つたんぢやないか。』

『何うですか……それなら、此處に寄つて何とか一寸言つて行きさうなもんですがね。』

『それもさうだな、』と淸は考へて、『戸は何處も明いてないのですか。』

『何處か明いて居るかも知れませんけれど……私何だか怖くなつて、急いで來ましたの……そんなことはないでせうけれど。』

死——自殺。かう言ふことが俄に人々の頭に上つた。

『そんなことはないだらう。』かうは打消したものゝ矢張淸にも多少はその心配があつた。

また暫く默つた。雨の傘に當る音が耳立つて聞えた。

『まア、お上がんなさいな。』始めて氣が附いたといふやうに細君は闇の中に立つてゐるお國さんに言つた。

敏子は多く口を開かなかつた。顏も蒼白かつた。歸る時、『それぢや、先生、兎に角明日小石川へ行つて相談して來ますから……。いろ〳〵御心配をかけてすみません。』かう言つて、淸の顏を見て、そして別れをつけて行つた。夜は暗かつた。

お國さんも敏子も長い間默つて步いた。

五十七

一夜、雨が盛に降つて居た。

十一時が打つたので、もう寢ようなどと言つて居ると、垣の外で、

『奧さん、奧さん。』

と呼ぶ聲が雨の音に交つて微かに耳に入つた。

『あれ、お國さんだよ。』

細君は返事をして置いて、直ちに婢に裏門の戶を明けさせた。やがて傘にばら〳〵と雨の當る音がして、着物を高く端折上げたお國さんの顏が、一枚明けた雨戶の緣側の處に白く見えた。

『敏子さんが居ないのですがね。』

『敏子が居ない？』

のは御免だ。さうなれば、僕と貴方がたとの間は路頭の人だ！』

敏子は點頭いて見せた。

『本當に、よく考へて見て、すつかり決心した處を話してお了ひなさる方が好いですよ。』

細君がかう言ふと、

『それはねえ、奥さん、私だつて、一緒にならうつて言ふんぢやないんですの。唯、度々遣つて來て困りますもんですからねえ。』

『馬橋さんも困つた人ね。』

一座はまた默つた。洋燈が明るく一間を照した。敏子の顏には心の動搖が明かに見えた。

『女が男に一度節操を許した以上、それが一生の運命となるものだといふことを私はつく〴〵考へずには居られないねえ。』

暫くして清はこんなことを言つた。

其夜は十時過まで話して居た。しかし遂に纏つた話もなかつた。兎に角、小石川の兄さんの處へ行つて、今夜のことを話して、相談して見るといふことになつた。清の意見は歸國說であつた。迷つてはいけない。折角出て來た新しいライフを捨てゝ後戻りするやうな愚は取らない。決斷が肝心だ。かうしたことを清は繰返して言つた。

また沈默が續いた。

抑寄せて來る種々の感情が一座の人々の胸から胸へと電線のやうに傳はつた。馬橋の細い複雜した心理が敏子を通して強い深い反響を淸の胸に與へた。

馬橋は敏子が全く『淸の敏子』になるのを見て居るに忍びなかつた。中年に對する靑年の反抗といふこともかなり力強く交つて居た。其處に解くべからざる暗鬪默鬪があつた。

『第一、不眞面目だ。』やがてかう言つた淸の聲は更に一層の銳さを加へて居た。『子供を育てるのが面倒だからと言つて、生活が充分に出來ないからと言つて、夫婦喧嘩をして一時別れて、子供の處分が附いたから、また一緖になる。こんな暢氣なことはありやしない。これで世の中が渡つて行かれるなら何も心配することがありやしないさ。』わざと冷かに笑つて見せて、『僕には、その了簡が解らない。』

『さういふ譯でもないんでせうけれど。』

お國さんが見兼て傍からかう言ふと、

『さういふ譯ぢやない？　それなら、何もそんなに心配することはないぢやないか。馬橋が遣つて來て困れば、それを避ける方法はいくらもあるぢやないか。僕の家に來て居てもよし、一時國に歸つてもよし、國に顏が出せなければ何處か田舍に行つて居てもよし、何も困ることは少しもないぢやないか。』

敏子が默つて居るのを見て、『兎に角、今一度歸るやうなことがあるならば、僕はもう其巴渦の中に入る

敏子は斜に坐つて、俯向勝にして居た。口は利かないが、時々點頭いて見せた。顏には血が上つて居た。

『本當に、敏子さん、すつかり考へて居ることを言つて了ふ方が好いですよ。』長火鉢の傍に居る細君も傍から口を挿れた。

暫く沈默が續いた。

『それとも何か譯があるんですか？』

暫くして清はかう訊いた。その話があつてから、清は再び敏子を眞中にして馬橋と並び立つて居るやうな心持がした。子供を離した後にかういふことが湧いて出ようとは全く思ひ懸けなかつた。

『いゝえ、別に――譯つて無いんですけども、』敏子は少し言淀んで、『可哀相に思ふには思ひますの。私の爲めに、馬橋が一生を犧牲にするやうなことがありやしないかと思つて。』

『そんなことを考へて居ては駄目だね。』かう言つた清の聲は强かつた。『今更、そんな理想がかつたことを言つてる時ぢやないぢやないか。まだ目が覺めて居ないのですね、貴方は。……一體考へて見てもわかる。子供をあゝいふ風に處分して置いて、そしてそんなことが出來るものですか。』

『それは私も考へて居ますの。』

『一體、貴方は理想家でいかん。今少し冷靜に考へて見なくつては仕方がない。』

かう言つた清の顏には激した感情が歴々と見えた。

傍に坐つて居たお國さんはかう言つて敏子の方を見た。

敏子はそれでも默つて居た。

淸はやゝ激した調子で、『だつて、今更そんなことを言つて居られる場合ではないぢやないか。僕は何も考へることもないと思ふがね……』調子を變へて、『それとも貴方に今一度歸らうつて言ふ氣があるんですか。』

『いゝえ、さうぢやないんですけれど……』

『ぢや、何もそんなに考へる必要はない。貴方さへ決心がついて居れば、馬橋が每日遣つて來たつて差支がない譯だ……。それは本當に貴方の爲めを思つて僕は言ふんだがね、さういふ場合に決斷がつかない爲めに、悲劇に陷つて行く人は世の中にいくらもある。現に僕はいくらもさういふ例を知つて居る。一度決心した以上は、迷はずに、どん〳〵先に出て行かなくつては仕方がない。』敏子の顏を見て、『それに一體、馬橋もけしからんさ。女の處にすぐに出かけて行くと言ふ法はない。つまりかういふことをするのは本能を利用しようといふ一種の性質がするんだ。僕は馬橋をつく〴〵見て居た。最初貴方を誘つたのも、二度目に貴方をつれて身を隱させたのも、皆な今度の遣り口と同じだ。本能――人間の弱點を利用するやうな處が無意識であるかも知らないが、馬橋の性質の何處かにある、貴方もよく考へなくつてはならんと思ふね。』

『兎に角、先生の處へ行つて相談をする方が好いわ。』お國さんはかう勸めた。

五十六

『さう度々遣つて來るやうでは、何うか處分しなくつちやいかんね。……今更歸つて行かれる譯ぢやなし、貴方の爲めにも折角新しいライフが展けようとしてゐる矢先なんだから。』

清がかういふのを聞いて、敏子は低頭いて默つて居た。それは馬橋が來たといふ話をしてから三度目の訪問の夜であつた。初めの時は時を移さずNoといふ簡單な端書を敏子は出した。すると馬橋は其翌日またすぐ丘の家に遣つて來た。女の心を動かす爲めにかれは總ての力と總ての方法とを用ゐることを辭さなかつた。別れて居た間の日記を持つて來て讀んで聞かせたり、孤獨のさびしさをつぶさに語つて聞かせたりした。No!No!No!三度まで女は端書を書いた。しかしその效は遂になかつた。『いくらNoと言つても決してこの心は捨てない。また假令何んな處に身を隱さうとも、屹度さがし出してあとをつけずには置かない……。一生屹度あとを追廻すから、その積でお出なさい。』後にはかう脅迫がましいことも言つた。かと思ふと、子供の誕生日を下宿屋の二階で泣いて暮したことなどを染々とした調子で話して聞かせた。容易に解け難い二人の間柄を人々は思はない譯には行かなかつた。

『貴方の思つて居らつしやることをすつかり先生に仰しやつて了ふ方が好いわ。』

『だつて居る處が解らんし、……それに何處かへ行つてるたんぢやないか。』

お國さんは何だか二人の對話を聞いて居るに忍びないやうな氣がして、勝手元の方へと行つた。人のことだが、敏子の應對振も何だか甚だ齒痒いやうにも思はれた。あれほど愛想をつかして自分から出て來た徑路とも甚だ作はなかつた。

飯を炊きながら、障子を隔てゝ、お國さんは二人の對話を聞いて居た。話は絶えたり續いたりした。高い聲が俄かに低い聲になつたりした。『今一度、考へ直して吳れ。』かう言つて間を置いて、『二人の間はこんなことで終つて了ふやうなものぢやなかつたんだから。本當に僕も惡かつた。今度は眞面目に今一度新しい生活に入つて見たいと思ふから。』かうした男の言葉が女の低い聲に交つて聞えた。かと思ふと、途絶えたやうに二人は默つて了つた。

『YesかNoか。それを本當に聞かせて吳れ。……今すぐつて言ふ譯ぢやない。二三日の中で好いから。』

低い會話の中に、男のかう言つた言葉が際立つて聞かれた。

馬橋は三十分ほどして歸つて行つた。お國さんは支度の出來た朝飯をやがて其處に持出して、茶碗やらお椀やらを茶湯臺の上に並べた。

お國さんも敏子も默つて居た。

朝飯の中途で、敏子は突然、『でもねえ今更ねえ。そんなことは出來はしないわねえ。』

馬橋はかう言ひながら坐つた。また笑つて見せて、
『それにしてもえらい處に住んで居るんだねえ。』誰に言ふでもなくこんなことをまた言つて、『隨分捜した――』
一座はまた默つた。
『でも、困るわ、……話があつたつて何だつて、こんな處に來て下すつては……』
暫くしてかう言つた敏子の聲はやゝ和かにやさしくなつて居た。
『話があるなら、何故先生の方へ仰しやつて下さらないの？』
『先生に言つたつて仕方がない。二人のことは二人で處分するより他には方法がないから。』
『もう處分したんぢやなくつて？』
『まだしやしないさ……。一時、都合で別居して居たばかりだもの。』
『ぢや、何故あんな手紙を寄越したの？』
馬橋は鳥渡行詰つたが、『だつて、我々の間はあんな片々たる手紙で物事が定まるやうな間ぢやないんだから。』
『ぢや、何故、默つて今まで放つて置いたの？　子供のことが決つて了ふまでも何故默つて放つて置いたの？』

五十五

郊外の丘の家に二人が歸つて來てからまだ一週間も經たないある朝、雨戶を明けたお國さんは吃驚して聲を立てた。其處には馬橋が立つて居た。

『えらい處に居るんですねえ。』

かう言つて、馬橋はヅカ〳〵上つて來た。思ひ定めたやうな眼色をして、遁げたつて遁がさないといふ風が明かに見えて居た。お國さんは何うすることも出來なかつた。

暫しは誰も口を開かなかつた。敏子は着物を着替へに四疊半へ行つた。お國さんは蒲團などを疊んで押入に入れた。馬橋は立つて居た。

『何うして、貴方、來たの？』

やがて敏子は四疊半から出て來てかう言つた。眞面目な顏であつた。

『少し話があるんだ。』

馬橋は顏を赤くして笑つて見せた。

『今更、こんな處に來て下すつちや困りますわねえ。』

『だつて、仕方がないさ。』

『お上さんが連れて行つて？』

『え。』

お國さんは點頭いたが、『行きませう。』かう言つて逸早く車に乘つた。敏子も急いで車に上つたが、其處に主僧は奥から出て來て、『それぢや、心配しないで……』かう言つて別れを告げた。車は朝の晴れた日影を受けて、梅の花の盛を過ぎた垣に添つて山門の方へと出て行つた。敏子は後に子供の泣聲が聞えたやうな氣がした。

一時間後には、二人は利根川のある河岸に立つて居た。其日は水の都合で、汽船は其處まで上つて來なかつた。二人は他の四五人の乘客と一緒に、端舟で一里ほど下の河岸まで下らなければならなかつた。やがて端舟はお納戸の色をした綸のやうな流を靜かに下つて行つた。

行着いた河岸には、一雙の汽船が薄い黄い煙を煙突から出して、白いペンキ塗の船體を四邊に浮出す樣に見せて居た。

清が二十五六年前に故鄕から都へ出て行つたのも矢張この河岸からであつた。其時分の大きな椎の樹は、今も其河岸の埠頭の傍に濃い深い蔭をつくつて居るが、その下の茶店に、女達は汽船の出るまでの間を、子供の話などをしながら待つて居た。

『さうしませう。』

『さうしませう。』

『その方が汽車で唯歸るよりは面白いわねえ。』

『そして矢張一日で行けるんでせう。』

『それはさうよ。』

二人は利根川を汽船で歸るといふことをふと思ひついたのである。此間、散歩に行つた時、土手の上から溶々と流れる利根の流を見て、『いゝわねえ、船で歸ると好いわねえ、』と言つた。二三日前には、此處から一里半位しかない河岸まで汽船が毎日上つて來るといふ廣告の札を町の通りの板塀で二人は見た。

翌日の午前の八時頃には、寺の庫裡の入口の前に車がもう二臺來て待つて居た。一番先にこつそりと本堂の方から廻つて出て來たのは敏子であつた。暫く庫裡の壁の處にその痩せた姿と白い顏とを見せて聞耳を立てゝ居たが、家の内から豫期した子供の泣聲も聞えて來ないので、いくらか安心したといふ風でホッと呼吸をついた。

其處にお國さんがソッと出て來た。

『何うして？』

『大丈夫よ。』

林が潮のやうに鳴つた。夜は敏子は一人では決して本堂の一間に留つては居なかつた。お國さんが庫裡に來ると、いつでもその跡について來た。『だつて怖いんですもの。よく貴方怖くなくつてね。』いつもかうお國さんに言つた。

清が歸るといふ日、二人はこれから利根川へ行つて見るなどと言つて、頻りに辨當を拵へて居た。

五十四

寺の本堂に一月以上も居た女達は、いよ／＼歸る支度をした。子供のすつかり馴染むのを待つて居ては際限がない。別れた當座は少しは難かしからうが、もう物を食ふやうになつて居るから、如何やうにも世話が出來る。主僧も上さんもかう言つて子供を引受けて呉れた。

若い母親と子供との別れは辛さうであつた。毛の薄い坊主頭を撫でて眼を赤くして居ることもあれば、抱いたまゝ柱に凭り懸つて、一人物思はしさうにして居ることもあつた。『矢張、別れるのは辛いものねえ。』わざと平氣な調子で言つても、其言葉の底には深い悲哀が籠つて居た。

お國さんは成るたけ其話をしないやうにして居た。

前の日にすつかり荷物を包んで、それを停車場に運んで行つて、汽車便に託した。歸る時、二人はふとこんなことを語り合つた。

『自由にやる方が好いさ。自由といふものは辛いものだが、一方にはまた面白い處があるものだよ。かういふ自由は藝術をやるものにばかり許されるんだ。普通の女には容易に得たいたつて得られない境でせう。』

山崎に向つては、

『日本にもあゝいふ女の藝術生がドシ〳〵出來るやうだと好いねえ。』

などと言つて笑つた。

敏子は成たけ子供を乳から離すことに心を碎いて居た。むづかつて膝に抱かつて來るのをわざと叱つて見たり、乳房に唐辛子をつけて飮ませない工夫をして見たりした。しかし寺の上さんには容易に馴染みさうにも見えなかつた。何方かと言へば主僧には抱かれて行つた。

『子供の好きな人は矢張解るのね。』

お國さんはかう言つた。

しかし寺の娘には段々馴れて行つた。廣い庫裡の玄關で近所の娘達とお手玉などを取つて居ると、其處へお國さんはわざと子を抱いて來て置いて行つたりなどした。後には娘の脊にも負はれて行くやうになつた。

西風の吹く日が多かつた。朝は好い日和で、今日こそ大丈夫と思つたやうな日にも、午後からは大抵

其時も久喜あたりで乘客は大抵下りて了つて、二等室には淸の他に足利あたりの商人らしい男が一人乘つて居るばかりであつた。夕日が車內に一杯にさし通つて、遠くに碧い山を見せた平野は、村やら林やら川やらを段々其前に展いて見せた。其日は何故か淸の胸は微かな顫動を感じて居た。敏子に就いての追憶が漣のやうに靜かに綾をなして打寄せて來た。

物語の中の一章を一頁々々と飜して居るやうな氣がして仕方がなかつた。かれはこれから先の一章を考へた。また最後の一章のいかに結ばれて行くかをも想像した。靑年からの親友で且つ妻の兄なる山崎が、かうして敏子の子を養育することになつたといふことも一種不可思議の緣のやうに思はれた。

その敏子の子が成長した後のことも想像しない譯には行かなかつた。かれは五年後、十年後に此の同じ線路の汽車に乘つて行く自分を頭腦に描いても見た。『誰れか好い配偶者がありさうなものだが……しかし前の男とさういふ風になつて居てはねえ。』こんなことを言つたある友達の言葉も繰返された。

『何うも不思議な緣さね、君。』

淸が言はうとしたのを山崎が先づ言つた。

女達が本堂に自炊生活をして居るさまも、淸の眼には意味深く映つた。町に使ひに行くお國さんや、子供を抱いて出て來る敏子などを、このさびしい田舍寺の本堂に置いて見ることが、淸にはめづらしくもあり面白くもあつた。

ことをおくする譯には行かないわね。追憶と言ふことは辛いものねえ。』

かう敏子は言つた。

ある日、夕日のさびしく射した本堂の前の墳墓を見ながら、敏子は子供を抱いて立つて居た。蒼白い顏には、闇の暗影の色が見えた。

葉の無い銀杏の樹の向うに、不動堂の屋根が見えて、其の高い縁には、子守が二三人遊んで居た。

其處に、お國さんが來て、

『何うかして？』

『いゝえ……』

敏子は強ひて笑つて見せたが、しかし眼には涙が滿ちて居た。やがてしんみりした調子で、

『運命と言ふものは不思議なものねえ。馬橋がちさい時、矢張お寺で育てられたんですつて。この子もかうして此處で育てられるツて言ふのはねえ。』

お國さんも默つて了つた。野には夕暮の雲が通つた。

五十三

二人が寺に居る間に、靖も一度東京から訪ねて行つた。

二人はよく出懸けた。停車場前に郵便を出しに行つた次手に野を逍遙つて見たり、湯に行つた歸りにさびしい寒い町を歩いて見たりした。其頃、町の外れの芝居小屋に女役者が乘りこんで來るといふ噂があつた。ある晩、二人が野菜を買ひに八百屋に入つて行くと、其處に居た中年の男が突然、『芝居はいつから始まるんけえ。』と聲を懸けた。二人は始めはそれは自分達に言つたのとは氣がつかなかつた。

『お前さん方、芝居の衆ぢやねえんけ。』

これで始めて女役者に間違へられたことが解つて、二人は噴飯して笑はずには居られなかつた。溝に沿つた暗い道を歩きながら『女優に間違へられるなぞ本當に日記に特筆大書して置いても好いわねえ。一代の名譽ねえ。』敏子はこんなことを言つて、轉げるやうにして笑つた。

田舍の町の人々には、並んで歩く二人が尠くとも異樣に見えたに違ひなかつた。『西洋人！ 西洋人！』などと敏子を指して言つた鼻洟垂しの子守もあつた。

敏子はをり〳〵目に立つほど鬱ぎ込むことがあつた。溫泉場に居る頃にもそれが度々あつた。お國さんも始めは氣にして、いろ〳〵慰めて遣つたり何かしたが、後には例の癖と打捨てゝ置くやうになつた。お國さんなどの知ることの出來ない苦勞の種が敏子にはあつた。

『もう好いぢやありませんか。そんなに思つたつて仕方がないわ。本當に新しい生活を始めませうよ。』それでもお國さんがをり〳〵見かねてかう言つて慰めると、『しかしあつたことはあつたことね。あつた

長い間閉め切になつて居た本堂の一間の戸は、やがて明けられて、明るい朝の日影が流るゝやうに射し込んで來た。其處は六疊で、隣には本尊の如來樣が色の褪めた古い幔幕のかげに寂然として立つて居た。賓頭顱や位牌や燭臺や木魚や鉦や――さうした古びた者ばかりの中に、つい此頃檀家から寄進したメリンスの鉦の打敷の色模樣だけが新しく鮮かに眼に立つた。女達は其處に夜具だの行李だのを持つて來て、何彼と自炊の支度をした。机だの洋燈だの火鉢などは主僧が自から運んで來て貸して呉れた。さびしい寺が俄かに賑かになつて來た。笑ふ聲や子供をあやす聲などが中庭を隔てゝ常に聞えた。

五十二

庫裡から本堂に通ずる長い廊下には、時々輕い草履の音がして、庭の常磐木の葉の間に女達の着物の色彩などがチラ〳〵した。主僧が朝など行つて見ると、七輪の土瓶からは白い湯氣が上つて、お國さんがいつも一生懸命に朝飯の支度をして居た。

『お汁でも上げませうか。』

『いゝえ、拵へましたから。』

お國さんは味噌を澤山磨つて置いて、毎朝二人が用ゆるだけを熱湯に溶かして簡單にそれを拵へて食つた。鹽引、干物などをも町から買つて來て置いた。鹽の吹いた鰯の目刺は口が歪むほど鹹かつた。

を反けた。

やがて饂飩を盛つた膳が其處に並んだ。主僧は酒を一本つけさせてそれを女達に勸めた。しかし女達は盃を後へ遣つて注がせなかつた。酒量の無い主僧の顏はやがて赤くなつた。

其處を片附けて、床を敷いて、二人が寢たのはもう十時過であつた。お國さんの丈夫さうな呼吸を聞きながら、敏子は長い間眠られずに居た。裏の森を渡る西風の音が吼るやうに物凄く聞えて、隙間の多い雨戸はガタ／＼と鳴つた。

翌朝、敏子はお國さんに言つた。

『貴方は本當によく寢られるわね。』

『何うして？』

『何うしてつて……床に入るとすぐ眠つて了ふんだもの。本當に苦勞がなささうね。』

『だつて、床に入れば寢るのが當り前ぢやなくつて。』

お國さんが笑つて言ふと、

『だつて、本當に憎らしいやうよ。私、寢られなくつて困つたわ。明方とろ／＼した位よ。貴方と私とでは體からして違ふのね。』

『でも、貴方のやうに苦勞性でも困るわね。』

上さんは丸で見違へるやうな敏子を見た。其時分の鮮かなはつきりした眼、房々した髪、人の心を惹かなければ置かないやうな姿はもうなかつた。

夕飯は汽車の中で濟して來た。でも、まァと言つて上さんは勝手の方へ行つた。

滅多に點けたことのない五分の臺洋燈に、室は見違へるやうに明るかつた。赤い絨をかけて雜誌や小說を載せた机や、英語の金緣の書籍のずらりと並んで居る本箱などを後にして、主僧は女達の白い顏と相對して坐つた。

『明日は一つ本堂を掃除して、其處に住はれるやうにして上げませう。鳥渡世間離れがして好い處ですよ。……淋しいには少し淋しいけれど。』

主僧がかう言つて笑ふと、

『いゝえ、淋しい方が却つて好いんですよ。……ねえ敏子さん。』

笑ひながらわざとお國さんが言つた。敏子は寺の淋しいのを前から氣にして居た。

『まァ、あんなことを。』

敏子はやさしく眤めて見せた。

主僧が笑ひ懸けて手を出して子供を抱かうとすると、靜子は泣き出して母親の方へ體を反した。これに限らず、一度九十九里に遣られてから、片時も母親の膝を離れないやうになつた。お國さんでさへ顏

お國さんは今日汽車の中で、大きい鞄を持つて長い說明をする行商の男から、蛸だの猫だの蜘蛛などの針金細工の玩具を買つて來たが、それを袂から出して、其處に來てきまり惡さうに坐つて居る寺の娘に遣つた。娘は喜んで箱の蓋を明けて、一つそれを手に持つて見たが、蛸の手だの足だのがブル／＼と動くので、氣味惡がつて、すぐそれを疊の上に落した。

『怖くはないのよ。』

敏子が傍から言ふと、其處に火鉢を運んで來た主僧は、『何ですね、それは……。好いものを貰つたね、お前。』かう言つて、自からも手に取つて『これはめづらしいもんですね、』と動かして見て笑つた。

お國さんは、包の中から溫泉土產の煙草箱を續いて出した。

『これは難有う、こんな心配はしない方が好いのに。』火鉢の火を積直して、『寒かつたでせう。お當んなさい。』

『いゝえ、ちつとも寒くありませんの。寒い處から來たんですから。』

『本當ねえ、餘程違ふのねえ、梅があんなに咲いてるんですものねえ。』

かう敏子も言つた。

丁度其處へ出て來た肥つた脊の高い上さんは、田舍訛の言葉で、女達に型のやうな挨拶をしたが、やがて敏子の抱いて居る子供の方を覗くやうにして見て、『おゝ好いお子さんですことねえ！』

いよ。』かう言つて、敏子はそれを抱上げて、胸をひろげて乳を飲ませた。

二人は一月ほど前に東京を出て、お國さんの故鄕に近いある溫泉場に行つて居た。其處は雪の降り積る寒い〳〵處であつた。敏子の神經衰弱、それにお國さんも故鄕に少し用事があつた。『そんな寒い處へ風邪を引きに行くやうなもんだ。溫泉なら、熱海とか湯河原とかもつと暖かい處がいくらもあるぢやないか。』かう其時淸は留めた。しかし二人は何うしても其處に行きたかつた。『雪國の溫泉も見たいわ。それに、先生は私は寒い處は嫌ひだと思つて居らつしやるけど、私の故鄕の町だつて、冬は矢張雪の中ですもの……』敏子はかうも言つた。二人は其處に一月を過して、歸りには山崎の田舍の寺に寄つて、其處で子供を寺の人達に馴染ませて置いて來ようといふ心組であつた。

子供の籍は、山崎が歸ると、すぐその手續を濟して寺の子にして了つた。

二人は世離れた雪の中の溫泉場で自由な氣儘なしかし退屈な一月を送つた。其處では快活な面白い中年の筆行商に懇意になつたり、近くの町の富豪の細君と往來をしたりした。女ばかりの旅を怪まれて、刑事につけ狙はれたこともあつた。戸外には雪が深く〳〵積つて、川を隔てた向う側の町との交通も全く絕えて了ふ時もあつた。二人は湯に入ること丶菓子を食ふことと子供を相手に遊ぶこと丶、それより他には用事もなかつた。『今、靜ちやんを二人で押へて鬚をかいてやつて居る處です。』淸に寄越した長い手紙の終にお國さんはこんなことを書いた。

『何うだ、此次生れたら僕の方に寄越さなくつてはいかんよ。』清の細君は兄からこんなことを度々言はれて居た。

其日の午後清は山崎と一緒に、その丘の上の家を訪ねて行つた。穩かに晴れた日で、赤や青で飾り立てた初荷の馬が、ボツクリボツクリ野の道を通つて行くのが見えた。

五十一

三月のある寒い晩、さびしい田舍の停車場を下りた敏子とお國さんは、其處に一臺あつた車を賴んで行李やら支那鞄やらを載せて貰つて、大通りの方からぐるりと山崎の寺の山門の方へと行つた。

庫裡の戸はもう閉めてあつた。西風は凄じく裏の森を鳴らして、薄暗くなりかけた境内には、ところどころ落葉が吹寄せられて居た。

やがて出て戸を明けた主僧は、其處に夕暮の空氣に白く浮出した二人の女の笑顔を見た。

『おや……』

かう言つて、『大變に早かつたですね……明日かと思つた。』

二人はやがて奥の廣い間に通された。其處にはもう洋燈が薄暗く點いて居た。負つて居た子を敏子が下ろすと、俄かに眼を覺して聲を立てゝ泣き出した。『よし〳〵、靜ちやん、泣くんぢやない。泣くと怖

『難かしいもんだね。』
『それに、子供が居るからね、それを何うかしなければ何うすることも出來ない。』
『今、一緒に居るのかえ。』
『さうさ。』
『自分で育てるつていふ譯にも行くまいねえ。』かう言つて山崎は考へて、『何んな子だえ？　女の兒だつたねえ？』
『さうだ……一寸可愛い兒だよ。』
『僕が育てゝやらうか。』
突然かう山崎が言ひ出した。
『でも……君が育てゝ呉れるつて言ふ譯にも行くまい。』
笑ひながら清がかう言ふと、
『何に、構はんさ。今一人位子供がなくつちや淋しくつていけないんだよ。君の子供を一人呉れると好いけれど、君は中々手離しが出來さうにもないからねえ。』
山崎の言ふことは滿更戲談でもなかつた。
子供一人しかない山崎夫婦に取つては、田舍の寺の庫裡は餘りに廣く餘りにさびしかつた。此前にも

『それで居て、多くは事業とか戀とかさういふ現實に苦んだり悶えたりして、大抵は居るんだから面白いのさねえ、人間は。』笑つて見せて、『或は人間と言ふものは、思想などといふものを捨てゝ本能で生きて居る方が眞實なのかも知れない……少くとも、さうした方が、君のいふ自然には近いねえ。何も我我は現象に顯はれるものから矛盾だとか不合理だとかを捜し出して、それをぐづ／＼言ふには當らない。敏子さんのことだつてさうだ。成るやうにしかなつて行かなかつたぢやないか。君はいろ／＼に先生の爲めに謀つたけれど、少しもそれに影響された形はないぢやないか。』

『本當だ。』

清は默つて過去を顧みた。暫くして、

『しかし影響されざる影響――何と言つて好いかな、緣と言つて好いかな、運命と言つて好いかな、さうしたものが間接には働いて居ることは事實だねえ。人間と言ふものは糸から糸を引張り出して、それが段々結んで解けなくなるやうなところがある。』

『矢張佛の言ふ煩惱の一つから、因緣が起つて來るんだねえ。』

かう言つたが、山崎は急に、

『それで、何うするんだ、敏子さんは？』

『何うするつて、矢張一人で藝術をやらうつて言ふんだらう！』

燃えてるんだ。』

『さうだ。』

深く冥想するやうな顔をして清は言つた。

二人は暫し默つた。

『しかし、我々も我々の後に續いて來た「新時代」の人々について、さういふ風に見えるやうになつたんだからな、もう……』清はかう言つて、昔を思ひめぐらすといふ風をした。

『早いものさ、もう我々もまご〳〵すると老人の部に打込まれるんだよ。』山崎はかう言つて笑つたが、其處に清の長女の明けて十一歳になるのが入つて來たのを見て、

『もう、此人達の時代もすぐだ！』

『本當だ。親に打明けて言はれないやうなことが出來るのももうすぐだ。』少し考へて、『我々はつまり始めもなければ終りもない大きな物の中で、ある力に操られて生存して居るやうなものだねえ。今になつて、過去と將來とを考へて見ると、ライフの無意味の中の意味と謂つたやうなことがいくらか解るやうな氣がするよ。田邊が死ぬ前にかうして死んで行くと思ふとつく〴〵悲哀の情に堪へないと言つたが、僕等もそれを考へると、厭世ならざるを得んねえ。事業だとか戀だとか名譽だとか言つたつて、それこそ砂の上に書いた字だ。』

言へば定つて居るのだ。平凡な中の不思議、不思議の中の平凡、さう言つたやうな深い細かい處があるねえ。自然はちやんと其行先を見せて置いて、そして刹那の上では、人間に見すかされないところがある。』

すぐ言葉をついで、

『だから刹那を重んずるといふ考になつて來るんだねえ、君。刹那の快樂なり悲痛なりに意味があるので、それから來る結果などは何うでも好いといふ譯になるんだねえ。僕等にしても、戀とか女とか言ふものには、かなり知識がある積だが、いざとなると盲目だからねえ。』

『それで人間は生きて居られるのさ。禪でもさういふ境を說いて居るよ。』

『敏子などを例に取つても矢張さうだ。行く先はちやんと解つて居る。しかし解つて居るからと言つて、その統一された自然の法則とか何とか言ふやうなものに由つて支配されては居ないからな。いくら經驗したものが口を酸くして言つて聞かしたつて、說いて聞かせたつて、私達も經驗しないでは解らないからと言つて新規蒔直しをいつもやる。そしてその新規蒔直しが平凡な、型にはまつた、人間が何千年來卷返しくり返し遣つて來たものであらうが何うだらうが構はない。それが自分の經驗だと言つて、それを唯一の證券にして生きて居る。』

『觀照的になるといふことは、生氣を失ふ最初なんだ。やつて居さへすれば、其處に生々とした火が

からずその心を動かしたやうであつた。

『まア、左樣かねぇ……』

深く感じたやうな調子で、『歸つて居るのかね。あれほど思つても、矢張駄目だつたかねぇ。』

『皆なきまつた型の中に入つて行くんだねぇ、君。……いくら躁いたつて、立派なことを言つたつて、自然には敵はないねぇ。』

『本當だねぇ。』

山崎は頭を振つた。

『戀だとか何とか言つて、大騷ぎをした處で、それは何にもなりはしないのさ。時は忽ちにして過ぎて行つて了ふのさ……』山崎の顏を見て、『僕等の時代だつて、矢張さうだつた。夢中になつて、女の愛を求めて歩いたものだつた。僕等の最初の「詩集」、あれが出來た時分のことを考へると、本當に君、隔世の感どころぢやないねぇ。あの詩集を田邊と一緒に瀑神に獻ずるんだなんて言つて、華嚴の瀑に投り込んだことがあつたが、その田邊はもう此世の人ではないし、西は西で、此頃では、國家の爲めなぞといふことを考へて居るやうになつたんだからね。……』

『不思議なやうな氣がするねぇ。』

『不思議！　本當に不思議と言へば不思議以上だ。それからまたちやんと未來が平凡に定つて居ると

『初谷の女は面白いねえ。』それを聞いた淸はかう言つて笑つた。

それから二人はよく揃つて町へ出かけた。三越に呉服物を見に行つたり、貯へて置く品物を買ひに行つたりした。時には、夕方からわざ〳〵寄席に出かけて行くことなどもあつた。義太夫や芝居の話を敏子はかなりよく知つて居た。踊の話などもして聞かせた。

ある日、町の通りを歩いて居た二人は、電燈の笠や器具などを賣つてゐる店の飾付の前に足を停めた。懐中電燈が眼を惹いたのであつた。

『買ひませうか。』

『買ひませう。』

二人はかう言つて、店の中に入つた。番頭から詳しく説明を聞いて、かれ等は懐中電燈を買つた。で、その懐中電燈は停留場から丘の上の家まで、いつも闇の路を照らした。

野は段々寒くなつて行つた。霧の深く籠めた朝は、朝日の影が金色をなして彩られた。木枯の吹く夜は、松の嵐が潮のやうに鳴つた。二人は新しい年をこのさびしい幽棲に迎へた。

五十

その正月には、田舍の寺の山崎が遊びがてら久し振で遣つて來た。敏子が歸つて居るといふ話は尠な

へ運んで行くのが時々見えた。尺八を吹くのが好きで、夜は其音が壁を隔てゝ聞えた。

『そらまた始まつた。暢氣ねえ。』

と女達はいつもかう言つて笑つた。

湯屋はかなり遠かつた。二人は夕日の餘照にかゞやいた丘を越して、新開町の中程にある新しく出來た湯によく遣つて來た。そして歸りにはいつも清の家に寄つて行くのを例として居た。二人は湯上りの綺麗な顏を光らせながら、洋燈の明るい茶の間で、遲くまで樂しげに話して行つた。『もう十時よ、』と敏子が心地よげに眠つた子を膝にしたまゝ、柱の時計を見てかう言ふと、『さうね、餘り遲くなると、あの森の處が怖いわねえ、』などと言ひながら、お國さんは猶熱心に話し込んで居た。

『今の若い人は違ひますねえ。こんなに遲く、あの淋しい處を歸つて行くんですねえ。』かう細君は感心した。

闇の夜にはそれでも提灯を借りて行つた。

大家にも近所の人にも二人の何者かゞ長い間解らなかつた。通つて來る路傍の人々も、子供をつれた庇髮の二人づれを訝しさうに見送つた。ある時などは酒屋のお用聞らしい男が、すれ違ひながら、

『あれか、あれは初谷の女だよ、』などとつれの男に言つて居るのを二人は聞いたこともあつた。初谷とは二人の住んで居る土地の小字である。

だらうから。」

かう清は敏子に言つた。

丘の上の家の生活は、二人に取つて珍らしく自由な生活であつた。世を遠くかけ離れたやうな氣になつて女達は暮した。茶湯臺に長火鉢に簞笥。お國さんは机を四疊半の窓障子に向けて据ゑて、其處で雜誌の小說を讀んだり、書きかけた原稿の筆を續けたりしてゐた。敏子は片時も傍を離れない子供を相手に、茶湯臺の上に硯を持つて來て、國の母親に遣る長い〳〵手紙などを書いた。

四十九

敏子は蒼い顏をして居た。

生々と張切れるやうに肥つたお國さんに比べては、かうも違ふかと思はれるほど體も弱々しさうに見えた。何ぞと謂つては、默つて物を考へた。

朝は二人はいつも遲く起きた。お國さんが筒袖を着て井戸端に出る頃には、隣では竹を割る音がもう聞えて居た。

隣の男は村のもので、兄が嗣いで居る本家が其近くにあつて、白髮の汚ないお婆さんが時々遣つて來るといふことも段々解つて來た。笊を編むのが職業で、豫定の數が出來上ると、それを車に載せて問屋

肥つた可愛い子を負つたり抱いたりして並んで歩いて行く二人づれの庇髪姿は、電車の停留場に行く丘の上やら屋敷町やらに常に見られた。霜の白い朝もあつた。風の林を鳴らす夕もあつた。里川を堰ぎ留めた路傍の物洗場には、大根の白いのが際立つて見える日もあつた。十二月の晴れた日はよく續いた。

別れて來て、一番先に子供のことが心配になつた。子供といふ羈絆を離すことが、敏子に取つては、新しいライフに入る第一步であつた。馬橋から電報を受取つた當座には、殊にそれが必要なのを人々は感じた。敏子は一生懸命になつて、近い田舍に里子にやる口をさがしに行つたり、學校に居た頃親友であつた女に一伍一什を打明けて力を借りようとしたりした。汽車の中で乘合せた子を亡くしたといふ女が、預つて上げても好いと言ふのを賴りにして、本所の場末までわざ〳〵出かけて行つたこともあつた。一時馬橋と一緒に身を隱して居た九十九里の濱の主婦にそれを預けることになつてつれて行つたが、四五日して、泣いて〳〵とてもお世話が出來ないからとて返して來た。

子供は若い母親の膝に抱かつて、莞爾と常に可愛い顏をして居た。『靜ちやん、靜ちやん、』とお國さんがあやすと、躍り上るやうにして高笑ひをした。淸の家に抱かれて來ては子供等の大勢集つて騷いで居るのをめづらしさうに見て居ることなどもあつた。

『まア、そんなに大騷ぎをして里子にやらなくつても好いぢやないか。その中、何處か好い處がある

四十八

『コンヤノキウコウデカヘル』

馬橋がかう大阪から電報を打つて寄越したので、人々は今更のやうに周圍を振返つて見た。『今更そんなことを言つて寄越したつて仕方がありませんわねえ。』かう言つた敏子の顔にも動搖が見えた。折角始めた新しい生活がその爲めに破れはしないかとお國さんは心配した。清も二人の羈絆の容易に離れられないのを思はない譯には行かなかつた。

清は一面馬橋の心事を解すると共に、一面これに對する處置の方法を考へる人であつた。乘り出した船はもう行く處まで行かなければならなくなつて居た。

『折角出て來たんだから、後戻りするのは愚だ。新しいライフを開くやうにしなければいけないからねえ。』

清はかういふ意見であつた。

清は馬橋の訪問を豫期した。一日は一日と過ぎた。しかし其姿は遂に郊外の家に見えなかつた。『馬橋さん、歸つて來て見て、家が疊んであるもんだから、もう駄目だと思つたと見えますねえ。』暢氣な細君はこんなことを言つた。

朝日を受けたところに暢氣さうに坐つて、三十近い男が頻りに竹を細かく割る仕事をしてゐた。三毛猫が日向に寢て居たが、お國さんが覗くと、延びをして立上つて、ぢつと此方を見て、そして向うへ行つた。

竹を割る鉈の音が絶えず聞えた。

『少し遠いけれど好いわねえ。』

二人はかう話し合つた。家賃の廉いのも好都合であつた。

午後には清がお國さんにつれられて其處へ行つて見た。

『成ほどこれは好い。物を書いたり何かするには持つて來いだ。……僕が借りたい位だ。』四邊を見廻して、『かういふ處に居れば、敏子さんの爲にも氣が落附いて好いだらう。まァ、子供の處分が定まるまで、此處にぢつとして居るんだね。……貴方は大變だけど、少し世話をしてやつて下さい。』

田舍の町家に育つたお國さんは、勝手元でも裁縫でも何でも出來た。

小石川の兄の家に行つて金を拵へたり何かして、成るべく必要な物は賣らぬやうにして、馬橋と住んで居た家を疊むことに其日は暮れた。

簞笥や火鉢を載せた一臺の荷車は、あくる日の午前、丘から丘をこえて、さびしい松の林の中へと行つた。破れた四目垣を繕つて居る筒袖の大家さんの姿は、車から荷を卸す車力や、襷がけになつて働いて居るお國さんや、常磐木の葉にチラ〳〵する日影などの間に繪のやうに見えて居た。

『ぢや、さうしませう。一緒にやりませうねえ。』

お國さんも嬉しさうであつた。

『まア、少しさうして靜かに落附いて、ゆつくり保養するさ……』

清は瘦せた蒼白い敏子の顏を見た。

お國さんは、近郊を散步した時に、其の松林の中にかし家札の白く浮出すやうなのを見て置いた。かういふ靜かな處に住んだら好いだらうとも思つた。で、二人は一番先に其處に出懸けた。

大家の百姓の入口は、此處等の農家によく見るやうな廣い土間になつて居た。髮を箒のやうにした上さんが、此處等には見馴れない若い庇髮の二人の女を訝かしさうに迎へたが、やがて駒下駄を突かけて、畠に居る主人を迎へに行つた。

大家は三十四五の莞爾した人の好さゝうな男であつた。筒袖に股引といふ畠姿で、其儘二人を貸家の方へと連れて來て、裏口から戶を明けて見せた。六疊に四疊半の二間。冬の朝日が窓からさして、松の風に鳴る音が微かにした。

『好いわねえ。』

かう敏子は言つた。

お國さんは井戶の水を汲み上げて見たり、隣に住んで居る人の生活を覗いて見たりした。其處には、

かつたのである。』

それからそれへと考へが容易に盡きようともしなかつた。かれは終には筆を捨てゝぢつとして坐つて居た。

落葉の夜はさびしく更けた。

四十七

丘を越えて行つた處に、松林やら畠やら田舍道やらに圍まれて一軒空いた長家があつた。それについて曲つた細徑は落葉に埋れて、踏むとガサ〳〵と音を立てた。お國さんと敏子との並んだ姿は、ある朝其處から竹藪や欅や樫の木などの中に低く見える茅葺屋根の百姓の家へと下りて行つた。

貸家は其百姓の持家であつた。

『私の家に置くと言ふ譯にも行かない。何處か好い處があるなら、二人で一緒に家を持つのも面白からう。』

かう清が二人に言つた。

『ぢやさういふことにしませうね。』かうお國さんに言つた敏子の顏には新しいライフでも展けたかのやうに生々した色が上つた。

プの灯を見詰めて居たりした。
子供を一人抱へてかうして男に別れて來る敏子も可哀相であつた。此寒い夜を家を捨て職を捨て女を捨てゝ何處ともなく彷徨つて居る馬橋も可哀相であつた。この二人の間に入つて、進むことも退くことも出來ずに、かうしてランプの灯を見詰めて居る自分の身も可哀相であつた。かれは過去と將來とをつくづく考へた。

『自分が敏子を愛したといふことが、かうした三人の運命をつくる基となつたのは、それは事實だ。自分にも無論責任はある……それは自分も知つてゐる。しかし自分だつてこれに對して、隨分多くの犧牲を拂つた。家庭の荒廢、心の荒廢、醫すことの出來ない精神の荒廢……』

かう思つたかれは黯然たらざるを得なかつた。

『誰が惡い？　自分が敏子を愛したのが惡いのか？』かう自問自答して、『普通の道德――多くの人の常識から見れば、かうして女弟子を愛するといふことが惡いと言ふに違ひない。しかし實際愛したのが呪ふべきことであらうか。愛したのが呪はれるといふよりも、寧ろ愛するに至つた事情――自分と敏子とが偶然相逢ふに至つた緣が呪はるべきではないだらうか。……それに自分は尠くとも馬橋の爲めに盡した。又盡す考へでもあつた。二人の戀人の爲に犧牲になることを敢て辭さなかつた。しかし三人の間にはこれさへ實行が出來なかつたのである。自分と馬橋との間にはかうした犧牲が行はれ得る餘地すらな

て言つたことがあつた。清は愈々平凡になつて行く長い物語を讀むやうな氣がした。

馬橋から清へ宛てた手紙が來たのは、其翌日の夕暮であつた。それには二人は結局別れる方が好いと思ふから、自分から身を引くといふことが二三行簡單に書いてあつた。そして他は萬事敏子から聞いて呉れとしてある。敏子へ宛てた方には、家を疊むに就いての處分がザッとしてあつて、末に、卿等の健康を祈ると大きく書いてあつた。

かうなつては、もう放つて置けなかつた。敏子が病氣の身で子供を抱いて、暗い一間に、懊惱して居るさまも眼に見えるやうに思はれた。あの神經過敏の女は何んなことをするか解らなかつた。

『お國さん、一つ行つて見て下さい。』

かう手紙を見せて清は賴んだ。

『別れて了ふ方が結局二人の爲めにも好いんでせう……とてもあんな風にしていつ迄も暮しては居られないでせうから。』其後度々訪ねて行つたお國さんは、かう言つてすぐ出懸ける支度をした。

風の寒い晩であつた。

お國さんの出懸けて行つた後を、清は一人書齋で机に向つて筆を執つて居た。家の周圍をガサ〳〵ところがる落葉の音が絶えずさびしくあたりに聞えた。清はいろ〳〵なことを考へずには居られなかつた。かれは書きかけた筆を措いては幾度か長大息を吐いた。時には筆を持つたまゝ頰杖をして、ぢつとラン

馬橋と別れて後、幸福であらうとも思ひません。何うなることか、私にも解りませんけれど、今のやうな有樣では、私忍びきれません。ヒステリーになつて狂氣するかも知れないと思ひます。馬橋だつて別れることに不贊成ではないと思ひますから誠に御迷惑ですが、御盡力下さるやうに願ひ上げます。子供の籍のことは私には解りませんから、これも何分よろしく御考へ下さい。先生！　何うか今一度先生と呼ばせて下さい。

十一月六日夜　　　　　　　　　　　　敏　子

先生おもと

この長い手紙は新聞社の原稿用紙に薄墨で走り書に書いてあつた。處々字が脫けて居たりした。初冬の晴れた朝であつた。日影が半明けた窓障子から明るくさし込んで、机の上に取ひろげられたこの手紙を鮮かに照した。庭の垣の緣にある茶の花や、紅白の山茶花や、薄霜にぬれた椿の葉や、處々紅葉した楓や、それがすべてくつきりと晴れた空氣の中に見えて居た。

書齋にも庭にも人は居なかつた。

四十六

『新しい女だとか何とか言つても、矢張平凡な幕を打つたね。』何時か西さんがかう敏子のことに就い

て居ますから、いろ〳〵引留めたり爭つたりして、終に離別を申出しましたけれどそれは取合つて吳れません。終には私も焦れ出して、家も何も燒いて了ひたいやうな氣になり、盛にマッチを擦つたり何ぞしたもんです。

でも漸くいろ〳〵に申して、一緒に先生のお宅に伺ふことにし、戸外に出て戸緊りを致し、いざ出かけようとすると、もう居ないのです。通りに出て見ましたが其處にも居りません。引返して又其處等をたづね廻りましたけれど遂に見當らず、止むなく其晩は家に引返しました。さて其翌朝、差迫つた用事の爲め質屋に行かなければならないので、其序に心當りの友達の下宿に行つて見ますと、思つた通り、馬橋は友達と一緒に居ました。

そして京橋に行つて金策して午後一時頃には家に歸るから質屋の方をよくして家に歸つて居ろ、先生の家に行くことは？　と聞きますと、それは歸つた上でよくすると申しますから、私は歸つて參りました。

所が今、夜の四時ですが終に歸りません。此頃は金さへ持てば、何うしても酒を飮まなければ承知しないので、京橋へ行つて、いくらか原稿料を前借して、例の銀座に行き、醉ふと例の感興を仕舞まで追はなければやまれない質ですから、馬鹿な眞似をして步いてゐる事でせう。家族を犧牲にするといふ意味を、そんな風に思つて居るんですから、とても駄目だと思ひます。

昨日はたまさか家に歸つて居りました。其處へ友達が來ましたが、午後から行く處があるといふのを無理に引留めて酒を出して醉拂ふといふ始末なんです。私も子供も病氣して、ことに私は發熱して苦しんで居りますのに、これから金策に行くから質屋へ持つて行くものを出せと申すんでせう。これまでの經驗で、こんな時に出して無事に歸つた例がないんですから、今日はやめたら好いでせう。私も苦しいから家に居て下さいとかう申しても、言ふことをきかず出て行かうとするのを、無理に追かけて行つて、歸つて貰つて、夕方までそれでも寢ました。三十分ほど子供を見て貰つたら、何んなに苦情を申されましたことか。

で、馬橋も夕方まで前後不覺に寢て居ました。私は少し樂になつたので、朝の中は客で出來なかつた襁褓の洗濯をしたり、晩飯の支度などをして居ますと、其處へ平生親しくしてゐる友達がやつて來ましたから、私は馬橋を起しました。と、何うしたんですか、突然私を打つぢや御座いませんか。灯をつけるんですかつて、それでも私はこらへてかう申しますと、當り前だ！ ぬけつ毛のおたんちん！かうなんです。

今から考へて見れば、馬鹿々々しい、怒ることもないんですけれど、突然に打たれては居ますし、それに此頃は何ぞと云へばおかめだの、おたんちんだのと悪口されるので、口惜しくなつてつい言爭ひました。と、又外出して金策するといふではありませんか。私はかういふ時には出してはならんと知つ

そんなのが藝術家ではありますまい。貧乏するのは私は構ひません。しかし藝術々々とそれを口實に不眞面目な眞似をして歩いて、借金の申譯をさせられて、犧牲呼ばはりをされるのは私は厭です。こんなことは申上げたくはありませんけれど、今月は二圓しか俸給を持つて歸らないのです。そして社に前借が十五六圓もあるといふ事です。友達にも迷惑をかけて居るばかりではなく、子供の病氣の時にも、ヤッと私の本を賣つて診察料や藥代を拵へるやうな始末、――そのまた金を、やれ車代を出せの、やれ酒を買つて來いの、敷島を買へのと皆な遣はせられて了ひました。

何しろ質屋へ行く時でも車に乘らうといふ人なんですもの。

馬橋の身を立てたいと思へばこそ私も苦勞をしたのです。それがこんなことでは失望するより他に仕方が御座いません。

序ですから申しますが、馬橋は今度社をやめました。それにもいろ〳〵事情が御座います。私は酒や女を買ふことばかり覺えて碌々讀書することも出來ない今の境遇よりも、結局浪人しても、質實な生活を送りたいと思つて居ましたから、社をやめることは不賛成では御座いませんでした。しかし女記者を困らせない爲めに犧牲になつて退社すると言ふことが男の意氣地でせうか。

借金をして、人の厄介になつてゐて、そして人の世話をする氣が私には解りません。

今月ももう五日になりますが、馬橋は何うして居りますことやら。

るか、御覽になればすぐ解りますから。』
『その中行つて見よう。』
しかし清は行く氣はなかつた。

四十五

愈〻馬橋と離別したいと存じます。その譯は、とても、私共二人は一緒になつて居られさうもないからです。馬橋は何時でも貴樣なんぞに藝術家の心が解つて堪るもんかと口癖のやうに申しますが、馬橋の心では、つまり藝術家の家族は犧牲にならなければならぬと言ふのです。如何にも犧牲にもなりませう。しかし馬橋のやうな間違つたものゝ犧牲になるのは私は厭です。まだ今日までこんなことを申上げたことは御座いませんが、その無責任たら、お話にも何にもなりません。
いつでしたかどう無責任なんだねと先生から訊かれたことが御座いましたつけ。どうつて一々は申上げられません。朝から晩まで私達の生活を御覽なすつて始めてわかることゝ存じます。
家族が何んなに困つても、藝術家たる良人自身は仕度い三昧のことをして好いのでせうか。酒を飲んで醉拂ひ、醉に乘じて遊び歩く、其金はあつても、子供の藥價は出すのが馬鹿々々しいと言ふやうなことを言つても好いものでせうか。

れ過ぎると思ふんですがね。』辯解しかける母親を遮つて、『それはさうでせう。間を割く……さういふことはなさらんでせうけれど、何うしても、今の境遇で、時々逢つたり何かすると、何うしてもさういふ邪推は起りますからな……それに、私なども經驗がありますけれど、馬橋位の若さで一軒やつて行くといふことは、物質上から言つても大抵ぢやないんです。馬橋君などは年から言へばよく遣つて行く方でせう。』

『何うもこれも我儘者ですから。』

母親はかう言つて、いろ〳〵細かい話をした。

『まア、先生も居らつしやることですから、……いよ〳〵仕方がなければ、それは何うにもなりますから、私が歸つてから、今少し容子を見る方が好う御座んせう――』母親は沈着いた調子で言つた。

『とても駄目なんですけど。』

母親が暇を告げて歸つて行つてから、敏子は獨語のやうに言つた。

『でも、餘り早過ぎるからね。』

かう清が笑ふと、

『先生はすぐあゝ仰しやるけれど――』考へる樣子をして、『だけど、仕方がない。私もさう言はれるわけがあるんですから……けども先生、先生も是非一度來て見て下さい、馬橋が何んな生活をしてゐ

『先生は御覧にならないから、よくお解りにならないでせうけれど、此頃はそれは酷いんですよ。家だの、子供などは丸で構ひつけないのですから。』

『面白くないから、馬橋君はわざとさうするんでせう?』

『けれど――』敏子は激して、『わざとそんなことをするつていふ法があるでせうか、一家の主人ぢやありませんか。』

清は笑ひながら、

『それはさうだけれど、さう一概にばかりも言はれないよ。矢張、男の心持つて言ふやうなものがあるからね……』間を置いて、『僕には馬橋がさうする心持がよく解るね。』

『何うしてゞせう?』

『母様が入らしつたことなども原因になつて居るんだらうがね……』かう言つて少し考へる風をして、『一體、夫婦とか家庭とか言ふものはさう好いもんぢやないからねえ。忍耐といふことが無くつちや一時だつて成立つて行きやしないよ。』

『先生は御覧なさらないから、さう仰しやるけれど――』

敏子は言ひ懸けて低頭いて了つた。

『母様――何うでせう。私はさう思ふんですがね……』清は母親に向つて、『何うも感情に支配さ

んださうです。何うも長く續けば好う御座んすけれど。』
かう言つて淸の方を見た。
『矢張お父さんは先見の明があつたといふ譯ですね。』
わざと淸は輕くこんなことを言つた。

三度目に逢つたのは、母親が今夜六時の汽車で立たうとする日の午後であつた。母親より一足先に、敏子は子をおぶつたり大きな包を持つたりして遣つて來て、
『まだ、母さん來なくつて？』と泣きさうな顏をして居た。やがて母親は來た。
『もう、敏子さん、歸らぬ積で來たんですつて。』かう細君は書齋から出て來た淸に言つた。
淸は座敷へ行つた。
『一體何うしたんです？』
やがて入つて來る敏子の方を向いて、笑を含みながら淸は訊いた。
『だつて、先生、到底駄目なんですもの。』
かう言つて敏子は淸の方を見た。
『駄目つて、何ういふ風に駄目なんです？』

清も敏子の母親には三度逢つた。初めは清が小石川の家へ出懸けて行つた。其時母親は、いろ〳〵禮を述べた末に、『何うも我儘で仕方が御座いません。まァ、何うか今度は御迷惑をかけないやうにと呉々も申しつけて置きましたけれど……旨く參りますことやら、何うやら、危ないもので御座います。』かう言つて笑つた。

敏子と馬橋との此頃の心持も其内段々清にも知れて來た。

二度目には、母親が清の家へ訪ねて來た。其時は敏子も一緒に子を抱いて來た。

清が母親に、

『何だか、馬橋君、此頃非常に煩悶して居るやうですが、母さんが入らつしやつたといふことが何か關係してるんぢやないでせうか。』

かう言ふと、母親はしつかりした調子で、

『いゝえそんなことは御座いません……私がこれを何うかしようなどと思つてゐるやうにお考へかも知れませんが、私はそんなことは決して致しませんですから、……私の方では、何うかさういふお世話を二度とおかけ申したくないと、かう思つて呉々もこれに申して居るやうな譯ですから。』調子を和げて、『所が、何うもあの男が邪推深いさうで……いろ〳〵なことを申すさうで御座いますけれど、此方をさしおいてそんなことは決して申しませんですから。』烏渡笑ひかけて、『どうも此頃では、不眞面目で困る

から物好きに入つて來た清夫妻の心持が異樣にも不思議にも思はれて來た。

『勝手にしろ。』

思ひ詰めた揚句、自分からかう投り出して了ふこともあつた。

『もう、十分に糟まで甞めて了つたんだ。今になつて何うしようが、そんなことは構ふことはない。』

かう自暴自棄に思ふこともあつた。

其頃、國の方から戸籍に就いての話が出來かゝつて來て居た。金の五六圓も出せば、裁判所の手續もすますことが出來た。馬橋はいつそ結婚屆を出して了はうかとも思つた。さうしたら新しい意味が出て來るかも知れぬと思つた。しかしもう二人ともさうした氣分にはなれなかつた。

『しかしこれの籍だけは貴方の方に入れて下さい。私の方には持つて行くところがないんですから。』

子に就いては、敏子はいつもかう言つた。

母親の滯在は二月以上に亘つた。敏子は暇を見てはよく出懸けた。後には子を抱いて戸緊りをして行くことなどもあつた。

馬橋はいつも夜遲く醉つて歸つて來た。

新聞社の前借が段々溜つて行つて、其月の俸給は米の代にすら足らなくなつて居た。机の上の硯は塵に埋れて、原稿紙は其處にひろげたまゝになつて居た。

暫くしてから母親が訊いた。

『えゝ。』

敏子は唯點頭いて見せた。

眼には涙が見えた。

庭の松では蟬が啼いて居た。

『置いて入らつしつたの？』

傍からから嫂が訊くと、

『えゝ、』と矢張點頭いて見せた。

『連れて居らつしやれや好いのに、お困りでせう、乳が張つて？』

『いゝえ。』

嫂はやがて下りて行つた。暫くして上つて來た時には、敏子は眞赤に眼を泣腫して居た。

馬橋に取つては、敏子の母親が東京に來て居りながら、其身が普通の女婿の取扱ひを受けることが出來ないのが不愉快であつた。それは望まれないことだとは初めから知つて居る。さうされては困るから、敏子の籍を清の家に移したのだといふことも知つて居る。しかし今になつては、自分等二人の事件に傍

搔き上げても搔き上げても髮は亂れ勝であつた。敏子は張り氣味の乳房を氣にしながら、電車の終點から程もない路を、急いでその兄の家へと行つた。

玄關の戶を靜かに明けて、音のしないやうに茶の間に入つて行くと、其處には國から一緒に伴れて來た婢が居て、

『まァお孃さん。』

と聲を立てた。

母親は二階で嫂と話して居た。婢が知らせに行かうとするのを手で制して、敏子は苦しさうに先づ呼吸を吐いた。

母親のなつかしい聲がをり〱二階から洩れて來た。

それを敏子は暫し默つて聞いて居た。胸の躍るのが餘所目にもそれと見えた。

肥つた、莞爾した、眼に一種言はれないやさし味のある五十位の母親と、色の蒼白い神經性の亂れた扮裝をした娘とはやがて相對して坐つた。いつもなら、『母さん！』と懷かしさうに聲をかけずには居られないのだが、今日はさうした氣分にもなれなかつた。敏子は唯低頭き勝に默つて坐つて居た。

髮の薄くなつたのが一番先に母親の眼についた。

『體は此頃は好いのかえ？』

『それから貴方にも來て見て吳れつて、敏子さんが言つて居ましたよ。先生に一度來て見て貰ひたい。馬橋の遣つてゐる生活は好い生活か惡い生活か見て貰ひ度いつて言つて居ましたよ。』

敏子は何ぞと言ふと、『では先生の處に行つて、何方が惡いか訊いて見ませう。』かう口癖のやうに言つた。馬橋にはそれが不愉快であつた。馬橋に取つては、淸や淸の細君は遂に親しみ難い人であつた。『勝手に一人で行つて饒舌つて來るが好いさ。僕が一緖に行く必要なんかあるもんか。』馬橋は面白くないので、つい友達の處に行つて酒を飮んだり夜を更かしたりした。

夜遲く歸つて來ると、敏子は長い手紙を書いて居ることなどもあつた。『何處に遣るんだ？』『何處に遣つたつて好いぢやありませんか。』こんなことを二人は常に言ひ合つた。

故鄕の母の許にやる手紙を敏子は此頃よく書いた。

ある日、馬橋が歸つて來ると、戶緊りが堅くしてあつて、鍵は隣の細君に預けてあつた。國の母親が上京したので、小石川に出かけて行くといふことが、敏子の置手紙に書いてあつた。

敏子は流石に子を伴れて小石川に行く氣にはなれなかつた。しかし馬橋の歸つて來るのを待つても居られなかつた。敏子はお三輪の許に出懸けて行つて、途中で買つて來た牛乳一合とミルクの罐とを添へて、『成たけ早く歸つて來ますから、それぢや何うかお賴みします。』と幼兒を賴んで行つた。

『私が行つたもんだから、起きて來ましたがねえ。矢張蒼い顏をして居ました。それでも怒つても居られないものだから、「大變な處を奧さんに見せた」なんて言つて笑つて居ましたがねえ、敏子さんの方は、中々さうさせて置かないつて言ふ風なんですの。何うかして、馬橋さんが一體敏さんは理想家だから駄目だつて言ふと、生意氣を仰有い、先生の口眞似なんかをして、貴方こそ若い年をして、勉強もしないで、酒ばかり飮んで、デカダンの眞似なんか大きらひですつて、かうなんでせう。あれぢや、馬橋さんも默つては居られませんからねえ。』

『困つたもんだな。』

『本當にねえ――あれほど大騷ぎをして一緒になつて……』間を置いて、『で、仕方がないから、私は中に入つて、いろ／＼なだめて……成るたけ馬橋さんに口をきかさせないやうにして、何うやら彼うやら笑つて話をするやうにして來ましたがね……よくあゝいふことをすると見えるんですよ。』少し考へて、

『馬橋さん、泊つて來ることなんぞあるんだと見えますねえ。』

『それはあるかも知れん。新聞に居る人はその位のことは仕方がない。』

『でもねえ、敏子さんにはそれが口惜しいんでせう。これほど盡して居るのに……といふ腹がありますからねえ。』

『それはさうだらう……』

結んで解けない紛糾をも、時の力は段々に解いて行つた。清はぢつとそれを見て居る人であつた。
『今日は大變な處に行きましてね。』
ある日、細君は社から歸つて來た清にかう話しかけた。
『運惡く二人で物言ひをして居る處に邂逅しましてね、今日は。本當に今日位困つたことはない。』かう言つて細君は笑つて、『敏子さんも、あゝなると、隨分負けない氣ですからねえ。』
『一體、何うしたんだ？』
『私が行つて見ると、何うも變なのよ。……馬橋さんは奥に蒲團を被つて寢てるし、敏子さんは、蒼い顏をして苛々してるるんでせう。それに、茶の間には德利だのお膳だのが一杯に散らばつて居るんですの……。變だと思つたけれど、私、「何うしたの？」つて訊くと、奥さん、何方が無理か聞いて下さいつて、かうなんでせう。敏子さん、平生はやさしい聲をして居るけれど、あゝなると、それは隨分大變ですからねえ。何處が私が惡いの？　そんなこと言つたつて、酒を飮んで醉拂つて、惡友と一緒になつて遊んで歩くのが貴方の能ですかつて、かうなんですもの。』
『神經が強い方だからな。』
『本當ですよ。何うかしてやしないかと思ふ位でした。かう眼が吊し上つて居るんですもの。』
『そして馬橋は何うして居た？』

つて言はれたか知れなかつたんですけど……矢張さうした心地には却々なれないもんですねえ。女には出來ないことかも知れないわ。』

お國さんは點頭いて見せた。

話に聞いて居ては解らなかつたことがすつかり解つたやうな氣がしてお國さんは歸つて來た。別れる時、『本當にこれから一生懸命に勉強しませうねえ。一緒にね、本當にね、一緒にしませうね。』かう言つて堅く手を握つた敏子の眼には涙が閃いて居た。綺麗な感情と暖かい心とはお國さんの胸を動かさずには置かなかつた。お國さんは別れて來た人のことを考へながら、あふちの花の白く咲いた坂を町の通りの方へと出て行つた。

四十四

『一度入らしつて下さい。』

馬橋は幾度もかう淸に言つた。

しかし淸は行く氣にはなれなかつた。放つて置く方が好いと思つた。『自分達で蒔いた種は自分達で刈るが好い。』かうも思つた。生中にその生活に觸れて行くのは却つて若い人達の平和を破る基にならぬとも限らぬやうな處もあつた。

思つたより打解けた客の風に、敏子は段々氣が置けなくなつて來た。文學の話も出れば、近頃ある雜誌に出たお國さんの小説の話も出た。國に居て投書して居た頃の物語は二人を笑はせた。

『私などもう駄目よ。』

敏子は暫くしてから言つた。

『そんなことがあるもんですか。何かお書きになつて居るんでせう？』

『本當に駄目よ。子供があつては筆など執つてゐる暇はないんですもの……それでも、困つて來るものだから、お伽噺などを書きますけれどね、本當に駄目なのよ。私など一體小説は書けない方の質かも知れません。』

『そんなことはありませんよ。』

『でも、よく言はれるんですもの。』

かうは言ふものゝ、敏子は藝術を捨てる氣はなかつた。女の好奇心から藝術などを志して失敗したと言はれるのがいかにも辛かつた。それに、自分より後に出て來たお國さんの小説が、ズン／＼世に紹介されて行くのも妬ましかつた。

『實際の人になつては本當に駄目よ。』

敏子はこんなことをわざと言つて笑つて、『私、それや何んなに先生から脇に離れなくつちやいけない

緣側にはまだ洗はない襁褓が山をなして置いてあつた。座敷には玩具やら子供の衣類やら新聞雜誌やらが一面に散らばつて居た。勝手元もまだ片づけてなかつた。

『まだこんなに散らしたまゝで、掃除もしないんですから……坐るところもないやうですけれど……』

兎に角敏子は座蒲團を勸めた。

兼ねて聞いて居た其人とは思へぬほど違つて居る敏子をお國さんも見た。

髮は亂れて居た。顏は蒼白く、笑を含んだうちにも、何處か神經性の苛々するやうなところがあつた。

寢かゝつて居た子が客が來たので眼を大きく明いて了つたので、敏子はそれを抱き起して、一度かき合せた胸の乳房を含ませながら話した。初めて逢つた人のやうな氣は二人ともしなかつた。

『まア、可愛い、もう笑ひますのね。』

かう言つて、お國さんはあやした。

『本當に仕方がないんですよ。鳥渡も手を離れないんですからねえ。』客の方を見て、『子供つて言ふものは、それは世話なものね……かうして居るばかりで、一日何にも出來やしませんのよ。』

『でも可愛いでせう。』

『可愛いにはそれは可愛いけれど、それよりも手がかゝる方が大變ですから……』

『それはさうでせうね。』

にしたいつて言つて居ますよ。』

細君は其の人のことをかう話して聞かせた。默つて居る方だが物のよく解る性質の好い人だなどとも言つた。

敏子はそれを默つて聞いて居た。

毎日、新聞社へ通つて行く馬橋の姿もこの頃では何だか頼み甲斐がないやうに見えて來た。それに、集つて來る友達の無遠慮な話、卑しい女の心理を材料にして、一般の女にまで當て𢌞めたやうな話――さうした話を得意さうに面白さうに話して居る男が淺ましかつた。

四十三

お國さんがある日その坂の下の家を訪ねて行つた。

敏子の眼には、肥つた、中脊の、まだ田舍言葉の取れない二十一二の女が映つた。馬橋の出勤した跡を、獨り茶の間で添乳をして居ると、表に案内を乞ふ人があつて、顏を出して見ると、まだ逢つたことはないが、其人だとすぐに知れた。

『まア、好く……』

かう言つて迎へた敏子の顏は赤かつた。

かう突きつけて賴んで見ても、馬橋は長くそれを抱いて居なかつた。

『子供が泣くのを氣にして居たら仕方がない。泣かせて置く方が運動になつて好いつて言ふぢやないか。』

かう馬橋は平氣で言つた。

昔のやうに机に向つて書を讀む暇などもなかつた。筆などはもう何日にも持つたことはない。世話女房――女はさうした運命だとはかねて聞いても居り覺悟もして居たが、しかし過ぎ去つた昔が考へられずには居られなかつた。再び繼ぎ合せることも出來ないほどに粉微塵に碎けて行つた二三年前の夢の跡も悲しかつた。

『奥さん……女つて言ふものは皆なかうしたものでせうね。』

思ひあぐんだといふ調子で、かう淸の細君に言ふことなどもあつた。

郊外の淸の家には、この頃女の弟子が田舍から一人來て居た。敏子も兼ねて其名を雜誌などで見て知つて居た。『非常にうまい處がある。田舍に居て、あれだけ書けるのは珍らしい。』かう淸が褒めて居たのを聞いたこともあつた。

名はお國さんと言つた。

『今度來たお國さんは、しつかりした處があるつて、宅でも感心して居ますよ。何うか旨く行くやう

四十二

馬橋の移轉した家は、四谷から市ヶ谷へ行かうとする坂の上にあつた。三間位の簷の低い家が細い通りに面して幾軒も續いて居る。腰辨や會社員や電話交換局に勤める女などが、毎日朝早く其處から出懸けて行つた。

其家からは子の泣く聲が常に聞えた。

『本當にまァ、何うしたつて言ふんでせう。あんなに泣かせて？』近所ではかう言つてよく其噂をした。役所に勤める人の家の品の好いお婆さんは、『でもねえ、母さんがあんなにお若いんだから、お氣の毒のやうでもありますよ。』かう隣の會社員の細君に話した。

婢を慶庵から頼んで置いて見たが、腰を落附けて居るやうなものもなかつた。それに經濟の方にも餘裕がないので、家事は總て敏子一人でしなければならなかつた。飯の炊き方や勝手元は、それでも段々覺えて來たが、襁褓の洗濯から家の掃除、跡仕舞――片時も手から離れない子の世話が中でも一番骨が折れた。時には勇氣を起して、結付におぶつて、洗濯などを遣つて見ることもあるが、お孃さん育ちの弱い體には、僅かの間でも紐が肩に滅入込みさうになつた。

『少し見て下さいな、餘り泣くから。』

話は絶えたり續いたりした。時々淸はビールを馬橋のコップに注いでやつた。

『少し眞面目に遣らなけれや仕方がないですな。』

突然馬橋はかう獨りで言つて、ビールをグッと飮み干した。

また時には、祈禱をする時のやうに、顏を上に眼を細く深く物を思ふといふ風をして、『何うも滿足が出來ない……矢張底は懷疑に落ちて了ひますな……』少し考へて、『何うも矢張自脈を取つても何でも自分で出て、網を編んで行くより他に仕方がないと思ふと、つく〴〵厭になつて了ひますな。』

家庭に關しては、

『此頃ではもうつく〴〵家庭といふことに愛想が盡きました。平凡なことですけれども、ラブと結婚といふ良も解つて來ました。』

理に落ちて話がなくなつて了つても、馬橋はぐづ〳〵して居た。ビールを飮むでもなく、話をするでもなく、緣側に置いてある籐椅子に腰をかけたり、床の間に近い柱に凭りかゝつて見たり、身の置き場に困るといふやうな風をして長く淸と相對して居た。そして時々思ひ附いたやうに人生上の議論やら思想上の疑惑やらを持出した。

『境遇つて言へば、今一つかういふ處がある。矢張宗教界で育つた人だといふやうな處がある。君は自分では宗教を捨てたと言つてるけれど、まだ餘程理想的な處がある。』

『何ういふ風にでせう?』

『さう訊かれると困るがね……行ふといふ氣分よりも欲するといふ念の方が盛んのやうだ。行ふといふ方面では非常に消極的な傾向があると思ふね。』

『何ういふことですか、一寸よく解りませんけれど、』と馬橋は眼を瞬いて、『何うも一體エゴイスチックで困るんです。總ていろ〳〵な誤解が其處から來ると思ふんです。』俄かに感激したやうに頭を振つて、『何うも弱者で困るんです。色々なことを考へるだけ、それだけ弱者だといつも思ふんですけど……これでも年を取れば何うかなるでせうか。』

清はそれには答へずに、

『僕の今までの經驗によると、自脈を取つていろ〳〵に懊惱煩悶する人と、自分のことは丸で放つて置いて、外部で生活して行く人と二通りあるやうだね。自脈を取る人に限つて、實行と內部精神と丸で違つた方向を取るのを僕はよく見る。』

『私などは自脈を取つてばかり居て仕方がないですな。』

馬橋はわざとらしく笑つた。

と神經の疲勞と感情の誇張と……』

『さうですな……しかし底を割つたやうな處があるにはありますね、今の若い者の思想には――』

『其處が私達のやつたセンチメンタリズムと違ふ所かも知れない。』

其日は何うした機會か、さうした話がそれからそれへと續いた。六月の暑い日がキラ〳〵して、緣にかけた青簾に梧桐の綠が搖いた。二人はビールを飮みながら話した。

『何うも私の性質には矛盾した處があつて誤解されて困るんです。』かう言つた馬橋は淸の方を見て、

『何處かかうわざと反抗するやうな處があるつて、よく友達からも言はれるんですが、そんな處があるでせうか。』

『さうさね……さう言つたところが少しはあるね。』

『何うも困るんです……自分ではそんな氣はないんですけれど。』

『遠慮なく僕に言はせると、君は鳥渡何處かすます癖がある。今、はやつてる言葉で言ふと、底が拔けて居ない。すつかり自己の眞相を人の前に顯はすと言ふやうな處がない。』少し考へて、『しかし自己の眞相を其儘に顯はすといふことは餘程難かしいことだがね。』

『さうですかな、』とかう物を深く考へるやうな眼色をして、『矢張、幼い頃からの境遇で、知らず識らずの中にさうなつたんですな。』

『隨分盛に遣つてるやうです。』かう言つて笑つて、『餘り刺戟が強いもんだから、更に強い刺戟を女や酒に求めるつて言ふことになるんでせうねえ……病氣を遣らない奴は一人だつて無いでせう。』

『フーム。』

清は頭を振つた。

『それでも眞面目に物を考へる時もあるんだらうねえ。』

『それはあるんでせう……あり過ぎるんでせう。それで却つてさういふことになるんだらうと思ふんですがね。』

『つまり、眞面目なんて言ふことがもう何だか甘過ぎるつていふ風に思はれて來たんだね。』

『さういふ處もあるやうです。それに孤獨の寂しさといふ風な處が、若い者にいろ／＼な業をさせるやうですな。』

『フム。』

清はまた頭を振つたが、『しかし何うも、私などの今の考から言ふと、消極的に過ぎるやうな氣がする。デカダンといふ思想にも、いろ／＼な形式があつて、其人々に由つて其の「あらはれ」が違ふだらうけれど、今少し積極的のデカダンの方式を取つて行けないだらうか。さういへば私達の若い頃のセンチメンタリズム、あれも一方から言ふと、デカダンと言つたやうな處がないでもないからねえ。肉體の損傷

でも一時間、二時間位居ましから餘程飮んだんでせう。ひどく醉つてすつかり感激して了つて、盃を合せたり、一緒に抱き着いたり、泣いたり喚いたりするつていふ騷ぎなんです。……それは隨分騷ぎでしたよ。』と馬橋は其時を思ひ出して笑つて、『それから何處かへ行かうつて皆で言ひ出して、へゞれけに醉つて居ながら銀座の通りに出たんです。處が其中の一人が夫婦づれに戲談を言つたとか何うとかで、何かぐづ〳〵言ひ合つて居ましたが、段々周圍に人立ちがして、あとでは何でも巡査が來たやうでした。私なども醉つて居ましたけれど、無理に其男を引張つて、それでも何うやら彼うやら尾張町の角に來て、電車に乘つたんです。處が乘客の邪魔になるなんて言ふことは眼中にない。「貴樣は可愛い奴だ」とか「貴樣とこれから兄弟にならう」とか何とか言つて、無闇に抱きついて感激するつて言ふ始末なんです。あの時は僕も醉つて居ましたけれど、弱りましたよ、歌よみの園田が、接吻するんだつて、僕に矢鱈に鬚の生えた頰を押附けるんですからな。』

『それは滑稽だつた。』清には若い人達の荒んだ心持がはつきりと判るやうな氣がした。

『皆な困つて居るんでせうな？』

暫くして清はかう訊いた。

『相應に働いては居るんですけれど……皆な貧乏してます。』

『耽溺するからでせう？』

清はかう笑つて言つたが、『それにしても僕等の若い時代は君方の時代とはもう餘程の差違があるねえ。時々君方の話を聞いたり、することを見て居たりしても、僕等にはもう鳥渡呑込めない處がある。たとへばラブをするにしても決して君達の遣つたやうなラブはしなかつた。』

『さうですかなァ……何んな處が違ふんですか。』

『それは鳥渡説明しにくいけれど……感情一方で、消極的で、好く言へば忍耐、惡く言へば今の青年よりぐづ〳〵したやうなところがあつた。……その代り感情の綺麗な長所はあつたがねえ。』

『さう、』と馬橋は考へるやうな眼色をして、『さういふ處がありませうね、島崎さんの『春』を讀んでも、さういふ處が見えますからねえ……』急に、『私達若い者の生活を先生にお目にかけたいやうな氣がする。』

『しかし、それはさうなくちやならん譯だ。時代が違ふんだからねえ。』

馬橋も段々調子に乘つて來た。『我々の生活はそれや御目にかけたいやうです。それは隨分思切つた、セッパ詰つた生活を送つて居ますからな……此間なども醉拂つて喜劇を遣りましたよ。』

『何う？』

『夕方社に三四人友達が遊びに來て、これから酒を飲みに行かうつて言ふんです。好からうつて言ふので、銀座の正宗ホール――御存じでせう、獨歩が『號外』に書いたところ、あそこに行つたんです。何

若い人達に取つては、新しいライフは決して樂しい生活ではなかつた。
『先生などでも矢張ライフが辛いことがありますか。』
ある日、馬橋はかう淸に言つた。
『それはあるともねえ……』
『何うも私などには刺戟が多過ぎて困るんです……』淸の方を見て、『今少しかう落附いて居たい、暢氣にして居たいと思ひますが、何うもそれが出來ない。』
『しかし、さういふ處は誰でも通つて來るんだから。』
『何うもいけません。今少し動搖しないやうになると好いですけれど、』かう言つて、『先生なども矢張さうでしたかしら。』
『それはさうとも……或は君などよりもつと烈しかつたかも知れない。今と違つて、時代がもつと非常に壓制的だつたからねえ。』
『それはさうでしたらうな……』少し考へて、『然し、今の若い者はさういふ壓制的なものが上にないだけに、猶辛いでせうな、自覺してるだけ猶辛い、何でも勝手なことが出來るだけに、その報酬とか責任とか言ふものはすべて受けなければなりませんから。』
『それは仕方がないねえ。』

『何うも困るんです。』

馬橋はかう言つて、少し躊躇して、『何うも面倒臭くつて困るんです。私が社に行つてる間、可怪しなことがあるんですから困つて了ふんです。』

『可怪しいつて、何んなこと？』

『詰らんことですが……私の留守の間は、一緒に午飯を食ふにも、何か言ひ出されやしないかと具合が惡くつて仕方がないつて言ふもんですから。』

『何かそんなことがあつたのかえ。』

『別に口に出して言つたといふ譯でもないんですけれど……』

清は山田と敏子との間を考へぬ譯には行かなかつた。

やがて馬橋は山田と別れて移轉した。

『これから新らしいライフに入るつもりです。』

其の移轉を知らせて來た時、馬橋はかう眞面目に言つた。

元氣な顏色をして居る時もあれば、非常に沈欝に陷つて居る時もあつた。その時々の狀態に由つて、清は若い人達の動搖の多い細かい心理を察することが出來た。

『いろんなことがあるんです……』

かう言つて馬橋は笑つた。

『でも、山田君には、君達は隨分世話になつたぢやないか。』

『さう思つて、大抵なことは我慢して居たんですけども……喧嘩つて言ふほどのこともないんですけども、此頃少し感情の面白くないことがあるんです。』

『何うしたんだ？』

『何あに、詰らんことです……』

清は笑ひながら、

『矢張、夫婦者の處に獨身者が一人居ては何かにつけて具合が悪いんだらう？』

『さうかも知れません。』

馬橋は苦笑した。

暫くしてから、清は、

『世話になる時はなつても、その事件が一段落がつくと、世話する方でも今までの熱心の度が薄くなるし、此方でもまァ不用といふやうな形になるからねえ。何うも一緒に居ては、さういふことが起り易いねえ。』

『まア、何うやら彼うやら遣つて居ます。』
いつも馬橋はかう答へた。
月の明るい夜などそれでも二人して子をつれて遣つて來ることもあつた。淸が夜遲く停車場からの暗い道を歸つて來ると、向うから來て摩違はうとした二人連が突然、
『先生。』
と聲を懸けて、
『今までお邪魔して居ましたのよ、……』闇に顏を白く見せた敏子は淸の顏を覗くやうにして、『先生、醉つて入らしつてね。』
『どうだ、今一度行かないか。』
『もう遲いですから。』
かう言つて、蛙の鳴く野道を二人は睦じさうに行き過ぎた。その後姿を淸は闇に見送つた。
ある時、馬橋は、
『何うも山田君と一緒に居ると、好いこともあるが、面白くないこともありますから、今少し狹くつても、家賃の廉い家に引越して別にならうと思ふんですが――』
『何うも面白くないかね？』

たりする郊外へと通じて居た。

川に臨んで一軒瀟洒な水樓があつた。其一間から三味線の音が聞えた。

清の姿はをり〳〵其處に見えた。

四十一

馬橋は時々郊外の清の家を訪ねて來た。

『何うも家庭といふものは難かしい面倒なものですな。』

こんなことをよく言つた。

子が生れてから一月と經たない中に、若い人達はもう喧嘩をした。馬橋も敏子も成たけその內輪を知らさぬやうにして居るけれど、それでも何處からとなくさうした話がちよい〳〵耳に入つた。『これは私の子ですから私の自由にします。殺すなり何うするなり私の勝手です。』其家の前を通つた或人が、かう敏子の癇癪を立てゝ居たのを聞いて來て清に話した。

馬橋が來る度に、

『何うだね、此頃は少しは家庭が緒に就いたかね。』

かう清が訊くと、

結つた娘もある。其處に大きな鞄を待つて乘込んだ男が、俄かに立上つて、『今度皆さんに御披露いたすものは――』と言つて、廉い繪葉書の說明を早口で饒舌り出した。其男の横顏から手にひろげた繪葉書に夕日が赤くさした。

塔や瓦甍や煙突や、それが晴れた明るい空にクッキリと浮出すやうに見える。長い土手の方に小蒸汽が泝つて行くにつれて、後にして來た都の雜鬧が一層明かに其の餘響を傳へて來るやうにも思はれた。

ある發着所から土手に上る路が斜について居た、名物の團子を賣る大きな家の二階の欄干には、女客が二三人此方を見て居た。

小蒸汽は其處からまた左の岸に近く泝つて行つた。川は都會を離れて段々趣が變つて行つた。岸には蘆荻や蘭や蘆などの綠も見えた。

富んだ人々の別莊が今度は岸から岸へと續いた。大きな立派な二階があつたり、しやれたつくりの離屋があつたり、川に臨んだ小さな亭があつたりした。充分に手の入つた栽込は何處の家も綺麗で、低い扇骨木の垣は見事に刈込まれてあつた。初夏の綠の中に薔薇の紅いのが特に際立つて鮮かに見えた。石垣の下には何の家にも船が一隻づつ繫がれてあつた。

此方の發着所から次の發着所が小さく見えた、その棧橋から、路は田があつたり蘆の生えた川があつ

四十

水が灰色に見える曇つた日もあつた。帆が風を孕んで幾箇となく上流に泝つて行く晴れた日もあつた。水に落ちる河沿ひの家々の灯影の美しい夜もあつた。

橋の袂からは、烟突のある大きな赤煉瓦の建物が正面に見えて、長い橋を渡つて行く車や馬車や人の足音が遠雷のやうに轟き渡つて聞えた。大河を往來する小蒸汽は、集る客を載せては、鼠色の烟を立てて其橋の袂の發着所から出て行つた。

汐の滿ちたたぷ〳〵する鐵納戸色をした水は、始めは岸に並んだ二階家の欄干だの、白壁の土藏だの、瓦屋根の上の物干臺だの、大きな字を書いた穀物問屋の倉庫だのを映して居たが、それが段々騷がしい町の雜閙から離れて行つて、やがてはトタン屋根や、煙筒や、岸に沿つた路や、船宿の裏窓などを映すやうになつた。

此方の岸から彼方の岸へ漕いで行く渡船には、派手な蝙蝠傘を日にかゞやかせて居る若い女もあつた。白いペンキ塗の腹を見せて勇ましく水を切つて行く短艇もあつた。

小蒸汽の中は夕日に明るかつた。其處にはいろ〳〵な人が、或は相並んで、或は脊を合せて腰をかけて居た。工女らしいものもあれば場末の商人の細君らしいものもある。腹がけをした職人もあれば島田に

どころ黄ろい黑い斑點が出來て居た。

深川の女の寫眞も一二枚は貰つて、淸は持つて居た。

それは敏子が身を隱す前後であつた。ある日、敏子は淸の留守にその書齋に入つて行つた。何氣なく見ると、其處にカビネ形の女の寫眞が一枚放り出されてあつた。

其女が普通の女でないといふことはそのつくりやら態度やらですぐ解つた。

髮を銀杏返しにして、少し低頭き加減に横向の頰を見せて、手に持つた花を見詰めるといふ姿勢をして居た。

敏子は不思議な氣がせずには居られなかつた。今までこの書齋にかうした寫眞などはつひぞ見た例がなかつた。

敏子はぢつとそれに見入つた。

其處に入つて來た細君は、

『そんな寫眞を内に吳れた女があるんですつて……』かう言つて笑つて、『何うしても、素人とは違ひますねえ。』

眼と眼の間の遠い表情のある敏子は、矢張眼と眼の間の遠い表情のある女の寫眞にぢつと見入つた。

そしてそれを靜かに机の上に置いた。

誰でせう？』……

考へる眞似をして、

『本當に何方？』

『まア、好いから……』

『敎へて下すつたつて好いぢやありませんか。』かう言つたが急に、『解つた、解つた、』と手を打つて、

『女のお弟子さん？』

『まア、好いよ。』

『さうよ、さうよ、それに違ひない。』體を自烈度さうに動かして、向うに居る年增の女の方に向いて、

『お上さん、御覽なさいよ。ほら、これが先生のお弟子さん。』

言ひ懸けた處を、淸は手を延して、それを引たくつて了つた。

『隨分よ。』女は淸の方を見て、『そんなものを持つて歩いて先生も隨分甘い方ね……およしなさいよ。見つともないぢやありませんか。』

『大きなお世話だよ……』

淸はかう言つて、笑ひながら、それを書籍の中に挾んで了つた。

フラシテンのその手鞄は、途中で雨に濡れたり汗にぬれたりして、歸る頃には、その寫眞にもところ

ないやうな氣になりますよ。』こんなことも言つた。

『だつて、仕方がないさ。』

いつも清はかう言つて笑つた。決して細君の言葉を否定しなかつた。しかしこの變遷は果して敏子の爲めだらうか。かれはかう一歩を進めて考へて見ることもある。寧ろ――寧ろそれよりも、さうした變遷の時に際して、丁度敏子が來たといふ方が正しいやうに思はれた。

其女は何處か敏子に似たところがあつた。眼と眼の間が矢張遠かつた。

昨年清が九州に行つた時、その旅鞄の中に、敏子の其頃の寫眞が一枚入れられてあつた。庇髪に袴、風呂敷を横に抱へて、スッキリとした風を見せて立つて居た。

何うした機會か、京都の旅舍で、其の寫眞を女が手に取つて見て居たことがあつた。四邊には鞄の中から取出した種々なものが散らばつて居て、簾を透して、暑い鮮かな朝日が晴れやかにさし込んで居た。

『何方の寫眞?』

ぢつと見て居た女は、やがて清の方を見て訊いた。

清は默つて、手を延して、それを取らうとすると、女は、『まア、見せたつて好いぢやありませんか。』向うむきになつて、今一度見て、『奥さんのお若い時?……さうぢやないわねえ。奥さんぢやないわねえ、

眞白につけて毛すぢを長く挿したまゝの女が、だらしない風をして、ぞろ〳〵と出て來る。やがて角の玉突場に明るい電燈がつくと、あたりの料理店や待合に出かけて行く女を載せた車がその細い通りを幾臺も通つて行つた。

其女の居る家には、他に藝者といふものはなかつた。姐さんも居なかつた。主人といふのは年を取つた爺さんで、親類の婆さんが、炊焚や洗濯の世話に來て居た。晝間は爺さんは植木鉢などを弄つて日を暮した。

清は自から自己の心の狀態を顧つて見ることが度々あつた。『何うなつて行く心か解らない。』いつもかう思つて、自己の心のかうした徑路を取つて來たことを考へて見た。

『これから何うなつて行くんだらう？』

かうも考へて見た。

かれ自身に取つても、實に驚かるゝ變遷であつた。そして其變遷が極端から極端へと走つて居るやうに見えながら、しかも其の徑路が自づからたどられるやうになつてゐるのが不思議であつた。

『敏子さんが來てから、貴方は丸で變つてお了ひなすつた――』

何ぞと言ふと、いつも細君はかう言ふのが例である。

『あの人が來てから、家庭が丸で前の家庭とは違つて了つた。それを考へると、私はかうして居られ

二人はやがて別れた。

十分後には、清は電車の中で、さうした女のことを考へたり、故郷の沼の畔の家を思つたりする人であつた。

三十九

氣の勝つた母親と人の好い父親とを持つた女は、いつも橋の傍から電車を下りて、細い荅路の奥にある深川の家へ出懸けて行つた。

それは富岡前の自働電話で京都行の禮を清に言つた女であつた。清がその女に再び逢つたのは、まだ風寒い二月の頃で、椎の葉を透して夕日のキラ／＼川に映るのを見るといふやうな一間であつた。をりをり波を立てゝ小蒸汽の通つて行くのが、繪のやうに其處から見えた。

旦那との手が切れて、再びさうした商賣をしなければならなくなつたその女は、軒燈の並んだ、細い通りの、格子造の家の二階に朝夕を送ることゝなつた。其二階は八疊で、欄干からは、廣い空地を隔して、場末でなければ見られないやうなトタン屋根だの小さい工場の煙突だのが見えた。新しい胴かけを當てた三味線が壁に一挺かけてあつて、大きな鏡臺には、時々丸顔の額の廣い女の顔が映つた。

清元や常盤津を浚ふ三味線の音が其處にも此處にも聞えて、夕方になると、突當りの湯屋から白粉を

角に醫師の家があつた。其前を此處等でなければ見られないやうな島田に結つた若い娘が通つて行つた。物を賣る店には、子供等が五六人も集まつて何かガヤ〳〵言つて騷いで居た。近所の工場で時間の汽笛が鋭く鳴つた……

ふと氣がつくと、小照は三味線の調子を合せて居た。

例の喧しい流行唄を少し彈いて居たが、客が横になつたまゝそれを聞かうともしないので、三味線を傍に置いて、小聲で獨り唄をうたつた。

『藝者なんて、駄目なもんだな。今少し暢氣な氣分になつてもよさゝうなもんだ。藝者になつた甲斐に、思ふ存分、男を玩弄にして見るといふ氣分にはなれないものかな。』こんなことを言つて客は笑つて、『何もそんなにクヨ〳〵思はないたつて好いぢやないか。一體、親だとか、家だとか、兄弟だとか、さういふことは考へないで、今少しハキ〳〵することは出來ないものかね。』

『隨分ですねえ、服部さんは……人がこんな眞面目な話をしてるのに……』

小照はかう言つて笑つた。

暫くして、二人は一緒に料理屋を出た。二人は並んで平氣で歩いて行つた。小照はキントンだの鹽燒だのを入れた折を『これ、私、頂戴してよ。』と言つて、ハンケチに包んで持つて居た。月の明るい夜であつた。角に電車の停留場があつた。

かう思つて金毘羅にお百度を踏んだり、豐川稻荷に斷物をしたりする群は尠くなかつた。ある女は弟が氣が狂つて病院に入つて居るのを、毎月二度づつ車に乘つて新宿の郊外まで見舞に行つた。ある女は力にした兄の肺病で死んだ電報を電燈の明るい賑かな座敷で受取つた。ある女の父親は朝から酒を飲んで管を卷くのを毎日の職業のやうにして居た。

『贅澤はさせなくつても、親に不自由だけはさせたくない。時には旨い酒も飲ませて遣り度い。一年に一二度は温泉にでもやつて保養をさせてやりたい』さうした望もかれ等には容易には遂せられなかつた。

時々歸つて行く家は、大抵狹い通りの細い巷路の中にあつた。家と家との間に挾まつた室は暗く鬱陶しかつた。簷には風鈴が音を立てゝ居たり籠で鈴虫が啼いてゐたりした。土藏の間から射し込む夕日は暑かつた。

さうした家の一軒を清は知つて居た。それは氣の勝つた母親と弱々しい人の好い父親とを持つた女であつた。『私の十三の時よ、父さんと母さんと仲違ひをするのを見るのが厭でく、それからかういふものにならうつて言ふ氣を起したのよ。』其女はかう清に話して聞かせた。

其家を出て、少し行つた處に橋があつた。其處から見ると、川には荷を積んだ船が幾艘となく往つたり來たりして居て、汐時の黑い水はたぷくと黃ろい夕日の影を搖かして居た。夕暮の色彩の多い雲が町の通りを派手に見せた。

『それでも難有いわねえ、忘れないで、さうしてまで聘んで下さるんだから。』

小照はそれからそれへと話した。田舍に居る時分のことが一番多かつた。田舍の新聞に競爭して居た女は惡く書かれたが、自分だけは賞められて出たといふことやら、料理屋のお袋さんに惜まれて、泣きの涙で別れて來たことやら、此間も土地で評判の紳士にある料理屋で聘ばれて、いろ〳〵田舍の話をしたことやら、話は中々盡きようともしなかつた。後には段々身の上話にまでなつて行つた。

かれの悲しい閲歷は十四歳頃から始まつて居た。十歳の時に父に死なれ、商賣上の必要から、好まぬながら母は後夫を持つことになつたが、その後夫が何うしても十分に信用が出來ないので、母は財產を皆自分の名義にして、決してその自由には出來ぬやうにして置いた。繼父と母と幼い娘と、その感情の長い間の衝突は、母が死の病床に就くに至つて、破裂するといふやうな悲しい運命をかれは持つて居た。十四になつたばかりの娘は、死の床にある母親を強ひて說いて、財產書替の書類に調印させようとする繼父の恐ろしい劍幕を見た。また、母が一人娘の爲めに頑固に最後までそれを拒んだ時の凄ましい表情をも見た。

『其時私の心に染込んだ人間の淺ましさといふことが何うしても拔けませんの……』

小照はかう昔を語つて聞かせた。

思ひのまゝにならぬライフはかうした女の社會にも隨分多かつた。父の爲め母の爲め、家の爲め――

『お聞かせなさいよ。一體、何處なの、貴方のは？』

『そんなことは何うでも好い。』

『何うでも好くはないのよ、聞きたいのよ。』

『まア好いよ、そんなことは、』と笑つて、『いづれ其中つれて行つて、ぢかに會はせてやる。』

『さう、屹度。』

と小照は笑を含んだ顔で客の方を見る。

女中が再び銚子を持つて入つて來た時には、客は酒に醉つた赤い顔をして、茶湯臺の傍に横になつて居た。藝者が頻りに熱心に何か話して居ると、客は面白さうにフム〱言つて餘念なく聞いて居た。

『……照つていふ字だけ、それでも感心に覺えて居たんですつて。それで先月出た藝者にさういふ名の女があるんだらうつて、彼方此方大騷ぎをして搜したんですつて。私、ある所に出てたんですけれど、貰つて行つて見ると、禿頭が二人。私が入ると『ヤ、小照』と言ふんでせう。一人は松原の金持のお爺さんで、一人は製粉會社の重役なのよ。それから、半玉を二人聘んで、カッポレを踊らしたり、何かして、それは大騷ぎよ。あんなお爺さんになつても、あゝいふことが面白いんだと思ふと、私、可笑くなつて了つた……』

煙草を一服とんと叩いて、

客が笑ふと、

『私も困りましたよ、本當に、あの時は。』

小照も笑つた。

『不思議なもんさね、緣といふものは。』

『本當ねえ。』

かう小照は染々言つた。

『けれどもう今ぢや駄目だね、もうさういふ氣は起したくつたつて起らない。』

わざとこんなことを淸が言ふと、

『隨分御挨拶ね。』

と小照は笑つて、『今度は私が振られる番？』

『困らせられる役は僕は御免だ。』

客は盃を小照にさした。

女はそれを干して、

『服部さん、貴郎もおのろけなさいよ。少しは種を持つてるでせう？』

『それはあるとも……』

『今になつて見ると矢張田舍に居た方が好かつたと思ひますよ。』かう言つて小照は考へて、『彼方に居れば、扇屋の小照で澄まして居られたんですものねえ。』

『それに誰かも居たしねえ。』

客が兼ねて聞いて知つて居る相惚の旦那の話を匂はせて笑ふと、

『服部さん……もうあの事は言はないで下さいよ。若い盛りを田舍に埋れて了つて、そして今時分こんなにまご〳〵して居るのも、皆なあの爲めですもの。』

『其時分だつたね、君を口說いたことがあつたね。』

客は少し醉つて來たので、こんなことを云つて笑つた。

『さうでしたね。』

と小照も思ひ出して笑つて、『普通ならあの時ぎりお目に懸かれなかつたお客さんね、貴郎は。』かう言つて間を置いて、『だつて、あの頃は私、鬚の生えた人が大嫌ひだつたんですもの。それに私、かういふ商賣をして居ても、その時分は氣が小さくつて、それや仕方がなかつたんですからねえ。鬚の生えた男を見ると、それこそ戰慄ひがする位でしたもの。……町の金毘羅樣に願をかけて、夜中にお參りに行つて、金毘羅藝者と言はれたのもあの頃でしたねえ。』

『考へると、滑稽さね。あの時分はあれで大眞面目だつたんだからねえ。』

土地は方角が私の性に合はないんですつて……折角出たんだし、姐さんも今少し辛抱すればつて言つて吳れますから、せめて半年位居て見ようと思つたんですけれどね、長く居れば居るほど損になるばかりだつて、上手な易を見る人が言ふんですもの。』

『ぢや、もうやめるのかえ？』

『これは内所よ、……田舍に行つてもそんなことを言つては厭ですよ。……公園に出ようと思ふの。』

『公園？　……公園よりは此處の方が好いだらうがな。』かう言つた客は、場所に居られずにさうした所に住替をして行くはやらない藝者を氣の毒にもあはれにも思つた。

小說が好きで、『不如歸』や『己が罪』などの話をよくする女であつた。『私のことを書くと、それは可哀相な小說になりますよ。』こんなことを常に言つた。

田舍では掃溜の中に下りた鶴のやうに一時は騷がれたものであつたが、かうした東京の料理屋では、粧飾も態度も著しく見劣りがされて見えた。

田舍に居る時分、商賣上競爭する女があつて、一時非常に苦勞をしたことがあつた、神經過敏になつたのを、『氣が變だ』などと噂に立てられたこともあつた。『照ちやんのお座敷は氣が詰つて』などと茶屋の女中も言つた。しかし淸は藝者の型にはまらないやうな眞面目な靜かな處が好きだつた。

二人の間には不思議な友情といふやうなものが出來て居た。

『彼處に？』

『いや、寺にさ。』

『其時、彼處にいらしつて？』

『行つたけれど、君は居ないし、病氣だつたから、酒も飮まずに、午飯を食つて歸つて來た。』

『病氣つて？　何うなすつて？』

『少し脚氣で。』

『さう、それはいけませんねえ。』

かう言つて、客の出した盃に酌をする。客は、

『今日は隨分待つた……』

『本當にねえ、私、これでも大急ぎで來たんですよ。……屹度、何方か向うでお目にかゝつた人だと思ひましたから……本當に初めての土地で、知つてる方にかうして聘んで戴く位難有いことはありませんねえ。』かう小照は女中に言つた。

女中が下へ行つてから、

『何うだえ、はやるかねえ？』

客がかう訊くと、『實は今日もそれで相談に行つて居たのですがね。』小照は客の方を見て、『何うも此の

やがて銚子を持つて入つて來た女中は、淸の手にした盃に酌をしながら、
『もう、ぢき參りますよ。』
かう笑ひながら言つた。
小照がその顏を小屛風の蔭から見せて挨拶したのは、それからまだいくらも經たぬほどであつた。『服部さん……私、屹度、さうだと思つた。』かう言つて、入つて來て、女中の傍に坐つた。
女中は席を讓りながら、見ぬ振をして二人の樣子を見た。藝者も餘り好い女ではなかつた。それにつくりも衣裳も時の流行に後れて居る。はやらない藝者だといふことはすぐ解つた。
二人の間が妙くとも異樣に女中の眼に映つた。關係があるやうにもあれば無いやうにもある。別れてからの挨拶などを聞くと、時々改まり過ぎたと思はれるやうな處がある。
『知らせて上げて好いか惡いかと餘程考へたんですよ。でも、あの時あゝお約束をしたからと思つて……でも、本當によく來て下すつたのねえ。』かう言つて、『あの方はお變りなくつて……そら、あのお寺のお方？』
『ウム、達者で居るよ。』
『此頃、彼方に入らつしやることがあつて？』
『昨年の秋、一月ばかり行つて居た。』

『一つ聞いて見ませう。』

かう言つて女中は二階を下りて行つた。

手紙の中にも『誰一人知る人もない土地とて、心細く暮し居候まゝ』と書いてあつた。容色だつて好いではなし、年だつて若いのではなし、藝だつて出來るのではなし、かうした東京の場所に來ては、賣れるなどといふことは望まれないことであつた。淸は東京の下町の何不足ない商人の家に生れて、娘の時代を零落の運命に遭つた不仕合せな女のことを考へながら、ぽつねんとして獨り卷煙草をふかして居た。

てるは芝の家へ午後から出懸けて行つて留守であつた。しかし行つた先の近所に電話があるから、『大急ぎで來るやうに言つてやりました、』と女中は知らせて來た。『お名ざしのお客さんなら、是非待つて戴いて下さいな、』と兼ねて懇意な其の藝妓屋の姐さんは電話口に出て言つた。

電燈が點いて段々日が暮れて行く間を淸は退屈して、欄干の處に立つて四邊を眺めたり、廊下を彼方此方と往來したりして居た。瓦甍と物干臺との上に廣く見渡される夕照の空の色は、見る間に段々薄くなつて、近くを通る電車の線の鳴る音が唸るやうにをり〳〵聞えて來た。すぐ下には板塀で圍まれた町家の裏の廣場が見えた。

風呂場は花崗石が敷き詰めてあつた。越後訛の風呂番の男が、熱い湯をうめたり脊中を流して呉れたりした。淸が久し振りで好い心持になつて上つて來た時には膳がもうちやんと茶湯臺の上に出來て居た。

へ抱いて行く婢の後を跟いて行つた。總領の女の兒は、『敏子さんの赤ちやん！　まァ可愛い、』などと言つて、引込ませてゐる手などを弄つて見る。

一重ざくらはもう盛りを過ぎて居た。彼岸に近い日は暖かで、芝草の若い綠は既に美しく萠え出して居た。萬兩の赤い實の鈴生に生つた鉢や萬年青の生々した鉢などが踏石の上に置いてあつた。藍の模樣の鮮かに出てゐる手水鉢の水に日の影が綾をなして光つた。庭には小鳥が囀つて居た。

三十八

封筒に杉山常と書いてあつた。誰だか烏渡思ひ出せなかつた。それが昨年まで沼のある故鄕の町に居た小照で、今度漸く此地からてるといふ名でひろめをしたといふことが解つた時には、淸は不思議な氣がした。

四五日してから、淸は橋があつたり運漕店があつたり問屋があつたりする下町の狹い賑かな通りを歩いて行つた。其處には入口は狹いが大きな座敷のいくつもある土地で有名な料理屋があつた。女中は伴れのないのを聞いて、氣をきかせて、奧深い世離れた六疊の一間に淸を通した。

『てる？　聞いたやうで御座いますけれど……』女中は首を傾げて客の顏を見た。

『まだ、先月出たばかりだつて言ふんだからねえ。』

プにも半分ほど細君が注いだ。
敏子は子供の襁褓の濡れたのを先程から氣にして居たが、思ひ切つて、『奥さん、濟みませんが、乾いた襁褓の空いたのがないでせうか。』かう言つて、細君が持つて來て呉れたのを借りて、其儘立つて玄關の三疊へ行きにかゝると、

『そこで好う御座んすよ、敏子さん。』

『でも。』

顔を赧くして、馴れない子供を扱ふのを見られるのがきまりが悪いといふやうに、其儘三疊の方へ行つた。

子の泣聲が其處から聞えた。

暫くして襁褓を取換へて出て來たが、子が猶泣き止まぬので、今度は胸を少しひろげて、張つた乳房を恥かしさうに出して、それを子供の小さい口に當てゝやつた。子は容易に吸ひつかなかつた。

『何うも、その位の中が一番取扱が面倒なものですよ。何だか潰れやしないかと思ふやうでせう。』

『本當ねえ、奥さん。』

敏子は細君の方を見て言つた。

敏子の箸を取る間、細君は其子を婢に抱かせた。と、家の子供達は、赤坊をめづらしがつて、庭の方

して居るのも、何か他に理由があるのではないかといふ疑ひもあつた。

しかし清はそれを顏には現はさなかつた。『本當に、一つしつかり遣つてくれたまへ。過失は過失で、過去は問はないことにして、これから大に眞面目にやつて貰はなくつては……』かう言つて清は若い人達の方を見た。

馬橋は笑ひながら、

『遣れる丈は遣つて見る積です。』

かう言つて、すぐ言葉を續いで、

『けれど何うも貧乏で困ります。働くだけで體が疲れて了ひますから……何うも矢張體が丈夫でないと駄目ですな。』

『まア、然し、そんなにあせつたつて仕方がないがね。』

『まア、遣るだけは遣つて見ます。』

馬橋はかう繰返して言つた。

やがて細君はお膳を運んで來た。さし身に吸物に鹽燒。わざ〳〵引留めたほどの御馳走もなかつた。

それでも麥酒のコップは添へてあつた。

清は立つて罎の栓を拔いた。馬橋のコップにも、清のにも聽て波々と注がれる。辭退する敏子のコッ

『それで、何うしました、結婚の屆は？』

『まだ、國から何とも言つて來ません。面倒なものですから、投つて置くと見えるんです。』

『困るねえ！』

馬橋の籍はある田舍の寺の戸籍に入つて居た。幼い頃父を亡つたかれは、其寺で大きくなるやうな不仕合せな運命を持つて居た。母親は再縁して大阪に居た。僧籍から離れなければ、公けの結婚屆は出せなかつた。

『早く、誰れかに賴んで、屆が出せるやうにして貰はないといかんねえ。放つて置くと、役場の方は好いとしても、子供が學齡になつても、學校に上がれないやうなことになるからねえ。』淸はかう言つて考へて、『君達には、まだ子供の問題などさう重大に考へられないでせうけれど、さういふ事情で、あとで困つてゐる人は隨分居るよ。』

『早速運ぶやうにします。』

馬橋ばかう早口に言つた。

一緒にするなら終生の恨、かう敏子の父は書いて寄越した。淸の身にしても、結婚をさせるのは餘り好い心持ではなかつた。それに、馬橋の性格もまだよく飮込めないやうなところがある。正式の結婚を延

『隨分、子供を育てるのは大變でせう？』

その沈默を破る爲めにかう淸が敏子に言ふと、

『えゝ。』

と言つたきりで、敏子は眼を下に落して了つた。

『何うしても初めては大變ですよ。』細君は傍から言つて、『それでも、敏子さんのは乳が澤山に出るから、そんなにお困りぢやないでせうが、私の總領の時などは、それは大變でしたよ。夜半でも、枕元に湯を沸かして置いて、泣き出すと、宅で起きてミルクを溶くといふ騷でしたから。』

前に幾度も聞いて知つて居ることを細君は言ひ出した。

流石にいろ〳〵なことが思ひ出されるといふ風で、敏子は何となく沈み勝にして居た。藝術にあくがれた若い心が僅かな年月の間に、かうした運命の途を取つて行つたといふことが、敏子にも淸にも深いある意味と感慨とを齎らさずには置かなかつた。淸の言葉も兎角途絕え勝であつた。

敏子は馬橋に歸る目配せをした。

『まア、好う御座んすよ。何うせ、田舍で何も無いですけど、今、支度をさせましたから。』

かう言つて、二人の暇を告げようとするのを、細君は達つて留めて、其儘茶の間の方へ行つた。

淸は言葉を改めて、馬橋に言つた。

男達の話して居る間に、敏子は少しく心の餘裕を得たといふやうに、子供を抱きかへて居住ひを直した。紬の着物に銘仙の羽織を着て、繻子と縮緬の腹合はせの帶をしめて居た。髮の薄くなつたのや、肩の瘦せたのなどが著しく眼に立つた。眼の周圍にも、濃い深い影が生じた。

其處へ入つて來た細君は、

『頂戴物をしましたから。』かう言つて床の間の方を淸に見せた。其處には、此間祝つて遣つたおかへしのつもりのお目出糖一箱と紅い頰のやうな林檎を入れた籠とが置かれてあつた。

『そんな心配はしなければ好いのに。』

『いゝえ、もつと早く上らなければならんのでした。』

馬橋はかう挨拶をした。

新聞社の話や、文壇の話や、初めて家を持つた時の經驗話や、さういふ話を男達のして居る間を、敏子と細君とは女同士のするやうな話を何彼と話した。やがて細君は敏子の腕から子を抱き取つて、

『ほら、御覽なさい。こんな可愛い顏をしてゐる。貴方のお孫さんですよ。』

わざと戯談にこんなことを言つて、淸の方へ向けて見せた。

お孫さん！　この一語は餘り一座の心持に伴つたやうにも見えなかつた。淸は苦笑するより他に仕方がなかつた。敏子は眞面目な顏をして默つて居た。

わざと敏子の方へ視線を向けた。

其顏の報いのを敏子は見た。

いろ〳〵な思ひの胸に集つて來るのを抑へて、『大變大きい丈夫さうな兒だね、どれ、此方を向けて見せ給へ！』

かう清が言ふと、敏子は顏を赧くして例の表情のある眼をちらと清の方へ閃めかしたが、やがて微笑を頰に浮べながら、子供の顏を此方へ向けて見せた。

敏子の頰の著しく瘦せたのを見て、清は悲しいやうな氣がしたが、『おゝ、いゝ子だ。肥つてる。貴方によく似てる。』

かう言つて、俄かに話頭を馬橋の方へ向けて、

『それでも好く出て來られたね。——此頃は社が忙しいんだらう。』

『え、忙しいつて言へば忙しいんですけれど、さう言つてると、いつまで經つても來られませんから。』

『それでもちつとは馴れたでせう？』

『え、此頃は夜勤の方は人にやつて貰ふことにしましたから。』

『夜勤は辛いだらうねえ。』

『え、私の遣つてる頃は、寒い時分でしたから辛かつたです。』

『餘程前から來た？』
『一時間ばかり前。』
かう言つて、顏を寄せて、
『子供も連れて來たのよ。』
『フム。』
清は帶をしめて、靴下をぬいで、箪笥の上に置いてある足袋を穿いた。何處となく氣が落附かないといふ風で——座敷へ入つて行くのが何だか心を讀まれるやうな氣がするといふ風で、暫し其處にまご〳〵して居たが、やがて煙草箱と煙管と吸ひかけた敷島の袋とを一緒につかんで、わざと勢好く裏の縁側に足音を立てゝ座敷へ入つて行つた。
襖を後にして、敏子は子供を抱いて坐つて居たが、其眼と清の眼とは電氣のやうに忽ち相觸れた。
敏子はすぐ低頭いて了つた。
『や。』
と清は聲を懸けると、馬橋は少し席をいざつて、丁寧に挨拶をかへした。
『よく遣つて來ましたね。』
馬橋に言ふでもなく敏子に言ふでもなく、間の拔けた異樣な調子で、清はかう續けて言つたが、其儘

『だつて、君なんぞ吸つちやいかん。』

馬橋が大眞面目なので、山田も終にはくす〳〵笑ひ出した。

『何うぢやね、まァ。本氣にしてるがね！』

お三輪もふき出して笑つた。

三十七

四月のある晴れた日に、清が社から歸つて來ると、玄關の靴ぬぎに、見馴れない二枚草履と桐柾の駒下駄とが並べて置いてあつて、座敷で話聲が聞えて居た。

障子を明けて細君が迎へに出たが、

『おや、貴方ですか。』

と言つて聲を低くして、『敏子さん、馬橋さんも一緒に。』

『フム。』

わざと平氣な調子で清は言つた。しかし一種の鼓動を心に覺えない譯には行かなかつた。彼は其儘居間へ入つて、洋服をぬいだり、ネクタイを外したりして居たが、後から和服の不斷着を被せかけた細君は、

『もう、歸るつて言つて居たのよ。』

つて話などをして居ることは稀である。それに話も合はぬらしかつた。
乳が何うも思つたやうに出なかつた。翌日産湯をつかはせに來た時、産婆は觸つて見て、『こんなに張つて居るんですから、乳がないつて言ふ譯ぢやないんですねえ、かうやつて……』と揉む眞似をして見せて、『成るたけ、自分で揉むやうにして御覽なさい。それに誰か男の方に吸つて貰ふと好う御座んすよ。道が開くと、ズン〳〵出て來ますから。』
夕飯の時に其話が出て、
『何うだ、僕が一つ吸つてやらうか。』
笑ひながら、山田が言ふと、
『いかん、いかん、君など吸つちやいかん。』
馬橋はかう言つて笑つた。
『しかし亭主に吸つて貰つたんぢや駄目だつて言ふぜ。』
『そんなことがあるもんか。』
『本當だよ、産婆がさう言つて居ましたねえ、奥さん。』
かう言ひかけられてお三輪はわざと、
『え、え、さうですつて。』

『まア、さう言へばさうさな。』

と馬橋は笑つた。

『兎に角、これで一安心だねえ。名を何と附けたえ？　僕がつけてやらうか。』

かう言つて歸つて行く人もあつた。

お目出度いなどと言つて行くものは一人もなかつた。それに、產婦が隣の間に寢て居るのにも頓着なく、大きな聲を立てゝ、議論らしいことを長い間饒舌つて行つた。お三輪が挨拶をしても碌々それに調子を合はせるやうな人もなかつた。

お三輪は滿更書生生活を知らぬ譯ではない。死んだ夫が免職になつて困つて居る時分には、其家の一間に早稻田へ通ふ書生を置いたこともある。それから淸が細君を貰つた當座によく訪ねて來た書生さんの群も知つて居る。矢張解らぬ議論は常にしたが、しかしこんな風ではなかつた。

『隨分いろ〱なお友達がお有んなさるね。』

わざとかう馬橋に言ふと、

『暢氣な男ばかり居るでせう？　あれで綺麗な嬶を持つて居る奴もあるんですぜ。』

かう平氣で馬橋は言つた。

それに比べると山田は、丸で態度が違つてるやうにお三輪には見えた。かれはさういふ群の中に交

『何かに出て居たと見えて、宅で、さう言つて居ましたから。』
『さう。』
清は二三日前から友人二三名と田舍へ小旅行をして居た。

三十六

兎に角七夜までは、お三輪が泊つて世話をして遣ることになる。で、日が暮れてから、山田が出懸けて行つて、其家の少年と一緒にお三輪の寢道具をかついで運んで來た。
『や、生れたな、どれ見せろ。』
こんなことを言つて、づか／＼三疊へ入つて行く友達もあつた。
『何うも生れ立ての赤坊つて言ふものは汚ないもんだな……。それでも愛情なんて言ふものが起るかえ？』
ある友達がかう言ふと、馬橋は、
『愛情なんて、起るつて言へば起るとも言へるんだらうが、それほど際立つたもんぢやないねえ。何うも矢張汚いよ。肉の塊のやうな氣がするよ。』
『これが大騷ぎをやつたラブの塊だと思ふと厭になるねえ。』

ふ聲もをり〳〵其處から洩れて來た。例の『敏さん、敏さん』と呼ぶ調子も異樣に聞えた。

お三輪の今まで見て來た家庭では、かうした主婦は餘りなかつた。難かしい姑に虐待される嫁さん、鹿爪らしい顏をして居る旦那さん――男が他人の前で女に白い齒を見せるやうな習慣は餘り見たことがなかつた。表面は從順に見せかけて、眼色や態度で男の心を奪ふのが、由來お三輪達の見たり遣つたりして來た世の中の狀態であつた。何んなに仲が好くてもそれを表面に表はせない處に面白味があつた。お三輪には何も彼も目新しく見えた。

『若い人達は若い人達さねえ。』

かうお三輪は、其日の午後に報知を受けて見舞に來た淸の細君に言つた。

細君は水飴の罐を見舞に持つて來た。馬橋は出勤してもう居なかつた。山田も晝飯をすますと、用事があるとて出かけて行つた。

『好い兒ね、似てますね、敏子さんに。』

細君はかう言つて、傍に寢かしてある兒を見た。

『先生はお留守ですつてね。』

敏子は暫くしてから細君を見て言つた。

『何うして知つて居て？』

『今朝は御飯は炊かないのかね。』
かうお三輪が訊くと、
『えゝ、これで間に合せて置きました。』
『それぢや、家で炊かせて持つて來て上げれば好かつたねえ。』
『いや、僕等はこれで澤山……。平生でも面倒臭いと、よくこれで間に合せて置くことがあるんです。』
『簡單でせう、僕等の生活は。』
馬橋は傍からかう言つて、食ひかけた麵麭をムシャ〳〵食つた。
『奥さん、一つ何うです？』
馬橋が笑つて言ふと、
『私は麵麭はまつぴら。』
とお三輪は手を振つて見せた。
お三輪はまだ朝飯前であつた。昨日の飯も殘つて居なかつた。
『御飯が無くつちや何かにつけて困るでせう。私、炊いて上げようかね。』かう言つて、お三輪は勝手元へ行つた。米櫃には一度炊く位の米しか殘つて居なかつた。
それでも若い人達は樂しさうであつた。馬橋は産室へ入つて長い間何か睦しさうに話をして居た。笑

バケツや炭俵やお膳や……滴した水はそのまゝに凍つて、歩くと板の間がツル／＼滑る。七輪にはから火が活々と起つて居た。

『まア——これは大變ぢやね。』

お三輪は思はず聲を立てた。

竈一つ、釜一つ、棚の上のビールの空罎が二三本ころがつて居る他には、何もないといふやうな貧しい生活の中で、あの學問の出來る美しい敏子が、かうしてお産をするといふことは、お三輪には可哀相のやうでもあり、不思議なやうでもあつた。

『さア、片づけませう、餘り散らかつてゐるぢやないかね。』

お三輪はかう言つて、持つて來た襷をかけに懸つた。

産婦の爲めにお粥を煮たり、汚れたものを片附けたり、紅絹の片を丸くして生れた兒に砂糖水を飲ませたり、幾度もかういふ世話に馴れたお三輪は、別にそれを苦にするでもなかつた。

『奥さん、まア、お茶でもお上がんなさい。』

産室に居るお三輪を山田が座敷で呼ぶので、暫くして行つて見ると、口の缺けた土瓶に番茶が淹れてあつて、茶湯臺の上には、食麵麭がごろ／＼轉がつて居た。

『それはさうでせうねえ……男の手ではねえ。』

『昨夜、僕の歸つて來たのは、二時過なんでせう。それからゴタ〳〵して、たうとう寢る間はなかつた。』かう言つて馬橋は充血した眼を摩つた。

『そんなことを言ふけど、一番苦しんで居た時分は、君はグウ〳〵寢て居たぢやないか。』

勝手から入つて來た山田は、それを聞いて、其處に立つたまゝかう言つた。

『さうかな……そんなことはありやしまい。』

『だつて、生れた時は君は寢てたぢやないか。』

『さうかな、少しウト〳〵したかな……お產の時の唸聲といふものは、餘り心地の好いものぢやない。』

產れるまでの苦痛、產婆に賴まれて、山田は敏子の腰の處を強く押して遣つた。產婆の來ない前にも苦しんで居る女の下腹を摩つてやつた。

『山田君は男性と女性とを兼ねたやうな重寶な處があるよ。君が居て吳れたんで僕は大變助かつた。』

馬橋はこんなことをも言つた。

何の氣なしに勝手へ入つて行くと、足を踏み立てられないやうな亂雜な光景が先づお三輪の眼に映つた。產湯を使はせた盥がまだ其儘にしてあつた。四邊にはコツパだの焚きつけだのが一面に散らばつて居る。釜には柄杓が入れられたまゝに蓋が取つてあつて、其處から湯氣が白く立つて居る。

『お出でよ、さア。』

とお三輪は相變らず戲談を言つて通つて行つた。

お三輪が行つて見ると、暗い三疊に白い顔を見せて、敏子は寢て居た。傍には生れた兒が寢かしてあつた。

『お目出度う御座いましたねえ。』

覗くやうにしてお三輪が言ふと、敏子は莞爾と笑つて見せた。

馬橋はまご〳〵して居た。汚れた女の綿入を着て、袖の長いのを捲りながら、頻りに勝手元を出たり入つたりして居た。『何うもお呼立てして濟みませんでした。男には何にも分らないものですから。』かう言つて、角火鉢の前にお三輪を坐らせた。

『好いお兒ぢやね、馬橋さん。』

例の顚狂な調子で言つて、

『それでも輕かつたんですか？』

『え、重い方ぢやなかつたんです。』

『結構でしたねえ。』

馬橋は笑つて、『それでも生れた時はまごつきましたよ。……湯が沸いて居なかつたものですから。』

『え、今まで居ましたけれど、急に又一つ出かゝつて居るのがあるつて、跡を片附けるとすぐ行きました。』

『さうかね、忙しいこつちやね。』かう言つて、『それぢや後からすぐ行きますから。』

山田が歸つて行つて間もなく、お三輪は支度をして出懸けた。丁度其時隣の秀子がねむさうな顏をして、入口の格子の雨戸を明けて居た。お三輪の姿を見て、

『をばさん、何處へ行くの？　こんなに早く。』

『何處だか、當てゝ御覽よ、好い處よ。』

と笑つて立留る。

『好い處つて、何處？』

『好い女の兒が生れたんだつて。』

『女の兒？』秀子は鳥渡考へて、手を打つて、『敏子さんの？』

『さうさね。』

『女の兒？　今、生れたの？』と、秀子は眼を瞬る。

『好い兒だつて、……今、知らせに來たのよ。』

『さう……私も見に行かうかしら。』

二月の末のある寒い夜であつた。産婆のお桂さんが烏渡お三輪の家に寄つて、

『今夜あたりお產がありさうですよ。今、迎へに來て、これから行く處ですの。』かう知らせて行つた。寢卷も着替へずに心待に待つて起きて居たが、十二時が過ぎてもその迎への者は來なかつた。さうした處を見られるのが流石に恥かしいのだらうと思つてお三輪は寢たが、不圖眼が覺めると、誰かゞ低く戶を叩いて居た。

もう夜は明け放れて居た。寒い〳〵朝であつた。戶外には山田が汚れた襟卷をぐる〳〵卷附けて寒さうにして立つて居た。山田も馬橋も一二度此家に訪ねて來て、お三輪とはもう懇意の間柄であつた。

『何うしたね？』

『生れましたよ、女の兒が――』

『安產かね？』

『えゝ二人とも達者なやうです。』

『それは結構ぢやつたね？　私、今これからすぐ行くがねえ。』

『え、……何うぞ……男二人だものですから、何にも解らなくつて困つて了つたのです。……お氣の毒ですけど、お差支がなければ、烏渡入らしつて戴きたいんですが……』

『え、今、すぐ行きますよ。』烏渡氣を變へて、『產婆さん、まだ居るんでせう？』

らなければならぬやうなことも度々あつた。かれは毎夜刺戟された頭と疲れた體とを抱いて山の手の自分の家に歸つて來た。

三十五

『手が要るやうなことがあつたら、お三輪嫂さんの處へすぐ頼みに入らつしやい。宅で、さう話して置いた筈ですから――』かう細君は敏子に言つた。

敏子の出産の時の世話をある時淸がお三輪に頼むと、

『私で出來ることなら何でもするがね、お易い御用ぢやともねえ……。近いからいつでも出懸けて行つて上げますとも。』

かうお三輪は氣輕に承知して、

『本當にまァ……立派な家のお孃さんが、見ず知らずの人の中に來て、一人でお産をするつて言ふのは大抵なことぢやないがね。』

かう同情もした。

『辨天町の家に來る時分には、綺麗な別嬪さんぢやつたがね。』

こんなことをも意味ありさうに言つてわざと淸に笑ひ懸けた。

れを威嚇したり賺したりして、漸く十分ほどの約束で戸外に連れ出した。くつきりと拔出るやうな色の白い美しい女であつた。馬橋はそれと並んで歩きながら、兼ねて探つて知つて居る其女の祕密を少しづつ話して、それに對する返答の中から更に深い祕密の眞相をさぐり出さうとした。女はそれを新聞に出させまいとして、泣いたり賴んだり訴へたりした。墮落の道に陷ちて行つた經歷などをも哀れつぽく同情を惹くやうに話して聞かせた。しかしそれも甲斐がないといふことが解ると、今度は柔かい體をすり寄せかり、わざと手を握つたりして、頻りに色仕懸で持ちかけて來るのが馬橋にも解つた。

女は今では音樂家と手を切つて、今居る家の男に身を任せて居た。女に取つては、新聞に書かれるのが非常に辛かつた。十分と言つたのが三十分ほど經つても、二人は猶闇の中に立つて話して居た。其處に、其家から出て來た太いステツキを持つた大きい男が、ヅカヽヽ遣つて來て、『貴樣は何だ！』と突然誰何した。馬橋はその太いステツキの一擊を覺悟しない譯には行かなかつた。男は『人の家の娘を二十分も三十分も戸外に引張り出して居る奴があるか、いくら新聞記者だつて用捨がならん。』かう凄じい語氣を見せたが、それでも別段ステツキを振廻しもしなかつた。やがて女を伴れて家に入つて行つた。

時には早稻田の新開町の曖昧屋に、職人の服裝をして、探檢に出かけて行くことなどもあつた。夜の東京には、思ひがけない暗黑なことや猥褻なことが數限りなく行はれて居た。

馬橋はそれからそれへと材料をさがして歩いた。十二時過ぎになると、電車がなくなつて、歩いて歸

敏子はいつもかう言つた。

馬橋に取つては、それが何だか自由を束縛されるやうな氣がして厭であつた。そんなことは言はれなくつても遣つて行くといふ腹もあつた。『貴方の爲めにこれほど犧牲になつて居る』といふ敏子の態度や言葉にも段々慊らなくなつて來た。

『だつて、そんなこと言つたつて仕方がないぢやないか。』

後にはかう云つて、女に反抗の語氣を見せることもあつた。

過去の快樂が歷々と振返られる頃には、二人の前には重い苦しい現實の鍾が既にその束縛を確實にして居た。二人は戀の爲めに大きな犧牲を拂つて居たことを思はぬ譯には行かなかつた。

其頃、馬橋は社で『暗黑の東京』と言つたやうな外交方面を預けられて、二三人の同僚と一緒に、日比谷公園だの、招魂社だの、濱町河岸だのといふやうな處を夜中にぐる〳〵廻つて歩いた。女と男とがベンチに凭つて何か密々話して居るのを樹の間の闇から覗いて見たり、夜目にもそれと解るほど白粉をつけた若い女が軒燈のぼんやり點いた細い露路に入つて行くのをつけて行つたり、時には評判の女學生の祕密を探るために、二時間も其家の周圍をぶらついて居たことなどもあつた。

ある有名な音樂家の弟子で且つ情婦であつた一女學生を訪問した夜は面白かつた。女は新聞記者だと聞いて容易に逢はなかつた。風邪を引いて臥て居るとか何とか言つて、逢はない算段を頻りにした。そ

細君の出かけて行く時は、いつも大抵馬橋が居た。敏子と二人ぎりで、いろ〳〵な話を細君はして見たかつた。しかし、さうした機會は遂になかつた。出かける支度をして居る時でも、細君が歸るまでは決して出懸けなかつた。其處まで出かけた途上で細君に逢つた時などは、わざ〳〵馬橋は其處から引返して來た。…………

平生でさへ感情的な敏子は、身重になつてから、益〻神經が過敏になつた。默つて三疊の暗い處に引込んで居ることが多かつた。かと思ふと顏を赤くして、若い人達と一緒になつて賑かに笑つて居ることもあつた。馬橋の行爲に少しでも不眞面目な不熱心なところがあつたりすると、すぐ『私のことも考へて下さい』といふ風に出て來た。

多くの世間的犧牲、さういふものは何うでも好い。男さへしつかりしてゐて貰へばそれで好い。今に成功させて見せる。笑つた人々を見返すやうにして見せる。敏子は其の力で自分の選んだ男を立派に成功させることが出來ると信じて居る女の一人であつた。田舍に歸つて居る間にも、男が自分の爲めに絶望して其一生を犧牲にして了ひはしないかといふことが、戀そのものよりも大きな問題であつた。それほど敏子は自己の力を信じて居た。敏子に取つては馬橋から不眞面目な不熱心な態度を見せられるのが一番辛かつた。

『私の心も知らないで――』…………

敏子の爲めにも豪くならなければならなかつた。かれは筆を執つたり書を讀んだりする時間の少いのを憾んだ。體も強い方ではなかつた。

机の上にはそれでも西洋の新しい小說や評論の書籍が常に載せられてあつた。

馬橋は敏子のことを『敏さん、敏さん』と呼んで居た。年齢が同じなので、戀人同士と言ふ一方には何處か友達といふやうなところもあつた。をりく衝突することがあつても、馬橋はいつも折れて出た。社に出る時に、

『敏さん、金を持つてないか。』

かう馬橋が言つて、敏子の財布から五十錢銀貨を貰つて行くこともあつた。

近所にしる粉屋があつた。客があると、敏子はよくそれを買つた。淸の細君の二度目に行つた時もそれを取つて御馳走した。婢がそのアキを取りに來た時、敏子は自分の財布を先づさがして見て『貴方、少しお錢を出して下さいな。』かう机の傍で何か書いてゐる馬橋に言つた。

淸は細君に成るたけ度々見舞に出懸けるやうにさせた。『普通に結婚さへすれば、あんな生活を送らなくつても好かつたのだ。自分で遣つたこととは言ひながら、憎むべきことでも何でもない。里といふほどのことは出來なくとも、子を產んで了ふまでは、度々行つて慰めてやれ。親に離れて、知らない土地で、あゝして身重になつて居るのは可哀相だから。』かう淸は細君に言つた。

た布子を着た男だの、顏の四角な脊の高い紺絣の羽織を着た男だの、蒼い神經性の顏をして常にイライラして居る青年などの間に、髪の亂れた蒼いやつれた顏をした敏子の姿が常に見られた。

『かうして居ると、"Virgin soil" の中の一章のやうな氣がしますねえ。』

ある一人はかう言つて得意さうに敏子の方を見た。

センチメントにあくがれた清や西や田邊の時代とは、若い人達の心持が著しく違つて居た。理想の影を追ふなどといふやうな處は少しもなかつた。戀の仕方も大膽であつた。人々は其處此處から、女を捜して來ては、勝手に同棲した。早稻田の奧に、あやしげな女を妻にして居るものもあつた。女學生を懐姙させて、女の親から誘拐の告訴をされて居るものもあつた。女に遁げられて深い絕望に陷つて居るものもあつた。

同じ社に出る仲間も一人二人はその近所に居た。いづれも學校を出たばかりの若い人達で、夜勤の時など、窓の處から、

『おい、馬橋君。』

かう聲を懸けて行つた。

馬橋は働くと共に學ばなければならなかつた。三面記者などにいつまでも甘んじては居られなかつた。

た山田が勝手へ出て、敏子の知らぬことを深切に教へて遣つた。朝など、馬橋のまだ寢て居る間を、二人でせつせと勝手で働いて居ることなどもあつた。

山田は二人の爲めには――寧ろ敏子の爲めには、いかなる勞をも厭はないといふ風に見えた。產前の注意もしてやれば、經濟のことにも力を添へて遣つた。いつも二人で仲よささうに働いて居るので、近所では何方が御亭主でせうなどと噂し合つた。

『勝手元をする位なら、原稿を書いて、誰か婢を一人賴んだ方が得よ……私、原稿を書いてお給金を出すわ。』

終には敏子はかういふことを口にするやうになつた。敏子は女の雜誌や少年少女の雜誌に、女學校の寄宿舍の實驗談だの、お伽話だのを書いて出した。一時間に三四枚は書ける筆を持つて居た。

『たうとう本音が出ましたね。』

山田はかう言つて笑つた。

若い友達はよく遊びに來た。有名なヒロインを見てやれなどと好奇に遣つて來るものも多かつた。中にはロシアの虛無主義にかぶれて居るものもあれば、自からデカダンを標榜して、酒と女を生命のやうにして居るものもあつた。

三人も寄ると、一間は嵐の樣であつた。議論をしたり皮肉の言ひ合ひをしたりした。髮を長く、汚れ

かう山田が同情して言ふと、

『水が荒いのね。』

敏子は恨めしさうに手の裏を返して見た。

寒い日には、釜にわざ〳〵湯を沸かしてそれで米を磨いだりなどした。

『僕が細君を貰ふ時は、飯の滿足に炊ける女を貰ふんだ。』

若い友達の一人はこんなことをわざと言つて笑つた。

後には、敏子は染々と勝手元が厭になつて來た。淸の家に居る頃には、細君が婢を相手に煮炊などをして居るのを見て、何だか自分も手を出して見たい樣な氣もしたが、いざ自分がそれをするとなると、面倒な、厭な、骨の折れるものだといふことが段々解つて來た。加減に馴れないで、水鏡のやうな薄い汁が出來たり、口の曲るやうな鹹い煮附が出來たりした。

それでも馬橋はまづいとも言はずに默つて食つた。

さういふ時には、山田が屹度後で『今日のお料理のせゐですよ、こんなに咽喉の乾くのは、』などと輕い皮肉を言ふのが例であつた。

馬橋も炊事には不馴であつた。矢張飯を炊いたことはなかつた。で、大抵は稚さい時分から苦勞をし

そと歸つて行くのを見ることもあつた。又ある時は脊の高い頭を分けた今一人の方の男が、タオルをだらしなく肩にかけてブリキの藍色の洗面器を持つて來て、頻りに顔を洗つて居るのを見ることもあつた。

飯も敏子には滿足に炊けなかつた。火の燃えないのが第一に困つた。コッパの焚附を燻べても容易に薪に火が移らなかつた。煙が座敷まで入つて來るので、山田が行つて見ると、敏子は煙に咽んで眼から涙を出して、其中にまご〳〵して居た。

飯も半熟の時が多かつた。

『何うも困つた奥さんだね。』

かう山田は戯談を言つて、いつも火を燃してやつた。

それに擂木も充分には廻らなかつた。芝居にある落魄れたお姫様と言つたやうな風をして辛うじて朝毎の味噌を磨つた。『今に、上手になりますよ。今に、立派なお上さんになつて見せますから。』敏子はこんなことを言つて、釜や茶碗などを洗つた。

正月の寒い日が幾日かつゞいた。日影の當らない勝手元は殊に寒かつた。敏子の細い華奢な手は荒い山の手の井戸の水に赤くなつて、リスリンをつけてもつけても細い痛い皸が切れた。敏子は勝手を片附けると、いつも一しきり火鉢の傍に坐つて、赤くなつた兩手のうら表を押附けて見て居た。

『皸がきれましたね？』

人であつた。

三十四

若い人達は自由な、しかし困難な生活を送つて居た。移轉をするに就いての費用、今まで溜つて居た下宿屋の勘定、それを拂ふために、行李に殘された衣裳や書籍や純金の指環や、さうしたものは總て質屋に運ばれた。敏子が買つたツルゲネエフの全集も馬橋がある夜風呂敷に包んで持つて行つて金に代へて來た。

室は隨分亂雜にしてあつた。三疊には馬橋と敏子が寢た。六疊には山田が蒲團を敷いた。夜が遲いので、朝、十時過ぎまで、雨戸が明けられずにあることもめづらしくはなかつた。

朝夕の炊事、それがまた一方ならぬ辛苦であつた。お孃さん育ち、寄宿舍育ちのかよわい敏子には、山の手の深い井戸の凍つた釣瓶繩は容易に手繰られなかつた。初めは新らしい興味と新しい勇氣とを抱いて、甲斐々々しく襷などをかけて、勝手元へ出て働いても見たが、それも長くは續かなかつた。辛うじて汲上げたバケツの水を持つて來ようとして、霜解の惡い道に足を取られて、危く大きい腹を打たうとしてから、近所の上さん達は、若い庇髪の女の代りに今度は男達の姿を井戸端に見るやうになつた。

朝遲く女の赤い八つ口の附いた汚れた綿入の寢卷を着て、脊の低い眼の下つた男が水を汲んでこそこ

耳を欹てゝも話聲は聞えなかつた。人の居るやうな氣勢もしなかつた。

敏子が一人留守番をして居る光景がそれと想像された。

馬橋は去年の暮から『報知』に入ることになつた。三面の外交は、まだ世の中に深い經驗もない若い身に取つては餘り容易な仕事ではなかつた。それに新參では一週に一度の休暇も取ることも出來なかつた。此頃では夜勤の方に廻されて、夜は一時過に歸つて來ることもあつた。

清には其夜のことが後まで忘られなかつた。打消しても打消しても何うすることも出來ないある一種の力——そこに離れ難ない不思議な緣があつた。

敏子と清との間は、長い間平行線で續いて來た。時にはその平行線が觸れようとする處まで近づいて行つたこともあつた。しかし其平行線は容易に觸れることが出來ないやうな運命を持つて居た。

この平行線は、何時まで續くんだらう?『永久に觸れることの出來ない平行線——』かう思ひながら、かれは寺があつたり幼稚園があつたりする裏道を、灯の多い通りの方へと步いて行つた。

暗い三疊の一間! それも幾度となくかれの眼の前に歷々と見えた。三疊の暗い一間に寢て居る女、腹の大きい女、蒼いやつれた顏をした女——さうした想像は惡魔のやうな暗い影をいつもかれの頭に蔽ひかぶせた。時には神經的になつて頭を石に打ちつけて了ひたいと思ふことなどもあつた。またピストルを額に當てたいと思ふこともあつた。清は人間の心の複雜した現象に驚いたり恐れたり嘆いたりする

の影の中に、淸の家の軒燈がぽつつり一つ點いて居るばかりで、夜は女などの出て歩けないほど暗くさびしかつた。それが今では其處にも此處にも笑聲がして、下宿屋の室からは琵琶歌などが洩れて聞えた。

敏子の家は其處から遠くはなかつた。元、藪地であつた處に新道が出來て、寺の傍から眞直に原町の通りに出るやうになつて居る。淸は餘所ながら其家を見て行く氣になつて、其方へ出て行つた。

近頃にないやうな暖かい夜であつた。歩いて行く淸の影が薄く地上に落ちて居た。正月の夜は何處の家も賑かで、笑聲が其處にも此處にもした。歌牌を讀む若い女の聲のする家もあつた。

電燈の明るい湯屋からは、夜目にも見えるほど眞白に白粉をつけた女が石鹼と手拭とを持つて出て來た。

それと覺しき家の前に來た時、丁度向うから歩いて來る男があつた。それが馬橋か山田かで、向うから聲を懸けられるやうなことはありはせぬかと淸は恐れた。わざと左側の垣根の方に添つて、用のある人のやうに急いで歩いた。

摩違つてからも、足を留めなかつた。突當ると、路は右に曲つて、向うは廣い原になつて居た。薄い霧が茫と夢のやうにあたりを籠めて、向うの兵營の窓の灯が其中にぼんやりと見えた。

淸は今一度引返した。

其家の格子戶は雨戶が一枚引いてあつて、一枚明けたところから、中の入口の障子が明るく見えた。

牛込に居る頃、細君のたのみつけて居た産婆があつた。總領の娘も、次の男の兒も皆なその人の世話になつた『あのお婆さんは何うでせう、』と細君は言つた。しかしそれよりも簡單に話の出來る、産婆が其の近所に居た。それはお三輪の稚友達で、長い間苦勞した夫と別れて、つい此頃この近くに産婆の札を掲げた。お三輪がある日其處を通ると、豫ねて知つて居る其女の名が書いてあつて、丁度其處から出かけて來た人は、十五六年も逢はない昔の友達であつた。『マァ、貴方お桂さんぢやなくつて？』『まァ、貴方お三輪さん？』それから其産婆はお三輪の家に出入するやうになつた。

『あの人に賴んで下さいよ。新店だからお禮なんぞはいくらだつて構ひやしないんぢやがね。』

淸が年始に出かけて行つた時、お三輪はかう言つて、その産婆を勸めた。

籍は細君の行つた翌日、山田が持つて來て、早速役場の屆けをすました。『いゝ大きな娘さんが出來たんぢやつてねえ……。まァ、お目出度いことぢやね。』お三輪はこんな風に淸に言つた。

其夜は月が薄い暈を被て居た。お三輪の家と姉の未亡人の家で飮ませられた酒に淸はかなり醉つて居た。かれは要垣と柴垣との間の細い巷路を歩いて行つた。其處にある二階屋は、かれの三番目の男の兒の生れたところで、敏子が父親に連れられて始めて遣つて來たのも其家であつた。其家の玄關の窓からは灯が明るく見えて居た。

推移といふことは、其前の桐畠や菜畑が大きな二階建の下宿屋になつたのでも知れた。其頃は深い樹

清は默つて聞いて居た。

三十三

清はさびしく暮した。

霜解の道を拾ひながら、日毎に社へ通つて行つた。日影に彩られて霧が美しく見える朝もあつた。丘から丘へ通ふ路には西風が寒く吹いた。

『當人も是非先生に御目にかゝりて御禮申し上げねばならぬには候へども、感情の昂り居候際とてこれは今少時御ゆるし下されたく幾重にも御察しのほど願上候。』

山田から來た手紙にはこんなことが書いてあつた。

『あゝいふ體で貴方に逢ふのが厭なんですよ、屹度。』

かう細君はその手紙を見て言つた。

敏子はまだ體を產婆に見せて居なかつた。餘り臨月に近づいてからでは、產婆は萬一を氣遣つて、成たけ責任を遁れたがるものであつた。中にはさうした產婦を謝絕するものも尠くなかつた。

『本當に若い人達は暢氣ですねえ！』

それを聞いた細君はかう言つて笑つた。

『奥さん！』

かう言つた敏子は、俄かにほろ〳〵と涙を滴した。『奥さん！』急にエクスタシイに陷つたといふやうに、いきなり細君の手を執つて、堅く握りしめて、

『奥さん、先生によろしくね！』

涙に潤つた敏子の眼には、烈しい一種の表情が見えた。

細君が暇を告げて車に乘る間、敏子は格子戸の處に立つて、其の蒼白い顏を此方に見せて居た。午近い靜かな通りには、下駄の齒入が皷を叩いて通つたり、豆腐屋が鈴を鳴して觸聲を立てゝ行つたりした。

車夫が梶棒を上げた時、『左樣なら。それではお大事にね、』と細君は聲をかけた。敏子は挨拶を返した。女の經驗する姙娠の時の心の狀態などを、細君は車の上で考へて居た。

其日の夕暮、清が社から歸つて來るのを待受けて、細君は敏子に逢つた一伍一什を詳しく話して聞かせた。

『もう、餘程目に立つやうになりました。』

歸り際に、急に手を握つた話もして聞かせて、

『本當に、敏子さん、感情の強い人ねえ……。かう私の手を堅く握つて、涙をほろ〳〵こぼすんですもの……。私も氣の毒になつて了ひました。本當に不思議な緣ねえ。』

『え、え、今ぢやなくつたつて好いんですよ。一生のことですから、貴女もよく考へて見てから。』
細君はわざと氣輕に笑つて見せた。
『本當にお世話にばかりなつて……』
少時してから、やゝ氣が落附いたといふ風で敏子は言つた。
しかし打解けた話はつひに出來なかつた。かうした處を訪ねられたことは若い身に取つて餘りに突然でもあり、氣恥かしくもあり、胸苦しくもあつた。敏子の心臟の鼓動は容易に靜まらなかつた。
『それぢや又伺ひますから。』
細君はやがて暇を告げた。
『さう、奥さん……もう歸るの？　本當にかうしてお目にかゝらうとは思ひませんでしたのねえ……何にも……お茶も上げることも出來ないで……』かう言つて立つて來た敏子の聲には、もう堪らなくなつたといふやうな調子が籠つた。眼には涙が見えた。
『本當に、餘り心配しない方が好う御座んすよ。……おなかに觸るといけないから。』かう言つた細君の胸には女の同情が漲るやうに起つて來た。
『本當に心配しない方が好くつてよ。』
細君は敏子の蒼いやつれた顏をぢつと見て、かう繰返して言つた。

『曉方、少しおなかが痛んだもんですから。』

かう言つたきりで、話がいつものやうに續かなかつた。

細君はやがて風呂敷包の中から、其處で買つて來た菓子折を出した。

『ほんのお見舞のしるしよ。』

『奥さん、こんな御心配は……本當にお世話にばかりなつて。』

敏子の聲は曇つて聞えた。下唇を嚙みしめて、胸に集つて來る感情を押へるといふやうな風が歴々と見えた。

『それから、あの……』と細君は風呂敷の奥に包んで來た書類を其處に出して、

『お國から籍の屆が來たんですの……。それで宅でね、よく敏子さんの心持も聞いて來いつて、そして敏子さんが好いなら、判を捺して貰つて來いつて吩咐けられて來たんですの。』

敏子は書類を手に取つたが、それを飜して見るでもなかつた。其儘傍に置いて、

『奥さん、私、今、判がないのよ……』

かう言つて細君の方を見て、

『あとで判を捺して、すぐ郵便で送るやうにしますから。』

と言葉を續けた。

『何んなに心配したか知れませんでしたよ。田舍の母樣なども、それは御心配でしたよ。』

かう言つた細君の言葉にも何處か打解けないところがあつた。

『何からお話しして、お詫をして好いんですか、先生にも大變に御迷惑をかけて――』

敏子はそれでも小聲でかう言つて細君の方を見た。ずぐ低頭いた顏には、肉の顫へが見えた。

見馴れた不斷着の銘仙の着物に、メリンスの色の褪めた帶を緊めて居た。いつもはめてゐた純金の指環はもうなかつた。

七月の腹は著るしく眼に立つた。皮膚の色もいやに黃ばんで見えた。眼の周圍にも暗い紫の影が出來た。

二人とも胸にあることを充分に言へないといふ風であつた。座はやゝともすると沈默に落ちた。

敏子は視線を膝の邊に落して、白い額と瘦せた頰とを此方に見せて、絕えず物思はしげな態度をして居た。

『本當に、何うもなすつたんぢやないんでせう？』

『えゝ。』

『一時間ばかり前にもお訪ねしたんですけれど、矢張鍵がかゝつて居て――』細君は其話を始めて見たが、敏子にはその相手になる餘裕がなかつた。

敏子は默つて打伏になつた。急には顏を擧げなかつた。

『本當に何うかなすつたの？』

『いゝえ。』

敏子は辛うじてかう言つた。いつもなら『奧さん、まァ』とか『まァ、何うして奧さん』とか言ふのであるが、今日はさうした言葉も出なかつた。怖しい夢から覺めた人のやうに唯惘然として居た。

急に、

『奧さん、まァ、彼方に入らして居て下さい。こんな處では御挨拶も出來ませんから。』

敏子がかう言ふので、細君は座敷の方へ來て坐つた。

帶を締めたり何かするやうな氣勢が暫く聞えて居たが、やがて其處へ出て來た敏子の顏は元氣がなかつた。

細君と敏子との間に交されるいつものやうな快活な調子には何うしてもなれなかつた。細君も眞面目な顏をして居た。敏子は唯低頭いて居た。

逢つたら、すぐ打解けて、人を心配させた恨みをも言つて遣らう、身を隱して居た間の一伍一什をも聞いて遣らう、産に就いての相談對手にもなつて遣らう。かういろ〳〵に思つて細君は遣つて來た。しかしさうした氣分にはなれなかつた。

それでも細君はその障子を靜かに明けて見た。明るい處から暗い處に入つた眼は、其處にある何物をも暫しははつきりと見ることが出來なかつた。何だか黑い大きいものが眼に附いたと思つたが、それが蒲團で、夜着を殆ど冠るやうにして、庇髮の處だけを出して、敏子が寢て居るのであるといふことは急には解らなかつた。

細君は暫くぢつとして立つて居た。死んで居るのではないかと思つてゾッとした。

『敏子さん、敏子さん。』

暫くしてから、細君は其傍に坐つて、蒲團の上から搖り起した。

『ア、ア。』

と言つたと思ふと、敏子は眼をぱつちり明いて、恐ろしい幻覺でも見たやうな顏をして四邊を見廻した。

『私ですよ、敏子さん。』

細君がかう言つて顏を出すと、敏子は吃驚したやうに、俄かに夜着をはね退けて、其まゝ蒲團の上に起き返つた。蒼ざめた顏に解け懸つた髮が亂れて、ごろ寢をした銘仙の羽織は皺だらけになつて居た。帶は緊めて居なかつた。

『何うかしたの？　敏子さん。』

細君は思切つて、裏の大和障子を明けて家の内へ入つて見た。勝手には七輪と赤い素燒の釜とが置いてあつて、バケツには水が半分ほど汲まれてある。其處に出してあるお膳は、まだ洗はずにだらしなく散らばしてあつた。

處々破れた中じきりの障子を明けて、細君は其處から六疊の座敷へ入つて行つた。矢張誰も居なかつた。西洋の書籍やら雜誌やらのギッシリ詰つた本箱の傍に机が置かれて、其上に原稿紙が二三枚載せてあつて、棧の古くなつた障子の硝子から更紗の色の褪めた座蒲團の上に日影が線をなして射し込んで居た。緣側の隅にある手水鉢の傍では、南天の赤い實を小鳥が頻りに啄いて居たが、障子を明けると、輕い羽音を立てゝ慌てゝ飛んで行つた。

玄關の二疊はその六疊に續いて居た。其處からは表の通りに待つてゐる車が見えた。

『本當に留守なのか知らん……不用心な……若い人は暢氣だねえ……』こんなことを思つて、後を振返つた細君は、其處に勝手と並んで、別に一と間部屋のあるのを發見した。座敷との間を障子で仕切つてあつた。

其處は暗かつた。

其の障子を明けて見ようと思つた細君は、俄かにある不安の押寄せて來るのを感じた。案内を乞うても乞うても返事がなかつた。もしや……と思つた胸は無氣味でもあり怖しくもあつた。

敏子の話をすると、

『何うしたんだらうね、本當に。家が違つたんぢやないかねえ。』

『さうかも知れないけれど……まさかさうでもないだらうと思ふの。屹度、一寸其處等へ買物にでも行つた留守だつたかも知れない。歸りに今一度寄つて見ようと思ふの……』

『さうかも知れないよ。あの人はよく買物に出るから……それでもまア、お前の家でさうしてやれば敏子さんも仕合せさ。』

『それは本當にさうよ。本當は家では構はないつて言つても仕方がないんだから。』

隣のお三輪も暢氣なことを言つて居た。其話を聞いて、『敏子さんも、面白い幕を打ちなさつたもんぢやね。』こんなことを言つて笑つた。

友達の處から丁度歸つて來た秀子は、『さう、敏子さん歸つた來たの？　其處にゐるの？』眼を丸くして言つた。

細君は歸りに今一度子敏の家に寄つて見ることにした。

矢張表の格子戸の鍵はかゝつて居た。駒下駄も其儘になつて居た。先刻と違つたやうな氣勢は何處にも見出されなかつた。

隣の物干棹に襁褓だの子供の着物などのかけ連ねられてあるのが見えた。紅白の絞の山茶花が見事に奥の家の塀の上に見えて居た。霜解の道に薄い日影がさした。

乘つて來た車夫は、細君が霜解に惱んで居るのを見て、其處に遣つて來て、ヅカ／＼と裏口に廻つて大和障子の破れやら戸の隙間などから內の樣子を窺つて見て吳れた。やがて戻つて來て『何うもお留守のやうです。……新しく引越していらつしやつた方には違ひないやうですけれど、何方もお留守のやうです。』

細君は表へ出て、格子戸の前に立つて今一度案內を乞うて見た。しかし矢張返事がないので、思ひ切つて、車に乘つて姉の未亡人の家へ行つた。

姉は相變らず莞爾して居た。歲の暮で裁縫が忙しく、片時も針の手を留める暇はなかつた。『お前、お氣の毒だけれど、其處の茶簞笥の上の處に、昨日貰つたカステラがあるよ。それからお茶も淹れて飲んでお吳れよ。お客樣を使つて濟まないけれど……』かう言つて姉は笑つて、『お前なぞは暢氣で好いねえ……歲の暮が來ても忙しいなんて言ふことはありはしまい。私などはこれから大晦日の夜の十二時まではぶつゝり坐つたつきりだからねえ。』

『却つて、張合があつて好いのよ。姉さんのやうに忙しい方が……』

氣の置けない姉妹はこんなことを言つて茶を飲んだ。

……今回養女に貰ひ受け候間……

その一句にかれの心は引きよせられた。かれは不思議な緣を振返つて考へぬ譯には行かなかつた。かれは今一度其書類を繙して見て、さて實印を捺した。

『これで敏子さんさへ好ければそれで好いんだが、當人もいざとなると考へがあるかも知れない。丁度好い。お前、見舞がてら一つ今日歸りに寄つて、これを見せて、敏子さん自身の考へも聞いて來る方が好い。』

細君は丁度お三輪や姉の未亡人の家に御歲暮に行く準備をして居た。其處から原町は近かつた。

聞いて來た番地は三軒しかなかつた。大きな門のある家、その隣の二軒つゞきの長屋、其一軒が確かにそれらしく思はれた。しかし表札も名札もなかつた。格子戶は內から鍵がかけてあつた。上り端に、女の駒下駄が一足置かれてあつた。色の褪めた鼈珍の鼻緒には見覺えがなかつた。細君は今一度格子戶をガタ〳〵させて、『御免なさい』と二三度おとづれて見た。返事はなかつた。

『留守かしらん。』細君はかう口に出して言つて見たが、何うも不在らしく思はれなかつた。大きな腹をして、世を忍ぶ身で、田舍から歸つて來る匆々、家を明けて出かけて步くとも思はれない。細君はふと家と〳〵の間に細い小路のあるのを見付けて、溝板を踏んで裏へ廻つて見た。其處には井戶があつて

好う御座んす。食ひたい時は食ふし、寢たい時は寢るし、隣の室が喧しいなどといふこともなし、此頃の暖かい午前に、緣側に寢ころんで日向ぼつこをして居ると、實に好い心地です。』山田はこんな暢氣なことを言つて居た。

敏子が歸つて來たといふ報知のあつた翌日であつた。國元から送籍の手續をした書類が廻して寄越された。敏子と淸とが調印してそれを役場に出しさへすれば好いやうになつて居た。これで安心したといふ調子が、父親の手紙に歷々と見えて居た。歷代保つて來た名譽、町でも名高い家の系統、さうしたものが汚されず辱しめられずに濟んだのを喜ぶらしい文句が其處にもあつた。それから馬橋に籍を入れることに就いての不同意も繰返して書いてあつた。田舍に住んで居る人と都會に住んで居る人との心持の相違はそれにも解つた。

淸は細君に實印を出させた。それは簞笥の底の衣類の下に藏つてあつた。祖父が腰に下げて歩いたといふ小さい革袋は手擦がして、象牙の根付はカタ〳〵と音を立てた。其處には一度彫られて磨り消された父親の印材も入れられてあつた。淸は實印などを滅多に用ゐることがなかつた。かれは祖父の名告を篆書にした古風な印を其まゝ自分の實印として屆けて置いた。

敏子を籍に入れることに就いては親戚は總べて不服であつた。――しかし淸はそれを別に意にしなかつた。かれは書類を手に取つた。

『何うも一體性質がさういふ風なんですな。』とも言つた。『しかし折角遣り始めたんだから、捨てずに遣らせるやうにして呉れ給へ。』かう言つて馬橋の方を見た。淸は、敏子のことが脈々とした哀愁をまた淸の胸に齎らして來た。

三十二

其年も押詰つて町の軒並に正月の飾竹がガサ〳〵と音を立てる頃、迎へに行つた馬橋と一緒に敏子が田舍から歸つて來るといふ報を淸は耳にした。新しく馬橋の借りた家は牛込原町の奧で、牛肉屋だの、八百屋だの、夜は電燈の輝く唐物店だの、連つた通りの湯屋の角から左へ入つた處にあつた。二疊に六疊に三疊の三間、家賃は六圓五十錢、六疊の間に下宿の二階から運んで來た机やら本箱やらを並べて置いて、三疊の押入れに行李や夜具や汚れた衣類などを入れた。

經濟の點から、今一つは馬橋は留守勝で萬事不自由といふ點から、山田が暫く一緒に同居することになつて、これも矢張伜一臺位しかない荷物を今まで居た下宿から運んで來た。

生活に必要な勝手道具は、高くも安くも取揃へられるやうに出來て居た。手桶の代りにバケツ、竈の代りに七輪、釜も陶器の赤い素燒の安いのを買へばそれで結構飯が炊けた。馬橋が田舍へ敏子を迎へに行つて居る間、山田は水を汲んだり勝手元をしたりして自炊をした。『下宿屋に居るよりも、餘程暢氣で

田とは違つて、馬橋は作者と批評家とを兼ねたやうな話を得意にした。其の友達には近頃新聞雜誌に時時大陸文學の紹介の筆を執る人があつたり、新派の歌で頭角を現はし始めた青年があつたりした。早稻田を出た新進作家もあつた。

『幸ひに、友達が皆な熱心ですから、一緒に遣るのに張合ひがあつて好いです。』かうしたことも言つた。

二人を材にした清の作品に就いては、

『あれを讀んだ時は、實際痛かつたですよ。さうです、あれは放浪して群馬に居た時、友達から君のことを書いたに違ひないつて送つて寄越して呉れました。しかし痛かつたのもほんの一時でした。』

賑かな笑聲が一間に充ちた。

其處に出て來た細君は、

『馬橋さん、お久し振でしたねえ。』

莞爾と笑ひながら言つた。

馬橋はそれでもきまりが惡いやうに、鳥渡居住ひを正して挨拶を返した。

敏子の書いたものに對する批評が出たのは、もう二人が暇を告げようとする頃であつた。何うも感情が出て主觀に陷り易くつて不可ない。かうした話も出た。

ては生きて居られないといふ位でした。それから道樂もやりました。』こんなことを言つて『けれど吾々は貧乏ですから駄目です。』

『それで今はやめたんですか。』

『やめたと言ふこともないですけれど、自然にやめさせられたんですな……』コップを取つて半分ほど飮んで、『何うも酒つて言ふものは不思議ですな、飮まないで居れば飮めなくなる。』

淸は馬橋が下に置いたコップに一杯に注ぎ足すと、

『そんなに飮むと醉つて了ひます。これから社に行かなくつちやなりませんから……。それに「報知」の編輯長にも今日來いと言はれて居ますから。』

『まア、好いさ！』

かう言つて酒を勸める淸は、何處となく愉快さうに見えた。

『外に出て寒い空氣に當ると、すぐ醒めて了ふよ。』

こんなことも言つた。

やがて馬橋の顏も主人の顏も赤くなつて來た。段々いろ〳〵な話が出る。文壇がこれから何うなつて行くだらうとか、自然主義の本旨は何處にあるだらうとか、大陸では今何ういふ作者が何ういふ思潮を湧かせて居るだらうとか、さういふことが盡きずに二人の話頭に上つた。出版業に手を出しかけて居る山

『さうしよう……』
馬橋も點頭いて見せた。
そんな話をして居る間に、婢は麥酒を盆に載せて持つて來た。
コップを引くり返して勸めながら、
『君は飲むんでせう？』
かう淸が言ふと、
『一時は少し飲みましたけれど、此頃はやめて居ります。』
『まア、好いさ、一杯やり給へ。』
かう言つて波々と注いで、今一つのに注がうとすると、山田は手で盞をして、『私は駄目です。』
『まア好いでせう、冬はビールは駄目だけれど。』
『本當に戴かないんですから。』山田はかう云つたが、しかし淸の强ひて注ぐのを留めもしなかつた。
硝子戸からさし込んで來る朝の日影は人々の手にした麥酒のコップに明るく照つた。霜に濡れた八つ手は冬枯の庭に際立つて綠濃く見られた。
『馬橋君はかなり飲んだんでせう。』
『え、一時はやりました。』失戀を醫す爲めといふ意味が其處に籠められてあつた。『一時は酒がなくつ

馬橋は清の顏を見て、次に山田の方を顧みた。

『上さんがよく世話をして呉れますから彼方でさせるのも好いとも思ひますけれど……』かう言つてまた清の方を見た。

心の底を讀まうとするやうな眼の細かい働きを清は感じた。

『何方が好いでせう、山田君。』

清はわざとかう訊いて見た。

『さア。』

と山田は少し考へて、『それは……來られるのなら、東京の方が好いでせう。初めてゞすから、遠い處では、何かにつけて力になるものがなくつて淋しいでせうし、それに、東京なら、もしもの時に醫師もありますし……』

『僕もさう思ふ。』

清は贊成した。

『何うせ、君だつて、家を一つ持たなくつちやならないんだから。』山田は馬橋に言つた。

『さうする方が好いねえ、君。先生も、小石川の兄さんもさう言つて上さるんだし、君も來月から「報知」に入るやうになつて居るんだから、さうする方が好い。』

山田と一緒に馬橋が淸の家を訪ねて來たのは、矢張霜の白い晴れた朝であつた。社にお出にならない中にと言つて、二人はかなり早く遣つて來た。

八疊の座數で三人は快活に話した。複雜した事件が、事件の中に居る個人と個人との心持でズンく展開して行く快さを誰も感じた。

『誤解して居たものですから。』

馬橋は申譯をするやうに言つた。

『それで、一體生れるのは何時です？』

かう淸が訊いた。

馬橋は山田と顏を見合せて、笑つて見せて、

『何時つて？　よくは知りませんけれど……來年の一月か二月でせうと思ふんですが。』

『それぢやまだ汽車に乘つて歸つて來ても大丈夫ですね。』

『え、大丈夫でせうとも。』

『それで、君は何うする積です？』淸は言葉の調子を改めて、『彼方で產をさせる積りですか、それとも此方につれて來るつもりですか。』

『何方にしたら好いでせうか。』

『さうですつてねえ。』

清の頭には此時ふとこの山田といふ青年と馬橋と敏子との關係が考へられた。親友のラヴの中に居て、三人で一緒に郊外に散歩に出かけたり、二人の戀の爲めにかうまで力を盡したりする男！　清はかう思つて、更に新しい感を抱いて、その山田の廣い額とはつきりした眼とを見た。

明るい日影のさし透つた一間は靜かであつた。

三十一

清の勤める社の三階の應接間に小石川の兄が訪ねて來たり、山田が一二度手紙を郊外の家に寄越したりして、話は段々圓滿な解決を告げるやうになつて來た。

『しかし敏子が何と言ふかわからない。貧乏な文學者の養女になるのは厭だと言ふかも知れない。それに馬橋との結婚に就いても異議があるかも知れない。兎に角當人の意見を聞いて見なければ駄目だ。』

清はかういふ意見を敏子の兄に話した。

『そんなことはないでせう。將來文學を以て世に立たうとする二人に取つては、貴方に親になつて貰ふと言ふことは、願つても出來ないことでせう。』兄はこんなことを言つて笑つた。巴渦の外に居る兄には細かい心理狀態が解らう筈はなかつた。

かう思つた淸の眼の前には、何うした聯想か、自分の若い頃に逢つたり話したりした女の人々が歷々と見えて通つた。藤棚のある橋の袂の家に居た紫の帶をしめた女、友人の家で歌牌などでよく落合つた頰の肉附の好い色の白い女、旅の小川の畔でなでしこを取つて髮に挿して行つた女、海水浴場で懇意になつた眼の綺麗な早口な女——淸は昔がこひしかつた。

『矢張ラヴの出來る人と出來ない人とがあるやうですねえ。』

氣が附くと、山田はこんなことを言つて居た。

『前にも一度敏さんはそんなことがあつたんです……』かう續けて言つて、『御存じかも知れませんけれど、まだ女學院に居る時分』言ひかけて淸の顏を見て、

『御存じですか。』

『え、聞いたことがあります。其人は今、新聞記者をしてゐるつて言ふぢやありませんか。』

『え。』

山田は笑つて見せた。

『けれど、別に何うの彼うのと言ふのぢやなかつたんでせう?』

『え、まだ其の頃は無邪氣でしたから、そんなこともなかつたんでせう。けれど學校では大分問題になつたんです。その爲め其の教師は辭職するやうなことになつたんですから。』

白いリボンを懸けて、明るい顏をして居た頃がなつかしかつた。二疊の狹い一間に机を置いて、一輪挿に匂ひの高い沈丁花を活けて、艶な白い顏を薄暗い夕暮の空氣の中に見せて、綺麗な細かい字を原稿紙の上に走らせて居る時分には、かうした運命が其前に待つて居ようとは淸にも敏子にも思はれなかつた。華やかな希望、生々した將來、樂しさうな笑聲――其處にはまだ美しい理想の夢が覺まされずに殘されてあつた。永久に新しい樂しい春であつた。

『先生――』

かう言つては書齋へ入つて來て、藝術に關する淸の話に聞き惚れるのがいつもの習ひであつた。親の言ふことは聞かなくとも、淸の言葉には眞理でもあるかのやうに常に素直に耳を傾けて聞いた。其頃の無邪氣な態度や、理想と希望にかゞやいた表情ある眼や、藝術にやさしい身を縋らせようとした健氣な心や、さうしたさま〴〵の印象はまだはつきりと淸の眼や心に殘つて居た。

田邊や、西さんや、それから淸自身や、其時分の青年が泣いたり苦しんだりした戀がいつの間にか過ぎ去つて了つたやうに、矢張敏子や馬橋の戀も過ぎて行つて了ふのだ。永久に新しいと思ひ、樂しいと思つた春は時の間にかうして過ぎて行つて了ふのだ。かう思つた時の淸は、電車の中で馬橋と膝を並べて居た時の淸とは丸で別の人であつた。

『若い人の爲め――敏子の爲め。』

九州の旅から歸つて來た頃の敏子の蒼い顏を淸は思ひ出した。

『兎に角敏さんは姙娠といふことに就いて非常に煩悶したやうでした。一時はこれを誰にも言はないで、自分で自殺して處分しようなどと考へたこともあつたらしかつたです。それから先生に打明けて馬橋君との戀の關係を全く絶たうと思つたこともあつたらしい。……けれど矢張女ですから、結局馬橋君に打明けるといふことになつたんです……。私もそれを聞いた時は喫驚しました。』

『はゝァ、さうですか。』

かう言つた淸はある新しい意味を二人の戀の中に發見したやうな氣がした。女が陷つて行く自然の徑路も染々考へられた。

『はゝァ成程、さうですかな。』

再び繰返して言つた淸の聲は低かつた。田邊の前の細君が懷姙したことを知らせずに身を隱したことなどが思ひ出された。

『それを打明けてから、二人は前より一層離れられなくなつたのです。二人はそれから身をかくす處分に取懸つたのでした。……』

靑春の過ぎ行く悲哀といふやうなものが明るいスウィトな味ひを靜かな朝の一間に漲らせた。敏子の若い時を知つて居るだけそれだけ、淸にはその戀の成行が鮮かに眼に映つた。

かう言ひかけた清の聲は眞面目であつた。

『あの初めの時だつて、隱さなくつても好いことを隱して好意で圓滿に成功することを打ち壞して了つたやうなところがある。今度だつて、丸でやり方が破壞的なんだからねえ。……何もさうまでしないたつて好いと思ふんですがねえ。』

『何うもさういふ處があつて、いつでも誤解されて困るのです。感情一方で、平生神經をつかふ方ですから。』不圖思ひ附いたやうに、『私も一度はいつそ二人の間を打壞して了はうかと思つたことがあつたんです。打壞して了つた方が馬橋君にも敏さんにも幸福だと思つたことがありました。』かう言つて、山田は思ひ返すやうな風をして、『さうでした。あれは八月頃でしたが、二人の間が鳥渡變になつて、敏さんが馬橋君を避けるといふ風な時がありました。三人で近郊などを散歩しましても、敏さんは始中終物思はしいといふ風をして居て、いつものやうに元氣がないんです。馬橋君が何か慰めるやうなことを言ふと、「そんな芝居の臺辭見たやうな紋切形は厭よ」なんて言ふんです。其時分、先生が敏さんを養女にして、純然たる文學者にさせるといふ話を聞いて知つてゐたもんですから、これは的切、戀がさめて了つたんだと思つて、馬橋君も非常に絕望して泣いたり何かして居ました。私もいつそ破壞して了つた方が好いと思つたんです。處が其時もう懷姙して居たので、敏さんはそれを馬橋君に打明けようか打明けまいかと長い間煩悶して居たのだといふことが後で解りました。』

『荷物は先に送つて置きましたけれど、あれから二三日は牛込の馬橋の下宿に居たやうでした。』

『今の下宿ですか。』

『え。』

『それぢや前からその下宿に出入して居たんですね。』

『えゝ。』

山田の顔には微笑が見られた。

『初めは一緒に行つたんでせう？』

『え、一月ほど二人して一緒に其處に行つて居ました。……けどもそれでは仕事が出來ませんから、敏さんを置いて、一先づ馬橋君は此方に出て來たのです。』

『何時です、出て來たのは？』

『先月の初め頃でした。』

『それで一體馬橋君は何う考へて居たんでせう。隱し了せる積りだつたんでせうか？』

『さうでも御座いますまいけれど、何うするつていふ考も出なかつたんでせう。先生や小石川の兄さんがさういふ考をお持ちだとは少も知りませんでしたから。』

『何うも馬橋君の遣り方が僕には呑込めない。』

ですね？』

『え、さうです。』

それは停車場から三四里も海岸に近寄つた處であつた。其處には砂山があつたり松林があつたりした。砂山の間には海に注ぐ小川が絶えたり續いたりして、蘆や蒲の新らしい芽などが茂つた。失戀の苦痛を醫す爲に新緑の頃を二月ほど行つて居た馬橋は、其時その世を懸け離れた海岸の話を詳しく清にして聞かせた。馬橋はある漁師の家の二階を借りて住んで居た。其家の女房は四十女で極端な田舍者だが、よく世話をして吳れたといふ。また其處は漁村に見るやうな淫靡な地で、白粉を塗つた女の居る小料理屋が、其處にも此處にもあつて、大漁の時などはそれは賑かであるといふ。『他に見られないやうなカラーがありますよ。先生などお出になると、屹度變つたものが出來るに違ひないですが……』こんなことを馬橋は言つた。清は其時この失戀の一青年が、夕暮ごとに松のある砂山の間から遠い海のかゞやきを見たり、微かな波の音を聞いたりするのを想像して深い同情を寄せた。馬橋は其處から小さい瓶に入れた鰹の鹽辛を土産に持つて來て吳れた。

其二階に敏子は身を隱したのである。

『小石川からすぐ其處に行つたんですか？』

成るたけ此方からは聞くまいと思ひながらも、清はかう訊かぬ譯には行かなかつた。

『先生のお話を當人に解るやうによく言つて聞かせませう。本當にそんな風に考へては居なかつたんですから。敏子さん身を隱す時にも、何んなにしても、國では屹度搜し出して連れて歸るに違ひないつて言つて居りました位でしたから。』山田はかうつゞけて言つて、『ですから友人でも誰も知つて居るものはありません。私と馬橋君と三人きり知つて居ないんですから。』

『それで一體何うしてるんです？』

『上總の海岸に行つて居ります。』

『上總の海岸？』

かう清は問ひ返すやうな調子で言つた。

すぐ言葉を返して、

『一人でですか。』

『え。』

山田は靜かに答へた。

『上總の海岸は何處です？』

『一の宮の近所で、九十九里の濱の、何とか言ひました。何でもひどい田舍ださうです。』

『九十九里？　それでは敏子が父さんに連れられて田舍へ歸つて行つた年の夏に、馬橋が行つてた處

其處に茶を運んで出て來た細君は、遠慮のない打解けた調子で、

『敏子さん、御丈夫なんでせう?』

『え。』

かう言つた客の顏には少しく狼狽した樣子が見えた。敏子の所在を客はまだ打明けなかつた。淸も成たけそれを此方から聞くまいとして居た。

細君が茶をついで引込んでから、『私は、さうしたいと思ふんですが、當人は何んな考だか、それを聞いて見なければ駄目ですけれど……』かう淸は前の言葉を續いで、『國では非常に怒つて居るですから、とても手をつけることは出來ない。それに、田舍の名譽とか虛榮とか言ふこともある。だから、何うしても籍は私に寄越すと言ふんです。父親は馬橋にやる爲めに籍を送るんなら恨みだと言ひますけれど、そんなことを今になつては言つて居られないし、それは小石川の兄も承知して居ることですから、當人達さへそれで好いなら、私はさうしたいと思ふんです。しかし、私ばかり好意を持つて居ても、當人達にそれが解らなくつては甲斐がないですけれど……』

『いゝえ、そんなことはありません。馬橋君は一人で誤解して、いろ〳〵に考へる質なものですから……先生がさう仰有つて下さるなどとは夢にも想像して居らなかつたんです。』かう言つて山田は淸の顏を見た。

間の光景は、深い印象を清の頭に殘したばかりではなかつた。馬橋の取つた態度から推して、かれ等の細かい心裡も略ゝ想像された。

何ういふ風に出て來るか、それを清は一種の期待と好奇心とを以て待つた。二三日は其間に經つて行つた。

思ひもかけず馬橋の親友の山田から最初に手紙が來た。それにはかう書いてあつた。自分は此問題の中に入るのは好まないけれど、頼まれて據ないから、一度御都合の好い時にお目に懸り度いとしてあつた。清はそれを見て厭な氣がした。兎に角此方から出て行つた好意を酌み取ることの出來ない馬橋の態度に慊らなかつた。

しかし清は其の都合の好い日を山田に報じて遣つた。

郊外の朝はもう霜が白かつた。硝子戸を透して明るい晴れた日の光線がさし込んで來た。其の八疊の座敷で、ある朝清は其山田といふ青年と相對して坐つた。角火鉢には櫻炭が活々と起つて居た。

清の眼には、しつかりした、しかし何處かに優し味のある、額の廣い眼のはつきりした一人の青年が映つた。縞の羽織と角帶とが何となくその人を商人風に見せた。

話振も落附いて居た。

主人の大きな體と太い聲とは、客の瘦削な體と小さい聲と面白い對照をなして見られた。

『何うも、私には先生が解らなくつて困るんです。敵だか味方だか何うもよく解りません。』

『さういふ風に考へるから困るよ、君達は――』

清は平氣な調子で言つたが、しかし烈しい衝動を感じない譯には行かなかつた。其言葉は確かに淸の胸を深くついた。

馬橋はやがて立上つた。電車は既に神田橋に來て居た。

『それぢや、先生、此處で失禮します。四五日待つて下さい。確りした御返事はその時致しますから。』かう挨拶してかれは電車を下りて行つた。

馬橋の言つたその一語を淸は繰返して考へた。『へ、敵か味方か解らない？』かう冷笑もして見た。また微笑まれるやうな氣もした。敵か味方か、實際其通りだ。敵になるか、味方になるか、それより他に出て行きやうのないのがかれと馬橋との間柄であつた。

『敵か、味方か。』

其一語が鐵の棒のやうに冷かに淸の胸に横たはつた。

三十

馬橋の返事は端書で、唯簡單に忙しいから四五日待つて呉れと書いてあつた。電車の中で過した十分

―ぢき、この先の處になつて居ます、』と丁度錦町の停留場を出たばかりの電車の窓から振返つて、其方角を指した。

また沈默が續いた。

電車は神經を刺戟するやうな鋭い音を立てゝ、錦町河岸に出るカーブを曲つて行つた。硝子窓からさし込む日影は向う側の丸髷の女の膝を照すやうになつた。濠を隔てた高い石垣の上には、山の中からつい近頃出て來たといふやうな新兵が五六人、並んだ姿を繪のやうにはつきり見せて、頻りに喇叭の稽古をして居た。

膝を並べて沈默して居るのが二人にはいかにも辛さうであつた。馬橋が淸の家によく行つた時分からは、もうかれこれ二年以上にもなる。其間にはいろ〳〵なことがあつた。いろ〳〵な感情が燃えたり消えたりした。馬橋の胸にはある力の壓迫に對する一種の反抗といふものもあつた。

淸は言つた。

『此間、小石川の兄さんに逢つた時も、何うせ、さういふ事になつたんなら仕方がないからつて、同情して居たですからねえ。何もそんなに隱したり何かするには當らない。君達も誤解して居ちやいかん。僕だつて、好意を持つて居ない譯ぢやないんだから。』

馬橋は默つて聞いて居たが、急に、

『此頃少し忙しいものですから……』馬橋は低頭いたまゝで、『差上げた手紙にも書いて置きましたがいづれ其中詳しい御返事を申上げますから。』

『今、何處かに出て居るんですか？』

清は心の動搖を蔽ふ爲めに、わざとかう碎けて出た。

『え、つまらん處ですけれど……』

『何處です？』

『旅行新聞といふつまらん新聞です。それに私が大部分遣つて居るものですから、忙しくつて仕方がありません。朝は八時から夜は十時位まで遣ることもあるんです。』

『それは大變だ。』

『何うせ長くは居ない積ですけれど……』

二人は暫く默つた。

『旅行新聞？』とやがて清は少し考へる眞似をして『あんまり聞いたことがないが、そんな新聞があるんですか。』

『つまらん新聞ですから。』

『社は何處です？』

苦しさうに言葉を途切らせて、『御返事を昨日出して置きましたが、御覽になりましたか。』

『いや、まだ見ません。社の方に出したんでせう？』

『え。』

沈默が續いた。

明るい日影が硝子窓を透して車内に漲り渡つた。前に腰をかけて居る官吏らしい紳士が此方を見た。町の家並、軒にかゝげた大きな看板、ぞろ〳〵と通る人の群――それが早く〳〵眼の前を過ぎて行つた。

『實は――』やがてかう言ひかけた淸は、烈しい心臟の鼓動を感じた。『實は、君のところが解らんから、今まで放つて置いたんだが、此間、ある人から君の居る處を聞いたもんだから、それで手紙を上げたんだがね……』聲を低くして、『此まゝ放つて置く譯には行かんからねえ、子供のこともあるからねえ。一度緩り相談をしなければやならないと思ふんだがね。』

心の底を裏切するほど淸の聲は震へて居た。

前の官吏はまたじろりと此方を見た。

『それに、小石川の兄さんも心配して居るからねえ。』

かう淸は續けて言つて、馬橋の手にして居る西洋の雜誌を見た。カーレント、リテラチユアといふ雜誌で、それには大陸文學の評論などが常によく載つて來た。

地上に印して、大きな病院の門内からは、肥つた看護婦が二人、何か面白さうに話しながら出て行つた。

やがて電線が遠くから近くに鳴つて、一臺の電車は下り加減になつた道を日影に照されながら停留場へと近づいて來た。中折帽だの、山高帽だの、丸髷だのが硝子窓の中にチラ〱見える。

二三人客の下りるのを待つて、淸は乘つた。

明放した扉の入口に立つた時、淸ははつと胸を躍らした。

其處には馬橋が乘つて居た。

馬橋も同時に此方を見てはつとしたらしかつた。かれは茶色の中折帽を被つて、緋の羽織を着て、汚れた袴を穿いて、手に西洋の雜誌を持つて居た。

『ヤア。』

と、それでも淸は聲をかけた。

馬橋は立つて、帽子を取つて、挨拶を返した。

馬橋の隣の席が明いて居た。淸は無意識に其處に腰を懸けた。馬橋も再び元の席に腰を下した。

二人とも眞面目な顏をして居た。

默つて居た。

先に口を開いたのは馬橋で、もう其時は電車は動き出して居た。『お手紙を難有う……』かう言つて、

捜し出して、其の成行をかれは一刻も早く見たかつた。何んな醜い形をして居ても、かれは敏子に逢はずには居られないやうな氣がした。

かれは其手紙を長い間かゝつてやつと書いた。それは十行位しかない手紙であつた。それには生れる兒の處分といふことを中心にして居た。淸はそれを讀返して、封筒に入れて、牛込の下宿の番地を書いて、それから馬橋の名を書いた。

手紙を出した翌々日、少し用事があつて、淸はお茶の水の停車場で甲武の電車を下りた。矢張心地よく晴れた日で、朝の光が寒い街頭に充ち渡つて居た。やゝ下り坂になつた舖石道の上を外濠の電車が滑かに駛つて行つた。

甲賀町の停留場の前には、新聞賣が新聞紙を電車の窓の前に差出して、高い賣聲を立てゝ居た。乘らうと思つて小走りに急いで來た電車がつい五六間の處で出て行つて了つたので、淸は次の電車の來るのを待つべく餘儀なくされた。車掌が前の家に出たり入つたりするのを見ながら、淸は久しい間其處に立つて居た。

電車は容易に來なかつた。

停車場の時計は九時十五分のところを指して居た。初冬の日影が家屋の影やら庭樹の影やらを鮮かに

な淡い心にはなれない。少くとも復讐をしてやらなければならない。兎に角、籍を入れよう。さうして置いて、その成行を見よう。』淸はこんなことを思つて、獨りで激昂することもあつた。

『ラバーがドウター、イン、ロウになるのなどは面白い自然のアイロニイだ。ざまを見ろ？』

自分でかう罵つて冷かに笑つて見ることなどもあつた。

晩秋から初冬にかけて晴れた好い日が續いた。黃葉した銀杏の樹が些の雲の影もない碧の空に鮮かに聳えて見えた。路傍の林はガサ〳〵と鳴つて、木の葉が風の一吹きごとにバラ〳〵と散つた。途中の小川でいつも洗つてゐる百姓の大根は白かつた。

この晴れた日の一日であつた。淸は社の高い三階の編輯室で一通の手紙を書いて居た。處々の高い窓からは、碧い晴れた空が都の瓦甍やら烟突やらを隔てゝ高く展けて居た。スコッチの脊廣に地味なネクタイをした淸の姿は多くの編輯員の中に交つて見られた。淸は其手紙を二度も三度も書き懸けては破つて捨てた。烈しい語氣が出たり、わざとらしい同情の言葉が出たり、心の中を裏切するやうな文句が出たりした。三度目には『もう止さう、今少し放つて置かう。』かう思つて卷紙を傍に置いて、心を落附ける爲めに卷煙草を一本吸つた。

しかしこのまゝ捨てゝ置けぬほどかれの心はつき詰めて居た。この手紙を書かうと思立つてから、もうかなりの日數になる。現に今日のやうに書きかけてやめたことも一度や二度ではない。敏子の所在を

『哀むべき敏子！』
清は暫し其處に立盡した。

二十九

馬橋の居る處が段々知れて來た。清が田舍から歸つて來る頃には、その下宿してゐる家を敎へて呉れる人さへあつた。

敏子を何處かに隱して置いて、其身は平氣で其下宿に居るらしかつた。かれの交遊の間でもそれを知つて居るものは餘りないらしいといふことも解つた。

其下宿は牛込の山の手のある細い路を突當つた處にあつた。その二階の六疊の間に馬橋は居た。いよ〳〵其問題を何うかしなければならない時が到着した。しかし清は今少し放つて置きたかつた。自然に展けて來る解決の時を待ちたかつた。かれは毎日例の花園の傍を通つて、郊外から都へ出る電車の停留場へ行つた。

細かい心理狀態は絶えず續いた。何處かに身を隱して居る敏子と、牛込の山の手の下宿に居る馬橋と毎日社へ出かけて行く清と、この三人の心が、其時々に由つて燃えたり消えたりするのがはつきりと解るやうにすら思はれた。『兎に角、自分はこの巴渦の中から脫するのは厭だ。このまゝ、放つて了ふやう

なる緣か、かの女と自分との間にかういふ複雜した運命が作られた。

『つまり自分に愛せられたのがかの女の災厄であつたのである。自分に愛されさへしなければ、二人の間の戀も或は其萠芽を現さずに終つたかも知れない。又、戀に落ちたからとて決してかうした難かしい形式に現はれて來なかつたかも知れない。

『身を隱さなければならないやうなハメに陷つたのは、自分が其間に立つて居たからだ。敏子を愛した自分――第三者の資格のない自分が第三者として其間に立つて居るからだ。

『永久に、第三者で居なければならない憐むべき自己――』

『それほど解つて居ながら、何故それに打勝つことが出來ないのか？　何故、それを脫却することが出來ないのか？　さう倫理學者は言ふに違ひない。又、犧牲といふことの價値を說くかも知れない。それは解つて居る。しかし、しかし、しかし……

『長い歲月の下に、その感情が一つの空氣を釀して居たら何うしよう？　その空氣が一朝一夕に稀薄にして了ふことが出來ないやうなものであつたら何うしよう？　感情が感情を生み、運命が運命をつくつて行くのは、果して其當事者の罪だらうか。

『哀むべき敏子！』かう思つた淸の胸には悲哀が潮のやうに漲つて來た。

客車の扉を明けると、月の光と共に白い烟がぱつと四邊を掠めて流れた。

清は田舍の寺に一月以上も居た。其間に社の用事があつて、一度東京に歸つたことがある。再び田舍に戻つて來た汽車の一夜は長く忘られなかつた。

晴れた月夜であつた。明るい光の充ちた廣い野を汽車は轟々として駛つた。白い烟が流るゝやうに野を掠め、畠を掠め、車室の兩側を掠めて落ちた。

東京から乘合せた客は粕壁あたりで皆な下りて了つて、廣い二等室の一隅に、清は一人インバネスの袖をかき合せて居た。窓硝子を隔てゝ見る野は丸で夢のやうであつた。月の明るい光を帶びた白い烟が霧のやうに窓に當つては消え、當つては消えた。

清は自から其身を憐まぬ譯には行かなかつた。常に押へて居た若い感情が漲るやうに溢れて來た。

『若い人は若い人として世の中に出て行く權利がある。』

かう思つて、清は深く考へて見た。

『しかし、かうした運命になつたのは、誰の罪だらうか。妻あり子ある身で、若い敏子を愛したのは自分の罪だらうか。世の中に對して恥づべきことだらうか。

『罪？　罪とは言ふ事は出來ない。遠い山の中の良家に育つた娘、それが何うした原因でか、ふと自分と言つたやうな男と相對した。それが――この運命の初めである。父親は、「如何なる御緣にて父兄も及ばざるお世話に相成候かは存ぜず候へども、」かう書いて來たことがあつた。如何なる緣？　實際如何

また居られるものではない。三人の狀態が丸で變つて現はれたに相違ない……

『放つて了ふことが出來ないんぢやない、自分が其巴渦の中から離れるのが厭なんだ……』清はいつも其處まで行つては突當つた。事件の起る度毎に、敏子の眉目が益〻鮮かに印象されて來るのを清は感じた。

『これも僕が作品を公にした自然の報酬さ。』

清は態と輕い調子で言つた。しかし心は重かつた。

『敏子さんは、それは實際氣の毒だよ。……しかし君の爲めにも敏子さんの爲めにも放つて置く方が好いよ。巴渦の中に入るのは愚だ。』

『それは僕にも解つて居る！』と清は言つたが、『しかし、僕には此行先が何うなつて行くか解らん。巴渦の中に既に一歩を入れて居る人間には、よく其の巴渦の眞相は解りよう筈はないんだから……マア、然し、其の成行を見るサ。』

主僧は默つて了つた。

二十八

秋は段々深くなつた。刈稻を載せた車が幾臺となく街道を通つて行つた。

『それはよく考へなければいけない。君が當人同士の爲めに謀るのは好いが、家庭にはまた家庭といふことがある。こつちのことも念頭に置かなくつてはいけない。』

『それは無論置いてるさ……けれど、僕は敏子の爲めに幸福を計つてやらなければならない責任がある。……と言ふよりも、かう言つては變だが、今少し深い緣と言ふやうなものがあつて、敏子の不幸を放つて置くといふことが出來ないやうな心持になつてゐる。僕もいろ〳〵考へて見たサ。普通から言へば、これを境にして放つて置いても好いんだ。裏面は兎に角、表面は自分の戀を遂げる爲めに師を欺いた形になつて居るのだからねえ。僕に寄越した手紙も一種の告別狀で、自分達は自分達で遣つて行くといふ調子も見えないことはないのだからねえ。僕は幾度かこのまゝ放つて了はうかと思つた。いや、時には師を師とも思はない其の態度に憤激したこともあつた。しかし、考へて見ると、憤激するだけそれだけ、放つて了ふことが出來ないんだねえ。』

『さう物を深く難かしくして了ふのは、僕は不贊成だ。』

笑ひながら主僧は言つた。

『これは昔からの僕の癖だけれどねえ。』

かう言つた淸の胸には此友にも打明けて言ふことの出來ない暗い心のあるのを感じない譯には行かなかつた。自分と敏子との關係、それが今一步進めて居つたなら、こんなノンキなことを言つて居ない、

清の居る本堂の六疊には、パンや牛乳を上さんが運んで來て呉れた。障子を明けると、夜もすがらガサ／＼とさびしい音を立てた裏山の草藪の中に、漆の木が一本眞紅に紅葉して居るのが見えた。蟲の音が微かに聞えた。

今年の秋は染々とさびしかつた。今まで經て來たライフがそれとなく頭に繰返された。今回の事件に對する自分の位置と、自分の執らなければならない正しい道といふやうなことも深く考へられた。

墓場を拔けて、葉の枯々になつた桑畠の傍を通つて、ひろい野に行く路があつた。野には林があつた、り、村があつたり、白壁がところ／＼に見えたりした。電信柱の並んだレール路には、をり／＼汽車が白い烟を立てゝ通つた。夕日が秩父の山に靜かに落ちる頃、清は一人でよく其路を通つて野へ行つた。夕暮の空氣の中にくつきりと出て居る其姿は、時にはレール路の上に長い間立つて居ることなどもあつた。

夕燒に其顏が明るく見えた。

『籍を君の家へ入れるといふことは、それは考へものだ。』

主僧はある時かう言つて清の顏を見た。

清が默つて居るのですぐ言葉を續いで、

『いつもお早いですねえ。』

清が其處等をぶら〳〵して居るのを見付けて、上さんは常に言葉を懸けた。

寺の娘が手拭を井戸側にかけて置いて釣瓶の竿を一生懸命にたぐり上げようとして居る時には、清はいつもそれを手傳つて水を汲んでやつた。娘は金盥に明けた水でザブ〳〵と顏を洗つて、手拭の隅の方で擦るやうにして顏を拭いた。

やがて椀に餌を入れて來て、それを其處等に撒いて遣ると、矮鷄はあちらこちらからコヽと聲を立て、立つて居る娘の周圍に集つてそれを啄いて食つた。

『まだお父さん、寢てる？』

『寢てるよ――』

娘は笑ひながら言つた。

主僧の起きるのは遲かつた。一面に射し渡る朝日を眩しさうにして、手の掌に入れた鹽で齒を磨いた。

『君はいつも早いぢやないか。』

『けれど、此頃の朝は好いからねえ。寢て居ては惜しい。』

『僕はまた此頃は寢心が好くつて起きられない。』

二人はこんな話を取交した。

『秀ちやんなどもしつかりしなくつちやいけないよ。本當に好いお手本ですよ。』

細君がかう言ふと、

『私なんか大丈夫……』笑つて見せて、『伯母さん、ぢきあゝなんだもの、厭になつて了ふわ……敏子さんだつて好いぢやありませんか、自分の好きな人と一緒になつたんだもの。私は舊弊は大嫌ひさ！』

二十七

一月後には、淸は田舍の寺に脚氣療養の人であつた。主僧は本堂の側の六疊を掃除して、其處に机だの火鉢だのを持つて來て吳れた。朝は高い簷に雀が喧しく囀つて、日影が晴やかに障子に射した。霧の深い朝もあつた。銀杏や杉などが微かに其梢を見せて居る間を、肺を病んだやうな蒼い顏をして、淸は其處等をブラ〳〵步いた。何年も撞いたことのない鐘樓の周圍には草が高く深く生茂つて、山門の白壁は處々崩れて居た。たどつて行く路には、草の露が繁かつた。

庫裡の勝手の扉を明けると、其處から長い夜を待ち兼ねた矮鷄が三羽も四羽も羽をひろげて出て來た。朝炊の烟が細く颺つて、やがて寺の上さんが襷がけで桶を下げて井戶端へ水汲みに出懸けて行くのが見える。井戶の周圍には水草が深く茂つて、水をザアと滴すと、餘沫が四邊に露の珠を綴つた。傍には朝鮮菊が白く鮮かに咲いて居た。

岸のことなどを考へて居ることなどもあつた。

茶の間には、夕飯を食ふ頃、夕日がくわつと障子に射した。細君とさし向ひになると、いつも敏子の噂が出る。『敏子さんは何うも難かしいと思つて居た。』こんなことを細君は言つて、『それにしても何うしてゐるんでせうねえ……一人で困つて居るでせうねえ。養女にするのも好いけれど、先方がそれほど思つて居ないのに、此方から無理にすることもないでせうねえ。餘り此方で一生懸命にならない方が好う御座んすよ。』長い間一緒に添つて居ても、矢張女には男の心が解らなかつた。

二三年來の絶えざる勞作――この疲勞も段々頭を擡げて來た。筆を執らうと思つても、何うしてもそれが手に附かなかつた。机の上の硯には塵が白く積つた。敏子の机にも座蒲團が載せてあるまゝになつて居た。『少し休まう。』清はかう思つて約束した雜誌の寄稿を斷つた。

成たけソッとして置いても、敏子の噂は段々知れて行つた。役所に勤めて居る細君の兄は、『敏子さん行つて了つたんですつてねえ。』かう言つて、清の顏を見た。

目白に通ふハイカラな細君の姪は、珍らしいことがあるものだといふやうな顏をして眼を丸くして居た。いつもなんでも無邪氣に言つてしまふといふやうな快活な娘だが、其の時ばかりは、默つて叔父さんや叔母さんの顏を見て居た。清の細君が話して聞かせると、『さうだつてねえ、』と低い聲で言つて、まだ其年齡では解らない其事件を眞面目に考へて見るといふやうな顏をして居た。

しませう……けれど、これで田舍では鳥渡厄介なんです。門地だとか、名譽だとか、いろ〳〵喧しいことがあるもんですからな、東京に住んで居る人には鳥渡呑込ないやうな處がありますよ。』

この敏子の兄の快活な明るい調子は、淸の耳に快く響いた。何處かかう同じ年代の血が流れて居るやうに淸には思はれた。話がすぐ中心に觸れる。心もよく解る。

歸りは夜になつた。電車の中から雨にぬれた町の灯が明るくチラ〳〵と搖いた。さびしい秋の夜であつた。

淸は何することも出來ないやうな位置にあつた。如何なる煩悶も自から處分しなければならないのがかれの此頃の狀態である。『敏子の爲めには、いかやうな犧牲をも拂ひ申すべく、小生に相應せる盡力は辭する處にあらず候。』かう田舍の父親へ宛てゝ書いた時には淸は泣きたかつた。

書齋の前の梧桐の葉は朝に夕にがさ〳〵と音を立てた。背後の丘の工場の烟突の煤烟は西風に渦を卷いて、機械の動く音が手に取るやうにはつきりと聞える。丘から丘に通ずる路の坂が緣側から一ところ見えて、電信柱の並んで居る間を疎らに人が通つて行つた。風の薄ら寒い夕暮などには、灰色の空の天末を仕切つて、其處だけくつきりと晴れて居ることもあつた。

淸は社を休んで、書齋の一隅に床を取つて、高窓から碧いさびしい空を仰向に見ながら、遠い〳〵海

『いや、東京には居ないでせう。屹度何處か氣の附かないやうな田舍に行つてるでせう……』かう言つて考へて『けれど餘り騷がん方が好いでせう。搜し出して見たところで仕方がない。伴れて來て置く譯にも行かない。男の狀況を見て居さへすりや、自然と其所在が解りますから、餘り騷いで新聞にでも書かれると困るですから。』

『さうですとも。』

かう言つた清は、存外兄の平氣なのを慊らず思つた。

田舍の父親から來た手紙の話をやがて清は持出して、『私は籍を送つて來ても、それは構はんですが、何うしても馬橋にやるのは厭だ、籍を送るのは送るが、馬橋に遣るのなら一生の憾みだと言はれては、何うも私も困るですな。父さんから馬橋にやるのは厭だから、僕に籍を移して、此問題を解決しようと言ふなら解つて居ますが――』

かう言つた清は胸のつまるやうなある重い壓迫を感じた。敏子の爲め――清はかう思つてこの問題を解決しようとして來た。

『何しろ父が非常に激昂して居るやうですから。』落附いた調子で兄は言つた。暫くしてから、『……さうですとも、當人同士が好いものなら、何も我々がそんなに喧しく言ふ必要はない。もうさういふ狀態になつたんだから、當人達の好いやうにさせる方が好いです。父には折を見て猶さう言つてやることに

二十六

清が第一に行つたのは、小石川の敏子の兄の家であつた。兄は二階の一間で清に逢つた。其處には卓だの椅子だのが飾り立てゝあつた。兄は微笑を顏に湛へて、綺麗に頭髮を分けて居た。『私が歸るその日の朝出て行つたんですから、更に樣子はわかりません。私が歸つてから行つたら何うですつて姉が逢つて留めたさうですけれど、それまでは待つて居られないつて言つて出て行つたさうです。何うも仕方がありませんな、まア言はゞ當人の自業自得ですから……放つて置くより他に仕方が無いでせう。』かう言つて兄は笑つた。

『何うも一體我儘で仕方がなかつたです。私や親達がいくら喧しく言つたつて駄目なんですから。』

こんな風にも言つた。

先月中は、上野の圖書館に通ふと言つて、毎日辨當を拵へて、朝早くから出懸けて行つたさうである。十時過に歸つて來たことも一二度はあつたさうだ。荷物を持つて行つた話を清がすると、『いやそれは持つて來ません。それは屹度何處かに送つたんでせう。』かう言つて兄は考へ深い眼色をした。

『東京に居るでせうか。』

と清が訊くと、

の前に浮んで見えた。

しかし清は何うすることも出來なかつた。搜索をしようと思へば、それはいくらも方法はある。人を賴んで、内々彼方此方を搜して見ても好い。けれど搜し出して連れて來たところが仕方がなかつた。

それに狀況の解らぬといふことが尠くとも多くの不安を淸に齎らしたに相違なかつた。細君の他には默つて一言も他に洩さなかつたが、向うから何んな事變が起つて來るか解らなかつた。思詰めた揚句の死！　そんな空々しいことがと一時は冷笑したが、敏子のやうな神經性な空想的な女には、其狀況の如何に由つてさうした悲劇の一幕は演じられないとは限らない。淸はさうした一幕を想像する度に、敏子の運命に及ぼした自己の責任を深く感じた。

朝每の新聞紙をかれは注意して見た。女の投身とか轢死とかといふ記事のある度にかれは胸を轟かした。

時にはまたこれで一生逢ふことがないのではないのかと思ふことなどもあつた。コルシカ島に身を隱したフランスの貴族の令孃と其の戀人とは、白髮になるまで其姿を人に示さなかつた。二人にはさうしたロマンチックな幕を打つことは出來ないには相違ないが、しかしさうした幕は打つて貰ひたいやうな氣もした。何處にも居ない、何處を搜しても居ない、年月はその間に經過して行つた。思ひがけない山の中か海岸の荒磯かでゆくりなく邂逅した時は、二人はもう老いて、腹の中の兒が大きくなつて居た……

私生兒、それを父親は烈しく呪つて來た。何んなに隱したつてそれは隱し了せるものではない。屆けもしなければならない。本籍をも名告らなければならない。萬一不心得のことでもあれば、それこそ刑事上の罪人になる。それこそ私等一家は世間の顏向けが出來ない。『一刻も早く送籍の手續あらんことを此際達つて願上候。』かう書いて來た。

モウパッサンの作に『アバンドンド』といふ短篇があつた。ある上流社會の令孃が海岸のさびしい家の一間で私生兒を生んだが、その私生兒を四十年も絕つてから訊ねて行くといふことが書いてあつた。訪ねて行く處も面白いが、さびしい海岸で、懷姙した令孃が波の音を聞きながら暮して居るさまがいかにも鮮かに描いてあつた。淸はそれを思ひ出した。

もう四月……ことに由ると、五月になつて居るかも知れない。懷姙した女の狀態を淸はかねてよく知つて居る。押へ難い幽鬱の思ひ、些細なことに苛々する神經の不安、ことに絕えず動搖する感情――其處にはもう美しい夢のやうな戀はない。他から想像するやうな花やかなロマンチックな戀はない。淸は敏子が父に伴れられて初めて來た時の鮮やかな色彩の多かつた姿と蒼い灰色をした艶のない顏をした懷姙した姿とを比べて見ぬ譯には行かなかつた。梭のやうに段々織り込まれて行く運命の中にかうして過ぎ去つて行く敏子の靑春がそゞろに憐まれた。

經驗のない初產の苦痛を海岸のさびしい一間に、一人して味はなければならない不幸な女が歷々と眼

しく見せて、そつと座敷を貸す家もあれば、野の爺婆が藁葺家の奥の一間を客に明渡して知らぬ顔をして近所に出て行つて了ふ處などもあつた。二十錢、三十錢位で時間を仕切つて貸すところもあつた。

中野あたりの停車場前の小さい飲食店、それから段々奥へ入ると、かなり奥深い林が林へと續いて居た。麥畠にはをり／＼百姓が草を採つて居る位のもので、細い路を歩いて來る人は稀れであつた。日の光が鮮やかに林の緣にさし透つて、喜びがあたり一面に漲り渡る……何處に行つても、二人は自由なことが出來た。

下宿屋の一間、其處でもさうした一幕は容易に演ぜられた。若い青年の群は、其處此處から氣に入つた相手を選んで伴れて來て、平氣で自分の一間に入れた。其處には麥酒の罎だの、食ひ散らした餅菓子の竹の皮などが一杯に散らばつて居た。其處では歌を唄ふことも出來れば、酒に醉ふことも出來た。何んなに自由な放縱な行爲をしても、誰もそれをとがめるものはなかつた。

その自由な境から女は深い淵に落ちて行くのを知らなかつた。快樂の後に悲痛が來るのを知らなかつた。

新聞紙上に其頃毎日のやうに掲げられた女學生の墮落の記事――それを田舍の父親は前から心配してゐる。その記事をわざ／＼切拔いて送つて來たことがある。それを見て敏子は笑つた。清も笑つた。それからまだ半年も經たなかつた。

士としての感情が其處にも此處にも明かに見えた。

敏子の手紙には、淸に寄越した手紙にないことが一つ書いてあつた。『いつそ自から身の處分を仕り度と煩悶仕り候へども、醜き體を衆人の前に曝し、此上にも恥辱を一家へ與へ候ふに忍びず候うて――』

敏子は懷姙してゐた。

醜い體――

それが最も烈しく淸の頭を刺戟した。ぢつとしては居られないやうな氣がした。

指を折つて、かれは月の數を數へて見た。敏子の上京したのが四月、今月までまだ六箇月にしかなつて居らなかつた。手紙の文句から考へると、懷姙したのは上京して間もない頃であつたらしかつた。

其時分と思はれる時のことが早く眼の前に浮んで通つた。淸の家に來て居た頃、兄の家から電報が来た頃、山田といふ男の友達が迎へに來た頃、確かにその頃であつた。

新宿の町外れに汚い鮨屋があつた。其處に近郊の散歩から歸つたらしい若いある二人づれが入つて行つたのを淸は見たことがあつた。其鮨屋の閉め切つた二階が見えるかと思ふと、今度は柏木あたりの雜木林の若い綠の中から男と女とが二間位離れて出て來るのが眼に見えた。近郊には若い男と女との爲に備へられたさうした家が其處にも此處にもあつた。踏切に近い處に赤い毛布を緣臺に敷いて、休茶屋ら

出京致させ候次第に候ふに、別紙の如き不始末、不體裁、實に申しやうもこれなき次第と存候。』

激昂しては、次のやうにも書いた。

『本人の不始末より生涯の目的を誤りたること故殘念ながら今は唯行末までの勘當を致し候より他に處置すべき道も無之候。上京の節、如何にしても馬橋に呉れぬといふことならば、自己に呉れよとの貴臺のお話し有之候、其時、貴臺にならば差上げてよしと申候、今は唯一刻も早く貴臺に送籍仕つり候他に致し方これなく候、さりとて表面戶籍を送り、陰に馬橋に配偶せしむるならば、九死の下瞑する能はず候。』

また次のやうに慨嘆した處もあつた。

『案に違はず、獸慾に陷り、累代曾てなき不始末の行爲を敢てし、人に孃と呼ばれたる身を以て、無教育のものも猶敢てせざる不始末を實行するとは……性慾は自然のものなりと言ふやも知れざれど、人道を忘れ、親の恩を忘れ……この事を耳にして以來、母親は枕を上げ得ず、淚をすら自由に流すことも出來申さず……』

田舍では名譽ある家庭、其身は田舍の女學校の顧問として良家の子女をも預る地位にあることを父親は猶縷々として書いた。同じことが繰返し繰返し書かれてあつて、それが容易に盡きようともしなかつた。長い手紙の中には、慈愛深き父親として、名望ある一家の主人として、また狹い田舍に住める一紳

敏子の家出を報じた清の手紙と行違ひに田舍の父親からの長い〳〵手紙が來た。清に宛てたのと同じやうな封書を敏子は田舍にも送つた。

清は敏子から來た封書を其儘に中に卷込めて田舍に遣つたが、父親からは、敏子が送つた手紙を丁寧に寫して、それをその中に添へて寄越した。

父親の手紙は半紙に達者な字で書いたのが三枚、營業用に使ふ半枚摺の罫紙に書いたのが一枚猶ほ言ひ盡されないと言つたやうに、紙の斷片に書いたのが一枚、それを一緒にピンで綴ぢて、封筒には切手をベタ〳〵と張つて、嚴重な書留にしてあつた。

激昻した心が歷々と其の手紙の上に見えた。平生に似合はない思ひ切つたやうなことが書いてあつたり、娘を一人東京に出した自己の不聰明を悔いたり、かうした娘が其家から出たのを恥ぢたりした。

『娘の愚かさ加減、想像にも及ばず、小生一時は五里夢中の心地致し、手、物を落すまで驚愕仕候。』

かうした文句で其手紙は始まつて居た。

其處には親の驚いた心が隱すところなく顯はれて居た。清の作品が惹き起した問題から、敏子と其戀人との關係、當時の追想、二月以前に上京した時の狀況、さういふことが繰返して書いてあつて、かゝる不體裁を呈するに至つた動機を一面敏子に、一面清の監督の行屆かない處に置いた。

、『畢竟今春貴臺より責任ある書面に對し、且つは當人も十分の責任を以て身を處すとの誓言有之候故

十分な監督をしなかつたことが今になつて後悔された。

絶えず煩悶して蒼い顔をして居ながら何一言もそれに關しては打明けて相談らしいことを言はなかつた。『先生に知れないやうに――』女はかう言つて居たに相違ない。『先生に縋つてゐた爲めに、此前は、失敗した。今度は少しでもそんなことを知らせては駄目だ。飽まで秘密に事を運ぶやうにしなければいけない。』かう男は女に勸めたに相違ない。淸は頭の毛をむしりたかつた。

『馬鹿な奴だ！』

かう再び叫んだ。

しかしこれは瞬間であつた。激した心が次第に意識を恢復して來ると、今度は敏子の身を中心にしていろ／＼な想像やら、推測やらが起つて來た。同情も起つて來た。

子が親や監督者を離れて、男に従つて行くあはれさといふことも考へられた。

『先生に御迷惑を相かけ候ことは何よりも大なる罪と存候。兄の宅より身をかくし候ことをせめてもの好機會と存じ候うて、急に決行致し候ことに御座候。』手紙の中にこんなことが書いてあつたのを淸は思ひ出して黯然とした。

女の一生といふことが染々考へられた。

下され度候。』かういふ風な書き方で、二枚も三枚も續いた。

『これもいろ〳〵煩悶致し候結果に有之、これより他に私には出て行く道もこれなくと存候まゝ、やむを得ず決行仕り候次第に有之候。……思ひつめ候ことも一度や二度にはこれなく候へども、父母もあり兄弟も有之候身には、なき後の耻辱も思ひ殘され候うて、自由にならぬ身を悲しみ申候。』こんなことも書いてあつた。

小石川の宅から出したことにしてはあるが、消印は芝としてある。淸は頭腦の廻轉するやうなのを覺えた。女の所行の大膽と言ふことよりも、恩知らずといふことよりも、自分の持つて居るものを奪ひ去られたといふやうな無念さが胸につき上げて來た。

『馬鹿な奴だ！』

かう言つて淸は下唇を嚙んだ。

頭の中は嵐のやうであつた。いろ〳〵なことが想像された。なき後の恥辱！　よくそんな空々しいことが書けたものだと思つて、冷笑して遣りたかつた。何處かの二階の一間で、二人して自分を笑つて居るのが歴々と見えるやうにさへ思はれた。房州、無論房州に行つて居ないことは解り切つて居る。さうかと言つて、消印のある芝にも居る譯がない。身を隱した處から友達に賴むなり、自分で出かけて行くなりして投函したに相違ない。前から計畫して、踪跡を晦ますやうに企んだに相違ない。女を信用して

『本當に身を隱したんでせうか。』

『さうだらう。』

『身を隱さなければならないやうなことがあつたんでせうか。』

『そんなことは己には解らん。』

『敏子さんも困つた人ねえ。』

かう細君は心から言つて、『本當に、あの男の人と一緒に行つたんでせうか。さうなら、さうと言つて呉れゝば好いのに……よく話して呉れさへすれやそんなことを爲ないだつて好いのに……』かう言つて考へて、『此間もその積りで荷物を取りに來たんですねえ。』

敏子と其戀人と自分との心理狀態が一歩深く内部に入つて行つたやうに淸には思はれた。『それが言へないから身を隱したのだ。寧ろ男がそれを女に實行させたのだ――』かう思つた淸は辛かつた。

二十五

手紙がやがて來た。

別れの手紙であつた。世話になつたお禮と身を隱さなければならぬ理由とが長々と書いてあつた。『先生の御恩の萬分の一をも報ぜず、藝術をも捨てゝ、實際の巴渦の中に入つて行かねばならぬ身をお許し

浮んで來た。

細君と長火鉢にさしむかひに坐つて居たつて仕方がないやうな氣がして、其の端書を持つたまゝ、淸は書齋に來て机の前に坐つた。机の上には書き懸けた原稿紙が展げてあつた。それは今日中に書いて終はなければならない原稿であつた。淸は苦しい胸を押へて、筆を手に取つて見た。いつものやうに、其苦しみを藝術に遁れて見ようとした。しかしそれは駄目であつた。

少時してから細君が行つて見ると、淸は其端書を傍に置いたまゝ、兩肾を机に立てゝ頰杖をして、障子に向つてぢつと空虛を見詰めて居た。

外には秋雨が蕭々と降つて居た。

夕飯を知らせに來た時にも、淸は矢張障子を見詰めて居た。

夕飯は默つて食つた。

それが濟んでから、

『それにしても一體何うしたんでせうねえ？』

かう細君が訊くと、

『何うしたんだか、己に解るもんか。』

淸の聲は尖つて居た。

『先生には是非一度お目に懸つてお話仕度存候ひしも、事情の爲め、此儘お別れ致さねばならぬことと相成申候、房州にまゐり候やうお話仕候へども其處には參り申さず候詳しくは手紙にて。』これを讀んだ清の胸は震へた。

『こんな端書が來た。』

かう言つて、清は妻にそれを見せた。夫婦は顏を見合はせた。

『一體何うしたんでせう。』

細君がかう言つたのは、暫く經つてからであつた。二人は默つて周圍を振返つて見た。思ひ當るやうなことが其處にも此處にもあつた。『何うしたんでせう一體、これぢやまだよく解りませんけれどねえ、』と夫の顏を見て、『身を隱したんでせうか。』

『何うもさうらしい。』かう言つた清は、激昂したやうに頭を振つた。

『馬鹿な奴だ！』

少時してから清はかう言つた。しかしこれは敏子を罵つたのか清自身にも解らなかつた。

清は敏子を隔てゝ其男と相對したやうな氣がした。事情の爲め――かう書いてある。事情？　事情？
其陰には、其男の姿が歴々と映つて見えた。

今までのことがはつきりと頭に入つて來た。其男の握つた絲に敏子があやつられて居たさまが明かに

『小石川の兄さんはもう歸つて來たのかしら？』

『いゝえ、まだなんでせう。』

淸は一服吸つた煙管を長火鉢の緣でトンとはたいて、

『何だかをかしいね。』

『本當に變でしたよ。』

しかしこれ以上に二人は何も言はなかつた。淸は此頃體の具合が惡かつた。脚氣から起る神經性の不安が絕えず頭を惱まして居た。少しのことにも心臟の動悸が高くなつた。京都に伴れて行つた年取つた方の女は、廢業した女の內情を、話して好いことだけ話して聞かせた。

年の若い方の女はそれでも一度電話を淸にかけて來た。

『是非一度お目に懸り度いと思ひましたんですけどもねえ……今、私、富岡前の自働電話で懸けて居るのよ。』こんなことを言つて、世話になつた禮を長々と言つた。

敏子が荷物を持つて行つた翌日は、灰色に空は曇つて、秋風が肌に冷々した。午後に郵便箱を探つた淸の手には、敏子から來た端書が讀まれた。

鉛筆で走り書きをした其端書には、『小石川の電車の終點にて敏子』としてあつた。

『荷物を持つて行くとは大袈裟だね。』

かう言つた清は、洋服をも脫がずに書齋に入つて見た。机は其儘にしてある。本も其儘にしてある。しかし重なる衣裳や何かの入つた行李は三箇ともなかつた。寢道具もなかつた。

清はその痕跡を捜すやうに彼方此方を明けて見て、座敷から再び玄關の方へと行つた。玄關の上り口の緣には、重い物を引摺つた痕が二條も三條もついて居た。

『それで、別に何とも言はなかつた？』

洋服を脫ぎながら、清は妻に訊いた。

『何だか、そは〳〵として居ましたよ。それに丁度其時、整子がやかましかつたものですから、其方に行つて居られなかつたですけれど……敏子さん一人で、セイ〳〵言つて行李を運んで居ましたつけ。』かう言つて、すぐ後を續いて『いづれ出懸ける前には一度來ますつて言つて居ましたよ。何うせ又來るんだけれど、少し長く居たいからつて……先生によろしくつて言つて行きました。』

『そしてすぐ歸つた？』

『私が整子に此處で乳を飲ませて居ると其處から顏を出して、それぢや奥さんつて言ふから、まア好いぢやありませんか、今、もう整子が寢るところですから、お茶でも飲んで入らつしやいつて言ふと、でも俥と一緒に行かなけりやならないからつて、急いで歸つて行きました。』

二十四

暑中休暇に國へ行つた敏子の兄は細君を連れて近い中に歸つて來る。それと入れ代りに敏子は房州の海岸に一月ほど行つて來たいなどと言つて居た。

其處には敏子の同窓で、油繪を研究して居る友達が行つて居た。

『何だか夏中こつちに居ましたら、體がすつかり惡くなつて了つて……何處かへ少し行つて來ないでは勉強も何も出來ませんから。』

かう言つて、其處の友達から寄越した端書などを敏子は見せた。

ある日、淸が社から歸つて來ると、細君は、『今日、敏子さんが愈々房州に行くんだつて、荷物を取りに來ましたよ。』

『荷物？』

と淸は意外な氣がした。

『一時頃來ましてね、先に送つて置くんだつて……俥ももう賴んで來たんだつて、それは忙しさうでしたよ。何だか變だつた、今日は。』

細君の顏にも疑惑の色が見えた。

若い女が一人で長い電話を懸けて居ることもあつた。淸は此處に來ていつも電話を懸けた。其家の電話の番號を白い壁の隅のところに鉛筆で小さく書いて置いた。

返事の來るのを待つ間、受話器を耳に當てゝ、向うの煙草屋の店の色白の娘を見るのがいつもの例になつて居た。其時はグワンと何かで頭を打たれたやうな氣がした。京都を一緒に歩いた若い方の女は、病氣で家に歸つて居て、此間は逢はれなかつたが、今日こそ是非逢はうと思つて遣つて來た。その女がもう居なかつた。先日限りひいて了つたと其電話は言つた。

一年間、別に深く思ふといふほどでもなく逢つて居た。さうした種類の女に眞面目な心を求めるほどかれはもう若くはなかつた。自分でも寧ろ淡すぎると思ふ位の心を持つて居た。しかし打突かつて見なければ解らなかつた。欺かれたといふやうな怒りが其時烈しく起つて來た。

想像は更に其影を大きく見せた。濃くも見せた。自動電話を出て、電車の停留場に行くかれの顔には肉の顫動が見えた。

『本當に病氣なのだらう。』

かう思ひたかつた。しかし何うしてもさうは思へなかつた。

停車場で別れた一幕が今は喜劇となつてかれの眼に映つた。かれは自分で自分を罵つた。

旅から出した繪葉書を取返して破つて捨てたかつた。

けものをして居たことや、沈んで鬱ぎ切つて絶えず蒼い顏をして居ることなどを細君は話した。しかし歸つた二日目に來た時には、瀧縞のセルの單衣に金茶色の帶を緊めて、庇髮を綺麗に結つて、別にさういふ風にも見えなかつた。淸のする旅の話を面白がつて聞いて、常に似ず元氣よく笑つて行つた。

『今日は久し振にていろ〳〵お話を伺ひ力を得候こと一通りにては無之候ひし。お話の中に人はいかなる生活の中にもあり得らるといふ御言葉、自づからの生存に價値を認めよとの御言葉、いかなるライフなりともそはわがライフなりとの御言葉、いづれも染々と胸に殘り申し候。』翌日淸は敏子からこんなことを書いた端書を受取つた。

出勤の途中、電車の停留場の手前で、敏子が向うから步いて來るのに邂逅した時には、敏子は餘程近くに來るまで淸の來たのを知らずに、物思ひに耽つたといふ風をして步いて來た。髮も亂れたまゝにしてあつた。顏も蒼かつた。

『何うかしたんですか？』

『いゝえ……』

其聲には狼狽したやうな處があつた。

淸の通ふ途中の橋の畔に自働電話があつた。堀端を廻る電車が其前を通つた。向うには煙草屋だの雜誌屋だのが見えた。他人の聞くことを憚るやうな電話を懸ける人がいつも其處に入つて行つた。夜など

清は墓前に跪いた。

やがて立上つて、隣の墓石の上に置いた夏帽子を取つてかぶつた。夏の日はもう暑くなり出した。かれは門の處で草をむしつて居る爺の處に來て、何か二言三言言つて居たが、それもほんの僅かの間であつた。やがて笠松の間から街道の方へ出て行く其の姿が見えた。

一時間後には、かれは旅館の一間に歸つて居た。電報用紙を旅鞄の中に探つて、それに、『タヾイマチチノハカニマウズ』と書いた。遠い處に居る軍人の弟に知らせてやらうと思ひ立つたのである。

やがて此處らあたりに特色の赤い襷をした眼の綺麗な十六七の女中が、その電報用紙を受取つて、トントン音を立てゝ階梯を下りて行つた。

百日紅が鮮かな色を見せて居る二階の一間であつた。

二十三

旅から清が歸つて來た頃には、都にももう涼しい風が立つて居た。庭の隅にある鷄頭花は夕日に赤かつた。

留守中には別に變つた事もなかつた。敏子が度々訪ねて來たことや、裾廻しを直すと言つて晴衣を一抱へ風呂敷に包んで持つて行つたことや、此間も帯を持つて行つたことや、書齋に長く入つて何か片づ

央にある隊長の大きな墓を前にして、同じ形の墓が幾通りも列を成して並んで居る。父親の名を發見するのも容易でなかつた。

『何と仰しやるんです?』

爺はかう訊いて、『あゝ、さういふ名がありましたつけ。何でも此方の方だと思つて居ました。』

爺は心當りの方を搜しに行つたが、やがて其墓の所在を知らせて呉れた。其前に立つた淸は心を動かさない譯には行かなかつた。其處には父の名と隊の名と戰死した場所と年月とが刻んであつた。

父親の戰死が原因となつた一家の不幸――それももう今では終を告げた。祖父母も死んだ。母も死んだ。一家の犧牲になつた兄も、轗軻不遇の一生を汚ない病院の一室で熱にうかされてうは言を言ひながら死んで行つた。淸にしろ、軍人の弟にしろ、今では人の夫となり、人の親となつて、其前には既に新しい生活の道が展けた。卅年の月日は短くはなかつた。

淸の胸には追懷の情が漲り渡つた。母や兄の顏が其處にも此處にも見える。田舍の藥舖家も見えれば、母の死んだ原の中の一軒家も見える。殊に父の忌日毎に石摺の幅を床の間にかけて、八重櫻を花瓶に生けて、兄弟三人してお祭をした時のさまが鮮やかに眼の前にあつた。

墓に供へた線香からは細い〳〵煙が颺つた。白く乾いた土の上には、えぞ菊の紅や紫が際立つて見えた。

けた。三十年前に父親が軍服を着て通つて行つた町と同じであることは、その古い家並が明かにそれを證據立てゝ居た。清はいろ〳〵なことを考へずには居られなかつた。

三十四で後家になつて、大勢の子供と老人とを抱へて、故郷の小さい藁葺家にさびしい生活を送つた母親、力にした一人息子に別れて、長い間を田舍の緣側の隅に送つた目の盲ひた祖母、一家の爲めに志を犧牲にした兄――それ等の人々は皆なそれ〴〵異つた生活を得て、短かいライフの中に泣いたり笑つたりして過ぎて行つて了つた。車に搖られて町に入つて行つた淸は、今年七歳になる男の兒のことを考へて居た。

官修墓地は町はづれの街道から見える處にあつた。笠のやうに兩方から蔽ひ冠さつた松並木の奧に、風雨に曝された古い門が見えて、周圍にはぐるりと柵がめぐらしてあつた。繭のツン〳〵生えた向うには朝露を帶びた綠の蓮の葉の中に紅白の花が高く低く咲いて居た。

墓地を預つてゐるのは、それから街道を少し行つた處の鍛冶屋の隣の饅頭屋の爺であつた。花を手にした淸と線香と鍵を持つた爺とは、荷車が通つたり田舍の上さんが通つたりする街道を並んで歩いた。門をあける鍵の音がガチャ〳〵と音を立てた。

中は綺麗に掃除がしてあつた。入口に野梅が二三本あるばかりで、蔭を成した木とてもなかつた。中

かう清が聞くと、

『いゝえ、一人も……』

笑ひながら言つた。

評判に立てられた細君にも逢ひたかつた。しかし友は連れて行かうとはしなかつた。『僕の家など暑くつて仕方がない。』かう言つて、かれは海岸の松の中の料理店に清を伴れて行つた。

翌々日は清はもう球磨川の流を下る人であつた。凄じく水珠のあがる瀬は到る處に展けた。一人は十八九、一人は其弟と思はれる顏のよく似た十五六の二少年が、舳先と船尾に居て櫂を巧に使つた。清のして聞かせる東京の話を熱心に耳を傾けて聞いた。重つた山は流に從つて段々展けて行つた。

其展けて海近くなつた所に八代の町があつた。征西將軍宮の廟のある町、それ以上に其町は清には緣故が深かつた。其處にはかれの父の墓があつた。

肥後八代横手村――

祖父の口に、母の口に、幾度それが繰返されたか知れなかつた。『大きくなつたら一度はお參りをしなくつてはいけない。』七八歲の頃から清はかう言つて聞かされた。父親は丁度今の清の年齡に此處に來て、御船附近の戰爭で彈丸を胸に受けて死屍となつて野に橫つたのであつた。

停車場から町へ行く土手には、櫨の樹が涼しい蔭をつくつて居た。やがて古い汚い狹い町が其處に展

敏子のことを矢張思つて居た。

二十二

霧島山の半腹にある旅舍からは、櫻島を隔てゝ遠い海が見えた。其處ではかれは大海の唯中の孤島に居る昔の友に手紙を書いた『新橋の停車場にて別れたる君と小生との運命のかくの如く相隔らんとは其時思ひ懸けず候ひし。小生は今君の故郷にあり。猶これより百里を隔てたる海上の君を思ふの情に堪へず候。』こんな文句が其中にあつた。淸は其他にも繪葉書をあちこちに出した。敏子に宛てたのもあつた。

京都で一緒に步いた女には、『こんな山の中を步いて居る』と書いた。

鹿兒島では、これも矢張十二三年も逢はなかつた昔の友が旅館に訪ねて來た。暑い日影のキラ〳〵するのを前にして、二人は何から話して好いか解らなかつた。戀の爲めに世を犧牲にした此友の頭にはもう白いのが交つて居た。あの時分――かう言つて二人は餘念なく語り合つた。

膳を並べて午飯を濟してから、友は淸を城山公園に案内した。登り口で、『もう此處には何年にも來たことがない。さう……』かう言つて考へて、『さう……東京に行く前に來たきり、登つたことはありませんよ。』『それほどかれは世に疎く暮して居た。

『君は子供はあるんでしたかねえ?』

敏子はこんなことを言つたことがあつた。それを淸は今思ひ出した。

海岸の道は長くもあり嶮しくもあつた。峠を越えると、其處に彎曲した渚が開けた。渚には汐入川があつたり、漁船が磯に上げられてあつたりした。渚を越えると、路はまた峠へと懸つて行つた。

此處は七浦七阪と呼ばれる處であつた。

阪に懸る度に、染めたやうな碧の海が前に開けた。この海にのみ――このひろ〲とした限りのない海にのみ自己の心が全く展かれるやうに淸には思はれた。

途中から道連れになつた郵便脚夫は、丈の高い大きな男であつた。港まで郵便物を持つて行つて、今歸る處だといふ。鵜戸まではもう二つ峠を越さなければならないといふことも話した。

二人並んで歩いた。

郵便脚夫は途中で大きな木の枝を折つてステツキにしたりなどした。前の村で賴まれて來た出產の報知を持つて行つた家には、大きな椿の木が涼しい蔭をつくつて居た。其の蔭に湧いて居る此處らでも珍らしい冷たい淸水に、淸は渴いた口を當てた。

西さんは廿日ほど前梅雨の降頻る頃、鵜戸から港へと此道を通つた。途中の川に水が出て、それを渡るのが容易でなかつた。濁つた水が海の碧に流れ落ちるさまを歌によんで、それを端書に書いて寄越した。其同じ道をかういふ風にして淸は歩いて行つた。

なければならぬやうな處であつた。崖のやうな處だの、磯と島との間に淺い汐がさし込んで居る處だの、漁師が椿の樹のかげで網を繕つて居る處だの、暗い木かげの川の中で男が手を洗つて居る處などが續いた。

鈴虫や松虫の鳴いて居る叢もあつた。

碧い晴れた午前の空に、明るい日影がかゞやき渡つた。淸は胸の緊縮されるやうな悲哀を覺えた。何故涙が誘ひ出されるのか自分にも解らなかつた。

若い時から感情的であつた。それを撓めたり抑へたりして世を渡つて來た。今ではさうした感情が起る度に屹度自ら批判しては自ら罵るのが例になつて居た。感情に心を全く開いたやうなことは何年にもなかつた。それが今、此の海岸の明るい日影に漲るやうに押寄せて來た。

敏子に對する自己の心の狀態を考へる時には、淸はいつも自から恥ぢた。それに打克つことが出來ないといふのが一つ。さらば何故に全力を擧げないかといふのが一つ。それは境遇から來るといふよりもむしろ性質から來る。感情に心を任せて了ふことの出來ない性質から來る。

『かうした師を持つたのが敏子の運命だ。』

歩きながら淸はかう思つた。

『先生には一生離れない。ねえ、奥さん。母さんと呼ばせて下さいな。』淸と淸の細君との居る前で、

後には清にかう言つて聞かせた。

『その東京の人は、町の橋の傍の旅籠屋に泊つて居ました。』

こんなことも言つた。

西さんは到る處で講話をしたり、演説をしたりした。此の縣では殊に評判が高かつたらしい。『あんなに若くつて、あれで中央政府の好い處に居るんですからなア。』かうした話が絶えず三人の間に繰返された。清は西さんのことを考へたり、田邊のことを考へたり、かうして田舍に生活をして居る人々のことを考へたりした。

十三四年前に戀だの、空想だの、藝術だのと言ひ合つて、本鄕の通りを並んで步いた靑年とは丸で別の人のやうに思はれた。

其夜清は橋の傍の旅籠屋に泊つた。宿帳には果して西さんの名が書いてあつた。一週間前まで此處に居た人のことがなつかしかつた。

二十一

何故か敏子のことが頻りに考へられた。

それは鵜戸に行く海岸の道であつた。其少し手前の港までは馬車が來るが、それからは草鞋ばきで步か

『え、縣の境まで送つて行つて別れて來ました。事務官は一緒に別府まで行くつていふことでした。』

『今度來た人は、若くつて中々學者だつていふことですねえ。』

『え、氣の置けない話が旨い人でした。』

『中央政府から來た人のお供も中々大變ですな。』

パナマの男は慰め顔に言つた。

中央政府の役人に椎葉の山の中までついて行つたといふ縣廳の屬官は、日に燒けた黑い顔をして、いかにも疲れたといふ風に見えた。これから家に歸つて、一日二日緩り骨やすめをしなくつては仕方がないといふやうなことも言つた。今一人の商人風の男は、『實業の世界』といふ雜誌の頁を繰返して、成功談だの苦心談だのを讀んで居た。かねて知合つた間柄らしく、三人は土地の話をしたり、旅の話をしたり、雜誌の話をしたりした。『成程此雜誌は廉い』などと言つて、パナマ帽は見終つた雜誌を商人風の男に返した。馬車は風のある埃の立つ暑い田舍道を駛つた。

この人達と相對して腰を懸けて居た淸には、段々その中央政府から來た役人の誰であるかゞ解つて來た。それは疑ひもなく鹿兒島から此縣に來た西さんであつた。縣の屬官はその前に大隅の南部から日向の西南部を經て、鵜戸を通つて、宮崎に歸つて來たことなどをも話した。

『鵜戸は好い處ですよ。是非行つて御覽なさい。』

日影がそれにキラ〳〵と眩しく照る。

十分後には、汽船は既に其港外に出て居た。清は甲板の上に立つて別れて行く港にぢつと見入つた。一生の中再び來ることもあるまいと思はれる港に。

日向の海岸の道には、馬車が時間で立場から發つやうになつて居た。松並木の間からは日向灘の波がをり〳〵白く見えた。

縣廳のある町に近づいたのは、もう午後四時を過ぎて居た。ある立場からは、パナマの古く汗に滲んだ帽子を冠つた洋服の男と、これも矢張脊廣を着た三十二三の男と、透綾の羽織を着た商人風の男とが乘つた。脊廣の男はある旅から歸つて來たといふ風で、パナマ帽の男に頻りに其話をして聞かせた。

『椎葉の山の中はそんなにひどいですかな。』

『ひどいつて何のつて、それはお話になりやしません。路なんてないやうな處を歩くんですから。』

『よくそれで東京の人は歩いて行きましたな。』

『え、中々足の達者な方で……見かけによらん人でした。事務官などは隨分弱つて居りましたけれど……』

『で、今日は延岡からですか。』

て『此處にもライフがある』といつも深い思ひに撲たれたといふ。その一青年の姿が今見えるやうな氣がする。

次第に近寄つて來る佐伯の港を、淸は深い感を抱いて見ぬ譯には行かなかつた。

大入島はすぐ其前に横つて居た。帆を揚げた船が其處にも此處にも見える。碧い海と蒼い空と、遠くに連る山々の襞に照る日の影と、それを前にして、白い新しいペンキ塗の汽船は、埠頭を距る五六町の處に來て停つた。

舵機が廻轉する度に、海は白い碧い沸騰した泡をもく〳〵と底から湧かせた。

白い服を着た巡査が一人、埠頭から來る端舟に乘つてゐた。町は低い山の陰になつて見えなかつた。埠頭には、旅館らしい大きな家が二三軒並んで居て、其前に俥が五六臺置かれてあつた。

下りる人々は汽船の左舷の處に集つて立つて居た。鞄を持つたものもあれば、風呂敷包を脊負つたものもあつた。大分から暑中休暇を國に歸る庇髮の女學生も三四人は居た。

女工の群も交つて居た。

端舟が左舷に廻ると、人々はぞろ〳〵と下りて行つた。上から卸す荷物を下から手を延して受取るものもあつた。庇髮の娘はほつとしたやうに亂れた髪をかき上げて居た。端舟が客と荷物とを積み終つて汽船を離れると、舵機がまた動き出して、碧い白い水の泡が再び船の周圍に盛んに沸騰した。暑い夏の

海は染めたやうに碧であつた。晴れた日影が風を帶びた波頭にキラ〳〵と碎けた。

甲板の上に立つて居た清は、

『もう、佐伯はぢきですか？』

油と煤烟と塵とで黑光に光つたボォイにかう言つて訊いた。

佐伯の港はもう近かつた。其處等あたりの島の上には、薄い鼠色の交つた白い雲が低く靡いた。汽船は段々島と陸地との間にある入江の中へと進んで行つた。

『佐伯の町は船から見えますか。』

『船のつく處から一里位離れて居りますから町は見えません。』

かう傍の人が敎へて吳れた。

田邊の『日記』には、この佐伯港のことが詳しく書いてあつた。田邊は二十六七年の頃に、英語の敎師として此處に一年以上も來て居た。清は其話を田邊の口から聞いたことも幾度かある。地方の靑年を相手に、ウオルズウオルスの詩集を抱いて、熱い涙を流したことや、弟と一緒に大入島へ船でわたつて行つたことや、可愛い娘の子の家へよく遊びに行つたことや、紀州といふ乞食が居たことや、其他いろいろなことをよく話して聞かせた。日光の山の中の、谷川を前にしたある寺の二階の一間で、その遠い海岸の話を聞いた時のことは今でも明かに淸の頭腦に殘つて居た。田邊は漁師の家の明るい灯に見入つ

一人で占領することが出來なかつた。其處では、淸は三階の隅の六疊に四十位の地方の人と一緒になつた。夕飯の時には、麥酒のコップの遣り取をした。其人はこれから四十里ばかり離れたある役所の屬吏で、兼ねて此地の溫泉を久しい間心に懸けて、漸く遣つて來たといふ話をして聞かせた。隣の間には子供を二人連れた學校の先生らしい夫婦者が大きな鞄や行李を持つて來て居た。その細君は幼兒の泣くを賺しながら、子守唄を歌つたりなどした。濡れた襁褓が緣側の隅につかねられてあつた。

埠頭の夜は明るかつた。夏蜜柑、氷水などを賣る肆が其處にも此處にもあつた。灯が波に映つてチラチラした。人々の待ちに待つた汽船はやがて來た。汽笛が更けた海に震へて聞えた。

端舟の船尾には提燈が一つボンヤリ薄暗く點いて居る。夜は暗かつた。沈むかと思はれるほど荷物や客を載せた大きな傳馬は、暗い波を搖かして靜かに出て行つた。

淸はやがてその沖の汽船の甲板の上に立つ人であつた。其處から見た別府の湯の町は、灯にかゞやいて居た。

夜明には、汽船はもうひろい海に出て居た。岸を縫つた低い山の裾には、小さな港があつたり、さびしい漁村があつたり、帆を揚げた小さい船が通つたりした。海には波頭が白く連つて見えた。

汽船はある小さい島の傍を通つた。漁師の家が二三軒其處にあつた。網が竿にかけつらねてあつた。家根からは朝炊の烟が細々と立ちのぼつた。かうした海の唯中の離れ小島にもライフがあつた。

達らしく見えた。空色の袖のついた襦袢や、處々汗にぬれた絽の單衣や、ズボンやワイシヤツなどが一緒に前の欄干に並べて懸けられた。語り合ふ聲は低かつた。

此旅館には花崗石の立派な風呂があつたり、柑橘の大きな木があつたり、何處となくさびしい顏をした上品な上さんが居たりした。膳を運んで來る女中も丁寧であつた。遠い昔のことが思はれるやうな一夜であつた。

蚊帳の中で、淸は『日記』の二十六年の條を校訂した。空想に富んだ二十二三の靑年の感激が到る處にある。『痛切に宇宙の事象に觸れざるべからず』かういふ風なことが殆ど毎日のやうに書いてあつた。眉の濃い顏の細い眞面目な元氣な田邊が淸の眼の前を歷々と浮んで通つた。淸は讀みながら傍に置いた色鉛筆を取つて、誤字を直したり疑問點を打つたりした。賴んで一枚明けて置いて貰つた雨戶の間からは涼しい風が入つて來た。

翌日も車、馬車、峠から見た海――それも別府近くなると、趣が全く變つた。夕立の烈しく降る間をある立場で待つて居ると、二階ではだらしのない姿をした女が三人も四人も其處に白い顏を出して、降頻る雨を見て居た。奧からは皷や三味線の音が賑かに聞えて來た。溫泉の匂ひ、白粉の匂ひ、賑かな明るい町がやがて其前に展けた。

埠頭近い細い通りには、小さい溫泉宿が軒を並べて居た。何處の家でも客が一杯で、四疊半一間すら

た。其傍の圍爐裏では、髪を箒のやうにした上さんがせつせと櫛にさした鮎を焼いて居るが、活々と起きた火に、其顏は照反されて赤く見えた。子供等は蚊の刺すのにも頓着せずに、ごろ／＼と其處等に寢て居た。半ば裸になつた爺は解らぬ言葉で、馬車の別當と何か聲高く話し合つて居た。

『福岡の病院から戻つてお出の時は、もう餘程わるかつたんですねえ。父さんに手を曳かれて此處で一寸休んで行きやした。學者だつていふになア。』宿の女中はかう言つて、其青年のことを話して呉れた。

馬車は四角な六人乘で、石の多い道をガタ／＼と駛つた。耶馬の谷から大連に遁げて行かうとして、門司で追手に捕へられた十七八の娘は、色の白いほつてりした綺麗な顏をして居た。連れて歸つて行かれるのが別に苦勞のやうにも見えなかつた。繭買らしい男に立場で氷水を御馳走して貰つたり、戲談口を聞き合つて笑つて居たりした。

中津から宇佐へ行く汽車は、耶馬溪の山々と海岸との間にある平野の間を駛つた。卓のやうな山からは白い雲が簇々と湧上つた。宇佐へ行く間の大きな川の船橋の渡船小屋には、腰の立たない爺が居た。櫨の樹が丘から丘に續いた。『此頃は養蠶が盛で、櫨は駄目になつた。』と車夫は話して聞かせた。さまざまの人やさま／＼の人の生活が眼に映つたり消えたりした。

宇佐の太鼓橋の中にある古風な旅館の二階の一間は廣かつた。隣の間の若い二人づれは新婚旅行の人

其の青年はロマンチツクな空想に憧れたり、白い萩の花に愁を寄せたりする人であつた。さうした心持は淸には殊にはつきりと解るやうに思はれた。境遇に依つてある人の運命は開け、あの人の運命は閉ぢられて行つた。

東京へ東京へとあくがれたその二階の一間からは、隣の田舍寺の鐘樓と庫裡とを隔てゝ、幾重かさなる山々の峯が見渡された。寺の庭には、九連草や天竺牡丹などが明るい夏の日影に照されて見えた。

父母は土地で出來る卷柹を解いて、それを巴渦のやうに切つて、古い盆に載せて、わざ〳〵息子の墓に詣でに來て吳れた東京の客に勸めた。

客は京都で女連と並んで步いた人とは丸で別の人のやうであつた。暑いのと不便なのとで、洋服と靴とは鞄の中に藏つて、白地の浴衣にヘコ帶をしめて、京都で買つた山桐の安下駄を穿いて居た。金緣の眼鏡のピカ〳〵光るのが、門の處で草を取つて居た母親の眼には異樣に映つた。朴訥な父親の眼にもつくろはない見馴れない姿が、常に遣つて來る旅の商人か何ぞのやうに見えた。『ちつとも存じませなんだでな……失禮して。』後には濟まなかつたものゝやうに、幾度もかう言つて申譯をした。

昨夜日が暮れて馬車で着いた旅籠屋は、すぐ下に溪流の見下ろされるやうな位置にあつた。灯の周圍に山の蟲が無數に集つて飛んで來るので、何處の家でも、洋燈は軒に出して吊して置いた。馬小屋では一日石ころ道を走つて來て疲れて飢ゑた馬が轡をハメ板にこすり附けたりモソ〳〵藁を嚙んで居たりし

こともある。肺病患者のやうな蒼い顔をして松原の中を一人で歩いて居たこともある。磯には依然としてその時分の綺麗な清水が湧いて居た。

小豆貝といふ赤い小さい貝があつた。これは西さんが『妹わすれ貝』と歌に詠んだ貝で、夕暮の散歩には、きまつて拾つたものであつた。女と二人で行つた時も矢張其の赤い小さい貝を捜して歩いた。

『あの時、田邊のことを考へたつけ……もう其人は居ない。』

清は車窓に迫る夕暮の色を見ながら、かう思つた。かれは旅中に校訂する爲めに、鞄の中に田邊の『日記』を入れて來て居た。

上郡といふ驛を通つたのはもう夜中であつた。清はそれでも起上つて、窓をあけて、闇の中の小さい停車場の灯を見た。其處から十三里の山奥の町、其處に敏子を訪ねたのは、二年前の秋の晴れた日であつた。

汽車は絶えず駛つて居た。

耶馬溪の谷では、かねて清に手紙を寄せたり文章を見せたりした一青年の墓に詣でた。志を抱いて死んだ青年の墓は其家の裏山の奥にあつた。老いた父母は縁の高い風通しの好い座敷で、細々と其時のことを話して聞かせた。門の前の深い谷には、鮎を釣つて居る男が其處にも此處にも見えた。

『ぢや早く歸つて入らつしやい。』

かう言つて笑つて、

『途中からも手紙を下さいね。』とつけ足して言つた。

汽車が出るまで、少し離れた處で、二人の女は白い顔を見せて見送つて居た。

別れた時は自由になつたやうな氣がした。これからが自分の旅だ。かうも思つた。深川で生れた女、賴りにならない性質の好い父と利口な氣の勝つた母とを持つて、十三四の頃から世の中の苦勞をした女、初めから節操を守ることが出來ないやうな境遇に身を置かれた女——さうした女と淸は別れて來た。

知つてからもうかれこれ一年になる。其間に其女はいろ〳〵な話をして聞かせた。東武鐵道の停車場のある田舍町に居たこともあれば、海の見える芝の高臺に住んで居たこともあつた。後には何も彼も隱さず話した。田舍に居る頃世話になつた若い豪農の若旦那の話もした。

初めて逢つた時には、濃い勝色の衣に芭蕉の模樣の大きく出た帶をしめて、若々しい扮裝をして居た。庇髮にして居る時もあつた。銀杏返しに結つて居る時もあつた。都を離れた海岸の道を二人して並んで步いた時には、島にそら豆の花が白く咲いてゐた。海水浴場のある處から松原を拔けて、小高い丘の上へ登つて行くと、其丘の上には石のお宮があつて、海が其處からぐるりと見渡された。二人は眺め盡した。其海水浴場は靑年時代に淸がよく出懸けて行つた處であつた。西さんと來たこともある。田邊と來た

夜は駒下駄を鳴らして四條の納涼に出懸けた。電燈の明るい中をいろ〳〵な人がぞろ〳〵と通る。橋際のビアホールには、舞子と藝者とお客とがビールを飲みながら騒いで居るのが明かに見える。晝間見た時にはこんな處で納涼が出來るかと思はれるほど殺風景であつたが、夜は驚くほど賑かで明るかつた。涼臺の灯と兩側の電燈とが一緒になつて水に映つてそれがチラ〳〵と綾をつくつて流れる。女達は綺麗な水に足を浸けたりなどした。

長い間に觸れまいと思ひつゝ觸れて行つた心を今までにも考へて見たことも幾度かあつた。好奇心で始まつたことが段々一種の親しい離れ難ないやうな情になつて行く不思議さを、淸は染々と經驗せぬ譯には行かなかつた。

それから自由に開いて見た心の複雜した狀態もかれには珍らしく新しかつた。自己の周圍に起る事件と人物、それに對するさま〴〵の異つた感情、眼の前を過ぎて行く種々の現象――それが眼まぐろしいほど早く廻轉して行つた。

二日一緒に居た女連と別れたのは大きな賑かな停車場であつた。乘る人降りる人でプラツトホオムは混雜して居た。窓の處に淸が顏を出して居ると、一度挨拶して別れて行つた若い方の女が再び戻つて來て、

い石段をわざと二人は登つて行つた。登り終つて時、若い女の方はセイ〳〵呼吸を切らして、一二人の方を見て笑つた。キー〳〵と鳴る鶯張りは、女達を珍らしがらせたが、前に幾度も來て知つて居る清は、さうしたものよりもひろ〳〵とした涼しい寺の空氣に心を奪はれた。ところ〴〵の圓柱に『ひる寢無用』と書いてあるのを見て『成程此のひろい處で晝寢をしたら好いだらうねえ、』などと言つて笑つた。出口の庭には白粉草が赤く咲いてゐた。

清水では、五條坂の傍の京の街を一目に見るやうな料理屋の奧の一間で午飯を食つた。清は淡く醉ひながら、かうした種類の女のことやら、敏子のことやらを考へて居た。清水の舞臺や、祇園の櫻や、八阪の塔や、殊に三十三間堂は女達の眼を喜ばせた。『京の三十三間堂の佛の數は三萬三千……』などと小聲で歌ひながら、其堂の內の暗い處を、はしやいで通つて行つた。

西本願寺から嵐山へ行く路は、隨分遠かつた。京の街を外れて、田圃に出ると、七月の夏の日は燃えるやうに車の幌の上から照り附けた。其處には小さい川があつたり、竹藪があつたりした。燕子花の名所だといふ官幣中社の境內には、人の影も見えなかつた。車夫が傍にある車井戸で水を汲上げてゐると、清は暑さに堪へ兼ねたやうに釣瓶に口を當てゝ飮んだ。女連も其處へ行つて水を飮んだり手巾を絞つて顏を拭いたりした。

嵐山の下の川には、人の居ない屋根船が一艘、給でも見るやうに涼しい綠陰につながれてあつた。

『行く處まで行かせよう……自分は唯傍觀しよう。』

梅雨は晴れて、段々暑くなつて來た。

二十

月の末に淸は旅に出た。

旅に出て初めて此頃の身の周圍が振返られるやうな氣がした。あらゆる刺戟物から離れた眼の前に、夕暮の碧の海が見えたり、給のやうな海岸の港が開けたりした。丘のやうな低い山には白い雲がふは〳〵と懸つて行つた。

京都で費した一日が鮮かに眼に殘つて見えた。麩屋町あたりの大きな旅館の一間、其處には總のついた綺麗な小簾が襖の代りになつて居て、暑いキラ〳〵する午前の日影が庭の緣に明かに照つた。當世風に髪は結つて居ても、感じのやはらかな明るい顏をした丁寧な若い女中やお上さんに送られて、三人は車で見物に出懸けた。威勢の好い車はカタ〳〵と鳴つた。

三條の大橋を渡つて少し横に折れた細い通りでは、名代の京櫛を賣る家の古暖簾をわけて、京の商人らしい番頭に、すき櫛やら鬢かきやらを出させて女達の買つて居る間を、紺の脊廣にイタリヤンストロウの帽子を冠つた淸は午近い日影のキラ〳〵するのを前にしながら暫く立つて待つて居た。知恩院では高

いた短い小說らしいものが出て來た。

題は『二人』としてある。

讀む氣もなしに五六行讀んだ淸は、容易に其原稿を擱くことが出來なくなつた。それには男と女との出會が書いてあつた。婢が敎へて吳れたので、何氣なしに女が出て見ると、其處に二年間逢はなかつた男が立つて居た。其處は建仁寺垣や扇骨木垣などの續いて居る屋敷町で、午後の靜かな通りには、人の影も稀であつた。女は引れるやうに其男に跟いて行つた。

其近所に樹木の繁つた古い社があつた。二人は其處で種々なことを話した。二年前のやうな無謀なことはもうすまい……。もうラヴどころではない。女はかう言つた。幾度となくさういふ風なことを言つた。『今、一二年は逢はずにお互に勉强しませう……貴方はそれを誓つて下さるでせう。でなくては、私は東京に出て來た甲斐がありませんから。』女はこんなことも言つた。しかし男は容易にそれに應じようともしなかつた。

男の應じない心がことに淸の心を强く衝いた。

小說とは淸には何うしても思はれなかつた。淸は自己を顧みない譯には行かなかつた。

しかし淸は其問題に餘り深く觸れて見ようとはしなかつた。眞面目に考へて見ては、またそれをすぐ突崩した。

訪ねて行つた事もあつた。其家には敏子が學校友達だといふ若い綺麗な細君と深切さうな婆やとが居た。その綺麗な細君は昨年の春頃心藏を病んで死んだ。清はその細君の悔みから言はなければならなかつた。

十九

敏子はをり／＼訪ねて來た。

非常に元氣の好い時があるかと思ふと、また時には蒼白い沈んだ顔をして居ることもあつた。心が絶えず動搖して居るといふことは、落附かない其態度に歴々と見えた。

『此頃は少しは勉強して居ますか。』

かう清が訊くと、

『何うも兄の家に居ると、氣が落附かなくつて何も出來ませんの。』

敏子はいつもかう言つた。

清は座敷から書齋へ机を移した。敏子の机は硯箱だの水入だのを載せたまゝ、其一隅に置かれてあつた。本箱の上には、鏡が立てかけられたまゝになつて居た。

清は其鏡に自分の顔を映して見ることなどもあつた。

捜すものがあつて、押入の中に一杯入つて居る雜誌や本を整頓して居ると、其處から、ふと敏子の書

清は他に言ふべき言葉もなかつた。覺束ないといふことは父親以上に感じて居た。しかし折角出て來たのを再び連れさせて歸すといふにも忍びない。それに惜しいやうな氣もする。

『其事は私からも敏子さんによく申しませう。敏子さんだつてまさかさういふことが解らん譯はないですから……此事は矢張當人を信用するより他仕方がないですな。』

『それぢやまァ、今少しあなたにお任せすることにしますかな――』

父親はかう笑ひながら言つた。

それからいろ〳〵な話が出た。嫁が病氣で國へ歸つた話、何うも此借家住居は不愉快で仕方がないから好いのがあつたら家を一つ買ひたいといふ話、田舍の別墅の話、そんな話が盡きずに繰返された。ビールの二本目を拔いて敏子が其處へ持つて來た頃には、清はもう大分醉つて居た。

階下で玄關の格子戶の明く音がした。

『兄さん歸つて來てよ。』かう小聲で言つて、敏子は下りて行つた。

少時すると、紺の脊廣を着た敏子の兄が其處へ上つて來た。二人は初對面ではなかつた。四年前清が戰地へ立つ時、京都の停車場に態々逢ひに來て吳れたことがあつた。ボウイが、『服部さんつて言ふ方はありませんか、』と客車の中を呼んで步いた。清は急いで客車の中から薄暗いプラットホオムへ行つた。其時ハイカラな敏子の兄は初對面の挨拶をして、林檎を入れた籠を一箇吳れた。其後京都の岡崎の家を清が

かう言つたが、すぐ話を更へて、
『矢張東京に居るんでせう？』
『さうでせう。』
『何うもそれぢや危いものですな。』清の顔を見て、『いつそ連れて歸りませうか。』
『それ程にすることもないでせう。』
『何うもしかし信用が出來ませんな。』
父親は考へながらかう言つた。
『何か、さうしたことでもあるんですか？』
かう清が訊くと、
『いや――さういふ譯でもありませんがな……一人で出懸けることはよくあるやうです。此間なども、あの雨の降る日に、田邊さんの葬式に行くと言つて出懸けて行つて、遲くなつて歸つて來ました。』
『餘程遲くですか。』
『え、十時頃――娘の身で夜の十時頃まで戸外を出て歩くといふことは困るですからな。……それに、手紙の往復位はしてゐるんぢやないかと思ひますが――』
『さうですか。』

の中にも含まれてある。』『そんなことを仰しやつたつて、子は子の好む道へしか行きはしません。』淸はこんな處まで話を深く持つて行つて見た。

敏子は其間座敷へ出たり入つたりして居た。吸物を拵へて來たり、ビールの拔いたのを持つて來て淸のコップに注いで行つたりした。かうした話をしても、父親は敢て激したやうな樣子もなかつた。莞爾と笑ふ顏には、さうした親の權威を子に强ひやうとする人のやうには思はれなかつた。

段々話が碎けて來た。

後には、『まア、しかし、いろ〳〵のお世話を燒かせて、困つた孃さんですわい、』などと言つて笑つた。

『先生がいくら仰しやつたつて、お父さんには解らないんですもの。』敏子は媚びるやうな調子でこんなことをも言つた。敏子が下に下りて行つた後で、

『何うも矢張私の敎育の仕方が間違つて居たんですけえ、何うも仕方がありません。今一人あとにあれの妹がありますがな……さう貴方も御存じだ。あれは一つ旨く敎育しようと思つて居ます。どうも餘り學問をさせ過ぎた。神戶などに出したのが、矢張いかんのですわい。』

『さういふこともないでせうけれど。』

『イヤ……矢張家庭で育てなければいけない。寄宿舍生活を長くさせると、家庭を家庭とも思はなくなりますわい。……何うもあれなどにしても、田舍に居るのが自分の宅に居るやうな氣がしないと見える。』

いつて許すことも出來るが、我々神の名に兄弟だと言つて居て、さうしてさういふ不都合をするやうな青年は、何うも賴もしうない。』

父親は笑ひを含みながら言つた。しかし其調子は强かつた。

敏子は膳を淸と父親との前に据ゑて、赧くした顏を低頭き勝にして、すぐ下へ下りて行つた。

『しかし、當人同士が好いなら、却つて其方が敏子さんの幸福ぢやないでせうか。』

『幸福？ 親の意に背いて、幸福などが得られよう筈がない……』かう言つて笑つて、『兎に角、私は此話には乘らんけえ……貴方のお手紙にも、それは大丈夫だ、誓つて圓滿に事を運ぶやうにと書いてあつたけん、それで今回もまァ上京させることにしましたが、とても駄目なら、今からでも連れて歸る。』

『さういふ譯でもないですけれど……』

淸は後を濁らして默つて了つた。

田舍の聲望家で、主人としても、父親としても立派な常識ある五十を越した老紳士とイブセンを讀んだり西洋の思想にかぶれたりした中年の男とは、かうして長く相對して語つた。淸は其身と靑年の群との間に超え難い崖があると同じやうに、矢張この老紳士と自分の間にもさうした障壁のあるのを感じない譯には行かなかつた。

親と子との關係――イブセンが多くの作品に描き出したその同じ親と子との關係が、少からず此問題

『何うですな、旨く行きますかな……貴郎があゝまで仰しやつて下さるから出すことにしはしましたがな、何うも危ないものぢやと思ひますがな……何うも私や母のいふことは少しも聞きませんけえ。』敏子が茶器を運んで來るのを見て、『何うも分らなくつて困るですけえ、文學の方を遣るなら遣るで、一生懸命に勉強すれば好いが、何うもそれも出來ない。それなら文學の方は思ひ切つて、嫁になるならなるで、いくらも親が好いやうにして遣るんですけれど、それも解らんから困るですけえ。』

敏子は茶をつぎながら、父親と清の顏とを竊むやうにして見た。自分の身の上が何ういふ風に二人の間に話されるかを聞きたくもありまた聞きたくもないやうに見えた。

敏子は何となくそは〳〵して居た。

『貴女も此處に來て、父さんの話を聞いたら好いでせう……そして言ひたいことは話す方が好いぢやありませんか。』清にかう言はれても矢張敏子は落附いて其處に坐つては居なかつた。

『しかし、當人同士が眞面目にやらうと言ふのなら、お父さんだつて、さう飽まで不同意だと仰しやるんではないでせう――』

敏子は膳を運んで來た時、清が父親に向つてかう言つて居るのを聞いた。

『イヤ、駄目でせうな……第一私は男が氣に入らんけえ……。普通の人なら、さういふ過ちも仕方がな

『實は今朝お出懸前に敏と一緒にお宅に出ようと思ひましたけれど……昨夜のお端書で、急に延ばすことにしましてな。』

笑ひながら父親はかう言つた。前夜、柳橋の川に臨んだ料理屋で清は二三の友達と小會をした。其時人々は興に任せて繪端書を書いたり藝者の扇に歌を書いたりした。其處から清は田邊の遺骸に侍した時に詠んだ歌を敏子に寄せた。

『柳橋では、とても今朝はお宅にお居ることはないと思ひましたけん……』

かう言つて猶笑つた。

此父親は敏子が西鶴文粹を繙いて居るのを見て、『娘の身でこんなものを讀んでは仕方がないな。』と眉を顰めたことがあつたといふ。その話をした時、『私などには西鶴はちつとも解りませんけれど、父などには解ると見えますのねえ。』かう敏子は清に言つた。父親は今でこそ堅い禁酒家だが、昔は三味線の一つや二つは彈いたこともある人で、敏子が稚いころ踊を習はせられたのも、矢張この父親の好みであつた。

『お友達でしたさうなが、田邊さんも惜しいことをしましたな。』

こんなことも言つた。

敏子に關しては、

つて居た。

西さんは清に遣る端書を書いた。

十八

田邊の遺骨は、雨の降頻る日に青山共葬墓地に葬られた。翌日の新聞紙は筆を揃へて其の光景を報じた。中には其記事に二段以上を費したものなどもあつた。それほどかれの死は世に騷がれた。

清は其混雜の中で敏子の父親の上京したといふ報知を受け取つた。御訪問したいがお忙しい御近狀に遠慮するといふ風に其手紙は書いてあつた。清は葬式の濟んだ翌々日出懸けて行つた。

其兄の家は植物園の裏手に當るやうな位置にあつた。矢張雨は降つて居た。かねて敏子に聞いて置いた町の近くに來て、清は俥の幌の中から幾度か覗いて見た。小綺麗な新建の二階屋が其處にあつた。玄關の格子戸を明けて案内を乞ふと、靜かな足音を先に立てゝ、やがて敏子が其顏を出した。

「まア、先生。」

いそ〳〵として迎へた。

父親も二階の登口まで出て迎へた。丈の高い鬚の濃い莞爾した顏は二年前と變るところがなかつた。父親も清の變らない丈夫さうな顏を見た。

連日降りつゞく梅雨に濡れて行く旅の佗しさなどを書いて寄越したこともあつた。

天草から再び本島に戻つて、八代から球磨川の谷へ入つた。人吉から寄越した端書には五箇庄近くまで其谷を泝つたことが書てあつた。それから加久藤越、櫻島、鹿兒島、其處では學生時代の連中で一緒に歌を詠んだ昔の友達に邂逅したと書いてある。今一人の友達はこれから船で二日二夜懸らなければ行けないやうなわだつ海の唯中の島に居た。

月の末には、西さんは鹿兒島の西の田舍を視察する人であつた。縣道にはそれでも馬車があつたが、少し脇へ入ると、草鞋がけで歩かなければならないやうな處が到る處にあつた。芭蕉、椰子、蒲葵――日本では見られないやうな南國の植物が其處此處に繁つて居た。土地のものは、外國へでも來たかと思はれるやうな耳に遠い解らぬ言葉で話し合つた。

雨の降頻るある夕暮であつた。さびしい海岸から少し入つた矢張さびしいなにがし町に西さんは着いた。

其處には東京からの手紙がかれを待受けて居る筈であつた。旅行の日割を彼れは豫め東京の親しい人人に知らせてやつて置いた。旅籠屋の女中はやがて受取つて置いた封書や端書を持つて來た。其中にあつた田邊の死を報じた電報はかれを驚かした。

薄倖な田邊の一生はこんな遠い田舍のさびしい旅籠屋の一と間でも考へられた。外には雨が蕭々と降

『僕も病院に寄つて行かうと思ふんだけれど。……寄らずに行くから萬事賴むよ。事に依ると、もう逢はれないかも知れない。』かう清に言つた。清は西さんと田邊との此頃の心持を知つて居るので、達つて病院に寄つて行き給へとも勸めなかつた。

福岡からは博多柳町の繪葉書が來た。二階屋が海に並んで連つて居るところで、其上に、この俗氣紛紛たる地もこの一區あるがためになつかしといふやうな文句が書いてあつた。筑前では朝倉郡から城壁のやうな耳納山脈を越えて、矢部川の谷の奧深く入つて行つた。征西將軍宮の末路と肥後の菊池一族の勤王の蹟とに深い興味をもつたやうな手紙も來た。西さんは古蹟を探る歷史家ではない。また名勝を探る漫遊家でもない。地方經濟の狀態を硏究したり、同業組合の事業を奬勵したり、町村自治の狀態を視察したりする忙しい旅行家であつた。縣廳のあるところでは、彼方此方に行つて演說もしなければならなかつた。宴會にも臨まなければならなかつた。農政學の講話もしてやらなければならなかつた。それに、旅行中は常に縣廳の屬官が跟いて步いた。

熊本では阿蘇山に登つた。山麓の靜かな溫泉場には、溪流が笛のやうな音を立てゝ流れた。『忙しき旅の中にもこの樂しき小閑を得申候、田邊の病氣如何。』其處から寄越した繪葉書の上にはかう書いてあつた。

三角港の海の中に小山の出て居る繪葉書も來れば、天草島の見馴れない海岸の港の繪葉書も來た。面白い處から處へと旅して行く暢氣さ加減が清には堪らなく羨しかつた。

りした。もう置き初めた夕露はわけて行く人々の衣の裾を霑ほした。

松林と麥畠との間に一軒小さい家屋の立つて居るのを誰も皆な見た。人足は舁いで來た棺を一時其處におろしたが、薄暗い二つ三つの提燈の光を取卷いて、ついて來た人々がぐるりと其處に立つ頃にはもう棺を其燒場の釜の中へ入れて居た。

『もうかうなつちやお終ひだ。』

誰か後の方で、こんなことを言つたものがあつた。

しかしこの薄倖の詩人の最後のロマンチィックな光景には、誰も心を動かさないものはないやうに見えた。誰も皆な默つて、人足の火を點ける準備をするのを見た。

傍に立つて居た淸の顏が提燈の光にぼんやりと薄く見えた。

人足は石油をかけた燃料に火を點ずる。火はチラホラと燃え出した。

それを見て人々は歸途に就いた。

十七

西さんはこの六月の始めに、官用で九州地方へ出張した。

福岡、熊本、鹿兒島、宮崎、この四縣を巡回する豫定であつた。出發する前、

送つて行く群の中に弓張提燈を持つて居る人も二三人はあつた。『提燈を持つたものは成たけ棺の傍に行つて呉れ給へ。』誰かゞこんなことを大きな聲で言つた。提燈の火は段々光を放ち始めた。話聲やら足音やらが暫しごた〳〵と夕暮の田舍道を賑かにした。松林の傍を通つたり臺所の灯の明るい農家の傍を掠めたりした。丈の低い小說家と新聞記者との笑聲は、際立つて高く四邊に聞えた。

半ば晴れた夜であつた。暮れ殘つた薄明りが西の空のちぎれた雲を鮮かに見せた。靜かな夜風が麥の穗の上に吹き渡つて、をり〳〵螢が闇を縫つて飛んだ。

燒場まではかなり遠かつた。尠くとも一里半位はある。停車場から病院までの間は、度々見舞に來て誰も知つて居たが、それから先きは人足の行く後について行くより他に仕方がなかつた。停車場や茅ヶ崎の町の灯を後に見捨てゝ、さびしい東海道の松並木を暗い闇の中に見た時には誰も黯然としないものはなかつた。賑かな話聲や笑聲もいつか絕えて、前へ急ぐ人々の足音のみ聞えた。

松並木の間の廣い路がやがて前に開けた。其間にひつそりとした宿場らしい處もあつた。しかし藁葺の屋根の黑く兩側に並んで居るのを見るばかりで、戶を明放して居る家などは一軒もなかつた。人足は唯道を急いだ。

松並木のしばし途絕えた處から燒場へ入る細い路はわかれて居た。提燈を持つた洋服姿が棺を舁いだ人足のすぐ跡に續いて行つた。其處には小松があつたり草藪があつたり麥畑がそれと微かに見渡された

残つた人達は、其間に遺骸を棺に納めた。女達の採つて來た花を其中に入れた。長い間看護した病院の若い看護婦も其處へ來て眼を泣腫して立つて居た。蓋をしようとする時、お榮さんは今一度と言つて其顏を見て、暫く手巾で眼を押へて居た。

段々人が多くなつて來た。新聞記者や雜誌記者は、故人の交友を彼方此方に要して、めづらしい話を聞かうとして居た。夕方近く、日が斜に松原に射し透る頃には、東京に用足しに行つた誰彼も歸つて來た。

やがて坐る處もないほど室の內は大勢の人で充された。其處に結飯が盆に盛られて出されたり酒の充された貧乏徳利が置かれたりした。緣側に腰をかけて、話をしながら、茶碗で酒を飮んで居る人もあつた。

老母はその大勢の混雜の中に小さくなつて坐つて居た。

日はやがて暮れて燒場へ行く時が來た。

行列は靜かに麥畑の道を出て行つた。もう暗くなり懸けた空氣の中には、晒布で卷いた棺が高く白く見える。燒場まで行かない女連は、家の傍の小高い處に一かたまりになつて見送つて居たが、中には歔欷の聲も交つて聞かれた。老母は珠數を兩手で額の處に合せて居た。

通りには漁師の嚊だの、百姓の女房だの子供だのが多く集つて居た。『學者だつてなァ、若いのに惜しいことをしたなァ。』『肺病つて言ふ奴は……』こんな言葉が其群の其處此處に聞えた。

嗄れた母の呼聲と全身に漲り渡つた悲哀とは、眞面目なヒッソリしたこの一と間の空氣を尠からず動かした。何だかそれが餘りに芝居めいて見えるほど、其の光景は四邊に伴はなかつた。人々は呆氣に取られたといふやうに、默つてこの離れ難ない母子の絆に對した。見るに堪へないやうな心地を誰も感じた。

老母の眼からはふり落つる涙は、蒼白いぐたりとした田邊の額やら頰やらを傳つて流れた。

『秀夫、秀夫！』

泣く聲が其呼聲に續いた。皺の深く刻まれた顏には、衰へた筋肉の顫動が歷々と見えた。

弟は次の間から飛んで來て、

『母さん、母さん。』

かう言つて、遺骸から母親を離さうとしたが、老母は抱へた手を容易に離さうともしなかつた。弟の顏にはかうした光景をこの多くの人々の前で見せたといふことを恥ぢるやうな色が上つた。

『秀夫、秀夫。』と老母は猶かき口說いた。

『母さん、そんなことをしたつて仕方がないぢやありませんか。』

細君だの細君の里の母親だのが弟と一緒になつて、漸くのことで抱へた手を放させて、後から押すやうにして、老母を別室へ伴れて行つた。

十六

午後からは人々が集つて來た。

洋服姿もあれば、羽織袴もあつた。新しいパナマ帽を冠つた新聞記者、ハイカラな扮装をした雜誌記者、角帶をしめた書肆の店員――さういふ人達は、狹い家の中に入り兼ねて、緣側の處に立つて居たり前の松原の中をうろついて居たりした。

親しい人達は、病院から運んで來た寢棺を緣側から座敷へ入れた。もう遺骸を棺に納める時が來た。細君達は骨折つておゆづりを着せた。

病室から自宅の一室へ、一室から棺へ、棺から燒場へ。さういふことが人々の悲哀を更に新たにした。平生物に動かない細君の眼からも涙がこぼれた。お榮さんは泣腫らした眼を手巾で押へて居た。

棺に納めようとする時まで、老母は力にした子の遺骸に離れ難ないといふやうに、悲哀に窶れた老いた姿を其處に見せて居たが、もう堪らなくなつたといふやうに、

『秀夫！』

かうけたゝましく名を呼んで、身もだえして、いきなり冷い遺骸に抱き着いた。

『秀夫、秀夫。』

論嬉しくはないだらう、さうかと言つて、妬けるほどの大問題でもない、烏渡くすぐつたいやうな、酸ぱいやうな氣がするだらうねえ。』

『酸ぱいは面白い。』

と其時清も笑つた。

清は田邊から戀愛時代の照子の手紙を幾通か見せられた。田邊を捨てゝ去つた後に寄越した長い手紙も半分ほど讀んで聞かせられたこともある。照子から田邊に贈つた聖書は、綺麗な枝折が入れられたま〻、久しい間田邊の書架の中に入れられてあつた。

清は『日記』の頁を飜へして見た。

其處には丁度その戀愛時代の處が開かれてあつた。戀した二人が周圍の人々に壓せられ礙げられて懊惱したり憤激したりするさまが細かく書いてある。先程來た主筆に反抗した言葉などもをり〳〵其中に交つて居る。主筆は其戀に關して同情者でもありまた監督者でもあつた。ある時はその間を破壞しようとする態度に出たこともあつたらしかつた。

清は熱心に讀み耽つた。

其處へお榮さんが來て線香を上げて行つた。

『何でも呉とかに旅籠屋のお上さんになつて居るやうな話ですけれど。』
『一度、新聞に書かれたあの人と一緒になつて居るんですか？』
『さうでせう、屹度。』
『子供は何うしたんです？　一緒に伴れて行つてるんですか。』
『屹度さうでせう。』
前の細君の從姉に當る人が、一月ほど前、淸の勤めて居る社に電話を懸けて、『病人がさういふ希望があるなら、一生のわかれだから、せめて子供だけでも逢はせて遣りたい、』と言つて來たことがあつた。照子が夫を捨てゝ身を隱した時、其子が腹に出來て居たことを、田邊は七八年後に知つた。
其時貰はれて行つた田舍から、可愛い七八歳になる女の兒の寫眞を送つて來たのを今の細君の居る前で田邊は淸に見せて、『定坊の姉さんが僕にはあるんだぜ、君。不思議なことがあるもんだらう。』かう言つて笑つて、『丸で思ひも懸けないことなんだから面白いさ。見給へ、何處か定に似てるだらう。……つまり懷姙して居ることを僕に知らさなかつたんだね。そこがあの女のえらい處だ。知らせると僕との關係が全く切れなくなると思つたんだね。』すぐ言葉をついで、『今の妻の身になつたら、かういふことを聞いたら、隨分不思議な氣がするだらうね、おい、何うだえ、どんな氣がしたえ？』と細君の方を向いて、『無

主筆は忙しさうに見えた。やがて包の中から香奠を出して、『何か、私がお役に立つやうなことが御座いましたなら、何うか遠慮なく仰やつて下さい。……それに、社の者にも誰か一人來るやうに申して置きましたから、何うかそれも遠慮なくお使ひ下さい。』かう言つて歸つて行つた。

あとはまた元の午前の靜けさにかへつた。波の音が微かに聞えた。淸は細君やお榮さんの何彼と忙しい間を、獨り遺骸を前にして、傍に置いてある『日記』のところ〴〵を讀んで見た。

『日記』は三十年の春に淸と日光に行つた處で切れて居る。

『もう日記をつけることはやめる。』思ふ處があるが如く、其時田邊は言つた。

日記に書いてある生活とそれから以後の生活とが比べて考へられた。

『奧さん、日記はこれで全部ですか？』

淸は暫くして細君に訊いた。

『えゝ、それだけでせう。他にいろ〳〵書いたものもありますけれど。』

淸は日記を繰返しながら、

『お照さん、今、何うしてるんです？』

『何うして居りますかねえ。』

『少しも居る所が解りませんか？』

とが遠慮なく突込んで書いてあつた。

暫く見て居たが、

『これは面白い。』高い聲で言つて、『これは立派なものだ。財産だ。得たいたつて得られない寶だ。これは一つ、』と清の方を見て、『貴郎方――其時分を知つてる人に校訂して貰つて、世の中に出せば、立派なものだ。本當に好い形見だ。』

かう言つて、讀み懸けた處を伏せて傍に置いた。

笑を含みながら、

『其時分、父さんが社の應接間に來て、其事を私に話して行つたことがあつたです。少し女のことに關したことで……つて、かういかにも話し憎さうにして。』

清に言ふでもなく、細君に言ふでもなく、主筆は田邊と前の細君との戀のことを話した。誰の胸にも其時分のことが考へられた。

『私などは何うも昔から人情のことは解らん方で、さういふことには考へがつかない。其時にも餘程後まで丸で知らないで居たです。ところがこの佛にまかせて置いた雜誌の校正が非常に間違ふ。どうも變だ、變だつて言つて、その校正の間違ふといふ處からその關係が私にも知れて來たといふ譯で――。何うも私などと違つて、話は旨い、調子は上手、若い娘さんにはすぐ眼につくといふやうな人でした。』

老母の眼を泣腫らして居るのを見て、

『しかし、母さん。好い兒を持ちなさつた。佛もなか〳〵豪い人物になつた……こんなに世の中から惜しまれるやうな兒を持つたんだから、母さんも本望だ。』

細君と清とに向つては、

『何か書き殘して置いたものがあるつていふ話を聞きましたが……それは矢張小說ですか。』

『いゝえ日記のことでせう。』

かう清が傍から言つた。

『日記？』

細君は立つて行つて、遺骸の側の押入を明けて、其處から風呂敷に包んだ原稿を持つて來た。

『二十五六年から三十年頃までの日記です。貴郞のお社に居る頃のことや、日淸戰爭時分のことが詳しく書いてあります。』清は傍からかう說明した。

『はゝア。』

かう言つて、其上の一册を取つて、『はアこれは細く書いてある。よく斯樣に書いたもんですな。』處々を披げて見て、『廿五六年から卅年……フム成程……』主筆はある一節に眼を留めた。

其日記には、新聞社のことだの、前の細君との戀愛事件だの、主筆に對する批評だの、總べて思つたこ

子供が喧しいので、お榮さんがそれを伴れて、松原の方へ出て行つたが、暫くして歸つて來た手には、しどめの花だの、撫子だの、名も知らない草花だのを束ねたのが持つて來られた。お榮さんはそれを机の上の茶碗の水に入れて供へた。

東京から一番先きに遣つて來たのは、田邊が青年時代に崇拜したなにがし新聞の主筆であつた。此人の文名は十五六年も前から文壇に聞えて居て、一時は青年から非常な崇拜を受けたことがある。今も政治社會の方面に立派な紳士として、現想的な新聞記者として名聲が頗る高かつた。清も曾ては其文章を崇拜したことのある一人で、二三度逢つて其顏を知つても居れば、その新聞と田邊との關係に就てもかなり詳しく知つて居た。清は田邊から前の細君時代に於ける此人との關係を度々聞かされた。

丈の高い洋服姿は座敷に入つて來たが、やがて悲哀を帶びたハキ〱した言葉は其の靜かな一間に聞えた。

『一度來たいと思つて居ましたがつい自分にかまけて、……かう言ふことになつて了つて……それに、新聞で見てもさう悪いやうに書いてなかつたものですから。』かう言つて、顏にかけてある手巾を取つて見て、『ウム、ウム、かうなつて了つては――』と悲しさうに言つたが、すぐ元の通りにして座に戻りながら、『佛とは隨分古い馴染だつた、東京に出るとすぐ私の處に來たんですから。……まだ若かつた、まだほんの坊ちやんだつた。』

机の上の茶碗には、水が一杯滿されてあつた。線香の煙は明放した一間に細く眞直ぐにさしのぼつた。此頃は珍らしい梅雨晴で、麥畠や桑畑などに、朝の日影が鮮かに照り渡つて、波の音がブランコのある前の松林を越して聞えて來た。

家の內は靜かであつた。まだ東京から來るものもなかつた。細君とお榮さんと老母と、それに今朝清と一緒の汽車で來たある新聞記者の細君と、それだけの人達がおゆづりを縫つたり線香を上げたり臨終の時の話をしたりした。『貴郞に逢ひたがつて居りましたのよ、それは――』細君はかう話して聞かせた。淸は早く來なかつたのを悔いた。

淸が座敷の肱懸窓の處にぼつねんと坐つて居るのが外からも見えた。やゝ色付いた麥畑を越して、灌木の新しい綠が漲るやうな豐富な色彩を見せて居る。麥畑の間には、海岸に出る路があると見えて、其處を網を擔いだ漁師が肩から上を見せて通つて行く。薄い鼠色の交つた白い簇々とした雲の間からは、碧い溶けるやうな空が覗かれた。

此處等によく見るやうな藁葺屋根の百姓家がその肱懸窓のすぐ向うの處にあつた。水草の生えた井戶側には釣瓶が伏せてあつて、入口には簔だの、鋤だのが懸けてある。女が一人、鍋と座綫に向つて、せつせと糸を取つて居る。母屋に續いた小屋の低い屋根には、籠に入れられた繭が一二枚干してあつた。その眞白な繭に日が美しく照つた。

『まだ、何も爲ない中に……爲ようと思つて居る中に、人間は死んで行つて了ふんだねえ。』

かう言つて田邊が笑つたのは、まだ昨年の冬のことである。淸はそれを染々と胸に繰返した。

梅雨に入つてから、鬱陶しい天氣は續いた。泥濘の深い郊外の路を拾ひながら、淸は海岸のさびしい暗い病室を想像した。

かれは新聞に載せる小說に毎日々々追はれて居た。十年前に死んだ母親と其頃の家庭のことを書きながら、十年後の今日の境遇と思想との變遷を比べながら筆を執つて居た。

『暫く病院に御無沙汰をした。今一二回書き溜めて、出懸けて行かう。』かう思ひながら矢張其日々々と追はれて居た。かれは一夜遲くまでかゝつて母親の死んだ後の混雜の一章を書き上げた。夜はもう十一時を過ぎて居た。雨がサッと降つて通つた。臥床に入つてもかれは長い間眠られなかつた。いろ〳〵な過去のことが思ひ出されるやうな夜であつた。其處へ電報が來た。

友の死を報じた電報を、かれは雨に濡れながら門のくゞりを明けて受取つた。

十五

翌日、淸が行つた時には、遺骸はもう病院から引取られてあつた。淸は顏にかけてある手巾を取つた。眼を少し明けて苦痛の痕もなく田邊は死んで居る。ぢつとそれを見入つた淸の眼からは淚がこぼれた。

『今一度は何うにかして、少しでもよくしたいと思ひますけれどねえ。』

甲斐の無いことを染々とした調子で言つた。細君の送つて來た辛いライフを知つて居るだけに、淸は一倍の同情を起さぬ譯には行かなかつた。財產とてもない後々のことまでも想像した。薄倖な田邊のことも思ひ出された。

『折角、世の中に認められて、これから落附いて筆も執つて行かれる身になつたのに……』から言つた淸は、涙が胸にこみ上げて來て飯などは咽喉に通らぬやうな氣がした。

海水旅館には、大阪に居る田邊の弟が細君を伴れて來て居た。看病旁ゝ書きに來て居る小說家の室には、いろ〳〵な人が訪ねて行つた。十日ほど前に小說家やら雜誌記者やら新聞記者やら知人やら十人近く病室に集つたのを記念として、病人をお榮さんが負つて、廊下の入口の處に伴れて行つて、明るい光線の下に寫眞を撮つたが、今ではもうさうした元氣は全くなかつた。病室の扉には來客謝絕の札が揭げられてあつた。

同じ年代に生れて來て、同じやうな物の考へ方をして、同じやうな心の閱歷を經て來て、同じやうな女を戀して、同じやうなライフを送つて來た身には、其群の一人がかうして死んで行くのを、深い感激を以て見ぬ譯には行かなかつた。通つて來る病院への路、茅葺屋根の漁師の家、麥の赤く色付いた松原の間の畠、美しく日の輝く初夏の海――かうした複雜した色彩が一層その背景を明かにして見せた。

持病の肩が凝つたと言つては、國の母親から送つて寄越した持藥を常に用ゐた。

一日、小石川の兄の處から電報が來た。スグコイとしてあつた。慌てゝ出かけて行つた敏子は、翌日歸つて來て、嫂が病氣になつて國へ歸つたに就いて、後に手がないから、また少し手傳つて遣らなければならないといふことを報じた。此間から兄の嫁が落附かなくつて困ると言つて居た。田舍から出て來て、望郷病にかゝつたやうな處もある。かうも言つて居た。何か嫁の里との間に紛紜が起つたやうでもあつた。

敏子は一時また兄の家へ行くことゝなつた。

十四

茅ヶ崎の病人の容體は段々重くなつて來た。六月の初めには、院長ももう長くはあるまいといふやうな語氣を洩した。咳嗽が出て咳嗽が出て仕方がなかつた。耳盥に顔を入れて、眞赤になつて苦んで居る處に人々はよく邂逅した。

廊下の隅に食堂らしい處があつた。見舞に來た客の内に、此處で病院の拙い飯を食つて行くものもあつた。淸も一度其の冷めたい卓に坐つたことがあつた。其時、田邊の細君は其處へ來ていろ〳〵なことを話した。

『何うしてつて……よく解るんですもの。』少し笑ひ懸けて、

『何もそんなに心配なさらなくつたつて好いぢやありませんか。』

『心配しやせんさ。』

『そんなことがあるもんですか。』

細君は笑つて見せた。

氣難かしくなつたり、性急になつたり、喪心した人のやうになつたりするのを細君は常に見てゐた。一ところを見詰めてぢつと物を考へて居ることなどがあると、

『それ、考へて居るぢやありませんか。』

いつもかう突込んで言つた。其時は淸はきまつて機嫌の惡い顔をした。

敏子の擧動にも何處となくそは〳〵したやうな處があつた。成たけ書齋に引込んで出て來ないやうにして居た。食事の時にも、何か言はれやしないかといふ不安が、絶えずその態度を曖昧にした。物を書いたり書を讀んだりするやうな樣子もなく、机の邊には、書きかけて丸めた半切の反古やむだ書きをした紙などが一面に散ばつて居た。だらしなく机に凭りかゝつて、亂れた髮を後に見せて、ぢつと物を考へて居ることもあつた。

蒼いヒステリックな顔をして、頭が痛いと言つて居ることもあつた。

離れた心持になつたり卽いた心持になつたりした。監督者といふことも考へた。あれほど父親を說いて出京させて、もしものことがあつては申譯がない。かういふ風にも考へた。

けれど其身が監督者として十分な資格を持つて居ないといふことは淸自からも知つて居た。其處へ行くと、かれはいつも考へない譯には行かなかつた。男の居る危險を冒しても猶上京を勸めた心の奧をかれは解剖して見た。

ある力に乘せられて行く餘儀なさを淸は味つた。

山田といふ其友達がまたある日の午後に遣つて來て、玄關の處で敏子と立話をして、やがて一緒に事ありげに慌てゝ出て行つたといふ話を細君から聞いた時には、一層其力が身の四邊に押寄せて來たやうに感ぜられた。時には、座敷で筆を執つて居りながら、それに對する不安が何といふことなしに萌して來ることなどもあつた。夜は家の周圍を、誰かゞ彷徨つて居はしないかとさへ疑はれた。

郊外の櫟樹の林の中が想像されたり、柏木あたりの電車の停留場の近くにあるあやしい二階屋の一間が眼の前に浮んで見えたりした。細君も此頃夫が頻りに懊惱して居るのを見遁さなかつた。

『敏子さんのことになると、貴郎は丸で調子が違つて來るんですからねえ。』

かう細君が言つた。

『何うして？』

『實行上のことは私は知らない。馬橋との關係に就いても、當人の心次第、私は何うすることも出來ない。しかし、藝術の方面では出來るだけお世話をして成功させて上げたい。』かう父親に書いて遣つたことを淸は思ひ出した。藝術――苦しくなると、淸はいつも藝術に遁れた。

『巴渦の中に入つて了つてはいけない。其處には藝術はない。藝術の神は嫉妬深い、『實行してゐるもの、頭には決して宿らない。』淸はかういふことを絕えず言つて聞かせた。しかしそれを言ふ時には、その調子に一種の强い力が屹度籠つてゐた。敏子は陰を流るゝある暗潮の壓迫を感ぜぬ譯には行かなかつた。

敏子は斜に坐つて、頭を低れて、默つてそれを聞いた。生々した其の眼は、時々淸の方を見た。時には、淸の心が漲るやうに敏子の方へ流れ寄ることもあつた。かれは度々一年前と同じやうな心持になるのを自分ながら恥かしく思つた。その時分と比べると、今では無論餘程離れた心持で居られねばならぬ筈である。女といふものゝ情の曲折も多少は知つたし、自己の心理を客觀することの修行も少しは積んだ積りである。しかし實際に當つては、それは何の効力もないといふことが段々知れた。

淸と敏子と馬橋と――この三つの心が絕えず觸れ合つて居るといふことも段々知れて來た。三人が三人とも三人のことを思つて居るといふことも知れて來た。

『さうよ。』矢張笑つて居た。
『さうなの？　本當？　まァ。』
秀子はそれを母親に話した。
さういふことが段々清の耳にも入つて來た。
其他にもいろ〳〵聞き込んだことがあつた。何ういふ狀態になつて居るかそれは解らぬが、男と手紙の往復をしたり、一緒に並んで歩いたりするといふことだけは確かであつた。
かうした結果になるのは、豫期しない譯でもなかつた。出京と戀人――父親もそれを第一の危險の理由にした。清もそれを危まぬではなかつた。しかし清は危險を冒しても、猶ほその成行が見たかつた。
まさかに今度は初めのやうな失敗を繰返すこともあるまい。それに、清は其戀に關しては、寧ろ擁護者とならうと思つて居る。互にしつかりとした考へを持つて、將來を期して一緒にならうといふのならば、いかやうにしてなりと父母の心を解くやうに努めて遣りたいと思つて居る。それだけ二人の恣な行爲を口惜しくも思つた。
しかしそれを糺して見ようといふ氣にもなれなかつた。それを敢てするのは、何だか餘り出過ぎたやうにも考へられた。
『自然に任せて置く方が好い。もう娘ではなし――』かうも思つた。

お三輪の家に居る男の兒は、秀子と同じ年で、中學校の四年に學籍を置いて居た。女の兒は昨年漸く小學校を卒業したばかりで、三つほど年下である。若い者の居る二軒の家は、いつも賑かな笑ひ聲で充された。

秀子は袴を穿いて、風呂敷包を抱へて、早稻田の田圃を越して、いつも學校へ行つた。途中で知つて居る人に逢ふことなどもをり〳〵はあつた。秀子は敏子が山の中へ伴れられて歸つた當座、叔父さんの家で取次に出て、その敏子の戀人を知つて居たが、此頃、早稻田の新開町あたりで其顏によく邂逅した。敏子を餘所ながら知つて居る秀子の友達が同じ級に一人居た。ある日、

『あなた、あの人また出ていらしつてね？』

『何うして知つていらつしやるの？』秀子が訊くと、

『だつて、私、逢ひましたもの。』

かう言つて其友達は笑つた。

『何が可笑しいの？』

『だつて、一人ぢやないんですもの。』

『さう……、本當？』

驚いたやうに目を睜つたが、『何んな人？　眼の下つた？……紺絣の羽織を着てる人ぢやなくつて？』

……』

『段々年を取つて來ると、さう頑固にばかりもして居られないからねえ。』

『そればかりぢやないと思ふがね……此頃は少しは遊ぶんぢやらうね。』

『まさか、さうでもないだらうけども……』

未亡人はかう打消した。

未亡人のことを淸が『姉さん〳〵』と呼ぶので、お三輪も矢張『姉さん』と言つて居た。時には『お姉さん』などと態とらしい敬語を用ゐることもある。『お姉さんなどの眞似は、そりやとても私などには出來はせんがね……あんな働き者は何處に行つたつてありやせん。人の世話にならずに、どん〳〵殘して行くんぢやからねえ。』こんなことを淸や淸の細君の居る前でよく言つた。

未亡人はまた一人娘の秀子の生立に心を盡して居た。昨年の春、蒼い顏をしてハンケチに藥瓶を包んで醫師に通ふ頃には、此上なく苦勞にしたが、此頃では大分元氣が出て、血色も心持も段々生々として來た。音樂が好きで、ピアノだのヴアイオリンだのゝ稽古にいつも通つて居た。それに學校が學校だけに、萬事ハイカラなことが好きで、髮なども常に流行を趁つて結つた。色の白い眼の綺麗な子であつた。

『家の秀には、何うかさういふことがないやうにと、私はいつでも心の中で祈つて居るよ、お前。』

未亡人はかう淸の細君に言つた。

お三輪の家では、敏子が行くと、『人のお世話になつて居ては、本當に何にもお構ひも出來はしないがねえ。』かう言つて鹽煎餠を茶請に出した。亡くなつた人の話を敏子がすると、お三輪も一緒になつて、やさしい人だつたといふことを盡きず話した。供へられた花が暗い佛壇の中に明るく見えた。

敏子が歸つてから、お三輪と未亡人とは、いろ〳〵に其事を噂し合つた。

『よく親が出しましたねえ。』

かう未亡人が言ふと、

『淸さんも中々大變ぢやね、……男が居ちやアねえ、危ないもんぢやね。』

お三輪はかう言つて笑つた。

『しかし、それは大丈夫でせうけれどねえ。』未亡人は言葉を續いで、『あれであの人は中々しつかりして居ますからねえ、……もう前のやうな失敗は爲ないでせうけれどねえ。』

『何うぢやかわからん。』

お三輪は頭を振つて見せた。

淸の噂が出ると、お三輪は、

『さう言へば、淸さんも此頃は大分樣子が變つて來たぢやないかね、……さばけて來たぢやないかね

『まァ敏子さん、』と喜んで迎へた。

『秀子さんも見違へるやうになりましたのね。』丁度學校から歸つて來たハイカラな一人娘を見てかう敏子は言つた。

隣の家も前の家も皆な未亡人の持家であつた。隣の家には、淸の兄の遺族がさびしい生活を送つて居た。家が頻りに明く時分、『何うも人任せでは仕方がない。お兄さんが亡くなつて、何うせ彼處に住んで居られないのなら私の家に入つて下さいませんか、家賃など廉くつても好う御座んすから。』かう未亡人が言つた。兄の妻のお三輪は、其時十九になる息子と姪になる不幸な女の兒とを伴れて移つて來た。財産もない兄の遺族は、淸と、淸の弟になる軍人との補助を受けて生活しなければならなかつた。

しかし、お三輪は矢張元氣であつた。

『此處等はもう後家揃ひぢやがね。かう後家ばかり出來ちや本當に遣り切れんがね。』こんなことを言つて、大きな聲を立てゝ笑つた。

未亡人が引越して來てからは、お三輪は裁縫を持つてよく其家へ行つて一日を暮した。未亡人は十年一日の如くに裁縫の手を止めなかつた。あらゆる苦勞や心配を裁縫に忘れるといふやうに他からは見えた。路に向いた六疊の明るい部屋には、大きな裁物板を中央にして、裁縫を教はりに來る子等が、ずらりと並んで居る。紅絹や銘仙や羽二重などが其處等一面に散ばつて居た。

濟の周圍の家族なども三年前とは著るしく變つて居た。細君の里になる見附側の雜貨店には、依然として母親が見世番をして居るが、此頃では腰が目に立つほど曲つて、客に應對するのがいかにも大儀さうに見えた。別に家を持つた役所勤めの若い息子は、そのぢき近所に住んで居たが、子供はもう二人になつて、其の總領の可愛い女の兒は、毎日のやうに、危ない電車の道をチヨコ〳〵と通つて、祖母さんの店へ遣つて來ては遊んだ。

十三

その家の五六軒先に、その姉になる軍人の未亡人が長い間住んで居た。敏子に取つては、路に添つたその狹い格子造の入口は尠からざるなつかしい追懷の種であつた。敏子は其處に少くとも一年は居た。其の路に向つた一間に、一閑張の机を据ゑて、英語の溫習をしたり、文章の練習をしたりした。一番町にある英語の塾にも其處から通つた。髮に挿した白いリボンとハイカラな生々とした扮裝とが、あたりの屋敷町の噂の種に上つたこともある。しかし未亡人はもう其處には住んで居なかつた。

未亡人は一人娘が目白の學校に通ふ便宜上から、一つは其持家が度々一月も二月も明いて居ることがある處から、春の初めの頃に、此處から牛込の山の手の奧に引越して行つた。敏子が何かの次手に訪ねて行くと、快活な肥つた未亡人は、

かう細君は附加へた。

それは敏子の友達でもあり、また敏子の戀人の親友でもあつた。敏子が親に伴れられて國へ歸る時にも、いろ〳〵と其間に立つて奔走した。清の作品の出た時にも、友人の爲めに寃を雪いだやうな文を書いて雜誌に載せたことがある。しかし清はまだ逢つたことはなかつた。

一度は清の居る時に其人が訪ねて來た。其時茶を取りに來た敏子の素振には、何處となく落附かないやうなところがあつた。其前に來た時にも、書齋の障子を締切つて、何かコソ〳〵内所話でもするやうに一時間ほど話して行つたさうだ。

『敏子さんには、澤山男のお友達があるのねえ。』

細君はかう言つて何か搜すやうに清の顏を見た。

食後に『此頃は山田さんよく入らつしやるのね。』細君が何氣なくかう言ふと、敏子はちらと清の方を見て低頭いて了つた。

清が座敷に立つて行つてから、『昔からの親友ですけれど 面倒なところがあつて、私、山田さん嫌ひよ――』敏子はこんなことを言つた。

敏子も存外落附いた風に見えた。原稿も一つ二つ書いて見せた。今日から詳しく日記をつけて見ようと言つて、靑い罫の引いた用紙を半分に折つて綴ぢて、それに一日の出來事を詳しく書いた。淸の談話を二頁も三頁も書いて見せたことなどもあつた。

平凡な日が猶續いた。

淸にしても、其の平凡な穩かな日が物足りないながらも滿足であつた。朝に晩に其顏は笑を含んで送り迎へた。影の生じたその眼はいろ／＼なことを無言で語つて聞かせた。スウイトな明るい哀愁は常に輕く淸の胸を通つた。

淸は其間にも一二度茅ヶ崎へ出懸けて行つた。

『何うも餘程惡くなつた。咳嗽が烈しく出るやうになつたのが一番惡い。あの病氣はほか／＼暖くなつて來ると、猶惡いんだつて言ふからねえ……しかし海岸はよくなつたよ、麥がもう丈が高くなつて夜は螢が飛んでね、今度は近い處の、初めて行つた時泊つた旅籠屋に泊つたが、いろ／＼なことを考へたよ。田邊も小說の中の人物になつちやつた。』

歸つて來て、かう細君や敏子に話した。

細君は其留守に山田といふ人が敏子を訪ねて來たことを話した。

『若い、綺麗な莞爾した人ね、』

笑ひながらこんなことも言つた。

細君とは女同士だけに、敏子は少しは立入つた話もした。細君を透して、清は敏子の心を知り得た。田舍に居る間も絶えず手紙の往復をして居たことやら、『奥さん、もう其話はよして頂戴、私は今それ處ぢやないんですから、』と言つたことやら、其他種々のことを聞いた。

五月は暖かい南風がよく吹いた。其間に雨が降つたり、月が射したりした。夜は座敷も書齋も明るかつた。

十二

想像したとは違つて、事のない平凡な日が續いた。食後に文學の話をすることなどもあるが、それとても大したことはなかつた。本を教へてやるやうなことはもう出來なかつた。

午から友達の家へ出懸けてまだ歸つて來ないといふこともあつた。朝から小石川の兄の家へ出懸けて行くといふこともあつた。しかし夕飯をすまして歸つて來るやうなことはなかつた。

『成るたけ交際などはしない方が好いですよ。落附いて、藝術に隱れるといふ心持で遣つて御覽なさい。存外、其處に別天地が展けて居る。』

から清は言つて聞かせた。

『此處なら、少しは落附いて勉強が出來るでせう？』

『え丶〱。』

書き懸けた手紙を急いで丸めて、敏子は膝を此方に向けた。

清は机を座敷に移した。讀み懸けた洋書や雜誌や原稿紙や手紙を入れた反古籠などを其處に持つて來た。違ひ棚の上には新たに買つた洋書を並べて、下の小さい押入にはいろ〱なものを入れた。硝子障子になつて居るので、庭の新綠が鮮かな色彩やら日光やらを室内に漲らした。清は其處で筆を執つたり書を讀んだりした。敏子が書齋に居て、自分と一緒に勉強して居るといふことが、何となく辛い藝術の努力を力づけた。

細君もかなり細い處まで清と敏子と敏子の戀人との心理狀態を知つて居た。敏子が今度來ない前、清は輕い心持で、さうした心の狀態を言つて聞かせたこともある。『何うだ、面白いだらう。己ぢやなくつては、鳥渡打てない幕だらう。』こんなことを戯談半分に言つて見たこともあつた。『大丈夫だよ、お前などには、己の心が解りやしない。……十年も一緒に居て、子供の四人も拵へて、それで夫の心が解らんのだから、遣り切れんねえ。』かう言つたこともある。

『しかし心配するのも無理はないさ。かういふことは一足飛だからねえ、……一瞬間だからねえ。一時間――いや十分、五分でも其狀態ががらりと變つて了ふんだからねえ。……しかし大丈夫だ。』

十一

書齋を明けて敏子に貸すことにした。處々に躑躅の明るく咲いた芝草の庭を前にして、敏子は鳶包を開いた。

包の中からは書籍やら雜誌やらが出た。行李の中には、晴れの場所に用ゆる高價な帶や衣類なども入れられてあつた『もう再びとは田舍に歸るまい。』包を拵へる時、さう思つて、敏子は何も彼も入れて來た。

大きな信玄袋の中には、男の手紙や清の手紙なども入つて居た。

硯だの、筆架だの、水入れだのを順序よく机の上に置いて、傍の前硝子の本箱には、紅葉全集や樗牛全集やツルゲネエフの全集などを綺麗に並べ立てた。清が社から歸つて、其處に顏を出した時には、もうあたりは綺麗に片附いて居た。

フランネルの單衣を着て、金茶色の帶を後に見せて、明るい窓に向つて坐つて敏子は頻りに手紙を書いて居た。

『夏になると、此室は少し暑いよ。何うも西日がさして……』

清はかう言つて其處に立つた。

『それでも明るいから、住心地は餘り惡い方ではない。』敏子が此方を向くのを見ながら言葉をついで、

つた。

不眞面目で起つても最終まで不眞面目では居られない。眞面目で始まつても徹頭徹尾眞面目ばかりでは居られない。其處に矛盾と衝突とがあつた。

かれは秘密にして置かなければならないことを、男の心で平氣に解釋して、秘密にしなかつた爲めに、ある女を失つたことを思ひ出した。其時、男と女との持つてゐる領分の別々なのを染々感じた。それから節操を一たび破つた女の男の爲めに終極まで玩弄され支配されるあはれさと、遁げて行く女の後から一生懸命に追懸けて行く男の意氣地なさとをも考へて見た。

『人間は年を取れば取るほど、段々性慾的になつて行くやうですねえ。』

平生そんなことを言ひさうもない友がつくぐ\感じたといふ風で、さう言つたことを思ひ出した。

『人間は肉體を磨けば肉體が發達する。精神を磨けば精神が發達する。何でも磨いた處が發達するんだねえ。』かう言つたこともあつた。

一二年此方、淸の胸は其方面にも展けて來た。年を取つても、女は矢張男の唯一の對照であるといふ風に考へられて來た。此頃時々淸が出かけて逢ひに行く女も一人あつた。

不安の分子が著しく含まれてあつたりした。秘密にする程の必要のない秘密でも、成丈け人に知られたくないといふ心もあつた。『普通の人間は平氣で生きてゐる。何故自分ばかりかう不安なのだらう。何故かうイラ〳〵して居るのだらう。』

時にはまた、

『一體、さうした暗い處に觸つて見るから惡いんだ。普通の人は、本能とか秘密とかいふものには成たけ觸らないやうに成たけソッとして置くやうにして居る。止むを得ず、それに接觸しなければならない時には、默つてそれに從つて、其影の一刻も早く通過するのを待つて居る。さうでなければ、それを利用して平氣でそれと同化して居る。だからそれに同化されない人間は、成べく避けて居るより他に仕方がない。一體、それに觸つて見るから惡いのだ。』かうも考へて見た。しかし矢張平氣にはなれなかつた、引緊めて置いた手綱を延ばすと、其處に自由な境地は展けた。しかし『自由』の奥は深かつた。暗かつた。

男と女とは絶えず恐ろしい對照を爲して居ることをかれは感ぜずには居られなかつた。かれは電車に乘りながら、いつもかうした問題を考へた。節操を唯一の寶とする普通の女と、節操を弊履の如く捨てゝ顧みない女と――本能の命ずるまゝに何の顧慮する處なく巴渦の中に入つて行く男と、本能の手綱を出來得る限り引緊めてそれを一意抑制して行く男と――其間に複雜した心理があり悲劇があり運命があ

けれど、電車の中で見る人達なら、草木を見る位に離れて見ることが出來る。好い木もあり、惡い木もある。』

西さんはある時こんなことを言つた。またかうも言つた。

『此間、飛騨の山の中を歩いて居たがねえ。……それは深い山の中で、人家には五里も六里も離れて居るといふ處さ。其處で電車の中でいつも見知つて居る顏などを思ひ出すんだから面白いぢやないか。』

ある停車場では、驛長が金線に赤い色の線をつけた派手な正帽を冠つて居た。ある停車場では、若い助役が着いた驛の名を特色のある聲で高く觸れ廻つて居た。トンネルを出た處の赤い煉瓦に雨の脚の繁く降りかゝるさまが鳥渡眼に映つて見えると思ふと、今度はレールに添つた小さい家で、金網の鳥屋に鷄を飼つて居るさまが不思議にもはつきりと眼に浮んで見えたりした。電車はいつも其間を快く走つて行つた。

其日は電車は空いて居た。前に島田に結つた綺麗な女と、洋服を着た紳士と、印絆纏を着た職人風の男とが乘つて居た。日光を受けた兩側の新綠が車内の人々の顏や衣の上に動いた。

敏子と妻と三人して話した一間のさまがまたしてもかれの眼の前を浮んで通つた。

一人で居る時の心を淸は常に離れて考へて見た。其處には暗い影があつたり、恐ろしい影が見えたり、

との間に腰を懸けて、ぢつとして居る間にのみ、かれは自己の内面に深く立入つて考へることが出來るやうに思つた。

見覺えのある車掌の顏、それにも日毎の自己の生活が細く織り込まれてあるやうに思へた。夜遲く終列車の赤い光に照らされた眠さうな顏や、黎明の鮮かな空氣の中に浮出すやうに見える生々とした顏や、思ひも懸けない停車場から思ひもかけない時間にふいと邂逅した驚いたやうな顏や――それが其度毎に起した細かい感情と神經とを、いつも歷々と蘇らせて見せた。

『不思議な處で此人に逢つた。』

かう其顏が言つた。

『今時分……こんなに遲く……』

かう其顏が不思議にした。

平生庇髮に結つて、菫色の袴を着けてゐる女が、ある日高島田に銀簪を挿して、思ひかけない停車場から乘つた。それが其女のライフの變化を淸に思はせたことなどもあつた。乘つて來る人々、降りて行く人々、其處に生々とした複雜したライフがあつた。

『電車が出來てから、人間と人間との交渉が餘程親密になつたねえ。第一、向ひ合つてゐると、其人人の家族といふことまで考へられるからねえ。自分の周圍の人達では、さう離れて考へることは出來ない

『えゝ。』

と敏子は笑つて見せた。

細君と一緒に玄關まで敏子も送つて出て來た。『ぢや緩くり話してお出なさい。私の歸るまで遊んで居ても好いんでせう。』かう言つて清は出て行つた。

初夏の鮮かな心持のするやうな日であつた。ある家の鞦韆の傍には、遲咲の躑躅が眞赤な燃えるやうな色を見せて居た。空は碧く晴れて、細い垣根道には、扇骨木の嫩葉が日影に光つた。清は料草の庭の周圍を縁取つた櫻の新綠の傍を通つて、向うの臺地にチラ〳〵する西洋づくりの家や、硝子窓や、二階屋の新しい欄干などを目にしながら、汽笛や電車の音のする方へと急いだ。

十

新建の長屋の裏やら丘に凭つた青いペンキ塗の洋館やらかたまつた欅の森やら、さういふもの丶見渡されるやうな處を電車は駛つた。爺が白い旗を出して居る踏切があつたり、葉櫻の交つてる疎らな林があつたり、牛の寢ころんで居る牧場があつたりした。新綠が到る處に鮮かな色を展げた。

郊外から都へ行く電車の中、――それは清に取つて日毎の生活の意味ある一部分であつた。其處でかれはいろ〳〵なことを思ひ立つた。また其處でかれはさま〴〵のことを思ひ返した。知らぬ人と知らぬ人

生じた。

輕い笑聲や押へるやうな囁きが其の周圍に起つた。淸はビールがあつたのを一本拔かせて、明るいコップに泡の立つのを旨さうにして飮んだ。敏子はつゝましやかに音を立てぬ樣にして食事をして居たが、箸を持つ指は何だか物を落しさうにあぶなげに見えた。

『久し振で、敏子さんの箸の持ち方を見ましたねえ。』

こんなことを言つた淸は、いかにも心持好さゝうに見えた。

最後の一椀を半ほど殘して敏子は細君の方を見た。最後の一椀に茶をかけて食ふのが敏子の習慣になつて居た。

『あゝさうでしたねえ、お茶でしたねえ。』かう言つて、細君は笑ひながら、土瓶を取つて渡した。

食事が濟むと、淸はすぐ出懸ける支度をした。洋服を着ながら、

『荷物は書齋の押入の中に藏つて置いたから、今日解いて、入用のものは持つて行つたら何うです。』

『いゝえ、もうぢき來ますから、其時まで預つて置いて戴きますわ……。私は、早く來たいと思つて居りますのですけど、いろんな用があつたのですもの。』かう言つて少し途切れて、『でも、もう好いのよ。大抵片附きましたから。』

『今度は大に勉強するさ！』

とを語つた。其間に赤兒をそつと寢かして來た細君は、茶を淹れかへたり、菓子を勸めたり、煮え立つ鐵瓶に水を注したりした。婢につれられて町へ買物に行つた五歳になる男の兒も歸つて來た。敏子は、『まア、勉さんこんなに大きくなつて？』かう言つて、それを膝の上に抱いて見たりした。時計は十一時を打つた、

細君が勝手へ行つて、午飯の支度に懸つて居ると、何だか落付かぬやうにして居た敏子は、

『もう、お午なの……。私、又來ますわ。』

細君も出て來て『まア、好いでせう、午飯の支度をして居るから。』

『まア、好いぢやありませんか、何にもありやしませんけれど、久し振ですからさ。……何か、用がお有んなさるの。』かう言つて敏子の顏を見た。

敏子は振切つて歸りもしなかつた。茶湯臺の上に野菜の煮たのなどが並ぶ頃まで居た。『他の方ぢやないから、お膳を出さずにこれで御免を蒙りますよ、』などと細君は心易立を言つた。清も何うせ遲くなつたのだから、午飯を濟してから出懸けようといふ積で居た。二年前に、牛込の山手の一間で、かうして一緒に食事をしたことが誰にも思ひ出された。其頃から見ると、敏子は女といふ特色を一層鮮かにした。想像とは違つて、頰だの、手だの、膝だの、何處にも張り切つたやうな處があつた。眼の邊にも深い影が

位置にあるやうな氣がして來た。
『死ぬといふことに就いても、もう以前のやうな同情は起らなくなつた。悲しいと思ふ念よりも、其人の居なくなつたといふ損失から起る悲痛、さういふことを感ずるやうになりましたよ。實際から起る悲痛、それに越す悲痛はない。』かう言つた清の感情はやゝ激して來た。『あなたも今度は一つ眞面目に勉強して下さらなくつては困りますよ。ラヴも好い。眞面目なラヴは僕も賛成だ。しかし巴渦の中に入つて、すぐ盲目になつて了ふやうでは仕方がない。さういふことは貴方も少しは解つたでせうねえ。一つ大に勉強して貰はなくつちや――』
『本當ねえ。これから、敏子さんも勉強なさらなくつちやねえ。山の中に二年も苦しんで居たんですから。』かう細君が言つた。
『本當よ。』
敏子は微かに點頭いて見せた。
清は一歩を進めたかつた。其一歩先に觸れたかつた。其處には暗黒なある物が潜んで居た。『其男は？』『其のラヴは？』『東京に來てからもう逢つたか？』疑問が彼方此方から起つた。
敏子もそれを感じたらしく見えた。清の方を見た眼は著るしく光つた。敏子は低頭き勝ちにして居た。
しかしこの疑問には、何方からも觸れることは出來なかつた。その疑問を背景にして、二人は他のこ

やうなものだからねえ。』淸はかう言つて、續けて來た話を結んだ。

『本當に好い方でしたのにねえ。』

敏子は染々と言つた。

『段々死んで行つて了ふ。もう僕の一家では、僕が一番目上になつて了ひましたからねえ……。兄が居る中は、何だと言つては、相談をして寄りかゝつて居たものだけれど、もう寄りかゝる人もなくなつて了つた。』

『本當ねえ。』

『田邊ももう長いことはないよ。』

『さうですつてねえ。私、來る時、茅ヶ崎の處で思ひ出しましたの……もう本當にお治りにならんのでせうか。』

『もう難かしい……。あれで一度でも好いから、少し快い方に向くと好いけれど何うもむづかしい。』

『お氣の毒ねえ。』

『後が大變ですねえ！』と細君は傍から言つた。

淸は此頃自分の心の狀態ををり〳〵考へて見ることがある。今までは唯前へ前へとばかり進んで居たが、此の頃では何となく周圍が顧りみられた。今まで超えて來た谷々が明かに見渡されるといふやうな

『それやもうねえ、敏子さん、私達が此處に引越して來た時分から見ても、すつかり變つて了ひましたよ。越して來た時分には、前も後も皆な畑で、夜などそれやさびしかつたんですよ。』

『でも、先生には元のさびしい時分の方がよかつたでせう？』

『それはさうだねえ。』

敏子は遠い山の中で想像したこの近郊の家を見るべく立上つた。『何うもひどい家よ。』かう言つて細君も赤兒を抱いたまゝ跟いて來た。座敷には見馴れた海岸の松の油畫だの、高田の諏訪の森を描いた水彩畫だのが懸けてあつた。北向の書齋の机の周圍には、例の如く書籍やら雜誌やらが一杯に散らばつて居る。敏子の置いて行つた前硝子の本箱もあつた。

庭には椿だの、松だの、檜だのが栽ゑてあつた。其處にある木犀や躑躅は、牛込の兄の家から持つて來たといふことを細君は話した。

『さう言へばねえ、あちらのお兄さんもねえ。お亡くなんなすつたつてねえ。』

『あちらの奥さん、矢張彼處に居らつしやるの？』

茶の間に戻つてから、敏子はかう訊ねた。清と細君とは、亡くなつた兄のことやら、遺族のことやら、嫂のことやらを話した。『殘念なことをしたのさ……兄などは我々兄弟や一家の爲めに犧牲に生れて來た

子供ばかり殖えて行くことが、清の胸に一種の哀愁を誘ひ起した。

近所で新築して居る鉋や手斧の音が午前の靜かな晴れた空に高く聞えた。

『それでもよくうちが解りましたねえ。』

清は沈默を破るために、かうしたことを言つて見た。

『えゝ。』

かう言つて敏子も急にはその沈默の中から出られないやうに見えた。しかしそれも長い間ではなかつた。『だつて、お手紙でよく解つて居ましたもの……』かう言ひ懸けた時には、もう常の狀態に復して居た。

『私、いつか手紙に想像して圖を書いて寄越したでせう。丁度其の通りでしたでせう……』

『えゝ〳〵、さうでしたねえ、』と細君も思ひ出して笑つて、

『何うしてこんなによく知つてるんだらうつて、其時も言つたんですよ。』

『だつて私、此處等はよく散步したんですもの……』敏子はかう言つて笑つて、『だから、今日も初めて來るうちとは何うしても思はれませんの。何だかかうもう幾度も〳〵來たことがあるやうな氣がして仕方がありませんの……でも變つたことは變りましたのね。』

『それは變つたとも……丸で屋敷町になつて了つた。』

かういふ清の後に跟いて細君も言つた。

次の間に寢かしてあつた赤兒が不意に泣き出した。細君が急いで立つて抱いて來るのを敏子は見て居たが、『まァ、奥さん、お目出度いことがあつたの？　知らせて下さらないんですもの、ちつとも知りませんでしたよ。何時御誕生でしたの？』

『この二月に生れたんですけれどもねえ……もう赤ん坊なんかめづらしくありませんものねえ、敏子さん。』

かう言つて細君は笑つて見せた。

『まァ、可愛いこと、あんな大きな眼を明いて……坊ちやん？』

『女さ。』

と清は傍から突如に口を挿んだ。

『敏子さんの出ていらつしやる時には、屹度かういふものが生れて居てね、不思議のやうねえ。』細君は敏子が先年初めて清の家に來た時、このすぐ上の男の兒の產褥に居たことを思ひ出した。

『さうねえ。』

敏子の眼には例の表情が著るしく表はれて見えた。三人は暫し默つた。『妻がもし死んだら？　自由の道が開けたら？』作品の中にかう清が書いた。その言葉がこの場合誰の頭にも上らぬ譯には行かなかつた。三人はさまぐ\の心を抱いて、默つてこの沈默を見守つた。

から、お手紙も上げなかつたんですの、……奥さん、それや此方に來てから忙しかつたのよ。此方に來る翌日から貸家を搜して歩いたんですもの。』

『それで、兄さんのお宅はきまつて？』

『え、やうやく。』

『何方？』

『小石川なの。』

『ぢや、當分あちらにいらつしやるのねえ。』

『いゝえ、』と敏子は淸の顏を見て、『私は一日も早くこちらにお世話になりに上りたいんですけれど、嫂がまだ馴れないもんですから。奥さん、そりや、面白いのよ。お嫁さんて言ふものは面白いものねえ。』

淸も傍から時々口を挿れた。段々心が落着いて來た。いろ〳〵に思つて居た疑惑もいくらか解けたやうな心持にもなつた。作品が惹き起した心の狀態には、淸も敏子も成たけ觸らぬやうにして居るやうに見えた。

細君が時々それを言ひ出さうとすると敏子は、『奥さんおのことはもう言はないのよ、』と言ふやうな眼色をして見せた。

『先生！』
久し振でそのなつかしさうな聲を清は聞いた。清の眼には少しく赧くなつた顔と例の生々した表情に富んだ眼とが映つた。
『まア、敏子さん。』
『まア、奥さん。』
かうした會話がやがて女同士の間に取交された。脫いで上つた敏子の草履には赤い派手な緒がすげられてあつた。
今まで靜かであつた一間は俄かに鮮かな色を着けて來た。メリンス友禪の座蒲團は持つて來られる。久し振の挨拶は繰返される。出懸ける支度を其方除にして清は其處に來て坐る。何から話して好いか三人が三人とも解らなかつた。
『今も話して居たんですよ。敏子さん、もう屹度來たに相違ないが何うしたんだらうつて……。あの本のことがあるから、もう宅には來ない積りなのかも知れないなんて言つて居たんですよ。』
細君はこんなことを言つた。
敏子は、
『もう、餘程前に來たには來たんですけれど、今日こそ上らう今日こそ上らうと思つて居たものです

つ三つして、『しかし報告した人にも信用の出來る點があるがねえ。』

小說家も青年畫家も笑つて淸の顏を見た。淸は別にそれを打消さうともしなかつた。

九

遲くなつたからもう出懸けようとして居た。ふと門の明く音がした。

『客かしらん。』

かう思つて淸は耳を欹てた。しかし玄關前の小砂利の音もしなかつた。立上つて、緣側から玄關に出る扉をあけて見た。

誰も居なかつた。

遲い花の交つた新綠が午前の日影を受けて綸のやうに見えて居た。

ふと振返つたかれは、思はずはつとした。門からぐるりと廻つた茶の間の前の庭には、敷石づたひに小さい扉があつた。今朝婢が掃除した時に明けたまゝにして置いた。其處から菫色の袴を穿いた敏子が色の白い顏を出した。

二年逢はずに居た先生と弟子とは相對して立つた。

日を受けた新綠はチラ〳〵した。

『服部君は若いねえ――まァ一つ上げませう。』小説家は笑ひながら盃をさして、
『僕も一つこのはがきに書かして戴きませう。好いでせう、服部君。』
かう言つて、其處に俳句を書いた。
中年の戀といふことがまた繰返された。病院に居るお榮さんの話も出れば、女に對する氣持が段々變つて行くといふ話も出た。男は幾人でも一緒に戀をすることが出來る。かういふ話もした。
『こんな話をすると、昔は服部君は眞赤になつて怒つたものだがなァ。』
昔を知つて居る小説家はこんなことを言つた。
翌日、三人の姿は再び病室の狹い二疊に見られた。昨夜は大變苦しんだが、今日は餘程好いなどと病人は言つて居た。はがきが今少し前着いたと言ふことから、昨夜彼方此方にはがきを出した話、敏子に出した端書に小説家が俳句を書いた話、中年の戀の話、それからそれへと話がはずんだ。お榮さんも笑はずには居られぬやうな話も出た。
病人はふと思ひ出したやうに、
『さう言へば、めづらしい話があるよ。服部君の遊ぶ所をちやんと報告して行つた人がある。』かう快活に、しかし淸の顏に其眞僞を判じようとするやうな眼付をして、『けれど何うも、服部君が遊ぶにしては、其の場所が非常に不便な所なんだがねえ……。電車の都合も悪いし――』かう言つて、咳嗽を輕く二

清は傍から見て言つた。

病院に遣るのには、『此の清宴に君の無きを憾む』と書いた。ある雜誌記者にはわざと氣取つた文句を並べた。青年畫家がそれからそれへと達者に筆を揮ふのを片端から取つて、二人はいろ〳〵な宛名を書くのに餘念がなかつた。

清の書いた宛名の中には、西だの山崎だのがあつた。小說家はそれを見て居たが、『山崎君、さう〳〵、僕もそれに署名させて貰はう。』かう言つて、名を書いて、『山崎君にも久しく逢はんねえ、何うしたねえ。先生？』

かう思ひ出したやうに訊いた。

『なまじつか文壇などに出てまご〳〵して居るより、お經でも讀んで居る方が餘程氣が利いて居るねえ。』

かうも言つた。

一枚傍に伏せてある端書は、敏子に宛てゝ書いてあつた。小說家はそれをそつと取つて、

『見給へ、服部君はこれだから。』

と青年畫家に見せた。

青年畫家は笑つて見せた。清は別にそれを取返さうともしなかつた。矢張笑つて居た。

三人は聲を合せて笑つた。

『だつて……服部君だつて、』と小說家は暫くしてから、『此頃は遣るんでせう。大分、僕も聞き込んだことがあるよ。田邊君がまだ丈夫な頃、あの二階から一緒に出懸けたことがあるが、あの時などは猾いからねえ。大に仙人ぶつたり何かして……』

『さういふ譯でもないさ。』

かう言つた淸もかなり醉つて居た。

青年畫家のスケッチブックにはいろ〳〵なものが寫生してあつた。病床の上の田邊の顏、看護婦の横顏、お榮さんの笑顏、それから今日三人して其處で坐つて話した時のさまも描いてあつた。病院から此處に來る途中で寫生した船やら漁師の顏やら烏帽子岩などもあつた。

小說家はそれを手に取つて、いろ〳〵な批評をしながら見て居たが『おい、君、二三枚何か畫いて吳れ、此處から二三軒出してやらう。』かう言つて、女中にはがきを五六枚持つて來させた。

漫畫の上手なので世に聞えた青年畫家は、大きな手や足をした男だの、わざと誇張した漁師の顏だの、松原の上に白帆の見える處などを描いた。三人して酒を飮んで居る處は殊によく出來た。

『これは好い、服部君などはそつくりだ、』と小說家はそれを手に取つて、『これを一つ病院へ遣らう。』

『君もよく似てるよ。』

たりなどした。帳場のある處から、暗い長い廊下を通つて遣つて來ると、間の踏板が外されて渡れなくなつて居る。脊の高い青年畫家がそれにも躊躇せずにぐん〳〵飛んで渡つて行くと、後から來た脊の低い小說家は、『コンパスの長いものは違つたものだな、』と笑つて立つて居た。

三人の群の中には淸も居た。

『ヤァこれは飮める。』女中が茶湯臺の上に鯛の刺身と鯵の酢の物を運んで來た時、小說家は盃を淸にさしながら言つた。日の暮れる時分には、三人はもう大分醉つて居た。

『中年の戀……僕なども大に中年の戀といふことを感じますよ。今度書いた僕の作を一つ君に是非見て貰ひたい……僕のは、君のやうに事實ぢやない。何うせ想像だから、詰らんけれど、中年の戀といふことはそれでも感じて書いたんですよ。……戀なんて、僕は何うも眞面目に考へられん、』と眞面目のやうに冷かすやうに言つて、『服部君なんぞだつて、こんな大きな體をして、今更ラヴでもないぢやないか、庇髪を相手にしようつて言ふんだからねえ、これで、君！』

かう言つて靑年畫家の方を向いた。

『あはゝ、』と靑年畫家は大きく笑つて、

『だつて、君だつて庇髪黨ぢやないか。』

『それはさうさ、僕はまだこれで服部君よりは若いやねえ。』

子供等は賑かな東京からかうした田舍に來たので、一緒に遊ぶ友達とてもなかつた。お榮さんが拵へて呉れた松林の中の鞦韆に乘つたり下りたりして、長い春の日を暮して居た。其向うの麥畠と松林との間には、停車場から病院へ通ふ路が通じて居て、見舞に來る車がをり〳〵通つた。

淸と靑年畫家と二人並んで其處を通ると、子供等が其の鞦韆に無邪氣に遊んで居るさまが明らかに松の間を透して見えた。

『龍男さん。』

靑年畫家は遠くから呼んで見たりした。

田邊の作品は一二年以來世に認められて來た。それだけ世ではかれの不治の病に罹つたのを惜んだ。海岸に來てからも、何ぞと謂つては、新聞はかれの病狀を報じた。中には寫眞を挿れて一段半もその消息を掲げたものもあつた。

病院から海水旅館のある處まではかなり遠かつた。見舞に來た人達の中には、次手に其處に行つて午飯を食つて行くものもあつた。その人達は多くは近道をして、波打際を眞直に突切つて行つた。其處には砂山があつたり、網を干した漁師の家などがあつたり、船が岸に引上げられてあつたりした。海中にある烏帽子岩には白く波が碎けた。

客がまだ少いので、海水旅館の戸は半ば締め切られてあつた。客を待たせて置いて女中は雨戸を明け

『東京には是非一度歸り度い。死ぬともう運命が決つて居ても、一度は治つて、新橋の停車場から下りて見たい。』

病人はいつもこんなことを言つた。

見舞に來る人が多かつた。文學者が來たり、新聞記者が來たり、雜誌記者が來たり、畫家が來たり、書肆の店員が來たりした。かれの作品を愛讀する青年はわざ／＼遠くから遣つて來た。

日曜日には、其三疊が一杯になることなどもあつた。

段々暖くなつて來た。裏門へ通ふ路には菫や蒲公英が咲いて、前の麥畠からは雲雀が元氣の好い聲を立てゝ高く空にあがつて行つた。淸も見舞に行つた次手に一人で病院の構内を歩いて見ることなどもある。海氣室の小高い處からは、ひろ／＼として海が繪のやうに開けて見えた。

蒼い瘦せた顏をした若い庇髮の女が、海氣室のベンチに腰を掛けて、茫然として海を見て居た。膝の上には小形のバイブルが開かれてあつた。

ある時細君と一緒に歩いて居ると、細君はふとある建物を指さして、

『あれが死亡室ですよ。』

かう淸に言つた。

淸は細君の顏を見た。細君も淸の顏を見かへした。

かう田邊が言つたことを清は思ひ出さずには居られなかつた。

清は遲くまで眠られずに居た。海岸の松林の中の病院、廊下から海の見える病室、其處にお榮さんと細君とに看護されて居る友のことが染々と思ひ出された。

夜もすがら松の音がした。

その旅籠屋から麥畑を越した處に、田邊の家族は別莊を借りて住んで居た。六疊に八疊に二疊、其處から松林を隔てゝ相模灘の波の音が聞えた。

細君とお榮さんとは、交替に看病に出懸けた。留守に殘つたものは、何かめづらしいものが出來たと謂つては、松原を越して、病院の裏門から近道をして持つて行つた。子供等も母親やお榮さんの後に跟いて、日に幾度となく父親の病室へ行つた。

一番幼ない末の女の兒が一人取殘されて、其の松原の中の路を泣きながら歩いて來ることもあつた。

病人は常に都を戀しがつた。昨年まで新橋近くに住んで居て、天ぷらは橋善、鰻は竹葉、菓子は壺屋と贅澤な生活をして居た身には、病院の食物は拙くつて食へなかつた。見舞に來る人々は、それを知つて居て、珍らしい果物だの、菓子だの、牛肉だのを見舞に持つて來た。竹葉の鰻の蒲燒を小包で送つて來る人などもあつた。

旅籠屋は低い松林の中にあつた。裏に廻ると、雨戸が一枚明けてあつて、其處から燈の光が見える。お榮さんは先に立つて案内を乞うた。出て來た婢に一言二言言つて居たが、『それではよろしくお願ひしますよ、』と言つて、今度は淸に向つて『それぢや御緩りおやすみなさいまし、明日はまた起しに參りますから。』

かう言つて歸つて行つた。

婢の連れて行つた室は、細い廊下のかげに當る汚い六疊の一間であつた。かれは酒を一本註文してそれを飮んだ。婢は肴はもう何もありませんと言つて、鰺の干物を三枚ほど燒いて持つて來た。淸は何だか十年も前にかへつたやうな氣がした。田邊や山崎や西などと田舍を旅行した時のやうな心持になつた。取集めていろ〳〵なことが考へられて來た。女に對する自分達の考への著しく變つて來たことが先づ第一に頭に上つた。田邊が妻に逃げられた當座の煩悶、ロマンチイックな西の煩悶、それを今に比べると、實に別な人かと思はれるやうだ。確かに別な人間だ。

お榮さんと田邊との關係もかれは久しい間見て來た。時には反感を起したり、時には眞面目に忠告しようと思つたりした。細君が氣の毒だと思つたこともあれば田邊が可哀相だと思つたこともある。しかし此夜ほどお榮さんと田邊との間を染々考へたことはなかつた。

『女はラヴが生命だつて言ふけれど、女よりも男の方がラヴが生命だよ。』

八

初めて病院を見舞つた時の夜の事が今でもはつきりと淸の頭に殘つて居た。其時お榮さんは長い廊下を送つて來て吳れた。廊下にはぼんやりした洋燈が處々に點いて居て、看護婦の白い服が時々病室から靜かに出て行つた。田邊は何うしても今夜は泊つて行けといふ。『二十町ほど行けば、君達を泊めても羞かしくない海水旅館があるけれど、其處まで行くのは大變だ。今夜は僕の爲めに辛抱すると思つて、其處の近くの旅籠屋に泊つて行つて吳れ給へ……それとも僕の家に泊つて吳れるか。』淸はかうした病人の希望を容れぬ譯には行かなかつた。

『もう解りますから。』

長い廊下を送つて來るお榮さんに淸は幾度となく振返つて言つた。お榮さんのすらりとした姿はしんとした廊下に浮き出すやうに見えた。何となく胸の痛くなるやうな夜で、病院の周圍にある松の音が冴えて聞える。

入口の扉を明けて戸外に出ると、暈を被た薄月がぼんやりと地上を照して、玄關前の砂利の上には、低い松の影が微かに映つて居た。斷つても斷つても、お榮さんは送つて來て吳れた。草履の砂利に鳴る音がチヤラ〳〵と後から跟いて來た。

言つて、病人は暖かい日影に憧れた。

時には此頃に珍らしいやうな好い暖い日もあつた。『服部君は來て呉れたし、天氣は好いから、お榮さん、鳥渡其處まで出て見ても好いだらう。』かう笑つて言つて、廊下の出口の石段を下りて、南の日向のベンチに腰を掛けた。

『海は矢張好いねえ。』

かう言つて、キラ〳〵光る遠海の日の光を眩しさうにして見た。

其年は餘寒がいつまでも續いた。櫻の花が咲くやうになつてからも、雪が度々降つた。ある日曜日に清が東京から遣つて來ると、危ないと思つた空が、平沼あたりから大雪になつて、ボタ〳〵した雪片が一間先も見えぬ位に降頻つた。藤澤を通る頃には、海の遠鳴が遠雷のやうに聞えて、灰色の雲が物凄く地平線の上に垂れた。清は停車場に一臺しかない車を雇つて、白楊や竹藪に重く降積つた雪道を辛うじて病院へと志して行つた。

神戸東京間の急行列車は、清の車が病院の見える坂の上に行つた時、轟と音を立てゝ後の方を通つて行つた。敏子は其列車に乘つて居た。

浮べながら通つた。ライフといふことが染々と思はれるやうな年齢にかれはもう達して居た。

電信柱に病院の名が白く書いてあつたり、幾筋にも別れる道の角に建築しかけた二階屋があつたり、深い緑の葉の中に眞赤な乙女椿が咲いて居たりした。停車場から病院まで十五六町は何うしてもあつた。だら／＼と低く折れ曲つた坂路を降りると、病院の海氣室が砂丘の上に白く見えて、其向うにひろい相模灘が開けた。

その相模灘は、田邊の居る病室の廊下からも見えた。病室は南の盡頭になつて居て、長い廊下を通つて來て、其の扉を靜かに明けると、痩せこけた病人の青い顔が先づ第一に眼に映つた。『服部君――』かう言つて、田邊はいつも嬉しさうに身體を擡げた。

寢臺の下に三疊ほどの疊の敷かれる處があつた。其處には新聞や雜誌や果物を入れた籠などが置いてあつた。氣分の好い時は、田邊は寢臺から下りて、其疊の處で機嫌よく話した。『また、後で咳が出てお困りになりますよ。』お榮さんといふ二十六七の女が心配してかう言つても、容易に言ふことを聞かなかつた。お榮さんは、脊の高い、すらりとした、顔になつかしい表情のある女であつた。細君に比べると何處かかう若々しい艶なところもあつた。

窓の細かい金網に砂がばら／＼と當るほど烈しい寒い風が幾日か續いて吹いた。單調な浪の音、色彩の無い砂山の道、春になつても春は容易に來さうにもなかつた。『花でも咲くやうになつたら――』かう

を前からよく知つて居た。

『時に田邊は何うしたらう。近頃見舞に行つたかえ?』

西はかう訊いた。

『暫く行かないがねえ、餘りよくないさうだ。』

『さうだらうねえ、かう寒くつては――』と言つて、『氣の毒だなア。僕も見舞に行つてやらうと思ふけれど、先生の顏を見ると、いろ〳〵なことを考へなければならないからねえ。今度行つたら、よろしく言つて置いて呉れたまへ。』

淸は輕く點頭いて見せた。

七

忙しい間に暇を拵へて、淸は病んだ友を度々相模の海岸に見舞つた。田邊の容體はもう大分惡かつた。醫師からも見離されるやうな狀態にあつた。

此友のことも考へれば胸が塞がるやうなことが澤山あつた。十五六年も心をぴつたりと合せて來ただけに、一層同情の念が湧き返つた。白楊で圍まれた小學校や、松林の處々にある別莊や、縿の開いたのが一面に日に干してある漁師の家や、さういふものゝ目に留る海岸の道を、かれはいろ〳〵なことを頭に

だ。』
清は傍からかう言つた。
『何うも新時代の女も好いけれど……此頃のは隨分閉口するのが少くないからねえ。ノラやヘダのやうなのならそれや好いけれど、附燒刄ぢや仕方がない。』こんなことを言つて『餘り新思想を鼓吹した君達にも責任がある。』
清は默つて笑つて居た。
『お蔭で片輪者や、一生不仕合せに世を渡る女などばかり出來て仕方がない。今の女子大學あたりの良妻賢母も御免だが、新時代の犧牲になつた女も厭だねえ。』
『犧牲の出來るのは仕方がないさ。』
『何うも困つたものさ……日本の女の特色が段々なくなつて來る。』
『その代り、女が大分鮮かな生々とした色を出して來たぢやないか。』
『餘り鮮かでもあるまい……』
西はかう言つて言葉を切つて了つた。
續いていろ〳〵な話が出た。自然主義の話も出れば、西洋の新しい脚本の話も出た。西の話には何處かかう上品なやさしい處があつた。それに、社會本位といふやうな處もあつた。清はさうした友の思想

君はかう言つて夫の顏を見て笑つた。

その細君も後には『何うしたんでせうねえ、』と不思議にした。それほど長く消息がなかつた。父親が上京したのかしないのかそれすらはつきりとは解らなかつた。長い間、薦包の大きな荷物は、繩で絡げたまゝ、暗い玄關の二疊に積まれてあつた。

ある日曜日に、西といふ友人が遊びに遣つて來た。この人は田舍寺にかくれた山崎だの、肺病で今茅ヶ崎の病院に入つて居る田邊だのと、昔一緒に往來した夥伴で、清夫妻に取つては殊に親しい間柄であつた。細君は殊に力にして居た。

『何うしたんだえ？　此荷物は？』

案内も乞はずにづか〳〵と入つて來てかれはかう訊ねた。

『遂々遣つて來るのかえ。よせば好いのに……男は東京に居るんだらう？』

かう續いて言つて、懷から讀みかけて來た洋書を出して坐つた。

細君に向つては、

『また、宅に置くんですか。』

『まだきまつた譯ではないんですけれどもねえ。』

『先生の兄が今度東京に轉任して來て家を持つからねえ……今度は僕が監督するといふ譯でもないいん

うして親を困らしてまで男に逢ひたいんだねえ。』かう平氣で言つた。田邊といふ友は肺病で海岸に療養に行つて居たが、昨年の暮に鳥渡歸つて來て『また、出て來るんだッてねえ。男は今も早稻田に居るんださうぢやないか。現に、僕の家に來る葉山君などが敎へて居る生徒だつて言ふぢやないか。そいつは面白いねえ。今度出て來て、もつと好い男に其女が乘り換へて見るやうだと猶面白い。』こんなことを言つて笑つた。

天氣も晴れた日が少なかつた。冴え返つて寒い風が吹いたり、雪が萎びた梅の花の梢に重く降り積つたりした。電車の停留場まで出る近郊の路は、靴では歩けぬほど泥濘が深かつた。

ある夕暮、薦包の荷物を載せた荷車が淸の門前に來て留つた。車力が門のくゞりを明けて入つて來て、『服部さん、荷物が參りました、』と言つた。其時、淸は門の傍の鞦韆の處を逍遙して居た。遲い梅の花が白く薄暮の空に浮き出すやうに見えた。やがて門を明けて引込んだ荷車の齒は重く玄關先の小砂利に軋つて聞えた。荷物の數は七箇、それは敏子の山の中から來たのであつた。

六

荷物が着いてからも、消息は久しく解らなかつた。敏子からの手紙もぱつたりと來なくなる。『なに、そんなに心配することはないんですよ。もうすぐ逢はれるからと思つてそれでよこさないのですよ。』細

『改めて申上度い。敏子が文藝の道から離れて、普通の女子として、人の妻として、それで安んじて行けるなら、それに越したことはない。私は心からそれを喜ぶ。しかし實際文藝の爲めに一生を犧牲にしたいといふ堅い決心でしたら、何うか世間の誤解やつまらぬ身分の名譽のことなどに拘泥して、人間一人の靈魂を無にして了ふやうなことはして下さるな。これは私の眞心からの御願です。』

封筒に入れて、宛名を書いて、すぐ出させようとしたが、もう夜は十一時を過ぎて居た。かれはあくる日の朝、またそれを出して讀んで見た。平靜な心の狀態にかへつて見ると、何うして昨夜あのやうに激昂したかゞ自分にも解らない位であつた。かれは靜かに事件の內容を繰返して頭に浮べて見た。何も自分からさう熱心になつて說いて遣る必要もない。さうした烈しい手紙を書いて、自己の激した愚かな心を先方に示すにも當らない。……かう思ひ返して、かれは手紙を机の抽斗の奧の方に藏つた。

懊惱した日が續いた。『何時逢はれるか知れない。』かう言つて來た女の言葉が朝に夕に氣に懸つた。そんなことは決して無いと知りながらも、田舍の舊家の奧の二疊に起つたゆくりない珍事が鮮かに眼に見えるやうな心持がする。ロマンチイツクな一幕が必ず起るやうに思はれて仕方がなかつた。

女の體の弱いのが心配になつたり、自分の作品の起した影響が頭を惱したり、平凡な無意味な家庭が氣分をクサ〳〵させたりした。西といふ友人は、一月ほど前に、それを聞いて、『こまつた女だねえ、さ

とがお耳にも入つたでせう。然し私は信用して戴き度い……私は父君のやうな基督教信者ではない、けれど克己とか犠牲とかに就ては人後には落ちない積りです。』

こんな文句も中にはあつた。

『父君は御上京なされし御様子、實は私は眞面目にお目にかゝつて、不仕合せな敏子の爲めに、いかやうな御相談をも受けたいと考へて居りました。先年私が此問題に關係した時、それなら貴方に娘を上げる。自由に勝手に何うにでもせよと父君は仰せられた。私は今度は御不都合ならば、さうしてなりと——私の家の籍に入れてなりと、敏子を田舍の希望のない中から救ひたいと思つて居ました。』

かうも書いた。

『敏子を將來幸福にすることは私には難かしいかも知れません。けれど敏子が實際、心から文藝の道に立たうといふ決心なら、いかやうにしても世の中に出して遣りたいと私は思つて居ました。私は敏子を世に出すに就ては全力を擧げる積りでした。實際問題は知りません。馬橋との關係などは何うすることも出來ぬかも知れません。けれど文藝の上に於ては出來得るだけ敏子の爲に計りたいとは今でも思つて居ます。ですのに、父君母君は世間の下らぬ誤解を信用して、私を信用して下さらなかつた。これは心外でした。』

最後にかう書いた。

よこしたこともあつた。

春が來て、梅が咲いた。裏の林には青い草が芽を出して、蓬だの、嫁菜だの、なづ菜などが萠え始めた。二月は三月となり、三月もやがて盡きる樣になつた。しかし矢張しつかりとした音信はなかつた。

久しく間を隔いて、もう何うしても父親が出京した時分と思ふ頃、突然敏子から手紙が來た。それは絕望的な手紙であつた。それにはかう書いてある。『……先生、父は今月の上旬に兄の嫁になる里方に參つて居りましたが、其處からすぐに發つて了つた樣子で御座います。私が二年間思ひ詰めたこともう水の泡になつて了ひました。先生、もう先生には何時お目にかゝれるか知りません。唯々先生の御機嫌よくお榮えなさるゝを祈るばかりです。』これを讀んだ淸の胸は震へた。

淸は自分の信用されぬのを殊に心外に思つた。其夜は淸は遲くまで机に向つて、敏子の母親に宛てた手紙を書いた。

『父君も母君も大に考へて然るべきだと思ふ。個人の行く道は個人より外に干涉する權利がない。父母は自己の子女の爲めに肉體上の保護は絕對にしなければならぬが、精神までを自由にすることは出來ないと私は信ずる。』

激昂した筆はいつものやうな形式的敬語を並べる餘裕はなかつた。

『世の中では、いろ〳〵なことを申したでせう。私の製作から起つたいろ〳〵御心配になるやうなこ

係なども御考へなされ度候。親は子等の精神までも束縛すべきものに候や否や――』こんな文句も入るやうになつた。

父親の手紙、母親の手紙、敏子の手紙――それがいろ〳〵に清の心を動搖させた。『それほどまでに言ふのならば、今一度出京させて見よう。』父母の間には、かう相談が纒つたらしくも見えた。『しかし出京させるに就いても、今度は信用して貴方にばかり任せては置かれない。』かう邪推されるやうな處もあつた。

丁度其時兄に當る人が、京都から東京に轉任して、二月には、新しく貰つた細君を伴れて出京するといふことを敏子は報じて來た。それには屹度父が行くから、是非其時には一緒に連れて行つて貰ふ積りである。近い内にお目に懸れるのを喜んで居る。かう書いてある。

『兄さんが東京に家を持つやうになつたさうだ。さうなれば、非常に都合が好い。お嫁さんの居る中に敏子が居ることは出來ないにしても、何かにつけて都合が好いからねえ。』かう清は細君に言つた。

しかしその狀態も幾度となく變つた。父母は敏子の出京を許したやうにも見えた。女から來る手紙もある時は樂觀し、ある時は悲觀した。

『何うせ出京することは出來さうにもありません。先生、私は山の中に埋れて了ひます。』かう書いて

けると書いて遣つた。さうかと言つて、淸も女が出京してからのことを考へぬでもなかつた。出京すれば、自分の宅に置かなければならぬ。自分が再び保護者たり監督者たるの地位に立たなければならぬ。男が以前のやうに自分の宅に出入することは謝絶するにしても、何物の束縛をも感じない戀の力を拒ぐことは出來ない。それに、其他にもいろ〳〵な問題がまだ解けずに殘つて居る。しかしかれは女の境遇をも思ひ遣らずには居られなかつた。

『最早二年の年月も經過致し候ことゆゑそのやうなる御心配も無之ことゝ存候――小生も今度は十分なる責任を以て、監督者の地位に立ち可申候。』

かういふ文句の入つた手紙が淸の手から父親の許に行つた。

ある時はまた、『折角小生を賴りて文學の道に志せし敏子を此まゝ田舍に埋らせ候ふは、如何にも殘念に存候、今一度十分なる勉强あらんことを希望仕候。始めは年齡も若く、そのやうなる自覺的思慮もこれなかりしことゝ存候。二年間の田舍の生活は敏子に少なからぬ影響を與へ候ことゝ存候。御心配のほどは十分に御察し申上げ候へども、今一度御考慮のほど幾重にも願上候。』などと書いて遣つたこともある。

冬から春までの間に、少くともさうした手紙の五通や六通を淸は出した。始めは疎い形式的の文句が多かつたが、後にはそれが段々細かい處に入つて行つた。『それは御尤に存候へども、親と子との間の關

てよこした。感情の著しく昂ぶつてゐる時もあれば、思切つて沈んだ調子の時もあつた。徒らに過ぎ去つて行く歳月――それに對して、女は殊に堪へ難い深い煩悶を見せた。

『私だつてもう來年は廿二になるんですもの、そんな無謀な智慧の無いことは致しません。』かう書いてあるかと思ふと、また時には、『何う願つても、父は許して呉れません。私は意味もなく目的もなくかうして山の中に暮して居ましたつて、生きて居る甲斐が御座いません。先生、私はもう覺悟を致しました。』かう書いてあることもあつた。

また次ぎのやうな手紙も來た。

『母はそれでもいろ〳〵と心配して呉れますの、私が夜も晝も奧の二疊に引籠つて、いつも蒼い顏をして居りますと、何も申しませんけれど、何彼と慰めたり何かして呉れますの。此間も天氣の好い暖い日が御座いましたが、お重箱の海苔卷なぞを拵へて呉れまして、家にばかり引込んで居てはいけないと申して、先生も御存じのあの山際の別莊に母と一緒に參りました。冬にもこんな暖かい好い日があるかと思はれるやうな日でした。……先生、母の心を考へますと、私は涙がこぼれて仕方が御座いません。折角決心した覺悟も母の顏を見ると鈍つて了ひます。』

それに對して、淸は慰めたりなだめたり叱つたりした。貴女の決心さへ固ければ――自分で自分の身に十分の責任が感じ得られさへすれば、如何やうにも父母を說得して、再び出京の出來るやうにして上

歸るばかりに、支度までしたんですけれど。』

『まア、今少し居るさ。』

かう言つて、二人は酒を飮んで行つた。

二三年の間に此町にも少なからぬ變遷があつた。利根川の手前でつかへて居た鐵道は、鐵橋が出來上つてやがて開通した。町にも大きな寺の裏山を開いて停車場が出來ることになる。運送業が出來る、製粉會社が出來る、今度は更に大規模のモスリン會社が城址に建てられると言ふ。つひぞ見たことのない活氣が古い町の隅から隅へと行き渡つた。小照は其時、『汽車が開通してから大變賑かになりましたよ。今ぢや藝者が三十人以上も居りますからね、』と言つた。二人は小照の他に藝者が三人しか居なかつた時のことを想像した。風の吹荒れるのを聞きながらさびしく飮んだ時のことが思ひ出された。小照は今年は何うしても東京に歸ると言つて居た。

『もう、此處で御目にかゝることは御座いますまいねえ、御機嫌よう。』小照は停車場まで送つて來て言つた。

五

都の近郊と遠い山の中との間には、絶えず手紙が往復された。女は細い綺麗な字で二枚も三枚も書い

沼の向うの躑躅の咲く頃には、こんな町でも人が彼方此方から入込んで來た。時節になると、料理屋でも一時雇ひの酌婦を五六人も殖やして、交替に山の方に出張らせるやうにした。山には大きな二階建の出店があつた。何處の間からも沼が見え躑躅が見え渡船が見えた。小照は町の外れの辨天祠のある處から小さい田舟に乘つていつも出掛けた。

其頃には水草の新芽ももう大分出て居た。菱だの、蓴菜だの、藻だの、葦だのが其處にも此處にも浮いて見える。二人は其の花の時分にもよく出かけて行つた。小照が一日隔きに乘つて行く其の汚い田舟にも乘れば、その大きな二階屋の廣間の混雜した中で酒を飲みもした。その時には、小照は屹度出て來て挨拶をした。『花の時分はゴタ〳〵して居て仕方がありませんねえ。……一日手傳つて歸ると、體が綿のやうに勞れて了ひますからねえ、』などと言つた。

二人は來る時は、『小照はまだ居るかしらん。もう東京に歸つたかも知れない、』などと言つて遣つて來た。

小照の顏を見ると、

『まだ居たねえ。』

といつもなつかしさうに言つた。

『もうねえ、餘り長くなりますから、東京に歸りたいと思つて居りますけれど……。此間などももう

きな欅の樹に夕日の落ちるのも手に取るやうに見えた。冬は西風が凄じい潮のやうな音を立てた。

『誰も知る人のなくなつた故郷に、かうした新しい知人が出來るといふのも面白いことだねえ。』

清はこんなことを言つて見ることもある。

神樂坂にも住んで居たことがあつて、『金色夜叉』の作者も知つて居るなどと小照は言つた。『其時は私はまだかういふ商賣をして居なかつた時ですからねえ。……彼處に大弓がありましたねえ。よく彼處に來ていらつしやつたものですねえ。』

またあの時は、

『彼處にしる粉屋があつたでせう。船橋といふ肥つた上さんの居る菓子屋があつたでせう。さう〳〵角の藥茶屋の若い上さん、あの上さんはあれで若い時は中々好い娘でしたよ。』

段々心が置けなくなつて來た。時には小照の方から身の上話などすることなどもあつた。『貴郎方、御商賣で時々いらつしやるんですか。』かう聞いて見ることもあつた。

座敷に入りながら、

『まア、皆さんでしたか……』と莞爾と笑つて見せて、『今日は何でも久しく御目にかゝらない方に屹度逢ふと今朝からちやんと知れて居ました。』

いふ風に清は連れ立つた夫に話して聞かせた。

『フム、フム。』

と雍之助はいつもそれを聞流しながら歩いた。

雍之助の眼には唯のさびしい田舎町としか映らなかつた。古着を遠くから仕入れに來る町、麥落雁といふ菓子の出來る町、『麥飯とろにたんと〳〵』といふ俗謠のある町、それ以上に餘り多くの興味を惹かなかつた。それでも沼を隔てた桃の花や躑躅の花の盛りを見た時には、成程これは名所だけあると感心した。

それから二人はきまつて軒燈や御神燈の出て居る細い通りを歩いた。御神燈にも軒燈にもいろ〳〵な女の名が書いてある。それは大抵板葺の間口の狹い小さい家であつた。中には藁葺の汚いのもあつた。

二人は玉かつみの小照といふ藝者を知つて居た。

別に來歷といふほどのこともなかつた。二三年前、新綠の頃に、矢張二人は此處に遊びに來て、町の料理屋で午飯を食つた。その時その小照が出て酌をした。東京の者で、一月ほど前に來たといふ話をした。それに何處か人を引付けるやうなところがあつた。二三度來る中には、段々面白い氣象だといふことも知れて來た。『小照のお酌で、酒でも飲んで來るかね、』などと言つて、二人はよく出かけて來た。

料理屋は町の裏のところにあつた。其の奧の一間の靜かなのを二人は常に選んだ。其處からは裏の大

『それが僕の家の寺だ。入つて見ないか。』

四

此處には幼なくして死んだ姉の墓があるばかりであつた。一家が都に出てからは、何年にもお參りをしたものもない。しかし墓石は倒れても居なかつた。

清は自分の幼ない時のことを友に話して聞かせた。寺の隣は小學校で、よく此寺の中を拔けて近道をして行つたことや、いたづらな子供が墓石を倒すのを和尙が怒つたことや、母親と一緒に盆にお墓參に來た時のことや、それからそれへと話が盡きない。『この姉の夭死した後の腹に僕がすぐ出來ることになつたのだ。この姉が死なずに居れば、僕は今時分こんな處にまご〱して居なくつても好かつたんだ。』かう言つた清は、墓石の前を立去りかねたやうに見えた。

『そら見給へ、明治四年一月と書いてあるだらう。僕は明治四年十二月生れだ。ライフと言ふものは面白いものだねえ。』其聲には過去の追懷の悲哀が籠つて居た。

今日に限らず、故鄕の町を步く時は、清はいつもかうした調子であつた。ひどく感情的になつて、初戀の物語や一緒に遊んだ友達の話やらをした。此處には上品な白鬚の爺樣と綺麗な娘の兒がさびしく暮して居た。此處には早く死んだ同級生の娘が住んで居た。此處は初戀の女がよく通つた路だ。總てかう

停車場から其山の中の町までは十二三里あつた。かれはある時車で其處を通つたことがある。最初泊つた處は、山の麓にある狭い汚い町であつた。夜もすがら落葉の音がガサ〳〵聞えた。『木下の孃さん、此處等でも評判の孃さんですがな。學問がえらうお出來なさるつてな。此間もお母さんと泊つて行きなはつた。』などと旅籠屋の婢が言つて聞かせた。あくる日は山と山との間の谷のやうな處を通つた。小さい峠には休茶屋があつた。明るい秋の日影に薄白い雲が懸つたり晴れたりした。町に入つたのはもう午近かつた。かれは其處に過した二日二夜のことを考へずには居られなかつた。暖かい家庭とやさしい父母、それすら戀の爲めには辛い束縛であると言つた女のことをかれは考へた。

『今少し時節を待つてお出なさい。』

其時、かれは女に向つてさう言つたことを思ひ出した。かれは成たけ其問題には觸れないやうにして居た。男の話もつとめて成たけ爲ないやうにした。二階から細い廊下、それを通り越すと、其處には廣い湯殿があつて、湯氣が微白く颺つて居た。湯氣に曇つた大きな鏡の下には、白粉や櫛や石鹼が混雜と置いてあつた。何うした聯想か、それが今はつきりと清の眼の前を浮んで通つた。

氣が附くと、二人は狭い町の通りを歩いて居た。寺の門が其の近くにあつた。銀杏の見事に黃葉したのがあたりを明るく見せた。

清は雍之助に言つた。

と言つた淸の聲は低かつた。

『しかし、僕にしては、何うかして幸福にして遣りたい、成功させて遣りたい、此儘放つて了ひたくない……。だから、此間もさう言つてやつた、藝術を修養するといふ方面に於ては、いかやうにも御世話はするが、實際の方面は、自分で責任を感じて、自分で其始末をつけて行くやうにしなくつてはいけないつて……』

『ところが、それが旨く行くか何うだか、頗る疑問だからねえ。』

『旨く行かなくつたつて實際の方面は僕は關係せんから好いさ。』

『さうは行かないよ。』

『襤褸を出さないやうにするなら、何んなことでもするが好いさ。僕は今度は何も言はない。知らん顏をして居るよ。』

『君にそれが出來るかねえ。』

と雍之助は笑つた。

淸は心と言葉とは一致し難いものだと感じた。かれの頭には山の中のさびしい町のさまと長い廊下の盡頭にある二疊の一間とが歷々と見えた。其二疊の間には、小さい机が置いてあつて、雜誌や書籍や文反古が一杯に散らしてある。退屈すると、其處から女は出て來た。髮の亂れた白い顏を秋の夕日が照した。

『それで十分ばかり黙つて乘つて居たよ。』

『何も言はずに……』

『無論さ。』

『それは可笑しかつたねえ。』

『餘り好い心持のものでもなかつた。』

『それはさうだらうさ、』と雍之助は笑つて、『言はゞまあ、競爭者だからねえ。』

『いや、競爭者と言ふほどの烈しい感情でもなかつたねえ。これが、同じ年輩で女との關係が深くなつて居ると言ふのなら、それはさうした心持が湧くに相違ないが、僕のは其時は寧ろ自分の愛して居るものを毀損した男といふやうな輕い憎惡の念――娘を誘惑した男に對する父親の憎惡の念、それに似たやうな心持が其男に對して起つた。』

『それでまた、君の家に置かうと言ふのかえ？』

『それはまだ考へて見たこともない。來るか來ないかもまだきまらないのだから……。まさか親の許さないものを、僕の家に呼寄せることも出來ないからねえ。』

『僕は餘り關係せずに置く方が好いと思ふがねえ。』

『僕もさうは思つてるのさ。』

『君があの作を公けにした時、其男に對する觀察が違つて居るとか、あんな男ぢやないとか、隨分いろいろな批評が出たが、實際何んな男なんだえ？　有望な男かえ。』

『さうさねえ、僕にもよくは解らんがねえ。しかし出來の惡い男ぢやないんだらう。あの作には無論其男が十分に書けて居ない。』

『あの作が出てから逢つたことがあるかねえ？』

『ある、一度ある。』

かう言つて淸は其時のさまを思ひ出すといふ風をして見せた。

『何處で逢つたえ？』

『電車の中で鳥渡逢つた。』

電車の中で一種不思議な間の拔けた挨拶をしたことを淸は思ひ出した。女が父親に連れられて山の中に歸つてから、其當座は其男はよく淸の家を訪ねて來た。淸に縋つて其の戀の糸を手繰るより他にかれには女に近寄る途がなかつたのであつた。しかし其作が出てから、其狀態は全く一變した。其日は淸は例の橋際の電車の停車場から乘つた。處が其處に其男が早稻田大學の新しい角帽を冠つて、久留米絣の書生羽織を着て乘つて居た。お互ひにはつと思つたが、しかし知らぬ顏をする譯にも行かなかつた。男が先づ挨拶をした。淸は輕く『ヤア……』と言つた。

『相變らず極端に物を考へるねえ。』
かう言つて雍之助は笑ふと、
『だつて本當にさうだもの仕方がないさ。二三年來の僕の新しい血は、實際あの女が湧かして呉れたんだもの……。僕の書いたものに少しでもフレッシュな鮮かな處があるとすれば、それは皆なあの女が僕に與へた印象から來て居るんだからねえ。』
淸はこんなことを平氣で言つた。それほど二人は平生心を打明けて居た。妹の知らぬことも兄はよく知つて居た。淸に取つては、義兄と言ふよりも昔の親しい友といふ間柄であつた。
二人は默つて並んで步いた。
『しかし、僕は……』と淸は再び言葉を續いで『僕は今ではかれ等の爲めに心から力になつてやらうと思つて居る。二人が幸福に生活するといふことを寧ろ僕は神かけて祈つて居るねえ。一體僕が馬鹿さ。人の物笑ひになるやうな馬鹿々々しい幕を打つて見せたのさ。しかし僕にも利益はあつた。物に對する見方や考へ方がすつかり一變したばかりでなく、僕の心持をも全く新らしくして呉れたからねえ。』
『そして男は今何うしてるんだえ？　矢張文學を遣らうつて言ふのかえ。』
雍之助は急に話頭を更へた。
『さうださうだ……。早稻田に籍を置いてるんださうだ。』

を感じて居る。』

『しかし、それは君に責任があると言ふ譯ではない。君の藝術の材料になつたと言ふことは、さういふ事件を藝術家たる君の眼の前に廣げて見せたからだ。唯それだけだ。君には責任といふほどの責任はない。』

『さう言へば、さうも言へる。僕もさう思つて自から安んじて居る時もある。しかし實際のライフ――人一人の一生、それと藝術と何方が貴いだらうか。何方を重んじなければならないだらうか。……藝術家から言はせれば、無論藝術が貴いと言ふに違ひない。思ひあがつた藝術家の中には、人生は藝術の模倣だ抔といふものさへあるからなア。けれど僕は藝術家といふ名に空虚を感じて居る一人だ。何故、藝術家は普通の人のやうに全力を擧げることが出來ないのか。何故馬車馬のやうに傍目も觸らずに猛進することが出來ないのか。何故その實際の巴渦の中に入つて生又は死を經驗することが出來ないのか。僕は何故かの女を熱烈に愛することが出來なかつたか。僕は此問題に邂逅すと、いつもさういふ風に考へるよ。』

『それは藝術家と言ふ點よりも、君の性質にあるのぢやないかねえ？』

『それは無論さうさ。』かう言つた淸の顏には血が上つた。やがて一種の冷笑を面に見せて、『僕は拙い出來損ひの藝術品と血もあり肉もあるラヴとを交換した馬鹿な男だ？』

といふ處が出來たらうと思ふねえ。それに、其點は僕も吳々も言つて遣つた――』
『けれど一體女が文學を遣ると言ふことはむづかしい話だねえ。あの人の將來の爲めから考へて見ても、最初の過は改めるとして、田舍で相當な處に嫁いて了ふ方が幸福になる道だと思ふねえ。』
『幸福と言つたら、さうかも知れん――しかし……』
かう言つて淸は言葉を留めた。
少時步いてから、
『僕はしかし出て來る方が好いと思ふねえ。第一、田舍に氣に入るやうな相手があるやうな女ぢやない。それに第一步は過つたにしても、東京に出て來て、自分も勉强するし、相手の男も眞面目に其問題を解決しようとするなら……二三年の後、双方の心持を聞いて見て、一緒にして遣つたつて差支ない。』
『それも好いだらうけれど……』
『理想に過ぎないかねえ？』
『まア、さうだねえ。』
と雍之助は笑つた。
『しかし、僕にはかの女を幸福にしてやる責任があるんだ。僕を便つて來た女、僕に一生の運命を託さうとした女、その女を單に藝術の犧牲にして、それで好いとすましてゐることは出來ない。僕は責任

ある想像がかれを利根川の渡場につれて行つた。其渡場には小さい小屋があつて、蘆荻が高く岸に繫つて居た。渡船は今出ようとして居た。自轉車を慌てゝ載せて居るものもあつた。船の中には此處等に見馴れない若い一人の庇髮の女が乘つて居た。其女は海老茶の袴を穿いて、細い蝙蝠傘を片手に持つて片手には薄い一册の書を持つて居た。

それは淸が十年前に書いた『故鄕』といふ小册子であつた。其故鄕の田舍町を女は遠くからわざ〳〵見に來た。かれは複雜した糸の關係を考へずには居られなかつた。

歩きながら二人は其女のことを話した。

『また出て來るつて言つたが、何うしたねえ？』

『來年になつたら、出て來るんだらう。山の中に引込んで居ては、淋しくつて仕方がないつてよく言つて來るよ……。來年になつたら、親が許さうが許すまいが無理にも出て來るつて此間も言つて來た。』

『一體あの二人の關係は何うなつて居るんだえ？　手紙にはそんなことは書いてないかえ？』

かう雍之助が訊いた。

『別に書いてはないが、矢張思つて居るらしいねえ。けども今度出て來たら、まさか前のやうなことは無いだらう。山の中に一年以上もぢつとしてさびしく暮して居るんだから、今少し自己を顧みて見る

た。裏の土手下の濠には、葦だの、藺だの、雜草だのが網のやうに繁つて、それに午後の日影が明るくさし透つて居た。其處に佇んだ二人の胸には種々のことが取集めて考へれらた。

『我々がかうして連立つて、君の故鄕に來て見るといふのは、面白いことだねえ。……人間と言ふものは、離れたり合つたり、合つたり離れたりして行くものだねえ。僕があの寺の玄關に居る時分、君が此處から小學校に通つて居たと思ふと、意味が深いねえ。人生には運命の糸の塊といふやうなものがあつて、それが彼方に引張られたり此方に引張られたりしてゐるやうなものだねえ。それを強く引張ると結んで解けなくなる。僕と君などは結んで解けなくなつた連中だねえ。もう、一生何んなことがあつても解けない連中の組だね。』

雍之助は袂からマッチを出して、巻煙草に火をつけながら言つた。

『本當だねえ。』

かう言つた淸は、其後までも其時のことを忘れなかつた。強く引張ると結んで解けなくなる。結ばれかけて、何かの加減ですぐほごされて了ふものもある。結ばれる運命を持つて居ながら一生結ばれずに終つて了ふものもある。一度結ばれたが最後、もう何うしても解れなくなつて困るものもある。ぷつゝり切れて了ふものもある。『さうかな……この友と自分と自分の妻と……さうかな、一生何んなことがあつても解けない連中かな。』淸はかう思つて見た。何だか其束縛が苦しいやうな氣もした。

やうに出來て居る大きな網を上げる度に、金色をした小さい魚が潑溂として春の日影に光つた。二人は散歩の次手に、其小屋に寄つては、いつもそれを買つて來た。

三

利根川を渡つて一里ほどの處に、淸の生れた故鄕の町があつた。淸は雍之助をよく其處に連れて行つた。『僕の故鄕はもう本當の故鄕になつて了つた。家はあつても他人が住んで居るし、親類はなし、幼友達は皆な僕の顏を忘れて了つたし、何んなことをして步いても構はない。』こんなことを言ひながら淸は町の大通りを步いた。

四辻の角に里程標が立つて居たり、種物屋の赤い暖簾に白く字が浮き出して居たり、吳服屋の店に小僧があくびをして居たりした。町の賑かな家並の處でさへ、軒の傾いた家屋が見えるほど町は著しく衰へて居た。

城址に續いた士族町はあらかた畠になつて居た。濠も耕されて田となつた。昔の屋敷で殘つて居るものには、農に歸した士族か小學校の先生が住んで居る。淸はいろ〳〵と其頃の追憶を友に話して聞かせた。

淸の生れた家はもうなかつた。しかし生立つた家は元の儘になつて居た。栗の樹もあれば竹藪もあつ

は何うでもないやうに見えた。寺の不動堂の高い縁には、矢張朝毎に子守の唄が聞え、勝手のとやでは暗い中から鷄が曉を告げて鳴いた。

前の井戸端で顔を洗つて居ると、都に行く一番の上り汽車が、野に滿ちた朝日に白い煙を光らせながら、轟々といつも音を立てゝ通つて行つた。

淸はこのさびしい寺の境内を歩きながら、いつも都の活動を思つた。活動の巴渦の中に居ては解らない活動の狀態が此處でははつきりと眼に浮んで來るやうに思はれる。電車の中にチラ〳〵する色彩や、其日其日の忙しい勤めや、片時も人の心を安ませまいとする物の響や、電燈の明るい光の下で見る美しい女の顔や、それらの中にイラ〳〵した自分の姿が其處にも此處にも見える、何處とも分らぬ町の狹い通りの角が見えるかと思ふと、今度は馬車で埋まるばかりに混雜した橋の上がちらと浮んだ。

二人はいつも酒を飮んだ。淸は此處に來る時にはきまつて牛肉か何かを買つて來た。それをジワ〳〵やりながら、『何うもお寺でかういふ旬をさせてはいかんねえ。……何うも感じがよくない、』などと言ひながら、旨さうにしてそれを食つた。田舍には食ふやうなものは何もなかつた。鯉のあらひ、鮒のあらひ、それも何うかすると泥臭かつた。利根川で「あいそ」の獲れる時には、それを骨折つて町中を捜して貰つて、鹽燒にしたり、ぎよでんにしたりした。けれど一番旨いのは矢張晩春に獲れる鮎子であつた。時節になると、利根川の土手には、屹度鮎子小屋といふものが懸けられて、轆轤で卷き上げられる

『色の白い、眼の際立つて美しい娘だつた、』などと笑つて主僧は話した。

『それから、門前の茶屋の女に調弄はれて仕方がなかつたものだ。夜などうつかり歩いてゐると、突然ぐつと抱緊められて、白粉くさい顔を押附けられた。それには困つた。』こんなことも言つて聞かせた。

何う見ても田舍寺の和尙さんといふ風はない。昔二人が早稻田の郊外や牛込の狹い室で感情的に話し合つた調子がまだ何處かに殘つて居た。葬式が來る度に、僧衣の上に金襴の袈裟をかけて、白足袋を穿いて、長い廊下を本堂へ行くのを見ると、何だか丸で別の人のやうに思はれた。歌を詠んだり、新體詩を作つたり、ファルケンベルヒの哲學史を抱へて、茗荷畑の中を學校の講堂に急いだ山崎雍之助とは何うしても思はれなかつた。

『山崎は矢張何處か暢氣なところがあるねえ。あれは幼い頃から寺の教育を受けた影響だねえ、』と其時分から夥伴の一人が言つた。それを都から來た服部淸は、今になつても時々思ひ出した。淸はその世に懸け離れた心を羨んだり貧んだり氣の毒に思つたりした。

十三四年の歲月は短かくはなかつた。さまぐ\の世態や事件が其前に展けた。明治の思想もいろく\な變遷を見せて、社會主義が起つたり、日露戰爭があつたり、自然主義が其萠芽を出し始めたりした。友達の群にも榮達したものもあれば、零落したものもある。しかしかくれた人に取つては、そんなこと

災に逢つた本堂は明治になつてから新たに建てかへたものだが、庫裡は百年以前の建物で、何の室にも古い一種の臭が充ち渡つて居た。それに寺には寺男が居なかつた。かれ等は夫婦の生活に必要な間だけ雨戸を明けて掃除した。二階や奥の間などはいつも雨戸が閉切つたまゝで、古い駕籠や佛書の入つた本箱や、歴代の什物の入つた古長持などで一杯になつて居る。錆び果てたその古寺の臭、それが東京から來た客の氣に入つた。

今の此寺の生活の狀態に引較べて、客はいろ〳〵と主僧の身の上を考へて見ることがある。此寺も昔は榮えたことがあるといふ。境内に今もある不動堂、其前に十軒ほどある長屋、其長屋の中に殘つて居る白壁の崩れかゝつた家屋は、其の榮えた時分の名殘だといふ。其頃主僧は十七八で、玄關の傍の小僧部屋に起臥して居た。不動堂は先代が門前の繁榮を謀る爲めに、わざ〳〵成田から勸請したもので、參詣者の鳴らす鰐口の音は曾て絶えたためしがなかつたほどであつた。それに門前には湯屋が出來たり、料理屋が出來たり、白粉を塗つた色の白い女が出たり入つたりした。世話人の娘が同じ世話人の子息と駈落をして、近所に隱れて居たことなどもあつた。先代にも大黑ともつかず妾ともつかぬものが二三人は居た。丁度其頃は維新になつて僧侶の權威の全く保たれなくなつた時代であつた。主僧は寺の娘と戀に落ちた其時分のことをある時酒に醉つて客に話して聞かせた。其室は依然として元のまゝである。差向ひに恥かしいうれしい言葉を交した圍爐裏も其まゝになつて居る。

二

停車場から近路を取つて、桑畠と寺の周圍の濠との間の細い路をたどると、篠竹だの、野椿だの、楢の低い穉樹だのがガサ〳〵といつも音を立てゝ居た。

かれは濠を跨いで、其淋しい墓場を拔けて行つた。寺は常にしんとして靜まり返つて居た。落葉が本堂の前を舞つて通つたり、雨が閉め切つた黑い障子に降頻つて居たりした。鷄が餌をあさつて居ることさへ滅多になかつた。

庫裡の玄關の白壁にはいろ〳〵な落書がしてあつた。天氣の好い日には、何うかすると、其處に子供が二三人遊んで居ることがある。其中には屹度寺の一人娘が交つて居る。娘はさびしい寺の夫婦の唯一つの慰藉でもありまた誇りでもあつた。娘は色が白かつた。

娘は其時は屹度東京から來た叔父さんを逸早く見附けて『父さん――東京の服部の叔父さんが。』

かう言ひながら奥に駈け込んで行くのが例であつた。

しかし大抵は玄關の隣の狹いくゞりを明けた。古い埃の臭ひが先づ第一に客の鼻を衝いた。かれは案内をも乞はずにヅカ〳〵と上にあがつて行つた。時には細君が慌てゝ迎へに出て來ることもあれば、主僧が喜ばしい色を滿面に湛へて、『よく來たな、』と言ひながら、其儘座敷に連れて行くこともあつた。火

汽車が其停車場に着くかなり前から、かくれた友の田舎寺のこんもりとした森は見えた。丁度其頃汽車は珊瑚樹や竹藪の多い村を通り越さうとしてゐるが、其處に來ると、かれはいつもきまつて立上つて網に載せて置いた風呂敷包を取つて膝の上に載せた。其中には新刊の雜誌や書籍や土產物や寺の娘にやる菓子などが入つて居た。

埃の白い眞直な街道が線路と交叉して、南から北へとつゞいて居て、其向うに、『夕日を帶びた町の家並が見えた。

段々近づくにつれて、寺のさまは歷々と眼に映つた。森の中に本堂が見える。庫裡が見える。山門から通じた長い舖石道がそれと指さゝれる。鐘樓の小さい釣鐘も見える。山門の白壁の塀は殊にはつきりと目に立つた。

停車場の驛員達は、驛長と言はず、助役と言はず、總てかれの顏に熟して居た。けれど別に言葉をかけ合つたことがあるのでもなかつた。『お寺のお客。』人々は汽車から下りる其姿を見ると、いつもすぐにさう思つた。仲賣の男は、

『何ういふ商賣をして居る人だんべい、』などと言合つて其後姿を見送つた。

土手が見えて、その向うの大川の流れの上に、白帆がチラ〳〵と並んで通つた。

川向うの紡績會社らしい工場から、眠さうな汽笛がボーと長く川にひゞき渡つて聞えた。

『都會――都會のひゞき。』

其の響も段々遠くなつて行つた。野には青々とした畠が續き、その緣をところ〴〵稚樹の疎らな林が縫つた。白楊で圍まれた新建の小學校の廣場には、生徒が鬼事などをして遊んで居た。

到る處の停車場の白い札は、その近所に名高い寺があつたり、桃の名所があつたり藤の名所があつたりするのを段々に知らせた。やがて汽車の響がゴーと高く鳴り渡る。と、其處に藻の青く見える古い川がひらけて、橋の袂に藤棚のある涼しさうな料理屋の座敷がそれと見渡される。

をり〳〵通る町には、白壁や半鐘臺や中學校らしい建物が屋根の上に高く出て居る。

何も眼に留るやうなものはないが、平野らしい特色はないでもなかつた。春の淺い頃に、低い丘に固つて眞白になつて梅の咲いてゐることもあれば、げんげが眞赤に一面に咲いて居るのを見たこともある。それに、一時間、二時間、小さい停車場をも幾つか過ぎて、夕日が斜に空いた車室にさし透る頃になると、この廣い平野を緣取る環のやうな山々が、はつきりと紺碧の色を遠く其前に展げて見せた。『今日も山が見事だつた。此の線路には他に見るものはないが、山だけは立派だね、君。山を見ると、すつかり世の中のことを忘れて了ふね。』都の男は來る度に、かういふ風に田舍にかくれた友に言つて聞かせた。

ない譯には行かないさ、』と言つて、少し考へて、『それにしても、あの時分のことが思ひ出されるよ。チブスになつて、病院の蚊帳の中に寢て居た時、僕は君の此の寺のことばかり考へて居たからねえ……。いよ〳〵死ぬに決つたら、遺言を書いて、君の此寺に埋けて貰はうと思つて居たよ。』

こんもりとした此寺の杉山の中に暗い〳〵墓地があつた。草藪がいつもガサ〳〵と風に鳴つて、夕日が色附いた下草を微かに染めた。其の墓の中に自分の名の刻まれた一基の石牌！　かれはさういふ風に想像した時の事を思ひ出さずには居られなかつた。かれは續いてそれから經過した四年間のことをたどつて見た。

『自分の周圍の人の死んで行くといふことも、君、人間の思想には隨分關係があるものだねえ。』

四年間――其間に叔父も死んだ。兄も死んだ。かれは其度每に味つた暗い感じを頭に繰返した。

都から此處まで來る汽車は三時間かゝつた。途中には別に見るやうなものはなかつた。電話の鳴る忙しい一室から、旅客の混雜と集る小さい停車場、いつも空いて居る二等室に入ると、かれは全く世から懸離れたやうな心持になつた。

それでも町の場末を駛つてゐる間は、黑い烟の簇々と立のぼる煙突が見えたり、トタン屋根の低い裏長屋の貧しい生活が見えたりした。直線の川に添つた眞直な路につゞいて、今度は櫻の栽ゑられた長い

『第一、心地からして違つて來た。』

と田舍の寺にかくれた一人が言つた。

二人は若い頃からぴつたりと心を合せて來た。互ひの境遇の相違から、考へも心の持方も大分違つて居たが、その親しい間柄はつひぞ今まで破れたためしがなかつた。都から來た男は寺にかくれた方の男の妹を妻にして居た。

大きな庫裡の天井は高かつた。二人の坐つて居る室の向うには、田舍寺に特有な廣い勝手が見えて、其處に鷄が二三羽餌をひろひながらコヽと聲を立てゝ居た。明放した勝手の大和障子からは青々とした畠が見えた。

木犀の匂ひが古い室の空氣に微かに交つた。

『いつ頃から、さうした心持になつて來たか、それは自分でもはつきりと言ふことは出來ないねえ、君。それやねえ、君、辿つて考へて見れば、わからないこともないが、それがあるはつきりした動機とか事實から來たのではなくつて、いつの間にかさうなつて居るんだからねえ。』

都から來た男がかう言ふと、相手は笑ひながら、

『しかし戰爭に行つた頃から、大分、君の思想が變つて來たやうだつた。』

『戰爭？　戰爭に行つた影響はそれは確かにある。何しろ、砲彈の中を歩いたんだからねえ。影響が

緣

一

『もう我々には、青年といふ心持か全くなくなつたね。』

『さうだねえ。』

かう言つて、二人は今更のやうに顔を見合せた。隨分いろ〳〵な話もした。三年前には顔を赧らめずには言はれないやうなことも言つた。

『兎に角、かういふことを平氣で言はれるんだからねえ……それだけでも、もう我々は青年ではない。』

さすがに其頃が思はれるといふ風で、都から來た男は言つた。何となくあたりが振返られるといふやうな氣分が一室に充ち渡つた。戸外には秋雨が蕭々と降つて居た。

『三四年前までは、まだ、我々の後に新しい時代があらうなどとは思はなかつた。我々が新しい時代だつた。我々はせつせと新しい時代をつくつて居た。それが今ではもう我々の後に青年の群がある。』

緣

花袋全集第二卷目次





滿洲大連にて（向つて最左端）

（明治三十七年五月從軍中）



てに[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

田山花袋著

花袋全集

第二卷

緣・田舍教師・幼兒・外六編

花袋全集刊行會



